
魔法少女リリカルなのは ties

ハルハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ties

【Nコード】

N83710

【作者名】

ハルハル

【あらすじ】

私は、一人ぼっちです。

私には、家族がいます。

でも、私は一人ぼっちです。

俺は、一人ぼっちです。

俺には、家族がいません。

だから、俺は一人ぼっちです。

小学三年生の女の子、高町なのはは、ある日一人の少年と出会った。父親のように頼れて、兄のように優しく、弟のように放っておけない……そんな、不思議な人と。彼は、言った。

「俺の、『家族』にならないか？」

第一話（前書き）

魔法少女リリカルなのはの二次創作です。

キャラ崩壊が前提ですので、そういうのが苦手な人はUターンしてください。

「それでもいいよ!」という方、どうかお付き合い下さい。

第一話

ピピピピッ、ピピピピッ

部屋に響く電子音。私は、自分の体温でぬくぬくした掛け布団の中から、それを聞いた。

「眠い……」

できることなら、いつまでも心地よくまどろんでいたかったが。

ピピピピッ、ピピピピッ

「うる、ちい……」

布団の中から、携帯電話を置いてあるはずのサイドテーブルへ手を伸ばす。とりあえず、うるさい目覚まし機能を止めよう。外気に手が触れる。季節は六月。暖かくなり、春というよりは夏に近い季節とはいえ、朝はまだ寒い。

「あれ、無い……」

がさがさとしばらくテーブルの上をまさぐる。そうしている間にも、眠気は徐々に抜けていってしまふ。

ようやく手が触れた、と思ったら、ごんっ、と鈍い音を立てて落ちてしまった。もういいや。放っておこう。

……………眠。

ピピピピッ、ピピピピッ

「……はいはい、起きればいいんでしょ？」

諦めて、布団から出る。憎き携帯電話は、律儀に健気に電子音を……私を惰眠から引き剥がさんと労働を続けていた。

ピピ、

電源ボタンを押し、アラームを切る。ついでに時間を見る。午前七時ちよっと。いつもどおりだ。

「あ……」

姿見が、そこに映る私の姿が見える。ぼさぼさの栗色の髪の毛。

眠気にしょぼしょぼする目。だらしなく半開きの唇。

「……顔、洗おつと」

面倒だけど……

洗顔し、肩に掛かるくらいの髪の毛に櫛を通す。前髪だけを適当にクリップで留め、朝の準備は終了……ではない。

かちやかちや

卵をボウルに割り入れ、かき混ぜる。最初は卵の殻が入ったり、飛び散ったり、ロクなことにならなかつたけど、今では手馴れたものだ。二年もやっていれば、自然と上達する。

フライパンに流し、形を整える。フライ返してひっくり返し、オムレツのような、卵焼きのようなものが出来上がる。皿に載せ、ご飯と共にからっぽの食卓の上に運ぶ。

「いただきます」

返事は無い。会話も無い。ただ一人、黙々と箸を動かし、口に入る。食事というよりは、栄養補給と言ったほうがふさわしいかもしれない。いつものことだけだ。

「ごちそうさま」

流しで皿を洗う。一人分の食器なんて、洗うのに二分も掛からない。

「行ってきます」

ランドセルを背負い、鍵をかけてから家を出る。返事は無い。これもいつものことだ。

一人で起き、一人で身支度を整え、一人で食事をし、一人で学校へ行く。

全く持って、いつもどおりの私……高町なのはの朝だった。

『 私の家族 三年二組 高町なのは 』

私のシャープペンシルは、四百字詰め原稿用紙にそれだけを書き、机の上に転がっていた。

静まり返った教室からは、鉛筆やシャープペンシルが原稿用紙のマス埋める音がひっきりなしに聞こえてくる。

はあ……

ため息をつき、頬杖を突く。もう作文なんて書いている気分では無かった。なにせ、タイトルがタイトルだ。私の、最も触れられたくない、自分でも考えたくも無い話題。

『将来の夢』とかだったら、適当に書いてさっさと終わらせるのになあ……

「高町さん、授業中よ」

担任の女性教師に注意された。

「……はい、すみません」

面倒くさいが、書いているポーズだけは取っておかないとな……

大学を出たばかりの青い志に燃える教師は、私の原稿用紙を手に取り、驚いたような顔をした。

「あら……何も書いていないの？ ダメよ、ちゃんと半分は書かないと」

「……はい、すみません」

書きたくないんです、とは言わない。あくまで私は作文が苦手なんです、とアピールする。だが教師は、いらぬアドバイスをしていた。

「例えば、お父さんの仕事のこととか」

数年前に大怪我をして、今も病院に入院しています。

「お母さんのご飯が美味しい、とか」

父さんのお世話と経営する喫茶店が忙しいので、私が自分で作っ

ています。

「兄妹とどんなことをして遊んだ、とか」

兄さんも姉さんも店の手伝いが忙しくて、数日に一度しか顔を合
わせていません。

「家族で遊園地に行ったとか……そういうの、あるでしょう？」
『あるでしょう？』

まるで、あつて当然、無いのはおかしいとでも言いたそうな言い
草。頭に、カツと血が上つていき……

ぶちっ、と、何かが私の中で切れた。

「うるさいっ！……！」

教室中の視線が、私に集まった。

「た、たかまち、さん？」

呆けたような顔で、私を見る。

「……ッ！」

机の中の教科書を、ノートを、筆箱を、投げつけるようにランド
セルの中に放り込む。椅子を蹴立てて立ち上がり……机の上の原稿
用紙を、びりびりに破り捨て、教室を飛び出した。後ろから、誰か
が私を呼び止めるような声が聞こえたが、聞こえないフリをした。

はぁ……。怒りを消費して残ったのは、虚しさ、面倒くささだ
けだった。教室を飛び出し、教師を撒いたまではないが、どうせ月
曜日にはまた顔を合わせるのだ。今のうちに、言い訳を考えておこ
う。

「はぁ……」

携帯電話で時間を確認する。三時間目の授業を脱走したので、まだお昼前だった。

(家、帰りたくないなあ……)

広い家。父さんと母さんが、家族みんなで住むために買った家。でも、誰もいない家。

家に向かっていた足は動くのをやめ……くるっと反転した。

何度も通った道を通り、目的の場所に向かう。

『海鳴市立図書館』。それなりに新しく、小奇麗な外観の図書館だ。入り口で、カウンターのお姉さんに怪訝そうな顔をされた。ほぼ毎日通っていれば、顔も名前も覚える。柳瀬美穂さん、だった気がする。

「あら、高町さん」

「こんにちは、美穂さん」

「こんな時間に来て……学校は？」

柔らかな笑みで聞かれた。先生を怒鳴りつけて飛び出してきました……なんて、言える筈も無く。

「……体調が悪くて早退したんですが、歩いていたら治ったので」
我ながら、ひどい言い訳だ。明らかに嘘だと見抜かれる。

「あら、そうなの」

だが、美穂さんは何も言わなかった。何かを見透かされているようで、少しムツとしたが、何とかそれを顔に出さずに済んだ。適当な数冊の手に取り、閲覧スペースに向かう。

名探偵が事件を解決し、全裸のマラソン男が親友と抱擁し、一人称が我輩の猫が浴槽に水没した頃。

「高町さん、閉館よ」

美穂さんが私の肩を叩いた。

壁の時計を見れば、午後の五時を回っていた。席を立ち、本を書架に戻す。美穂さんに見送られ、夕焼けの中に足を踏み出した。公園の近くを通る。丁度、そういう時間帯なのか、親が子供を迎えに来ていた。

あ、お母さん

そろそろご飯よ。帰りましょう？

うんっ！

聞こえてくるのは、楽しげな家族の会話。

「……………」

鼻の奥がツンとする。考えるな。考えたらダメだ。

あんな小さい子供に嫉妬するなんて、みっともないにも程がある。でも、駄目だった。

何で私には、御飯を作ってくれるお母さんがいないんだろう。

何で私には、キャッチボールをしてくれるお父さんがいないんだろう。

何で私には、一緒に遊んでくれるお兄ちゃんとお姉ちゃんがないんだろう。

「……………」

ぎゅっと目を瞑り、駆け出した。あれ以上、見ていたくなかった。妬ましさでごっちゃんになった頭のまま、走り出した。目を瞑りながら走ったら危ない。そんな当たり前のことさえ、考えていられなかった。

どんっ。

そして案の定、誰かにぶつかった。べた、と尻餅をついてしまう。

「お、悪い。大丈夫か？」

ぶつかった 多分、高校生くらいのお兄さん は、私の両脇に手を差し入れて立ち上がらせた。

「……………すみません。ぼうつとしていました」

できるだけ目を合わせないようにしながら、頭を下げる。服についた土ぼこりを払い、頭を下げる。

「そうか。気をつけてな」

「はい、すみませんでした」

これは、ほんの偶然。私と、この見知らぬお兄さんとの、互いの長い人生で唯一の邂逅……………だったはず。

『誰か、僕の声が聞こえますか？』

でも、違っただ。

「……………何、今の？」

「……………君も聞こえたか？」

辺りを見回すが、他の人達は何も聞こえていなかったらしく、すたすたと歩いていく。

『誰か、僕の声が聞こえますか？』

「まただ」

お兄さんが言ったとおり、また聞こえた。

「あつちの雑木林から、みたい」

最初は普通に歩き、次第に早足になり、とうとう全力疾走した。

何がこんなに私を駆り立てるのは分からない。分からないが…

…何かが私を待っている。そんな気がした。

「……………あそこ！」

そして、見つけた。雑木林の、割と開けた場所。

「ん？ ……何だこれ」

お兄さんが抱き上げたのは、黄色と茶色の毛並みの……

「フェレットですよ」

そう、フェレットだった。

「怪我はしてないけど……………弱ってるな」

このあたりの地図を頭に思い描く。たしか、少し先に四階建ての大きな動物病院があったはず。

私は、お兄さんを先導して歩き出した。

「衰弱していますが、命に別状はありませんよ」

優しそうなお爺さんは、聴診器を外し、そう言った。それはよかった。確かによかったのだが……別の問題が発生した。

私は、小学生だ。お小遣いは年相応の金額しか貰っていない。こんな立派な病院の診察料を払えるのだろうか……。私はお財布を取り出し、金額を確認した。千五百円。ペットの診察料がいくらなのかは知らないが、きつと足りないだろう。

ぼんぼん、と肩を叩かれ、身体をびくっと跳ねさせてしまった。「な、なんですか？」

「待合室にいろつてさ」

「……はい」

お財布をポケットに仕舞い、お兄さんの後についていく。待合室のソファはふかふかで、とてもすわり心地がいい。

「飲みなよ」

お兄さんが、その自動販売機で買ってきたらしいジュースをくれた。

「お金、払います」

「子供は気にしないでいい」

「……では、ありがたく」

ごくごく。ミルクティーの甘さが口いっぱいに広がる。お兄さんはブラックコーヒーを買ったらしい。よくあんな苦いの飲めるなあ……以前、冒険して飲んでみたことがあるがのだが……あれは、ありえない。

早々に飲み終わったらしいお兄さんは、がきよつ、とスチール缶をひねり潰した。

「そついえば」

「はい？」

お兄さんは手持ち無沙汰になったのか、私に話しかけてきた。

「君、名前は？」

「……あー、全然気にしてなかった。

「高町なのは、です」

お兄さんは、にっこりと笑った。どこか子供っぽい、無邪気な笑顔だった。

「俺は吾妻秀人。よろしく、高町さん」

その笑顔は、最近ではめっきり見なくなった父親の笑顔に、どこか似ていて。

「なのは、です」

だから、だろうか。

「え？」

父親に似た男の人に、名前を呼んで欲しい。そんな、馬鹿げた我侷を考えてしまった。

断ってくれるなら、それでもよかった。でも。

「なのは、って、呼んで、下さい……」

声は期待に震え、途切れ途切れになってしまふ。いつもの癖で、下を向いてしまふ。

呆れているだろうか。馴れ馴れしいと思われるだろうか。鬱陶しく感じているだろうか。ごちゃごちゃとネガティブな予想で頭が埋め尽くされる。

「あのっ、嫌なら、別に高町でも……！」

ぼん、と軽く頭に手を載せられた。顔を上げる。秀人さんは、にっこりと微笑んでいた。

「よろしく　なのは」

「あ……」

じわっ。視界が、水滴を垂らされたように滲んだ。

なのは。

確かに、そう呼んでくれた。名前で、呼んでくれた。

「うっ……うっ……！」

唇をかみ締めても、駄目だった。

「え！？　何で泣くの！？」

秀人さんは、あたふたと慌てている。泣き止まないと。涙を止めないと。そんな気持ちとは裏腹に、涙腺が壊れてしまったようにぼ

たばたと涙が溢れてくる。

しゃくりあげ、鼻まで垂らして……

「な、泣くな……ほら、よしよし」

それは、泣いている子供を落ち着かせるための行動だったのだろう。意外に大きな手で……優しく、頭を撫でられた。

ああ、暖かい。人の体温は、何でこんなにも温かくて、心が落ち着くんだろう。

「落ち着いたか？」

「……はい」

……恥ずかしい。とてつもなく、恥ずかしい。すつきりしたにはした。だが、今は恥ずかしさが多分を絞めている。穴があったら入りたい！

「いや……まさか泣くとは思わなかった」

秀人さんの上着には、紺色の生地のおかげで目立たないが……明らかに、私の鼻水がついていた。

「はいティッシュ」

「ありがとうございます」

ちーん、と鼻をかみ、屑籠に捨てる。

「……理由、聞かないんですか？」

名前を呼んで、頭を撫でたらいきなり泣き出したのだ。訳が分からないだろう。

だというのに、秀人さんは何も聞いてこない。

「言いたくないだろ？」

「……ええ、できれば」

「なら聞かないよ」

優しい人だ。

「吾妻さん、窓口までお越してください」

その時、職員らしき女性が秀人さんの苗字を呼んだ。

「おっと、」

ひょいっと軽い動作で立ち上がり、同時に、私の頭の上から温かさが消えた。

「あ……」

温もりが消えてしまった。じわじわと喪失感が胸を締め付ける。もつと、撫でて欲しかったな……と、自分があまりにも子供っぽいことを考えていることが猛烈に恥ずかしくなり、首をぶんぶん振った。「それじゃあ、吾妻さん。診察料金、栄養剤注射、二日間の入院費、合わせて四千五百円を頂きます」

……高ッ！ え、嘘、そんなにかかるの！？ どうしよう、全然足りないよう……

「はい」

と思っておろおろしていたら、秀人さんが極めて自然な動作で、お財布から五千円札を取り出した。

「それでは、五千円をお預かりします。お釣り、五百円です」

「それじゃ、よろしくお願いします」

秀人さんが十分の一になったお金をお財布に入れたのと同じ、わたしは冷静さを取り戻した。

「そんな、悪いですよ！」

「気にするな」

「しますよ！」

「ただ、秀人さんは取り合ってくれなかった。……まあ、助かったんだけど。」

「すみません、秀人さん。何から何まで」

外はもう暗く、満月と街灯が灯っている。もう子供一人で帰るには遅すぎるということ、秀人さんが送ってくれていた。どうせ予定も無いし、とのことだが、明らかに迷惑をかけている。申し訳なくて、いつもより俯き加減が気持ち十パーセント増した。……私は何を考えているんだろう。

ぶつくさ考えながら歩いていたら、道路の段差に躓いた。

「わっ、きゃっ」

転ぶ！ ぎゅっと目を瞑り、咄嗟に顔を庇う。だが、いつまで経っても衝撃も痛みもやってこない。不思議に思い目を開けると、私の胴体に回された腕が目に入った。

秀人さんが、私を支えていた。

「す、すみません！」

ぺこぺこ頭を下げる。ああ、もう。私は。高町なのはは、もっとしっかりした子じゃなかったの！？

「ほら」

秀人さんが、開いた手を差し出してきた。掌を見るが、何も乗っていない。

「……？」

よく意味が分からなくて、首をかしげる。

秀人さんは、『しょうがないなあ』とでも言いたげに、私の手をそのまま握った。私の手をそのまま握った！

「え、あう……」

じわ〜っと温もりが伝わってくる。

「転ぶと危ないから」

「……はい」

うわぁ……多分、私ものすごく顔真っ赤になってる……

少し寒いくらいの気温なのに、私の周りだけ春になったように温かい。憧れていた。実は、父さんか兄さんに手を引いてもらうの、すっごく憧れていた。

ああ、幸せ。

だが、幸せな時間というのは、経過するのが非常に早く感じるもので。

「……うう、です」

私は、豆電球一つとして灯っていない、真っ暗な家の前に着いてしまった。表札に並べて書かれた家族の名前が空々しい。

ぼかぼかしていた身体が、一気に冷たくなっていく。さび付いたロボットのようには、間接がぎしぎし軋む錯覚。

「ここか？ でも、誰もいない……あ」

秀人さんは、申し訳無さそうに目を逸らした。

あゝあ、気付かれちゃった。勘のいい人だなあ。

「そうですよ。ここが、私の家です。私と父さんと母さんと兄さんと姉さんが暮らすはずだった、広々いおうちです。……真っ暗ですよっ？ ふふっ」

……言うな。もうそれ以上、言うな。

「別に、死んじゃったわけじゃないですよ。みんな生きてます。でも、父さんは数年前から病院で、目を覚ましません。母さんは喫茶店の経営で、毎日朝早くから夜遅くまで働いています。兄さんと姉さんはそのお手伝いです。私起きる頃にはお店で仕込みをしていて、私が寝てしばらくしてからヘトヘトになって帰ってきます」

口が心と直結してしまったように、べらべらと情報を垂れ流しにする。

「おかげで、翠屋はあの大通りで一番人気のお店になったんです。すごいでしょう？」

テレビの取材まで来たんですよ。美人の店主に、その子供達。あはは、話題性抜群ですよね！」

「もういい」

そうだ。もう、話さなくていい。秀人さんが困ってる。

「リポーターのお姉さんが、母さんの作ったサンドイッチとケーキを食べて、『美味しい、美味しい』って、馬鹿みたいに繰り返すんです。わ、私は……それ、それを……それを」

「もういい」

そんな言葉も、耳に入らない。

「だ、だれもいないおうちで、自分で作ったご飯を食べながら……テレビで見ていたんです。母さん、お母さんが、知らない人に……！
！ なのは、お母さんが作った食べ物、なんて、何年も食べてない

のに、テレビのお姉さんが、それ、食べてて……!!」

「もう、いい」

「なのはだつて、お母さんのご飯が食べたいのに、家族みんなで、食べたいのに、でも、そうしたら、お母さん、困っちゃうから、なのは、『いい子』じゃないと、『手のかからない子』じゃないといけないからああ……!!」

「もう、いい」

全身が、温かい。秀人さんが。力いっぱい、私を抱きしめてくれる。

「寂しいなら、そう訴えればいい。我俣を言って、泣けばいい。それは、子供の特権だ。そんなこと、求めて当然なんだ。無理に自分の心を殺してまで、我慢しなくてもいい」

今度こそ、心の堰は崩壊した。

「もう、嫌だ!」

封印していた我俣が、本音が、叫び声になって喉を枯らす。私の心を覆っていた外殻が、破壊された瞬間だった。

「もう、寂しいのは嫌だ! 一人ぼっちは嫌だ!

『行ってきます』って言ったなら、『いつてらっしゃい』って言ってほしい!

『ただいま』って言ったなら、『お帰りなさい』って言ってほしい! 一人でご飯を食べるのは嫌だ! もっとお話がしたい! テストで百点取ったら褒めてよ! 誕生日にお祝いしてよ! もっとなのはに構ってよ!」

人目も憚らず、泣き叫ぶ、何年分も泣いて、泣いて、泣き疲れて……秀人さんはその間、ずっと私を抱きしめてくれていた。

「……………ん」

目を覚ましたとき、私は、見知らぬ天井を仰いでいた。

身体を起こし、部屋の全体を眺める。広さは、大体八畳くらい。オートバイが表紙を飾る雑誌や漫画が、その辺に無造作に放つてある。

「ああ、起きた？」

秀人さんだった。私の鼻水が付いてしまった上着を脱ぎ、青いエプロンを着けている。

その手には、暖かな湯気を上げる土鍋があった。

「……ここは？」

まだ少しぼうつとする。あの後、散々泣いてからの記憶が無い。

「俺んち」

「えっ……」

秀人さんの家！？

秀人さんは、雑誌を適当に積み上げ、座卓を空けた。

何で、私が秀人さんの部屋に？ だが、そのことを考えるよりも先に。

ぐうづうづうづう……。

お腹が、盛大に鳴った。そういえば、今日は朝から何も食べてない。給食も食べていない……というか、脱走したのだから当然だ。

「まずは、飯にしよう」

私は、顔を真っ赤にして、首を縦に振った。

はふはふ。

「美味いか？」

秀人さんが、春菊を小鉢に入れて卵を絡めながら聞いてくる。

「美味しいです！」

お腹ペコペコ。それに加え、誰かと囲む鍋だ。美味しくないわけがない。お肉が、豆腐が、白滝が、つくねが、見る見るうちに減っていく。

「ごちそうさまでした」

いつもだったら、独り言になるその言葉。でも、今日は。

「お粗末様でした」

ちゃんと、返事をしてくれる人がいる。それが、泣きたくなくなるほど幸せだった。でも、帰らないと。ここは、他人の家なんだ。いつ

までもいたら、邪魔になる。

「そうだ、なのは」

「は、はい？」

不意に秀人さんに呼ばれ、無意識のうちに下を向いていた顔を上げた。

「携帯電話、持ってるか？」

持っている。薄いピンク色の、去年出たばかりの機種。朝起きたら、食卓の上にぽつんと箱ごと置いてあったものだ。……その日は、私の誕生日だった。

アドレス帳には、家族全員のアドレスと電話番号が登録されていた。……着信履歴も、発信履歴もゼロ以外の数字を刻んではないが。もしかしたら、と、淡い希望とともに持ち歩いている。のろのろと取り出したそれを、秀人さんはぱつと素早く取り上げた。かちかちと微妙に慣れていない動きでボタンを操作し出す。

「ほれ」

突っ返された携帯電話の画面には、『吾妻秀人』の名前と、十一桁の数字。

「これ……」

「俺の番号。ついでにメアドも入れといた」

わたしは、恐る恐る、通話ボタンを押した。

ピリリリリリッ！

秀人さんのポケットから、恐らくデフォルト設定のままの電子音が響いた。

「はいはいっど……」

ポケットから取り出したのは、シンプルな形の携帯電話。それを、耳に当てた。

「『もしもし』」

目の前と耳元から、二重に聞こえる声。 繋がった。

「……あはっ」

電話が繋がる。そんな当たり前の事が、何故か嬉しくて、可笑し

くて。何度も切って、何度も掛けて。電池が切れるまで。何度も何度も。

「あはははっ！」

誰かとの繋がりが、嬉しくて仕方なかった。

「それで」

秀人さんが表情を引き締めた。……ついに、この瞬間が来た。いくら秀人さんが優しいとはいっても、居座られては迷惑だろう。鞆に手を伸ばす。

だが、出てきた言葉は、あまりにも予想を外れたものだった。

「布団とベッド、どっちで寝たい？」

……………へ？

「……いや、今日は帰りたくないだろうと思って」

ぽりぽり、と頬を掻きながら。

「もちろん、嫌だったらいいんだ。また、家まで送るから」

……真っ暗で。冷たくて。寒くて。

そんな家に帰り、また一人ぼっちで寝る？

「……や、です」

昨日までなら、いつも通り、諦めの溜息と共に受け入れていただろう。でも。

「？」

目の前にある、優しい笑顔を、手放したくなかった。

「泊まっていきます」

どもることなく、あっさりとそんな言葉が出た。

「よし、そうと決まれば……」

秀人さんが、『待っていました』とばかりに布団を取り出そうとしていて。

「……なのは？」

不思議そうに、私の顔と……自分の袖を引く私の手を、見た。

「いっしょが、いいです」

言葉の続きを待つように、じつと私の目を見る。

「秀人さん、言ってくれました。『わがママを言うのは、子供の特権だ』って。だから、」

きゅ、と。秀人さんの手を握る。

「だから、わがママを言います」

につこりと。多分、上手に笑えた。

「秀人さんと、一緒の布団で、寝たいです」

少しだけびっくりしたような秀人さんは、くす、と苦笑し、言った。

「……………しょうがないなあ」

夢を、見た。たわいも無い、日常の夢を。

家には家族がいて。お母さんが朝ごはんを作ってくれて。お父さんは新聞を読みながらそれを待っていて。お兄ちゃんとお姉ちゃんが朝の稽古を終えて、食卓にやってきて。

みんなで、『いただきます』をする。

そんな、たわいも無く、退屈で、だけど、掛け替えの無い、夢を。

「すー……………すー……………」

俺……………吾妻秀人は、いわゆる腕枕の枕ポジションで、寝入ったなのはの顔を見ていた。

「よし……………寝たな。……………」

……………ふう……………ふう……………!

大きく深呼吸をする。いや……………それにしても。

「き……………緊張、したあ……………」

いつも通り、素の態度だったとはいえ、こんなに長く他人と話をしたのは久しぶりだ。

俺にしがみ付くようにして眠っているのは。

この少女を、どうにも放っておけなかった。目……だろうか。本人が気付いているのかどうかは知らないが、常に下向きで、誰とも合わせようとしない。それが、かつての自分を見ているようで、つい、構ってしまった。ああ、分かっている。これが代償行為であるということも。この少女に愛情を注ぐことで、自分の過去を

「……おとうさん」

引き戻される。腕に感じる僅かな重みに。しがみ付いてくる手の感触に。

「……どうした？　なのは」

ぼんやりとした寝ぼけ眼。どうやら、寝ぼけて俺を父親と間違えているらしい。

「……呼んでみただけ」

そして、また眠る。

今夜だけでも、この子が安心して眠れますように。

俺の意識もまた、心地よいまどろみに溶けていった。

第一話（後書き）

序盤は速めに上げていきます。

第二話（前書き）

三件のお気に入り登録、ありがとうございます。

第二話

「ん……」

朝、かな。

「んん……」

いつもより少しだけ硬い布団の中で、伸びをする。

「……ん？」

はた、と目が覚めた。がばっ、と布団を跳ね上げ、起き上がる。

(お……思い出した！)

昨日、秀人さんの家に泊めてもらって、そのまま、そのまま……

『一緒に布団で、寝たいです』

「うわぁ……！」

カーツ、と、顔面が熱くなる。体中の血が集まっているみたい
に。

(でも、腕枕……気持ちよかったなあ……)

「……えへ」

頬が、緩む。

「あ、おはよう」

台所から、秀人さんが顔をひよいつと覗かせた。不意打ちだった。

「ひゃい!？」

裏返った声で返事をする。

「ちょうど朝ごはんが出来たところだから」

身体には青いエプロン。右手には甘い香りを漂わせるフライパン。

左手にはフライ返し。

……やたらとサマになっている。主夫？

「あつ……言ってくれたら、手伝ったのに」

家主を働かせて、客分である自分が惰眠を貪る。明らかに礼を失
している。

「いいからいいから。子供は気にしない」

「むー……」

子供って……まあ、確かに否定する要素は無いんだけど。

ちやぶ台の上に並べられたのは、オムレツ。マカロニサラダ。白米。味噌汁。

和風洋風ごちゃ混ぜだ。でも、どれも美味しそう。

いそいそと正座する。よく考えてみれば、ちやぶ台なんて使うの、初めてだ。

「それじゃ」

秀人さんが、神妙な顔で両手を合わせた。私も真似る。そして。

「「いただきます」」

わ、タイミングぴったりだ！　へへ、嬉しいなあ。

「なのは」

「はい？」

もぐもぐ。食べながら喋る。お行儀が悪いとは思うけど、折角お話ができるのに黙っているのは勿体無い。

「どこか行く予定とかある？」

「いえ、特には」

予定なんて、せいぜい図書館にでも行こうかな、という程度のものだ。

「この後、本でも買いに行こうかと思うんだけど、一緒に来るか？」

私は、少し意外に思った。

「秀人さん、本読むんですか？」

部屋を見た感じ、数冊の雑誌と漫画と新聞くらいしか置いていない。

「んー、まあな。買って読んだらすぐ売っちゃまうけど」

買って、読んで、すぐ売る？

「いや、本って結構スペース取るんだよ。大して広くない部屋だから」

「あの、それでしたら……図書館で借りればいいんじゃないでしょうか」

どんな分厚い本でも、貸し出し期限の一週間もあれば読める。しかもタダだ。

「……………その発想は無かった」

……………えー。

「あら、高町さん。いらっしやい」

日曜日のお昼。行きつけの図書館に行くと、カウンターで美穂さんが顔を上げて、挨拶をしてきた。白いサマーセーターに、金色のネックレス。深窓の令嬢……………なんて、何かで読んだ呼称がふっと沸いてきた。

「あら……………そちらは？」

秀人さんを見て、首をかしげる。私が誰かと一緒にいるところなんて、全く無かったから。意外に思われているんだろう。どうせ、友達いないもん……………

「ああ、えーと、今日は図書カードを作り」

秀人さんは、どことなく上ずった声を出す。案外、人に接するのが苦手なのか……………それとも、魅力的な女性相手に緊張しているのか……………いらっ。

「……………決まりごととかは、私が教えますので。カードだけちゃちゃっと作ってください」

……………なんか、面白くない。

秀人さんの手を、目一杯の力を込めて握り締める。

その日の晩。秀人さんはベッドを背もたれにするようにエッセイのページを捲って、私はその隣で借りてきた長編SF小説を読んでいた。かち、かち。時計の針が時間を刻む音と。ぱら、ぱら。ペー지를捲る音。その二つだけが、部屋の空気を支配する。

そこに、ぱたん。という音が加わった。秀人さんが一冊を読み終え、本を閉じた音だ。

「さて、夕飯の準備でもするか」

「あ、私、手伝います！」
数年間、ダテに家事をこなしていない。『子供』発言を撤回させてやろう。

『誰か、僕の声が聞こえますか！？』

その時だった。

昨日聞いた時よりも切羽詰まった声色で、あの声が聞こえた。

「あ、ああ、聞こえてる！」

秀人さんが、初めてその声に返事をした。

『昨日の人！ よ……よかった！ お願いです、今すぐ、僕の所……病院に来て下さい！』

ぱっとイメージが直接、頭の中に浮かんだ。四階建ての、立派な建物。昨日、フェレットを預けた動物病院だ。

「どういうことなの？」

私は、声の主に聞いた。事情が全くわからないのだ。

『あれ、二人も！？』

あ、驚いてる。

『はい、実は……って、う、わあああ！？』

悲鳴。そして、声がしなくなった。秀人さんがすぐさま立ち上がった。

「……ちよつと行ってくる。なのは、ここで待ってる」

壁際に置いてあったヘルメットを引っ付かみ、玄関へと走る。

その後ろ姿を見ていたら、何故か不安になった。その後ろ姿が、大怪我をした日の父と重なって見えてしまい……

「私も行きます！連れて行って下さい！」

だから、思わずそう頼んでいた。秀人さんは、何秒か思い悩み……もう一つ、ヘルメットを手にした。

耳元で風が轟々と唸る。自動車とは違い、時速百キロ近い風が直に

体にたたき付けられているのだ。サイズが大きく、顎紐で無理やり頭に装着したヘルメットが風を孕み、ばたばたと揺れる。

秀人さんのバイクが、住宅街を疾走していた。

「……ふうふうっ！」

振り落とされないように、秀人さんの大きな背中に全力でしがみつく。運動は得意ではない。むしろ、大の苦手だ。腕がふるふると痙攣するが、弱音を吐いてはいられない。

直角に近い急カーブが目の前に迫る。だけど、秀人さんは全く速度を落とさない。

「きゃあああ〜！」

有り得ないほど倒し込まれた車体が、横滑りするように直角カーブを通過した。

ギヤギヤギヤツ！ ……後輪が地面を掴み損ね、滑る音を聞いた。

心臓がばくばく跳ねている。肝が冷える、とはよく言ったものだ。

とはいえ、この先は直線一本。今のようなアクロバティックな動きはしないだろう……

「飛ばすぞ！ 掴まれ！」

「へ？」

条件反射的に掴まっておいて、本当に良かった。一直線。それは、最もスピードを出し易い道ということで、少なくとも、このバイクのエンジンには、まだまだ余裕があるわけで……！

ヴァアアオオオオオオオン！！

エンジンが、残ったパワーを全て搾り出すような高音を立て……

未知の速度へと突き進んでいく！

「ひ、ひiiiiiiiiiiiiiiiiっ！！！」

今度は、真正面からの強烈な風圧に上体が仰け反る。それでもバイクは止まらず、ぐんぐんと。ぐんぐんと空気の壁を押し開いていく。バイクどころか、乗用車にも乗った事が無い（いや、本当に）私にも分かる。この速度は、異常だ！

とりあえず……あの『声』の主、会ったら、絶対に一言文句言つてやるうー!!

ようやく動物病院に到着したときには、全身の力が抜けかけていた。メーターの横に付いていたデジタル時計を見る。出発してから、数分しか経っていない。これまでの短い人生の中で、最も密度の濃い数分だった。

それにしても……

「……おかしいな」

秀人さんがつぶやいた。そう、おかしい。ここに到着するまで、猫一匹すら見かけなかったのだ。夜とはいえ、午後十時。多少の人通りくらい、あって当然だというのに。

数分という所要時間は、通りに一台も車が走っていないからたたき出せたタイムだ。でなければ、街中を時速百キロ以上で飛ばせるはずがない。

夜空は少し紫がかっていて、圧迫感がある。息苦しい。

がっしゃああああん!!

唐突に、頭上で大きな音が聞こえた。

見上げ……無数のガラス片が、きらきらと、スローモーションのように降り注いできた。

(……あ)

動け、ない。

竦んでしまっている。頭からの命令が、手足に伝わらない。スローモーションのように迫っていたはずのガラス片は、いつの間にかもう目の前にあって。

温かい何かに、抱き締められた。

「あ、が、ああああツツ!!」

秀人さんが、私に覆いかぶさるようにして……降り注ぐガラス片

をその身に受けていた。

「ひ」

口が、最初に動いた。

「ひでと、さん……?」

「うっ……ぐ、う」

呻き声を上げる秀人さんが、私の横にどつと倒れた。背中には、出来損ないのサボテンのように、ガラス片が顔を出している。

「ちよつと、ドジっちゃったな……」

血だらけで、はは、と薄く笑う。

「とにかく……急ごう」

「で、でも、せなか、ささってるよ!？」

「大丈夫、大丈夫……、俺は、そういう風に『できてる』から」
笑う膝を叱咤し、階段を秀人さんに続いて駆け上がる。

秀人さんは、最初は辛そうに。でも、十段を登ったあたりから徐々に顔色に赤みが戻り。二階分を走破する頃には、背中に刺さっていたガラス片は抜け落ち、出血も、挟れた肉も、すっかり元通りになっている。さすがに、その異常さは自分でも理解できた。

そして四階。あの声の主はどこに……

ゴゴン!!

廊下の曲がり角。そこから、飛び出してきたのは……昼間のフェレットと、

「グウオオオオオオオオオ!!」

……形容しづらい、あえて言うなら、巨大な黒い毬藻みたいな化け物が飛び出してきた。

毬藻が、その巨体からは考えられないほど俊敏にゴムボールのように跳ね、モルタルだかコンクリートだかの床に、クレーターを作り出した。

ボゴオツ!!

衝撃で、フェレットが胸元に飛んできた。間一髪でキャッチすることに成功した。毬藻は、床に半分めり込んで身動きが取れないようだ。

「イマイチ状況が理解できんが……逃げるぞ！」

「はいっ！」

とりあえず、あの毬藻が友好的な存在でないことは確かだった。

秀人さんが殿をつとめ、私はフェレットを胸に抱いて走る。

「ギョルアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

バゴツ、と、硬いものが碎ける音がした。多分、あの毬藻がその身体を床から無理やり引っっこ抜いたんだろう。

「振り向くな！ 走れ！」

し、心臓が……破れそう！

「ったく、なんなんだあの毛玉は！？」

「あれは、ジュエルシードの、暴走体です」

………ん？
………今の、誰の声？

秀人さんもきよろきよろと辺りを見回している。

「………僕です、僕」

その声は、私の胸元から聞こえてきた。ぎ、ぎ、ぎ。胸元に視線を落とす。

「驚かせてしまつて済みません。でも、どうしてもあなたたちの力が必要だつたんです」

フェレットが、理知的な瞳で私を見ていた。ぴこぴこ、と短い手を振っている。こんな状況でなければ、思わず顔が緩んでしまいそうな愛らしい仕草だった。

「フェレットが……」「しゃべった……」
……うっそお。

「いきなりこんなことを頼むなんて、無茶苦茶だということは分かっています。でも、こうでもしないと、あの暴走体を止める手立てが……」

ブオッ！！

「伏せるオッ！」

怒鳴られ、言われたとおりに床に身体を投げ出す。

「ギユフツ！！」

あ、フェレット潰しちゃった。

倒れた私の頭上を、凄い勢いで毬藻が飛んでいった。

ドゴオン！！

その先にあつた障害物を吹き飛ばし、壁に大穴を開け、毬藻は私達を正面から見据えた。そのらんらんと輝く目が、『逃がさない』と明確に語っていた。

「どうすればいいの……」

こんな怪物から、どうやって逃げれば……

「ゲホツ、方法が、一つだけあります」

フェレットが、少し咳き込みながら、首輪のように括り付けていた『ソレ』を私に差し出してきた。引き込まれそうなほど鮮やかな、真つ赤な宝石。

「これは……？」

「それを、手に持ってください」

心臓が、運動とは別の理由で鼓動する。視界がクリアになっ
ていく。

これは。この感覚は。あの時、このフェレットの元へ向かった時に感じた焦燥感。

ゆっくりと、赤い宝石に手を伸ばし……

「ゴアアアアアアアッ！！」

だが、それをいつまでも許すほど毬藻は甘くなかったらしい。無防備になった私に突進してきた。

「し、しまっ……!!」

大きな背中が、私の前に立ちふさがった。

「……空気読みやがれこの毛玉がああッ!!」

ズズンッ!!

秀人さんが、毬藻を、『受け止めて』いた。踵が床に半ばめり込み、沈み……耐えた。

「な、生身で……!!?」

フェレットが、驚愕に目を見開いた。

「おい、フェレット!」

その状態で。秀人さんが言う。

「はいっ!!」

「こいつをどうにかするには、俺達の力が必要って言ったな!?!」
ぎり、ぎり、と拮抗が徐々に傾いていく。やはり、化け物たる所
以か。徐々に秀人さんを押し切っていく。

「はい、そうです。僕の念話をキャッチできる……魔力を持った人
になら、」

秀人さんは、毬藻を抱えたまま、後ろに『跳んだ』。

「グウッ!?!」

「おおりやああああ!!」

不意に抵抗が無くなり、体勢を崩す毬藻。その胴体（一頭身）に
足を突っ張り……投げた。オリンピックで見たことがある。巴投げ
という技だった。

バゴオオン!!

また別の壁を突き破り、勢いのままに吹き飛んでいった。

「今のうちに、早く！」

私は、今度こそしっかりと、赤い宝石を手取る。

「僕の言うことを、繰り返して！」

「え、え」と、はい

「我、使命を受けし者なり」

「我、使命を受けし者なり」

赤い宝石が、どくん、と胎動した。

「契約のもと、その力を解き放て」

「契約のもと、その力を解き放て」

どくん、どくん……胸が、熱い。

「風は空に、星は天に」

心に、言葉が浮かんでくる。

「グオアアア！！」

恐ろしい咆哮が、叩きつけられる。でも、怖くない。
「だりゃああああ！！」

あの大きくて優しい背中が、私を護ってくれている。

それだけで。

「「そして」

それだけで。

「 「 不屈の心はこの胸に！ 」 」

勇気が、心に満ちてくる！

「どわあああああつ!?」

秀人さんが、壁に空いた穴から、外に放り出された。
だんっ！

飛び出すことに、何の躊躇も覚えない。

「秀人さん！」

空中で、秀人さんを抱きとめる。

「一緒に！」

秀人さんは、最初は虚を突かれたように。でも。

「……あああつ！」

笑って、答えた。

「 「 この手に魔法を！ 」 」
チカラ

赤い宝石から、眩い光が溢れる。そう、この子の、名は……！

「 「 レイジングハート、セットアップ！ 」 」

『 Stand by ready · Set up 』

瞬間……世界が、光で満ち溢れた。

私の身体からは、薄いピンク色の光が。秀人さんの身体からは、
空色の光が。

紫色の濁った空を、明るく照らし出す。

「ふ、二人とも、なんて魔力量……！」

『マスター認証を行います』

赤い宝石……レイジングハートが、涼やかな女性の声で話し出した。

『まずは名前を』

「えと……高町なのは、です」

『バリアジャケットの生成を行います』

「ど、どうやって？」

『思い描いてください』

思い描く。バリアジャケット……言葉の響きからして、戦闘服みたいなものだろう。だとしたら、制服？ 頭の中に、それを思い浮かべる。今はもう着ることが無い、その制服。

『確認しました』

「へ？」

今のでいいの？ えらくあっさり決めちゃったけど……

『魔法の杖である、私の姿を決定して下さい』

杖……白柄に、金の台座。その中心に、赤い宝石。

『確認しました』

桜色の光が解け、地上にゆっくりと降下した私は……『変身』していた。

「え、え、ええええええええええええっ！？」

腕を振り、腰をひねって背中を見て……啞然。先ほど、私がイメージした通りの服を纏っていた。

ザシャッ！

地面に着地した秀人さんが目を剥いている。

「……いつ着替えたんだ？」

「さ、さあ……？」

『アカウントを作成します』

まだ続きがあるようだ。

『使用者、名前を』

「……俺か？」

秀人さんが、不思議そうにレイジングハートを見た。

「マスターはなのはだろ？」

「はい。ですが、起動詠唱の一部を共有し、魔力のパーソナルデータの登録も完了しています。サブ使用者として、機能の一部を使用可能です」

あー、あれね、はいはい、と極めて軽い調子で相槌を打つ。

『名前を』

「、吾妻秀人」

『認証します。プログラムの一部が使用可能になりました。使用可能プログラムを提示します』

ぱっ、ぱっ。象形文字のような、英語の筆記体のような文字が表示される。

その視界の隅。黒い何かが、もぞ、と蠢いた。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

秀人さん！

杖を、前に突き出す。同時。

『protection！』

レイジングハートから障壁のようなものが展開され、

バチイッ！！

『ルギヤアアアアアアアッ！？』

毬藻の突進を止めた！

「え………？」

障壁は、ふつと空気に溶けるようにして消えた。

今の、私が？

『グルルルルル………』

警戒のうなり声を上げ、じりじりとゆっくり距離を詰めてくる。

近づいてきたら、また今の障壁で防げる。だけど、それではいたちごっこだ。こっちからも、なにか攻撃しないと。

「よっし、分かった！」

後ろでモニターと睨めっこしていた秀人さんが、そんな声を上げた。へ？ と振り向く。考えてみればそれは、戦闘中に注意を外すという、自殺行為だった。

『グゴオオオオオオオオオオオオ！』

「あつ……！？」

『Impact！』

レイジングハートが、今度は私が予期しないタイミングで単語を口にした。衝撃、と。

ドパアン！！

毬藻が、その単語の通り、破裂音を上げた。

秀人さんの突き出した拳の先に、一つの『』と二つの『』を組み合わせたような、幾何学的な図形が浮かんでいた。色は、空色。

「これが、魔法つてヤツか？」

秀人さんが、ぷらぷらと手首をスナップさせながら聞いた。

『初歩攻撃魔法・インパクト』

「さっきの、バリアみたいなのも？」

『そうです。初歩防御魔法・プロテクション』

「……すごい威力」

毬藻の身体は、大部分が砕けてあちこちに散らばっている。たったの一撃で、分厚いコンクリートをも砕いた、あの毬藻の身体が。『いいえ、マスター。魔法の威力そのものは、C〜Bランクです。ですが、ヒドトによって込められた魔力はAA相当。それが、威力を底上げしたのです』

わざわざ分かりやすく説明してくれた。

「今です、封印を！」

階段から降りてきたらしいフェレットが、そんなことを言った。

「封印……？」

その言葉が引き金だったのか。

『Sealing Mode setup』

レイジングハートに、光り輝く桜色の翼が発生した。

「え、えっと？」

『発動呪文を』

「そんなの知らないよ」

『構いません。あなたの言葉で』

成り行きを見守っていた秀人さんが、ぼん、と私の肩を叩いた。

「つまり、即興でいいってことらしい」

そういうことなら。

「……………」

って、そうだった。私、こういう創作が、苦手なんだった。何でもいいと言われたが、だからといっていい加減な呪文はレイジングハートに失礼だし…………

「発動呪文の設定・アカウント『吾妻秀人』」

『アカウント確認しました。入力して下さい』

えっ!?

「なのは…………生真面目なのはいいが、状況を考えなさい」

怒られた。うっう…………

「発動呪文は『不屈の心はこの胸に』」

それは、あの起動呪文のワンフレーズ。私も、密かに気に入っていた一文だった。

「これでいけるか？」

『問題ありません』

…………よし!

「『不屈の心はこの胸に』!」

桜色の光の帯が、毬藻を縛り上げていく。そして毬藻の額に、ローマ数字が浮かび上がる。その数字は、21。

「ジュエルシード、シリアル21! ……封印!」

『グアアアアアアアアアアア………!!』

恐ろしい咆哮を上げ、抵抗する。だが、巻きついた光の帯は全く揺るがない。毛糸玉のように、暴走体を包み込み……

『 Complete 』

黒い毬藻は消え……目も覚めるような、青い菱形の宝石が浮かんでいた。その宝石が、レイジングハートに引き寄せられ、すぽんと呆気無く吸い込まれた。

「えっと……」

これで、終わったの？

「やった！ 成功だ！」

フェレットが、全身で喜びを表す。そっか。成功、したんだ。

「ふう〜……」

気が抜けて、その場に座り込む。全く同じタイミングで、秀人さんもそうした。

「ぷっ……」

そんな些細なことなのに、ひどく可笑しくて。

「あはははははは!!」

顔を見合わせて、気が済むまで。笑い続けた。

遠くから、サイレンが聞こえてくるまで。

「げえっ!？」

秀人さんが、慌てて周囲を見る。

穴が空いた壁に、あちこちに散らばるコンクリート。そして、そこにいる私達。どう考えても、怪しい。

「に………逃げるぞ！」

「はいっ！」

この年で警察のご厄介になるのは……勘弁！ 母さん達に、迷惑がかかっちゃう！

秀人さんが私にヘルメットを被せ、自分も被り、フェレットの首根っこを掴まえた。

「ぎゅー!？」

上着のポケットにねじ込まれたフェレットが、変な声を上げたが……逃げるのが先決だった。

「なるほどな……」

秀人さんのアパート。私と秀人さんの前で、フェレットがちょこんとこちらの顔を見上げている。

「つまり、『危険物を運んでいたら事故って落としちゃいました』ってことか」

「仰るとおりです……」

項垂れる。多分、責任感とか、使命感とか、そういうのがとても強い子なんだろう。

「回収しようにも、今は力を使い果たしてしまいました……」

そして、がばつと頭を下げた。人間で言えば、土下座でもしているような感じだろうか。必死さが、伝わってきた。

「お礼は、必ずします！ 貯えはありますから、金銭でも、宝石でも……！」

「馬鹿か、お前」

「……………え？」

今の、秀人さん？ 横を見る。秀人さんが、とても怖い顔で、フェレットを睨んでいた。

「……………はは、確かに、勝手な話でしたね」

フェレットが諦観したように呟く。けど、私も、秀人さんと同じように、怒っていた。

なぜなら……

「俺がムカついてるのは、お前が、金を条件に出したことだ」

そう。真剣にお願いされれば、力を貸すつもりでいた。なのに。

「あのね、ユーノ……くん？」

怒りが、徐々に悲しさに変わっていく。

「あ……なんですか？」

「もう関わっちゃったから、今更投げ出すことなんてしないよ？」

「ごめん、なさい……」

うな垂れるユーノくんは、秀人さんが続けた。

「手伝うのはいい。最初からそのつもりだしな。ただ、条件が一つだけ」

「なん……でしょうか？」

「敬語禁止」

「へ？」

「なのはもだぞ」

「うん、わかった」

願ったり叶ったりだ。敬語で話すのは、距離があるみたいで寂しいと思っていたところだ。

「というわけだ。わかったな？」

ユーノくんは、少しだけ呆けた様子で黙り……

「……うん、それじゃあ、改めて。名前はユーノ・スクライア。ユ

ーノって呼んで」

私たちの、仲間になった。

二日連続での外泊は流石にまずいだろう、ということでも、私は一度家に帰ることにした。

でも、足取りは軽い。

ポケットに手を入れる。かちゃり、という感触を探り、取り出す。

真新しい鍵だ。

『また、いつでもおいで』

そう。帰り際に持たせてくれた、秀人さんのアパートの合い鍵だ。

「なのは？」

肩に乗っているユーノくんが、人がいないことを見計らって声をかけてきた。レイジングハートの細かい調整をするため、しばらくは一緒に行動したい、と彼から申し出てきたのだ。

「なあに？」

「頼んでおいて言うのもなんだけど、本当にいいの？」

……ふふ。

「大丈夫。だって、一人じゃないもん。ユーノくんもレイジングハ
ートもいる」

『光荣です』

それに何より……

「秀人さんが一緒だもん」

家に着いて、まず最初に覚えたのは、違和感。いつもは真っ暗なの
に、玄関に明かりが点いている。もしかして。知らず知らずのうち
に、早足になる。

誰かが帰ってきている！ おに……ごほん、兄さんかな？ 姉さん
かな？ それとも、母さんかな？

家の敷地に入る。玄関先にいたのは、黒いＴシャツにジーパン姿
の、兄さんだった。

「兄さん！ ただい……」

「こんな遅くまで、どこに行っていた」

足が、止まった。

久しぶりに見る……大体一週間ぶりの兄さんの顔は、静かな、しか
し確かな怒りを浮かべていた。

つかつかと歩いてきて。 ぱしん。……頭を、叩かれた。

『おかえり』と暖かく撫でてくれるのではなく、
冷たく、叩かれた。

「……はは」

不思議、だなあ……何も、感じないよ。痛さも、哀しさも、何も……

「どれだけ心配したと思ってるんだ」

この人は何を言っているんだろう。

無遠慮に私の二の腕を掴む手。

その手が、得体の知れないものに思えて。秀人さんの温もりが消されていくようで。堪らなく、気持ち悪かった。

虚無の心に、一片の火花が散る。

そして、それは……溜め込んで溜め込んで、膨大な量になっていた『怒り』に、引火した。

「ふざけないでよ!!」

自分でも驚くほど、大きな声が出た。気持ち悪い手を振り払う。

「『心配してた』!? いつもいつも放ったらかしの癖に! こんな時にだけ調子のいい事言わないで!」

さあ、言ってやったぞ。どんな顔をするのだろう。バツの悪そうな顔だろうか。それとも、顔を真っ赤にして怒るのだろうか。涙ながらに謝るのだろうか。

けれど、そのどれでもなかった。兄さんは。

何で私が怒るのかわからない。そんな顔をしていた。

(……………もういいや)

怒りと、失望と、諦観が渦巻く。ああ、本当に、もういいや。

「……………レイジングハート」

『Yes, my master』

察してくれたらしく、レイジングハートが起動する。本当、いい子だなあ……………

リンカーコア起動。

私が今、一番やりたいことを……………

術式構築。

誰よりも早く判断して……………

魔力循環。

手伝いまで、してくれるんだから……！

呼吸をするように、『魔法』を組み立てていく。

『ちよ、なのは!?!』

ユ一ノくん、悪いけど静かにしてて。

自分の体から、桜色の魔力光が漏れだす。

『高町恭也』が、驚愕に目を見開いている。

クリアな視界の中……玄関から、『高町桃子』と『高町美由紀』が出て来た。

ああ、都合がいい。こいつらも、纏めてやっちゃおう。

「なの、は……?」

『高町恭也』が、呆然と私を見ている。

「五月蠅い。名前で呼ぶな。馴れ馴れしい」

術式『インパクト』に、拡散効果を付加。

「あんた達なんて……」

『Impact 2 ……「Large」』

「あんた達なんて!」

掲げた手に、バレーボール大の光が生まれる。それを

「大ツツツ嫌い!!」

思いつきり、地面に叩き付けた !

ズドオオオオン!

地面に目掛けて炸裂させた衝撃波は、爆風になり、辺り一面に撒き散らされた。

私と同じ、高町という苗字を持つ三人の『他人』が、無様に、呆気

なく、吹き飛ばされる。忌ま忌ましい家のドアが外れ、ガラスが割れ、瓦の何割かが無くなっていた。

「……………」

三人の誰かが、呻いた。何の感慨も沸かない。達成感も。高揚感も。罪悪感も。

「秀人さん……………」

ただ、無性に、秀人さんの顔が見たくなつた。

くるつと振り返り、転がった三人を見下す。そして、告げる。

「さようなら」

決別を。

「お世話には……………なつてないよね」

レイジングハートが、便利な魔法を教えてくれた。『念話』という、テレパシーみたいなものだ。携帯電話の電池が底をついていた私には、まさにもつてこいな魔法だ。

『秀人さん、聞こえてる?』

少し間を置いて、繋がった。

『なのはか? どうした? っていうか、これ(念話)、ユーノが使つてた……………』

『会いたい』

単刀直入に、切り出した。

『……………今、どこにいる?』

ユーノくんがそうしたように、イメージを念話に載せて送る。

『わかった。ちょっと待ってる』

ぷつん、と切れる感覚。

「……………ありがとう、レイジングハート」

『問題ありません』

掌に乗せた赤い宝石が、キラリと輝いた。今度、ちゃんとした飾り紐でも買つてあげよう。

「……………なのは」

肩に乗ったまま、ずっと黙っていたユーノくんが口を開いた。言われることは、大体想像がつく。

「今回だけだからね」

魔法を、あんなことに使うのは。

「……ん。わかった」

電柱を背に、夜空を見上げる。

ヴォオン、と、すっかり馴染んだ音が聞こえてきた。

「待ったか？」

ヘルメットから、くぐもった声が聞こえる。

「うっん」

横に引っ掛けてあったもう一つのヘルメットを被る。

「ん」

秀人さんが手を差し出してくる。それを掴み、バイクによじ登った。

「それじゃ、行くか？」

「はいっ」

私の居場所は、あんな、冷たくて暗い牢獄なんかじゃない。

お日様のように暖かい秀人さんの傍が、私の居場所なんだ。

私はもう、振り返らない。

これは、小さな出会いの物語。

平凡とは言い難い小学三年生の私、高町なのはに訪れた、大きな転機。

渡されたのは、赤い宝石。

手にしたのは、魔法の力。そして、優しい居場所。

出会いは偶然か、必然か。

けれど確かに言えるのは、出会いをくれた小さな友人と、赤い宝石への、ありがとう。

繋がる絆。そして、ここから始まる物語。

それは、魔法と日常が並行する日々のスタート。

開幕。

第二話（後書き）

というわけで二話でした。

なんというか、原作のなのはは、ちよっと『いい子』『すずきるよつな
気がしたんですよ。

だからこうなりました。

第三話（前書き）

序盤はハイペース。

温泉編まではすでに書けているので、推敲ができ次第投稿して行きます。

第三話

バイクが、夜の街中を駆ける。

夜風が冷たいから、秀人さんの背中に、ぎゅっと抱きつく。ぽかぽかと暖かくて、安心する。

『なあ、なのは』

秀人さんが、念話で声を掛けてきた。風が吹いているのと、ヘルメットを被っているおかげで、肉声は届かないから。

『なあに？』

『あの、さ……』

言葉を選ぶように、少しだけ黙る。そして、意を決したように、口に出した。

『俺、家族がいないんだ』

……それは、何となく気付いていた。

秀人さんのアパートは、六畳の2DK。

食器も、調理器具も、必要最小限。どう見たって、よくある一人暮らしの男性の部屋だった。

よくある……とはいっても、事情は違うだろう。

だって秀人さんは、よほど見た目と実年齢が乖離しているわけじゃないければ、高校生くらい……十代の半ば程度の年齢にしか見えない。

『あんまり詳しくは話せないけど』

気恥ずかしそうに言葉を濁す。

『正直、帰ったときに誰かがいたら嬉しいっつーか……』

真っ暗な家。その辛さは、誰よりも知っている。

『おかえり』と、一言かけてくれる人がいてくれたら、どんなに嬉しいだろう。

私がつつと切望していたことを、秀人さんも感じていたんだ。

きつと……わたしよりも長い時間を、一人で生きてきたんだから。だから……』

そう、前置きし……

『俺の家族にならないか？』

「……………」

嬉しい。すごく嬉しい。でも……

『イヤか？』

イヤなわけ、無いよ。でも……

『私で、いいの？ 泣き虫だし、いじけ虫だし……………』

バイクが、止まった。秀人さんのアパートの前に着いていたらしい。バイクを降り、ヘルメットを取る。秀人さんもヘルメットを取った。

秀人さんは、私の目をまっすぐに見て……

「泣き虫でも、いじけ虫でも、……………なのは『が』いいんだよ」

優しく、微笑んだ。

「う……………ふえ」

嬉しい。すごく嬉しい。でも、何で……………？

「う、えええええん……………！」

嬉しいのに、涙が止まらない。それなのに、不思議と悲しくない。

「なのは」

ぎゅっと、抱きしめられる。

「頼むよ。俺の、家族になってくれ」

「……………はい」

私達は、家族になった。

それから、数日が過ぎた。

とつても悪いことだけど、学校をズル休みして、買い物に出かけた。主に、私の食器とか、衣服とかの生活用品だ。

最初は遠慮しようと思ったけど、秀人さんの『着たきり雀は駄目!』との鶴の一声だった。一番の問題だったお金は、秀人さんが負担してくれるそうだ。いくらなんでもそこまで、とは思ったが、秀人さんは聞いてくれなかった。ちょっと、お人よしが過ぎるんじゃないだろうか、この人。

というわけで、私は大通りから一本外れた通りの、こぢんまりとした食器店にいる。一つ一つがすごく丁寧に作られていて、素人目で見てもいい物だということがわかる。その分、値段も市販品に比べて数段上だけど……あ、でも、このマグカップ、星が散りばめられていてすごく綺麗。

「これか？」

横から伸びてきた手に、ひょいっと取られた。

「あー！」

「すみません、これ下さい。あと、これと、これと、これ」

私が目に付けていたマグカップを、お皿を、フォークとスプーンのセットを、レジにいた女性に渡す。ちよ、それ、値段が四桁後半なんですけど!?

「私、そんな高い物じゃなくても……!」

「あ、名前入れてもらえます? ひらがな三文字で『なのは』」
女性の店主は、笑顔で頷いた。

「秀人さ〜ん!？」

「いいからいいから」

「よくな〜い!」

「さて、次は服か……」

「あ、こつち! こつちに服屋あるよ」

右に注意を引き付け、手を引く。確か、この近くに安い衣料品の

チェーン店があつたはず。絶対に、右側のデパートなんて見せてはいけない！

第一、私はそんなにおしゃれに興味は無い。気にするのは、せいぜい色と、丈が長いか短いかの違いくらいだ。今着ている服だって、上下共に無地の服だ。

「ごめんね、秀人さん……お金、いっぱい使わせちゃって」

安いとはいっても、十着以上買い込めば、かなりの値段になる。

秀人さんが右腕に提げるばんぱんの袋が、私の罪悪感を否応無しに刺激する。

「いいつて。他に使い道も無いし」

秀人さんに手を引かれ、街中を歩く。

そして、大通りに差し掛かり……私は、足を止めた。

「……………」

この先には、『あの店』がある。大通りで一番人気の喫茶店で、毎日たくさん人がいて、店主は美人で、店員は……

「なのは」

ハッ、と我に帰る。知らず知らずのうちに、足が止まっていた。

「な、なんでも無い、大丈夫……」

でも、動けない。足が地面とくっついてしまったように、この先へ行くことを拒否している。イヤだ。この先に行きたくない。『あいつら』の顔を見たくない。じめじめと気分が悪くなっていく。ダメだ。ダメだ。折角の楽しいお買い物なのに。秀人さんに迷惑をかけてしまう。

「よいしょつと」

そして、次の瞬間、両足が地面から離れた。

「……………ふえっ!?!」

突然のことに驚く。

肩車されたことで、視界が一気に高くなった。道行く人たちの何割かが、私に注目する。

「ひ、秀人さん、恥ずかしいよ！」

顔が熱い。きつと、真っ赤になっている。

「うんうん、わかったわかった。じゃ、行くか」

「分かってない〜!？」

ああああ、見ないで、見ないで〜!!

五分ほど肩車のまま歩き……ある場所で、すんと下ろされた。

「もっつ、ひどいよ〜!!」

本気で怒っているわけじゃないけど……恥ずかしかったんだもん。

そこは、アクセサリーショップのようだった。店内には、髪留め、ブレスレット、ピアスにネックレスと、アクセサリーが所狭しと並んでいる。

その中に売っていた、シンプルな飾り紐が目に残る。値段は、手頃。私のお財布の中身とぴったりだ。

「あの、これください」

「らっしゃい！ おおっ、かわいいお客さんだねえ！」

すこし派手な格好をしていた女性は、ネックレスをじゃらじゃら鳴らしながら陽気に応じた。

「欲しいのか？ それ」

秀人さんが財布を出そうとするのを、抑える。こればかりは、ね。

「これ、レイジングハートに丁度いいかなって思って。大事なパートナーだし、自分のお金で買ってあげたいの」

「そうか」

ポケットから、レイジングハートを取り出す。飾り紐のアタッチメントとは、大きさもピッタリ。

「ほら。ぴったりだよレイジングハート」

『ありがとうございます』

首に下げてみる。レイジングハートは相変わらずクールだけど、どことなく喜んでるようにも見えた。

「似合う似合う」

秀人さんが、頭を撫でてくれた。

どくん

『Caution!』

「うっ……!」「……何だ?」

突然、空気が変わった。この近くから、凄まじい圧迫感が押し寄せてくる。この気配は、そう。あの晩の……!

レイジングハートも、危険を促すように点滅している。

『二人とも!』

ユーノくんから、念話による通信が入った。

「ユーノくん!? まさか……!」

『そう、ジュエルシード暴走体だ!』

予感は、的中した。

「場所は!?!」

秀人さんが、道の隅に荷物を置き、聞く。

『そこからまっすぐ! 200メートル!』

「よっし! 行くぞ、なのは!」

「はいっ!」

秀人さんの後を追い、走り出す。

着いたのは、寂れた神社。

数十段の石段を登り終えた途端、

『グガアアアアアアアアアアアアアアアアッ!』

暴走体に、襲い掛かれた。だけど、いつまでも、怯えている私じゃない!

即座に手をかざし、障壁を発生させる。

『Protection!』

バチイッ！

『ギャンッ！』

この障壁には、ぶつかつた物を弾き飛ばす効果がある。だから、

「秀人さん！　いくよ！」

暴走体を、秀人さんの目の前に放り出した。

「いつ、せー、のー……！」

既に構えていた秀人さんが、左足を軸に、腰を回転。コマのように腕を振り、身体を大きく捻る。そして、

「せいっ！！」

十二分に威力を高めた回し蹴りを、暴走体に叩き込んだ！

ズドンッ！！

『ガウウウウウッ！？』

ドガンッ！　と吹き飛ばされた暴走体が、賽銭箱を粉碎した。

「くうっ……硬って……！！」

秀人さんが足をふらふらと振る。

確かに、この前の毬藻と比べて、ぶつかつてきた時の衝撃が強かつた。

『まずい』

ユーノくんが焦っている。

『まずいって、何が！？』

『今回の暴走体は、実体のある物に取り憑いて暴走している。』

だから、この前の……ジュエルシールドが単独で暴走しているときよりも、数段』

「厄介つてことだね」

見据える先。賽銭箱の残骸の山から、暴走体が立ち上がっていた。

『グルルルル……』

ジュエルシールドが取り憑いているのは多分、犬か何かなんだろう。

四足歩行の獣の姿をしている。

でも、回復し切つてはいない。今のうちだ。

飾り紐からレイジングハートを取り出し、天に掲げる。

『それじゃあ、なのは。この前と同じように……』
それを無視し、告げる。

「レイジングハート！ セットアップ！」

『Stand by ready , set up』

湧き上がる。桜色と、空色の光が。起動したレイジングハートを掴み、戦闘服……バリアジャケットを装着する。

『詠唱抜きって……』

「ん、まあ、変身するたびに長々と唱えてたら隙だらけだからな。レイジングハートに頼んでみたんだ」

空色の魔力光を立ち上らせる秀人さんが、軽い調子で言う。

『ガアアッ！』

「よ、っと」

暴走体の突進を回避する。

「……なんか、大した事無いな」

確かに。動きは直線的だし、突進はバリアを張れば余裕で弾き飛ばせる。

「せいやっ！」

ドンッ！

『ギャアッ！』

秀人さんの攻撃は、問題なくダメージを与えられている。

けれどそれは、安易な慢心だった。

「おい、なんか……！ 速くなつてないか！？」

身を屈めて、時に後ろに跳んで攻撃をやり過ぎす。でも、段々とその頻度が増えてきている。暴走体の動くスピードが、明らかに上がってきているんだ！

「秀人さん、こっちへ！」

『protection！』

全方位をドーム状に囲うバリアを展開し、退避する。

「まずいな……」

「うん……」

バリアに時折接触するものの、もう殆ど目で追えないスピードになっっている。私は元より、秀人さんでも捕まえられないだろう。

ガリッ！

「くっっ！」

バリアに鋭い爪が食い込み、一部を削り取る。その度に、術者である私自身にダメージが伝わる。

動きを止めることさえ出来れば……

「ん？」

動きを、止める？

はたと気付く。そうだ、何もわざわざあのスピードに付き合ってやらなくてもいいんじゃないか。頭の中で作戦を、戦術を組む。

「レイジングハート」

以心伝心の頼もしいパートナーは、すぐに答えた。

『確かに可能ですが、マスターの今の力量では、防御との同時展開は難しいでしょう。それに、術式を構築するのに時間が掛かります』

「具体的には？」

『五十二秒』

「っっ……」

長い……！ そんな長時間バリアを解除していたら、術式が完成する前にやられちゃう！

『方法があります。マスターが術式を構築している間……』

「俺が足止めする、ってとこか」

切り傷が塞がった秀人さんが言う。

「なのは」

私をまっすぐに見据える。

「上手くいくかどうかは、なのはに賭かっている。しくじるなよ」

「はい！」

そうだ。いくら秀人さんが時間を稼いでくれたって、私が失敗したら元も子もない。一回で、必ず成功させるんだ！

「こつちだ、犬コロ！」

秀人さんがバリアから駆け出し、暴走体の注意を引き付ける。

『ガアッ！』

バリアに掛かる負荷が消える。それと同時に、バリアを解除。

「はあっ……」

深呼吸し、目を瞑る。思考の邪魔になる情報は、可能な限りシャットアウトする。この五十二秒に……秀人さんが作ってくれる五十二秒に集中するんだ！

「くっ、この！」

『グルルルル！』

ドスツ、という鈍い音。ざしゅっ、という鋭い音が断続的に聞こえる。

……二十五、二十六、二十七

『ガアアアアアアアッ！！』

気付かれた！

咆哮が間近に迫る。それでも、目を開けない。集中を、絶対に乱さない！

「でえええいつ！！」

『ギアアアッ！』

横に逸れ、雑木林をめきめきなぎ倒していく音。

……四十五、四十六、四十七

……五十一、五十二！

『お見事です』

「……よし、やるよ、レイジングハート！」

『All right』

足元に、魔法陣を展開。術式選択。

暴走体は、私の背後、上空から飛び掛ってきた。

「……読み通り！」

見えない壁に激突したかのように、暴走体が、空中に静止した！
『グオオオオツ！？』

その四肢は、がっちりと、桜色のリングで拘束されている。

『Ring bind』

初歩拘束魔法、リングバインド。名の通り、魔力の輪で四肢を締め上げる魔法だ。例によって例のごとく、大目の魔力を注いだ分、従来のものより頑丈になっている。

『ガアツ！　グガアアアツ！！』

暴走体が足掻くが、拘束は硬く、全く抜け出せないでいる。

封印魔法を使うには、このバインドを解除する必要がある。でも、恐れる必要は無い。

この暴走体の加速には、『地面を蹴る』行為がどうしても必要だ。足場が無い空中に放

り出してしまえば、あの速度は出せない！

「『不屈の心はこの胸に！』」

暴走体の額に、ローマ数字が浮かび上がる。数は……

「ジュエルシード、シリアル16！」

『オオオツ！』

暴走体の爪が迫る。レイジングハートの変形は、多分、間に合わない。だから。

「秀人さん！」

「つしゃあ！　レイジングハート！　封印だ！」

『All right . . .』

五十二秒のうち四十七秒はこのために！　封印術式を、初歩攻撃魔法『インパクト』に追加！

『Sealing impact！』

「封……印ツツー！……！」

ズドオオオオン！

暴走体のどてっ腹に、封印攻撃魔法と……それを纏った拳が、深々と突き刺さった！

「グ……………ガハッ」

長い一瞬。そして、

バシユウウツ…………

暴走体の身体が霧散し、痩せた野良犬と、ジュエルシールドが転がった。

「くう〜ん…………」

素体にされていた犬も、怪我は無さそう。

「やった…………」

レイジングハートに、ジュエルシールドが吸い込まれた。

へたり込みそうになるが、気合で耐える。そんなことより！

「秀人さん！ 怪我は！？」

駆け寄り…………ひ、っと変な息が漏れた。

「秀人さん…………その、腕」

震える手で、指差す。

裂傷と表現するのも生温い、深い、無数の切り傷。皮膚をめくり上げ、肉を抉り…………一番深い左肩の傷なんて、恐らく骨にまで達しているだろう。今も、どぼどぼと壊れた蛇口のように真っ赤な液体を流している。卒倒しそうになる自分を叱咤し、上着を傷口に押し当てる。黄色の生地が、見る見るうちに赤く染まっていく。抑え切れるはずも無く、ぼたぼたと赤い雫が垂れてくる。

（どうしよう…………どうしよう…………！！）

病院。救急車。

「…………放っておけば治る。俺は…………そういう風にできてるから
いつか聞いた言葉を繰り返し、秀人さんは目を閉じた。

道端に放置していた荷物を回収し家に戻る途中、ユーノくんが合流した。今更な感じがする。まあ、魔力が回復するまでは念話くら

いしか使えないらしいし、仕方無いんだけど。

「秀人、なのは！ 怪我は無い!？」

「おー、見ての通りだ」

ひらひらと手を振る秀人さん。何でなのかは知らないが、あれだけの傷が短時間で回復してしまったから、確かに無傷だ。私も無傷だが……これは、秀人さんが守ってくれたから。あんな、普通の人なら、一生傷跡や後遺症が残りそうな傷を負いながら。いくら治るとは言っても、痛みが無いわけじゃあないんだろう。ついさっきまで、まるで蠟人形のような顔色をしていた。きつと、私に心配を掛けまいと無理をしていたんだ。

事前に準備できていたら。二つ以上の魔法が同時に使えていたら。……私が、もつと強かったら。秀人さんは、痛い思いをしなくて済んだ。

「レイジングハート」

『はい、マスター』

「私……強くなりたい」

レイジングハートは、はっきりと答えてくれた。

『なれます。あなたなら、誰よりも』

決意を新たに。レイジングハートを、ぎゅつと握り締めた。

「なのは、俺、少し出かけてくる」

食後、使い終わった食器を洗っているときの事だった。秀人さんがヘルメットを手に、出かけていってしまった。どうせなら、一緒に練習したかったなあ……

まあ、無い物をねだっても仕方が無い。

私は正座し、ちゃぶ台の上に鎮座するレイジングハートと、ユーノクんと向き合った。

「なのは、最初に言っておくね」

ユーノくんが、張り詰めた声で言う。私は、背筋を伸ばしてそれを聞く。

「魔法は、怖い力だ」

それは……ジュエルシードを見れば分かる。あんな化け物が、もし街中に現れたら。どんな被害が出てしまうのかなんて、想像すら出来ない。

「使い方によっては術者の身を滅ぼして……いや、それならまだしも、周囲の人を巻き込む可能性だってある。だから、魔法の指導に、一切の馴れ合いは無しだ。それを……肝に命じておいて」

「ごくり、とどろが鳴る。私がやるうとしてしていることは、危険と隣り合わせの技術なのだ。下手をしたら、ジュエルシードを集め終える前に自滅することだってあるんだ。少し……ううん、すごく怖いでも……秀人さんの血が、頭にこびりついて離れない。あんな光景を見るのは、もうまっぴらだ。」

「ユーノくん、レイジングハート、魔法の練習……いや、特訓、お願いします！」

「お任せ下さい、マスター」

私は、強くなる！

俺は、通りの一角にバイクを止め、ヘルメットを脱いだ。昼間は人でにぎわう大通りも、夜九時を過ぎ、商店がシャッターを閉めると途端に人通りが少なくなる。

「……ここか」

携帯電話のナビは、『目的地に到着しました』と無愛想に沈黙している。

『大通りで一番人気の店』……たったこれだけでヒットするなんてなあ。

目の前には、一軒の喫茶店。看板には『翠屋』とある。ドアノブには、準備中の看板が掛かっている。最低限の照明を残すのみの店内からは、まだ人の気配がした。

(…………居てもらわないと、困るんだけどな)

悩んだ末、俺はノックの代わりに……

ガンツ!

ドアを蹴りつけることを選んだ。壊れない程度に、思いつきり手加減して。

ノブを捻り、店内にずかずかと足を踏み入れる。

「…………申し訳ありませんが、」

モップ片手に近づいてきた男。切れ長の瞳に、長身。こいつは兄貴か。奥でテーブルを雑巾がけしている三つ編み眼鏡は姉だろう。

カウンター内を掃いている女、こいつはなのはにソックリだ。多分、母親。

こいつらが…………この三人が、あの子をあそこまで追い込んだ元凶。

「お前たちがなのはの肉親か」

「なっ…………!!」

なのはの兄が、モップを取り落とした。

「…………そうみたいだな」

「責様ツ!!」

胸倉を掴み上げられ、壁に押し付けられた。暑っ苦しい…………

「きょうちゃん、ストップ!」「恭也!」

姉と母が、兄…………恭也と俺を引き剥がす。荒い息をついていた恭

也は、二度三度息を整え、『すまない』と頭を下げた。

「今、なのはがどこにいるかご存知なんでしょうか?」

なのはと同じ、栗色の髪の毛をした女が質問してきた。平静を装っているが、焦りのようなものが浮いて見える。

「ご存知も何も。一緒に暮らしてる」

ぞわっ…………

エレベーターが停止した時のように、毛が逆立つ。これは、殺気。そして発生源は恭也だ。

「…………なのはをどうするつもりだ」

「俺と一緒に暮らす。これからもずっと、だ」

「ふざけるな……！」

大した殺気だ。気を抜けば、膝が笑い出してしまうかもしれないけど、こんな野郎相手にそんな無様な姿は見せられない。なのはのためにも。

「なら、返してどうする？」

「あえて、とぼけて返す。」

「……決まっている。家に連れて帰って……」

「飼い殺しにするのか」

恭也の目が、見開かれた。取り繕うように、厳しい表情を作るが、殺気はすっかり霧散してしまっている。

「なのはは、泣いていたぞ。『もう寂しいのは嫌だ』ってな」

女二人が辛そうに目を逸らした。

「聞き分けのいい子。しっかりした子。我俣を言わない子……いい子。だから、放っておいても大丈夫、か？」

とうとう恭也までが、俺から目を逸らしてしまった。

「おい、なのはの母親」

「……はい」

「ここ数年、なのはに飯を作ってやったことが無いんだって？」

「……」

……答えられないか。なのはは、『母の料理が食べたい』なんて当たり前のことを涙ながらに訴えたのに。

「テレビの取材で忙しかったか？ 店の人気がそんなに大事か。な

のはより、店の売り上げか」

「違う！ 私は、なのはを愛して……！」

「なのはは、自分で作った料理を一人で食べながら、テレビに映る母親を見ていた」

「っ……！」

……何、ショックを受けた顔してるんだ？ 全て、自分のせいな

のじ。

なのはだって、お母さんが作ったご飯、食べたいのに！

「おい、姉」

「……なん、ですか」

「なのはが何才になったか、言ってみろ」

「……九才」

「なのはは、誕生日を三回、一人ぼっちで過ごした」

三つ編みの女は、俯き、唇をかみ締めている。

誕生日にお祝いしてよ！

「おい、兄」

「……何だ」

「お前、なのはを叩いたんだってな」

それが、何よりも許せない。叩かれる理由なんて、欠片も無かつたのに！

「……夜遅くまで出歩いていたらだ」

なるほどな。そういう言い訳をするのか。

「その前日は俺の家に泊まっていたんだが？ 気付かなかったのか、家族の不在に？」

「!？」

心底驚いた、みたいな顔。

「普段は見向きもしない癖に、都合のいいときだけ兄貴面か」

家に帰ったら、お帰りなさいって言ってよ！

こいつらは、そんな、ごく当たり前の愛情すら注いでこなかった。なのはは、あんなにも泣いていたのに。あんなにも、家族の愛情を

求めていたのに。

怒りが、ふつふつと湧き上がってくる。

「もうお前達に、なのはの家族を名乗る資格は無い」
弱弱しく睨み付けてくる、なのはと同じ苗字の男。

「謝る権利すら無い」

拳を握り締め俯く、なのはと遣伝子的には近い筈の女。

「二度となのはの前に姿を見せるな」

膝を折り、嗚咽するなのはを出産した女。

「あの子は俺と暮らす。これからも、ずっと」

「お願いします、なのはに、なのはに会わせて下さい！」

なのはを出産した女が、縋り付いてきた。

その顔は、『私は悲しんでいます』と言わんばかりで……！

切れた。

「ふざけてんじゃねえぞっ！！」

俺は、怒りを抑え込んでいた夕ガを外し、激情のままに叩きつける。
縋り付いてきた女を、床に蹴倒す。

「被害者面してんじゃねえ加害者共！ なのはがどれだけ寂しかったか、辛かったのか、どうせ理解しちやいないんだろっ！ 会ってどうする！？ その場凌ぎで許してもらって、また繰り返すのか！

あの暗い家に、なのはを一人ぼっちで取り残すのか！」

呆けた顔で立ち尽くす三人に、最後の一言をかけてやる。

「お前達は、気付くのが遅すぎた」

ドアを開け、店を出る。背後からは、しくしくという泣き声が聞こえていたが、ドアを閉めると聞こえなくなった。

「ただいま」

家に帰った俺が見たのは……

「……………んあ〜」

……………不必要に大人びた子というイメージを爆砕する、なのはの痴態だった。床に大の字で倒れ、口の端から涎が垂れている。

……………これはひどい。

「……………おい、ユーノ、レイジングハート」

「……………はい」

『何でしょうか』

目がぐるぐると回り、ここではないどこかを見ている。

『何をした』

『マルチタスク……………並列同時思考の訓練を』

『手始めに五つほど』

「んな過剰な脳トレを九才の女の子にやらせんなあああああ!!」

ユーノの首根っこを掴み、胴体を掴み……………雑巾絞り!

「んぎよええええええええええ!!」

『憐れです、かつての我が主……………』

『お前もだ! 何考えてやがる!』

ボロ雑巾ユーノをぺいっと放り捨て、レイジングハートに指を突きつける。だが、レイジングハートはクールに電子音声で返した。

『マスターが望んだのです』

「……………は?」

こんな、吐くような過剰なトレーニングを? 一体、何でそこまで……………

『あなたのためです、ヒデト』

「……………何だよ、それ」

俺のため?

『暴走体との戦いで、あなたはマスターを守り、幾度と無く傷ついた』

まあ、確かにガラスの雨を浴びたり猛獣の爪で切り裂かれたりはしたが……………

「俺の身体なんて……放っておけば勝手に治るんだ。そんなに気に病む必要なんて無いだろ」

そうだ。俺の身体は特別製なんだ。いくら傷付こうが、砕かれようが、すぐに回復する。痛みを我慢していればいいだけの話だ。俺の怪我なんて瑣末なことで、なのはが悩む必要なんて……

「……違う、よ。それは、違う」

なのはが、ふらふらと立ち上がった。まだ寝起きのようにふらふらしているが、目は、まっすぐに俺を見ていた。ふらふらと数歩進み……俺の身体に、手を回した。至近距離から俺の顔を見上げ、言う。

「治るから、傷ついていいなんて、絶対に違う……！」

真っ直ぐな瞳に気圧される。

「秀人さんが私を守って傷つくなら……」

決意を込めた目が、言葉が、心地よく耳に届く。

「私は、『私を守る秀人さん』を、守る」

それだけ言って、電池が切れたように、ぱたっと倒れた。それを、受け止める。

腕の中で寝息を立てるなのは。思わず、苦笑が漏れてしまう。

「……傲慢だったな。『俺が守ってやらないと』だなんて」

弱い子だと決め付けて。でも、それは間違いだった。

『私を守る秀人さん』を守る。

あれは、本気の目と言葉だった。なのはという女の子は、俺が考えていたよりも、ずっと強い子だったらしい。

手櫛で髪の毛を梳いてやり、ベッドに横たえる。

「……レイジングハート、ユーノ」

『はい』『あいたたた……何だい?』

「俺にも、魔法の訓練を頼む。いつまでも『インパクト』一辺倒じゃあ……」

なのはの、綺麗な栗色の髪の毛を撫でる。
「この先、なのはを守れない」

「ふああ〜……」

朝日が眩しくて目が覚めた。頭に、まるで錘が乗っかっているように重い。

そう、昨日は「今朝のご飯は何にしようか」「先生に何て言い訳しよう」「レイジングハートと」「新しい食器を使うのが楽しみ」「マルチタスクの」「あーあ、髪の毛ばさばさ」「れんしゅ、うー！」

「うぐうううっ！ー！」

頭が……痛い！

「ふうっ……あ、あぐっ！」

痛い……痛いッ！

「はあっ、はあっ……！！！」

これは多分、昨日の訓練の後遺症みたいなものだろう。

並列同時思考。 マルチタスク

高度な演算を必要とする魔法を、いくつも同時に展開するために必須の技能……らしいのだが。

「頭、痛いよお……」

ずきずきと疼痛が頭に住み着いてしまっている。

「だから、言ったじゃないか。いきなり五つは多すぎるってー！」

ユーノ君が、小さな手で私の頭をぼむ、と抑えた。

「あう〜……」

じわじわ〜、と痛みが引いていく。

「とりあえず、痛み止めしておくから」

「ありがとう……」

……ようやく、痛みが引いた。まだ少し、頭が重いような気がするけど。

「レイジングハート……今日の訓練メニューはどうしよっか？」

「なっ……なのは!？」

ユーノ君が、飛び上がるように驚いた。まあ、言いたいことはわかるんだけど。

「駄目だ！ 今日、魔法使用もマルチタスクの使用も厳禁だ！」

「あっ!？」

必死……いや、怒気さえ滲ませて、レイジングハートを取り上げられた。

「権限行使。二十四時間の、マスター『高町なのは』による一切の機能の使用を……」

ユーノくんには、今のところ、私より上位の権限がある。それは、もし魔法が暴走しそうになったとき、即座に停止させるためのものだ。これを行使されたら、いくらマスター登録されていても魔法は使えない。それだけは……絶対に駄目だ！

「ユーノくん!!！」

ダンツ!と床を強く叩き、ユーノくんの声を遮る。

「……もう、嫌なの。私に力が無くて、秀人さんが傷つくのは」

一日の遅れが、また、『あれ』を繰り返すかもしれない。切り裂かれた身体。あふれる血液。蒼白になった顔色。私を安心させるために、無理やり作った歪な笑み。もう……あんなのは沢山だ。

「だから、お願い。練習させて、ください……もう、あんな無茶はしないから。ちゃんと言うこと聞くから……! お願い、お願いします……!」

涙で滲む目を目蓋で隠し、土下座するように頭を深く、深く下げる。嗚咽が漏れないよう、唇を噛み締め。

ふう、と。諦めたような吐息が、耳朶に響いた。

「内容変更。これより十二時間、マルチタスク二つのみの使用を許可」

「あっ……ありがとうございます！」

顔を上げる。ああ、良かった……本当に。

「僕が『いい』って言うまで、基礎以外の事に手を出したら駄目だからね！」

「……はい」

とにかく、起きよう。

のそのそと身体を起こし、台所に向かう。冷水で顔を洗うと、いくら気分がしゃっきりした。痛みというレベルではないが、頭が重い。

「うっ……」

冷蔵庫を物色。アジの開きと、豆腐があつた。コンロに火をつけ、鍋を乗せ、水を入れる。湯気が出る程度に温まったら、削り節を入れ、一煮立ち。出し殻を取り出し、お味噌を溶いて入れる。もう片方のコンロに火を点け、網に載せたアジの開きを乗せる。味噌汁に豆腐を一センチ角に切つて入れる。味噌汁の火を落とし、蓋をする。さて、あとは、アジが焼けたら朝食の準備は完了つと。

「随分と手馴れてるんだね」

「ん……まあね」

伊達に数年、半一人暮らしをしていない。この程度の作業なら、寝ばけた頭でも勝手に身体が動いてくれる。さてと。秀人さんを起こそう。

「秀人さん、おはよう」

ベッドに膝立ちし、秀人さんの寝顔を覗き見る。しばらくすると、

「うっん……」と呻き、むくつと上半身を起こした。

「……おはよう、なのは」

ふわあ、と大あくび。

「朝ごはん、できてるよ」

寝癖が付いた髪の毛を梳いてあげる。

「ありがとな」

そして、もそもそと起きだしてきた秀人さんが顔を洗い、食卓についた。

あ、いけない。鞆の中身、この前のままだ。

がさがさと鞆の中身を入れ替える。すると、見慣れないプリントが出てきた。わら半紙のそれには、こう書いてあった。

『授業参観のお知らせ』

「……………」

配布された日付は、大体一週間前。適当に鞆の中に突っ込んでいたつきり、忘れていたようだ。

台所で、食器を洗っている秀人さんを見る。

「……………」

声が、出せない。ただこのプリントを見せて、『来てください』と言えばそれでいいのに。

「ん？」

秀人さんが、視線を感じたのかこちらを振り返った。

「どうした？」

今日、授業参観があるの

でも。私の口からその言葉が出ることはなかった。

「……………」

無理矢理、笑顔を作る。プリントをぐしゃっと丸め、屑籠に放り

込んだ。

なのはが掛けて行った直後……………ばたん。俺は、笑顔で手を上げた姿勢のまま、少し色あせた畳に倒れこんだ。

「ぐおおおお……………」

なのはの前では格好付けていたが、もう限界だ。頭の中を金槌でせわしく叩かれていますような激痛。

「……大した根性……いや、意地っ張りだね、君も」
ふう、とため息をつくユーノが恨めしい。

「うっせー……こんな情けない姿、なのはに見せられないだろ」

一歩も動けない。だからだと脂汗を垂らしながら、畳と見詰め合う。ああ、少し力びているわ。いやだもう、ウフフフフ……

「秀人！ 気を確認に！」

ハッ！ あ、危ない……危うくアツチの世界に飛んでいくところだった。

「全くもう……なのはもそうだけど、何でそんな無茶するんだよ。

最初は、二つ同時から始めて、徐々に慣らしていくのが普通なのに」

「えっ……？」

その発想は無かった！

「『その発想は無かった』みたいな顔するなー！！」

はあ……今日はもう駄目だ。ずるずると這い、ベッドから毛布を引っ張り下ろし、床で寝る。そうして、何時間寝ていただろうか。

目を覚ますと、日は真上近くに昇っていた。

横に傾いた視界の中、屑籠に見慣れない色の紙が捨てられていた。腕を伸ばそうとして……断念。無理。動けない。

「ユーノ……それ、取ってきてくれ」

「はあ、やれやれ」

ぱさつと目の前に置かれる紙。

「読んでくれ」「自分で読め！」
ちっ。

えーと、なにになに？

「三年三組、授業参観のお知らせ……？」

「ジュギヨウサンカン？ 何だい、それは？」

「ああ、学校行事の一つでな。授業風景を保護者が見に来る……って、ええええええええ！」

頭を支配する痛みを気合で無視し、立ち上がる。プリントに目を通す。

「うわっ……！」

日程は、今日！

「あんの、馬鹿！」こんな時にまで！

『授業参観に来て欲しい』と一言言えば済むものを、あの子は、また変に遠慮して……！

一張羅のスーツの袖に腕を通し、ネクタイを締める。

「どうしたのそんなに慌ぶぎゆる！」

ユーノの首根っこを掴み、窓の外に停めてあるバイクのリアボックスにスローイング！

「あああああ！？」

説明は後だ！

「行きながら念話で説明する！ とにかく行くぞおおお……！」

窓を跨ぎ、バイクにキーをぶっ挿す！ ヘルメットを被り、発進！

「ぎゃああああああああ」

……やっぱり、こうなったか。

職員室で担任に頭を下げながら、ひたすらそんな事を考えていた。金曜日のエスケープに続き、月曜日のズル休みだ。そりゃあ、いくら温厚な先生でも怒る。

「高町さん、ちゃんと聞いているの!？」

「……はい、済みませんでした」

惰性で優等生の真似事をしていたが、前回のエスケープと、昨日のサボタージュの二件で、完全に信用を失ってしまったようだ。

職員室を、一礼してから出る。詰まっていた息を、はあ、と吐き出

し、教室へと向かった。クラスメイトたちは、皆どこか浮き足立っている。まあ、それは仕方ない。何せ、年に二回の授業参観なのだ。勉強が出来る子も、そうでない子も、親にいい所を見せようと張り切っている。私はというと……頼杖を突いて、窓の外をぼうつと見ていた。机の上には、申し訳程度に教科書とノートを広げている。が、これを今日使うかどうかは不明だ。

「ね、ね、高町さん」

クラスメイトの誰かに、声を掛けられた。無視しても良かったが、波風を立ててもメリットは無い。顔を上げ、作り笑顔の仮面を被る。

「あ、……なに？」

しまった……この子の名前知らない。

「高町さんの家族って、どんな人が来るの？ お父さん？ お母さん？」

ぴき

作り笑顔の仮面に、一瞬ヒビが入った。

「え」

怒るな。誤魔化せ。無視しろ。

「えっと……」

あんな奴らのこと、思い出すな！ すう、はあ……よし。落ち着いた。落ち着いた。私は落ち着いた。私は落ち着いた。怒ってなんかいない。

「……もしかしたら、今日は都合が悪くて来れないかもしれないって」

「そっかー、残念だなあ」

何が残念なんだ！ ぎりぎり、机の下に隠した手を硬く硬く握り締める。

「あ、おい八代！ 先生来たぞ！」

その時、扉から外を見ていた男子が、私に話しかけてくる女子八代というらしいに大声を浴びせた。

「うっさいアホ葉山！」

男子は、葉山というらしい。八代さんは舌打ちをして、葉山君を睨み付けた。

「ンな大声出さなくても聞こえてるっつうの！」

「お前と一緒に高町さんまで怒られたらどうするんだよ！ さーちやん先生、怒るとマジ怖いんだぞ！」

ついさつき実体験したばかりだけど。ふう……とりあえず、この葉山君には感謝だ。八代さんの話を強引にでも断ち切ってくれたことだし。

「またね」と席に戻っていく八代さん。葉山君は、何故かまだ私の席の近くにいた。

「……なに？」

声を掛けると、びくっと身体を硬直させ、目がきよろきよろとせわしなく教室内を泳ぐ。

どうしたんだろう？

「あつ、た、高町……その、あいつ、五月蠅いだろ？ 昔からそうなんだよ。許してやってくれ、な？」

「うん」

どうやら、八代さんのフォローをしたかっただけらしい。もういいから、さっさと席に戻ればいいのに。あ、ほら。

「葉山君！ 席に戻りなさい！」

先生に見つかっちゃった。私は目を背けていたから、目を付けられる事は無かった。

三時間目と四時間目が授業参観だ。二時間目が終わる頃になると、教室の雰囲気こそわさわし出し、廊下側の窓を気にしだす子が増えてきた。

『マスター、集中力が乱れています』

シャツの中に隠したレイジングハートからの注意に、ハッと気付く。

(うめん)

登校してから、ずっと発動していたマルチタスクに意識を戻す。

家に帰ってからでは、練習時間が足りない。私には、休んでいる暇は無いのだから。

数は二つ。一つは、黒板の文字をノートに書き写すもの。もう一つは、基礎魔法を頭の中でシミュレーションするもの。

『順調です。段々と構築速度が上がってきています』

二つの魔法が同時に使えるようになれば、戦い方の幅も広がる。秀人さんに守ってもらってばかりの私を、変えられる。

『初歩攻撃魔法・インパクト。初歩防御魔法・プロテクション。初歩拘束魔法・リングバインド。封印魔法・シーリング。以上の四つは、個別に発動する分にはもう問題無いでしょう。あとは、発動時間の短縮に努めて下さい』

レイジングハートから及第点を貰う。とはいえ。

『では、新しい魔法を教えます』

鍛錬に休みは無い。教わってわかったことだが、魔法というのは基礎魔法だけでも膨大な数がある。もちろん、全てを習得する必要はまだ無いが、私の魔導師としての『適性』を計るためには、浅く広く覚える必要があった。

『今日だけで、最低でも五つ、習得して頂きます』

(うん、任せて！)

私は、へこたれない。私のために。そして、秀人さんのためにも『マスターの魔力量ならば、基礎のプロテクション・リングバインドでも強度は十分。ですので、新たな攻撃魔法を覚えていただきます』

(……うん)

攻撃魔法。その言葉の重みで、おへその下がずん、と下がる。

『気が進みませんか？』

(……ううん、大丈夫)

私は、私を守る秀人さんを守る。そう決めたんだ。

『恐らく、マスターの敵性は中・遠距離型。』

まず、攻撃の柱となる、直射型砲撃魔法を……』

がやがやと廊下と教室が騒がしくなってきた。休み時間に入り、化粧でめかしこんだクラスメイト達の母親や、スーツを着た父親がぞろぞろとやってきていた。

思わず……無意識で。私は、来る筈の無い人物を探してしまった。(そうだ。来るはずが無い。頼んですらいない。プリントだって、屑籠に捨ててしまった)

『魔力を、一直線に射出するのです。簡単に聞こえるでしょうが、束ねた魔力が拡散しないよう、砲撃の先端にまで気を配る必要があります』

授業が始まる。先生が問題を出すと、普段は全く手を上げないような生徒までが、我先にと手を上げる。当てられた生徒は、嬉しそうに、教室の後ろの壁際を、そこにいる親にアピールするように答える。

休み時間に入ってすぐ、親の元へ行くクラスメイト達。一様に笑顔だ。その『親子』というものの姿が、ちくちく胸を刺す。

その中から、八代さんと葉山君が席にやってきた。

「高町さ、ムゲ!?!」

何かを言おうとした八代さん。まあ、大体想像がつく。残念だったね、とか、そんな話だろう。それを、口を塞ぐことで阻止したのは葉山君だった。八代さんは、乱暴に葉山君の手を振りほどいた。

「何すんのよアホ健太!」

……健太?

「誰がアホだバカ望! 少しは空気読め!」

……望?

下の名前(多分)で呼び合っている。不思議に思っただけ夫婦漫才を見ているなら、二人揃ってバツ!と振り返った。

「違っ、高町さん、誤解しないでね!? 単に、家が近い幼なじみっただけだから!」

「そうそう！ 第一、俺は……！」

顔を真っ赤にして俯き、もじもじと指をいじり出した。何なんだろう。用が無いなら、さっさとどこかへ行って欲しい。マルチタスクを維持するのって結構大変なんだよ？

あ、チャイム鳴った。やれやれ……

授業参観もそろそろ終了。

(……いつものことじゃないか。今までだって、一人でやってきたじゃないか)

そんな時だった。

から

教室のスライド式のドアが、ゆっくりと開けられる音。本人としては気付かれないように開けたつもりなのかもしれないが、バレバシだったりする。……遅刻してもすぐバレしてしまう、魔のドアだ。そんなドアを開けて、時間ギリギリにやって来たのは。

秀人さん。

「え？」(え?)

マルチタスクが、驚きのあまりぽんつと解除される。クラスの視線は、また黒板に、先生に戻る。でも。私は、秀人さんから目を離せない。

秀人さんが私に気付き、ひらひら、と控えめに手を振った。

でも……何で？ プリントは捨てたのに……

がさ、と秀人さんがポケットから取り出したのは、くしゃくしゃになった、授業参観のお知らせだった。……そっか、見つけちゃったんだ。

ああ、どうしよう。顔がにやけてしまう。気を抜いたら、くすくすと笑い出してしまいそうだ。

「秀人さんっ！」

授業が終わってすぐ、秀人さんのところに駆け寄った。

「悪い。もう少し早く来ればよかった」

「うっんっ、嬉しい！」

ぎゅー、っと、抱きつく。

「ぎゅー!?!」

……あれ。なんか、ポケットから変な声が。

「あ、忘れてた」

無造作にポケットから引っ張り出したのは、栗色の毛並みをぼさぼさに逆立てた、ユーノくんだった。

『……やあ、なのは』

「どうしたの？　なんかボロボロだね」

秀人さんに聞いてみた。ユーノくんは疲労困憊で、ぐったりしている。秀人さんは気まずそうにそっぽを向いた。

「バイクで来たんだけど……途中でユーノ落っこしちゃって」

はっはっは。参った参った。……と、明らかに笑って誤魔化そ

うとする秀人さん。

『咄嗟にプロテクション張ったから助かったものの……普通に死ぬわあああああ!!!』

机の上に立ち、がーっ、と怒る。

「きゃー！　かわいいー！」

……しまった、見つかつちゃった！

「かわいいー！」「これ高町さんのペット？」「名前なんていうの？」

クラスメイト達が、ユーノくんに殺到する。見た目はフェレットだし、小動物が好きな子にはたまらないだろう。地の性格は……まあ、不幸体質のうっかり者だけ。

私が避けたいのは、クラスメイトの質問攻めではなく……

「高町さんっ！」

「……うわっ」

この、情熱が空回り気味の先生に見つかってしまふことだったのに。

だがしかし、先生は私ではなく、秀人さんに詰め寄った。……ああ、そうか。秀人さんを私と同じ『高町』だと勘違いしたのか。

「ペットの連れ込みなんて非常識です！」

「あ、済みませんでした」「済みませんでした」

ぺこ、と素直に謝る。

「もう、今回だけですよ？ ……もう」

ちら、ちら、と、女子にもみくちやにされているユーノくん視線を投げよこしている。

「……触ってみますか？」

提案を口にしてみた。

「いいのっ!？」

目を輝かせて食いついてきた!

「え、ええ……ユーノくん、こっちおいで」

『りょーかい』

女子の手をするっと抜け出し、とたたた、と寄ってきた。抱え上げ、先生に手渡す。

「か……かーわいいー!!」

……先生が、壊れた。

「あはははは……(ユーノくん、モテモテだね)」

「ぎゅ、ぎゅ〜ううう……!! (なのは……助けて、苦しい! 出ちゃう! 中身出ちゃうううう!!)」

「(頑張つて。私の平穏な学校生活のために)」

「……!!」

多分だけど、この先生、猫には嫌われるタイプだろうなあ……

ソレを見て、秀人さんと顔を見合わせて笑った。

第三話（後書き）

ユ、ノ、エ、ゝ、ゝ、

第四話（前書き）

ちょっと短めです。キリがいいので。

第四話

学校の校舎というものは、昼こそ生徒でごった返し活気に満ちているが、夜になると途端に不気味な異界と化す。上履きの底が床板を擦るキュツキュツという音がいやに大きく響き、より一層の不安感を煽り立てる。

さて、何故私がこんな夜の校舎に居るのかと言うと。

「……き、肝試しらしくなってきたよね、うん！」

「そうそう！これくらい迫力が無いとな！」

そう。肝試しである。私と、八代さんと、葉山君の三人で。もちろん許可は下りていない。前に通っていた私立校ならともかく、公立校だ。多くの監視カメラも、ガードマンもない。せいぜい、宿直の先生がいるくらいだ。鍵が壊れている裏口からこっそり侵入するなんて、たやすい事。

「お、おい望。怖いなら、帰ってもいいぞ……？」

「ふ、ふん！ そんなに高町さんと二人きりになりたいわけ！？」

「なっ……んな事言ってないだろ！」

「そういうことでしょ？ 馬鹿健太！」

気丈に振る舞っているが、かたかたと笑っている膝を見れば、それが虚勢だと明らかに分かる。

「二人とも、静かに。見つかつちやうよ？」

こつも五月蠅かったら、宿直の先生が目を覚ましてしまう可能性がある。ある。

「あ、悪い……」「ごめんなさい……」

（はぁ……なんでこうなっちゃったんだっけ？）

私は何も、本気で肝試しをしに来た訳じゃないというのに……

話は、ほんの数十分前にまで遡る。

.....

レイジングハートを片手に、通いなれた校舎を見上げる。

「レイジングハート、ジユエルシードの反応は？」

『まだありませんが、僅かに気配がします。お気をつけて』
「うん」

よし、行くぞー……

「あれ、高町。何してんだ？」

「え、高町さん？ ホントだ」

……うっ。

嫌な予感と共に振り返り、出かけていたため息を飲み込んだ。

「八代さん……葉山君、君達こそ、何してるの？」

クラスメイトの二人は、口をそろえて「塾」と言った。

「そう。行ってらっしゃい」

仕方ない。別の場所から入ろう。

「っていうか、何してるんだ？ 忘れ物したなら、宿直の先生に言えばいいじゃん」

葉山君がもつともなことを言う。

ジユエルシードを探しにきました。自由に動き回りたいので、宿直の先生は邪魔です。

言えるわけ無い！

ああ、二人の顔がどんどん訝しげになっていく！ なんとかして誤魔化さないと！

「き、肝試しをしようと思って……」

「肝試し？」

「やっちゃった……」

「うん」

ああ、終わった……私の平穏な日々……

「へー、楽しそうじゃん！俺も混ぜてくれよ！」

「ちよつと、健太!？」

へ？ あれ？ なにこの展開……

『マスター、どうされますか？』

『いやあ……どうしよつか……？』

もしここで断つたら、余計に怪しまれてしまつかもしれない。それなら。

「いいよ。三人で行こう」

「よつしゃ!」「ええっ!？ 私も!？」

手元に置いて、監視していた方がマシ。そう決めた。

『大丈夫だよ。この二人には、適当なところで消えてもらおうから』

.....

「それじゃ、コースの確認をするよ。宿直室を避けて、階段で二階へ。ぐるつと回つたら、次は三階へ。理科室の黒板にチヨークで名前を書いたら、またここに集合」

それにしても、なぜゲストであるはずの私が主催者のような役割をしているのだろうか？

「よ……よし！」

「……わかった」

一人一人、5分置きに個別に出発するルールだ。じゃんけんで順番を決める。

「ひい、一番!？」

八代さんが一番。

「に、二番手か、はは……」

葉山君が二番。

「じゃ、私は最後だね」
私は最後になった。

へっぴり腰の八代さん、おっかなびつくりの葉山君が出発し、スタート地点に一人残される私。さてと、行くか。懐中電灯片手に、階段を上る。

今日は、ユーノくんも秀人さんもない。ユーノくんは放出してしまつた魔力の回復のため。秀人さんはお仕事らしい。

暗闇の中、胸元でキラリと輝くレイジングハートだけが、今日の相棒だ。

二階を制覇し、三階へ。その時、事件は起きた。

ずくん、という、お馴染みの感覚。そう、これは……

「ジュエルシード……！」

かなり近い。ほんの、数十メートル先だ！

「きゃあああああああああ！」「ぎゃあああああああああ
あ……！」

「八代さん！ 葉山君！」

最悪だ！ ああ、もう！ だから一人で来たかったのに！

「レイジングハート、セットアップ！」

『Standby ready, set up!』

弾ける桜色。ジャケットの裾を翻し、理科準備室に急ぐ。

角を曲がる。そこで見たのは、床にぱったりと倒れる二人のクラスメイト。そして。

人体模型。

身体の正中線の沿って、筋肉組織が半分だけ露出した、理科の教材だ。残り半分の『普通の身体』は、不気味な無表情。直立しているところしか見たことが無いソレは、腕を曲げ、足を曲げ……まるで、生きているように動いている。

「き、」

夜の校舎に、動く人体模型。それが、ジュエルシードによって動

いていることも分かっている。分かっではいても……怖いものは怖い!

『マーーーーー!!!』
動いたあああああこつち来たあああああああああ!!!

「きやあああああああああああああああああああああ
あああ!!!」

『impact!!』
どっごおおおん!!!

『マーーーーー!?』

漫画ちつくな動きで廊下の端まで吹き飛んでいく人体模型。

しゃかしゃかしゃか……!

ひいいいいいいいい壁を這って近づいてきたあああああ
あああああ気持ち悪い怖いいいいいい!!!

「来ないで! 来ないでええええええええええ!!!

『マスター、落ち着いて下さい!』

「いやあああああ!!!」

目に涙が浮かんでくるのを感じつつも、それを拭うことも忘れて
攻撃魔法を乱射する。

『マ、マママツ、ママママー!!!』

悔しいことに、ほぼ全部避けられてるけど!

『落ち着いてきましたか、マスター?』

「はあ、はあ……! うん、ごめんね……!」

『練習どおりに。やってみましょう』

そつだ。集中集中。

術式選択。射撃魔法・シューター。

魔力循環。

よし……練習どおり。レイジングハートの先端に、桜色の魔力ス
フィアが形成されていく。行くぞー!

「シュー、」

『ヒヨオオオオオオオオオオッ!!』

「、きゃあ!？」

完全に、不意打ちだった。

攻撃魔法を発動しようとした瞬間、物陰から飛び出してきた『何か』に、体当たりを喰らわされた。軽い攻撃だったことが幸いし、ダメージらしいダメージは無い。でも、攻撃魔法がキャンセルされてしまった。

「このっ、何が!？」

闖入者の姿を確かめる。

窓から差し込む月明かりに照らされる、骨ばった……というか、

「……骨格標本?」

だった。

すかすかの身体をくねらせ、月明かりを浴びて謎のポーズを決め

……

『ヒョーウー!!』『マーー!!』

びしいっ!

人体模型も釣られて、左右対称のポーズを取った。

「……ねえ、レイジングハート」

『なんでしようか、マスター』

「……もう帰る」

『マスター!?!』

果てしなく脱力を誘う二体の暴走体に……なんというか、萎えた。主に闘志とか、そんな類のものが。

「うん……もういいや。害は無いみたいだし、放っておこうよ」

さーて、八代さんと葉山君を回収して帰ろうと……

『マスター、気を確かに!』

ぼんぼん、と気安く肩を叩かれた。気だるく振り向くと、人体模型と骨格標本が、私の両肩を掴み、『うんうん』とでも言いたげに

しきりに頷いていた。

元はといえば……元はと言えばああああああ……！！
ぶちん。

「お前たちのせいだろおおおおおおおおおっ！！」

『impact！』

ドパン！

『マー！？』『ヒョー！？』

衝撃波を叩きつけた。

今更だが、無様に怯えていたついさっきの自分の姿を思い出す。

ああ、みつともない。超みつともない！ たかが理科の教材ごときに！

萎えていた闘志が、モリモリと鎌首をもたげてきた！

『魔力値、最大まで回復……』

レイジングハートの、若干呆れたような声は聞き流しておく。

「そう……そんなに遊びたいんだ？」

じゃきつ。レイジングハートを突きつける。

『マツ……』『ヒョツ……』

じり……

人体模型と骨格標本が、無表情のまま後ずさった。

ふふ、ふふふふ。何をそんなに怯えてるのかな？

「遊んであげるよ……！！」

『Shooter』

術式選択・シューター！

魔力スフィア、形成。数は、六！ フル回転！

「シューーーーーー！！」

トトトトト！

連射された魔力弾は、正確に二体の獲物に肉薄し……

『マツ！』『ヒョツ！』

避けられた。

だけど、それは予想済み。

私が今の段階で行使できるのは、一つのタスクにつき三つが限度。そして、私のタスクは最大三つ。三発〜九発を発射できる計算だ。

足元を狙った一発を、それぞれ飛び上がって避ける。飛び上がり、天井に張り付こうとした所を、さらに一撃！

ドンッ！

天井で魔力弾が弾け、二体を宙に躍らせる。そこに、残り二発のシューターを打ち込んだ！

「シューーーーーー！トーーーー！」

ガンッ、ガンッ！！

『マーーーーー！！』『ヒョーーーーー！！』『ヒョーーーーー！！』『ヒョーーーーー！！』

人体模型の心臓部分と、骨格標本の頭蓋骨に着弾！
封印されてたまるか、と動き出す二体の暴走体。

『ring bind』

シューターの行使に割り振っていたタスクの一つを、拘束魔法に切り替え。リングバインドで四肢を拘束。もう一つのタスクで、封印魔法を発動！

「『不屈の心は』」

二体が、逃げようともがく。

「『この胸に』！」

浮かび上がる、シリアル20とシリアル17。

「ジュエルシード、シリアル20、シリアル17……封印！！」

桜色の光が、三階の廊下を一杯に満たし……

がしゃん、と床に投げ出される二体。意外に重いそれを、何とか理

科準備室に押し戻す。

「何か……掴めたかも」

今日のこの戦闘で、確かな手応えを感じた。がむしゃらで、行き当たりばったりだった今までの戦い方に、確固たる『芯』が通ったような、そんな感じた。まだそれが何なのかはつきりはしないが、一歩進んだことは間違いない。

「八代さん、葉山君」

さて、後片付けだ。

八代さんと葉山君を揺り起こす。二人とも、単にショックで気絶していただけだったらしい。

「二人とも、立てる？」

「は、半分こ怪人が！」「無機質な坊ちゃん刈りが！」

……あー。これは、トラウマになるな。抱き合って、がたがたと震えている。

「何のこと？ そんなの、見てないよ？」

すっとぼけた顔を作り、首を傾げてみせる。

二人は納得しかねているようだったが……あんな、非常識極まりない現象、受け入れられるはずが無く。

「夢……だったんだよね」

「そうだよ。いくらなんでも……」
よし。

「そろそろ帰ろう？ もう時間も時間だし……」

薄暗い廊下の向こう、くたびれたスーツ姿の先生が見えた。寝起きなのか、少し目がぼんやりしている。多分、騒ぎを聞きつけて起き出してきたのだろう。私達を呼び止めるように手をこちらに差し出し、緩慢な動きで近づいてきた。やばっ！

「行くよ、二人とも！」

「お、おう！」「急げ急げ！」

顔を見られないように、斜め下を見ながら疾駆する。

あんな先生、この学校にいたかなあ……？

「……ってことがあってね」

夕食の席。俺は、なのはの話聞いていた。それによると、胆試しの最中、なんと、なのはの通う小学校に潜伏していたジュエルシードが発動し、それを封印したらしい。

「それでね、戦い方がわかったんだ！」

嬉しそうに笑顔を振りまく。やっぱり、なのはには笑顔が一番似合う。

掴んだ答え。それは……

「まずは『小さいの』で敵の逃げ場を塞ぐ！」
手を横に風ぐ仕草をする。

「追い詰めてから、『大きいの』でとどめの一撃！」
ぐっ、と拳を握り、前に突き出す。

『マスターの適正は、砲撃魔導師です』

机の上に乗ったレイジングハートが、全員に聞こえるように言った。

「遠距離型ってこと？」

『平たく言えば。ただ、マスターの防御力にはまだまだ伸びしろがあります。近接特化型の攻撃にも耐えられるようになるでしょう』

よくわからんが……とにかくなのはは、方向性が定まったらしい。
「なあ、俺は？ やっぱり……その、近接特化型とかいうのになるのか？」

一応、シミュレーションではバレットという射撃魔法を使ってみた。だが、命中率は散々なものだった。四発に一発、的の端っこにでも掠ればいい方で、あ

とは見当違いの方向へ飛んでいきレイジングハートに呆れられた。とはいえ、散弾銃のようにばら撒くことでの的を粉碎できたのだが。

あと、魔法という程でもないが、身体の表面や内部に魔力を循環させることに關しては、なのはの数倍は緻密に行えているらしい。要は、スクールとバイキルトは出来るが、メラ一発も打てない……ということだ。どう見てもスタンドアロンの前衛タイプだろう。

『一応は、それを目指しましょう』

「一応……？」

気になる言い方をする。俺に、それ以外に適正なんてあるのだろうか？

『まだ、ヒデトの正確な適正は判明していません。ですので、一応です』

翌日。

珍しいことに、担任が学年主任に怒られていた。学年主任は年配の人で、締めるところはしっかり締める、真面目な人だ。

「あなたは！ いつまで学生気分でいるつもりなんですか！」

「すみません、すみません！」

八代さんを見つけたので、聞いてみた。

「先生、昨日の宿直だったらしいんだけど、朝まで居眠りしちゃったんだって」

宿直の意味無いよね、それ。

はたと気付く。

「……じゃあ、昨日のスーツの先生は……？」

「……………」

返事は無い。ただ、顔がさーっと青くなっていく。あはは……まさか、ね。

金曜日のことだった。

「高町さん。明日、サッカー見に行かない？」

八代さんだ。最近、話をするようになった。……二人で話していると、結構な頻度で葉山君が割り込んでくるのが面倒くさいが。今は、サッカー部の朝練でいい。

「健太のいるクラブが、近くの学校のクラブと練習試合するの。それで、みんなで応援に行かないかって話になって」

一応、クラスメイトの私にも声を掛けた、ってことかな。それなら別に、行かなくてもいい。今はジュエルシードの探索と、魔法の練習に忙しい。今こうしている間も、マルチタスクで模擬戦を行っているのだ。

「悪いけど……」

私は行けない。そう言い掛けたのだが、何やら汗臭い葉山君が席に駆け寄ってきたせいで言いそびれてしまった。

「あ、あのさつ、俺の試合、見に来てくれるよな!? な!?!」

う……暑苦しい。何でそんなに私に来て欲しいんだろっ、この人もう、さつさと断ってしまおう。

「悪いけど、用事があるから行けない」

笑顔は作らず、真顔でスッパリと言う。葉山君は一瞬凍りつき、

「な……何で?」と追いつがってきた。

「私も、その、練習しないといけないから」

魔法の、とは言えないが。まあ、スポーツなんて答えたら「一緒に練習しようぜ」とか、更に面倒くさいことになる未来が見えるので、適当に何か答えておこう。料理とか、裁縫とか……

「何の練習なんだ?」

ああ、やつぱり。えーと、女の子が習っていても変じゃなくて、尚且つ男子は絶対にやりそうもない習い事は、と……。

「……お料理」

これで行こう。

「料理? 自分で?」

普通の家庭なら、母親がやってくれることだろう。でも、私の場合は……って、違う違う。あんなの、もう思い出す必要は無いんだ。

私は、新しい二人の家族のためにお料理を作ってあげるんだから。

「ふうん……」

我ながら、言い訳が下手だ。こんなの、気付かれてしまつに決まつて……

「そっかあ……じゃあ、頑張つてな」

……あれ？

ああ、忘れてた。葉山君は、幼なじみの八代さんが全面的に認めるほどの……おバカさんだった。

「来ないんだ、高町さん」

八代さんのその時の表情は……何かおかしかった。残念そうな表情の影に、どこか……暗い喜びが見え隠れしていた。

「……？」

けど、それがどういう意味なのかは、分からなかった。

目の前に現れる、マネキンのように無機質な人影。出現箇所は全くのランダムだ。

「はっ！」

目の前に現れた一体を殴り壊すと同時、背後に現れたもう一体に後ろ回し蹴りを浴びせる。反撃してくることは無いが、なにぶんペースが速い。

「このっ！」

今度は、少し離れた場所に現れた。一步間合いを詰め、前蹴りで胴体を捕らえる。

ただの格闘訓練ではない。このマネキンは、魔力を込めた攻撃以外は通らないように設定されている。筋力だけでは破壊できない。一発一発に、一定の魔力を込めて攻撃しなければならぬのだ。簡単に聞こえるかもしれないが、これが結構難しい。

ひよこっ、とマネキンが起き上がる。今のは、魔力を纏わせるこ

とに失敗してしまった。

「これで……二百！」

最後の一体を、正拳突きで破壊。

「はあっ、はあっ……タイムは!？」

傍らのユーノに聞く。没頭する余り、時間を計っていたマルチタスクを解除してしまった。

「四分二十秒……点数で言えば、七十点」

「あ……くそっ！ 厳しいなあ……」

どうつ、と地面に背を預ける。場所は、町を一望できる展望台。週末にでもなれば、カップルだの夫婦だの親子連れだの人が絶えない。だが、平日の真昼間ともなれば、人通りは極端に少なくなる。そこにユーノが結界を張れば、広々とした練習スペースが出来上がるって寸法だ。ユーノ曰く、『本調子だったら、あのアパートの中を五十倍くらいの空間にもできるんだけどね』とのことだ。便利だな、魔法って。

「それに、マルチタスクの維持が出来てないよ」

うーん……それなんだよなあ。六つ同時に展開した時は、一瞬で意識が飛んでしまった。それで今は、最低ラインの二つで練習している。しているのだが……どうにも、うまくいかない。まあ、練習あるのみだ。

「悪い。もう一回頼む」

起き上がりかけ……ユーノのちっこい手に止められた。

「少し休もう。適度に休憩を挟まないと、逆に効率が落ちる」

空気が変わった。薄く周囲を覆っていた膜のようなものが、ふつと消えうせた。ユーノが結界を解除したのだろう。近くのベンチに腰を下ろし、水筒に入れてきたスポーツドリンクを飲む。

p r r r r

ベンチの上に丸めて置いてあった上着から、軽快な電子音が響いた。携帯電話だ。取り出し、通話ボタンを押して耳に当てる。発信

者は、見なくても分かる。

『あ、秀人さん。今どこにいます?』

なのはが、少し弾んだ声で聞いてくる。

「高台で練習してる。もう少しで帰るよ」

「ねえ、秀人」

「んん、何だ?」

「念話があるのに、どうしてわざわざ『電話』を使うんだい?」

あー、そうだよな。普通、そう思うよな。電池残量は気にしないといけないし、圏外になることもあるし、金掛かるし。

「ああ……そういや、お前にはまだ教えてなかったな」

ユーノになら、話してもいいだろう。なのはと、初めて会ったときの話を。

「秀人さーん!」

丘の階段を登り終える。頂上の展望台。そのベンチに腰掛けた秀人さんと、その横にちょこんと座ったユーノくんが見えた。はっ、はっ、と少し息切れしてしまう。

「大丈夫か?」

苦笑し、スポーツドリンクの入ったカップをくれた。

「はっ、だい、大丈夫。ありがと……」

ぐいっつと一気飲み。ああ、生き返る……

「ずっとここで練習してたの?」

秀人さんの隣に腰掛け、町並みを見渡す。丁度夕焼けの時間らしく、町がオレンジ色に染まっていた。

「いや、練習は結構前に終わった。ユーノと話してたらこんな時間になっちまった」

「どんな話?」

「なのはと初めて会った時の話」

ああ、あのことが。確かに、ユーノくんには話しておいてもいい。「なのは……」

ユーノくんが、少し同情交じりに何かを言おうとして、すぐに押し黙った。

「別に、遠慮しなくてもいいよ？　もうあんなの、何とも感じないから」

これは、本当に本音。私は今、間違いなく幸せなんだから。

順風満帆とは言えないけど、魔法も、日常も、それなりに上手く行っていた。

けれど……それは、ただの錯覚だった。入っていたのは、小さな亀裂。それが、徐々に広がりつつあることに、私はまだ、気付いていなかった。

第四話（後書き）

原作のなのはが好きな人ごめんなさい。

今回は、ちょっと辛いお話になります。

第五話

なんで、こんなことになっちゃったんだろう。

「シューター！」

覚えたての射撃魔法を駆使し、うねうねと迫り来る植物の根を破壊する。だが、

しゅるるる……！

まるで、ビデオの逆再生か早送りを見ているようだ。打ち砕かれた植物の根。それが、まるで数十年分を一気に成長するように再生し、変わらぬ勢いで迫ってくる！

「はっ、はっ……！ もう一発！」

ドオン！

轟音と共に、魔力弾が残る根を一掃する。だが、

駄目だ、キリが無い……！

「このおおっ……！」

ギユキキキツ！

タイヤが限界ギリギリで、波打つアスファルトの路面をグリップする。私の顔面めがけて伸びてきた根は、ギリギリのところを外れた。

「秀人さん！ 一旦距離を置こう！ あの、高台まで！」

後部座席に立って乗った姿勢のまま、ハンドルを巧みに操る秀人さんに、半ば怒鳴るようにして立案する。

「了解だ！」

瞬間、強烈な遠心力が私の体を振り回した。必死に秀人さんの首に片腕を回し、落下を防ぐ。視界が百八十度回転し、それを認識する前に強烈な加速。

ヴアアアアアアアッ！！

バイクのエンジンが悲鳴を上げ、時速百キロオーバーの世界に突入する。

『protection!』

バキバキバキッ！ バチイン！

進行方向にバリアを張り、目の前に迫っていた根の集合体を弾き飛ばす。だが、攻撃は止まない。二度、三度と、バリアに巨木のような根がぶつかり、私の体を揺さぶる。

「ねえ、どうして!?! どうしてなの!?!」
後ろを振り返る。

町中を覆い尽くした樹木。ビルの外壁を突き破り、舗装された道路を掘り起こし、駐車してあった車を貫いている。

その、どこかにいるであろうジュエルシードの宿主に対して、声を張り上げる。

「聞こえてるんでしょ!?! …… 八代さん!」

異常な成長を続ける樹木はただ沈黙し、ひたすら私に攻撃を仕掛ける。

明らかかな憎悪を宿して。

話は、数時間前に遡る。

自動ドアを潜ると、そろそろ梅雨入りを予感させる湿った空気が吹き付けてきた。

「これで全部だな」

横で、肉や魚や野菜で、ぱんぱんに膨らんだエコバッグを持った秀人さんが確認する。

「うん、これでだいたい一週間分だよ」

これだけあれば、一週間は余裕で食べていけるだろう。

秀人さんの冷蔵庫は、元々一人暮らしをしていただけあって、本当に小さかった。つまり、中身もそれに準じた量しか入っていないかったわけだ。家族が二人も増えれば、あっという間に底を突いてしまふのは自明の理。

近所のスーパーまで徒歩十分。アパートが割と便利な立地にあつて助かった。

秀人さんの両手が塞がっているのに対して、私は手ぶらだ。気が引けて、それとなく一袋奪おうとしたが、のらりくらりとかわされてしまふ。

「今夜のおかず、どうしようかなあ……」

せめて、美味しい手料理で恩返しをしよう。あまり贅沢はできないが、できる範囲で。

そして、家まであと数分といった所で、サッカーのユニフォームを着た少年と、私服姿の少女の集団とすれ違った。

「あ、高町!？」

……ん？ 誰だろう。

振り返ると、集団の中に二人、見知った顔を見つけた。

「……あ、八代さん、葉山君」

ああ、そういえば、今日だったっけ。サッカー部の練習試合。すっかり忘れてた。

「偶然だな！ どこ行くんだ？」

集団の中から出てきて、こっちに来た。ああ、嫌な予感しかしない……

「今から帰るところ」

先手を打っておかないと。このままじゃ、なし崩し的に付き合い合わされる。

「そういつわけだから。じゃあ、試合頑張っつてね」

愛想笑いでそう言い、踵を返す。特に嫌いな人というわけではないけど、サッカーには興味が無い。興味が無いものを見て、時間を

浪費したくはない。

「あ、あのさ、折角だし、来てくれよ！」

「ひゅー！」「ハヤマ、大胆！」「おお、直球で行ったぞ！」

他の男子がざわめき、女子はきゃーきゃー言いながらこっちを見て
いる。

……はあ。何て言って断ろう。

『今からお昼ご飯だから』。よし、これで行こう。秀人さんと一日
中過ごせる貴重な週末なんだ。他の用事は、後回しにしよう。

「あ、もしかしてお昼まだ？」

まさかの援護射撃。八代さんに先制された。

「あ、うん。だから……」行けない。

「私たち、こいつらの分までお昼ご飯持ってきてるから、一緒に食
べない？ 女の子一人分くらいなら何とかなるし」

「……えーと」

どうしよう……今度こそ、断る理由が無くなっちゃった。

こつこつこの、ありがた迷惑って言うんだっけ……昔の人は、うま
いことを言ったものだ。

『秀人さん……どうしよう』

念話で、秀人さんに助けを求めた。

『さすがにこれで断ったら、月曜日から気まずいんじゃないか？

休みは明日もあるんだし、ちよつとだけ見て、昼飯だけ食べたらず
ぐ帰ってくればいいよ』

逡巡すること数秒。

「……わかった、行く」

私は、同行することにした。はあ……せつかくの休日が……

「ねえねえ、今日は誰の応援する？ 佐々木君？ それとも、堀川
君？」

……何で、チームプレイのサッカーで、特定の誰かを応援するんだ
ろう。チームを応援するんじゃないの？

「……………」

なぜかユニフォームを着た数人が聞き耳を立てている。

「えーと……………チーム全員かな。ははは……………」

愛想笑いの仮面を被り、意味不明な話にも相槌を打つ。ああ、早く帰りたい……………

「そつかぁ……………私はね、佐々木君の応援するの！ お弁当も作ってきたんだ！」

耳元に顔を寄せられ、こしょこしょと喋られる。こそばゆい。

八代さんは、数人の女子に囲まれていた。

「ノゾミ、アンタはやっぱり葉山？」

「……………うん」

すこしはにかみ、控えめな笑顔を見せる。手には、やけに大きい包み。話からすると、あれは葉山君に作ってきたお弁当だろう。幼馴染だけあつて甲斐甲斐しいなあ。

そして、市民運動場に到着した。反対側のコートには、赤いユニフォームを着た少年が集まっている。あれが対戦相手かな。キャプテンらしき人と、葉山君が挨拶をする。

葉山君がキャプテンなんだ、このチーム。大丈夫かな？

そんな、ちよつと失礼なことを考えてしまふ。いや、だって……………
葉山君だよ？ 誰かに指示を出すなんて、出来るの？

審判のおじさんがホイッスルを鳴らし、試合が始まった。

ボールが蹴りだされた途端、女子が爆発したように大声を張り上げ始めた。

「堀川く……………ん！！ いけ……………！！」「佐々木！ 負

けたら承知しないぞー！！」「小俣！ 走れー！！」「アホ葉山

！！ 抜かれたら昼飯抜きだからね……………！！」

み、耳がキンキンする……………！ 私も、申し訳程度に腕を振り、応援する。

「が、頑張れ……………負けるな」

ぴたっ。

あれ？　なんか、数人の男子の動きが止まって……

「うおおおおおおおおおっ！」

「ボールをよこせええええええっ！」

「負けるかああああああああっ！」

なんか、いきなり動きが良くなった。どうしたんだろう。

あ、葉山君がボール取った。こうして見ると、なかなか上手だ。キヤプテンは伊達じゃないってことかな。赤ユニフォームが葉山君に接近し、ボールを奪おうとする。それを、時々足を蹴られながらも回避し……

ばすっ！

試合開始から五分。葉山君の蹴ったボールが、相手のゴールネットに吸い込まれた。

「……きゃー……！！」「……」

黄色い声援の大合唱。だが、それをかき消す大音声に向こうのベンチから響き渡った。

「くおらああああ！　負けたら承知しないわよ！？　シャキッとせんかー！！！」

相手側の応援をしていたのは、気の強そうな、金髪の女の子だった。

それにしても、すごい。あんな遠くから、こっちにハッキリ聞こえてくるような声が出せるなんて。

「……あれ？」

何故か既視感を感じる。もしかして、どこかで会ったことがあるのかな？　あんな派手な髪の毛、一度会ったら忘れそうに無いけど……って、私が言っても説得力無いか。未だにクラスメイトの顔と名前が一致していないんだし。

金髪の子に気合を注入されたのか、赤ユニフォームが巻き返してくる。そこから先は、本当に白熱した試合だった。これ、本当に練

習試合？と聞きたくなくなるくらいだった。最後のほうでは、私が、無意識のうちに立ち上がって応援していたのだ。

一点入れ、一点返され、ゴール前でフェイントの応酬。シュートを転がりながら止めるキーパー。貪欲にボールを狙うフォワード。手に汗握るといふ言葉を実感したのは初めてだった。そして、試合は三対三のまま延長戦にもつれこみ……

ピビィー……！！

審判の吹いたホイッスルによって、唐突に終わりを告げた。公式戦なら、ロスタイムとか、PKで決着を付けるんだろうけど、あくまでも練習試合。引き分けて終了みたいだ。

「……はあ」

気が抜けて、ストンとベンチに座り込んでしまう。引き分けだったけど、見に来た価値は十二分にあっただかもしれない。うん、サッカーを少し見直した。

葉山君たちは、向かい合い「ありがとうございます！」と礼をし、ベンチに戻ってきた。汗まみれ泥まみれだが、妙に爽やかな印象がある。なるほど。これなら、他の女の子達が夢中になるはずだ。「おつかれー！」「惜しかったね！」

女の子たちは、口々に賞賛の言葉を口にしながら、タオルや飲み物を渡す。

葉山君は、八代さんからタオルを受け取り、顔をガシガシ乱暴に拭いていた。遠巻きに眺める私を見つけ、歩いてきた。

「あ、健太……」

八代さんが下の名前で呼び止めたが、葉山君は片手を挙げただけでこっちに来てしまった。うん……ちょっといただけない。

「なあ、見ててくれた！？俺、二点入れたぞ！」

興奮冷めやらぬといった様子で詰め寄ってくる。汗臭いのは、頑張った証みたいなものだ。嫌悪感は何に無い。

「うん、見たよ。すごかったね」

「だろ！？」

嬉しそうだ。多分、滅多に話すことができないクラスメイトとの会話が新鮮なんだろう。

「あ、八代さんがお弁当作ってくれたんだって。食べてきなよ」

さつき、葉山君が離れてしまったとき、すごく寂しそうな顔をしていたから。柄にも無く、お節介を焼いてしまった。

「……ッ!」

それは、ほんの一瞬のことだった。瞬きもすれば見逃してしまうような、ほんの一瞬。

八代さんが憎しみに満ちた目で私を睨んだのと同時。

そのポケットから、あの、禍々しい波動を感じた。

「……え？」

だが、その気配はすでに無い。……勘違い、なのかな？

レイジングハートに頼もうにも、ユーノ君に機能を制限されているため細かい探査ができない。とにかく、ユーノ君と連絡を取ろう。不自然に思われないように、念話で。

「ユーノくん、ちよつといい？」

「なのは？」

「あのね……」

さつきの出来事を話す。

「……だから、制限を解除してほしいの」

「わかった。それじゃ、あの交差点まで来てくれる？ 直接接触すれば、解除できるから」

次は、秀人さんだ。

「秀人さん、私の電話を……」 『了解だ』

聞いていたんだろう。言い切る前に、私のポケットから、軽快なメロディが流れた。ポケットをまさぐるような動作を繰り返し、周囲の目が十分に集まったところで、電話に出る。

「はい、もしもし」

『それっぽいこと言って、抜け出してくれ』

急用が出来たフリをしてこの場から離れる。そうして、ユーノクんと落ち合ってレイジングハートの機能制限を解除。ユーノクんの結界で、八代さんごと一帯を隔離。封印魔法でジュエルシードを封印。

「うん……うん、そう、わかった」

ぱたん、と携帯電話を折りたたむ。

「ごめん、急用ができた。お昼ごはん、一緒に食べられそうに無い」

それだけ言い、立ち上がる。まだ状況がのみこめていないようだった。好都合。

「それじゃあ、また月曜日にね」

踵を返し、駆け出した。

八代さんが持っているであろうジュエルシード発動の鍵は、葉山君の行動が、八代さん以外に向けられることらしい。嫉妬を増幅しているのだろうか？ 仲のいい幼なじみが、自分以外の誰かと仲良くしているのが嫌でたまらないとか……でも、他の女の子と話していても、発動の兆候は無い。

（あれ？）

じゃあ、何で私の時だけ……

（ああ、もう！）

グダグダ考えていても面倒くさいし埒があかない！ さっさと封印して、終わらせちゃおう！

『ユーノくん、今どこ？』

『今、秀人と一緒にそっちに向かっている！』

『あと二分もあれば到着だ。その場で待機しててくれ』

『わかった』

見通しのいい交差点で立ち止まる。

えっと、家は向こうだから……ここにいれば、すぐに見つけてもらえるはず。うん、順調だ。この調子なら、本格的に暴走する前に封印できるかもしれない。とにかく、あと一分か二分あれば……

「ちよっと、待ってくれよ高町！」

「……はい？」

……あの、葉山君……何で、ここにいるの？

呆然と立ちすくむ私の前で立ち止まる。

「なあ、何で帰っちまうんだよ？ 急用って……いきなりすぎるだろ？」

……えーと、つまり、急用の内容を聞きに、わざわざ走って追いかけてきたと？

「……いきなり入る用事。人はそれを急用って言うんだよ。それで、何か用？ 急いでるんだけどなあ……」

計画をぶち壊しにされたせいで、ついイライラとした口調になってしまう。

葉山君は、捨てられた子犬のような目で私を見る。

「……なあ、高町は……俺のこと嫌いなのか？」

何で、こんな脈絡の無いことを言うのだろう。好きか嫌いかで言えば、今、間違いなく嫌いだよ。

「そんなことより、戻りなよ。八代さん、きみのためにお弁当を生懸命……」

「お、俺はッ！」

神様というものがいるのなら、それは、間違いなく底意地が悪くて、根性が腐っているに違いない。

「健太……！ みつけ、」

八代さんが、葉山君を追いかけてやってきて。

『なのは、お待たせ……!』
秀人さんとユーノくんが、バイクで駆けつけてきて。

「高町のことか、好きなんだっ!」

葉山君が、その一言を口にした。

どさっ。

きゅいっ。

葉山君が言い終わると同時。

追いついてきた八代さんが、お弁当を地面に散らかし。

秀人さんとユーノくんが乗ったバイクが、路肩に停まった。

……えーと、今、『好き』って言われちゃったの？ えっと、『好き』……友達としてとか、家族としてとか、いろいろあるけど……この場合は、アレだね。ライクじゃなくて、ラブの方。……ちょっと待て。ヤバイ!

「……………」
八代さんは、無言だ。無言で、俯いている。ただ、そのポケットからは、青白い光が段々と……!

それはそうだ。自分の好きな人が、自分以外を好きでいることを、目の前で宣言されてしまったのだから　!

「なのは!」

レイジングハートをユーノくんに渡す。

『制限を解除しました。全機能の使用が可能です』

「早速でごめん! レイジングハート、セットアップ!」

『Yes , master . Stand by ready , set up!』

バリアジャケットを纏い、秀人さんが私に並び立つ。そして、ユーノくんが結界魔法を使う……その、数秒前。

八代さんのポケットからあふれ出した光が、周囲を覆い尽くした。

カツ！！

周囲が、まるで花火を爆発させたかのように白く染まる。

直前にバリアを張っていなかったら、目を焼かれるところだった。

「……間に合わなかったか」

秀人さんがヘルメットを脱ぎ捨て、グローブに魔力を流し、補強する。

「二人とも、気をつけて！ 今回ばかりは、シャレにならない！」

こんなに切羽詰ったユーノくん、初めて見た。だけど、そうやってしまうのも仕方が無い。ジュエルシールドは、持ち主の願いが強ければ強いほど、強大な力を発揮する。

八代さんという、人間の依代を得たジュエルシールドは、きっと……

……！

「離れるッ！」

秀人さんの一喝と共に、全力で後ろに飛び退く。

ズガンッ！！！！

数秒前まで私が立っていた場所を、何かが決った。もし飛び退いていなかったら、砕かれていたのはコンクリートの道路ではなく、私の身体だった。

煙が晴れ、目の前に見えたのは……

「……木？」

だった。だが、もちろん街路樹なんかじゃない。数秒ごとに枝を伸ばし、根を伸ばし、葉を茂らせる、巨大な樹木だ。その幹には、半透明の液体に、まるで琥珀のように封じ込められた……

「八代さん！ 葉山君！」

ぼじっ、ぼじっ………！！

地面を貫いていた根が抜け、その尖った先端を私たちに向け……

『barrett!』

ガガガン!

無数の弾丸に、粉碎された。

「なのは、気をしつかり持て!」

手元にピンポン玉サイズの光弾を数個同時に出現させ、発射した。
今のは、秀人さんの新しい魔法なんだろうか。

「あの二人を助けたいなら、これ以上成長する前に止めるんだ!」

「……は、はいつ!」

そうだ。ポケットと突っ立っている暇は無い!

「レイジングハート! シューター!」 「こっちはもう一回、バレットだ!」

『All light・Shooter and barret
t』

レイジングハートの先端に、合計五つの桜色の光弾。秀人さんは、
四つの空色の光弾。

「シューター!」

「ファイア!」

合計九つの射撃魔法が帯を引いて発射され、

ドガガガガガガッ!

全てクリーンヒット!

巻き上げてしまった粉塵のせいで、状況が分からない。けど、多

分……

「……」

レイジングハートを握る手に、力をこめる。秀人さんも、構えを
解かない。

グオンツ!

やっぱり、まだだ!

横風ぎに繰り出された枝の一撃を、バリアで逸らす。

「はあああつ!」 『impact!』

バガアンツ！

秀人さんの回し蹴りが命中し、枝を真っ二つに割った。

「よし、通った！」

……いけない！

「秀人さん、まだ！」

折れた枝の先から、繊維がしゅるしゅると集まり、

「回復しやがった……」

これまでの暴走体にも、ある程度の再生能力はあった。けど、こんなに早く、あれだけの損傷を回復できるなんて……

そうこうしている間に、琥珀のように固められた二人の姿は、幹の中に隠れてしまった。

「あっ、待って！」

静止も虚しく、ズブズブと地中に潜行してしまう。

「ユーノ！ あの暴走体、どこに行ったんだ！？」

「わ、わからない……！」

「ええ！？」

わからないって……見つからないの！？

ユーノくんは焦り、苛立ったように声を荒げた。

「この周囲十キロ全域から、ジュエルシード反応が出てるんだよ！」

「なっ……んな、馬鹿な話が！」

同時。

メキメキメキ……ベキッ、ボコツ……バキッバキッ！！

近くから。遠くから。アスファルトを捲り上げる音が。コンクリートを貫通する音が。ガラスを砕く音が。不協和音のように、耳に入ってきた。

「何……何なの！？」

そして、見た。ビルが立ち並び、大小さまざまな商店が軒を連ねる繁華街が……枝に、根に貫かれ、葉を茂らせ……『森』に、覆われていくのを。

ズズン、と一際重い音がして、『森』は成長を止めた。

「……………」
「……………」
あまりの光景に、言葉を失ってしまふ。コンクリートの町並みが、いきなり大自然に埋もれてしまった。

もう、どこに本体があるのかすら分からない。ただ呆然と、『森』を見つめる。

『ずるい…………』

「え？」「何だ、今の？」

ドーム状の『森』に、声が反響する。その声は……

『なんで…………健太は…………』

「八代さん!？」

もしかして、まだ意識が残っているのでは。そんな私をあざ笑うように、ざわざわと『森』が揺れる。季節はずれの森林浴。だけど、感じるのは息苦しい圧迫感と、突き刺さるような敵意!

「なのは! こっちだ!」

秀人さんが、停めていたバイクのキーを回した。

キュボツ、と小気味のいい音を立て、エンジンが再び火を点す。

「乗れ!」「はい!」

乗るといふより、半ばしがみ付くようにしてシートに飛びついた。

『アンタを選ぶのよおおおおおツツツツ!…………!』

枝が。根が。葉が。『森』を構成する全てが、狂ったように殺到してきた!

「このおおおおおおつ!」

秀人さんがヤケクソ気味に放ったバレットが、進行方向の敵のみを吹っ飛ばす。

ああ、本当に。なんでこんなことになってしまったんだろう。

ついこの間来た丘で、バイクを止めた。

見下ろす町は。海鳴市は。『森』に覆われてしまっていた。

「ユーノくん、町の人たちは……？」

それが一番の気がかりだった。

「それは、一応大丈夫。位相をずらして、半径十キロの一般人は隔離したから」

よかった……せめてもの救いだ。

「でも、ごめん。建造物は間に合わなかった……もし暴走体を封印しても、建造物は元には戻らない」

「私の所為だ……」

ぐしゃっと前髪を掴む。

ユーノくんに制限をかけられてしまうような無茶をしなければ、未然に防げた筈なのに。

「違う」

「だけど、秀人さんとユーノくんは、それを否定した。」

「僕が、遠隔操作で制限を解除できるようにしておけば」

「俺があと少し早く到着していれば」

「……」

こんなところで、責任の所在を確かめても仕方無い。今は、とにかく暴走体を封印しないと。また成長を始めたら、今度は人が巻き込まれちゃう。でも、どうすれば……？ あの広大な『森』の中に潜んでいるジュエルシードを、ピンポイントで見つけ出す方法なんて……方法？

「あ」

閃いた。

「レイジングハート、『これ』、出来る？」

頭の中にイメージを浮かべる。それを、念話の要領で秀人さん、ユーノくんにも見せる。

『可能です』

レイジングハートは、簡潔に答え、

「駄目だ。危険すぎる！」

ユーノくんは反対だった。確かに、分の悪い賭けだから……これで、秀人さんにまで反対されたら、この案は没だ。

「よし、やってみろ」

「秀人さん……！」

よかった！

「秀人、わかっているの？ 下手したら、怪我じゃ済まないんだよ」

ユーノくんは、静かに聞く。秀人さんの真意を確かめるように。

秀人さんは、つかつかと歩いてきて……ぼん。私とユーノくんの頭に手を置いた。

「ちょ、何！？ 何！？」

私は単純に嬉しいけど、ユーノくんは戸惑っている。

そして、秀人さんは私たちの目をまっすぐに見据えて、言った。

「ユーノもなのはも、俺が守る」

「……」

「だから、大丈夫だ」

さすがに、ここまで言われたらユーノくんとして飲むしかない。

渋々といった様子で、ユーノくんはトランクボックスに入った。

「行くぞ！」

秀人さんがバイクに跨り、エンジンを吹かす。

(もう、これ以上被害は広げさせない！)

バリアジャケットのまま後部座席に座ると同時。頼もしい排気

音を轟かせ、バイクが走り出した。

がつん、がつんと、リアタイヤがコンクリート片を踏んで振動が響く。俺もなのはもノーヘルだが、それを見咎める者はいない。

目の前に、茶色と緑色で構成された壁が見えてきた。言わずもがな、暴走体である。

最初に比べたら成長速度は亀の歩みだが、それでも確実に広がっている。

「……防壁、展開」『protection』
目の前に、薄い空色のバリアを張る。バイクを直接ぶつけるわけには行かない。

ズボツ！ と沈み込むような音を立て、バリアの先端が壁に突き刺さる。一瞬の停滞。そして、すぐに抵抗がなくなる。何せ、俺のバリアの強度はレイジングハートのお墨付きだ。たかが樹木如きで阻めるほどヤワじゃない。

『高町いいいいっ！！』

当たり前だが察知され、すぐに枝やら根やら葉やら、無数の攻撃が襲い掛かってきた。

タイヤのグリップ力限界まで車体を倒し、横滑りするように攻撃を潜り抜ける。カウルが地面と接触し、ガリガリと削れた。

一つ目の問題は、この広がり続ける『森』をどうするか。ユーノの全力の結界は、直径

十キ口前後。それを上回ってしまったら、今度こそ最悪の事態になる。それに対して、な

のははこういった策を練った。

『八代さんの狙いは、私みたいなの。だから、あの中にいれば、あれ以上『森』が成長することは無いと思う』

確かに、あの暴走体に取り込まれた女の子は、やけになのはに固執しているようだった。標的が体内にいたとなれば、わざわざ狩場を広げる理由は無い筈だ。

二つめの問題は、ジュエルシード本体の場所をどうやって特定するか。この問題に関しては、なのはが新たに魔法を組むことになった。

『レーダーってあるでしょ？ あれは、音波を発信して、反射のパターンから敵の所在を割り出す機械なんだけど……それを、魔力でやってみる』

俺には魔力はあるが、それを形にする才能が無い。だから、なのはに任せるしかない。適材適所だ。

そして三つ目の問題は、どうやって問題その一とその二を両立させるか。敵陣のど真ん中で、全神経を集中して魔法を組むなんて、一人では不可能だ。そう、一人では。

『でも、今からその術式を組むと大体五分くらいかかっちゃうの。だから、私を乗せたまま、『森』の中を逃げ回って』

なのはが魔法を組み上げている間、俺がバイクで逃げ回り、ユーノが防御魔法で攻撃を防ぐ。これが可能だというのだから驚きだ。

ごん！ ごん！ と衝撃が走るたび、サスペンションが軋む。そもそも、オフロードバイクでないどころか、スポーツ走行には不向きなツアラーにこんな無茶な走りは想定されていないのだ。帰ったら、あちこちガタがくるだろうな……

『いなくなれええええええっ！！』

「ざっけんなあああああああ！！」

ギャツ、ギャツ、ギャツ！！

スラロームの要領で、地面から突き出してきた根を連続で避ける。その度に、俺の首に腕を回し、背中にしがみ付いたのはが大きく

揺さぶられる。だが、その目はずっと閉じられたままだ。転倒する恐怖も、不安も、微塵も感じさせない。静かに見えて、その頭の中では高度な演算によって魔法が構築されつつあるのだろう。額には玉の汗が浮かび、流れる風にきらきらと雫を振りまいている。

「でやあああああああつ！！」

ユーノも奮闘している。進路を妨害する枝を、無防備なのはを狙う根を、一つ残らず打ち落とし、逸らし、防ぎきっている。お陰でバイクの操縦に集中できている。避ける。跳ぶ。踏み越える。一瞬たりとも集中を途切れさせることは出来ない。

そして、永遠に続くかと思われた時間は、唐突に終わりを告げた。

「できたあつ！！」

なのはが、魔法を完成させた。

デバイスモードに変形させたレイジングハートを横風ぎに振る。

『wide area sarch』

「災厄の根源、姿を現せ！」

広範囲探知。探り当てることに特化された魔法が、解き放たれる。レイジングハートの赤い宝石部分が脈打ち……

ズババババババツ！！

無数の光が、解き放たれた。

光は波紋のように広がり、『森』全域に広がっていく。思わず、見とれてしまいそうなほど幻想的な光景。だが、ボケツと見ている暇なんてありはしない。その間も続く攻撃は、まるで、弱点を探られることを恐れているように数を増す。

『protection！』

空色。桜色。緑色。三色のバリアが重なり合い、攻撃を受け止める。全方位を覆うバリアは、既に底が見えている攻撃なんて通さない。

『何で、何で、何でええええッ！？』

子供の癩癩のように、精彩を欠いた攻撃が降り注ぐ。とはいえ、棍棒のようにぶつとい樹木だ。油断するわけには行かない。

「八代さん……」

ぼつりと、なのはが依代にされた少女の名を呟いた。

広大な『森』の中にいる、一人の少女を探す。砂漠に落ちた一本の針……ってほどでもないが、見つからない。

「……くっ」

探查魔法によって頭に入ってくるイメージは、膨大だ。数千枚の写真のスライドショーを、休まず見せられているような状態だ。車酔いのように、風邪を引いたときのように、頭が重く、目が回る。立体駐車場。オフィスビル。銀行。ホテル。廃ビル。個人商店。屋台。コンビニ。

「違う……！ どこに!？」

『高町いいいいっ!』

ぶおんっ、と風を切る音と共に、目の前に枝の一撃が迫る。

『protection!』

それは、目の前に展開された空色のシールドに阻まれる。

「フツ!」『impact!』

パンッ!

秀人さんに蹴散らされた、枝。今の一撃は、自動ではなく、八代さんの声を反映するように動いていた。なら!

「ユーノくん!」

「何!？」

「私が選んだ枝が根っこ、捕まえて!」

バインドの同時発動も、出来なくはない。だけど、より確実にするために……

「わかった!」

同時、探査魔法を一旦カットする。そして、大きく息を吸い……

「私は、葉山君なんて、大っ嫌い！」

恥ずかしさを我慢して、目一杯の大声を、張り上げた。

「な……なのは？」

秀人さんと、ユーノくんが目をぱちくりさせている。うつつ、お願いだから今は突っ込まないで！

「無神経だし、図々しいし、馴れ馴れしいし！ 何より馬鹿だし！」

「高町い……！ アンタ、何様のつもりよおおおっ！！ アンタに、健太の何がわかるってのよおおおおおお！！」

ざわざわと、八代さんの怒りに鳴動する。そうだ。怒れ。もっと怒れ！

「あんなのにご執心だなんて、八代さんも悪趣味だね！ 私はあんなのいらなから、八代さんに熨しつけて譲ってあげるよ！」

「高町いいいいいいいい！！ 絶対に許さないいいいいいいいい！！」

金切り声と共に、一際太い枝が一本、迫ってきた。これだ！

「ユーノくん、これ！」「了解！」

ジャリイイイイイイイン！

枝に、緑色の鎖が幾重にも絡みついた。ユーノくんが今の状態で発動できる拘束魔法、チエーンバインドだ。細いながらも強靱な鎖が幾重にも絡みつき、枝の動きを封じる。

「えええええいっ！」

そして、無防備になった枝に、レイジングハートを突き立てた。

「きゃあああああっ！！」

八代さんが、今まで上げてこなかった悲鳴を上げる。その悲鳴は、私の仮説が正しかったことの証明であり……同時に、クラスメイトの少女を傷付けた証明だった。

(……ごめん)

レイジングハートの先端を枝の中に固定する。そして、枝の中に直接、探査魔法を流し込んだ。

『ああ、ああああああっ！ 痛い、痛い痛い痛い痛いっ！』
その悲鳴が泣き声にシフトしても、止めない。

この枝は、他の自動攻撃タイプではなく、八代さんが直接操っている枝だ。だから、この枝の根元を探っていけば、必ずそこに八代さんがいる。

『目標を確認しました』

「……………うん、見えた」

核……………八代さんは、ここから数キロ先のマンションの屋上に根を張っている。

『森』が、収縮していく。ただの一箇所へ……………八代さんを守るように。

『来ないで……………来ないでよ……………』

弱弱しい声が、その中から漏れる。

あの殻に阻まれて、封印魔法は届かない。攻撃魔法で傷つけても、すぐに再生してしまう。……………なら。防御も、再生も無視して、一撃で中心まで撃ち抜けば良い。

「レイジングハート、モードチェンジ」

『All light master . Cannon mode』
『e』

レイジングハートが、変形する。仮想空間では何度も繰り返した手順だが、実際にやるのは今日が初めてだ。

丸みを帯びていた先端は、鋭い、槍のような形に。柄の部分の半ばには、拳銃のようなグリップとトリガーが。石突には、余剰魔力を排出するコッキングカバーが増設される。

レイジングハート・キャノンモード。

私に合わせ、砲撃能力に特化した新形態。

「秀人さん、ユーノくん」

「ああ、行くぞ」「任せて」

短いやりとり。そして、添えられる手。消耗戦を強いられてきた私たち三人の魔力は、もうほとんど残っていない。この一発を撃ち漏らせば、もう、封印する手段は無い。残った三人分の魔力を全部注いで……

「一気に、カタを付ける！」

『Divine Buster』

私の切り札。直射型砲撃魔法・デイバインバスター（神聖なる砲撃）。

インパクト、バレット、シューターより、格段に強力な魔法。これなら、分厚い壁もぶち抜ける！

『チャージ完了』

二人と目が合い……頷きあう。

「デイバイン………！！」

キュイイイイイイイ………！！

魔力スフィアが甲高い音を立て、一瞬だけ収縮する。それに抗うように、内圧を高め、高め、高め………！！

トリガーを、引き絞る！

「バスター………！！」

ズドオオオオオオオオン！！

魔力によって『筒』を形成し、その爆発のエネルギーを内部に通すことで指向性を与える。これが、直射型砲撃魔法。

真つ直ぐに突き進んだ砲撃は、植物の壁を呆気無く貫通し、八代さんが握っていたジュエルシールドに直撃。

「ジュエルシールド、シリアル10。……封印」

『sealing』

ぶち抜いた穴から、ジュエルシールドがゆつくりと出てくる。それがレイジングハートに吸い込まれた途端、町を覆いつくしていた『森』が、まるで霧のように消滅した。

……痛々しい傷跡だけを残して。

「ユーノ、行くぞ」「え、でも……」「いいから」

秀人さんが、ユーノくんを肩に乗せ、屋上の入り口に歩いていく。気を利かせてくれたんだろう。本当なら、私の口から言わないといけないんだろうなあ……

「ごめんね」

床に寝転がり、意識がはっきりしていない八代さんに話しかける。

「八代さんは、葉山君が好きなんだよね」

こくん。八代さんの首が、縦に振られる。

「葉山君が私にはかり気をかけるのが、気に入らなかつたんだよね」

こくん。再び、肯定。

「……でも、私は、葉山君の気持ちには答えられない。だからといって、葉山君の気持ちが変わるのは、ずっと先のことだと思っただけだから……」

胸が、痛む。自分がこれから言う言葉に、足がすくむ。でも……私が、言わなくちゃ。それが、二人の気持ちをかき乱した私に与えられる罰だから。

「絶交、しよう」

交わりを絶ち、お互いを空気のように無視し、一切の関わりを排

除する。それは一見、とても悲しいことかもしれないけど。彼女には、私の代わりはたくさんいる。私は、前と同じく一人に戻るだけ。私にとつても、彼女にとつても、傷を最小限に抑えることが出来る…… たった一つの、冴えたやり方。

「……それじゃあ、バイバイ。私の話し相手になってくれて、本当にありがとう」

精一杯の感謝を込めて、その頭を撫でる。明日からは、他人だ。

外に出ると、町は喧騒に包まれていた。

地震による被害だと勘違いされているらしい。とはいえ、抉れた地面や、どてつばらに穴が空いた自動車など、不自然な点はいくらでもあるのだが。それをどこか現実感の無いものとして見ながら、のろのろと歩く。

どろん、と、目の前にバイクが止まる。言わずもがな、秀人さんだ。回収してきたらしいヘルメットを、無言で差し出してくる。それを被り、後部座席に座る。

少し速めのスピードで、街を離れた。風が冷たくて、涙が浮かんで来た。きつと、風が目に染みた所為だ。目を瞑っても、まだ流れてくる。

ああ、本当に……風が冷たい。

ここは、とあるビルの屋上。海鳴市でも指折りの高層建築であり、最新の技術が惜しみなくつき込まれている。

その屋上で、一人の少女と、一頭の獣が佇んでいた。

「くふふふっ」

長い金髪を二つに結び、黒を基調とした装束に身を包む、整った容貌の幼い少女。その手には、容姿とは不釣り合いなほど無骨な、一振りの斧が握られていた。斧とはいっても、手斧ではない。長い柄に半月状の刃の、どちらかといえば薙刀のような得物だ。その斧を、重量を感じさせない動作で手元でくるくる回している。

「くふふふふっ……！ ねえ、見た？ 見た？ あの白い子、泣いてたよ？」

だが、その整った顔に浮かぶのは、子供が昆虫の足を引きちぎるような、残忍な嘲笑。

「ああ、見てたよ」

対して、答えるのは傍らに佇む狼。大型犬より、一回りも二回りも大きな体躯を包むのは、見事な緋色の毛並み。首元には鬣まであり、明らかに通常の種ではない。

「……よかったのかい？ あの子にみすみす渡しちゃって」

流暢な言葉で言語を話す。その声色は、女性のそれだ。

金髪の少女は、けらけらと軽い調子で笑いながら、斧を振り回す。いいのいいの。今日は、アレが見られただけで満足だよ。それに

「……」

ガツンッ！

唐突に、硬いものが砕ける音が響く。屋上の床に、斧が深々とめり込んだ音だ。

「どうせ、後で横取りしてやるんだし」

につこりと、天使のような笑顔で言う。

「くふふふふっ。それじゃ、帰ろうか。アルフ、バルディッシュ？」

「ぼんぼん、と狼……アルフの頭を撫で、踵を返す。

「ああ、フェイト」

『Yes sir.』

斧に据えられた、金色の瞳が明滅し、電子音声で答える。

そして、少女……フェイトは、笑顔のまま屋上から姿を消した。

第五話（後書き）

というわけで辛いお話&フェイトちゃん登場でした。

キャラ変わりすぎですね。優しいフェイトちゃんが好きな人、ごめんなさい。

なのはは、意外と男子に人気があります。

詳しい設定とかは、PVが一万を超えたら公開しようと思っています。
感想も受け付けていますので、よろしくお願いします。

第六話（前書き）

じわじわとPVが増えてきています。
ありがとうございます。

第六話

「……………」
目を閉じ、意識を集中。リンカーコア、起動。術式選択。誘導弾・アクセルシューター。

『Acceler shooter』

魔力循環。展開数、五つ。

ヒュン

目の前に、五つの魔力スフィアが出現する。よし、問題ない。

五つ全てに意識を配り……発射！

「シュート！」

トドトドトン！

五つの誘導弾はそれぞれ個別の軌道を描き、結界内を飛び回る一つの的に向かって突き進む。

「くっ……！」

さすがに、的が速い。なにせ、二体目の暴走体のデータを参考にしているのだ。遅い筈が無い。頭の中で、五つのルートをそれぞれイメージし、それをレイジングハートに伝える。軌道は問題ない。正確に標的の動きをトレースしている。だが、

（駄目だ）

的のスピードが速く、誘導弾が徐々に引き離されていく。このままじゃ、追いつかない。

（それなら！）

「アクセル！」

（加速せよ）。命令に従い、誘導弾のスピードが上がる。

「このっ、このっ……！」

だが、それは同時に操作の難易度をグンと上げ……暴走。

ボンッ！

「きゃあっ……！」

「きゃああああああああつ!?!」

上下左右に、揺すら、れ、ええええええええええ!!

「なのはっ!」

ぼふんっ。柔らかい感触と共に、視界の回転が止まった。うっっ、
気持ち悪い……

「大丈夫か?」

「……い、一応は」

秀人さんが受け止めてくれたおかげで、怪我はしていない。地上
五メートル。あんな勢いで地面にぶつかっていたらと思うと、ぞっ
とする……っ、あれ? まだ、浮かんでる? もう魔法はキャン
セルしたはずなのに。

「あっ」

目を凝らすと、秀人さんの両足首に、環状魔方陣が展開していた。

「秀人さんも飛べるようになったんだ!」

「ああ。とはいっても……」

ひゅんっ。軽い音と共に、環状魔方陣が消失。秀人さんが両足で
地面に着地する。

「まだ数分も維持できないけどな」

『理想としては、飛行魔法・攻撃魔法・防御魔法を併用することで
す』

「はぁ……まだまだ先は長いか。」

『マスター。ヒデト。飛行魔法は、最低でも一週間で使いこなして
もらいます』

「うん、頑張る!」「練習あるのみだ」

そして、一週間が過ぎた。

私と秀人さんは、問題も無く飛行魔法を行使できるようになってい
た。

「待て〜!」

だけど、まだ複雑な動きは出来ない。直進、上昇、下降、浅い角度での旋回ができるだけだ。それらを上手に組み合わせ、更には他の魔法も併用しなければならぬ。

「タッチ！」

「おっと」 ひらり。

その練習として、ユーノくんが提案したのが、この『空中鬼ごっこ』だ。

円柱状のフィールド内で、飛びながら鬼ごっこをするだけ。それだけだが、実に練習になる。それというのも……！

「秀人さあん！ そろそろタッチされてくださいよお！」

「駄目駄目。練習なんだから」

ぶんつ。またしても空振り。空しく虚空を掻く手。

「むーっ！」

そう、秀人さんがなかなか捕まらないのだ。ユーノくん曰く、私は射出したり、展開したりするのに向いていて、秀人さんは、体を覆ったり、強化したりするのに向いているらしい。

「そこまで！」

ユーノくんの声と共に、円柱状のフィールドが消える。

結局、勝敗は五対一で私の惨敗だった。

バッグに入れてきたスポーツドリンクを飲み、一息つく。

「うん。二人とも、中々いい感じだよ」

『七十点といったところでしょいか』

七十点。厳しいような、上々のような、曖昧な点数だ。けど、最初が二十点だったことを考えるとかなりの進歩だ。

「ってことで、明日は久しぶりに休みにしよう」

休み？

「別に疲れてないけど」

それに、今は魔法の練習時間が一分でもあつた方が良いんじゃないか。いつまた暴走体が現れるかも分からないんだし……

「ま、いいんじゃないか？ たまには」

秀人さんが、あつけらかなとした調子であっさり言う。

「でも……」

少しでも力を付けないと。一つでも多くの魔法を身に付けないと。また誰かが……

知らず知らずのうちに俯いていた私の頭に、ぼん、と手が乗せられる。

「あつ……」

じわ〜っと広がっていく、手の暖かさ。うづ……コレ、卑怯だよ

……

「明日、ちょっと隣町に用があるんだ。ちょっと付き合ってくれ」

うづ〜ん……まあ、秀人さんがそう言うなら。

「行きます」

明日は、お休みを取ろう。

「行きます」

なのはがようやく頷いた。顔には出さず、ほっと一息。ユーノもどこか安心しているようだった。

あの、街を半壊させた暴走体を封印した日から、なのはは明らかに無理をしていた。学校から帰ってくるや否や、すぐにユーノに結界を張ってもらい、夜まで魔法の練習に没頭する。しかも、明らかに自分を追い詰めるような練習を、だ。すぐに気が付いて、一緒に練習することでやんわりと抑えていたが、あくまでそれは対症療法にしかならない。

それはまるで、何かを必死に振り払うかのようで……いや。まるで、というか、事実そうなのだろう。本人は頑なに否定するが、友達との辛い喧嘩別れは、相当堪えたらしい。

さて、明日はどこに連れて行くかな……町に用事があるなんて、大嘘だし。適当に買い物にでも連れ回して、強引に気分転換させて

やるつ。

「それじゃ、明日に備えて今日はもう休もう」

「……はい」

まだ釈然としないらしく、少し表情が硬い。はぁ……この子、将来はワーカーホリック気味になりそうだな。その辺は、『あの親』の子供なんだろうな。

『ユーノ、お前も来いよ?』

念話と共にユーノに目配せをする。

『そうだね。万が一ってこともあるし』

こいつはこいつで、前回のことを引きずっている。自分が、レイジングハートに制限を掛けなければ、もっと早期に鎮圧できた筈だ、と。

実際には、なのはの無茶な訓練を諫めるといふ目的があつたのだから、仕方ないと言えば仕方ないことだ。全く。うっかり屋の癖に責任感が強いんだから。

『うっかり屋って何さ、うっかり屋って!?!』

やべ、念話してるの忘れてた。

「じゃ、帰ろうか」

ユーノの抗議を念話の回線ごとカットし、ヘルメットを被る。

「よいしょつと」

慣れたもので、なのははもう俺の手を借りずにタンDEMシートに座れる。ユーノも文句を言いながらも、トランクボックスに収まった。

『なのは、どこか行きたい所は?』

念話のお陰で、インカム要らず。ああ、魔法って便利。

少し、サスからのシヨックが大きい。この頃無茶な使い方ばかりしてたからな……。

明日、隣町で部品買つか。

『……特には』

そりゃそうだ。ん〜つと……

『それじゃ、たまには外食でもしてみるか』

俺の用事なんて、ちよつとバイク屋に寄って部品をいくつか買うだけだし。ハンバーガーチェーンで人数分買って、どこか眺めのいい場所でのんびりしよう。

『そういえば、私、ハンバーガー食べるの久しぶり』

なのはがぼつりと呟いた。

『へえ、意外だな。俺なんか、食事の用意が面倒な時はよく買ってたもんだけど』

流石に、食べ盛り育ち盛りの小学生にジャンクフードばかり食べさせるわけにはいかないし、最近ではご無沙汰だ。

『大人の人ばかりで、ちよつと怖かったから』

ああ、確かに……十代後半の若者がメインだもんな。小学三年生からすれば、十分に大人だ。

『はんばーがーって、どんな食べ物？』

ユーノが混ざってきた。よし、俺がハンバーガーの真実を教えてやらなければ。

『丸いパンを横に切り開いて、間に肉とか野菜とかを挟む食べ物。』

要はサンドイッチの変形だ』

『ああ、アレの亜種か』

こちらの食べ物にも慣れてきた異世界人。案外理解が早くて助かる。

『そうそう。フェレットバーガーとか絶品だぞ』

がつんっ！

リアボックスの中で、何かが跳ねる音がした。

『ふえ、ふえ、フェレットバーガー！？』

『ああ。内臓と骨を取ったフェレットをミンチにして、練り合わせた肉を挟むんだ。結構、人気商品でさ、早く並ばないと売り切れちゃうんだ』

がたがたがた……！

リアボックスが大フィーバーだ。少し間をおいて、言う。

普通のハンバーガーとオレンジジュース。ユーノくんは、鞆の中でフライドポテトとアップルパイを一生懸命食べている。

「……いただきます」

ぱくり、と齧り付く。少し油っぽいお肉と、パサパサしたパンが、何故か妙にマッチしていた。個別に食べたらそんなに美味しくないのに……不思議だ。

ポテトをつまんだり、ジュースをちびちび飲みながら、ハンバーガーを食べ進めて行く。

結局、私の小さな口では、一個を食べきるのに十分を要した。

「あつう……苦しい」

さすがに、脂分が多すぎた……美味しかったけど。

「はは、やっぱりなあ」

秀人さんが、コーラの容器に入っていた氷をガリガリ噛み砕きながら笑った。

「ほら、食べカス付いてるぞ」

「え、うそ!？」

ひゃー! かっこ悪い!

「ちよつと動くなよ?」

手元にあつた紙ナプキンを取り、私の口元を拭った。目を閉じてされるがままになる私。

「うつう、ごめん、秀人さん」

ああ、もう。私ってば、いつも秀人さんに迷惑ばかり……

ぼふ、と頭を撫でられた。あ……もしかして私、また下向いてた?

「気にするなよ、家族なんだから」

「……うん」

店を出た次に向かったのは、一軒のバイク屋だった。どうやら、バイクの消耗部品を買らしい。最近、無茶な使い方してたからね。店内には、所狭しと色々なバイクが並んでいる。色も形も様々で、見ていて楽しい。

『へえ……全部、ガソリンエンジンかあ』

ユーノくんが、興味深そうにバイクを見ている。

「エンジンって、ガソリンで動かすものじゃないの？」

『僕のいた世界では、水素エンジンが実用化されたから。クリーンなエネルギーだけど、爆発的なパワーは出ないんだ』

秀人さんが、伝票らしき紙切れを持って戻ってきた。

「無公害にも、それなりにデメリットがあるってことか」

『初めて秀人のバイクに乗ったときはびっくりしたよ』

「……私も」

何せ、初めて乗ったバイクで、時速200kmだもん。怖かった

……

バイク屋を出ると、丁度お昼だった。

「ねえ、ちよつといい？」

お昼ごはんはどうしよう。さっきのハンバーガーはちよつと重かったから、軽く済ませたい。

「ちよつと、ねえってば」

でも、それだと秀人さんがお腹空いちやうかも。うん……あ、そくだ！ 回転寿司なんてどうだろう。安く済むし、量も自分で決められるし……

「高町さん！」

「はいっ!？」

え、何!？ 慌てて振り向くと、気の強そうな外国人の女の子が立っていた。えっと、えっと、外国人に話しかけられた場合は……

「そ、そーりー！ あいきゃんのつとすぴーくいんぐりっしゅー！」

逃げるー!!

踵を返して駆け出す。

「日本語で喋ってるでしょうがああー!!」

が、上着の袖を思いつきり掴まれてしまった。結構な勢いだったせいか。

びりっ

「「あ」」

……破れちゃった。縫製が甘かったのか、袖が肩口でぶらぶらと揺れている。

「ご、ごめん、やりすぎた……」

「……別に」

嘘。本当は、秀人さんに買ってもらった上着を台無しにされて、怒鳴りつけてやりたい気分。でも、初対面の人にそんなことするわけにもいけないから、我慢だ。

「アリサちゃん？」

人ごみを掻き分けるようにして、もう一人、女の子がやってきた。今度は、長い黒髪の女の子。目の前にいる外国人の子。名前は、アリサさんというらしい。の知り合いみたい。どちらにせよ、見知らぬ相手だ。服は、家に帰ったら繕えばいい。

「じゃ……」

「ちょっと待って、高町さん」

見つかった。面倒くさい……

「あの……どこかでお会いしたこと、ありましたか？」

二人とも、私の苗字を知っているみたいだ。

「「……」」

二人は、ジト目で私を見た。そして、金髪の子が、はあく、とため息をついた。

「あのねえ……元クラスメイトの顔、忘れたの？」

……元クラスメイト？ ということは、二人は聖祥大附属小学校の時の同級生？

確かに見覚えが………無い。忘れる忘れない以前に、最初から覚えていなかったらしい。

「とにかく、じゃあね。服のことは気にしないでいいよ」

再三、逃亡を図る。

「ウチなら、その服直せるから一緒に来てくれない？」

が、またしても。今度は黒髪の子に手をやんわりと掴まれてしまった。目が合いそうになり、慌てて逸らす。どうにも、他人は苦手だ。

「人、待たせてるから」

「お願い」

「放してよ……いいって言ってるんだから」

「お願い」

う……何この人。大人しそうに見えて、結構強引だ。

『秀人さん……ごめん、ちょっと』

念話で秀人さんと呼ぶ。

「どうした？」

バイク屋から秀人さんが駆け出してきた。掴まれた私の手と、破れた袖に目をやり……

「……なのはに、何か用でも？」

低い声で、聞いた。

しかし、黒髪の子は臆するでもなく、秀人さんに頭を下げた。

「私は、月村すずかと言います。彼女の服を破ってしまったので、

お詫びを兼ねて我が家にお招きさせてもらえないでしょうか？」

礼儀正しく、申し出る。秀人さんも毒気を抜かれたようで、困ったように私を見た。

「……どうする、なのは？」 『僕としては、別にどちらでもいいよ』

私次第か。わざわざ自分で繕う手間が省けるなら……でも、一人で行くのはやだ。

「秀人さんとユーノくんが、一緒なら」

「勿論、歓迎します」

月村さんは、そういつてにつこりと微笑んだ。

「んじゃあ、俺、バイク取ってくるから」

「うん」

秀人さんのバイクで、月村さんとバニングスさんが乗る車に着いていくことになった。

さて、秀人さんが来るまで手持ち無沙汰だな……

「あのさ、秀人つてのは、あの人のこと？」

「そっだよ」

「じゃあ、ユーノつて誰？」

……あ。

「……ええと」

どう説明したものか。うーん……あ、そっだ。

『ユーノくん、ちょっとこっち来て』

『いいよー』

秀人さんの鞆から、ユーノくんが出てくる。

足元まで走り寄ってきたユーノくんを抱き上げ、二人に見せる。

「この子が、ユーノくん」

口で説明するより、見せたほうが早い。

「うわあ……可愛い！」

「綺麗な毛並み……」

どうやら、気に入ってくれたらしい。でも、ごめんねユーノくん。ペット扱いして。

『はは、もう慣れたよ……』

バニングスさんと月村さんにもみくちやにされながら言う。

と、路肩に秀人さんのバイクが止まった。

「なのは、お待たせ」

「うん」

ヘルメットを被り、あご紐を締め、バイクによじ登る。

それを、二人はぼかん、とした顔で見ている。

……もしかして、私も一緒に車に乗ると思っていただけのだろうか。自慢じゃないが、私の人見知り筋金入りだ。ほぼ初対面の相手と、密室に入る勇気は無い。

「ユーノくんは、そっちに預けておくね」

「え、ええ……」「わかった……」

妙に長い車に先導され、着いた先は……

「でか……」

そう、大きな洋館だった。一体何坪あるのか、聞くだけ馬鹿馬鹿しくなるくらい大きい。

漫画みたいなお金持ちだ。

「それでは、二輪車はこちらでお預かりします」

燕尾服を着た初老の男性が、秀人さんを車庫へ先導していった。

破れてパンクな雰囲気になった上着をメイドさんに預け、多少身軽な格好でテーブルについた。月村さんは微笑、バニングスさんは苦虫を噛み潰したような顔で、私を出迎える。

「高町さん、好きな紅茶は？」

紅茶の葉っぱに種類なんてあるの？ リーオンしか飲んだこと無いんだけど……

「匂いがキツくなくて、砂糖とミルクが入ってれば何でもいい」

月村さんが、またくすりと笑った。被害妄想なのだろうが、馬鹿にされたみたいで少し腹が立った。月村さんが何かを伝えると、メイドさんは頷き、引っ込んで行った。さてと、そろそろ、理由を聞くでしょう。

「それで、どういっつもり？」

「え、何が？」

月村さんは、飄々と受け流す。

「さほど面識の無い私を、わざわざ家に上がらせて、どういっつもりなのかって聞いているの」

多少、強い口調になってしまった。

「ちよつとアンタ、言い方ってモンがあるんじゃないの？」

それに噛み付いてきたのは、バニングスさん。

ああ……元はと言えば、この人のせいなんだよね。

「私は『アンタ』じゃなくて『高町』だよ、バニングスさん」

多少の威圧を兼ねて、ジロリと睨む。

「あなたみたいに呼びづらい苗字じゃないんだから」

「何ですって!?!」

「何、文句あるの!?!」

がたん、とバニングスさんが椅子を蹴立てて立ち上がる。私も席を立ち、真正面から睨む。

「はいはい、そこまでですよ」

緊迫した雰囲気を一瞬にして弛緩させる、ユルい声がかかった。紅茶やお菓子を載せたカートを押してきたメイドさんだ。

「もう、仲良くしないとイケませんよ」?

「「……ふん」」

席につき、配膳された紅茶を一口飲んでみる。

……美味しい。

「高町さん、どう?」

月村さんが感想を聞いてきた。……意固地になる必要は無いか。

「うん、美味しいよ」

「そう。よかった」

そして、会話が途切れた。

バニングスさんがカップを置く音が、やけに大きく聞こえる。

「……ねえ、『高町』は、何で転校したの」

バニングスさんが、恐る恐るといった感じで聞いてきた。普通聞かない、そんなこと。

さらっと適当にでっち上げて済ませよう。

「ああ、家計が厳しくてね。学費が払えなくなったんだよ」

大半は真実だからか、するりと言葉が出た。

「「……」」

「「……」」

二人は、神妙な顔つきで沈黙していた。不幸自慢なんて、したくなかったんだけど。紅茶の最後の一口を飲み干し、カップを置いた。

「ちよつと外すね」

席を立つ。さてと、秀人さんはどこかなー。

.....

バイクから下り、俺の住むアパートがそのままスッポリ入りそうな車庫の中を見渡した。

(.....長いロールスロイスとか初めて見た)

「どうかされましたか？」

俺を先導する執事が振り返る。

「.....いや、金持ちっているんだなあ、と」

「左様でございますか」

実にアウエー感漂う。

なのはとは別行動だ。小学生とはいえ、女の輪に入る勇氣は無い。

『.....僕も、あの中に入るのもう無理』

肩の上でユーノがぐったりとしている。車の中で、あの二人に徹底的に可愛がられまくったらしい。それに、これがきっかけになって、なのはに友達が出来れば、というセコい思惑もある。

と、車庫の一角に目が、足が止まる。恐らく、ここにある車を整備するためだろう。

まるで、車検場のように整然と工具が並んでいる。このまま店が開けそうな規模だ。

「あの、」

「何でございましょうか」

「バイクの整備したいんですけど、アレ、借りられますか？」

執事さんは少し思案し、笑顔で頷いた。

「勿論、構いません」

よし、やるか。

レンチ、スパナ、ドライバー.....各種工具を手元に揃え、作業を始めた。

バイクと格闘して油まみれになること数十分。ようやく作業が終わ

り、洗剤で手の油汚れを落とした頃。

「秀人さ〜ん」

なのはが車庫にやってきた。

「どうしたんだ？」

まだあの二人とお喋りしてるかと思ったのに。

「ちよつと様子が気になって……」

視線を外し気味に言う。……嘘だな。大方、何を話せばいいのかわからなくなって逃げたんだろう。まあ、いいか。

なのはを案内してきたのは、俺とほぼ同年代らしいメイドさんだ。

「ふふ、仲がよろしいですね」

ドクン

「やっぱり出たな」「そだね」

ジュエルシードって、いつも実に面倒臭いタイミングで現れるよなあ……

『ユーノ、結界頼む』

『了解』

ユーノも慣れたものだ。

目の前にいたメイドさんの姿が、曇りガラスを挟んだように徐々に輪郭をぼかし……消えた。

暴走体の気配は、そこまで強くない。戦闘力でいえば、一体目の毬藻モドキにも劣るだろう。とはいえ、放置は出来ない。なのははバリアジャケットを纏い、デバイスモードのレイジングハートを携えている。準備万端、つと。

車庫を飛び出し、気配の源へと向かう。俺はユーノを肩に地上を走り、なのはは飛行魔法で空を走る。楽勝……の、筈だ。けど、何でだ？ 妙に、嫌な予感がする。

.....

その、数分前。

「へー、大きい家だね」

少し痩せ気味の体躯に黒装束。無骨な斧を携えた少女が、月村邸を俯瞰していた。少女の足場は、電信柱の頂上。直径にして40センチ程度の円の上だ。だが少女は、慄くでもなく、まるで地面に立っているかのように平然としていた。

「くふふっ……折角、お膳立てしてあげたんだから……」

天使のように可憐な、悪魔のように無慈悲な笑みを浮かべる。

『Get set』

行使するのは、魔力の共震波。

目的は、そう……ジュエルシードの、意図的な暴走。月村邸の中庭。ジュエルシードと、素体にはお誂え向きの、飼猫。

「いい声で啼いてよ？」

『fire』

そして、魔法は寸分変わらずジュエルシードに命中。狙い通りジュエルシードは発動し、子猫を取り込んだ。

.....

「.....」

開いた口が塞がらない。いや、だって、これは……

『みゃ~~~~~』

野太い鳴き声が鼓膜を震わせる。

「……猫、だよね」

見れば分かることを、わざわざ口に出して確認する。

「ああ、うん、多分……」

秀人さんも困惑しているのだろうか、自信なさ気だ。

『みゃ~~~~~』

……うん、猫だ。

ただし全高約10メートル。ふさふさな毛並みと、つぶらな目、ぴんと尖った耳。ご丁寧に、首輪まで付いている。

「多分だけど……これは、素体になった子猫の『明確な願望』がカタチになっただと……思うよ?」

……まさかとは思うけど。

「……『大きくなりたい』」

秀人さんが、私の代わりに口にしてくれた。

「多分」

ジュエルシード、融通が利かないにも程があるでしょ……首輪が付いてるってことは、多分この家の飼い猫だろう。さっきの部屋にも何匹かいたし。見たところ、大きい以外に害はない。サクッと終わらせて引き上げよう。

『Sealing mode』

猫の額に、ローマ数字が浮かぶ。

「ジュエルシード、シリアル14、封いッ……!?!」

『Caution!』

レイジングハートの警告と同時に、その場から全力で飛びのいた。

ドガッ!!

私たちと暴走体を隔てるように、ソレは地面に突き刺さった。

「攻撃魔法だ! 僕たち以外に、魔導師がいる!」

その言葉を皮切りに、右から、左から、上から、文字通り縦横無尽に、『光の槍』が飛来する!

『Protection!』

キユガガガガガガガガガガガッ!!!!!!

三人分の魔力を注いだ防御魔法を展開し、爆撃のような攻撃魔法の雨に耐える。

「くっくっくっくッ……!!」

何秒か、何分か、何時間か。一体どれだけ耐えていただろう。攻撃魔法の雨が止み、粉塵がようやく収まった。

「二人とも、大丈夫……？」

「なんとか」「僕も」

そうだ、子猫……！

晴れた粉塵の向こう。暴走体は、地面に倒れ伏していた。身体の至るところに、光の槍がいくつも突き刺さり、血を滲ませている。満身創痍どころか、瀕死の重傷だ。

『ミヤ、ア、』

苦しげに鳴く暴走体。早く、ジュエルシードと切り離さなきゃ……！封印魔法を暴走体に放つが……

ガンッ！ガゴンッ！

その片っ端から、あの光の槍に打ち落とされる。

秀人さんが近付こうとすると、それをまた光の槍が阻む

「……誰なの！？」

封印を取りやめ、周囲を見渡す。だけど見えるのは、曇り空と、鬱蒼とした雑木林。あの攻撃魔法がある間は、エリアサーチは行えない。

「出てこい！」

無作為にばらまいた射撃が、雑木林の枝を落としていく。

あはははははははは！

耳障りな嘲笑が、雑木林に反響する。

「じつ……このおおおお！」

こうなったら、砲撃であたり一面を更地にして……！！

「落ち着け！」

ぐいっと腕を掴まれる。

「無駄に消耗するな！」

「は……はい」

秀人さんに叱責され、いくらか冷静さを取り戻せた。そうだ。機会を伺うんだ。少しでも姿が見えるまで。その時は……！ レイジングハートを握る手に力が入る。

「近くにいます」

ユーノくんが忠告する。

ちらりと後ろを振り返る。暴走体の子猫は、もう弱々しい吐息を漏らすだけになっている。

『ニヤアア……』

助けを求めるように首をもたげる。

でも、近づけない。あの光の槍の一つ一つは、私一人の防御で十分防ぐことができる。けど、それが何十も叩き込まれるなら、話は別だ。一瞬で意識を刈り取られてしまう。目の前で助けを求めているのに、助けられない。それがひどくもどかしく、苛立たしい。

「出てこい、卑怯者！」

「うん、いいよ？」

それは、唐突だった。

「なっ!？」

耳に息がかかるような距離から、いきなり聞こえた声に驚き飛びのく。慌ててレイジングハートを向けるが、既にそこには誰もいない。『ギヤアッ!』

目を逸らした暴走体が、悲鳴を上げた。

「くふふふふ」

暴走体の頭に腰を下ろし、紅い瞳が悠然と私たちを見下ろしている。ようやく、姿が見えた。

二つに束ねた、バニングスさんとはまた違った質感の金髪。細身を黒いバリアジャケットで包み、手にはデバイスであるう斧を持っている。とても、綺麗な子だった。

「そこをどけ」

秀人さんが、少し緊張した面持ちで告げる。

「早く切り離さないと、素体の猫が死んじゃう」

「それが？」

鈴を転がすような、ハスキーでよく通る声。

「それが、つて……！」

綺麗な子。だけど、間違いない。こいつは、敵だ！

『Acceler shooter』

誘導弾を五つ出現させる。喰らえ！

「シユート……！？」

「遅いよ」

『Thunder』

バチイッ！！

「……ツぐ……！」

「なのは！」

「……え？」

何で私、秀人さんに抱えられてるの……？

「あ……う」

口が、動かない。いや、口だけじゃない。身体が自由が、効かない。からん、と手からレイジングハートが転がり落ちてしまった。拾い上げないと。早く、早く……でも、思いとは裏腹に、力が抜けていく。視界にモヤがかかったように霞んでいき……

意識が、途絶えた。

第六話（後書き）

なのは敗北。

次回は、秀人VSフェイトになる予定です。

フェイトは、虐待の影響で人格が歪んでいます。

第七話（前書き）

温泉編です。

第七話

「天候操作……!? こんな高度な魔法を、ノーモーションで!?」
気絶したなのはをゆっくり横たえる。なのはに怪我は無い。バリアジャケットが、代わりにボロボロに黒焦げていた。落雷の直撃を受けて、この程度で済んだのは幸運なのかもしれない。けれど。

「……………てめえ」
ふつつつと、怒りが沸いてくる。

「タダで済むと思うなよ!」
なのはを傷付けるなら、どんな奴だろうと俺の敵だ!

「レイジングハート、モードリリース!」

『All Right』

デバイス形態を解除し、スタンバイモードに。俺が使う機能なら、この状態のままで十分だ。

「へえ、デバイスを共有してるんだ。効率悪ッ!」
小馬鹿にされるが、知ったことか。

「ユーノ、お前はなのはと子猫の治療を頼む」
黒衣の少女の手には、ジュエルシードが握られていた。なのはを攻撃するのと同時に、封印したらしい。

「わかった。でも、相手が子供だからって油断しないで………かなり
の使い手だ」

「ああ」

あの攻撃、あの速さ。油断なんて、最初からしていない。

「次はお兄さんが相手?」

少女が黒塗りの斧を向けてくる。

「くふふつ、いいよ。どうせ、ボクには勝てないけど」
やってみるよ!

「バレット!」

ピンポン玉サイズの青い魔力スフィアを数個、拳に纏わせる。

『Ballette』

「ファイア！」

ドガガガガッ！！

だが、やはりと言うべきだろうか。

「ひよひよいつ、と」

わざわざ擬音を口にして、余裕で回避してみせる。やはり、速い…

…！

密集した木々の隙間を飛び回り、跳ね回り……

ヒュンッ！

唐突に、斧が死角から迫る。

「うおっ！？」

ガンッ！

慌てて腕でガード。

魔力で強化した腕を、衝撃が突き抜ける。なんて威力だ！

「くふふっ。よく防いだね、お兄さん」

ひゅんひゅん、と、鉛筆回しでもするように軽快に斧を振り回す。

「じゃあ、これはどうかな！？」

『photon lance』

バチッ、と、薄暗い森の中に光が散る。これは、さっきの……！

「ファイア！」

キュドドドドドド！

光の槍の、一斉掃射！

『Protection！』

間に合え……！！

「ぐ……ああああ！」

弾き飛ばす度に、衝撃が突き抜ける。

ガガガガガガガガガガガガ……！！

なんつー連射だよ！

ピシッ……ピキッ……

バリアに亀裂が入ってきた。そこを修復し、全体を補強し……よ

うやく、攻撃魔法が収まった。何とか……耐えきったか。
「大した硬さだね」

少しだけ感心したように、太い枝の上で立ち止まる。

「ボクの攻撃を防ぎ切ったのなんて、リニス以来だよ」

「そいつぁ、光栄だね……」

対してこちらは……？

『残存魔力48%です』

「そうか。まだ余裕だね」

多少はダメージを喰らったが、戦闘の続行は可能だ。あのクリーン
ヒットが堪えたけど、倒されるほどじゃない。

「……あ、もういいや」

唐突に、少女から戦意が消えた。

「どういっつもりだ？」

バレットを構えながら尋ねる。くふふつ、と笑い、告げる。

「もう、目的は果たしたから。バイバイ、お兄さん」

ひゅんつ、と消える。周囲をサーチしてみたが、反応は無い。どう
やら、本当に離脱したらしい。

それにしても、目的って何だ……？

……

まず感じたのは、固い地面の感触。

そして、身体を包む暖かさ。

「……う」

けだるさを無視し、目を開ける。半球状の膜が、私と、さっきの子
猫を覆っていた。

「気が付いた？」

「ユーノ、くん？」

「そうだ、私は子猫を助けようとして……！
がばつと身体を起こす。」

「あ、まだ無理しちゃ駄目だよ！」

「あ、あいつは！？」

「きよるきよると辺りを見回す。私はバリアジャケットではなく普段
着で、レイジングハートは手元には無かった。」

「今、秀人が追ってる」

「そっか……」

「私、負けちゃったんだ」

「……うん」

「ユーノくんは、否定しなかった。」

「そっ、か……」

「強くなったつもりだった。練習は実を結んでいると思っていた。
……でも。」

「何にも、出来なかった……」

「悔しくて、悔しくて。ただ、拳を握ることしか出来ない。」

「本当にこっち？」

「うん、あそこがお気に入りだから」

「不意に、人の声が聞こえてきた。」

「え！？ 結界を張ってるのに……！！」

「ユーノくんが慌てる。」

「綻んでる……！？ そんな！」

「魔法を見られるのを防ぐためか、治療魔法が中断される。ほぼ同時
に、バニングスさんと月村さんが姿を見せた。」

「あれ、高町さん。こんな所で何を……あ！」

「その視線が、倒れている子猫に向いた。」

「マルス！」

子猫を抱き上げると、白い服にじわりと赤い染みが広がった。月村さんが携帯電話で、誰かを呼ぶ。よかった。これで、少なくともあの子猫は助かる。

けど、何でだろう。

何で、バニングスさんは私を睨んでいるんだろう。

「高町、何でアンタはここにいるの」

血の気が引く。それを実感したのは、初めてのことだった。

「アンタの連れは、ガレージにいるんでしょ？　なんで、アンタはここに、マルスのそばにいるの？」

どうしよう……どうしよう！

「……アンタがやったの？」

静かな問い。けれど、その中には……確信が少なからず含まれていた。

「ち、違……」

「じゃあ、何でこんな所に一人にいるのよ……」

言えない。言えるわけがない。

ただ黙る私を見て、バニングスさんは確信したらしい。私が子猫を傷付けたと。

「……て行け」

「違う、違うの、バニングスさ、」

「出て行け！」

「……あ」

言葉が、出ない。視界が滲み、まともに物が見れなくなる。鼻頭がツンとして、のどの奥が引き攣り……

「うあああ……！」

嗚咽が、漏れだした。

ただひたすら走って、走って、走って……気付いたら、屋敷の外を歩いていた。涙は涸れたのか、もう流れない。

ぽたっ、ぽたっ

頭に水滴が落ちる。それが合図であるかのように、

ざああああ

本格的な、雨になった。傘も無く、ぐしょ濡れになる。生暖かい雨に打たれながら、ひたすら屋敷から逃げるように遠ざかる。

「なのは！」

エンジン音に負けない大きな声で、後ろから呼び止められる。

「……秀人さん、ユーノくん」

そっか。置いて来ちゃったんだ。傍らにバイクを止め、駆け寄ってくる。

「ユーノに聞いた」

「……そう」

俯き黙り込む私を、抱き寄せる。秀人さんも、ユーノくんも、雨でぐしょ濡れだった。

「……違うのに」

不意に、口をつく言葉。私の意思とは無関係に、激情をぶちまける。

「私じゃない！ 私は何もしてない！ 何もしてないのに！ 何で、何で……！」

涸れたはずの涙が、また溢れてくる。雨と涙が混ざり、地面に落ちていく。

「うああああああ……！」

.....

「あはははははは!!」

黒衣の少女……フェイトは、大笑いしていた。目の端に涙まで浮かべ、腹を抱えて身をよじり……、喜悦を、全身で表現していた。

望遠モニターの中には、先ほどまで相對していた二人と一匹が映っている。

「あはっ、あはははは……! はあ、はあ……、」

笑い疲れたのか、肩で息をする。

「フェイト、」

そこに赤い狼……アルフが戻ってきた。

「ああ、アルフ、お帰り。ちゃんとやってくれたんだね」

「……ああ」

隔離結界の一部を解除し、民間人の少女二人を誘い込んだのはアルフだった。

「ああ、こんなに上手く行くななんて……くふふっ、可笑しっ!」

あの子猫に重傷を負わせるのも、その罪をあの少女になすり付けるのも、全てフェイトの描いた通りだ。

「さあて……楽しくなってきた」

そして一人と一匹は、雨の帳に姿を消した。

「ただいま」

アパートの鍵を開け、自分で言いながら部屋に入る。

「……」

なのはは、無言で靴を脱ぎ、部屋に上がった。俺の服を、がっちりと掴んでいる。仕方ないから、そのまま風呂場に連れていった。ユノは黙って、後ろをついて来る。バスタオルで頭を拭いてやるが、雨粒を吸い込んだ服は、拭いたくらいではどうにもならない。

「ほら、風呂入ってこい」

棒立ちになるのはを残し、風呂場を後にする。だが、

「嫌ッ!!」

背中に抱き着いてきた。

「お、おい……」

「嫌だ……」

かたかたと震えている。寒さだけが、原因じゃないのだろう。あんな理不尽な出来事、子供が経験していいものじゃない。

「……一緒に入るか？」

半ば、冗談のつもりだった。小学三年生とはいえ、女の子だ。

「……うん」

断るかと思っていたのだが、帰ってきたのは、肯定の頷き。ユーノも捕まえ、三人で入ることになった。

小さな背中にシャワーをかけてやり、冷たくなった身体を温める。

なのはの表情は、髪の毛が覆っているせいで読めない。

「髪、洗うぞ」

シャンプーを手に取り、背中に掛かるくらいの長さがある髪の毛を丁寧に洗う。しばらく洗い、洗面器に張ったお湯で泡を流す。髪の毛を洗い終えたら、今度は身体だ。小さな背中を、ボディソープを染み込ませたスポンジで擦る。

「……負けちゃった」

ぼそり、と呟く。

「……ああ、そうだな」

泡を洗い流す。

「私、何もできなかった。頑張って……頑張ってたのに、ちっとも敵わなかった」

その小さな身体を、後ろから、そっと抱きしめる。

「なのはは、よくやったよ。なのはの頑張り、俺が一番よく知ってる。だから……そんなに気に病むな」

「……うん」

なのはは、また少しだけ泣いた。

「うーん……」

湯舟に浸かりながら考え事をする。

ユーノに頼んでなのはを先にながらせ、ベッドに入らせた。今日のところは、もう眠らせてやった方がいいだろう。

あの黒い子は何者なんだとか、そんな些細なことはどうでもいい。

(どうすれば、元気になるかな……)

元気が無くて当然だ。ただでさえ友達(本人は否定するが)を失ったばかりだというのに、今回の件。しっかりしているように見えて、その実傷つきやすいなのはには、相当堪えたに違いない。

『ユーノ、なのはは?』

『まだ起きてるけど……元気ない』
だろうな。さーて、どうすっかなあ……

「おい、ヒゲ」

「あ、ハイ。何すかカントク?」

その翌日。工事現場のプレハブ小屋で休憩中、上司に呼び止められた。

俺の収入源は、主にこういつた肉体労働だ。鉄骨や土のうを運んだりといった単純作業は、気楽でいい。短時間で高収入。何より、自分の体質を隠さなくていいというのが最高だ。人付き合いも最小限で済むし……って、駄目人間の思考だなこりゃ。

そんな俺を特に目に掛けてくれているのが、目の前のオッサン……現場責任者、通称『カントク』。

俺の雇い主であり、色々とお世話になっている人だ。

そのカントクが、俺にチケツトをくれた。最近オープンしたばかりの温泉宿のペアチケツトだった。

「最近、シフト増やしてもらったからな。小遣いに取っつけ」俺がシフト増やしたのは、あくまで生活費のためなんだが……

「まあ、カノジヨでも誘ってシツポリ休んでこいよ。ヒヒヒツ！」親しみの籠った下ネタに苦笑しつつ、それを受けとった。ペアというのはいがたい。

「んじゃ、ありがたく頂きます……っていうかカントク」

「ああ、何だ？」

タオルで汗と泥を拭き取りながら。

「なんでペアチケツトなんですか？」

それが不思議でならない。ペアチケツトというのは、二人でないと使えないものが殆どだ。下手したら無駄になる可能性だってあるのに。だがカントクは、ニカツと歯を見せて笑い、言った。

「男が汗流して働くのはな、大抵オンナのためって相場が決まってるんだよ」

俺はもう一度、頭を深く下げた。

「ありがとうございます！！」

.....

「……はあ」

遊歩道のベンチに座り、読みかけの本から顔を上げる。夕日が上つて、空が赤く染まっていた。どう見ても、夕方だった。

(……また、サボっちゃった)

あの日以来、私は学校へは行っていない。この前までは、空気のように、クラスの中に溶け込んできたつもりだ。でも、八代さんとの一件で、それが出来なくなってしまった。

教室に顔を出して、いつも通りに過ごせる自信が無かった。それに。

(他人が、怖い)

誤解を受けるかもしれない。ひどいことを言われるかもしれない。傷付けられるかもしれない。そんな恐怖が心に根付き、人がいる場所から足が勝手に遠ざかった。

『戦闘終了』

レイジングハートと行っていた模擬戦を終える。

「十七連敗、か……」

仮想敵は、あの黒衣の少女。秀人さんが戦った時に収集した戦闘データを基に作り上げたアバターだ。それを相手に、私は不様に黒星を更新し続けていた。攻撃は避けられ、防御は破られ、逃げられ、追いつけず、追い掛けられたら逃げきれない。まざまざと、実力の差を見せ付けられた。

『なのは、今日はここまでだ』

膝に乗ったユーノくんが、訓練の終わりを告げた。確かに、頭を使わずにちよつと熱っばい。

「……私、こんなに弱かったんだ」

今日、何度目になるかも分からないため息。

「帰ろうか」

ランドセルを背負い、公園を後にする。

夕食を終えた後、秀人さんが細長い紙をちゃぶ台の上に置いた。

「温泉？」

「ああ。仕事場の人から貰ったんだ」

日付は、明日と明後日。一泊二日だ。平日だけど、どうせ学校へは行っていないし、構わないだろう。

「何も起きなければいいんだけど……」

「ちょ……不吉な事言うなって！」

秀人さんが、割と本気で慌てている。でも、思い返してみれば、ジュエルシードと遭遇するのは、いつも出かけた先だ。出たら出たでなんとかしよう。

「わかりました。学校には連絡しておきます」
「ついでに無断欠席のこと、謝っておけよ？」

「はい」
バレバレだったらしい。じろりとユーノくんを睨むと、そそくさと目を逸らした。犯人はユーノくんか。

アパートの外に出て、担任の電話番号を押す。留守電だったら楽でいいんだけどなあ。

しかし、数回の呼び出し音の後、がちやりと電話が繋がった。

『もしもし？』

まだ私だとは知らないようだ。携帯電話だからだろう。

「夜分遅くに済みません。高町です」

がたんつ、と何かが落ちる音が、受話器の向こうから聞こえてきた。

『た、高町さん！？』

「はい。こんばんは」

『五日も休んでどうしたの！？心配したのよ！？』

「済みません、面倒臭かったんです」

私は嘘が下手だ。どうせバレるなら、最初から正直に聞き直って話してしまっただ方がいいだろう。

『め、面倒臭いって、あなた………』

「人付き合いが面倒なんです。だから、誰とも会いたくありません」

『本気なの！？』

「はい。なので、しばらく学校へは行きません。じゃ」

『待って！』

電話を切ろうとしたが、まだ話があるようだ。

『そこにご両親はいらっしゃるの！？すぐに替わって！』

ご両親、ねえ。思わず苦笑が漏れる。

「喫茶店にでもいるんじゃないですか？」

ぶちっ、と電源を切り、着信拒否リストに放り込んだ。

「秀人さん、オツケーだよ」

「ん。それじゃ、着替えの準備しようか」

「はいっ」

翌日の朝。バイクに乗り、温泉宿に向けて出発した。市街地を走り、高速道路に乗る。メーターを覗いてみると、現在の速度は時速120キロ前後。散々アクロバティックな走行で慣らされた私たちには、どうってこと無い速度だった。温泉宿に着いたのは、お昼過ぎだった。寄り道してたら、遅くなっってしまった。

「吾妻さまですね。ご予約、承っております」

通されたのは、十畳ほどの和室。私たちには丁度いい広さ。温泉は、共用の大浴場の他に、各個室ごとに用意されているらしい。障子を開けたそこには、柵に囲まれた石風呂があった。

「せっかくだから」と、まずは大浴場に行くことにした。当然、男湯と女湯は別になっている。ペットの連れ込みは厳禁だから、ユノくんは部屋でお留守番。何だか、悪い。

脱衣所で服を脱ぎ、かごに入れる。

と、私のすぐ横に、女の人はずいっと現れた。

……こんなに広いんだから、別の場所を使えばいいのに。

視界の隅に揺れる、真っ赤な毛髪。

（え？）

思わず、横を向いてしまった。うん、見間違いなんかじゃない。お姉さんの髪の毛は、鮮やかな茜色だった。

「珍しいかい？」

不意に、お姉さんに声をかけられた。まじまじと見すぎた。

「う、ごめんなさい」

「いいえ」

外見とは不釣り合いな、無邪気で子供っぽい笑みを見せる。

「綺麗だと思いますよ?」

「ありがとうございます」

そして、豪快に服を脱ぎ捨てた。羞恥心が薄いのだろうか。引き締まった肉体が、いやに眩しい。

「なあ、アンタ……」

「はい?」

浴場に入ろうとしたところで、また話し掛けられた。

「あたし、こういう場所に来るの初めてなんだ。ちょっと教えてくれよ」

えつと、つまり、温泉でのマナーを教えてあげればいいの?

「わかりました」

「よし!じゃ、行こうか!」

「……え?」

がっしりと手を取られた。

「あの、口頭じゃ……」

「ダメだ。あたしは体験主義者なんだ」

ずりずり……

「あ……」

「まずは身体を洗います」

身体を洗うスペースへ行き、椅子に座る。

「身体を洗う時は、かならず椅子に座って、シャワーは通路側ではなく、壁際に向けて」

桶にお湯を張り、手足など、体の末端から徐々に掛け湯をして温めていく。お姉さんも見よう見真似で、掛け湯をする。

石鹸をタオルで包み、泡立てる。身体を洗い、汚れを丁寧に落とすて行く。

「うー……あたしや、このシャンプーってのが苦手だね」

「ああ、目に入ったら痛いですね」

目をぎゅっと瞑り、わしわしと乱暴に髪の毛を洗っている。

そして、湯船に入る。

「……………」

う……………なんか、お姉さんがじっと私を見てるんだけど……………

「あの……………何か？」

「なんか、悩んでる匂いが……………」

「に、匂い……………？」

腕に鼻を近づけ、嗅ぐ。石鹸と温泉の匂いしかしない。臭く……………
ないよね？

「じゃなかった。悩んでる顔してるからさ」

見ず知らずの他人に話すような内容じゃないことは、わかっている。
こんな話、されるほうが迷惑だろうし、気分も悪いはずだ。

「勝負に、負けちゃったんです」

それなのに、話さずにはいられなかった。

「負けられない……………負けちゃいけない勝負に。ほんの数秒で」

それっきり、黙り込む。お姉さんも、何も言わない。

(やっちゃった……………)

いきなりこんな話されてドン引きしてるんだ。ああ、もう。私の馬
鹿！

「じゃあ、次は負けないように頑張るしかないね」

「え？」

お姉さんは、笑って……………それでいて、真剣な表情で、そう言った。

「そうだろ？ 足を止めたら、今度こそ、本当に届かなくなっちゃ

うよ」

照れくさくなったのか、そっぽを向く。

「頑張ったのに報われないなんて、そんなこと、あっちゃいけない
んだ……………」

その最後の言葉だけは、私に向けられたものではないようだった。「あの、ありがとうございます……………あれ？」

私の隣にいたはずのお姉さんは、忽然と姿を消してしまっていた。

『じゃあ、次は負けないように頑張るしかないね』

お姉さんの言葉を、反芻する。

「全く、気軽に言ってくれちゃって……………」
くすり、と笑う。

そつだ。一回負けたくらいで、何をうじうじ悩んでいたんだろう。

今の私がするべきことは、負けないように頑張る、ただそれだけじゃないか。今度こそ、勝つために！

熱意が、沸き上がる。

「よし！」

ぱんぱんっ、と両頬を叩き、板張りの廊下を駆け抜ける。

私は、まだ頑張れる！

……………

がつんっ。

薄暗い裏庭に、不穏な音が響いた。

「うぐっ……………」

茜色の頭髮をもつ女性……………アルフが、頭を押さえてうずくまる。それを、絶対零度の視線で見下ろすのは、彼女の主であるフェイトだ。

「……………ねえ、どうして？」

華奢な手には、血を滴らせる黒い斧。これで、アルフの頭を打ち据えたのだろう。

「ボク、言っただよね？」 『あの子の心をへし折る』って「

「……………ああ」

抑え切れず、赤い血がアルフの額を伝い、地面に染み込んでいく。

「だったら!」

「あつっ……………!」

長い髪の毛を掴み上げ、顔の高さを合わせる。

「なんで、元気付けるような真似をした!! ええっ!?!」

真っ赤な双眸は怒りに見開かれ、使い魔たるアルフを睨みつける。

そして、再び斧を振り上げ……………

ガンッ!

「言うことを聞けない、悪い子には! お仕置き、だっ!!!」

ガンッ! ガンッ!

二回。三回。打ち据えられる度に、アルフの身体に衝撃が走り、血が飛び散る。

「はあっ、はあっ……………!!」

肩で息をして、血を流して倒れるアルフを見下ろす。

「ねえ……………アルフは、ボクのがキライなの? ボクのことなんてどうだっていい?」

ボクを困らせるのが楽しい?」

次の瞬間には、怒りは消え失せ、深い哀しみを浮かべた。あきらかに、情緒が不安定だ。錯乱している、と言ってもいい。

「キライなはず、無いだろ?」

アルフは、フェイトの華奢な身体を抱きしめる。フェイトは機嫌を良くしたのか、アルフを柔らかく抱き返した。

「じゃあ、もうボクの言うことに逆らわない? ちゃんと言うこと聞く?」

深い、深い、深淵のような瞳で、アルフを真っ直ぐに見据える。

「……ああ、約束するよ」

「絶対だよ……悪い子は、いらなからね」

そして、慈しむように、アルフの血まみれの頭を撫でる。

びちゃ……とフェイトの手が赤く染まるが、意に介さず、アルフを愛撫する。

「……今夜、この辺りにあるジュエルシードが発動するよ」
それに身を任せながら、アルフが言う。

「そうみたいだね」

その気になれば、発動前のジュエルシードを確保できるだろう。だが、そうしない。

「あの子が出て来たら……くふふっ！」

迫る、『お楽しみ』の時間に思いを馳せ、笑いを漏らすフェイト。

「奪ってやる……！」

凜猛な笑みを浮かべる。その感情の猛りに呼応するように、周囲の空気がバチバチと帯電していた。

「あの弱っちい子が必死に集めたジュエルシードを、全部奪ってやる！」

くふふっ、くふふふふっ！！ あーっはっはっは……！！

……

一体何があつたんだ……

俺は、少し離れた場所で見えていた。

「……ここで旋回。振り下ろしてきた斧を、」大浴場から戻るや否や、レイジングハートの前に正座し、イメージトレーニングを始めってしまった。さつきまでは沈み濁っていた瞳が、星を散らしたように明るく輝いていた。

元気になったのはいいことだが、少し、極端すぎる気が……

「バインドは回避……回避した先に、誘導弾で先回り……」

もうかれこれ、二時間近くああしている。

「……すごいよ、なのは」

ユーノも驚いている。

「アバターとはいえ、互角に渡り合ってる」

今まで黒星続きだったというのに、格段に進歩している。

「……よし！」

そして、訓練開始から二時間半。なのはが、汗びっしょりのまま、会心の笑みを見せた。

「勝った！」

『お見事です、マスター』

「やったな、なのは……!？」

お馴染みの、あの感覚。あーあ、やっぱりなあ。嫌な予感だけは、よく当たる。

「行けるか、なのは」

訓練で消耗しているんじゃないか？だが、杞憂だったようだ。

「全然平気。むしろ、いつもより調子いいかも」

身体が温まっているらしい。窓から飛び出し、裏庭へ飛ぶ。

多分……いるだろうな。あの子が。

.....

暴走体は、さほど強力な個体ではなかった。いつも通り、バインドし、射撃魔法で弱らせ、封印。還元されたジュエルシードをレイジングハートに納める。

そして、やはり。

『来ました』

月明かりを受けて、金色の髪が輝く。紅い瞳は、猛禽のように私を

捉えていた。

睨み返し、レイジングハートを握る手に、強く、強く力を入れる。
「今日は、勝つ！」

飛翔の勢いのまま、あの子が真つ直ぐに突っ込んできた！

ツガギイイイン！

プロテクションを展開。勿論、これだけで防げるとは思っていない。
あくまでこれは、衝撃を受け流すため。

(……ここ！)

身を翻し、力点をずらし、いなす。即座に方向を換え、斧が迫る。

プロテクションを解除。レイジングハートの柄で、斧の一撃を受け止める。

ギイン！

「うっ！」

受け止められた。だけど、衝撃で手がビリビリ痺れる。

『accel shooter』

罅ぜり合いのまま、誘導弾を発動。

『photon lancer』

あの子も、光の槍を出現させた。

「シユート！」

「ファイア！」

発射は、同時。

ズガガガガガッ！

攻撃魔法は、ぶつかり合い、互いを食い合う。そして、最後の一発が爆ぜ、その場から離れる。

「ふうん、腕を上げたね」

どうでもよさ気に呟く。バリアジャケットの腰の部分が、擦り切れたみたいになっていた。

「でも、まだ届かない」

ぱきん、と音を立て、私の手甲が碎ける。

「すぐに届かせるよ」

不敵に笑い返す。それがカンに障ったのか。

「調子に……!!」

ぐぐつ、と。獲物に飛び掛かる猛獣のように身体をたわませる。そして……

「乗るなアアアツ！」

視認できる限界の速度で突っ込んで来た！

.....

少し離れた場所で、衝突音と光が瞬く。

(なのは、負けるなよ)

俺とユーノは、結界の上空を飛んでいた。

月村邸での一件。明らかに不自然なタイミングで結界に穴が空き、彼女達がなのはと接触した。最初は、あの黒衣が空けたのかと思っていたが、俺と戦っていた場所からでは遠すぎる。なら、残る可能性は。

「協力者がいる」ということ。

伏兵として、結界の中に潜んでいる筈だ。エリアサーチは、レイジングハート無しでは発動できない。だからこうして、肉眼で探している。そして。

「いた!」「」

茂みに身を隠すようにして、茜色の毛並みが揺れている。

「ガアアツ!」

ドンッ!

見つかったと分かるや否や、攻撃魔法を仕掛けてきた。照準は甘い。牽制目的だとアタリをつける。

「だありゃああああああ！」

足元にインパクトを纏わせ、急降下！

バゴオオオオン！

地面をクレーター状にえぐり取る。だが、手応えは無い。回避したか。

周囲は鬱蒼とした雑木林。奇しくも、月村邸と似通った雰囲気だ。獣にとつて、これほど有利なフィールドは無い。

「なら……」

手の平に、魔力スフィアを出現させる。インパクトに、拡散効果を付与。広範囲を、纏めて！

「吹ッ飛ばえ！！」

ドゴオオオオン！

ばきばき……と、衝撃波を浴びて樹木が薙ぎ倒され、効果範囲が更地になる。

「まだまだあつ！」

二発、三発と連射する、その度に、更地の面積が広がる。

「ちよつとちよつと！　いくら直せるとはいつても、限度があるからね！？　主に僕の魔力とか体力とか！」

「頑張れ！」

「ちよつとおおおお！？」

「ガアッ！」

獣とて、逃げるばかりではない。大振りになった隙を突き、鋭い爪と牙を剥き、飛び掛ってくる。

「どりゃあっ!!」

それを、強化したブーツの底で迎撃する。

(やっぱりな。リーチが短い)

それに。

(二体目の暴走体と、戦い方がソックリだ)

そう。俺には、その分だけアドバンテージがある。

「ガアアッ!!」「よっ!!」

爪の一撃を回避する。目も慣れてきた。

「おりゃああああ!!」

ドスッ! ガコッ!!

腹部にミドルキックを浴びせ、下顎へアッパーを叩き込み、

「ガ、ゲッ……!!」

「沈めえっ!!」

ふらついた頭部に、踵落とし!

「ギアアッ!!」

茂みに落ちて行く。上がってくる気配は……無い。

「やった!!」

「いや、仕留めそこなった」

直前に、橙色のプロテクションで威力を殺された。そして、この場にはもういない。

「行くぞ。多分、なのはの所だ」

この距離なら、飛んだ方が速いな。

「……フロート!!」

意識を集中し、足首に環状魔法陣を展開。そして、なのは達の元に飛んだ。

首筋に、鎌をぴたりと突き付けられた。魔力で形成された光の刃が、肌をチリチリと焦がす。……まさか、こんな隠し玉を持つてるなんて。

「またボクの勝ちだね？」
笑顔で勝ち誇る。

「……………」
レイジングハートが明滅する。そして、ジュエルシードを一つ、吐き出した。

「舐めてるの？」
彼女は笑顔を消し、冷えきった声を出す。と、首筋に当てられていた鎌が離れ、そして。

ガギユン！
「……………」
レイジングハートの柄が……真つ二つに、切断された。

「お前……………」
「一つで見逃す訳無いでしょ？ 全部だ。全部よこせ！」
鎌が、再び押し付けられる。

「頭と胴体、永遠にお別れさせたい？」
「こ、この……………」
拳を固める。だけど、動けない。

「あはは、何？」
レイジングハートが、ジュエルシードを排出しようとしたその時……………

ガコンツッ！

青い魔力弾が、彼女を弾き飛ばした。

「うぐっ！！ だ、誰が……………」
隙あり！ 今だ！

『Impact』！

至近距離から……！

「喰らえ！」

ドオン！

「があっ……！」

腹部に衝撃波をまともに喰らい、悶絶している。

「よくも……！ げほっ、げほっ……！」

距離を取り、レイジングハートを向ける。幸にも、破壊されたのは外装部分だけ。魔法の行使する分には、何の問題も無い！

「デイバイン……！」

もう一回、喰らえ！

「バスター……！」

ドカアアアン……！

発射された砲撃は二十メートル程度の距離を一瞬でゼロにし、着弾した。

『直撃です』

「あははははっ、ざまあみろ……！」
気分爽快！

向こうから、秀人さんが飛んできた。

「秀人さん、ありがと。助かった」

あの最初の一発が無ければ、ジュエルシードを全部奪われるところだった。

「レイジングハート、大丈夫か？」

私の握る、真つ二つになったレイジングハートを見て心配する。

『問題ありません。魔力さえあれば、再構成が可能です』

「秀人かなのはが魔力を注げばくつつくよ」

言われた通り、魔力を切断面に集中する。切断面が僅かに輝き……

『Recovery completed』

元に戻った。よかった……

「プラナリアみたいだな」

「ちよ、秀人さん!？」

秀人さんが、言うてはいけない一言を言ってしまった! 確かに、

私もちよつと連想したけど!

『ブチ殺しますよ?』

「レイジングハートも何言ってるの!？」

まあ漫才はさておき。

煙が晴れたそこには、意外なほど無傷なあの子がいた。傍らには、真つ赤な毛並みの狼。あれが、彼女の仲間なんだろう。

「あ、アルフ!」

「ぐ……」

だが、狼の方は肩が上下して、無事には見えない。

『あの使い魔が、彼女の盾になったようです』

デバインバスターの直撃を受けたのは彼女ではなかったらしい。

「チツ、しぶといなあ……」

悪態をつき、再びレイジングハートを向ける。

「で、どうするの? 三対一で、足手まといを連れて、まだやる?」

形勢逆転。彼女は憎悪を滲ませ、私たちを睨む。

「お前たち……! 絶対に、許さない!」

ふちん、と。私の頭の中で、何かが切れた。

「……許さない、だって?」

自分のものでは無いような、底冷えした声色。

「そんなの、こっちの台詞だ! よくも、私のレイジングハートを傷付けたな!

そんな犬コロごときの命程度で、許すもんか!」

「お前えええ……!」

ぎらぎらとした瞳。きつと、今の私も同じような目をしているだ

ろう。

「私は、高町なのは」

「フェイト・テストロツサだ」

レイジングハートを、黒塗りの斧を、お互いに突き付け、宣言する。

「絶対に！」

「必ず！」

私は、こいつを！

「叩き潰してやる！」「」

黄金色の魔力光と共に、彼女……フェイトは消えた。

………

なのはとフェイトと名乗る魔導師がタン力を切り合い、数分が経った。なのはは、フェイトがいた虚空をじっと睨み続けている。

……そろそろ、だな。

「なのは」

頭に、ポンツと手を載せる。

「もついいだろ。戻ろう」

「……うん」

漲っていた殺気が霧散し、同時に、セットされていた複数の攻撃魔法がキャンセルされる。よっぽど、頭に来ていたんだろう。

地上に着地し、レイジングハートを待機状態にする。

「私、負けてないよ」

俺に手を引かれながら、なのはが一人ごちる。

「引き分けだもん」

……正直に言えば、今回はなのはの負けだ。

俺の援護が無ければ、あのまま全てのジュエルシードを奪われていた。ユーノもそれがわかつているのか、何も言わない。

「……そうだな。引き分けだ」

わしわしと少し乱暴に頭を撫でてやる。

「あは、くすぐりたい」

洗ったばかりの髪の毛は、土埃を着けてしまい、ごわごわしていた。

「宿に戻って、入り直そうか」

.....

「アルフ、大丈夫？ 痛まない？」

ある高級マンションの一室。そこは、フェイト達の活動拠点に与えられた部屋だった。

「大丈夫さ、この、くらい……」

備え付けのベッドに横たわる、紅髪の女性……アルフは、呻きながらも健気に返事をする。包帯があちこちに巻かれてあり、砲撃の威力が窺い知れる。その無数の傷の中には、フェイトの折檻によるものもいくらか含まれているのだが……フェイトは気にするそぶりを見せない。

「ボク、『庭園』に戻らないといけないの。一人で大丈夫？」

「それって……」

「うん」

フェイトは、僅かに嬉しそうな仕草を見せた。

「おかーさんからの、呼び出し」

「……待って、あたしも行くよ」

アルフは、よろけながらも立ち上がり、言った。あの女と、一人きりで引き合わせるなど、到底出来ない。

（あの女は、いつもフェイトを……）

「そう？ 無理しちゃ駄目だよ」

アルフの手を引き、屋上へと向かう。とは言え、フェイトの部屋は屋上の真下なので、短い階段を上るだけだ。

屋上の扉を開けると、冷たい空気が流れ込んできて、フェイトは僅かに身をすくませた。

「うっ、寒っ。早く行こうっ」と

言うや否や、足元にミッドチルダ式魔法陣が浮かび上がる。選択されたのは、転移魔法。

「座標入力、っと」

フェイトの手の中で、封印済みのジュエルシードが三つ輝く。

「おかしさん、喜んでくれるかな」

アルフは何も言わない。

「褒めてくれるかな」

ただ悔しそうに、顔を歪めている。

.....

泥や落ち葉があちこちにこびりついて、気持ちが悪い。宿の入口で、仲居さんに驚いた顔をされてしまった。

「お客様、どうされたんですか!？」

「いえ、足を滑らせまして……ははは」

掻いた頭から、ジャリッ、と嫌な手応えがした。現場帰りよりはマシだが、だからといって放っておく理由は無い。

大浴場に比べたら遥かに小さいものの、手頃な広さの浴室は、二人と一匹で入るには丁度いい。二人して適当に服を脱ぎ、シャワーを浴びる。

「……本当は、分かってるよ」

気持ちよさそうにシャワーを浴びながら、なのはがさっぱりとした口調で言う。演技でもやせ我慢でもなく、素直に自分の敗北を受

け入れているらしい。

「今日のは、私の負け。でも、」

くるっと振り返り、にっこりと笑う。

「今度は、負けない」

「ああ、頑張ろうな」

そして俺達は翌朝、温泉宿を後にした。

.....

ぱんっ！

乾いた音が、高い天井に反響した。

「..... たったの三っ」

不機嫌を隠そうともしない、低い声。それが、フェイトの母親、プレシア・テストロッタの、出迎えの言葉だった。

「ひどいわ..... あなたは、私の研究なんて、どうだっていいのね？」

ぱんっ。ぱんっ。

二度三度と、フェイトの頬を張る。

「ごめんね、おかーさん」

だがフェイトは、赤く腫れた頬を気にするでもなく、笑顔を浮かべる。

ぱあんっ！

「あうっ.....」

一際強く、プレシアがフェイトを叩いた。フェイトは床に倒れる。

「何を笑っているの.....？ この役立たずが！」

どずっ！

プレシアのつま先が、フェイトの腹に突き刺さる。母親が娘に与える体罰.....そのレベルを遥かに超えた、暴力だった。

「げっ.....!」

胃液を吐き、悶絶するフェイト。その両腕が、プレシアのバインドにより空中に吊り上げられ、磔にされる。

「言うことを聞かない悪い子には、お仕置きが必要ね」

プレシアの手にするデバイスが、鞭のようにしなる。明らかに、対象に痛みを与えるための形状。だが、それでも……、フェイトは、笑顔を絶やさない。

「はは、あはははは……」

ただ空虚に、けたけたと笑う。プレシアは顔をしかめ、鞭を振り上げた。

バチイインツ！

「うあああああああああッ！」

痛ましい悲鳴。白い肌に、真っ赤なみみず腫れが刻まれる。

「い、たい……痛い、よお……あはは、あはははは……！」
そして、空虚な笑い。

「ッ！ その、耳障りな笑いを止めなさい！」

バチンツ、バチイイインツ！！

「あああああッ！！」

皮膚が裂け、真っ赤な血がたらたらと滴る。

「はあ、はあ……」

フェイトの顔から、歪な笑顔が消える。そのように、命令されたから。

「フェイト……あなたは、私のことが嫌いなのかしら？」

バチンツ！

「フェイト……あなたは、私のことなんてどうだっただっていいの？」

バチンツ！

「フェイト……あなたは、私を困らせるのが、そんなに楽しいの？」

バチンッ！

プレシアがそう問いかける度に、フェイトの身体に傷が刻まれる。

（そうだ。ボクが悪いんだ。ボクが愚図だから。

おかーさんの力になれないから。おかーさんはこんなに怒ってるんだ。

だから、おかーさんは、ボクの悪いところを、直そうとしてくれてるんだ）

鞭で黽られながら、フェイトは……決定的に間違った思考にたどり着く。

（喜ばないと。おかーさんがボクのためにしてくれているんだ。笑わないと。もっと、笑わないと……）

「違う、よ……ボクは、おかーさんが大好きだよ……一番、大事だよ。困らせたくないよ、ないよ……」

息も絶え絶えに、言葉を搾り出す。

「もう、私の言うことに逆らわないわね？」

「……はい。おかーさん」

「言ったとおりにするわね？」

「……はい。おかーさん」

「悪い子は、いらさないわ」

そう言い残し、プレシアは広間を後にした。

気を失ったフェイトは、果たして気づいているのだろうか。

その光景は……自分と、アルフのやりとりと、全く同じだということ。

第七話（後書き）

書き忘れていたんですが、なのはは、髪を結っていません。
そして、フェイトはボクっ娘です。

虐待の連鎖って、怖いですよ。

もう少しだけ、辛いお話が続きます。
書き貯めていた分は出し切ったので、少しペースを落とします。

第八話（前書き）

3万PVオーバー、ありがとうございます。

?????? 今回は何でこんな話を書いたのか、さっぱりわかりません。

プロットにもありません。

ひたすら眠いです。

第八話

ユーノくんが張った結界の中。バリアジャケットを纏い、秀人さんと対峙する。

「……………行くよ」

「よし……………来い！」

そして秀人さんは、1.5メートル程の木の棒を魔力で強化し、構える。その構えは、あの子……………フェイトと同じ構え。

『accel shooter』

まずは、誘導弾！

「シユート！」

数は、正面から二つ、背後から一つ、左右それぞれ一つの、五つ！

「はああああっ！」

棒を剣のように、槍のように操り、振り回し……………全ての誘導弾を撃墜。

やはり、五つ程度では牽制にしかない。

「足を止めるな！」

踏み込み、攻め込んだ。

『accel fin』

飛行魔法、行使！

「せりやあつ！」

ガンッ！

一秒前まで私がいた場所を、秀人さんの一撃が抉った。無意識のうちに、喉がごくりと鳴る。

「縛れ！」

『ring bind』

拘束魔法！

「フローター！」

秀人さんもまた、飛行魔法を行使。バインドの照準から逃れる。

「……リアクティブ・アーマー」
え？

秀人さんがぼそりと呟いたのと同時

ドゴオオオオン！！

凄まじい轟音を伴い、防御魔法が炸裂。砲撃が、見当違いの方向に逸れる。

「レイジングハート、砲撃キャンセル！」

『All right』

砲撃を消すのと同時間、背後に防御魔法を……！

「はい、撃墜」

間に合わなかった

頭に、こんつ、と軽く棒が当たる。

「二人とも。模擬戦は終了だよ。戻ってきて」

「あ~~~~~！！ 悔しい！！」

例の高台のベンチに座り、おにぎりをほお張るなのは。

「にしても、偶然つてのはあるものなんだなあ……」

なのはのバリアバーストと、俺のリアクティブアーマー。なのはは、砲撃に必要な距離を取るため。俺は、相手の死角を取るため。用途は違えど、効果そのものは殆ど同じものだった。

「結構いい模擬戦だったよ」

ユーノがビスマットを齧りながら言う。

「秀人が、まさかあそこまでフェイトの動きをトレースできるなん

て思ってたなかった」

「あんなもん、ただの猿真似だよ。本物は、もっと速い」

「私は、それでも勝てなかったんだね……」

「ずんずんと暗くなっていくのは。やばっ。」

「い、いや、結構危ない場面もあったんだぞ!？」

慌ててフォローする。ユーノも援護に回った。

「そうそう! 秀人に砲撃が直撃した時なんて、なのはの勝ちだと思っただし!」

……確かに、死ぬかと思った。非殺傷設定とわかっていても、あの圧倒的な威力に晒されたら、誰だって恐怖を覚えるだろう。

「それじゃあ、戦い方の基本方針は、これで大丈夫?」

『問題ないでしょう』

なのはの問いに即答するレイジングハート。

「フェイトのバリア出力は、なのはや秀人よりもずっと低い」

月村邸での俺との戦い、温泉宿でののはとの戦い。二つの話を総合するに、フェイトは速度に重点を置いた戦法を取っているらしい。

「そんじゃあ、バインドの精度を上げればどうだ? 捕まえれば、いくら速く動こうと関係ないだろ」

「それができれば苦労はしないよ……あいつ、バインドが決まる寸前でも回避しちゃうし」

『では、精度ではなく、発動速度を上げましょう』

「それなら、防御魔法も同じようにしよう。さっき、間に合わなかったし……」

ああでもない、こうでもない、フェイト攻略戦のアイディアを練る俺達。

「私は……あの子に、勝ちたい」

あの日の晩、なのはは、確かにそう言った。なら、俺達は仲間として……そして、家族として、最大限の『サポート』をするつもり

だ。そう。あくまで、サポートを。

「あの狼は、俺に任せろ」

俺とユーノは、あの狼に勝負の邪魔をさせないことにだけ集中すればいい。

「いいけど……大丈夫？」

「いざとなったら、ユーノを餌にして逃げるから大丈夫だ」

「ああ、それなら大丈夫だね」

『最良の策です』

はっはっは。

「……………泣いていいかな、僕」

私は玄関先で、愛用のスニーカーに足を入れた。

「行ってきます」

教科書を入れた背中の鞆が、重量以上に重く感じられる。

「いってらっしゃい」「頑張れよー」

玄関先まで見送りに来てくれた秀人さん、ユーノくんが、揃って手を振る。

(……………よし、行くぞ！)

そして、戦場に赴く気持ちで、ドアを開けた。

私は、学校へ行くことにした。

人付き合いが怖いからといって逃げていたら、いつまでも強くはなれない。絶交した同級生の敵意であろうと、口うるさい担任の小言だろうと、真正面から受け止めてやる！

そんな私の内心にも気づかず、通学路では、私と同年代や、ちょっと上くらいの子供達が、学校の方向へ歩いていく。

その中に、見つけてしまう。サッカーボールを入れた袋を提げた

葉山君と……それに寄り添う、八代さんを。胃のあたりが、きゅつとすばまるような感覚をかみ殺す。

「あーあ、あのグラウンド、地震のせいで使用禁止になっちまったんだよなあ……」

「仕方ないでしょ。それとも、ぼこぼこに荒れたグラウンドで練習したいの？」

その横を、無言で、視線を向けず、追い抜く。

「いや、だってよお。野球部と一緒にだと、思いつきり練習が……あ」「どうしたの……あ」

私達は、絶交しているんだから。私は早足で、学校への距離を消化していった。

「おはようございます。富山先生はいらっしゃいますか？」

職員室のドアを開け、声を掛ける。一時間目の授業の準備を控え、コーヒーを飲んでいたりしていた教師達の視線が集まる。その中に、担任の富山先生がいた。

「たっ……高町さん!？」

ただただっ、と駆け寄ってくる。これから始まるお説教のことを考えると、少しだけ憂鬱だ。

「この一週間、どこへ行ってたの!？ 家にはいないし、ご家族とは連絡が取れないし!」

「ちよつと、自分探しの旅を」

あながち間違っではない。

「……それは、学校よりも大切な用事だったのかしら?」
低い声で詰問してくる。

「ええ、間違いなく」

それに、即答。周囲の教師の声が止み、緊迫した空気が流れる。

じーーーーーーー……つとにらみ合う。さて、教室に戻るかな。これ以上は平行線の水掛け論になるだろうし。

「あなた達、ちょっとこつちに來なさい」

そして口火を切ったのは、私でも、富山先生でもなく、学年主任だった。

「立ち話も何ですから……他の先生の目もありますしね」

そして案内されたのは、六畳くらいの小会議室。四角いテーブルに、四つの椅子。私の向かい……学年主任の隣に座ろうとした富山先生だったが、何故か私の隣に座らせられてしまった。微妙に気まぜい沈黙。

「あのう……長谷川先生。なぜ、私まで」

どうにも、富山先生は学年主任……長谷川先生に苦手意識を持っているようだった。長谷川先生は曖昧に笑い、話し始めた。

「まず、高町さん。あなたは、正当な理由も届出も無く、長い間欠席しました。これは、悪いことです」

「……はい」

「本当に、何を考えているの!？」

隣に座った富山先生が、ぷりぷりと怒り出す。

「富山さん。少し静かになさい」「は、はいッ!」

だが、長谷川先生に静かに一喝されてしまう。

「一応、富山さんから聞いています。『人付き合いが面倒』『誰とも会いたくない』『……でしたね』」

「……はい」

確かに、そう言った。

「それに関して、親御さんは何か?」

ここで秀人さんの名前を出してしまったら、きっと、悪いことが起きる。だから私は仕方なく、『あいつら』のことを、話した。

「母親と兄と姉は、仕事で家に殆どいないので何も言われません。きっと、私が休んでいたことも知らないと思います」

ガタンッ

大きな音にびっくりして、横を見る。

「……………そんな」

富山先生が、呆然とした顔で、私を見ていた。

「あ、す、すみません……………」

慌てて座りなおし……………しかし、私のことを凝視する。何だと言うのだろうか。

それを見ていた長谷川先生も、真剣な表情だ。

「高町さん。私に、欠席の理由を教えてもらえませんか？」

怒るでもなく、淡々とでもなく……………真摯な問いかけだった。『大人』という生き物への警戒心が、解けていく。

「……………昔の知り合いに、会ったんです」

そして、魔法に関する事柄を省き、話した。

「何で、相談してくれなかったの!？」

第一声が、それが。かちんときた。

「あなたに相談したら、どうにかしてくれましたか？ 他校の小学生を呼び出して、仲直りの握手でもさせてくれたって言うんですか!？」

「私は、あなたのことが心配で……………!」

ぶちんつ、と。タダでさえ短い堪忍袋の尾が、切れた。

「心配!? 大きなお世話だ! 放っておいて! どうせ心の中では、私のこと、面倒な子供だって思ってる癖に! いい人ぶるな!」
「ツツ!」

右手が、振り上げられる。叩きたければ叩けばいい。

振り上げられた手が、視界一杯に広がる。反射的に目を閉じ、やってくるであろう痛みを覚悟する。だが、痛みは、いつまで経ってもやってこなかった。

うつすらと目を開けると、富山先生の腕を、長谷川先生がしっかりと掴んで止めていた。

「富山さん……………高町さんも。少し、頭を冷やさない」

目の前には、湯気を立てる湯呑み。中身は緑茶だ。

「落ち着きましたか？」

「……はい」「……すみませんでした」

「高町さん」

長谷川先生が湯呑みを置いた。

「富山さんは、あなたのことを『面倒な子供』だなんて、決して思っ
つてはいません。富山さんは、口調や態度こそ少し乱暴ですが……
決して、悪い子ではないのですよ？」

悪い『子』って……何故に子ども扱い？

「富山さんがあなたくらいの頃なんて、それはそれは大変でしてね
え……」

「は、長谷川先生！ 何の話をしているんですか！」

富山先生は、長谷川先生の元・教え子ということだろうか。なら、
子ども扱いも頷ける。

「授業妨害、授業放棄の常習犯でした」

……強烈な問題児であつたらしい。

「やめてー！」

己の黒歴史を暴露され、真っ赤になる。力づくで長谷川先生の口
を塞ごうとするも、逆にあしらわれ、羽交い絞めにされてしまった。
「教師や上級生への暴力沙汰もありましてねえ。何度もこうして止
めたんですよ。六年生の男子数名をたこ殴りにしていたこともあつ
て……」

「放してー！ それ以上言わないでー！」

じたばたと暴れる富山先生は、子供のように足だけでばたばたと
暴れる。

「果ては深夜徘徊ですよ。夜遊びをすれば補導され、盗んだ自転車
で走り出せば補導され、タバコを吸っては補導され……警察署に
何度頭を下げに行ったやら。両手の指では足りませんね」

「ごめんなさいごめんなさい！ 先生ごめんなさい！」

五分後。

「うううううう……ひどいよ、長谷川先生」

長谷川先生は、富山先生の過去をひとしきり暴露した後、小会議室を出て行った。「あとは、二人で話をつけなさい」とのことだ。

「先生……『棚に上げる』って言葉、知ってます？」

自分は散々暴れていたくせに、何で私のことをあんなに怒るんだろう。

「うっ……もう時効よ！ ちゃんと更正したもん！ タバコも吸わないし、午後十一時にはベッドに入るもん！」

「それは普通です」

「……」「……」

なんだか、教師というよりは、面倒くさいOGというイメージが強くなってしまった。

「あの頃、私の両親が離婚調停の真っ最中でねえ」

離婚。

永遠の愛を誓い合ったはずの夫婦の、断絶。

「だから、なんて、正当化はしないけど、理由の一つだったのは間違い無いわ」

微苦笑する、富山先生。

そして、どこかで聞いたような話を、始めた。

「家の中は真っ暗で、帰っても誰もいなくて……それが、すごく怖くて」

一人で寝るのが怖くて……でも、家には私しかなくて。家

中の電気を付けて、ぬいぐるみを抱きしめて、眠った。

「机の上に、千円札だけがポンって置いてあって、それでご飯を買ったり、作ったり」

『これで、夕食を買って食べてください』
それが母から私への、初めての手紙だった。

「お鍋一杯に両親の好きだったカレーを作って……結局、何日も食べられずに捨てちゃったり」

私が始めてまともに作れた、野菜炒め。大きなお皿一杯に作って、「食べてね」という手紙を添えて……翌朝、手付かずのまま残ったソレを見つけて……泣いた。

「お話がしたくて、仕事場に電話をかけたら……」『仕事の邪魔だ！』
って怒鳴られた」

『今忙しいんだ。後で掛け直すから……』
『後』は、いつまでも訪れなかった。

「暴れて、大騒ぎすれば……パパとママが止めに来てくれる、なんて夢想して」

私が『いい子』で我慢していれば、帰ってきてくれると信じて。
「警察のご厄介になっても、迎えに来るのは、面倒くさそうな顔をした教師だけだった」

『いい子』にしていたのに、私は、いつまで経っても一人ぼっ

ちだった。

「いつしか、迎えに来る教師は減って……でもね」
前置きし、うれしそうな、恥ずかしそうな……笑顔を浮かべた。

「長谷川先生だけは、何度も何度も、迎えに来てくれた」

秀人さんが、繋がりくれた。

「担任じゃないのに……それどころか、担当する学年さえ違つのに」
大人と子供。

教師と生徒。

その隔たりを越えて、私は、この人を身近に感じる。

「面倒くさそうな顔じゃなくて、おじいちゃんが孫娘の悪戯でも見るような顔で、『仕方ないなあ』……って。その時、まだ三十路前だったのよ?」

面白そうに、くすくすと笑う。

「万引きをしたときは……殴られたわ。グーで」

痛い思いをしたはずなのに。笑顔は崩れない。

「痛くって、痛くって……『何しやがる、このジジイ!』って思ってたわ。でも、心のどこかで、喜んでいいる自分がいて」

私も、もしかしたら。何かが違うていれば、この人のようになっていたのだろうか。暴力で誰かを振り向かせようとして、それが原因でそっぽを向かれ、さらに暴力で振り向かせようとして……悪循環に陥って、抜け出せなくなっていたのではないだろうか。

「それでね。何回目か、警察署から私を引き取った時、聞いてみたの。『こんなことして、アンタに何の得があるんだ。給料も出ないくせに』って」

さっき、私が言ってしまった言葉と、ほぼ同じ。

「その時の長谷川先生の言葉は……一言一句、覚えているわ」

目を閉じる富山先生。今、彼女の目蓋の裏に映っているのだろう。決して色あせない、大事な思い出が。

「『あなたのことが、心配だからですよ。』

あなたは、自分の未来を、自分の手で閉ざそうとしている。教師である私には、それが我慢できない。あなたの未来は、きっと素晴らしいものになるのです。だからどうか、あなたを、あなたの未来を助けさせてください』」

そつと目を開ける。

「嬉しくて泣いたのなんて、初めてだったわ」

私は、知っている。人は、辛いときや、悲しいときじゃなくても、涙を流すときがあるということ。

「長谷川先生がいなかったら、今の私はいない」
きつぱりと、断言した。

「だから長谷川先生は、恩師であり……私の、生涯の目標なの」
彼女の笑顔は、眩しくて、温かくて。

「あんな大人になりたくて、困っている子供を助けられるようになりたくて、私は、教師になったの……って、高町さん!? どう、どうしたの!？」

「何が、ですか?」

「あなた、泣いているじゃない!」

私の目からは、大量の涙が流れていた。

「な、なんでも、ない……」

「何でも無いなんて、えつと、どうしよう、どうしよう」

あたふたと慌てた富山先生は、どうしたことが、私を抱きしめた。

「ほら、落ち着いて。落ち着いて、言いたいこと、全部吐き出しちゃいなさい」

ぼろぼろと涙を流しながら。秀人さんへの想いを、打ち明ける。

「私も、助けてもらったんです」

思い出せる。秀人さんと会った時から、今日までの全てを。

「見ず知らずの私に、『家族になるう』って……言ってくれて。居場所をくれて。名前を、呼んでくれて。一緒にご飯を食べてくれて、一緒に寝てくれて、一緒に遊んでくれて。授業参観にまで、来てくれて」

「それは……あの時の？」

こくん。素直に、頷いた。

「そうだったの……似てない兄妹だと思っていたけど、そういうことだったのね」

とんとん、と私の背中を叩きながら、頷く。

「私、人付き合い下手だし、誰と、どんな話をすればいいのか、わからないし。友達だって、全然いないし」

「八代さんと葉山君は？」

「絶交、しちゃった」

「……原因は何？」

ひつく、としゃくりあげ、吐露する。

「八代さんは葉山君のことが好きで、でも、葉山君は私のことが好きで……八代さんは、それがすごく嫌だったみたいで、喧嘩になっちゃった」

「そう、友達との喧嘩は、辛いわね」

「違う。友達じゃ、無い」

そこだけは、譲れない。私は、彼女とは絶交したのだ。今更、友達面なんて出来ない。

「頑固な子ねえ……ま、今はそれでもいいわ。いつかは……ちゃんとして、話をつけなさい。前の学校のクラスメイトの誤解も、話せばきつと、分かってくれるわ」

脳裏に浮かぶのは、怒りに染まった、バニングスさんの顔。そして。

出て行け！

ぎゅうつ。先生の服を、皺になるほど握り締める。

「でも、バニングスさん、すぐく怒ってたんです。それに、もし話せたとしても、私は口下手だし、人見知りだし、怒りっぽいし」

先生は胸を張って、自信満々に、言った。

「自慢じゃないけど私だって、まだまだヒヨツ子新米教師で、指導力不足で、怒られてばかりよ」

「本当に自慢になりませんね」

ああ、馬鹿な会話だ。でも、楽しい。

「でもね」

すつと引き離される。両肩に手を置き、私と目線を合わせた。

「少しずつでも、成長しているのよ。あなたみたいな、問題児に揉まれながらね」

大学を出たばかりの、情熱が空回り気味の先生。

「だからあなたも、少しずつ、頑張っていきなさい。ヒヨツ子でよければ、いつでも力になるわ」

ヒヨツ子で、指導力不足で、怒られてばかりで。

「……………ありがとう、先生」

でも、この時ばかりは……………世界一の教師に見えた。

教室に入ると、一旦喧騒が止み、またざわめきを取り戻す。視線を感じ、振り向く。

「……………」

八代さんは、すぐに目を逸らしてしまう。かたかたと震える膝を叱咤し、歩く。ほんの数メートルの距離を、牛歩で歩き……………八代さんの正面に立つ。

「おはよう、八代さん」

ちよっとずつでも、確実に……進んでいこう。

第八話（後書き）

人見知りでトゲトゲしい態度で取り繕ってはいますが、なのはは基本、チキンハートです。

序盤を除き、魔法が殆ど関係ない話になってしまいました……感想を下さい。

この先の参考にします。

第九話（前書き）

遅くなりましたが、第九話です。

Microsoft Wordで、10ページ書ける毎に投稿していきます。

第九話

「フェイト……フェイトおっ！」

アルフが、倒れ伏すフェイトに駆け寄り、抱き上げる。白い肌には、無数の痛々しい傷が刻まれ、今もまだ血を流している。

「あ、あいつ……！ またフェイトをいじめやがったな！」

ぎりっ、と歯を食いしばる。怒りのままにプレシアを追おうとしたアルフだったが、フェイトが手を掴み、止めた。

「アルフ……おかーさんのこと、悪く言ったらだめ」

「でも！」

ぎゅっと力を込めた瞬間、フェイトが痛みで顔をしかめ、アルフはハッと冷静になった。

今は怒るより……フェイトの傷を治すことが先だ。

「傷跡一つ、残してやるもんか……」

アルフの足元に、橙色のミッドチルダ式魔法陣が展開する。暖かな光と共に、魔法が発動された。即効性はあまり無いが、じっくりと、人体の治癒能力を活性化させる治癒魔法だ。外傷ならば、一日ほどで塞がる。

「ほら、帰ろう」

そして、消耗したフェイトのかわりに転移魔法を行使し、活動拠点へと戻った。

「すう……すう……」

ベッドで横たわるフェイトを、アルフが膝枕で休ませていた。

「……よく寝てる」

しばらくは起きないだろう。そして、起きたときには魔力も体力も完全に回復しているはずだ。

目にかかっていた前髪をのけてやる。

「ん、ん……」
ぎゅつ。

寝ぼけて、その手にじゃれ付いてきた。アルフはさせるがまま、慈愛に満ちた笑みを浮かべる。

「おかーさん……」

ずきん、と。胸に痛みが走った。

フェイトが真に求めているのは、アルフではなく、プレシアの愛情。わかつてはいても、そう簡単に受け入れることはできない。それでも。たとえ、フェイトにとって自分の優先順位が二番目以下であるとしても。

「フェイトに救われたこの命は……全部、フェイトのために使うよ」
フェイトが望むなら、暴力も甘んじて受け入れよう。ストレスのはけ口にもなるろう。

そう考え、アルフは苦笑を漏らした。

「あたしはやっぱり、イヌ科なんだろうねえ……」

そして、ほぼ半日が過ぎ、太陽が頂上に昇った頃。

「んー……朝？」

フェイトが目を覚ました。アルフの治癒魔法がよく効いたのか、鞭の傷は殆ど見えなくなっていた。眠そうに目を擦り、枕もとの時計を覗き込む。

「お昼だ……」

そしてまた、ごろんと横になる。寝すぎて、まだ頭がぼんやりとしているようだ。

「フェイト、起きた？」

キッチンから、アルフが声を掛ける。

「朝……じゃなくて、昼ごはんできたよ」

ご飯と聞き、フェイトの胃が空腹を訴えた。よくよく思い出してみれば、この24時間、まともな食事を摂っていない。最後に口に入れたのは、スティック状の栄養食だったか。

テーブルの上には、皿に載せられた料理が並んでいた。殆どは出来合いのものを買ってきて、電子レンジで温めたものだ。

豚の角煮。ローストビーフ。ハム。ベーコン。メンチカツ。フライドチキン。ハンバーグ。フランクフルト。

肉料理で埋め尽くされていた。

「いただきます」

そして、猛然と口に詰め込み始める。

取り皿には、半分だけ食いちぎったメンチカツや、まだ肉が付いているフライドチキンが乗っているというのに、ベーコンに手を伸ばし、二つ目のフライドチキンにかぶりつく。

「はぐっ、はぐっ……ん」

口元はソースや油でべたべたに汚れ、食べかすをぼろぼろと落としている。

食事のマナーというものが、およそ感じられない……まるで、幼児の食事だった。

「ごちそうさま」

そして、取り皿にかなりの量の食べ物を残したまま、食事を終えた。皿を片付けるでもなく、口元を袖で乱暴に拭い、ソファに身を沈める。

アルフは自分の食事を終えると、フェイトが食い散らかした料理や食べかすを片付ける。

(リニスが見たら、なんて言われるだろうね)

なにも、フェイトは元々こんな食べ方をしていたわけではない。

フェイトが一連の行動を取り出したのは、リニスがいなくなっただけのことだった。それまでは、きちんと綺麗に食事をして、片付けもしていた。それが、今ではごらんの有様だ。

最初は、注意もした。だが、フェイトはそうすると決まってヒステリックに怒り、テーブルの上のものを投げつけ、ひっくり返し、

部屋に閉じこもってしまうのだ。いつしかアルフは、それを注意しなくなった。

「フワイト、歯磨きしよう？ 虫歯になったら大変だよ」

「えー……」

最初は面倒くさそうにしていたフワイトだったが、口の中に残る食べかすが不快なのだろうか、割と素直に身を起こした。

うがいをして、水を吐く。そして歯ブラシを……アルフに手渡した。

「あいよ」

受け取ったアルフは、歯ブラシにイチゴ味の歯磨き粉を適量乗せ、フワイトの口に入れた。かしこかしこ……と、丁寧に丁寧に歯垢をこそげ落としていく。それが終わると、フワイトはまたうがいをし、泡の混じった水を吐き出す。最後に、アルフは口元をタオルで拭いてやった。

「……寝る」

感謝するでもなく、すたすたと洗面所を後にし、自室へと戻って行った。

「……………」

ごろんとベッドに寝るフワイトは、ポケットに手を突っ込み、金色をしたアクセサリーを取り出した。

「バルディッシュ、まだ反応は無いよね」

「Yes sir」

反応とはもちろん、ジュエルシードのことだ。

「……早く、来ないかなあ」

暴走体を叩きのめし、ジュエルシードを奪い取り……

「高町なのは……だったっけ」

時には、別の敵と奪い合い、それすらも叩き潰し……

「ふふふ……楽しいなあ」

背筋が、高揚でゾクゾクと震える。

戦いは、いい。ただ、目の前の目標を破壊することだけを考えていればいいのだから。余計なことなど。母親が、本当に自分のことをしてくれているのかなど……

がんっ！

フェイトは、『その思考』を断ち切るように、ベッドのパイプに額を叩き付けた。

「う……うああ……」

顔に生暖かい感触を覚え、ベッドのシーツに突っ伏す。じわじわと、紅い斑点が広がっていく。

「おかーさんは、ボクのこと、ちゃんと好きだもん……」

音を聞きつけ、アルフが部屋に飛び込んでくる。

「フェイト、今の音は何………フェイトッ！！」

顔を血で濡らすフェイトをみて、蒼白になる。頭突きの影響で意識が朦朧としているフェイトは、それをぼんやりと眺めていた。

「何でこんな馬鹿な真似を……！」

顔を拭い、傷口を抑える。そしてまた、治癒魔法を掛けられる。

（ご飯を作ってくれた）

科学者だった母親。毎日が戦場のように忙しく……それでも、顔を見ない日は、言葉を交わさない日は無かった。

（同じベッドで寝てくれた）

どんなに研究が切羽詰っていようと、必ず家に帰り、娘を抱きしめ、一緒に眠り、「おはよう」と、朝を迎えた。

（誕生日には、ピクニックに行った）

苦言を呈されようと、丸一日の完全休養を取り、通信端末まで家に置き去りに、娘と

の時間を作った。

シアワセな記憶に、フェイトは、年頃の少女らしい笑みを浮かべた。

(不安になることなんて、何も無いんだ)

プレシア・テストロッサは間違いなく、心から娘を愛していたのだから。

今は変わってしまった母親。だが、フェイトは信じる。母親の望みを叶えてあげることができれば……いつか必ず、昔の母親に戻ってくれると。

「おかーさん……また、ピクニックに行きたいなあ……」

一面の花畑。そこにシートを広げ、風を感じ、緩やかな時を過ごす。そこには、自分がいて、母親がいて、アルフがいて、リニスがいて、「ママ、『私』、ママのこと大好き！」

そう言う娘に、母親は微笑みかけてくれるのだ。そう、あの日のように。

「私も…… のことが、大好きよ」

その四文字だけは……思い出せなかった。

とんとんとん……

朝の台所に、包丁が規則正しくまな板を叩く音が響く。見る見るうちに一口大に切り分けられていくキャベツ。

「サラダはこれでよし、と」

それを皿に盛り、プチトマトで彩りを加える。

「お、やばいやばい」

味噌汁が煮立ってしまう前に、コンロの火を止める。

その拍子に、肘が包丁が当たり落としてしまう。包丁は、万有引力の法則に従い、切っ先を下に向けたまま落下し……

「ぎゃっ!!」

……俺の足に、刺さった。あいにくと、こんな狭い家でスリッパなんぞ履いていられない俺は素足だ。その足の甲に包丁が突き立っている光景は、どことなくシニールだった。

とにかく、抜こう。柄に手を掛け……よい、しょっと!

「んぐっ!」

ずるっと抜けた。切っ先は、俺の血でぬらぬらと光っている。今日の昼もこれで料理をするのかと憂鬱になりながら……俺は、包丁をそっと流し台に置いた。

足の傷は問題ない。見れば、もう既に血が止まり、薄皮が張ってきている。

「……前から気になってはいたんだけど、どうなってるの? 秀人の身体は」

それを見ていたユーノが、一言。

「知らねえよ。物心付いた時からこうなんだから」

刺々しい口調に、ユーノが身を竦めた。

「ご、ごめん……」「あ、いや、俺こそ……」

あー、くそ。何ユーノに当たってるんだよ俺は!

「おはよー……って、あああああ!」

びっくりした。なのはが、起きたと思ったたら大声を上げ、詰め寄ってくる。

「秀人さん、今日の朝ごはん当番は私だよ!」

「あ、いや、悪い。気持ちよさそうに寝てたから……」

もやもやとした気分は、一瞬で吹き飛んだ。

昨日、随分と晴れやかな顔で帰ってきたから、きつと何かに踏ん切りが着いたのだらう。ぐっすりと安眠していたものだから、つい起こすのを躊躇ってしまい……

「もう……それじゃあ、夕食当番は私に交代してね？」

「ああ、わかったよ。……ほら、顔洗ってきな」

そして、訪れる静寂。

「いつか、話すから」

「え？」

ユーノが、きよとんと見上げてくる。

「俺の身体のこと、いつかはちゃんと話すから」

俺の方は……まだ、踏ん切りは着いていない。

「……はあ」

くるくると手元で鉛筆を回しながら、物思いにふける。今は、国語の授業中。いつかと同じように、作文の授業だ。『将来の夢』という、願ったり叶ったりのタイトル。十分で400文字を埋め、残り時間が過ぎるのを待つだけになっていた。

かりかりとノートに線を書いていき……ひし形になる。ジュエルシート。

さらに、かりかり。今度は三角形……何これ？

(三角形、三角形……)

記憶の中を検索する。最近、見たような……あ！

「思い出した！」

あの、フェイトの手の甲に付いてたやつだ！

思い出した途端。

いらいらいらいら……………

『あはは、何？』

人を小ばかにしたような嘲笑とか。

『叩き潰してやる！』

身勝手な敵意が籠った目とか。

「ああ、ムカつく！」

二回も負けた。一回目は瞬殺。二回目はK・O。今度は……………今度こそは！

「……………あれ？」

あの子は……………どうして、ジュエルシードを集めているんだろう。

以前なら気にも留めなかったけど……………妙に、気になる。

ジュエルシードなんて爆弾みたいな物を集めて、何をするつもりなんだろう。

「今度……………ちゃんと聞いてみよう」

また喧嘩腰になって、まともに会話なんて出来ないかもしれないけど……………

「ええ、私も是非、高町さんに聞いてみたいわね」

……………げ。

顔を上げると……………富山先生が、すごく怖い笑顔で、私を見下ろしていた。

「……………何を『思い出して』、何に『ムカついて』いるのか……………ちょっと教えてくれるかしら？」

ヤバイ。これは、放課後居残りコースだ……………！

「え、ええと、その」

しどろもどろに答えに窮する。と、その時。

キーン、コーン、カーン、コーン……………

いいタイミングでチャイムが鳴った！

「さよなら!」

鞆の中に筆箱、ノートを放り込み、ドアにダッシュ!

「こらあああああ! 待ちなさい!」

あとは帰りのホームルームだけだし……いいよね、別に。

「はっ、はっ、はっ……」

ふう……鈍足を克服しておいてよかった。きゅきゅっと廊下を駆け抜け、階段を二段飛ばしで駆け下りる。

「ま、待〜ち〜な〜さ〜い〜!!」

スリッパ履きの足で、ゴム底の上履きに勝てると思ってるの、先生?

悠々とスニーカーに履き替え、校門を飛び出した。

「さ〜よなら〜! また明日ね〜、先生!」

私は私なりに……学校生活を楽しんでいるのだった。

さてと、夕食の材料でも買い足しに行こうと。

フェイトは、街中を一人でぶらついてた。なぜアルフを伴っていないのかと言えば。

「魔力……というか、体力の使いすぎだよ」

治癒魔法を全力で、しかも立て続けに使い、アルフはすっかりバテてしまっていた。今は、狼モードで休んでいる。

「別に、いいんだけどなあ。たかが傷跡くらい」

それは、本音だった。自分がどれだけ整った容姿を持っていようと……それがたとえ、道行く人が幾人も振り返る程のものであろうとも。フェイトには、全く興味の無いことだ。それが別に、母親の役に立つわけではない。

「はあ……つまんない。帰ろうっかなあ」

と、一軒の店が目に入ってきた。

「確か、『てれび』でやってた」

この大通りで一番人気の喫茶店。ケーキのメニューは、かなり豊富。
「お財布は……よし！」

10000ナントカという額の紙幣を、百枚単位で持ってきてある。
多分、足りるだろう。

「ケーキ、ケーキ」

足取り軽く、その店に歩いていく。

「……はあ？」

が、店の前に来て、途端に顔をしかめた。

何と書いてあるのかは不明だが、何やら貼紙がしてあり、店の中には誰もいない。

どうやら、営業していないようだった。

「ちくしょう！」

ガンツ、と扉を蹴り壊す。通行人が、ぎょつとして注目するが、我
閑せず、面倒事は御免、と歩き去っていく。

ずかずかと店内に押し入ったフェイトは、陳列棚を、バックヤード
を物色。そして冷蔵庫を開け、にんまりと笑った。

「みつけた！」

プリンと、ケーキ。

「へえ、美味しい。人気なだけあるなあ……」

ケーキの土台のスポンジをも、ガツガツと食い荒らしていく。全く
もって、強盗そのものであった。

「お、おい、何をしている！」

この店と契約していた警備会社の一団が数名、乗り込んできた。

だが、侵入者がどう見ても子供であり……顔や服をべたべたに汚し
ながらケーキを貪る異様な光景に、一瞬だけ立ち尽くした。

だがフェイトは、彼らをちらりと一瞥し、またガツガツとケーキ

にがつつき始める。

「おい、キミ……」

一人が、フェイトの肩を掴む。子供だと分かり、警戒心を緩めてしまった彼らは……不用意であったとしか、言い様が無い。

「……五月蠅いなあッ！」

『Thunder』

待機状態のバルディッシュが、主の命に従い、魔法を発動する。稲妻、と。

バチバチバチバチッ！！

「ぎゃあッ！！！」

身体を痙攣させ、どさつと倒れる。警備員達が、ざわめいた。

「お前たち……」

フェイトが、ゆらりと立ち上がる。警備員達は、各々警棒を、盾を構える。

「ボクの楽しみの邪魔して、タダで済むと思うなああああああッ！！！」

五分後。

「はあ、おなか一杯」

一団を全滅させ、フェイトは満腹になって店を悠々と出てきた。財布の中身の紙幣を全てカウンターにばらまいて……ご丁寧に、紙箱にアルフへの土産を持って。

「アルフ、これ食べて元気になってくれるといいな」

そして足取り軽く、郊外の住宅地へと歩き去って行った。

「ふふふ、ラッキー」

腕に下げるスーパールのビニール袋。中には、大量の生肉が入っている。豚や鳥ではなく、国産の牛肉だ。お肉売場を物色していたら、丁度タイムセールが始まり、ダンパーのように押し寄せる主婦より先に確保できた。

「秀人さんにユーノくん、喜ぶだろうなあ」

特に、秀人さん。肉体労働の後だから、かなりお腹が空いているはずだ。

すき焼きにしようか、焼肉にしようか。

ふんふ〜ん、と、柄にも無く鼻歌なんかを歌いながら、夕暮れの中を歩いていく。

「レイジングハート、どう？」

『アクセルシユーター。操作も威力も問題ありません』

いつもの如く、マルチタスクで模擬戦。前回の戦闘での敗因になった、鎌の攻略法を模索しているところだ。バリアの強度を上げるだけでは、ダメだ。もっと、搦め手を覚えないと。

アクセルシユーター。発射後に軌道をコントロールできる。この魔法を取っ掛かりに……砲撃を、ブチ込む！

「首を洗って待つてろよ……」

今度こそ、三度目の正直だ！

角を曲がって……ばったりと、件の人物に出くわした。

「な……」

「え……」

黒いワンピース（何故か、薄汚れてはいるが）を着て、紙箱を手にしたフェイトが、そこにいた。

第九話（後書き）

フェイトは、食べ方がとても汚いという設定にしてみました。

今回は、クロノが出るかもしれませんが。

第十話（前書き）

ちよつとグダグダかもしれませんが、

第十話

「はあっ、はあっ、」
息を切らしながら、住宅街を駆け抜ける。

「な、なんで、ボクまで……！」
なぜか隣に、フェイトと並走しながら。一体何から逃げているのか
と言つと……

「待ちなさい！ さっきの爆発は何だ！ 説明しなさい！」

紺色の制服。同色の帽子。そして、腰に収まる拳銃。どこから見ても、おまわりさん。

「どうやら、さっきの現場に偶然居合わせていたらしい。」

「あ、あなた、結界、張れないの!？」

人が見ている前で、飛行魔法なんて使えない。

「いつもアルフがやってくれるんだもん！ キミが張れよ！」

「ユーノくんがいないから無理！」

戦闘用の魔法以外なんて、覚えてる暇が無かった。

「このネズミ以下！」

「うるさい犬以下！」

ぎゃんぎゃんと言い争いながら、ひた走る。

「どうやらフェイトも、魔法無しではその辺の子供と同レベルか、それを少し上回る程度らしい。このままじゃ、追いつかれる！」

前方にT字路！ ここでお別れだ！

右に曲がる。が。

「な、何でついて来てるの!？」

「ここで二手に分かれれば、半々の確立でおまわりさんを撒けたのに！」

「ボクの台詞だ！… どっか行け！」

「こ、こいつうつつうつつ……！！」

「止まりなさい！ 今なら事情を聞くから！」

「太ってるのに、無駄にタフなおまわりさんが追る！」

「それが一番困るんですー！ー！」

「もうヤダああああ！ アルファー！ アルファー！」

「フェイトの目が、見る見るうちに正気を失っていく。擬音で表現するなら、『ぐるぐる』してる！」

「こ、こうなったら……！」

「バチバチとフェイトの手元が帯電している……って、まさか！」

「黒焦げにして……！」

「やめろ馬鹿！」

「ごちんっ」

「いったあ！？」

「あ、思わず手が出てしまった……ま、いいや。」

「な、何すんだよ！ キミから先に焦がすぞ！？」

「涙目で頭をさすりながら、私を睨む。」

「そんなことしたら、まともに出歩けなくなるよ！」

「国家権力を敵に回して、今後、まともな生活ができるとは思えない。」

「ボクは別に構わないんだけど……」

「私には、この町での生活があるの！ 今度やろうとしたら、頭じゃなくて腎臓を殴るからね！？」

「背骨の横から、抉りこむように！」

「怖！？ じゃあ、どうしろっていうんだよ！」

「黙って走れ！」

『「一応聞くけど……何やってんの？」』

「す、救いの神現る！」

「おまわりさんに追われてるの！ 隔離結界張って！ 早く！」
『わかったわかった……』

ヴンツ……

そんな音と共に、周囲の景色が色褪せ、人の気配が消えた。その場に崩れ落ち、肺に酸素を取り込むことに集中する。

「ぜえー、ぜえー……」

「ひゅー、ひゅー……」

フェイトも、ワンピース姿だというのに大の字に寝転んでいる。
つ、疲れた……しばらく、起きられそうに、無い、かも……

「んじゃカントク、お先でっす」

シャワーを浴びた後、作業服を鞆に詰め込み、ヘルメットを手に事務所のプレハブを後にする。さて、帰るか。

『秀人、ちよつといいかい？』

ん？ ユーノか。

「どうしかしたのか？」

ジュエルシードの反応があったにしてみれば、随分と落ち着いた口調だけ……

『ああ、それがね……』

「へえ、そんなことが」

事情を聞き終えた頃には、俺はバイクを走らせ現地へ……臨海公園へと到着していた。

お、良かった。二人してへばってる。

「なのは、起きられるか？」

地面に突っ伏すなのはの頭を、ぽんぽん、と軽く叩く。

「まだ、無理……」

「そうか」

よい、しょつと。

「ふえっ!?!」

膝の裏と、背中に手をやり、抱え上げる。

「……………あう」

なのは、よつぽど疲れたんだな。こんなに顔を真っ赤にして。

「ちよつと休んどけ」

ベンチに寝かせてやり……………さてと。

パンツ丸出しで寝転んでるフェイト。あいつは……………どうしようか。抱え上げた途端に電気ショックなんて、勘弁してほしい。

パリン……………

と、結界に穴が開いた。あー、これは、アイツだな。

「ガウツ」

鮮やかな茜色の毛並み。額に輝く宝石。

「アルフ……………ちよつと遅いよー……………」

アルフが、フェイトのそばに駆け寄る。

「フェイト、どうしたんだい!?!」

喋った。ハスキーな女性の声で。まあ、ユーノも喋るし、驚くことでもないだろう。

「……………んっ!」

力むような素振りを見せるのと同じ、その体が茜色の魔力光に包まれ……………

「……………えええええっ!?!」

今度ばかりは、驚いた……………

光が収まったそこには、長身の女性が立っていた。狼との共通点なんて、茜色の髪の毛と、額の宝石くらいしか無い。

「さ、帰るよ」

妙に、不自然なくらいこちらを見ようとしない。

「あ……………れ? あのときの、お姉さん?」

なのはが、顔だけをそちらに向け、そう言った。アルフはその言葉に、思いつきりビクツとして固まった。

え……知り合い？

「温泉宿で……」

そっか、あの時。妙に元気になっていたけど、そういう理由か。礼を言うべきか？ でも、敵だしなあ……

ドクンッ……

おなじみの、あの感覚。どうやら、この公園内で発動したらしい。タイミングが悪いことこの上ない……

アルフがフェイトと目配せしている。

「そんな状態じゃ、ジュエルシードの封印は無理だ。ここにいろ」
なのはの砲撃の直撃を喰らって、ここまで全力で走ってきて、万全とは思えない。今も肩が上下している。

「ンなこと、アンタに指図される筋合いは無い！ あれは、アタシたちが貰う……！」

やはりというか、意見を聞いてくれるような雰囲気じゃない。

俺は……

ズンッ！

アルフの腹部に、インパクトを付加した打撃を叩き込んだ。

「か……はっ」

「……寝てる」

不意打ちだったとはいえ、アルフの反射神経なら、これくらいは回避なり防御ができる。二度も戦った俺が判断したんだから、間違いない。

ドサッと倒れこんでくるアルフを受け止める。腕の中で、アルフは狼の姿になっていた。

多分、こっちの姿が本性なんだろう。

「お、お前……！ アルフに何を！」

体力が回復したらしいフェイトが起き上がり、詰め寄ってきた。手には、しっかりと斧が握られている。

「仕方ないだろ……こんな状態で暴走体と戦うのは自殺行為だ」
フェイトに、アルフを渡す。

「んじゃ、行つてくる」「あ、私も!」

なのはが付いてこようとするのを止める。

「いい機会だし、ちゃんと話しとけ」

なのはは、俺を見て、フェイトを見て。

「……………うん」

こくりと、頷いた。

「よし」

さて、行くか!

そこは、吹き抜けのホールのような場所だった。

雰囲気としては、証券取引所に近い。

一人の女性が、最も高い位置にある仰々しいシートに腰を掛け、
モニターを眺めていた。

そこには、何らかのグラフがリアルタイムで更新され続けている。
そして、その中の一つが、極端に跳ね上がった。

ビーツ! ビーツ!

途端に鳴り響く警報。

「魔力反応! ランク、ニアAAランク! こちらはジュエルシード
ドと思われます!」

「隔離結界が張られています! 現地への被害、まだありません!」

「ですが、魔力パターンが局のデータベースにありません!」

「他にも、AAAランク、AAランクの反応が多数!」

「と、AAAランクが多数!?!」

「AAAランク級の反応、ジュエルシードと思しきものと戦闘に入

りました!」

「艦長! 指示を!」

「現地には、クロノを向かわせませす」

指示は、一言。だが、それを耳にした局員達は、指示通りに行動を始める。

「現地への転送魔法使用許可、下りました!」

「転送ポートの準備、OKです!」

「艦長」

彼女の隣に控えていた一人の少年が、彼女に声を掛けた。十代中ごろの、黒髪の少年だ。目には、確固とした自信と、使命感が見える。

「出ます」

「ええ、頼みます」

会話は、最低限。だが、そこにあるのは、絶対の信頼。

彼は目礼し、その喧騒に包まれるブリッジを後にした。

『グゴゴゴ……!』

「今日は亀か!」

そう、今回の暴走体は、亀だった。いつもながら巨大で、全長10メートルはあるだろう。

「ウミガメでもいたのか……っ!」

ヒュンツ!

全体的には亀そのものといった風体だが、特徴的なのはその尾だ。幾重にも枝分かれした鞭状になっていて、先端には鋭い刃が付いている。

これの回避にばかり気を取られていると……！

『グゴオオオオ……！！』

その巨体を揺らし、突進を仕掛けてくる！

「フローター！」

飛行魔法を行使。とりあえず、上空に逃げる。移動する敵としては、質量がこれまでの中でも桁違いだ。まともに正面からぶつかったら、押し切られる。

ヒュンヒュンヒュンッ！

「って、うおおおおお！？ あつぶねえ！」

鞭が伸び、上空にいた俺に連続して襲い掛かってきた！

ガキイン！！

「痛って！」

うち一本が、腕を掠めた。魔力で補強し、擬似的なバリアジャケットとして機能してはいるとはいえ、衝撃までは完全に殺せない。

「バレット！」

射撃魔法を撃っては見るものの、そこは亀の面目約如。手足と頭を引っ込め、強靱な甲羅に籠ってしまう。だが、上空に居れば、脅威はあの尻尾だけだ。……そう思っていたのだが。

シュゴオオオオオッ！

そんな、『ジェット噴射のような』音を立て始め、ふわりと地面から離れ……

「って、マジかよおおおお！？」

亀が、円盤のように回転しながら飛んできた！

「カメラかつつーの！」

方向転換して、回避！ ギュゴオオッ！と凄まじい音を立て、ギリギリを飛んでいく！

小回りはこちらの方が上だが、トップスピードでは暴走体の方が早い！

「防壁！」

とにかく、逃げているだけじゃ埒が明かない。目の前にプロテクションを展開し、突進に備える。そして……

ガゴオオオオオオオオオオオオオン！！！！

「つくあああああ！！！」

とてつもない衝撃と共に、景色がすつ飛んでいく……！！

ギヤリギヤリギヤリギヤリ……！！

ベルトサンダーのように、俺の防御を削り取っていく。びきつ、と腕が嫌な音を立てた。

「ぐうっ！！」

多分、折れた。全く、骨折は何度目か自分でも知らないが……すぐに治り、痛みは引くとはいえ、いつまでも慣れない。

亀と距離を開ける。痛かったけど……もう、間合いは掴んだ！

ギョルルルル……！！

空中で方向転換し、再び突進の構えを取る。

「もういつちよ、防壁！」

ガツギイイイイン！！

再び、衝突。今度は後ろに飛んでいたため、腕は折れなかった。

即興の魔法は、なのはだけの専売特許じゃない！

「……パーテーション！」

プロテクションを上下に分割する。その隙間に、亀の甲羅が入り込む。今だ！

「閉じる！」

バクンツ

プロテクションが閉じ、亀の甲羅を上下から押さえ込んだ。

「ホールディングシールド……ってどこか？」

『グゴツ、グゴオオツ！』

あかく亀だった、俺の魔法がガツチリと拘束していて、逃げられない。

「うおりゃあああ！！」

ドムッ

頭を引っ込めたそこに、腕を突っ込む。この距離なら、コントロールが下手でも関係ない！！ 喰らえ！

「デイバイン……バスター！！」

ズドオオオンツ！

頭から抜けた空色の砲撃は、そのまま体内を突き抜けた！

『グゴアアアアア！！！！』

「ジュエルシード、シリアル7！ 封印！」

はあ……思ったよりも手間取った。なのはは……どうしてるかな。

「あなたは、何でジュエルシードを集めているの？」

フェイトは、目の前にいる少女に困惑していた。

あれだけの悪意をぶつけ、あれだけ痛めつけたというのに、なぜ彼女は、自分と『戦い』以外のコミュニケーションを取ろうとしないのだろうか。

「……そんなの、どうだっていいだろ」

自分は彼女の敵。彼女の敵は自分。それだけでいいのに。

「どうでもよくない。大事な、ことだよ」

「ボクは、キミの敵だよ」

「それは、わかってる……」

なぜ、彼女はそんなに、物悲しい顔をするのだろうか。

「じゃあ、さつさと戦えよ！」

バルディツシュがアスファルトを砕く。もういい加減、我慢の限界だった。戦いたいののに。早く、戦ってスッキリしたいのに。

「くだらないおしゃべりはここまでだ！ さあ、構えろ！」

彼女は、ようやくデバイスを起動した。

「別に、戦うのはいいよ」

「はははっ……！！！」

そうだ。それでいい。だが。

「でも、何もわからないまま、ただ力をぶつけ合うのは嫌だ。

お願い、理由を教えてください」

そして、彼女は……

「フェイト」

フェイトの名を、はっきりと呼んだ。

「う」

その瞬間、フェイトは理由のわからない衝動に襲われ……

「うわあああああああ！！！」
キレた。

三度目の、勝負が始まる。

「うわあああああああ！！！」

フェイトが癡癡を起こしたように叫び、斧を振り上げ突っ込んでくる。私は、レイジングハートを構える。

『accel shooter』

アクセルシューター、数は8！

「シューーート！！」

フェイトに迫る、6つの誘導弾。
バシユッ!

フェイトが斧を鎌に変形させた。

「ああああっ!」

ザンツ、ザンツ!

誘導弾を切り裂き、迫る。

『protection』

目の前にバリアを展開。

ガギンツ!

「くっ……」

やはり、鋭い。ユーノくんお墨付きの私のバリアに、鎌が中ほどまで突き刺さっている。でも!

『Barrier Burst』

ドゴオンツ!

「うわあッ!」

フェイトを弾き飛ばす。しかも、今回は轟音のオマケ付き。不意打ちは大成功! チャンスだ!

「キャノンモード!」

『Canon mode』

照準よし、チャージよし!

「デイベイン……バスター……!」

(捕らえた!)

完全な、直撃コース!

「……舐めるなああああ!」

が、フェイトは咄嗟に防御魔法を、砲撃に対して斜め向きに展開。砲撃の照準がずらさ

れ、見当違いの方へ飛んでいく。

「それも、読んでる!」

デイベインバスターは、私の主砲。直撃しなかったとしても、無傷で済むはずが無い!

「つく……!!」

思ったとおり、ふらついている。

アクセルシューター残り二発、行けッ!

「……このっ!」

ザンッ

一つは切り裂かれ……

パァンッ!

「がっ!!」

残る一つは、フェイトの後頭部に直撃した! クリーンヒットだ!

「こ……のヤロオオオ!!」

一気に距離を詰め、鎌を振り上げる。多分、もう一度同じことをしても通じない。なら!

「レイジングハート、強化!」

『Solid』

レイジングハートの柄を、魔力で強化する。これでもう、前みたいに断ち切られることは無い。

「でえええええい!」「はあああああっ!」

そして、お互いの獲物がぶつかろうとした瞬間。

ガシィンッ!

「え」「な」

私達は、図らずも同時に驚愕の声を漏らした。

レイジングハートは柄を掴まれ、フェイトの斧はデバイスで受け止められている。

秀人さんではない。ユーノくんでもない。アルフでもない。

「双方、そこまでだ! 武器を収める!」

見知らぬ少年が、私達の間に入って入っていた。

第十話（後書き）

書くのを忘れていたのですが、秀人のバイクはkawasaki・ZZR400にZZR600のエンジンを積んだスペシャル仕様です。

車検の度に苦労しているとか、していないとか。

PV45000&ユニーク3000突破、ありがとうございます。

他の方が書いていらっしゃる人気作に比べると見劣りするかもしれませんが、せめて一期が終わるまではお付き合い下さい。

第十一話（前書き）

クロノ君登場です。

なのは、警戒心バリバリです。

第十一話

突如として現れた少年は、私達の勝負を邪魔し、冷たい声で告げる。

「武装を解除しろ」

「……………何、あなた」

怒りを抑え、聞く。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ」

……………はい？

ジクウ……………何だつて？

「管理局……………！？」

フェイトは知っているらしい。斧を引っ込め、明らかに逃げようとしている。

「あ、待つて！」

まだ勝負の途中なのに！

『Snipe』

少年のデバイスが、女性の声で発声する。狙撃、と。

バシユツ！

発射された魔力弾は、逃げようとしたフェイトの足元に正確に着弾した。

「きゃっ！」

バランスを崩し、地面を滑るフェイト。そして、更に……………

『Snipe』

デバイスの先端に、青白い魔力スフィアが発生する。向ける先は、地面に倒れ、まだ体勢を立て直せないフェイト。

まさか……………！

「やめろおおお！」

ドパン!

衝撃波が、少年の魔力スフィアを掻き消した。

「くっ……もう一人いたな」

秀人さんナイス!

「離せ！」

『Impact!』

ドゴンツ!

衝撃波を放つ寸前、少年はあっさりとレイジングハートから手を離し、回避した。

『Bind』

縛り上げようとしたけど、あっさり回避される。

『Stinger Sniper』

射撃魔法、今度は複数!

『Protection』

ギギギギン!

私達と、フェイトを襲う攻撃を防ぐ。

「逃げて！」

誘導弾で少年を牽制しつつ、目を覚ましたアルフに声を張り上げる。

「すまない……！」

フラフラしながらも、しっかりとフェイトを抱え、結界から出ていくの確認した。

「ユーノくん! 結界解除して！」

「何ッ!？」

私の言葉にぎよっとする。

勘だけど……コイツも、魔法をおおっぴらに使うことは出来ない筈だ。

「わかった!」

ブウンッ……

私も飛行魔法を解除。バリアジャケットも解除し、地面に降り立つ。
「なのは、誰だこいつ」

同じように着地した秀人さんが、隣に立つ。

強化魔法は、まだ解除していない。

「ジクウカンリキヨクだつて」

「何だそりゃ」

「さあ……？」

少年は、デバイスを待機状態に戻したとはいえ、未だにバリアジャケットを展開している。

「悪いが、君達の身柄を拘束する」

発色を抑え、普通の縄のように偽装したバインドが、私達を縛った。

「ざっけんな！」

ブチンッ！

秀人さんが、力づくでバインドを引き千切る。

「あまり、舐めないでよね」

私は、バインドの魔力を分解し、消滅させる。

僅かに驚いたように目を開き、再びバインドを……

『やめなさい、クロノ』

それを、彼のデバイスと同じ声が押し止めた。

これは……念話か。

『そちらの三人を、丁重にお迎えなさい』

「艦長、ですが！」

『これは命令です。クロノ執務官』

その念話の主は、私達に向けて言う。

『我々は、時空管理局の者です。どうか、事情を説明させて貰えないでしょうか？』

くいくいつ、と服の端を引く。

「……秀人さん、どうしよう?」

「なんだか、胡散臭い。」

「……」

「秀人さんは、警戒を解かない。なら、私も同意見だ。」

「二人とも、行こう」

「ユーノ?」

「管理局には話を通しておいた方がいい」
まさかとは思うけど。

「お前、こいつらのこと知ってるのか?」

「秀人さんの問いに、ユーノくんは首を縦に振った。」

「かつん、かつん、と、俺達の足音が響く。」

「と、クロノが立ち止まり、俺達を……正確には、なのはの肩に乗る
ユーノを振り返った。」

「ここでなら、『変身魔法』を解除して大丈夫な筈だ」

「ユーノは、今気付いたように答える。」

「ああ、確かに。これだけ魔力素があれば」

「……何の話をしてるんだ?」

「?」

「なのはも、首を傾げている。」

「よししよつと」

「ユーノの身体が光に包まれ、その光は大きくなり……」

「ふう、やっと戻れた」

「薄黄色のショートカットの、なのはと同じ年くらいの子供になった。」

「え、ええええ〜!?!」

「なのはも大いに驚いている。」

「お、お前……!?!?」

何となく、予想はしてた。アルフだってそうだったんだ。

「黙っててごめん。実は……」
でも、まさか、まさか！

「お前、女だったのか！」

まさか女だったなんて！

「……え？」

「えっと、ユーノ……ちゃん？」

なのはも、頭が追いついていないようだ。

「女の子なのに、『くん』付けで呼ばれて嫌だったよね。ごめんね。これからは、ちゃんと『ユーノちゃん』って呼ぶからね？」

そうか。俺も、態度を改めないとな。相手は女の子なんだから。

「ん？どうしたユーノ？ ぶるぶる震えて。寒いのか？」

「駄目だよ、ユーノちゃん。女の子はお腹を冷やしちゃいけないって、先生も言ってたよ」

ユーノは、がばっと顔を上げ、叫んだ。

「ボクは、男だあああ！」

怒り狂うユーノをなんとか宥めすかし、クロノに呆れられながら、ある一室の前に来た。

文字は読めないが、多分、責任者が待っているに違いない。

「艦長、クロノです」

『入って』

ばしゅっ、とエアロックが外れ、扉がスライドする。

そして室内は……エセ和風インテリアで、飾り立てられていた。峠の茶屋にあるような、大きな和傘。ゴザを敷いて正座し、湯呑みで

緑茶を飲んでいる。SFチックな白い内壁に、これっぽっちもマツチしていない。

「いらっしゃい」

俺達に、にっこりと笑顔を向けてくる、『艦長』と呼ばれる女性。二十代後半程度に見える、えらい美人だった。

どすっ

うおっ、びっくりした。

俺の脇腹に、なのはが軽く肘打ちを入れてきた。

「ど、どうした？」

なんだか、妙に機嫌が悪い。

「……何でもない」

「……そうか」

突っ込まないでおこう。

「……ふん」

痛いくらいに俺の手を握り締め、そっぽを向いてしまう。

ゴザに座り、艦長……リンディさんと、クロノと向かい合う。

……ところで、あのシュガーポッドにしか見えない物体は何だろう。

まさか、な。ははは。

「さ、お茶が入りましたよ」

差し出される湯呑み。

「……どうも」

匂いを嗅ぎ、一口。

……ごく普通のお茶だった。

「お砂糖は？」

………は？

と、例の物体を開ける。中身は、白い顆粒。まじごとなき、砂糖だった。

リンディさんは、匙で砂糖を取ると………ばさっ。
入れた。緑茶に。砂糖を。

「……………」
なのはが、怯えるように手を握る力を強めた。

ばさっ。

もう一杯。

ばさっ。

更に一杯。

そして、砂糖入り緑茶という、日本人としてはおおよそ認め難いシロモノを、美味しそうに飲みはじめた。

(………オエッ)
見ているだけで、口の中が甘ったるくなる。

「それで、話って何ですか？」
切り出す。

「まず、そちらの………ユーノさんが、発掘したジュエルシード」
びくん、とユーノが身じろぎする。

「輸送船のエンジントラブルによって、この地球、日本に散逸してしまいました」

エンジントラブル？ じゃあ、ユーノの過失じゃなかったのか。

「三週間前、時空管理局にジュエルシードの探索許可願いが提出され、受理されています」

三週間前……丁度、なのはと一緒にユーノを拾った日に近い。

「その責任感は、立派です。ですが……民間人を巻き込むのは、感心できません」

段々……雲行きが怪しくなってきた。

そして、予想通り、リンディさんの視線は、ユーノから、俺達へと移された。

「これは、我々の領分です。民間人の貴方がたは、今後関わることを禁じます」

「やなことだ」

即答。当たり前だ。ここまで関わっておいて、今更放り出せるか
つての。

「……忠告を聞く気は無い。そういうことが
クロノが重々しく口を開く。

「あのな、それは『忠告』じゃなくて『命令』って言うんだよ
何となく、分かった。

『時空管理局』。こいつらは、上から目線で物を言っている。

「僕達管理局の手を借りずとも、ジュエルシードを全て封印する
とができるか?」

「俺達が倒した暴走体は八体。『同業者』も、それなりに収集して
いる」

俺達の手元に六個。同業者……フェイトの手元には、最低でも二個。

「残りは多くても十三個。今までどおり、俺達だけで十分だ」
ぼっと出の胡散臭い連中なんぞに任せられるか。

「キミは、随分と自分の力に自信があるようだな」

「少なくとも、お前よりは強い」
にらみ合う。

「あの、一つ、よろしいでしょうか?」

なのはが、不自然なくらい平静な口調で拳手した

「何でしょうか？」

リンディさんが、促す。そして、

「何様のつもりですか？」

空気が、凍り付く。

「……そもそも、三週間も遅れてやってきて、大事な勝負に横槍を入れて、犯罪者扱いたした拳げ句、『手を引け』？ 本当に……何様のつもりですか？」

なのはの怒りも最もだ。ようやくフェイトとある程度の話し合いが出来て、伯仲した実力での勝負が出来ると思った矢先、どうでもいい邪魔が入ってしまった。

だが、クロノはそれが堪えた様子は無い。

「キミ達は、何か勘違いしてないか？ キミ達がやったことは、立派な公務執行妨害だ。犯罪者『扱い』じゃなく、本当に犯罪者として拘束されても……」

……いい加減、俺もキレた。

ダンッ！

正座の姿勢から一気に立ち上がり、クロノの喉元に手刀を添える。魔力を鋭く固定し、刃にしてある。フェイトの真似事を即興でやってみたが、上手くいった。

「……あんまり調子に乗るなよ」

「……キミもな」

ごりっ、と脇腹に硬い感触。クロノのデバイスが、押し付けられていた。

だが俺は、内心でほくそ笑む。クロノは、俺の体質のことを知らない。『相打ち』に持ち込めるなら、俺が圧倒的に有利だ。

「二人とも、そこまでにしないさい」

リンディさんがびしゃりと言っ。

「……了解」

クロノが渋々とデバイスを待機状態に戻す。俺も、魔力を霧散させた。なのはの隣に座り、すっかり温くなったお茶を一気飲みする。「ジュエルシードの所有権は、我々にあります。ですが、我々だけでは全てのジュエルシードに対応し切れません。ですから……我々に、力を貸していただけませんか？」

一拍置いて、リンディさんは頭を下げた。

「この事件……仮に、『ジュエルシード事件』とでもしましょうか。この件が解決するまでは、あなた方が所持して下さって構いません」

なるほど。所有権は自分達にあるのだから、それを預けている間の……いわば、レンタル料ってことか。

「条件は、二つ」

だからといって、何でもかんでも言うことを聞くわけにはいかない。「一つ目」

人差し指を立てる。

「ジュエルシードの封印は、全て俺達が行い、俺達が所持すること。戦力の増員も、サポートも必要ない。全て、俺達で間に合っている。」

「二つ目」

中指を立てる。むしろ、こちらがメインだ。

「なのはと、『彼女』との戦闘には、一切手を出さないこと」

クロノを睨むが、相変わらずしかめっ面。

「この二つ……特に、二つ目を徹底してくれるなら、協力してやってもいい」

「約束しましょう」

「んなっ……！」

リンディさんは、あっさりと承諾した。クロノの奴は、ちょっと愕然としている。

まあ、もしも約束を破って邪魔をしてきたら……ぶちのめしてやれ

ばいい。

俺はそんなクロノを尻目に、その場所……アースラとかいう宇宙戦艦を後にした。

「艦長、何故あんな条件を呑んだのですか!」

クロノは、噛み付かんばかりにリンディに詰め寄る。

「あんな条件、こちらには何の得もありません」

ことん、と湯呑みを置き、リンディが言う。

「ここは、管理外世界よ」

その言葉に、クロノの言葉は勢いを失う。

「……ですが」

魔法という技術が知られていないこの世界で、自分達はおおっぴらに動けない。

ならば、現地の常識を知る者に協力を頼むのが最善のやり方。

しかも今回、その協力者は、飛び抜けて強力な魔法の力を持っている。

AAAクラスの砲撃を連発する砲戦魔導師。

単独の白兵戦で暴走体を圧倒する近接戦魔導師。

そして、魔力量こそ平凡なもの、卓越した技量を持つ結界魔導師。

多少、不利な条件を呑んでも、味方に抱き込んでおいて損は無い。そして、何より。

「彼女達は、既に八体もの暴走体を撃破しています。対ジュエルシード戦において、彼女達以上の経験を持つ者はいません」

ロストロギアを相手にする事件は稀だ。そのため、アースラ所属の武装局員は、明らかに経験値不足。その点、彼女達は短期間に複数のロストロギアを相手にし、確実に封印してきている。

「私達アースラは、全力で彼女達のサポートに回ります」

「……了解」

クロノは、苦虫を噛み潰したような顔で頷いた。

第十一話（後書き）

51000PV、3500ユニーク、お気に入り件数60件。
どうもありがとうございました。

まさかここまで読んでいただけるとは思いませんでした。

第十二話（前書き）

ええと、、、すみません。またしてもプロットに無い話になってしまいました。

第十二話

「そういえば、吾妻さん、高町さん」

転送ポート……とかいう、妙にSF的な装置を準備している間、ここまで案内してくれていたリンディさんが話しかけてきた。

「何ですか？」

そんなに深刻そうな話ではなさそうだ。多分、時間つぶしの世間話程度だろう。

「ユーノさんの関係はわかるのだけれど、お二人はどういうご関係？」

恋人にしては年が離れているし、親子にしては年が近いし、友達のわりには接点が無い。俺達を傍から見たら、何とも不可解な関係に見えることだろう。でも、俺の答えは決まっている。

「家族ですよ。何よりも大事な」

ぎゅっ、とリンディを警戒していたなのはを抱き寄せる。

「……………ん」

気持ち良さそうに身を預けてくる。その手の中には、またしてもフェレットになったユーノが収まっている。曰く、『こつちの姿のほうが馴染んでるだろうし、燃費もいいからね』とのことだ。

「家族……？ 血の繋がりは無いのに？」

「別に、血の繋がりだけが家族の繋がりでじゃないでしょう」

こくこく。なのはが、言葉無く同意する。

「艦長、転送ポートの準備、できました」

そこに、妙に明るい女性の声が入ってきた。

「ありがとう、エイミィ。…………それじゃ、自宅までお送りします」

「ええ、頼みます」

世間話はそこそこに、仕切りの向こうへ、なのはの手を引いて入る。そして、機械の作動音と共に、景色が暗転した。

「フェイト、もうやめよう！」

アルフはとうとう、そう懇願した。

「管理局まで出てきちゃったら、もう自由に動くのは無理だよ！」
時空管理局。数多の世界を股に掛け、平和を守るという看板を掲げる組織。当然、武力は桁外れ。巨大な犯罪組織ですら、まともにぶつかるような愚行は犯さない。アルフ達は最悪の事態に陥ってしまった。もう、自由に動き回ってジュエルシード集めをするのは不可能だろう。

だが、ベッドに腰掛けるフェイトは、薄ら笑いを浮かべるだけだった。

「あはは、何言ってるの？ 管理局が邪魔するなら、潰してやればいい」

「……無理だ」

アルフが漏らした呟きに、フェイトが眉をひそめる。

「無理だよ！ フェイトは分かかってない！ 管理局は、そんなに甘つちよるい組織じゃないんだ！」

フェイトの表情が、どんどん不快な物を見るようなものへと変わっていつている。それに気付かず、アルフは言い募る。

「なあ、もうやめよう？ プレシアの言いなりになって、こんな危険なことをして……捕まったら、二度と出てこられないかもしれないないんだよ！ フェイト、」

「うるさああああああああい！！」

バキンッ！

バルディッシュで、アルフの頭を打ち据えた。

「うるさいうるさいうるさい！ ボクに意見するな！ アルフはボクの言うことを聞いていればいいんだあああ！」

再びバルディッシュを振り下ろし……アルフは、それを掴んで止めた。

「言うことは、聞く、けど……！ フェイトをむざむざ危険に晒すような真似は、出来ない……！」

それは、アルフにとって初めての、主への反抗だった。

「うーっ！！」

子供のように唸り、がすっ、とアルフを蹴りつける。流石に、アルフ相手に攻撃魔法を仕掛けることには躊躇いがあるようだ。

「じゃあアルフはもう付いてくるな！ ボク一人でやる！」

アルフの手からバルディッシュを奪い返し、玄関から飛び出していつてしまう。

「フェイト、待って！ フェイト！」

ぶちんっ、とリンクが切断され、居場所が特定できなくなってしまう。それに、今追いかけても……手負いのアルフには、追いかける体力は残されていない。

アルフは力無く、床に座り込むことしか出来なかった。

彼女は、優秀な科学者だった。

十代後半にして、ミッドチルダの誰もが知る巨大企業の開発部長に抜擢され、同年代どころか、その巨大企業の中でも最高額の収入を得る程であった。

彼女には魔導の才能があった。

魔力量は膨大。魔力運用は精緻にして大胆。才能に溺れる事無く修練を重ね、幻と思われるいた次元跳躍魔法までも使いこなすまでに

なり、ミッドチルダ初の『大魔導師』の称号を得た。

『才女』 『天才』 『ミッドの財産』

誰もが彼女を賞賛したし、それには何一つ間違いは無かった。魔法と化学技術の世界、ミッドチルダにおいて、彼女は間違いなく、成功者だったのだから。

しかし、『そんなこと』は、彼女にとっては大して重要ではなかった。

彼女には、娘がいた。

別れた夫と同じ、金色の髪の毛に赤い瞳。勉強はあまり得意では無く、魔力もほぼゼロ。自分とは似ても似つかない、実の娘。

だが彼女は、そんな娘を心から愛していた。

長い時間構ってやれない分、惜しめない愛情を注いだ。

一緒に朝食を食べた。仕事に行く前にキスをした。寝顔を見れば、仕事の疲れを忘れさせてくれた。娘の誕生日には、どんなに仕事が終わっても休みを取り、ピクニックに行った。

その時にくれたちっぽけな花の冠は、彼女にとって、社会的地位よりも、大魔導師の称号よりも……何よりも大事な、宝物だった。

娘の笑顔こそが、彼女の全てだった。

そして、その日はやってきた。

新型動力炉の試験稼働日。実際には、稼働させるにあたって、まだ安全上の不安がいくつも残っていた。彼女はそれを全てクリアす

るまでは、稼働させるべきではないと主張していたが、経営陣はそれを却下した。

彼女の勤める企業に次ぐナンバー2の企業が、同じ理論に基づいた、ほぼ同型の動力炉の開発を着々と進めていたためだった。

最大の利益を上げるのは、いつの時代も最初に始めた者。それを熟知しているが故に、現場を急かすのだ。てこ入れとして、現場を知らぬ名ばかりの監督役を配属し、彼女や、仲間の技術者達を追い立て……強引に、稼働を決定してしまった。

その結果が……暴走だった。

動力炉はメルトダウンを起こし、不安定なエネルギーと毒素を半径数十キロに渡って撒き散らし、最後には自身をも崩壊させていった。

彼女は全開でシールドを張り、ごく狭い範囲ではあったが、全ての破壊エネルギーを遮ることができた。彼女と、仲間の技術者達は無事だった。だが……研究所から数キロ離れた彼女の自宅までは、そのシールドが届く訳も無く……

彼女の『全て』は、永遠に失われてしまった。

「うあああああ……!!」

彼女の意識は、自らの悲鳴と共に現実に帰還した。

「はあっ、はあっ、」

額には汗がびっしりと浮かび、頬には涙の跡がある。

「うっ……ゲホッ!」

咳込み、口に手を当てる。手の平には大量の血液が付着していた。

「……もう、時間が無い」

動力炉の暴走の際、大量の有害物質を吸入してしまった。その毒素は、呼吸器系はおろか血液にまで入り込み、彼女の身体を蝕んでいた。

とはいえ、適正な治療を受ければ、かなりの延命は可能だ。

だが彼女は、それをしなかった。そんなことに費やす時間は、一秒たりともありはしなかったのだから。

ずり、ずり、と重い体を引きずりながら、『そこ』に足を踏み入れる。

そこにあるのは、円筒状の巨大なカプセル。彼女は、そのカプセル……正確には、その中に眠る者に、手を触れる。

ここは、彼女の『全て』が眠る場所だった。

「待っていて……もうすぐ、もうすぐだから
優しい『母』の顔で、ゆっくりと語りかける。

「もう一度……あなたの笑顔を見せて頂戴……」

そして、彼女は娘の名前を呟き、部屋を出て行った。

フェイトがマンションを飛び出し、三日が過ぎていた。アルフとのリンクは切断しており、念話は繋がらない。

「ボクは、強いんだ。アルフなんかいなくても、ボク一人でやれるんだ」

街中をさ迷い、ぶつぶつと呟く。通行人は、そんな彼女を振り返るものの、声をかけることはしない。

だがそれも、仕方の無いことだろう。着たきりの服は薄汚れ、髪はばさつき、表情は虚ろ。

フェイトもまた、助けなど求めてはいない。食料は強奪すれば良かったし、寝るなら適当なビルの屋上で足りた。

そして、何度目かの空腹。

街中をひたすら徘徊していれば、腹も減る。

「甘いもの……食べた」

脳裏に浮かぶのは、先日襲撃した店。本人は気付いていないが、疲労がかなり蓄積し、思考能力が低下している。一度荒らした店が、対策を立てないことなどありえない。そんな単純な事さえ、考えられなくなっていた。

歩いて数十分で、例の店に到着した。やはり、開いていない。

だが今回は、ドアノブを捻ると、あっさりと開いた。一直線に冷蔵庫庫を指し、手を触れ……視界がひっくり返った。

「……え？」

床に這いつくばったまま、首だけを動かし、確認する。

「……捕まえたよ」

三つ編みの、眼鏡を掛けた少女が、フェイトを押さえ付けていた。

「……！」

ようやく、フェイトの思考が追いついた。

「何すんだよ！離せ！」

暴れようとするも、起き上がれない。

「質問に、答えなさい。この前、ウチの店を荒らしたのは、あなた？」

フェイトは、いつものように……

「は、な、せえええええ！」

バチバチバチツッ！

電撃をお見舞いする。だが、フェイトを拘束する手は緩まない。

「やっぱり、あなたなんだね」

その手には、黒いゴム手袋が嵌まっていた。

『スタンガンのようなもので気絶させられた』という、警備会社の証言から対策していたようだ。

そして、今の一撃で限界だったのだろう。

「あつううう……」

フェイトは、ぺしゃっと床にノビた。

「えー!? ちょっと、大丈夫!？」

少女は慌てて拘束を解き、フェイトを抱き起こした。

「……おなか、すいた」

ぎゅるるー……

フェイトの腹が、間抜けな音を鳴らした。

そして。

「ただいまー」

「ああ美由紀、お帰りなさ……い?」

彼女……高町美由紀は数時間ぶりに帰宅した。

「お母さん、事情は後で説明するから。ご飯作って」

「うううう、ごはん……」

何故かその背中に、フェイトを背負って。

「あらあら……」

桃子は、ぱたぱたと台所に駆けて行った。

美由紀がフェイトを食卓に座らせる。

「食べたなら、ちゃんと説明してもらおうからね」

ぐうう……

美由紀の言葉に、フェイトは腹の虫で返事を返した。そこに、桃子が大量のお握りを大皿に載せてやってきた。

「はい、お待たせ。間に合わせの物だけど……」

「ごはんっ!」

フェイトがバネ仕掛けの人形のように跳ね起きた。そして、猛然とがつついた。

「がつつがつつがつもぐもぐもぐもぐ……」

「ちよつと、少し落ち着いて食べなよ!」

少なくとも十個はあったお握りが、見る見るうちに消えていく。当

然、そんな食べ方をしていれば。

「う、ムゲツ!？」

喉を詰まらせるといふものだ。

「うわっ、言わんこっちゃない! ほら、お茶!」

差し出された湯呑みを引つたくり、喉に流し込んだ。

そして、全てのお握りを食べ尽くしたと思つた途端。

ばたんっ

「うわっ!」

食卓に突っ伏した。

「く……」

安らかな寢息を立てている。

その外見的特徴を見て、ようやく思い至つたのか、桃子が口を開いた。

「美由紀。この子、まさか……」

「そ。例の空き巣」

「あら、まあ……」

この、頬に海苔と飯粒をくっつけて寝ている少女が?

「それにね……」

そして、話の続きを聞き……次第に、桃子の顔が強張っていく。

フエイトは、夢を見ていた。あの、ピクニックの続きだ。

母に花の冠をプレゼントしたら、嬉しそうに笑ってくれた。

「ありがとう、○○○○。母さん、とても嬉しいわ」

また、名前は聞き取れなかった。

「お礼に、母さんも○○○○にプレゼントをしないとね」

何度この夢を見ても、その四文字だけは聞き取れない。

「何か、欲しいものはある? 誕生日だから、何でもいいのよ」

「え、いいの!？」

ぱっ、と顔を輝かせる、当時の自分。うんうんと唸り、散々悩み

……

「それじゃあ私、『』が欲しい！」

「え？ ……ええと、それは、」

娘のリクエストに、プレシアは顔を赤らめた。

「今はまだ無理かもしれないけれど……約束するわ」

そして、フェイトの頭を優しく撫でてくれる。

（ボクは……何をねだったんだっけ？）

そして、夢から醒めた。

「ん……」

「あ、起きた？」

ベッド脇に、桃子と美由紀が座っていた。

「……うわあっ!？」

慌てて飛び起き、壁を背に睨みつける。

「おはよう」

桃子がにっこりと笑いかけると、フェイトは調子を崩され、「あ、

ああ」と返事なのかも不明な声を出した。

「じゃ、美由紀、よろしくね」

「うん」

そして、桃子が部屋を出て行く。残った美由紀は、フェイトの手を掴んだ。

「それじゃ、行こうか？」

「は？ どこに？」

「お風呂」

「はあ……」

あまりにも平然と言われ、最初は意味が分からなかった。されるがままに手を引かれ……リビングを通過したところで、ようやく思い至った。

「い・や・だ〜!」

力一杯抵抗するが、そこは体格の差。

「ほら行くよー」

「うわああああん！ 助けてアルフー！ やだやだやだ〜！！」
往生際悪く柱にしがみついて抵抗するフェイトを引っぺがし、犬猫のようにずる
ずると引きずっていった。

しばらくして、恭也が帰宅した。手には、紙袋。

「おかえりなさい、恭也」

「ただいま、母さん」

紙袋の中身は、男物の衣類だった。

「お父さんの様子は？」

そう、彼の父親……昏睡中の、高町士郎の物だ。

「相変わらず、寝てたよ」

恭也の意識は、先ほどからずっと、風呂場へと向かっていた。それというのも……

「熱い、熱いってば！」

「我慢我慢ー」

「ぎゃあっ、シャンプーが目に入ったー！」

「気にしなーい気にしなーい」

「このツ……黒焦げにしてやる！」

「こんな場所です使ったら共倒れだよー」

「しまったー！？」

「……誰か来てるのか？」

「ええ、例の空き巣さんが〜」

「な、何ッ！？」

のほほんと答える桃子に、恭也が目を開く。飛び出しているところ
する恭也を、襟を掴んで止めた。

「まあまあ……そんなに悪い子じゃなさそうだし」

「店を荒らして食料を食い散らして警備員を全滅させる『いい子』
がいてたまるかッ!」

「そうねえ……なら、人の形をした犬か猫だと思えばいいのよ」

桃子は、無自覚に毒舌だった。

「誰が犬猫だッ!」

そこに、風呂上りのフェイトと美由紀がやってきた。

「あら、まあ」

何故か桃子は、驚いた顔をしている。

美由紀のやったことといえば、薄汚れた服を脱がし、ぼさぼさの
髪の毛を洗い、身体を洗っただけだ。だというのに。

「お人形さんみたいねえ……」

桃子の言うとおり、大変可愛らしい姿になっていた。

「あつはつは。可愛いってさ……って、ぎゃあ!」

ぼんぼん、とフェイトの頭を気安く叩いていた美由紀だったが、
その手に思いつきり噛み付かれ、悲鳴を上げた。

「むぐぐぐ……」

「あいだだだだ!」

「こら、離しなさい!」 「おい何してる! そんなもん食うな!」

「そんなもんとは何よいたたた!」

……犬猫という表現も、あながち間違いではなかったようだ。

「……で?」

むすつとしたフェイトが、机を挟んで高町家の三人と向き合う。

「何だよ。聞きたいことって」

「……あなたが使っていた電気、あれは?」

美由紀は、感じていた。フェイトが使った魔法が、あの日、な
のが使ったものと同質の力だということに。

「……さあ、何のこと?」

フェイトも、そう簡単には口を割らない。『魔法』というものが公になれば、この世界での活動に支障をきたす。そのくらいは……多分、フェイトにもわかっている……答だ。

「それじゃ、もう一つ」

こちらの方が、高町家にとっては本題だった。

「高町なのは、って女の子、知ってる？」

第十二話（後書き）

思いつきで、高町家とフエイトを会わせてみました。
ご感想、お待ちしております。

第十三話（前書き）

ハルハルは今日で21歳です。
老けたもんだなあ、、、

第十三話

高町なのは。

腰まである長い栗色の髪。白いバリアジャケット。何度も衝突した、自分の宿敵。

「……知ってるよ。嫌になるくらい」

そう答えた途端、三人がはつきりと動揺した。

「なのはが今どこにいるか、知らない？」

どこに……？ フェイトは首をかしげた。いつだって、相対するのはジュエルシード絡みで、日常の中で遭遇することなど……

「あ」

あつた。つい最近。

「知ってるの!？」

ずいつ、と美由紀が身を乗り出し、フェイトに顔を近づける。

「ああもう暑っ苦しい! 離れる!」

ぐいつと押し返す。

「確か……」

そして、あの時なのはが持っていたビニール袋のことを教える。

この国の言語を、話せるが読めないフェイトには、ロゴの形を口頭で伝えるしか無かったが、桃子達にはそれで伝わったらしい。

「じゃあ、ボクからも質問いい？」

フェイトには、気がかりなことがあつた。

「タカマチって、ファミリネームだよな」

桃子が、無言で頷いた。

「じゃあ、何でアイツはアンタたちとは一緒にいないの？」

あの少年と、フェレットとワンセットでしか見たことが無い。

辛そうに顔を伏せる桃子。目を逸らす美由紀。きつく腕を組む恭也。三者三様に、何かを悔やんでいる様子だった。

「ま、別にどうでもいいけど」

ただの興味本位だ。無理に聞き出そうとは思っていない。用は済んだとばかりに、早々に玄関へ向かう。

「それじゃーね」

「待って！」

呼び止められ、面倒くさそうにフェイトが振り向く。

「もし、なのはと会うことがあったら、伝えてほしいの」

何でボクが……と思うフェイトだったが、食事の恩もあり、黙って続きを促した。桃子は言葉を選び、悩み……

「……ごめんなさい。やっぱり、いいわ」

結局、止めた。

「ふーん」

靴に足を入れる。

「あのさ！」

今度は、美由紀がフェイトを呼び止めた。ため息をつき、フェイトが振り返る。その顔は、『面倒臭い』と言わんばかりであり……実際、面倒くさかった。言いたいことがあるなら、さっさと言えばいいのに。

「お腹空いたら……また、おいだよ」

「……気が向いたらね」

そして、フェイトは高町家を後にした。

『キエエエエエツッ！！』

目の前で、鳥を素体にした暴走体が吼える。とはいえ、大して強力な個体ではない。精々、二体目の獣と同格の戦闘力だ。

「アクセルシューター」

魔力スフィアを展開。数は6。

「シュート！」

ドドドドン！

四発を発射。誘導弾は、暴走体へと迫る。

『クエエエツッ！』

だが、暴走体はその羽根を羽ばたかせ、アクセルシューターを回避する。案外速い。アクセルシューターの速度をいくらか上回っている。

「無駄」

二つで追い掛け回し、それに気を取られている間に、逆方向から挟み撃ち。

ゴゴンッ！

二発、命中。完全に回避されてしまった二発は、魔力に還元。

『Restrict Lock』

動きが鈍くなったその身体を、新たに覚えた魔法で縛り上げる。レストリクトロック。私の得意な、『収束』系の上位魔法……らしい。殆ど思いつきで組んだ魔法だから、そこまで意識していなかった。まあ、要は強力なバインドだ。

「デイベイン……！」

そして、バインドを維持しつつ、すかさずキャノンモードへ変形。「バスター……！」

ドゴオオオオン！

「ジュエルシード、シリアル12、封印」

ふう……終わった終わった。

『なのはちゃん、お疲れ様！』

ぼん、とモニターが表示され、アースラのオペレーター……エイミィがサムズアップしてくる。この人……悪い人じゃないんだけど、テンションが高いから苦手だ。

『高町なのは、戻ります』

あとは、アースラに戻って報告だ。

「お帰りー」

アースラのロビーで、秀人さんとユーノくんがコーヒーを飲んで
いた。

「ただいま！ そつちはどうだった？」

ぎゅつと秀人さんの腕にしがみつく。落ち着く……

秀人さんは、ポケットからプラスチックのような質感のケースを
取り出す。その中には、すっかり光を失ったジュエルシードが一つ、
収まっていた。

「とりあえず一個」

かぼん、とケースを開け、中のジュエルシードを摘み出す。

「レイジングハート、ほい」

それを、待機状態のレイジングハートに近づける。すると、すば
ん、と吸い込まれた。

「あと四つか……」

いよいよ、ジュエルシード集めも大詰めに入ってきている。

最初の頃に比べると、ジュエルシードの出現頻度は格段に増えて
きている。このアースラに関わって十日が過ぎて、既に四つ。二つ
は私達が。もう二つは、フェイトが掠め取っていった。

「クロノは？」

「まだ、周辺に魔力反応があるから、念のために調べていくって」
クロノが苦手な私としては、大助かりだ。クロノは、妙にお堅い
というか……意識的に、壁を作っているような気がする。

「あー……そろそろ、のんびりしたいなあ。学校も休んじゃってる
し」

今回の長期欠席は、ちゃんと富山先生に伝えてある。条件として、
毎日ちゃんと電話連絡することを命じられた。とはいえ、殆どは雑
談……というか、先生の愚痴だ。

『高町さんが休んでから、テストのクラス平均点が下がった』だの、

『葉山君が居眠りばかりして自信無くしそう』だの、『長谷川先生にまた叱られた』だの……あなた本当に教職課程を修了してきたんですかと問いただしたくなるような内容だった。

ビーツ、ビーツ！

再び、警報がけたたましく鳴った。

「やれやれ……」

コーヒーの残りを一気に飲み干し、秀人さんが立ち上がる。

どうせなら、全部いっぺんに出てくればいいのに……

『市街地に、魔力反応！ ジュエルシードです！ ……え！？』

そして、底意地の悪くて偏屈野郎な神様は、私の願いをバツチリ叶えてくれた。

『反応、四つ！ しかも……隔離結界が張られていません！！』

「……はあ！？」「」

私達三人の声が重なる。結界が張られていないことは、被害がモロに発生してしまうし……何より、人が傷ついてしまう。

「どういつつもりなんだ、フェイトは……」

駆け出し、転送ポートに向かいながら、秀人さんが誰にでも無く
呟く。

「そついえば……」

以前、お巡りさんに追いかけられていた時……

「前に言ってた。結界は、いつもアルフに張ってもらってる、って
もし何らかの理由で、アルフとフェイトが別行動を取っていたら

……まずい！

「エイミィ、ルート開け！」

『ちよつと待って！ ……よし、いいよ！』

もつれ込むように転送ポートに駆け込む。

「くそ……!!」

フェイトは悪態をつきながら、四つのジュエルシードと相対していた。

暴走体ではない。それよりも遥かに危険な、純粋なエネルギーの塊だ。四つのジュエルシードが共鳴し、単独のものとは比べ物にならない程の量に膨れ上がったエネルギーは、貪欲に膨張を続け……間もなく、弾ける。

「止まれ……!!」

フェイトは、ただでさえ苦手の防御魔法を応用し、ジュエルシードを押さえ込もうとしていた。狭い範囲に持てる限りの魔力を注ぎ、強固なシールドを展開している。

ピキッ

「あうっ……!!」

シールドに輝が入り、フェイトが唸る。

(せめて、アルフがいてくれたら……!!)

リンクを回復させておかなかったことを、今更になって後悔した。

ピキッ、ピキッ……!!

亀裂が、広がっていく。フェイトの予想を遥かに上回る密度だった。人がまばらな地域で発動していたのが、せめてもの救いだ。とはいえ、もし爆発すれば、この町全体に被害が及ぶだろう。そして何より。

(こんなところで、ジュエルシードを失うわけにはいかない!)

もし一つでも欠けてしまったら、プレシアの願いが叶わないかもしれない。

(おかーさんが、ボクに笑ってくれなくなる……!!)

それが、フェイトには何よりも恐ろしかった。

「フェイト!!」

フェイトの耳に、聞きなれた声が届く。視界の隅で、茜色の毛並

みが揺れる。

「アルフ！ 結界張って！ 終わったらシールドで押さえ込んで！」

「ああ、わかった！」

多少仲がこじれていたとしても、そこは主と使い魔。

キーンツ！

アルフは即座に結界を張り、周囲を遮断。更に、フェイトが使用していたシールドの維持制御を受け持った。

「よくも手こずらせてくれたな！ でも、これで！」
封印魔法を放つ。だが。

ボシユツ……

「ええッ!？」

猛烈なエネルギーの中に飲み込まれ、消えてしまう。

「この！ このっ!！」

ボシユツ！ ボシユツ！

だが、何発撃つても届かない。あまりにもエネルギーの密度が高く、ジュエルシールドに到達する前にかき消されてしまうのだ。

「ふえ、フェイト……!！ こっちが、ヤバイ……!！」

見れば、アルフが維持しているシールドが破られかけている。

「うー！ 何だよ、もー!！」

二人掛かりでシールドを維持する。今はまだ押さえ込めてはいるが、このままでは魔力と体力を削られギリ貧だ。

「ああ、もう……!！ どうすれば!！」

バキンツ！

とうとう、『亀裂』は『穴』になってしまう。

「どうすればいいんだよー!！」

フェイトが叫ぶ、その声に。

「エイミィ！ ジュエルシールドを囲め!！」

力強い声が、答えた。

なのはが、秀人が、ユーノ（人間体）が、揃ってこちらに向かってきていた。

『了解！』

ヴウンッ！

壊れかけていたシールドの代わりに、新しくアースラの出力でシールドを張らせる。ひとまずは、すぐに爆発、ということは無くなつた。

だが、もしもジュエルシールドが爆発すれば、呆気なく破られてしまつたろう。それでも、そのシールドを張る理由は、一つ。

「お前らも手伝え！」

一人でも多くの魔導師で、封印するため。アルフがやってきて、輪に加わる。今は、敵

味方に分かれている場合ではない。4人で、ジュエルシールドを囲む。

「フェイト」

なのはが、フェイトの目をまっすぐに見据えながら……

「色々とお話したいけど……今は、全部後回し」

決意を込め、言った。

「手伝つて。フェイトの力が必要な」

フェイトは、ツンとそっぽを向きながら、答える。

「……ふん！ 足引つ張つたら、承知しないからな！」

フェイトもまた、輪に加わつた。

秀人が、なのはを、ユーノを、アルフを……そして、フェイトを順番に見回す。

「『俺達』で、押さえ込むぞ！」

『俺達』の中に自分がいることに気づき、フェイトは、くすぐつたいような、背中がむずがゆいような……だが、不思議と心が温まる、

そんな気分を感じた。

「言われなくても！」

桜色。空色。緑色。黄色。茜色。

各々の魔力光を輝かせる魔法陣が展開する。

そして、奇妙な現象が起きた。

秀人の、空色の魔法陣。一つの大円の中で、二つの正方形が八角形を描き出す、オーソドックスなミッドチルダ式魔法陣。

それが、変形を始めた。

大円を飛び出すように、四本の直線が伸びて行く。

「え！？」

「な、何これ！？」

二本は、それぞれなのは、フェイトの魔法陣を貫通。

「うわっ！」

「何だい、一体！」

残る二本は、ユーノ、アルフの魔法陣を貫く。

更に、展開。なのは達の魔法陣からは三本のラインが伸び……

ジュエルシールドを取り囲む五つの魔法陣が……秀人を天辺に、五芒星を描いた。

ヒューイイイイイイン……！！

一つに繋がった五つの魔法陣が、回転速度を上げていく。それに比例し、処理能力が加速度的に上昇する。

『稼働率、76%、84%、89%、94%……』

そして、五人の身体にも、異変。

「う、わ……！！」「す……！！」

体中を、かつて無いほど濃密な魔力が駆け巡っていく。

「……よし、やるぞ！」

秀人の号令と共に五人は、示し合わせたように両の目を閉じる。

リンカーコアに、身体を循環する濃密な魔力に、意識を集中する。

どくん

五人はその時……確かに、繋がっていた。

どくん

心臓のように、伸縮するリンカーコア。バラバラだったそのリズムが。

どくん、どくん……

徐々に、合わさっていく。重なっていく。

どくんっ！

そして、五人全員のリンカーコアが同時に、力強く鳴動した。瞬間。

『稼働率100%』

五人は一斉に目を開き……！

「……「せー……の！」「……」

……！

光の爆発が、結界内を埋め尽くした……！

「くっ……エイミー、状況は!？」

アースラのブリッジで、リンディが真っ先に復帰する。

「す、少し待ってください……ええと」

エイミーが、未だチカチカする目を擦り、コンソールを確認する。

「ジユエルシード反応、ありません！ 鎮圧成功です！」

その言葉に、ブリッジが沸く。

「…………そう」

リンディも安心し、シートに腰を下ろす。災害を未然に防ぐことが出来て喜ぶ反面、どうしても気になることがあった。

(秀人くん達が使った魔法…………)

浮かれているエイミィの端末から、情報を引き出す。いくつかの波形グラフと、棒グラフが表示された。

五本五色の棒グラフを繋げ、一本の長い棒にする。既に隣にあった棒グラフとの長さは、ぴったり同じに見える。

次に、五つの波形グラフを並べる。あの、五芒星魔法陣が出現してから、封印魔法が発動されるまでの時間分だけを切り出し、重ねる。その箇所だけが、ピッタリと一致した。

「誤差、ほぼゼロ」

五人がかりで発動された、あの封印魔法に使われた魔力総量は、五人全員分の瞬間最大放出量の和と全く同じだった。

まるで、リンカーコアを直結させたかのように。

(…………まさか、ね)

リンディは、自分の荒唐無稽な考えに呆れ、苦笑した。

(ありえないわ。そんな理論には、何年も前に『不可能』という結論が出ている)

偶然だろう。そう結論付け…………リンディは、そのデータを閉じた。

「……………」
「……………」

四つのジュエルシードが私とフェイトの間にぶかぶかと浮かんでる。取ろうと思えば、いつでも取れる距離。でも、私もフェイト

も、手を伸ばそうとはしない。今がきつと、『その時』なんだろう。
「フェイト」

「……………何？」

眉根を寄せながらだけど、敵意はそんなに感じられない。いや、むしろ……………勝手な勘違いかもしれないけど、親近感というか、連帯感のようなものを、感じている……………？

「どうして、ジュエルシードを集めているの？」

「……………」

斧を握る手に力を込め……………

「うっ！」

辛そうに、顔をゆがめた。

一步、歩み寄り、フェイトの手をとる。

「……………ひどい」

フェイトの手のひらは、ボロボロだった。深い裂傷がいくつも刻まれ、白い肌は火傷で爛れて……………恐らく、私達が駆けつけてくるまで一人でジュエルシードを押さえつけていた所為だ。

「こんな痛い思いをしてまで……………何で？」

フェイトは、私の手を振り払うでもなく、しばし迷い……………口を開いた。

「おかーさんが、必要だって言ってるんだ」

「お母さん？ その人に命令されたの？」

私の問いに、こくん、と首を縦に振る。

「おかーさんの望みが、ボクの望みだから……………」

その目から、ぼろぼろと涙が流れ出す。

「おかーさんの望みが叶ったら、きつとまた、ボクに笑いかけられる！ 優しくしてくれる！」

それは、自分に信じ込ませるように。

「だから……………だから集めるんだ！ 全部集めて、おかーさんに褒めてもらおうんだ！」

残酷な真実から、目を逸らすように。

私達は、よく似ている。

言うことを聞いて『いい子』でいれば、きっと、振り向いてもらえる信じて。

……いつしか、目が見えなくなっていて。

（ああ、そうか……）

ようやく、気づいた。

虚勢を張るような態度が、気に入らなかったのも。けらけらと浮かべる、空虚な笑いが嫌いだったのも。きっと、全部同じ理由。

それが真実なら、ぶつける気持ちは、敵意でいい。

それが本音なら、交わす言葉は、罵詈雑言でいい。

本当の気持ちで、とことんぶつかりたい。

……繋がりたい。

私は、フェイトと……この、ひねくれ者な、寂しがり屋と。

「友達に、なりたいたんだ」

第十三話（後書き）

ようやく、二番目に書きたかった話を書くことが出来ました。
いよいよ第一期も佳境です。
ラストスパート頑張ります。

第十四話（前書き）

今回は、いろいろな仲直りフラグです。

第十四話

フェイトは、経験したことの無い衝撃を受けていた。

「……とも、だち？」

確かめるように。自分の語彙にありその言葉と、照らし合わせる。

「ボクと、ともだち……？」

それは、母からの愛だけを求め、がむしゃらに戦ってきたフェイトにとって、最も縁遠い物であるはずだった。

『どうせ、誰もボクを好きになつてくれない』

第一に、諦観があつた。

まともに親の愛情を受けられなかったことへの、コンプレックス。

『好きになつても、すぐにボクのことなんて嫌いになる』

第二に、恐怖があつた。

中途半端に母がまだ優しくかった頃の記憶があるだけに。手のひらを返されることが、怖かった。

……だから、遠ざけた。

最初から敵として接すれば、下手な勘違いなどしないで済むと。

敵意をぶつけて痛めつければ、最初から最後まで、嫌われたままで終わると。

なのに、フェイトの前に居る少女は……ありつただけの敵意をぶつけ、痛めつけ……明確に、『敵』としてフェイトを認識していた少女は、確かに言った。

『友達になりたい』、と。

「馬鹿じゃ……ないの？」

心のどこかには、それを喜んでいる自分がいる。

「ボクは、キミのことなんて嫌いだ」

でも、出てくる言葉は、憎まれ口。

「うん、私もフェイトが嫌い」

では何故、そんなに穏やかな笑顔で言うのか。

「だったら……友達になんて、なれるわけ無いだろ」

「なれるよ」

ぎゅっと、握られた手から温もりが伝わってくる。

「本当の言葉ををぶつけあって……正直な気持ちを全部伝えあった私達は……きつと、友達になれる」

意味が分からない。嫌いなのに、友達？

「フェイト」

なのはは、フェイトの手を胸元に引き寄せ……もう一度、言った。

「私と、友達になろう」

そして、優しい笑顔を浮かべる。

その笑顔の、なんと眩しいことか。まるで、光を纏っているように。そして、その光は確かに……フェイトの心に、届いた。

「ボクは……ボクは……」

誰かを好きになっていいの？

ぐらりと、フェイトを縛り付けていた妄念が、揺らいだ。

バキンッ！

憤怒の形相でモニターを見ていたプレシアが、デバイスを力任せに机に叩き付けた。

「お人形の、分際で！」

真っ二つになった机が、プレシアが解放した魔力の余波で消し飛ぶ。

「お人形は、私の手の中で踊っていればいいのよ……！」

ヴォーン！

プレシアの脳がフル回転し、複雑極まりない数式を描いていく。

次元跳躍魔法。

プレシアを大魔導師たらしめる、神域の技法である。

バチバチバチツ……………！

「はああああああ……………！」

魔法陣が、帯電する。行使される術式は、次元跳躍……………攻撃魔法。

「ああああつ！！！」

デバイスを、振り下ろす　　！

状況を見守っていたアースラ……………そのモニターが、画面いっぱいに表示する。

『EMERGENCY』

それを確認し、原因を探る、それより早く。

ズガガガガン！！

アースラが、攻撃を受けた。

「きゃあああつ！！？」

船体が、まるで何かに衝突したかのように激しく揺れる。クルーの何人かがシートから放り出され、床を転がった。

「原因は！？」

シートにふんばり、転倒を回避したりンディが声を張り上げる。

「艦載兵器？ それともまさか……………質量兵器？」

落ちたメガネを掛けなおした男性クルーは、モニターに表示されたことを読み上げる。

「いえ、極めて強力な、攻撃魔法……え！？ 魔法！？」

そう。ここは、次元航行船をもってして。ようやく立ち入ることが出来る、準虚数空間。装置を解さない純粋な魔法は、発動すら出来ない。なら、なぜ攻撃が通ったのか。

リンディは、あらゆる可能性を思考し、一つの結論を得る。

「次元……跳躍魔法」

シン……と、あれだけ喧騒に包まれていたブリッジが、静まり返った。

それは、誰もが知っている事柄だった。

ミッド唯一の大魔導師にして、大科学者。富と名手を手に……ある日忽然と姿を消した女性の、代名詞。

「あなただったのね」

魔力の固有パターンを解析し、データベースと照合。そして、リンディの予想通り、女性の写真が表示される。彼女の名は。

「プレシア・テストロッサ！」

何だ、これは……！！

さっきまで快晴だった空が、暗雲蠢く曇天へと変わっていく。明らかに自然現象ではない。そして、その暗雲には、途方も無い密度の魔力が込められている！

「ユーノ！ アルフ！」

俺一人では、到底防げない。何より……

「おかーさん……？」

フェイトが、茫然自失と空を見上げ、動こうとしない。

「なのは！ フェイトを！」

「あ……うん！」

『 protection ！』

桜色のドームが、二人を覆う。そこへ更に、俺と、ユーノと、アルフのバリアを展開する。だが、薄い。四人分のバリアを張って尚、あの暗雲に込められた魔力には届かない。

そして、暗雲が一際強く鳴動し、膨大な魔力が解放される！
(間に合ええええええええええつ！！)

俺は、フェイトとなのはの上空に身を投げ出した。

ズガシャアアアン！！

「……………！！」

声も出なかった。出せなかった。そこいらの暴走体なんかとは、桁が違った。体中に火箸を突っ込まれたみたいに、感覚が遠い。そのくせ、痛覚だけは通常の何倍にも鋭敏になっている。

「あ………」

そんな一瞬にして永遠のような地獄の苦痛が、ようやく終わった。目を開けると、何故か視界が赤い。どうやら、眼球内の血管が破裂したらしい。全身も同様に、血が噴出し、焼け焦げている。

「……………！！………さん！！」

なのはが、俺を呼んでいる。

なのは、と言おうとして、出てきたのはそんな意味の無い吐息。どうやら、本格的に失神しかけているらしい。

そんなに、焦らなくて大丈夫……どうせ、目が覚めたら、治っているんだから。

俺は、そういうふうに出てくる……』 『 なんだから。

「秀人さん！」

私の腕の中で、秀人さんが目を閉じた。全身は黒焦げ。血が滲んでいない箇所なんて、一つもない。

「秀人！」

ユーノくんが駆け寄ってきて、すぐに痛み止めの魔法を使う。怪我はいつも通り、見る見るうちに塞がっていく。でも……目の前で傷つく姿なんて見たくもない。

「う……」

よほどのダメージだったのに違いない。痛み止めをしても、時折苦痛で顔が歪む。

「高町なのは！」

転移魔法の気配と共に、クロノが駆けってくる。そして、血まみれの秀人さんを見て、息を呑んだ。

「エイミー！ 救護班を用意！ 囑託魔導師が重症だ！」

『了解！』

えっと……

（ユーノくん、話すべきかな？）

秀人さんは、もう殆ど無傷。ダメージが抜けたら、すぐ復帰できる。

（いや、いいよ。話しても混乱するだろうし、秀人は、その……）

自分の身体のこと、あまり好きじゃないから

私は、無言で頷いた。

「そっだ、フエイトは！？」

周囲をぐるりと見回す、が、姿は見えない。

「あの雷撃が収まってすぐ、アルフが転移魔法で……僕は止めたんだけど」

ユーノくんがうな垂れる。

「フェイト、おかしさん」って言った」

母親からの命令で、ジュエルシードを集めていたフェイト。最初は……というか、今もあまり好きじゃない。でも、ジュエルシード集めに必死だったことは確かだ。

さっきの雷撃が、もしフェイトに直撃していたら……血まみれになっていたのは、フェイトだった。下手をすれば、死んでいた。

そんな攻撃を、明らかにフェイトを巻き込むと分かっけていて撃つなんて……！

「許せない……！」

ぎりつと拳を固める。

「なのは、戻ろう」

「……うん」

今は、帰って休もう。

そして、今度こそ……フェイトと友達になるんだ。

「このッ！ 役立たずがアッ！！」

バチイイイイインッ！！

「あああああッ！！」

磔にされ、激しく鞭打たれるフェイト。

「あれほどのッ！」

バチンッ！！

プレシアの振るう鞭が、帯電している。怒気を越え、殺気にも達する剣幕と共に、フェイトの身体を痛めつける。

「あれほどの好機を前にしてエッ！！」

そして、また鞭を振り上げる。

「やめろおおッ！！」

その鞭を、乱入したアルフが受け止める。狙いを逸れた鞭は、床

を抉るに留まった。

「くっ……この、犬畜生が！」

『Barrett』

射撃魔法を行使。だが、それはアルフのシールドに呆気なく弾かれる。プレシアは、自分の身体が予想以上に言うことを聞かない事実に苛立つ。本来の威力であれば、シールドごと貫くはずだった。

「いい加減にしろよ！ お前は、フェイトの母親だろ！」

「母親……？」

プレシアは最初、きょとんとした顔を。そして次の瞬間には、嘲笑を浮かべた。

「ははっ、あはははははっ……！！ 母親！ そう、母親！」

愉快な喜劇をみたかのように、心底可笑しそうに笑う。

「何がおかしい……！ フェイトを離せ！」

アルフが飛び掛かり、フェイトを拘束するバインドを破壊する。

それを、特に阻止することはしなかった。

「くっくっく……ああ、可笑的い」

邪悪な笑みと共に、今度は本気で攻撃魔法を放つ。

『Photon Bullet』

何の変哲も無い、初歩の攻撃魔法。だが単純故に、使用者の力がダイレクトに現れる。大魔導師の称号は、伊達や酔狂で授けられるほど軽くは無い。

ズバアンツ！！

「あぐっ……！！」

今度こそ、アルフのシールドを粉々に叩き割り、その背中に突き刺さる。

「フェイト……！！」

覆いかぶさるように、フェイトの身体をかばうアルフ。その背中に、容赦なく攻撃魔法が叩き込まれる。

『Bullet』

『Bullet』

『Bullet』

『Bullet』

『Bullet』

『Bullet』

執拗に。何度も。いたぶる為だけに威力を落とし、じわじわとアルフの魔力値を削っていく。

シールドを破られては再構成し、また破られては再構成し……苦痛に耐えるアルフの頬に、フェイトが手を添えた。

「駄目だよ、おかーさんは、ボクのために……」

しどろもどろに、希望的観測を口にする。

「ごんっ！」

アルフはたまらず、フェイトに頭突きをかます。

「……アルフ？」

半ば呆然と、フェイトは呟く。

「目を覚ませ！ あのババアは、フェイトを殺そうとしたんだ！」

フェイトは、目を伏せる。かつてのフェイトであれば、それを聞くともしなかっただろう。だが、なのはとの出会いは、少しだが

……確実に、フェイトの心に変化をもたらしていた。そう。

『Photon Burst』

本当に自分を愛している母親が……

「消えなさい」

殺傷設定の魔法を娘に躊躇無く放つことなど、ありえないと気付く位には……！

「アルフッ！！」

高速機動魔法を発動し、アルフと共に間一髪の所で射線上から退避する。

アルフは、残り少ない気力を振り絞り、次元転移魔法を発動する。座標をいちいち指定しているヒマは無い。目の前では、プレシアが再び魔力のチャージを行っている。かつて使用した座標をランダム

に指定し……

ギョーンッ！

プレシアの魔法が着弾する寸前に、転移に成功した。
ただし、フェイトだけ。

「チツ……まあいい」

忌々しげに舌打ちしたプレシアは、デバイスを待機させる。

「ジュエルシードの撒き餌にでもなればいいわ」

プレシアは、既にフェイトに大した利用価値を見出してはいなかった。

せいぜい、あの白いバリアジャケットの少女と戦わせて、ジュエルシードを一箇所に集中させて……自分の手で奪えばいい。
凍てついた視線が、目の前に転がるアルフへ向けられる。

「せいぜい、利用させてもらっわよ」

首根っこを荷物のように掴み、引きずっていった。

ドサッ

「うっ……」

フェイトは、身体を投げ出されたショックで目を覚ました。

「アルフ……？ どこ……？」

一緒に脱出したはずのアルフの姿が見えない。まさか、転移途中ではぐれてしまったのか。リンクは、復帰するのを忘れていた。今度こそ本当に、一人きりだった。

「おかーさん……」

疑念は、強まっている。

『目を覚ませ！ あのババアは、フェイトを殺そうとしたんだ！』
アルフが言ったとおりだと認める自分もいて。

『……お誕生日のプレゼントは、何がいい？』
でも、まだ母を信じている自分も居て。

「ごちゃごちゃと、頭の中を渦巻く。」

「……面倒、くさい」

考えるのは、苦手だ。

フェイトは、まずは現在位置を確認する。四方を壁に覆われているから、恐らくはどこかの庭だろう。民家と、古風な造りの道場があり……

「あれ？」

フェイトにとっては、一度だけ目にした光景だった。

「……ここ、確か」

ガラツ、と縁側の窓が開き……

「……あれ、あんた」

三つ編みの少女……高町美由紀が、顔をのぞかせた。

そして、庭先に横たわるフェイトの、惨い傷を目にした。

「どうしたの、その怪我！」

素足のまま庭に駆け出し、フェイトを抱え上げる。

「お母さん！ 恭ちゃん！ ちょっと来て！」

そして、フェイトは奇妙な縁により、再び高町家へと身を寄せることとなった。

その一方。

「アリサちゃん」

ウェーブした黒髪の少女、月村すずかは、隣に座る金髪の少女……

……アリサ・バニングスに話しかけた。

「何、すずか」

「マルスね、もう歩けるようになったよ」

「……そう」

マルス。あの、大怪我をした子猫。

「……」
アリサは、難しい顔をして黙り込む。きっと、考えていることは

……
「高町さんのこと？」

「うえっ！？ ち、違うわよ！」

凶星を言い当てられ、慌てふためくアリサ。

「アリサちゃん、本当はもう気付いてるんじゃない？」

アリサは、また下を向いてしまう。

「あの状況じゃあ、確かに高町さんがやったって考えてもおかしくないけど……」

アリサは、流れる窓の外の風景を見ながら、搾り出すように言った。

「アイツは……そんなことするヤツじゃない」

「そうだよね」

すずかは、トレードマークのヘアバンドを外す。

「ね、憶えてる？」

「……わざと聞いてる？」

「うん」

実に清々しい笑顔だった。

「……………」

アリサは、げっそりとした顔になる。

「憶えてるわよ」

それは、今から二年前のことだった。

当時のアリサとすずかの関係は、今のように仲の良い友達同士ではなく……いじめっ子と、いじめられっ子だった。

私の強かったアリサと、引っ込み思案だったすずか。相性は、まさに最悪だった。そしてある日、昼休みの屋上で、アリサはすずかのヘアバンドを奪い、いじめていた。

『返して』と追いつがるすずかを面白がり、ヘアバンドを放ったり、高く掲げてみたりと……傍から見れば、ただの子供の悪戯だが、やられる側は堪ったものではない。

そして、とうとうすずかの涙腺が涙でいっぱいになった時……屋上に居合わせていた高町なのはがベンチから腰を上げ……

ばきっ

アリサの頬を、グーで殴った。

『痛い？ ……痛いよね』

そして、尻餅をついたアリサの手からヘアバンドをむしり取る。

『あなたは楽しいのかもしれないけど……やられた子は、今のあなたみたいな、痛い思いをしているんだよ』

諭すように、非難するように言い、すずかにヘアバンドを返して去っていった。

『う……』

アリサはようやく、頬の痛みを知覚し……

『うええええええええ……！』

号泣した。そもそもがお嬢様育ち。誰かに暴力を振るわれることになど、慣れてはいなかった。おろおろとアリサを泣き止ませるすずかと、泣き続けるアリサ。騒ぎはあつという間に広まり……数日後。高町なのはは、転校していった。

最初は、父親が手を回したのかと思った。だが、聞いてもきょとんとするばかりで、そんなことをした憶えは無いと言い……それどころか、すずかに対して行っていた娘の所業に、大いに怒った。すずかに謝罪するまでは帰ってくるなとアリサを放り出し、門扉を閉めた程だ。そしてその日が、アリサとすずかが友達になった日になるのだが……どこか、胸にしこりを残す日でもあった。

「謝らないと、ね？」

すずかの言葉に、アリサはうん、と頷いた。

第十五話（前書き）

なかなか伸びないです。

秀人に派手な必殺技とか習得させた方がいいのでしょうか……

第十五話

「やめる……」

夢を見ていた。今現在、自分が夢の中に居ることをはっきりと認識している……いわゆる、明晰夢というやつだ。意識ははっきりとしているのに、身体が利かない。

「やめる……！」

目の前で展開される光景を、ただ眺めて続けていることしか出来ない。

『痛い……痛いよお……おとうさん、おかあさん……』

病室にいる幼い子供。その四肢にはギプスがはめられており、痛々しいことこの上ない。

彼の求める両親は、廊下で醜く言い争いをしていた。

『これで何度目だと思っている！』

『私に言わないでよ！』

『治療費だつてタダじゃないんだぞ！』

『だから、私に言わないでつて言ってるでしょ！？ あの子に聞いてよ！』

苛立ちを隠そうともしない。

だがそれも、仕方が無いのかもしれない。この少年が入院するのは、この年だけで四回目。ここ数年の治療費だけで、新車が買えるほどだ。

最初のうちは、心配もされた。だが、二回目、三回目ともなると徐々に態度は硬化していき……今では、この少年は両親にとって厄介者以外の何者でもなかった。

『こんなことなら、子供なんて……』

『あなたが欲しいって言ったんじゃない！ そうよ、あんな子供なんて……！』

××××××！！

「やめるおおおおおおおつ！！」

ガシヤアアアアン！！

自分の叫び声と、破碎音で目が覚めた。

「……あ？」

腕に僅かな痺れ。目を開けると、真っ白な天井が目に入ってきた。視界が、涙で滲んでいる。くそ……ガキじゃあるまいし。

ところで、今の音は……？

「キミは……僕を殺す気か？」

クロノが、ベッド脇に立っていた。そして、その向こうの壁には、医療機器の残骸が。金属製らしきその側面が、ベッコリと陥没している。

「……悪い、寝ぼけてた」

「高価な機材を……」

ぶつぶつ呟く。

「ツケておいてくれ」

腹筋に力を入れ、身体を起こす。……うん、異常無し。あの凄まじい魔法を喰らった

割には、回復が早くて助かった。

「そのままでもいい。少し、話をしよう」

そして、ベッド横の椅子に腰を下ろした。

「話？」

何か話すようなこと、あつたっけ？

正直、俺達の間には友情なんてこれっぽっちも無いし、クロノも性格的にそういう馴れ合いはしない。

「君の身体はどうなっているんだ？」

「」

……その話か。

「魔法攻撃とはいえ、落雷の直撃だ。事実、君の身体はボロボロだった。第三度の火傷に、血管の破裂と、それに伴う臓器の損傷。普通なら死んでいる」

ああ、確かに痛かった。

17年の人生で、一番痛かったかもしれない。さっさと気絶できていて、本当によかった。

「治癒魔法を使った形跡はあったが、それはあのフェレットもどきが使った痛み止め程度のものだった」

つまり、俺の身体のことを詳しく聞きたいってだけか……

「お前には関係ない」

別に、俺の身体がどうなっていようが……一時的に、仕方なく協力関係を結んでいるだけのこいつらには、関係ない。

「いや、ある」

クロノは、俺の不愉快そうな表情に躊躇うでもなく、踏み込んできた。

「協力関係にある以上、戦闘に関する情報は共有すべきだ」

「………わかったよ」

なら、半分だけ教えるか。戦闘に関する情報なのだから、それで十分の筈だ。

「昔から、傷の治りが異常に早いんだ」

「……明らかにそのレベルを大きく逸脱していると思うんだが」

「理由はわからない。これは本当だ」

そうか、と一拍置く。

「あの筋力は？」

俺が寝ぼけて殴り壊した機材を顎で指す。

「そっちは純粹に、鍛錬の賜物」

……これは、嘘。

「………」

今度こそ訝しげに目を眇めるクロノ。

「秀人さん、いる？」

と、医務室のドアが開き、なのはがユーノを肩に乗せて入ってきた。

「具合どう……って、クロノ？」

「ああ、邪魔している」

「そう」

素っ気無く返し、ぴよんっ、とベッドに飛び乗ってくる。そしてそのまま、べたっと身体をくっつけてきた。口調こそ大人びてはいるが、こういうところは子供っぽくて可愛い。

「秀人さん、歩けるなら帰ろう。ご飯作ってあげる」

「そうだな。味気ない病院食は勘弁だ」

そうと決まれば。

「よっし、帰るか」

なのはを抱えながら、ベッドを降りる。

「そうだ、二人とも」

と、ユーノが口を開いた。……どうでもいいが、何でまたフェレットの姿なんだ？

「ん？」「何？」

「艦長からの伝言で、『少しでもいいが、何でまたフェレ』とのことだよ」

「えー……」

なのはが不満げに口を尖らせる。

「ユーノ、コーヒーか何か、持ってきてくれ」

そこに、クロノが割り込んできた。

「治療室内は水と、君の言う『味気ない病院食』以外の飲食は厳禁だ」

「ちえっ……」

そのところは、普通の病院と同じか。

ユーノが給水機からコップに水を汲み、ベッド脇に置く。

そして、味気の無い水を一口飲み、数分。艦長とエイミィが、治

療室に入ってきた。

「艦長。エイミーまで……何かあったのか？」

艦長はそれに答えず、まっすぐになのはの前までやってくる。

「なのはさん」

そのただならぬ様子に怯え、一層強く俺にしがみ付く。

「……何ですか」

まさか、今になってジュエルシードを渡せとか、そういう物騒な話じゃないだろうな。

「家庭訪問を行います」

「かてい……」「訪問？」

最初はきよとんとしていたなのはの身体が、ハッキリと強張った。

「……私の家族は、秀人とユーノさんとレイジングハートだけです」

ぎゅうつ……と、力が籠る。

「父親は高町士郎。現在入院中。母親・高町桃子、兄・高町恭也、姉・高町美由紀は、家業である喫茶店を経営ちゅッ」

バシヤッ！

資料を読み上げていたエイミーの顔面に、コップから放たれた水が直撃した。

「……調べたな」

地の底から響くような、低い声。

ぎろっ、とエイミーを睨みつける。その手には、ぼたぼたと雫を垂らすコップ。

「……ごめん」

しおらしく謝るエイミーだったが、なのはの怒りは収まらない。

「よくも……ッ……！」

今度は、そのコップそのものが投げつけられた。
パリンッ！

だが、それはクロノによって叩き落とされる。

「落ち着け。……艦長、まずは説明を」

「……ええ、そうね」

ふう……とため息一つ。

「なのはさん、これは未確認の情報ですが……海鳴市に、つい最近使われたと思しき転移魔法の形跡があります」

「転移魔法なんて、アースラからでもしよっちゅう使ってるだろ」

なのはを落ち着かせるために抱き寄せ、頭を撫でる。

「ええ、そうね。でも、その魔力のパターンが……アルフと呼ばれていた、あの使い魔の物と一致しているの」

アルフが……？　今までは神経質に形跡を消していたのに、なぜ今になって。

「場所は、ここ」

表示されたのは、それなりに広い家。一度だけ、行った事がある。

そう、確かここは……

「高町の、家」

なのはが、辛そうに顔を背ける。楽しい思い出なんて一つもない。

ここは、なのはにとつて安息の場所などではなかった。ただ無為に拘束され続ける、薄暗い牢獄だった。

「境界を張ればいいじゃないですか」

隔離境界を細かく設定して、フェイトだけを残す事だつてできるはずだ。

わざわざなのはの血縁者と顔を合わせる意味が分からない。

「なのはさん、ご家族のこと……」

『家族』という言葉に過剰に反応し、癪癪を起こして暴れだす。

「家族じゃない！ あんな奴ら……！」

腕の中で暴れるなのはをどうにか押さえる。放したら、艦長に掴みかかっていきそうな勢いだ。

「よしよし……ほら、落ち着けって」
ふー、ふー、と荒い息をつくなのはの頭を、しばらくの間、ゆっくりと撫でる。

艦長やクロノを目で牽制し、なのはを刺激しないように。

「なのは、行ってみないか？」

びくつとなのはが弾かれたように顔を上げる。

「あの馬鹿共も、そろそろ反省した頃だろうし……」

「でも……でも！」

自分がいなくなっても、あいつらが変わっていなかったら……いつもと変わらず、家にいなかったら。なのはの気持ちなんて、ちっとも考えていないということになってしまふ。

「大丈夫。俺も、ユーノも付いて行く」

過剰な嫌悪は、『愛されたかった』という願望の裏返し。なのはは元々、愛情深い女の子なのだから。

「安心していい。もし、のうのうと商売なんてしていやがったら……」

ヒュンッ

空中に正拳突きを放つ。

「俺が、あの店をブツ壊してやるよ」

クロノが、ぎょつとした顔で俺を見た。

「………秀人さんが、そう言うなら」

ポケットから、ピンク色の携帯電話を取り出す。

「もう一人、呼んでいい？」

「ああ、もちろん」

そして、携帯電話のアドレス帳を開き……呼び出した。

そして、翌日の土曜日。

「高町さん、吾妻さん、お久しぶりね」

なのはの担任が、パリツとしたスーツ姿で待ち合わせ場所にやってきました。

「あの、俺のことは……」

今、はつきりと『吾妻』と呼んだ。ってことは、もうバレているのか。

「ええ、高町さんから聞いています」

微笑……というより、苦笑する先生。大人なのに、少し子供っぽくて、アンバランスな魅力が……なのは痛い痛い足を踏むな脇腹をつねるな。

「先生、来てくれてありがとう」

にこつと笑い、素直に礼を言うなのはが少し新鮮だ。この先生には、かなり気を許しているみたいだ。何があつたかは知らないが……なのはに親しい人が増えるなら、素直に嬉しい。

「そちらの方達は？」

そして、俺の後ろに控えていた二人……リンディとクロノに話題を移す。

「初めまして。なのはさんと親しくして頂いております、リンディ・ハラオウンです」

「息子の、クロノ・ハラオウンです」

設定的には、偶然知り合った留学生のクロノと、その母親ということになっている。無茶苦茶だ。

「息子がお世話になってるなのはさんのご家族に、是非ご挨拶をと思ひまして」

よくもまあスラスラと嘘が言えるものだ。

「ええと、その……」

先生が、ちらちらとなのはを見やる。この反応を見るに、なのはの事情を知っているのだろう。なのはは、先生に強張った笑みを返した。

「……だから、彼らの経営する喫茶店に行こうという話になりました」

なのはが、努めて他人行儀に言う。

そして、大通りに差し掛かり、例の店の前まで来たのだが……

「……臨時休業……」

俺、なのは、先生の声がハモった。

「高町さん」

先生が、なのはの肩を抱く。

「……」

なのはは無表情で、店を眺めていた。

「思ったよりは、マトモな神経してたんだな」

バシユツ……

手元に集中させていた魔力を霧散させた。

「本気だったのか……」

クロノが呆れたように言う。当然だろ。

「……、です」

そして、牛歩のように歩き、高町の家までやってきた。電気は点いていない。

昼間だからか……もしくは、またどこかへ行っているのか。呼び鈴を鳴らせば、分かる。

「……」

なのはは、かたかたと震える人差し指を呼び鈴に伸ばし……

「……！」

反射的に、手を引っ込めた。

やっぱり、怖いか。

「なのは……」

ユーノが声を掛けるものの、なのはは俯き、首を横に振っている。

「高町さん」

「先生……？」

先生が、なのはの手をぎゅっと握る。

「もう一度だけ……信じてみましょう」
俺を見て、ユーノを見て……

「……………うん」

弱弱しく、だが確かに、頷いた。

先生が、なのはの手を握ったまま呼び鈴まで持っていき……

ピン……ポーン

一緒に、押した。

一秒。二秒。三秒。四秒。五秒……

反応、無しか……

「ふええ……………」

なのはの目尻に、じわりと涙が浮かび……

「さて、ブツ壊すか」

俺が、デイバインバスターのチャージを始め……

「させないぞ」

クロノが俺を拘束しようとデバイスに手を伸ばした、その時。

「はい、どちらさま？」

ドアから、なのはソックリの女が顔を出した。

「あ……………」

なのはが何かを言おうとしてパクパクと口を開き、結局何も言えずに黙り込んでしまう。

そして、なのはソックリの女は、俺を見て顔を強張らせ……その腰にしっかりとしがみつくと、なのはを見て。

「なのはー！」

素足のまま、駆け寄って来た。

「……………」
「なのはが片手を伸ばし、すぐに引っ込めてしまう。」

「ほら、行って来い」

俺は、なのはの背中を、軽く押し出した。

「……………」
「あ」

たたらを踏み、不安げに俺を見上げる。

「……………」

そして、立ち尽くすなのはを……………なのはの母親が、しっかりと抱きしめた。

「ごめんなさい、ごめんなさい……………」

泣きじゃくり、なのはに縋りつく。なのはは、そんな彼女を振り払うでも無く、ただ困惑した表情を浮かべ……………両腕を、回した。

「なのは!?!」……………!」

そして、聞きつけたのか、残る二人も顔を覗かせた。

「……………」

「こち、こち、と。時計の秒針の音。」

「ぐすつ……………ぐすつ」

なのはの母親……………桃子の鼻をすすする音。

その二つだけが、リビングに聞こえる。

今現在、俺、先生、クロノ、艦長の四人は、ソファに横並びに座っていた。

目の前には、なのはの兄、恭也と、姉の美由紀。ユーノは、美由紀の腕の中だ。

なのははといえば……………」

『秀人さあん……………何とかしてよ……………』

「ちょこん」と、桃子の膝の上に収まっていた。顔が真っ赤だ。もぞもぞと、それとなく下りようとすると、桃子はぎゅっと腕に力を

入れ、抱き寄せる。そんなことを続けていた。

なのも、口では嫌がつているが、本心はまんざらでもない……
というか多分、超喜んでいる。というわけで、しばらく放っておこ
う。

『秀人、やつぱり、いるみたいだ』

敷地内をサーチしていたユーノが、そう報告する。

『フェイトか？ それとも、アルフか？』

『多分、フェイトで間違いない』

「……で、お前ら」

今は、桃子とは話が出来る状況ではないし、恭也と美由紀に目を
やる。

「はい……」

美由紀が、おずおずと返事をした。

「もう一人、この家にいるはずだ。俺達は、そいつに会いに来た」

ソファから立ち上がり、ユーノを床に下ろす。

「こつち、です」

なのは……は、後でいいや。今は、思う存分母親とくつつかせてや
ろう。

艦長とクロノは、リビングにいてもらうことにした。そろそろと
人数が来たら、怯えて逃げ出すかもしれないし。

そして、フェイトがいる部屋まで来た。ドアプレートには、『な
のは』と書かれている。

「入るぞ」

ドアを開ける。オレンジ色の壁紙と、白を基調とした家具。それ
以外は何も無い、殺風景な部屋だった。そして、ベッドの上には……

「……やつぱり、キミ達か」

薄桃色のパジャマを着た、フェイトが横たわっていた。

手に、足に……捲れたパジャマの裾から覗く腹部に、真っ白な包帯が巻かれている。

「おい……その怪我、何だ」

あの時、雷撃のダメージは受けていないはずだ。なのに何故、フエイトはこんなにボロボロになっているんだ。

「くふふ……おカーさんに、怒られちゃった」

自嘲し、空虚に笑う。

「いつ……た」

傷に障ったのか、顔をしかめる。

「ユーノ」

……とにかく、治療だ。

『この二人、追い出すから治療を』

『多分もう、魔法についてはある程度知ってると思う』

そして、レイジングハートの映像記録を再生する。そこには、あの日の晩……なのはが、攻撃魔法でこいつらをぶっ飛ばす姿が映っていた。

「今から見ることは、他言無用だ。いいな」

二人は、静かに頷いた。

「それじゃ、はじめね」

そして、ユーノが人間の姿に戻る。

「……………」

二人は、あんぐりと口を開けて呆けている。

それを無視し、ユーノが魔法陣を展開。そして、発動。

緑色の光のドームが、フエイトの横たわるベッドを覆った。

「この中にいれば、外傷は一日くらいで治るから」

「……………」

何を言つても無く、もそもそと身体を起こした。

とんとん、と階段を軽い足音が上ってくる。

「……………」お邪魔します」

なのはだった。妙に緊張した面持ちで、部屋に入ってくる。

別に、フェイト相手に緊張するようなことも無いだろうに……と、そこまで考え、鈍い俺にも思い至った。部屋には、恭也と美由紀がいる。まだまだ溝は深い。

「美由紀、戻るぞ」「そうだね」

二人は、ふつと苦笑し、頷きあった。

なのはの両肩を、それぞればんつと軽く叩き、部屋から出て行く。

残されたのは、アルフを除くいつものメンツ。

「フェイト」

「……なに？」

フェイトとなのはが、見詰め合う。

「私は、ジュエルシードを譲れない」

「これは、ユーノくんのものだし……何より、」

なのはは、フェイトの手を取る。

「フェイトをこんな目に遭わせるような奴には、渡せない」

「……でも、ボクは」

フェイトは、まだ納得できないようだ。

「ボクは……おカーさんの願いを、叶えてあげたい」

どんなに酷い仕打ちを受けたとしても、フェイトにとってはただ一人の母親。

「うん、わかってる」

だが、なのはとてそんなこと百も承知している。

だから。

「だから、勝負しよう」

「え？」

フェイトが、なのはの顔を見返す。

「傷が治って、魔力と体力も満タンにして……そうしたら、ジュエ

ルシードを全部賭けて、勝負しよう」

「でも、ボクのは……全部おかーさんに渡しちゃった」

「それじゃあ、私が勝ったら、私のお願いを一つ聞いて」

「……でも」

「ふうん、負けるのが怖いんだ？」

なのはが、あからさまな挑発をする。

途端、しおらしくったフェイトの瞳に、炎が灯った。

「誰が！ ボクがキミに負けるなんて、万に一つもあるもんか！」

「じゃあ、いいよね？ 私が勝ったら、何でもお願い聞いてもらうよ」

「いいよ！ ボクが負けたら、何でも聞いてやるよ！」

がばつとベッドから起き上がり、なのはと額をぶつけ合うような距離でにらみ合う。

きゆう〜……

と、フェイトの腹が、可愛い音を鳴らした。

「あつ」

真っ赤になり、腹を押さえる。

「」「ぶつ……」「」

思わず吹き出してしまった俺達を、フェイトが睨む。

「……おなか空いたんだもん」

ふて腐れるように言い、そっぽを向く。

と、ドアがコンコン、とノックされた。そして、美由紀が顔を覗かせる。

「みんな、ご飯出来たよ」

「丁度よかったな。んじゃ、行くぞ」

そして、フェイトを抱え上げる。

「あああああつ！？」

なのはが、愕然とフェイトを見上げる。

「ど……どうした？」

いきなりの大声に驚き、落としそうになってしまった。

「……うつつ」

何故か涙目だ。

「ふん……」

フェイトが意地悪く笑い、俺の首に両腕を回し、より一層密着する。

「くっ……！ こいつ！」

「くふふふつ。どうかしたのー？」

……何か知らんが、水面下では何かの応酬が続いているらしかった。何だろつな、一体。

「ユーノ、魔法陣から離れても効果は続くか？」

「んー、ちよつと待って」

再び詠唱し、魔法陣から一筋のラインがフェイトに繋がった。

「とりあえず、この家の敷地はカバーしたから大丈夫」

さっすが。こういう器用な真似は、俺もなのも出来ない。俺達が習得しているのは、全て戦闘絡みの魔法だけだ。こういったサポート系の魔法も、習っておいて損は無いかもな……適性の無い射出系を無理して覚えるより、満遍なく覚えた方がいいかもしれない。

『ヒデト、それはお勧めしません』

と、レイジングハートが割り込んできた。

「え、何で？ 満遍なく色々と使えたほうが便利そうだけど」

『まずは、あなたの最も得意な分野を見つけ、徹底的に鍛えなければなりません』

「……俺、近接型じゃなかったっけ？」

殴って蹴って、しか能が無いぞ。操作の利かない砲撃はゼロ距離でしか使えないし、射撃もばら撒くことしかできない。

『いいえ、違います。確かに、そういう一面もあるでしょう。ですが、あなたの魔力運用は、あまりにも繊細に行われている』

「いや、それは前に聞いたけどさ。殆ど無意識にやってるんだよ」
『それが『資質』というものです』

俺の魔力制御とやらが、もう少し雑であれば、レイジングハートも迷うことなく俺を近接型として鍛えていたらしい。

『資質を無視しての成長は、いずれ致命的な歪みを生じさせます』

なのはには、砲撃を主軸に据えた今の戦い方があるように、俺にもあるのだろう。今はまだ分からないが、それを見つげるためには

……

「とにかく、場数をこなす必要がある」

『そのとおりです』

そうか。それじゃあ、今度アースラ武装隊の連中かクロノあたりと模擬戦でもしてみるかな。

俺はそんなことを考えながら、フェイトを抱え、なのはの手を引きながら、食欲をそそる匂いが漂うリビングへと下りていった。

第十五話（後書き）

というわけで、ようやく彼らは『家族』に戻るきっかけを得ました。

次回あたり、秀人を強化してみようかと思えます。

クロノあたりなら、相手に丁度いいかな？

ご意見ご感想、お待ちしております。

第十六話（前書き）

遅くなりまして申し訳ありません。

10万PV突破しました。まさかここまで伸びるとは思わなかった
ので、正直ビックリです。

第十六話

なのはが、フエイトと勝負の約束を取り決めていた頃、リビングにて。

「お母様、よろしいでしょうか？」

なのはの担任教師、富山咲よきが、桃子に硬い声をかけた。

「はい……なんでしょう」

咲は、張り詰めた表情で言う。

「あなたは、本当に申し訳ないと思っっているのですか？」

そこには、押し殺されてはいるが……確かな、怒りがあつた。

「たか……なのはさん、は、とても優しい子です。今、母親であるあなたに、涙ながらに謝られれば、今までのネグレクトを許すでしょう」

育児放棄
ネグレクト、という言葉に、びくつと肩を震わせる。だが、それは事実だ。

たった九歳の子供を、最も親が恋しい年頃の子供を、しっかりとした子だからと放つたらかし、孤独に過ごさせたその罪は、重い。

「そして、許されたあなたは、あなた方は……また、繰り返すのではないですか？」

『その場凌ぎで許してもらって、また繰り返すのか！ あの暗い家に、なのはを一人ぼっちで取り残すのか！』

奇しくもそれは、あの日の晩、秀人が言い捨てていった言葉と同じだった。

「そんなんっ……私は、これからは、ちゃんとなのはの傍にいてあげます！ もう、放つたらかしになんかしません！」

身を乗り出し、全身で否定する桃子。

「そうしないという保障は、どこにもありません」

だが咲は、それを切り捨てた。

そして、滔々と語り出す。

「知っていますか？　なのはさんは、教室でも一人ぼっちだったんですよ」

この三ヶ月間、なのはの担任になってから、彼女を見ていた。

「自分から壁を作って、誰とも関わりを持たずとせず……ずっと、ずっと一人だったんですよ」

いつも一人で、本を読んでいた。

「私でも読まないような、活字の本を読んで……それを盾にして、誰からも話しかけられないようにして」

受け持つ生徒の、1、2年次のことについては、以前の担任教師から聞いていた。そして、その誰もが……ある生徒について、言及していた。

『成績優秀だが、何故か早退が多い』

『家に電話をしたが、誰も取り次がない』

『誰かと一緒にいる場面を見たことが無い』

そして、始業式の日。咲の前に現れた彼女……高町なのはは、咲が危惧した通りの少女だった。

「でも、なのはさんは変わりました」

あの授業参観の日、なのはが、葉山健太と八代望という二人と雑談に興じている姿を見て……そして、着慣れていなさそうなスーツ姿の少年に見せた、心からの笑顔を見て、ようやく安心した。

「吾妻さんのおかげです」

一目で、信用に足る少年だと分かった。

「吾妻さんが、血のつながりも無いなのはさんのために、何をしてあげたのか、ご存知ですか？」

それは、なのはとようやく心を通わせたあの日、話してくれたことだ。

話をして、暖かい食事を振舞ってやり、一緒に眠った……ただ、それだけのことだ。その程度のことを、なのはは、本当に嬉しそうに話してくれた。だが、それをすべきだった桃子達は、その程度のことすらしてやらなかった。

「知らないんですか？」

びくつ、と桃子が身を縮こまらせる。

「知らないでしょうね」

咲は、務めて無感情に、言葉のナイフを突き刺す。

「知ろうとしなかつたんですから」

咲も、なのはと同じだった故に。『放っておかれた』子供だった故に……許すことなど、出来るはずも無かつた。

「う、うう……！」

桃子の目から、大粒の涙が零れる。

「……泣けば、許されるともっ」

「はい、そこまで」

「むぐつ!？」

さりげなく距離を詰めていたリンディが、咲の口を塞いだ。

「もう……言い過ぎですよ、先生」

そして、やんわりとソファに押さえつけた。

少しして、桃子が事情を説明し出した。

「あの店は、私達家族の、夢だつたんです」

「! もがっ!」

咲の顔が、また怒りに染まり……またしてもリンディに押さえ込まれた。

だが、その後に続いた言葉は、咲にとって、全くの予想外だった。

「夫が入院する前は、幼稚園帰りのなのはを、よく店に連れてきていました」

「……え？」

咲が、呆けた声を出す。

最初から、なのはを放つたらかしにしていたわけではなかつた……? 「客の入りがまばらで、誰か一人は、必ず一緒にいてあげることが

できていたんです」

可愛い末っ子が店にやってくるだけで、疲れが取れる思いだった。「小さかったなのはが、『ケーキ売れたね!』と、『よかったね!』と、喜んでくれるのが嬉しくて……私達は、がむしゃらに頑張りました」

今は人気の翠屋とて、最初から人気店だったわけではない。オーブンですぐの頃は、赤字が当たり前だった。それが、口コミで客が増えていき、徐々に、徐々に軌道に乗り始めた頃……あの、事故が起こった。

「夫が入院し、店が忙しくなり……とても、小さいのはを店に置いておける状況では無かったんです」

その結果がどうであれ……きっかけは、なのはの喜ぶ顔が見たい、ただそれだけだった。

「……こんなはずじゃ、なかつたんです」

咲は、毒気を抜かれたかのように黙り込む。

「私はただ、なのはに喜んで貰えれば、それで良かったのに……」
いつの間にか、目的と手段が入れ替わってしまった。

「なのはが、自分で料理を作れるようになって……理由も考えずに、『ああ、器用な子だなあ』なんて暢気に感じて……馬鹿ですよね、私」

きつとなのはは、家族の団欒を取り戻したかったのだろう。

母親が忙しくて料理を作れないのなら、自分が作ればいい。そう考え、実行した。だがそれは、家族をより食卓から遠ざける結果になつてしまった。

もっと美味しければ。もっと品数を増やせば。もっと早く作れれば。もっと……

そうして、不必要なまでになのはが料理の腕を上げ、桃子たちがその真意に気がつかなかつた結果が、今の状況だった。

「家族皆でご飯が食べたいって、ちゃんとSOSを出していたのに……」

自分たちはなのはに甘え、食事を一緒に摂らないどころか、顔を合わせないことすら、『普通』になっていった。

「……今からでも、間に合うんじゃないですか？」

自責に沈んでいく桃子を、リンディが引つ張りあげた。

「え……？」

顔を上げる桃子に、リンディが微笑みかける。

「そろそろ、お昼ですし……なのはさんに、ご飯を作ってあげませんか？」

その言葉に、ハツとする。

「きつと……いえ、絶対、喜んでくれますよ」

「は、はい……！」

そして、どこか嬉しそうに台所へ走っていった。

「……………」

ぶすつとした顔で、ソファに座る咲。どうにも、納得できていないようだ。俯き、手をもぞもぞと動かしている。

「先生」

と、いきなりリンディの顔がどアップで視界を埋めた。

「ひゃっ！」

飛び上がり驚く咲に、マイペースに話しかける。

「先生、名前は何と仰るの？」

「富山、咲ですけど……」

「それじゃあ、咲ちゃん。桃子さんをお手伝いしましょう」

ぼむぼむ、と咲の頭を撫でるリンディ。咲はその手を、真っ赤になつて払いのける。

「こ、子ども扱いしないで下さい！」

「あら、ごめんなさいね」

子持ちのリンディからしてみれば、大学を出たばかりの咲など、子供も同然だ。それに、咲はどうしても放っておけない雰囲気……具体的には、無理して背伸びをしているような、肩肘を張っているような印象を受ける。

借り物のエプロンを着け、台所に並ぶリンディと咲。

「咲ちゃん、お料理のレパートリーは？」

「家庭料理なら、一通り」

一見、手先が不器用そうだが、料理を始めとした家事は得意だった。

「すごいわね。誰に教わったの？」

全て、自分ひとりで生活するしかなかったから。

「……別に、誰だっていいじゃないですか」

ふいっとそっぽを向いてしまう。その態度で、リンディは勘付いた。

先ほど、桃子に対して過剰なまでに怒りを露にしたのも、生徒として以上になのはを気にかけているのも、恐らく……

「それじゃあ、一緒に作りましょう」

「何で私が……」

「なのはさん、喜ぶわよ」

「………わかりました」

なのはに弱い咲だった。

とんとん、とまな板を包丁が叩く音。しゆるしゆる、とじゃがいもの皮が剥かれる音。ことごと、と鍋の煮える音。

この家では、随分と久しく聞こえなかった音をBGMに、三人が料理を続ける。なにせ、人数が人数だ。作りすぎるということは無い。マカロニサラダ、スパゲッティミートソース、シチュー、肉じやが、南蛮揚げ、フライドポテト、ちらし寿司が、続々と出来上がっていく。

慣れた手つきで大根を桂剥きにする咲に、同じくキャベツを千切りにするリンディが話しかける。

「私、息子はいるけど娘はいないの」

とはいえ、それもいつまでかは分からない。近い将来、クロノの相棒であるエイミィが、きつと……

「夢だったのよ。娘と一緒に台所に立つの」
ぴくっ、と肩を震わせる咲。

「ありがとうね、咲ちゃん。夢が叶ったわ」

しばらく動きを止めた咲は、唐突にタマネギをみじん切りにし始める。ざくざくと。皮ごと。そして、目元を拭う。

「……………タマネギが目には沁みました」

「そう？ 大変ねえ」

ざっしゅざっしゅと、親の敵のようにタマネギを刻む。一体何に使うのかサツパリ不明なみじん切りの山が出来上がっていく。

「ええ、タマネギのせいなんですからね……………！ 勘違いしないでくださいよ！」

咲は、どこまでも強情だった。

食事が終わって。

「……………」

何故か、私と、母さんと、姉さんの三人は、客間にいた。

秀人さんのところに行こうかと思っていたところを、無言で連れてこられた。何だろうか……………？ まさか、今になって攻撃魔法をぶつ放したことを怒るのだろうか。

「なのは」

「……………何？」

姉さんが、後ろ手に持っていた何かを、取り出した。

「……………リボン？」

それは、白いリボンだった。ただ白いのではなく、白地に、同色の糸で刺繍が施されていて、かなり凝った造りになっている。

「私たちが作ったの」

そして、母さんが私を手招きする。

「……」

おっかなびつくり、膝で歩いていくと、くるりと体の向きを反転させられた。

髪の毛を持ち上げられる感触。

「できたよ」

手鏡を差し出され、受け取る。ポニーテイルになっていた。いつも面倒で、ストレート以外の髪型にするなんて久しぶりだ。

「……そういえば、昔はよく髪の毛、やってもらってたっけ」

ぼそりと、何の気なしに呟いた。私がまだ幼稚園に通っていた頃、毎朝のように姉さんとおそろいの三つ編みや、ツインテールに結んでもらっていた。

あ、やばっ！

母さんと姉さんの顔が、もそもそと暗くなっていく。

ぎゅっ

母さんと姉さんが、私に抱きついてきた。

「ごめんね、なのは……ごめんね……！」

「なのは。本当に、本当に……ごめんなさい」

「別に、責めてるわけじゃないよ」

まだ許せないのは確かだけど。

今でも、思い出すと腹が立つ。

でも……私の無意識では、もう心の整理がつき始めているのだろう。腹が立つとは言っても、激怒ではなく、ちょっとむかつく、くらいのレベル。

そのくらいなら……よくある仲違いくらいなら、いつかきつと許せる日が来るだろう。

どんなに否定しようと、私たちは……家族、なんだろうから。

「それでも、謝りたくて……！」

はあ……もう、姉さんってば、鼻水垂れてるよ。

「うつぶ……」

ティッシュを取り、姉さんの顔に押し付ける。
ほんと、どっちが年上だか……

「別に、無理して私に構おうとしなくてもいいよ」
いろいろと、思い出したことがある。

まだ、父さんが健在だった頃。私は、よく翠屋に連れて行ってもらっていた。今思い出せば、まだまだ繁盛していたとは言えなかった頃の話だ。

忙しそうに働く家族たちを眺めながら、いつの間にか眠りこけ、父に背負われて帰ったこともあった。

試作品のケーキを、母さんにこっそり食べさせてもらったこともあった。

姉さんに、レジ打ちの真似事をさせてもらったこともあった。

兄さんと一緒に皿洗いをしたこともあった。

ただ、そのバランスが崩れてしまっただけ。

きつと母さんたちは、守りたかったのだろう。いつか目を覚ます父さんが、安心して戻ってこられるように。

「納得は、まだできないけど……理解はしたから」

不満はある。だけど、母さんたちにだって事情があるんだ。それに……私には、秀人さんとユーノくん、それにレイジングハートがいる。

寂しさを感じる必要なんて、これっぽっちも無いんだから。

それでも、母さんと姉さんは負い目を感じているらしい。

「何か、してほしいことは無い？」

と、そんなことを聞いてきた。

ここで、『店を閉めてずっと一緒にいて』とかわがままを言うこともできるけど……今は、そんなことより大事なことがある。

「お願いは、二つ」

順々に二人の顔を見ながら、言う。

「私は今、秀人さんと一緒に暮らしてるの」

もう、今となってはあのアパートの一室が私の家だ。

「だから、こっちに帰ってくることは、殆ど無い」

秀人さん達と一緒に居たいし。

「まず、それを許して」

家出ではなく、ちゃんと許可をもらっておかなければ。これは、私なりのケジメのようなものだ。

「二つ目。」

しばらく、フェイトをこの家に置いてやって」

拠点に戻らせるのは危険すぎる。いつまた、フェイトの母親がちよっかいを出してくるかも分からない。それに、そこにはクロノたちが立ち入り調査を始めるだろうから、とても前と同じように暮らせるとは思えない。

その点、ここなら安心だ。いつでもすぐに駆けつけて来られる場所にあつて、部屋も余っている。

何より、アルフが行方不明らしい。どっからどう見ても生活能力皆無のあの子には、世話係が必要だ。だからといってアースラで預かると、フェイトが緊張してストレスを感じてしまうから、多少なりとも落ち着ける環境で……って、まるで猫じゃないか。

母さんと姉さんは、少し悩み……

「わかった、わ」

母さんは名残惜しそうに。

「フェイトのことは任せて！」

姉さんはやる気満々に。

しっかりと、頷いた。

その夜。俺達は、高町の家泊まっていくよう奨められた。まあ、メインはなので、他の連中はおまけなんだろうけど。

縁側に腰を下ろし、二人で横に並ぶ。

「食べ過ぎちゃった」

少し膨れたお腹を擦りながら、なのはが照れくさそうに笑った。

確かに、割と少食ののにはしてみれば、かなり食べた。久しぶりに口にする、母親の料理だ。そりゃあ、無理してでも味わいたいに決まっている。リスのように頬張るフェイトに負けじと、ハムスターのように口に詰め込み、『行儀が悪い』と二人そろって先生に怒られていた。

今は、桃子さん、美由紀、先生の三人が、大量の洗物と格闘している筈だ。一体、何皿平らげたやら……

「ちよつと、お腹が重いかも」

頭を撫でてやると、じゃれるように頭を振った。

「似合うよ、それ」

少しだけ伸び、ギリギリ背中までかかっていたストレートの髪の毛は、白いリボンでポニーテールに結ばれていた。

「ありがと」

このリボンは、美由紀と桃子が用意し、結んであげたものらしい。ただのプレゼント以上の嬉しさがあるに違いなかった。

フェイトは、元なのはの自室にて、事情聴取を受けている。ユーノに監視を頼んでおいたものの、完全に遮断されているせいで念話も通じない。誘導尋問のようなことが行われていなければいいが……

「吾妻」

と、引き戸が開き、恭也が出てきた。

「何だ？」

「少し、いいか」

そして、ちよいちよい、と離れの道場を指差す。

「悪い、ちよつと借りていく」

そして、すれ違いざま……ぼん、となのはの頭を撫でていった。

「……………ああ、うん。いつてらっしやい」

なのはは頭を擦り、ほけー……………と俺たちを見送った。

恭也が扉をしつかりと閉め、同情の中央に正座した。何となく、その向かいに座る。

「で、何の話だ？」

多分、他には聞かれたくない話だろう。

「吾妻、」「秀人でいい」

「秀人。俺は……………俺たちは、何をしていたんだろうな」
悔恨を口に出す。

「父さんの店を潰さないように……………目を覚ましたとき、家族皆でちゃんと迎えてやれるように、頑張っていたつもりだった。新しいメニューやレシピを夜なべして考えて、どれだけの値段で出すかを吟味して……………」

そこで、ふつと自虐的に笑う。

「確かに、店は繁盛したよ。あの通りで、一番だと胸を張れる」

いくら一等地に店を構えているとはいっても、店の質が良くなければ、繁盛はしない。だから、きつとこいつらは本当に努力したのだろう。

実の妹を、おざなりにするまでに。

「その影で、大事な末の妹を泣かせていたなんて、な」

確かに、とんだお笑い草だ。目的と手段の逆転。家族皆でいられる場所を守るために、家族そのものを蔑ろにしていた、なんて。

「俺は、どうすればいい。どうすれば、償える」

そんなもん、自分で考える……………と言いたいが。

「……………週に一回だ」

なのはのためだ。

「定休日でも何でもいい。週に一回、必ずなのはと一緒に食事をする」

家族と一緒に食事がしたい。そう言っていたなのはの願いを、叶えてやろう。

「……感謝する」

そして、恭也は深々と俺に頭を下げた。
約束、ちゃんと守れよ？

秀人さんを見送って、少し経った。

「……………」

兄さんに頭を撫でられた。あの日の晩は嫌だったのに……今は、そんなに嫌じゃない。

「やっぱり私、甘いのかなあ……………」

『それがあなたの美德です』

レイジングハートが、すかさず返事をくれた。

「でも、良かった」

何だかんだで、高町家の面々と和解ができた。リンデイさんがきっかけをくれ、秀人さんが背中を押してくれたから、実現できた。

「あ……………リンデイさんにも、お礼しないと」

満月を見上げる。まん丸なシルエットに、人影が重なり……………とさつ、と軽い音を立てて、私の目の前に着地した。

「普通に降りてきなよ」

「そんなの、ボクの勝手だろ」

フェイトだった。ユーノくんのお陰で、かなり回復したらしい。ふてぶてしく腕を組み、呆れる私を見下ろしている。

とんとん、と自分の隣を叩き、フェイトを促す。フェイトはすとんと素直に座った。

「日取り、決まったよ」

私たちの、勝負。

アースラ監修の、結界内の仮想空間。そこで、決着を着けるんだ。今度こそ、誰の邪魔も入らない。

「いつ？」

「三日後、だって。それまでに、体調を整えておけてさ」

怪我の方は、ユーノくんがそれまでに何とかができるそうだ。だから後は、よく食べて、よく眠って、体力と魔力を回復させるだけだ。

「負けないよ」

私のためにも。そして、フェイトのためにも。

「ボクだって」

そして、こっぴと拳と拳を軽くぶつけ合った。

第十六話（後書き）

というわけで、ようやくなのはと高町家の面々は和解できました。

秀人の強化は、次回に持ち越しです。

ご意見ご感想、お待ちしております

第十七話（前書き）

今回は、なのはとフェイトは蚊帳の外です。
あしからず。

第十七話

それは、ほんの小さな不注意だった。

三歳のある日、俺はいつものように公園でボール遊びをしていて、壁にバウンドしたボールが道路に飛び出し、それを追いかけて……トラックに跳ね飛ばされた。

まあ、幸いにも死ぬことは無かったんだけど。

救急車に運ばれ、病院に担ぎ込まれ、緊急手術を受け……何ヶ月かして、ようやく退院できた。

頭を打って背骨を折って腕や脚が変な方向に曲がって、何の後遺症も無いんだから、本当に運が良かった……と思っていた。

退院して数日。

俺は、まだ馴染まないベッドで身体を起こし、手すりを掴んだ。

ゴギョツ……

そんな音を立てて、それなりに頑丈な材質だったベッドの手すり、挟り取られていた。丁度……俺の手の大きさに。

意味が分からず、ただそれを眺めること数瞬。

ビギイツ……！！

『あ、あああああああ！！』

理解が追いつくより早く、自分の腕から、味わったことが無い（あの事故の時は、痛みを感じるより早く意識が飛んでいた）レベル

の痛みが襲ってきて、俺は叫んだ。

『秀人、どうしたの！？』

すぐに母親が部屋に飛んできた。そして、俺を……正確には、俺の腕を見て悲鳴を上げた。

『どうしたの、その腕！？』

『う、で……？』

ずきずきと激痛を発し続ける腕。視界に入る自分の腕が、ありえない方向にねじくれてしまっていた。

『痛いよ……痛いよお……！』

幼かった俺は、ただ母親に助けを求めるしか出来なかった。

『あなた！ 秀人が！ あなた！』

そして、すぐさま救急車の乗せられた。

その、車中にて。

『うつつ……』

いまだにずきずきと痛む腕。痛くて、いつまで経っても収まらなくて。段々と、腹が立ってきて……

『うああああああつー！』

痙攣を起こし、無茶苦茶に身体を動かした。

『大丈夫だから、落ちつい……げっ！』

まず、一人が飛んだ。

狭い車内を、救急隊員の男性がゴムボールのようにバウンドする。

次に、モニターのような機材がひしゃげた。

散乱したガラス片金属片が、撒き散らされる。

『ひで、と……？』

母親が、得体の知れないものを見るような目で……化け物を見るような目で、俺を見ていた。

その後、何か注射を打たれ……多分、鎮静剤か何かだったのだろ

う。俺は意識を失った。

次に目を覚ましたとき、俺は全身が妙に窮屈に感じた。それもその筈。俺の身体は、硬いゴムのようなバンドで拘束されていたのだから。

びきっ

『ぎっ……！』

身体をよじった途端、また身体のどこかが痛んだ。

『彼の全身の骨格に、微細な輝が入っています』

母親がカーテンの向こうで、医者の話しに神妙に聞き入っている。

『簡単に言えば、筋力に骨格が耐えられないんです』

当時は、難しくて理解できなかった。

『人間には、先天的に身体能力のリミッターが備わっている……という話を、聞いたことはありませんか？』

漫画とかでよくあるアレだ。『火事場の馬鹿力』。どうやら、俺は常にその状態になってしまっているらしい。

『おそらく、例の交通事故で、脳のどこかを損傷してしまったのでしょう』

結果、俺の身体は、抑えを失って暴走してしまったそうだ。

治療は無理だった。

何せ、今の医学では、『脳のどの部分が』『どのようにして』『身体能力にリミッターをかけているのかさえ説明されていないのだ。そこを更に、『もう一度リミッターを掛けなおす』なんて真似が出来るはずも無い。

少し身体を動かすだけで、間接がギシギシと軋みを上げ、激痛が襲い掛かる。

特に、成長期に入ってから、地獄だった。

動かなくてもバキバキと骨が折れ、靭帯が千切れ、自身の張力に耐え切れなくなった筋肉が断裂する。

眠ることもできず、鎮痛剤を常時投与され、今が昼なのか夜なの

かさえ分ならず、ただ痛みだけが意識を繋ぎ止めていた。

際限無く増えていく医療費に生活を圧迫され、最初は努めて明るくいつも通りに振舞っていた父親と母親からは、徐々に笑顔が消えていった。この頃からだろうか。病院の廊下で、醜く言い争う両親の声を聞いていたのは。

口論の末、激昂して思わず口にした言葉なのだろう。だが、多分に本音が含まれていることも、また事実。俺はただ、黙ってそれを聞いていることしかできなかった。

二年が過ぎた頃、ようやく『奇跡』が起きた。俺の身体の治癒力が、細胞が自壊する速度を上回ったのだ。そこからは、超回復に次ぐ超回復。積年の恨みとばかりに、骨格が急成長を遂げた。

その結果得たものは、奇跡のような肉体。

異常に頑丈な骨格。

異常に密度の高い筋肉。

異常に早い新陳代謝。

『超人病』

それが、当時の俺の主治医が付けた名称だ。俺の身体を、実的に確に表現している。

だが、そんな医学的価値の無い奇病になど、誰も見向きすることは無く、自力で歩けるようになる、すぐ俺は放り出された。

そして、奇跡の肉体を得た代償は……家族の愛情だった。

『あなたは今日からここで暮らすの』
車に乗せられ、一言も喋らないまま数時間。俺は、冷たい鉄の門の前に居た。

事務的に俺の手を引く母親が、冷めた声で言う。その声に、かつての優しさや、愛情は感じられなかった。

『だから、これでお別れよ』

むしろ、ようやくこれで開放されるという、安心感さえあった。そして、目の前の門が開き、一人の男性が俺を出迎えた。

『やあ、初めまして。私はこの園長だ。これからは、ここを自分の家だと思ってくれ』

善人の笑顔……そして、欲にぎらつく瞳。

孤児を一人引き取れば、決して少くない額の補助金が出る。それを目当てに、俺を引き取ったことが丸分かりだ。この門の向こうには、俺と同じような境遇の子供がたくさんいるのだから、なんとなく分かった。

この分厚い門は……侵入者を阻むのではなく、中に居る者を逃がさないための、檻。

『さあ、みんなに自己紹介だ』

そして、園長を名乗る男は、俺の腕を強く引いた。

『お母さん……』

ぐいぐいと引っ張られる。やろうと思えば、いつでも抜け出せる。でも、俺はしなかった。出来なかった。母親が、俺のせいでどれだけの迷惑を被ったのかを知っていたから。

父親は残業を重ね、とうとう身体を壊してしまった。母親は、度重なるストレスから鬱病を患った。全て、俺の所為で。

ただ、母親が一度でも振り返ってくれれば。何か言葉をかけてくれれば。

『お母さん……！』

しかし、その願いは叶わなかった。

一度も足を止めることなく歩き去っていく背中が、俺が見た母親の最後の姿だった。

そして、頑丈で背の高い門が　　がしゃん、と閉まった。

「秀人、どうした？」

先を歩くクロノが振り返り、訝しげに俺を見た。

「何でもねーよ」

肩をすくめ、回想から現実に戻った。

「そうか」

現在、なのはとフェイトが『試合』に使うフィールドの最終調整が行われている。

俺とクロノが模擬戦を行い、結界の強度や、レイヤーの出来具合を確認する……という名目だ。実際には、来るべき決戦に向け、少しでも力を着けておきたいという俺の申し出に、リンディさんとクロノが答えてくれたんだけど。

なのはは、フェイトとの試合のため体力を温存し、イメージトレーニングだけに留めている。ユーノは直接的な戦闘には不向きだ。アースラ武装隊の面々は、フェイトの拠点だったマンションを調べていたり、警戒任務に当たっていたりで暇が無い。

消去法プラス、俺とタメを張れる実力の持ち主ということで、クロノに白羽の矢が立ったというわけだ。

「本当に、デバイスは必要無いのか？ ストレージでよければ、貸し出せるぞ」

ストレージデバイスとは、レイジングハートやバルディッシュと違い、AIが備わっていない、本当の意味での『デバイス』だ。クロノが言うには、主流はむしろストレージらしい。かく言うクロノのデバイスも、このストレージだ。

「俺、マルチタスクが苦手です。魔法を同時発動するのは二つか三つが限界なんだよ。だから、デバイスがあっても無くてもそんなに変わらない」

というより、魔法という数式を頭の中でごちゃごちゃこねくり回すより、『魔力そのもの』を操作する『魔力操作』の方が……魔導師らしくない戦いの方が性に合っている。

「それに……」

「それに？」

むしろ、こっちが問題だ。

「レイジングハートが怒るんだよ」

以前、同じようにリンディさんからストレージを貸そうか、という話になったことがあった。俺は結構乗り気だったのだが……

『ヒデトはマスターではないとはいえ、私のアカウントを持っているのですよ？』

私にはヒデトの資質を見極め、伸ばしていく義務があり、それが私たちの契約の筈です。

契約を破棄する気ですか？

それとも、私では力不足であると……そう言いつもりですか？』

あそこまで饒舌に喋るレイジングハートは初めてだった。

「お、怒る……？ インテリジェントデバイスが？」

クロノは、どこか愕然とした面持ちだ。

「え？ 結構怒るぞ、あいつ」

射撃訓練で的外せば

『眼窩に収まっている二つの球体はガラス玉ですか？』
とか。

マルチタスクの維持に失敗すれば

『脳みそまで筋肉で出来ているのですか？』
とか。

デイベインバスターを暴発させれば

『自殺したいのでしたら余所でやってください』
等々。スパルタ教官だ。

「どこまでも非常識だな、君たちは」

はあ、とため息ひとつ。

「いいか。いくら人格AIを搭載されているとはいえ、それはあくまで思考能力に『似せて』作られたプログラムだ。感情の揺らぎなんて、発生するわけがない」

プラナリア呼ばわりした時、カチンと来ていた気がするけど……

「ああ……そういうえば、レイジングハートは出自不明なんだった」

ユーノがジュエルシードを発掘するより前、別の遺跡で偶然発見したらしい。

本来ならばジュエルシードと同じく、ロストロギア扱いになるのだが、危険性は皆無だったため、そのままユーノがデバイスとして使っていたらしい。

「……マリエルが聞いたたら大喜びするだろうな」

マリエル？ 聞いたことが無い名前だ。

「誰だそれ？」

「技術者だ。のめり込むと暴走しがちになる」

げんなりとした様子。嫌いではないが、苦手らしい。

「ただ、腕は確かだ。もし君たちのデバイスが破損した時には、頼りにするといい」

「覚えておく」

話しているうちに、転送ポートに到着した。ここから、仮想空間に直接飛ぶらしい。

「準備はいいか？」

クロノは、バリアジャケットを纏い、手にはデバイス。臨戦態勢だ。

「いつでも」

対して俺は、ヘルメットを被ればツーリングに行けるような装備
破れてもいいように、以前着ていたジャケットとパンツ、グローブ
にブーツ。動きやすさと、魔力で補強した時の強度のバランスを考
えたらこうなった。

『それじゃ、飛ばすよ〜!』

スピーカーから、エイミーの能天気な声がして……

バシユッ!

俺たちは、仮想空間に移動した。

(さて、と……)

周囲をぐるっと確認。

(大部分は海、着地できそうな足場は、水没した廃ビルだけか)

基本は、空戦がメインになりそうだ。やはり、なのはとフェイト
に合わせた調整がされている。

「ルールの再確認だ。魔法は全て非殺傷設定。先に気絶するか、ギ
ブアップを宣言した時点で敗北。以上だ」

シンプルな実力勝負。いいね。

「了解だ」

強化魔法……ソリッドを発動し、装備の強度を上げる。いつでも
始められる。

『じゃあ、行くよ。レディ……』

クロノのデバイスが、青白い輝きを放つ。

俺は、右拳を腰だめに構え……

『ゴォー!』

キユボツ!!

足元をインパクトで弾き、突っ込む!

「うおりゃあああっ!!」

拳を、打ち下ろす!

バゴオオンツ！！

クロノが立っていた足場を吹き飛ばす。クロノは空中に逃げ、

「スナイプ！」

誘導弾を発射した。

『Snipe shoot』

アクセルシューターに比べたら、威力はそこそこ……だが、操作性は段違い！

キュキュキュキュンツ！！

複雑な軌道を描き迫りくるそれを、飛びながら回避し、迎撃し……
つて、

バチンツ！

「あつぶね！」

追い込まれた先に、設置型のバインドが仕掛けてあった。

やっぱり、クロノの方が一枚も二枚も上手か……でも。

「いい実戦訓練になるっ！」

猪突猛進な暴走体に比べて、何て手強いことか！

『Break Impulse』

クロノのデバイス……S2Uが発声する。

クロノが一変、S2Uを構え、突っ込んできた。中距離戦闘が得意そうなクロノにしては、随分と……

チユイイイイイイイイン……！！

S2Uが、妙な振動音を発している。

と、俺の踏み込みで舞い上がった瓦礫の欠片が、S2Uに触れ……

バシツ……！！

粉々に、粉碎された！　そういう魔法か！

受け止めるつもりだった予定を変更。直前まで引き付けて……！
「くっ！」

ギリギリのところ、回避！

ズバアアア……！！

俺が足場に使っていた廃ビルの屋根部分が、さらさらと砂のように崩れていった。

「おまつ……そんなもん人に向けて使うな！」

下手すりゃミンチになるぞ！

ガキンツ！

「げっ！」

逃げた先に、またしても設置型バインド。今回は、しっかりと捕まった！ やべっ！

「くそっ！ このっ！」

バインドをどうにか解除しようと悪戦苦闘している間に、クロノはしっかりとチャージを終えていた。

「まずは一発だ」

『Blaze Cannon』

ドンッ！

打ち出されるのは、巨大な青白い魔力弾！

「おおおおっ！」

プロテクションを展開し、砲撃を防御する。

ドゴオオオオンツ！

受け止めた魔力弾が、大爆発を起こした。威力もさることながら、副次効果でここまでのダメージを受けるとは思わなかった。

『Stinger Sniper』

更に、追撃の誘導弾！

「インパクトオ！」

バシユンツ！

広域版インパクトで、纏めて吹き散らす。

『Break Impulse』

背後から、S2Uの音声が……くそっ、バック取られた！

……ツチユイイイイイイイイ！

「ぐあぁっ……!!」

必死に身体を反らし回避するが、僅かに掠った部分から、ダメージが全身に伝播する。

「このオツ!!」

振り向きざまに、貫き手を一閃!

その一発は、僅かにクロノのバリアジャケットを切り裂いた。

『Blaze Cannon』

ガゴオオン!

が、接近戦を不利と悟ったクロノが砲撃を発射し、俺を射程外に吹き飛ばす。

「ジリ貧だなあ……クソツ」

認めたくは無いが、クロノは強い。正直、甘く見ていた。

なのはのような圧倒的な攻撃力も、フェイトのような見失いそうなスピードも無いが、とことん理詰めの数式のような戦法には隙が無い。戦っているうちに、知らず知らず畏に追い込まれている。

何か、決定的な一打というか……クロノの『理詰め』を崩せるような一手があれば……

と、ごちゃごちゃ考えていたら、再び……

『Blaze Cannon』

砲撃!

一々避けたり、シールドを張っている暇は……無さそうだ。そんなことをしている隙を見逃すような奴じゃない。

利き腕じゃない方の左手、その掌に、全魔力を集中して……

パァンツッ!!

ビンタするように、砲撃を弾き飛ばした。

「む……」

クロノがぴくりと眉を動かす。

見当違いの方向に飛んで行った魔力弾は、どこかの水面に派手な水柱を立てた。

「お？」

思いつきでやってみたが……結構使えるんじゃないか？ コレ。
『使用』する魔力は大きいけど、『消費』する魔力はほんの少し……
バレット3発分程度だ。

それでいて、防御性能は格段に高い。

もしかしたら、跳ね返すことも、出来るんじゃない……

お。

おお。

おおお。

閃いた！

ザツ……

廃ビルに着地する。

「はあああつ……！」

深呼吸。半身に構え、左手を緩く突き出し、右手を腰溜めに。この構えが、一番やりやすい。

『Break Impulse』

例の振動波！

槍のようにデバイスを繰り出してくる。避けるのは容易い。だが恐らく、どこに避けてもバインドか誘導弾が待ち構えている。それなら！

バキイイインツ！

真正面から、受け止める！

「なっ……！！？」

驚愕するクロノ。まあ、普通ならそうだろう。触れただけで石材を粉々に粉碎する振動波に、真正面から来るなんて考えもしなかつたはずだ。

とはいえ、俺も素手のままぶつかったわけではない。拳の前面に、

局所的にインパクトを発動し、振動波と相殺させている。

「おおおっ！」

押し……切れッ！

「くっ！」

とつとつ、拮抗が崩れた。

クロノの顔が、焦りに歪む。

『Blaze Cannon』

回避は無理と悟ったクロノが、ほぼゼロ距離から容赦の無い砲撃を発射する。

今だ！

「フッ！！」

振りぬいた右腕に代わり、左手の掌に強化魔法を集中し……！

バチイイインッ！

掌打で、砲撃を跳ね返す！

「う、うああああっ！？」

インパクトと、自らの砲撃をまともに喰らい、吹き飛ばす。直前にプロテクションを張ったのは正解だが、二発分のダメージを受け、呆気無く砕け散った。

そして、完全に体制を崩し、隙だらけになったそのボディに……！
「デイバイン……！ バスター……！！」

ズゴオオオオンッ！

砲撃がクリーンヒット！

遠くのほうで、ざぶん、と何かが水面に落ちる音を聞いた。

『クロノくん、戦闘不能……』

魔導師の戦い方は、対処法のルーチンの積み重ねだ。

射撃魔法はこうして防御する。誘導弾はこうして回避する。砲撃魔法はこうして耐える。

相手の一動作につき、一つの対処。マルチタスクがあるとはいえ、それはあくまで連続する一つ一つの動作に過ぎない。

なら、一つの動作に複数回の行動を込めることができたなら？

まず、初見の相手は必ず倒せる。けど、

「つぐ……！」

弱点もある。

まず、全魔力を集中させた掌打。相手に気取られることが無いように、一瞬で魔力を集中させなければならない。そのために、リンカーコアをレッドゾーンまで回転させる必要がある。

そして、集中させた魔力一瞬で全身に戻し、再びリンカーコアを回転させ、必殺級の攻撃魔法を発動させる。

結果、リンカーコアが急激に収縮し……つまりは、不整脈を起す。

「う……がはっ！」

リンカーコアを無理やり機能停止させる。

反動、結構キツいなあ……

と、その瞬間。

ズパアアアンツ！

「ぎゃっ!?!」

後頭部に、何かが命中した。

あ、ヤバ。

意識にモヤが掛かってきた。脳震盪か、何か……とにかく、戦闘不能になりそう……

視界の隅に、クロノが事前に発射していた誘導弾が、役目を終えて散るのを見た。

(引き分け、か……)

「……負けたよ」

医務室で目を覚ました俺に、クロノは開口一番そう言った。

魔力ダメージしか与えていないので、外傷は皆無だ。

ただ、ダメージはそれなりに残っているらしく、エイミィに支えてもらってようやく立っている。

「引き分けじゃないのか？ 結局、俺もKOされたわけだし」

「ルールにあつただろう。『先に気絶するか、ギブアップを宣言するか』……僕の方が、先に気絶していた」

うーん……あんまし、勝った気にならない。

「ところで……」

んで、俺はというと……

「何で、勝つたはずの君が寝込んでるんだ？」

うるせー……

『リンカーコア出力、23パーセントに低下しています。』

無理な稼働と、強制停止の影響です』

「秀人さあん……」

なのはが涙目になっている。

『全く……無茶をするのはあなたの悪い癖です』

「いや……ああしないと勝てなかったし」

負けるのは嫌だから。引き分けだったけど。

「訓練なんだよ、訓練！ 訓練で大怪我してどうするの!？」

ぼすぼすとベッドを叩き、なのはが怒る。

「悪かった、俺が悪かったから……」

なんとか宥めようと言ってみるものの、ぶんすか怒るなのは機嫌は直らない。

「もう知らない！ 今晩はすき焼きにしようと思ってたけど……ユーノくんと二人で食べちゃうから！」

「ええええええ！？ 勘弁してくれよ！ 牛肉なんてたまにしか食べられないのに！」

「知らないっ！」

「うわああああ……楽しみにしてたのに……！ なのはやつ、やると言ったら絶対に実行するんだよ！」

『というより、詰めが甘いです。背後の誘導弾に気付かないなど……まして、それで負けるなど』

静かな言葉に、滾るマグマのような怒りを感じる。

「れ、レイジングハート……？ 秀人は勝ったんだから」「ユーノがフォローする。が。」

『最後まで立っていないければ、勝ちではありません。引き分け？ そんなもの負けと同じです』

鬼だ。鬼がいる……！

『どうやら、訓練すべきはマスターでなく、ヒデトのようですね……？』

では、意識が戻ったところでマルチタスクの維持訓練を……とりあえず10個、6時間コースでフル稼働、始めましょうか？』

「死ぬ！ 脳の神経が焼き切れる！」

『安心してください。焼き切れたら半田付けして差し上げます』
「俺の脳みそは古いラジオじゃねえ！」

「ほ、ほんとにデバイスと漫才やってる……」

「……やはり、マリエルを呼ぶか」

蚊帳の外で、エイミィとクロノがそんなやりとりをしていたり、カオスな空間と化していた。

『ヒゲト』

と、レイジングハートが口調を改めた。

『あなたが使ったという、カウンター技ですが……あれは、封印して下さい』

「……やっぱり？」

さすがにあんな自爆技、いくら俺の身体でも使い続けるには限界があるしなあ……

『下手をすれば、リンカーコアが破裂します』

さらっと恐ろしいことを言われた。

「使っちゃだめ！ 絶対だめ！」

なのはが、いよいよ涙を流して俺に詰め寄った。

う……これは反則だろ……

でも、あの技があれば、戦力を飛躍的に高めることができるのもまた事実。

さて、どうしたもんか……

『失礼。言葉が足りませんでした』

「……え？」「」

俺、なのは、ユーノの声が重なる。

『私が、完全な制御プログラムを構築するまでは、封印して下さい』

「なるほど。レイジングハートの処理能力を割けば、魔力運用のサポートになる」

『うまくいけば、リンカーコアへの負担を最小限にまで抑えることが出来るはずですよ』

えっと、つまり……レイジングハートがいれば、連発できるようになる？

「連発って……」

ユーノはあきれ返っている。

「反動は軽減できるとはいっても、ゼロになるわけじゃないんだよ？」

「わかってるけどさあ……俺には接近戦以外、取り柄無いし、アレは確実に決め手になるんだよ」

『決め手』が一回しか使えないのは困るし。

『まあ、ヒデトもある意味私のマスターです。デバイスとしての本分を、忘れたつもりはありませんよ』

デバイスの本分……魔法の発動補助、か。

「ある意味って……まあいいや。んじゃ、頼んでいいか？」

『勿論です。では……』

ん？ まだ何かあるの？

『マルチタスク維持訓練、始めましょうか』

「ええええええマジでやるの!？」

「冗談だと思ってたのに！」

『ヒデト……無様な敗北を喫しておいて、罰が無いとでも逃げようにも、身体が動かない！』

「ちよ……誰か止めて！」

「頑張つて、秀人さん」

「ごめん、僕には……」

「それじゃ、行くかエイミィ」

「そうだね、クロノくん」

四人はぞろぞろと部屋を出て行った。部屋に残ったのは……

『さあ、始めますよ』

鬼教官と、俺。

「……………ええい、やってやるよコンチクショウ！」

そして。

「ぎゃあああああああ………!!?」

翠曰、翠々日共に、俺は割れるような頭痛に苦しむことになった
とぞ……めでたく無しめでたく無し。

第十七話（後書き）

元ネタはダイの大冒険に登場する『あのお方』です。

第十八話（前書き）

遅れて申し訳ありません。

次は、かなり短期間で上げられますので、ご容赦下さい。

第十八話

「いたたたた……」

エマーゼンシーハンマーで頭蓋骨をカチコンカチコン叩かれるような痛みを目覚ましに、俺は布団からもぞもぞと這い出た。

「レイジングハートの奴、ちったあ加減しろつつの……」

とはいえ、一昨日の、頭蓋骨の中で道路工事が行われているような激痛に比べたら天国のようなものだ。

「おはよう、秀人」

ユーノ（人間形態）が、食卓から顔を覗かせた。

「ああ、おはよ」

洗面所で顔を洗い食卓に戻ると、白米・焼き魚・味噌汁・漬物の、和食が二人分用意されていた。なのはの姿は無く、書置きの手紙が置かれている。文面には短く一言。

『行ってきます』

「……行ったか」

今日は、待ちに待った勝負の日。

なのははフェイトへの必勝の策を練り上げ、フェイトは体力と魔力を万全に回復させた。

「なあ、ユーノ」

味噌汁を啜りながら、慣れない箸に苦戦するユーノに話しかける。

「なのは、勝てると思うか？」

正直な意見が聞きたい。

「……………そうだね」

箸を置き、真剣な表情になる。

「フェイトのスピードは、圧倒的だ」

それはわかる。俺も、初見では全く反応できなかった。

「攻撃魔法も多彩で、尚且つ高威力で、応用も利く」

一発でなのは戦闘不能に追いやった雷撃。縦横無尽に襲い掛かってくる一斉射撃。鋼鉄をも切り裂いた魔力の鎌。スピードと相まって、防御も回避も困難だ。今の俺でも、勝てるかどうかはわからない。

「それを考慮に入れた上で、どうだ？」

ユーノが顔を上げる。難しい顔をしていたのが嘘のように、あっさり……

「勝てるよ」

と、俺と同じ意見を言っただけだ。

「……だよな」

俺たちは、ずっとなのはを見てきた。

一回目の勝負に負けた時も。

二回目の勝負に勝てなかった時も。

三回目の勝負を邪魔された時も。

なのはは、一日だって訓練を欠かしていない。話を聞いたクロノが呆れ返るような密度の訓練を行い、着実に力を着けてきた。だから。

「なのはが勝つ」

……んで。

「何で俺が周辺警護なんだよ!？」

隔離結界の中、俺は、武装隊に指示を出すクロノに、おもいつきり噛み付いた。

「……僕も聞きたいよ」

この隔離結界を張っているのは、俺と同じく借り出されたユーノだ。

目の前には、ドーム状の結界が展開している。あの中は仮想空間になっていて、実際にはあの数百倍の面積が確保されているらしい。「仕方ないだろう？ ここには、残りのジュエルシードが全て集合しているんだ。プレシア・テストロツサが、それを見逃すとは考えられない」

最近アクションが無いから忘れそうになっていたが、フェイトの母親……プレシアは、まだジュエルシードを付け狙っているはずだ。「それに、仮想空間の中に君がいても、二人の集中に水を差す結果になる」

「うぐ……！ た、確かに……」

俺は、その場にウ コ座りをして頭を抱える。

「あ……見たい！ でも見てたら邪魔になる……！」
どうすればいいんだ……！

見かねたクロノが、助け舟を出してくる。

「エイミィ、秀人とユーノに端末を渡すぞ」

『了解』

S2Uから、何かが二つ、すぽんと排出された。

「秀人と……ええと、フェレットもどき」

「ユーノだ！ ユーノ・スクライア！ 誰がフェレットだ！」

「うるさい奴め……」

手渡されたのは、液晶画面の無いi-phoneみたいな端末。

スイッチを押すと、モニターが空中に固定され、仮想空間の中と思しき風景が映った。

「それで文句は無いな？」

やれやれ、といった様子で肩をすくめるクロノ。

「サンキュー！ お前、いいヤツだな！」
生で見られないのは残念だだ……まあ良しとしよう！

空間内では、今まさに二人の勝負が……

ザッ、ザザザ……

「あ！？ おい！！！」

が、画面にいきなりノイズが走ったと思ったら、砂嵐になってしまった。

もしかして……

ヴオオオオオオオン！

『結界内に、侵入者あり！ 数1！ A A Aランク相当！』

ああもう！ 落ち着いて観戦することも出来ないのかよ！

『強力なジャミングを確認！ 仮想空間とのリンクが、一切遮断されました！』

援軍に来る可能性のある二人を、初っ端から隔離してきた。

なのは達が死力を尽くした勝負を終え、消耗しきった所を狙う作戦か。

「総員、迎撃体勢！」

俺は、端末をポケットに突っ込み、リンカーコアを起動した。

「おい、思いつきりやっていいんだな！？」

仮想空間は、嚴重にプロテクトを掛けてある。こちらの戦闘音も届かないし、通信もできない。だから、俺たちがいくら暴れても、二人の勝負の邪魔にはならない！

「ああ、構わない」

S2Uを、侵入者に向ける。その侵入者は……

「……アルフ？」

そう。侵入者は……茜色の長髪が特徴的なフェイトの使い魔、アルフだった。俯き、両腕をだらりと垂らしている。

「今まで、どうしてたんだ？ フェイトも心配して……」

そして、俺がアルフに向かって足を一步踏み出し……

「離れる！」

クロノが警告すると同時に、俺は反射的に飛びのいていた。

「ぐがああああああああああああ！！！！」

凄まじい咆哮を上げ……

ガチンツ！

俺の首筋があつた空間を、鋭い犬歯が噛み潰した。

「あ……アルフ？」

俺は、半ば呆然と、半ば確信を持って、その名を呼ぶ。

「があああああああつ！！」

そして、本性の赴くまま、俺たちに襲い掛かってきた！

「おい、クロノ！ これ……！！」

「ああ、多分……洗脳されてる！」

やったのは勿論、プレシアか！

「グルルルル……」

だがアルフは、身構える俺たちの横を素通りしていった。

「まさか……！！」

俺たちは、眼中に無かった。アルフの狙いは、最初から……！

「ユーノ！ 逃げろおおおおお！！」

結界を維持しているユーノと、サポートの魔導師！

「え？」

結界に集中していたユーノに、アルフが襲い掛かり……くそ、間に合え！

「ファイア！」

キユドドドド！

バレットを乱射する。普通なら、回避するか、防御するしかない

攻撃に、アルフは……

「ガアアアアアア！」

「何ッ!？」

真正面から、突っ込んでいった。非殺傷設定にしてあるとはいっても、衝撃は通る。それを全く恐れない……いや、俺の攻撃なんて、最初から気付いていないように、ただ直進していった。

「うわっ!！」

ユーノは防御魔法を発動し、なんとかアルフの攻撃を回避する。

だが、他の魔導師は……!

「うわああっ!」「ぎゃっ!」「……ぐっ!」

爪で引き裂かれ、顔面を殴打され、腹部を蹴り上げられて、それぞれ戦闘不能に。

同時、結界が『ぐにゃっ……』と揺らいだ。

結界を維持していた魔導師が、ユーノ一人になってしまった所為だ。

「このままじゃ………エイミィ!」

クロノが声を張り上げる。すると、

ウンッ……

「……持ち直した?」

一度は揺らいだ結界が、また元通りに強度を取り戻す。

『仮想空間リソース分だけ、結界の強度を上げたの』

仮想空間の制御が、完全に分離してしまったことが吉と出たらしい。

アルフは、結界魔導師を倒すだけ倒し……再び、俺達を襲つ。

「縛れ!」『ring bind』

クロノがバインドを行使する。

青白い魔力の枷がアルフの四肢を縛り上げ……

「ない!？」

なんと、バインドはアルフの体表に触れた途端、ぼそっと崩れる。なのはのように、術式を分解した……というわけではなさそうだ。

そもそも、そんな器用なことが出来る精神状態ではない。
「君たちの世界で言うところの……ドーピングだろう」

アルフに施された強化は、恐らく二つ。

一つは、魔法を無効化すること。さつきもそうだったが、射撃魔法のような初歩的な魔法すら防げていないところを見ると、バインドだけを無効化することに特化している処置のようだ。身体を守ることなど考慮に入れていない、偏った術式。

そしてもう一つが、痛覚の麻痺……というより、遮断。正気をほぼ失っていることから見て、興奮剤を大量投与し、アドレナリンのような神経伝達物質を過剰に分泌させているのだろう。

だが、もしも薬物ではなく、大脳を外科手術で処置されていたとしたら……

「アルフ……！」

俺は、最悪の予感に唇を噛む。

この、主のことだけを想ってきた優しいオオカミを、なんとかしてでも救ってやりたい。

「どちらにせよ、手遅れになる前に鎮圧するんだ！」

威力を抑えた誘導弾でアルフを牽制しつつ、クロノが言う。

「でも、どうする!？」

バインドは効かないし、ダメージでノックダウンできたとしても……多分、鎮圧できる頃には手遅れだ！」

アルフが動きを止めたとき……それは、俺たち全員を倒すか……肉体が自壊し、構造的に動けなくなった時だけだろう。手足をへし折っても、『痛み』を無視できるのであれば、まだ動けてしまう。

編み出したばかりの、あのカウンター技は使えない。

加減ができないのだ。

今の俺には、あの技を『繰り出す』だけが精一杯で、『威力を抑え

る』なんて段階には達していない。
なにより、失敗すれば、それだけで俺が戦闘不能になってしまう。

チヨークスリーパーで締め落とそうにも、興奮しきったアルフには効果が無いだろう。

「一か八かの賭けになるが……」

「言ってみる！……おらア！」

武装隊の一人に飛び掛っていくアルフを蹴り飛ばしながら、クロノの案を聞く。

「ストラグルバインドを使う」

ずるっ、と思わずっこけてしまった。

「アホかお前は！？ バインドは効かないんだっての！」

「誰がアホだ！ 話を最後まで聞け！」

この魔法は、相手を拘束するものじゃなく、解呪するための魔法だ
！」

要はアレか。凍てつく波動か！ それなら、確かに！

「もしも、その興奮剤が魔法を用いて調合された物なら……きつと打ち消せる」

なぜ最初から使わなかったのか……その理由は。

「だが、もし興奮剤が化学的に調合されたものだったり、外科手術が原因だとしたら……空振りになってしまっどころか、かえって症状を悪化させてしまう可能性も……」

いまさら、悩むことなんて無い。

「俺が押さえつける。その隙を狙え」

締め落とすのは無理だとしても……クロノが魔法を発動させるまでの数秒だけなら、俺の腕力で押さえつけることが出来るはずだ。まさかプレシアも、バインドを使わずアルフの馬鹿力を押さえ込める人間がいるとは想定していないだろう。

「だが……下手をすれば」

大怪我をする……って？

「忘れたのか？ 俺の身体は……」

身体を、深く沈める。四つんばいに近いまでの、前傾姿勢……ク
ラウチングスタート。

「グアアアアアアッ！！」

牙をむき出しにしたアルフが、今度は俺たちを標的として襲い掛
かって来る。

「そういうふうに、できてるんだよ！！」

ゴバツ！！

ビルの外壁をスターターに、突撃する！

「おりゃあああああ！！」

「ガアアアアアアッ！！」

アルフが繰り出す拳と、俺の蹴りが、正面から激突した！

「グルアアッ！！」

五指を開いた、鋭い爪による一撃。

「んぐっ……」

それを、わざと首で受け止める。

「ガアアアッ……！！」

「はッ……あ」

ギリギリと万力のように首を締め上げるアルフ。だが、これでい
い。

俺の前に、無防備に差し出された腕を掴む。

ぐりん、と一回転させ……

「大人しく……しろっ！！」

ダンッ！

ビルの屋上に、身体ごと押さえつける。肩をがちりと極めてあ
るせいで、アルフは思っように身動きが取れない。

「よし、このまま……！！」

だが、アルフはそこで、信じられない行動を取った。

「アアアアッ！！！」

肩を拘束されている方向に、力いっぱい捻り……

ボギンツ……！！

「な……何やってんだ！」

「グアアッ！」

ドズンツ！

「ぐえっ！」

呆気にとられた隙に、ボディブローを喰らってしまった。

「グルル……！」

俺が極めていたアルフの右肩……そこは、赤黒く腫れ上がり、力無くぷらぷらと垂れ下がっていた。

どうかしている。拘束から逃れるために、躊躇いもなく腕を捨てるなんて！

「……くそっ」

きつと、四肢を個別に固めるだけでは押さえられない。

全身を、一気に縛り上げることができれば……

アルフの猛攻を防ぎながら、方法を探す。飛行魔法を駆使し、無

人の街を飛び回り、工事現場の上を通り……工事現場？

「あれだ！」

工事現場の一角に放置されていた、高所作業員の命綱！

あのワイヤーなら……力で千切れることは出来ないはずだ！

「インパクト！」

ドパアン！！

「ガウツ……」

衝撃波でアルフを弾き飛ばし……よし、ゲット！

がちんっ……とベルトを腰に巻く。準備完了！

「クロノ！ 他の奴らを連れて、一旦引け！」

アルフの目に映る敵が俺一人なら、俺をひたすら襲い続ける。

ブンツ、ブオンツ！

大振りの攻撃を、スウエーバック、ダッキングで避け続ける。

突き出された左拳。その左手首にワイヤーのフック部分を引っかけ……

「グルアアアアッ！！」

ブオンッ！！

「つと！？」

途端、今度はハイキックが飛んできた。でも……その足、もらった！

蹴りの軸足を払い、その場に転倒させる。

「ギヤウッ！」

ずでん、と尻餅をつくアルフを逆マウントに固め、両手、両足を胴体と結びつけて固定する。

恐らくミッドチルダでは、魔法という便利極まりない技術が浸透しすぎて、こういったアナログな手段には耐性が低いのだろう。

『バインドされなければ捕まらない』なんて、本気で考えてしまうくらいには。

「オラオラオラ！ ドカタ暦3年は伊達じゃねえぞコラ！」

ワイヤーでぐるぐるの簀巻きにする。怪力を発揮しようにも、力を出すことが出来ない体勢にしてしまえば、あとは……

「クロノ！」

俺の後方で、術式を編んでいたクロノが、それを発動する。

ギユウウウッ……！！

とうとう、アルフの身体に、青白い拘束魔法が巻きついた。今度は、分解されることは無い。

「ストラグル……バインドオッ！！」

トリガーボイスと共に、バインドが一層強くアルフの身体を締め上げ……

「ゲホツ……!!」

アルフが、口から何かを吐き出した。どうやら、幸いなことに魔法薬だったらしい。

抱き起こし、顔を覗きこむ。

「……え、あ?」

開きつばなしだったアルフの瞳孔が、焦点を結ぶ。

「アルフ、俺が分かるか?」

見詰め合うこと、数秒。

「あ、あんた……?」

アルフは、ようやく俺の顔を認識した。

「よかった……正気に戻ったんだな」

これでひと段落。そう思っていた矢先のことだった。

「は……離れる!」

ドンッ!

いきなり、アルフが俺を突き飛ばした。

「うああああ……!!」

突如として、アルフ苦しみます。その身体から、明らかにアルフのものとは別の、禍々しく、膨大な魔力がにじみ出てくる。

「おい! 何が起きてるんだ!?!」

通信の向こうで、エイミィの困惑するような表情が目に見え始める。

『アルフの体内に、高密度の魔力結晶が埋め込まれてる……』

魔力結晶……?」

「つまり……爆弾だ」

クロノが、苦々しくそう言った。

「爆弾だって……?」

『きっと、アルフの魔法薬の効果が破られると、発動するように設定されて……』

そう。知恵の働くプレシアが、ストラグルバインドのことを想定していない筈が無かったのだ! 俺は、自分の迂闊さに腹が立った。

「くそっ!」

アルフに一歩歩み寄る。

『駄目！ 逃げて、秀人くん！』

逃げる……？ 今にも体内の爆弾が破裂しそうになっているアルフを放つて？ 冗談じゃない！

「逃げ……て」

ぼろぼろになったアルフが、諦観の表情を見せた。

「仕方ないんだよ……爆弾は、体内に埋め込まれている……」

「『仕方ない』で……見捨てられるわけないだろうがっ！！」

エリアサーチを応用し、探索魔法をアルフの体内に発動させる。

場所は……くそっ、肋骨の内側！ 心臓の真横だ！

ビリッ……

アルフの胸元をはだけさせる。今まで服に隠れていたが、真新しい縫い目が、その肌に痛々しく刻まれていた。

「なにを……」

『秀人君、何をするつもり！？』

決まっている。

「俺が……今ここで、爆弾を取り出す！」

第十八話（後書き）

、、、なんか、医学漫画のノリになってしまいましたね。
ごめんなさい。

なのは達の出番は、まだ先になりそうです。

第十九話（前書き）

オーメダル買い占めた人、怒らないから手を挙げなさい。

第十九話

『この場で爆弾を摘出する』

俺がそう言った途端、クロノが、エイミイが、猛烈な勢いで反対してきた。

『無茶だよ！ 麻酔だって無いんだよ！？』

「俺は絶対に……誰も見捨てない」
『でも』

「ここでアルフを見捨てたら……もう、俺は二度とフェイトに顔を合わせられない」

最初は、ただの敵だった。

でも、彼女達にも譲れない事情があったことを知った。

フェイトが、なのはという好敵手を見つけるまで、懸命に、献身的に……たった一人でフェイトを支え続けてきたアルフ。

彼女にも、主と共に幸せになる権利があるはずだ。

こんな、ふざけた結末があつていいはずが無い！

ユーノは、結界の維持で精一杯だ。今ここで結界が破られたら、現実世界にまで破壊が広がってしまう。だから、ユーノの手を借りることはできない。

「クロノ。武装隊の中で、麻酔が何か使えるやつはいるか？ 結界魔導師でもいい」

ユーノの代役ができるようなヤツが要れば……

「すまない……医療班は、アースラにしかないんだ。それに、今アースラとは、通信するだけで精一杯で……」

まあ……そうだよな。医者を最前線にまで引っ張ってくる奴はいないよな。

やっぱり、俺がやるしかない。

俺も、一応痛み止めを使える。使うのは、よく世話になっていた術式。

ウン……

足元に、魔法陣が展開する。

大丈夫だ。ちゃんと身体が覚えている。

「アルフ」

手刀に、極小の魔力刃を展開。設定を変更し、物体への干渉力を持たせる。

「もう一度、フェイトに会いたいかな？」

「あたし、は……」

アルフは、一瞬だけ言葉に詰まる。きっと、助かりたいという願望と、助からないという諦観が、一瞬だけせめぎ合っていた。

「言っておくが、俺の痛み止めなんて、せいぜい二日酔いを抑える程度だ。死ぬほど痛いぞ。それでも、やるか？」

軽く脅しを掛ける。

だが、アルフの答えは、最初からたった一つ。

「私は……フェイトに、会いたい……！」

「……ああ、俺に任せる」

これで、迷いは無くなった。

「行くぞ。我慢してくれ」

「……ん」

こくん、と頷くアルフの腹に、魔力刃のメスを当てる。そして、

ずりゅっ……

「ぐううっ……！」

体内にメスを滑り込ませた瞬間、アルフの顔が苦悶に歪む。俺の身体に爪を立て、歯を

食いしばる。麻酔で多少は緩和されていても、体内の異物感だけは消せない。

ぐっ……ぐりゅっ……

腹部から肋骨へ向け、内臓を傷つけないよう、慎重に、慎重に進める。

「がアア……！ うあああああ……！！！」
ぼろぼろと涙を零し、アルフが呻く。

「頑張れ……！ もう少しだから……！！」
焦ってはいけない。だが、爆弾のリミットはもうすぐそこまで迫っ
つていて……

肋骨を抜け、心臓の横に指を伸ばし……！

コツッ……

「あつた！」

俺は、ソレを慎重に指先で摘み……

ずりゅっ！

引きずり出す！

「うあああっ！！！」

引き抜いた手に、魔法文字の刻まれた、八角形の水晶のような無
機物があった。それは、危険な輝きを放ち、徐々に、徐々に光を強
くし……！！

『駄目だ！ その威力じゃあ、結界のどこで爆発しても……！！』
なら……

「クロノ！ ユーノ！ アルフを頼む！」

ドンッー！

一足飛びに、ユーノ達と距離をとる。とにかく、被害が広がることを防がなくては。

結界の中央に座し、集中させた魔力を、両腕ごと筒状に固定。

「すっつ……はあ……」

深呼吸を一つ。そして、レイジングハートの講釈を、脳裏に再生する。

『魔力によって『筒』を形成し、その爆発のエネルギーを内部に通すことで指向性を与える。これが、直射型砲撃魔法です』

爆弾のエネルギーに指向性を与え、ただの『超高威力の砲撃魔法』に変えてしまうことができれば……被害は最小限に収まる。

「苦手でも、練習しておくもんだな」

筒……『砲身』を、より長く、より頑丈に構築していく。長くすればするだけ、地上への影響は少なくなる。だが、強度との折り合いを付けなければ、『砲身』はあっけなく破壊されてしまう。

そして、光が臨界に達し……

キユゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ……………！！

爆弾が、爆発した！

「うがあああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああっ！！」

凄まじい衝撃に、俺は無意識のうちに悲鳴を上げていた。

「ぐっつっつ……！！ うおおおおお！！」

制御どころの話ではない。俺には、手元の『砲身』を維持するだけでも一杯一杯だ！

凄まじい光の柱が、天頂に向けて屹立する。

ヒキビキビキツ……！！

「あぐっ……くそおお！！」

とうとう、罅が入ってしまった。

その罅割れた『砲身』の隙間から、破壊力の余波が漏れ出し……

ボンツ……！！

「あ………」

目の前を、血色の何かが、横切った。見覚えのある、千切れた五本の指と、それを伴っていた掌だった。

俺の右手首から先が、バラバラに吹き飛んでいた。

「……………ぐあああああ！！！！」

もう、目の前がどうなっているかも分からない。吹き飛んだ右手から、左手に魔力を集中し直し、『砲身』を維持し続ける。

クロノとユーノが、必死な顔で俺を援護しようとしている。

が、ユーノはアルフの傷の止血と、結界の維持で手一杯。クロノも、暴風のように荒れ狂う破壊力の渦に邪魔され、近づくことすら出来ない。

(……………それで、いい)

俺が無事に人間の姿を保っていられるのは、自身の肉体の恩恵があるからだ。もし、普通の身体だったなら……最初の爆発だけで、粉々に吹き飛ぶどころか、塵になって消滅していた。

だから、これは……俺にしかできない役目だ。

「くおおおおおおおおおおおおおおおお！！」
即席の砲撃は、結界上部に大穴を開け、現実世界の雲を突き破り…
…成層圏をも突破している。

ギユウウウウウウウ… ウウン…

永遠のようにも、刹那のようにも思える時間が、ようやく終わった。
「……………」
左手に、じやりっとした感触。どうやら、気付かぬうちに倒れて
いたらしい。

目蓋を上げてても、目の前が真っ白だった。どうやら、網膜をやら
れたらしい。

（爆弾は…………？ 皆はどうなった…………？）

光に焼かれた網膜が徐々に回復し、周囲の景色が目に飛び込んで
くる。

俺の周囲数十メートルは、かなり酷い状態だ。だが、そこから先
は、ごく普通の町並みだった。つまり…………うまくいった、というこ
とだろう。

「……………！ で……………！ ……………でと！ ……………秀人！！」

続いて鼓膜が再生し、音を拾う。

「秀人オ！！！」

ユーノが駆け寄ってくる。

「よう……………」

と、軽く身体を起こそうとして…………先延ばしにしていた限界が訪
れた。

「ぐ……………あぁ……………！」

あ……………駄目だ。立てない。

よろけたところを、クロノに助け起こされる。

「あ……アルフは？」

それに答えてくれたのは、ユーノだった。

「大丈夫だよ。傷は深いけど、内臓には一切傷が付いていないから、簡単な止血と縫合で、アースラと合流するまでは持つ」

「そっか。よかつ……たあ」

意識が一瞬だけ飛びかけた。

「……………」

クロノ達アースラの面々が、俺を……正確には、俺の右手を凝視している。

あー……そういえば、吹っ飛んだんだっけ。

つてことは、今まさに再生が行われている最中で……

「ははっ……………」

やっぱり、何人かは気味が悪そうにしている。そりゃあ、そうだよな。

でも……嫌われるのは、嫌だなあ……

そんな弱気なことを考えていたら、ユーノが……自分の身体を盾にするように、視線を遮った。

「全く……いつもいつも、無茶ばかりだね、キミは」

「悪いな……でも、いまさら変えられないんだよ」

自己満足言われようと……俺の馬鹿は、直るようなものじゃないらしい。

「もう、大丈夫だ……多分」

何とか、立ち上がれるくらいには……よいしょっと。

「じりり……………」

「……………」

地面に突いた右手に、違和感。何か、手がゴリゴリする。

恐る恐る、再生したばかりの右手を見る。

「……………なんじゃこりゃあああああああああああ！？」

恐らく、骨格や筋肉を再生する際、巻き込まれてしまったのだろ
う。

俺の手の甲に……………爆弾として使われていた瞳のような結晶体が、同
化していた。

「取って！ これ取って！」

ぐいぐいとユーノに手を押し付ける。が。

「あ、あはは……………ごめん、無理っぽい」

ユーノは、諦め気味の半笑い。

「神経系どころか、魔力のラインまで、ガッチリ癒着してる。多分、
外科手術で取り出しても」

「取り出しても？」

「どこからともなく戻ってくる」

「怖！」

呪いのアイテムに取り憑かれてしまった！

「はあ……………」

俺達をあきれた目で見つつ、クロノがアースラと通信する。

「エイミィ、そろそろ回収を頼む」

「……………」

が、エイミィからの反応は無い。

「エイミィ、どうした？」

「……………」

空気が、緊迫していく。そして。

ブオオオオオオオオオオオオオオオオオオ……………！！

紫色の魔法陣！

「来るぞ！」

敵の第二陣だ！

『オオオオオオ……』

魔法陣から出てきたのは、中世の騎士を模したような……巨大なロボットだった。

大きい、力はそんなに強くない。ここにいる武装隊だけで、簡単に駆逐できるだろう。だが……

ウン、ウン、ウン………

転送魔法陣の数は、二つ、三つ、四つ………！！！！

「嘘………だろ………」

武装隊の一人が、絶望的な声を上げた。

結界内を埋め尽くす………巨人の軍団。数は、十や二十では利かない。

まさか、アースラとの『通信だけ』が通じていたのも………今になって通信が遮断されていたのも………全て、この絶望感を味あわせるための、プレシアの策。

プレシアは、俺がアルフを助け、爆弾を処理することまでも想定していたのか！

母艦との連絡は取れず、戦力はガタガタ。怪我人を何人も抱え、退却することも叶わない。そんな状態で、大量の敵と戦う………正に、絶体絶命だった。

からん………

誰かが、デバイスを取り落とした。それを皮切りに、

「くっそおおおおおおおおお!!」

「ま、待て! 体勢を立て直してから……!!」

クロノの制止も空しく、武装隊の一部の面々は……敵の機械兵へ、
無謀に特攻していった。

一人、また一人と倒れていく武装隊の面子。

特に、年齢が若そうな奴ほどクロノの指揮を聞いていない。ただ
がむしゃらに、自暴自棄に、敵兵に突っ込んで、撃破されていく。

「くそッ! 世話が焼ける!」

爆発の余波で転がっていた、俺のバイクを起こす。

「ユーノ、アルフを頼んだ」

キュルルル……キュルルル……

掛かれ、掛かれ……!

キュボツ!

よし、まだ動く!

「秀人!? 無茶だよ! 身体は大丈夫でも、魔力が殆どすっから
かんじゃないか!」

ユーノが俺の手を掴み、引き止める。

「怪我人を背負って逃げるくらいはできる!」

フェードアウトしていくユーノの声をバックに、駆け出した。

「うわああああっ!?!」

『オオオツ!!』

今まさに、振り下ろされようとしていた大剣。

「させるかあああああッ!!」

ズギヤギヤギヤッ!!

バイクごと横滑りし、局員を抱える。

グリッ!!

自らハイサイドを起こし、片腕で強引に車体を立ち上げる。

ドドドドッ！！

俺がギリギリで避けた場所に、無数のエネルギー弾が着弾した。
「す、すまない、助かつ……」「この馬鹿野郎！ クロノの指示に従え！ それができないならすつ込んでろ！」

勝手に行動して、それが結果的に部隊を危険に追い込んでいる事に気付いていない。全く……こんなヒヨっ子を最前線に送るなんて時空管理局って組織は何考えてんだ！

ビルの裏にポイ捨てし、また新たな馬鹿を拾いに行く。

何人かを拾い、物陰に放り捨てる。

だが、あくまでもその場しのぎにしかない。

何せ、敵は一向に減っていないのだ。

「くそ……魔力さえ回復すれば……！」

魔力さえ………魔力？

右腕に目をやる。甲に埋まった、八角形の水晶のような結晶体。膨大な魔力を蓄積していた結晶体。

「ひよつとして……」

意識を右腕に集中する。

どくん……

「…… やっぱり！」

まだ、魔力が残っている！

あの爆発に比べたら劣るが、俺の魔力を満タンにするくらいには！

「はああああ……」

右腕から、ポンプのように魔力を吸い上げるイメージを描く。

乾ききっていたリンカーコアが、徐々に潤っていく。

『オオオオオ！』

一体が、巨大な戦斧を振り下ろし……

「せー、のー！」

ズドオン！

『アアアアア………！！』
衝撃波に、粉々に砕かれた。

「よし！！！」

復活！ プレシアの奴、置き土産で墓穴掘りやがった！

「行くぞこの木偶野郎オオオオ！」

『ゴオオオオオ！！』 『』 『』

飛行タイプ・騎士タイプ・重騎士タイプ。それぞれが、上空から
エネルギー弾を撃ち、槍を突き出し、戦斧を振り下ろす。

バイクを飛び降り、スライディングで回避する。

「そりゃあああああつ！！！」

バツチイイイイ！！

『ウグオオツ！？』

掌打でエネルギー弾を弾き返し……

「せええいつ！！！」

ガギヨンツ！！

『グアツ！？』

渾身の撃ち下ろしで槍を殴り壊し……

「デイバイン……バスター！！！」

バゴオオンツ！！

『グオオオオオオ………！！』 『』

砲撃で、重騎士の胴体をブチ抜く！

ゴゴゴン………！！

三体が同時に爆発する。

「……………っしゅあー！」

魔力の集中をかなり遅いスピードで行ったおかげで、身体への負担は少ない。ロボット兵どもの動きが、クロノやアルフに比べて緩慢なことが幸いだった。

地面に転がったままアイドリングしていたバイクに飛び乗り、再び走り出す。

「クロノー!!」

低空を飛行していたクロノに併走する。

「ヒヨっ子は全員避難させた！ 武装隊の状況はどうなってる!？」
苦々しく眉間に眉を寄せる。

「……ほぼ全滅だ。ベテランの局員も、若手のフォローをしている内に……」

「……………そうか」

残っているのは俺とクロノだけか。

俺も魔力が回復したとはいえ、あれだけの数を相手にし続けるのは無理そうだ。

『オオオオオ!!』

目の前に、重騎士タイプが立ちふさがる。

「「邪魔だ!!」」

ドゴンツ!!

クロノの砲撃が戦斧を握る腕を破壊し、バランスを崩した胴体を、インパクトで打ち砕く!

「お前、魔力残り何パーセントだ!？」

「38パーセント。一応、まだ戦えるが……」

クロノの魔力の最大値は、俺やなのはの半分以下。長く戦えば戦うほど、不利になっていく。俺には魔力があるが、それを効率よく使うのが下手だ。

燃費とコントロール性に優れるが、パワーに乏しいクロノ。

パワーはあるが、燃費とコントロール性が劣悪な俺。

要は、俺とクロノを足して、2で割ればいい。

(……アレを、やるか)

あの時はただ夢中で、殆ど無意識だったけど……一度やれたなら、きつと!!

ヴィイイイイイイイ……!!

足元に、ミッド式魔法陣を展開する。

あの時の人数は、五人。さすがにレイジングハートの性能をフル活用しなければできなかったが……今回は、たったの二人だ。きつと、俺だけでも出来る!

ミッド式魔法陣。それを構成するうちの直線が、一本のラインになる。よし……このまま!

「クロノ! 行くぞ!」

「は!?!」

慌てて振り向くクロノに……

「繋がれ!」

バシユウウツ!!

そのラインを、クロノの身体にブチ当てる!

「うわっ……! 何をした!?!」

俺とクロノの間を、一本のラインが結んでいる。

「見てればわかる!」

目の前に、再び複数のロボット兵が現れる。数は4!

「借りるぞ!」

苦手だった砲撃魔法のコントロール。それが、驚くほどスムーズに行える。

「ブレイズキャノンツ!!」

バゴゴゴッ！！

発射された四発の砲撃は、狙い変わらず、四体のロボット兵の胴体を、頭部を、粉碎した！！

「……僕の魔法を使ったのか」

啞然とした様子のクロノ。

「お前もだ！ 行け！」

「あ、ああ！」

そして、S2Uを構え……

「ステインガースナイプ！！」

本来ならば、牽制が主な目的の誘導弾は……

ギユガガガガガンツ！！！！

敵の6体を、一瞬で撃破し尽した。

「……………は？」

撃つた本人が一番驚いている。

「何だ、このパワーは……！？」

「………すげえだろ、俺の魔力」

「君の………？ まさか」

「ああ。……………リンカーコアを同調させた」

俺はクロノと魔力を共有し、クロノは俺と処理能力を共有している。

そう。俺があの時、4つのジュエルシードを完全封印した時に使ったのも、この方法だった。それぞれが勝手に、バラバラに魔力を放出してはロスが生まれる。

多気筒エンジンと同じだ。

完全な同調が取れた多気筒エンジンは………同排気量の単気筒エンジ

ンよりも、数段上の スペックを引き出すことが出来る！

「今この瞬間、俺とクロノは……二人で一人の魔導師だ！
行くぞ！」 「ああ！」

俺は拳を。クロノはS2Uを構え……敵陣の真っ只中へ……！

「 「 うおおおおおおっ……！ 」 「 」

突撃だあああああああ！！

第十九話（後書き）

秀人の謎魔法については、副作用のない超電磁砲のレベルアップ
みたいなものを想像してください。

第二十話（前書き）

久方ぶりの二人娘編です。
劇場版A S製作決定しましたね。楽しみです。

第二十話

「ありえない!!」

薄暗い庭園の中、プレシアは傷んだ髪の毛を振り乱し、絶叫する。

「ありえるわけがないわ!!」

必勝の策だった。途中までは、思うようにいっていた。だが、あの少年がアルフに仕掛けた爆弾を処理した時には少々驚いたが、それも十分に想定内の範囲内だった。

事実、少年は魔力を使い果たし、傀儡兵の大群を前に、屈しようとしていた。

あとは、仮想空間を砕き、消費しているであろう白いバリアジャケットの少女から、悠々とジュエルシールドを奪い、それで終わるはずだった。

なのに。あの少年はあっさりと蘇り、あまつさえ……

「リンカーコアを他者と同調……いえ、接続する……? そんな馬鹿なことが!!」

だが事実、今も手元に表示される映像の中では、少年は執務官と共に、鬼神のような戦い様で傀儡兵を駆逐している。

針の穴を通すような精密さと、山をも砕きかねない威力を両立させた、ふざけた力で。

生粋の技術者たるプレシアが、集団での戦闘能力と、同時操作をひたすら追求した攻撃兵器が、紙くずのように!

「う……おげええええつ！……！」

ビチャビチャビチャツ……

プレシアの口から、大量の血液と、胃液が混ざった液体がこぼれ出し、床を汚した。

「ああああ……！」

ふらふらと覚束ない足取りで、玉座の裏にある隠し扉を開く。

「どうして、皆邪魔をするの……！？？」

がん、がつん、と壁や柱に身体をぶつけながら、そこへと歩を進める。

「私はただ……もう一度取り返したいだけなのに……いいいい！」

叫ぶだけ叫び、先ほどまでの狂乱が嘘だったかのような、穏やかな笑みを浮かべる。

目の前には、溶液に満たされた巨大な水槽にたゆたう、幼い少女。「ああ、ごめんなさいね。ビックリさせちゃったかしら？」

もう二度と返事などすることが無いであろう、水槽の中の少女に語りかける。

「大丈夫よ……お母さん、頑張るから。だから、待っていて頂戴……」

彼女の、名を。

「アリシア」

………四文字の、娘の名を。

「はああああつ！……！」

一気呵成になのはに肉薄し、鎌を振るう。

ガギンッ！！

なのはが展開したシールドが、それを阻む。

やはり、硬い。なのはの防御は、フェイトの渾身の一撃を受けきった。

『 Holding shield 』

バルディッシュの光刃が、シールドに噛まれる。

「くっ……！！」

以前、このパターンで痛い目を見た。フェイトはすぐさま光刃を解除。

『 Blitz Action 』

高速移動魔法で、必中の間合いから脱出する。そして……

『 Barrier Burst 』

バゴオン！！

爆風に弄ばれ、一瞬だけ体勢を崩したところに、

「 デイバイン……バスター！！ 」

桜色の砲撃が迫る！

「 な……めるなああああああ！！ 」

フェイトは、不安定な体勢から敢えて加速。とにかく、射線上から自身を外すことだけを考える。結果、建造物のレイヤーに身体がぶつかり、少ないダメージを受けたが、砲撃の直撃を喰らうよりはマシだった。

「 しまっ……！！ 」

砲撃を撃っている最中、なのははその場に足止めされる。

「 もらったあああああ！！ 」

デイバインバスターとすれ違うように、再びなのはに迫る。

『 accel shooter 』

「シュート!!」

牽制の誘導弾。

フェイトは、バルディッシュを振りかぶり、

『Arc Saber』

光刃をブーメランのように発射。

「いつけええええええええええ!!」

光刃は、なのはの放った誘導弾を纏めてぶった斬る!

飛び続ける光刃は、なのはの真正面。それは恐らく、簡単に防がれてしまうだろう。だから。

(挟撃!)

得意の高速移動でなのはの背後を取り、バルディッシュによるシヨックブローを……シールドの展開より速く、叩き込む!

『Flash move』

だが、その攻撃は空振ってしまう。

「なっ!?!」

いきなり目の前から消えた。そして、

「高速移動は」

聞こえる声は、背後!!

「フェイトだけが使えるわけじゃないんだよ!」

『Flash Impact』

「このおおおっ!!」

ギンッ!!

バルディッシュで、背中をガード。それが功を奏し、なのはの打撃は不発に終わる。

「お返し……だっ!!」

振り向く回転動作に、攻撃を乗せる。

横薙ぎの一撃!

「チッ……!!」

『Solid』

ソリッド。なのはは、物質強化魔法でレイジングハートの柄を強化し、

「はあああああああつ！……！」

ツギイイイイイ！……！！

火花が出るほどの勢いで、ぶつけあう！

『Impact！』

『Photon Burst！』

そして、示し合わせたように、衝撃波で互いを間合いから弾き出す。

「はあつ……！！！」

肺いっぱい酸素を吸い込み、眼前を見据える。

白いバリアジャケット。同色の杖。

……自分より小さい女の子。

（強くなってる……前より、確実に！！）

だが彼女は、圧倒的な威圧感を放ちながら、フェイトの前に立ちふさがっている。

（おかーさん……！！）

だがフェイトは、母への想いでその重圧を跳ね飛ばす。

（また二人で、ピクニックに行くんだ……！！）

記憶が、フラッシュバックする。

見渡す限りの草原。そこにシートを広げ、母とたくさん話をして

……また優しく、自分の名を呼んでくれるのだ。そう、『フェイト』と……

『アリシア』

「……え？」

ぱきん、と、何かが割れた。そして、堰を切ったように、今まで曖昧にしか聞こえなかった……いや、聞こうとしてこなかった四文

字が、母の声で再生される。

『おいしい？ アリシア？』

『アリシアは、甘えん坊さんねえ』

『アリシア』

『アリシア』

プレシアが呼ぶのは、フェイト以外の誰かの名前。

（おかーさん……違うよ。ボクは、ボクは……）

あの、優しい笑みは……一体、誰に向けられたものだった？

フェイトは、ぶんぶんと首を振る。

（どっちでも、いい！）

自分が『フェイト』でも、『アリシア』でも。

（おかーさんが笑ってくれるなら、ボクは……！）

そのために、ただ全力で……目の前の敵を、打ち砕くだけ！

「行くよ……！……！」

『Photon Lancer』

発動するのは、フェイトが最も得意とする攻撃魔法。だが、その規模は……フェイトの側面、数十メートルにまで魔力スフィアを展開する程だ。

「……やばっ」

なのはは、すぐさま危険を察知し、射程外への退避を試みる。が。

ガチンッ……

「あっ、しまった！」

バインドにより、両腕を拘束されてしまう。

『Phalanx Shift』

フォトンランサー・ファランクスシフト。

『個々の威力に劣る分を手数でカバーする』というフェイトの戦術理念を反映した、フェイト最強の攻撃魔法である。

いかなる防御であろうとも、38の魔力スフィアによる一斉掃射を受ければ削りきり、落とす事ができる。そう自負している。

「これが！」

フェイトは詠唱を終え、空中に磔にされるのを睨み付ける。

「ボクの！」

そして、バルディッシュを振りかざし……！！

「全力だあああああああああ……！！」

キュンキュンキュンキュンキュンキュンキュンキュンキュンキュンキュン

……！！

比較にならない数の射撃魔法が、なのはに迫る。

「私だつてッ……！！」

だが、なのはもまた……

「負けるわけには、いかないんだからあああああああ……！！」
フェイト必殺の魔法を、受けきる覚悟を決めた。

なのはは防衛魔法を展開。そして、

ズガガガガガガガガガガガガガガガガガガ……！！！！

「きゃあああああああ……！！」

正面から、激突！

ガガガガガガガガガガガガガガ……！！！！

一秒、二秒……

ガガガガガガガガガガ……！！
すでにその数は、三桁の大台に達している。

残った数十発分のフォトンランサーを、手元に収束する。
「スパークウウウウウウ……！！」

それは、魔法の名のとおり、槍のように固定化される。
長さは、五メートルもあるうか。

フォトンランサー・フランクシフトの、決定打！

「エンドオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

投擲された槍は、吸い込まれるように……

ズツゴオオオオオオオオオオオオ……！！！！

なのはに、突き刺さった！！

「はぁー……はぁー……！！ ど、どうだ、参ったか……！！」
四秒間の一斉掃射。総数にして、1028発ものフォトンランサー。さらに、トドメの一撃まで、クリーンヒット。間違いなく直撃した。

煙が晴れたそこには、ズダボロになったなのはが、海面に向かって落下している筈だった。

だが。

フェイトの宿敵たる彼女。高町なのはは。

「……………」
健在だった。

当然、無傷とはいかない。

バリアジャケットは原型を留めないほどに破壊され、露出した素肌は、打撲による内出血で浅黒く変色している。レイジングハートにも、あちこち亀裂や欠損が見受けられる。

だが、確かに立っている。

「今度は」

静かな声。それに、フェイトは思わずビクッと身をすくませる。

「こつちの番！ー！」

『Cannon mode』

ぎしぎしと、可動部分に破片でも入り込んだのか、ぎこちなく変形を行う。

「避けたいなら、避けていいよ」

その減らず口にカチンときた単細胞なフェイトは……

「来い！ このやるー！！」

バルディッシュを目の前にかざし、防御魔法に目いっぱい魔力を注ぎこみ、強度を上げていく。

『Sir.』

バルディッシュが警告を促す。

「うっさいー！」

……その向こうで、なのはが……『掛かりおつた！』とでも言いたげに『にやり』、もしくは『にんまり』と笑っていたことについては、言及しないでおこう。

「ダイバイン……！！！」

チュYY
YY

「うっ、うっ……！！！」

一秒。グローブが砕けた。
二秒。スカートが千切れた。
三秒。マントが消し飛んだ。
四秒。バルディッシュに亀裂が入った。

五秒。瀑布が、収まった。

「……………くっ、あはははは……………！」

耐えた！ 耐え切った！

フェイトは、思わず哄笑する。

『Restrict Lock』

バキーン！

「……………あ？」

その両足、右手に、桜色のリングが巻きつく。

「どこを見ているの？」

聞こえる声。それは、遙か天空から。

見上げた先。そこに、高町なのはが、レイジングハートをこちらに向け、佇んでいた。

「は……………ハツタリだ！ もう、魔力なんてカラッポのくせに！」

バインドを力ずくで解除するだけの力は、残っていない。持続時間いっぱいまで、この場に拘束されることは、確定している。

「魔力なんて」

なのはは、笑みを崩さない。

「そこらへんに、いくらでもある！」

その言葉に呼応するように……………

『Starrylight Breaker』

「使い切れずにばら撒いた魔力を……」

円環が、回る。

「もう一度、自分の下に集めて、再利用する……!!」
自分に確かめるように、言葉を反芻する。

「収束、砲撃」

ぽつりと、フェイトが口にする。フェイトが、ついには習得できなかった技術だ。それを、目の前の少女は使っている。

回る。そして、集まる。桜色の粒子と、金色の粒子。

「ああっ、それボクのじゃん!!」ズルい!!」

抗議するフェイトに、なのはは、クワツと目を見開き……

「勝てば官軍!!」

……勝利の鬼と化したなのはには、そんな抗議は通じなかった。

「レイジングハートと」

ぎゅるん、ぎゅるん……と、回転する円環の中心部に、明るい光が生まれる。

「ユーノくんと」

それは、あつというまに膨れ上がる。

「秀人さんと一緒に考えた、知恵と戦術」

遂には、直径50メートルにも膨れ上がり、今か今かと発射の瞬間を待ちわびている!

「最後の……最強の切り札!!」

じゃきん、と、レイジングハートを振り上げ……!

「受けてもらうよ……」

それは、星の光。

「これが私の、全力全開!!」

そして、発動のキーとなる、トリガーボイスが紡がれる。

「スターライト……!!」

共に、桜色の暴風雨に身を任せた……

第二十話（後書き）

劇場版SLB、どう見ても戦略兵器ですよね。

第二十一話（前書き）

今回、少し展開がご都合的かもしれませんが、ご容赦下さい。

第二十一話

フェイトが『大事な勝負』のため、クロノに連れられて行った、そのしばらく後。

二人の少女が、『高町』と表札が掛かった家の前に立っていた。

「……ここ、ね」

一人は、金髪碧眼。気の強そうな吊り目の少女、アリサ・バニンクス。

「うん、間違いないよ」

もう一人は、黒髪黒目。柔らかい雰囲気少女、月村すずか。

二人が何をしにきたのかと言えば……

「……高町、いるかしら」

「もう、緊張しすぎだよ」

なのはに、あの日の謝罪をするためだ。子供なりに行動力を発揮し、なのはの住所録を調べ、ようやく辿り着いた。

アリサの手には、紙袋。中には、あの日破いてしまった上着が入っている。月村家のメイドによって完璧に修繕され、さりげなくワンプイントまで追加されていたりと、サービス満載だった。

本来であれば、すずかが渡すのが妥当なのだが……アリサが、どうしても自分で渡したいと頼み込んだのだ。

「ええい、死なばもろとも！」

どこか間違った掛け声とともに、インターホンを勢い良く押す。

ピンポン……

そして、玄関のすりガラスの向こうにシルエットが浮かび、ドアが開いた。

「はあい、どちら様？」

出てきたのは、高町桃子。

「ええと、高町……なのはさんの、お姉さまでしょうか？」

「さすがが丁寧に対応する。桃子は『姉』という言葉に苦笑し、改めて自己紹介をする。」

「いえ。私は、なのはの母です」

二人は、ポカーンと口を半開きにし……

「母ア!?!」

全く同じタイミングで、驚愕の叫びを上げた。まあ、驚くのも無理は無い。とても三人の子持ちとは思えないほど若々しく、髪の色も、顔立ちも、なのはと瓜二つなのだ。母というよりは、姉と紹介されたほうがまだシツクリくる。

「……とりあえず、中へどうぞ?」

「失礼……」「します……」

二人は、促されるまま玄関を潜る。

恭也と美由紀は、しばらく行っていないなかった翠屋へ行き、開店に向けて掃除と仕込みを始めている。なので、今は桃子一人だった。

「それで……今日は、どのような御用?」

桃子が淹れた紅茶の味に驚いている二人に、用件を聞く。

アリスが、それに応じた。

「服を返しに……あと、謝りに」

桃子は、詳しくは聞かなかった。それは、当人達の間で解決すべきことだったから。

「んー……なのはは、しばらく帰ってこないわ」

困ったように、寂しい笑みを浮かべる桃子。

『しばらく』には、こういった意味が込められているのか……それを、二人が知る余地は無かったが。

「何なら、私からなのはに伝えておくけれど……」

「いえ」

アリスは、きっぱりと固辞した。

「私が直接言わないと、意味が無いんです」

なのはへの謝罪を、人づてに済ますのは不義理に尽きる。

「そう。……ちよっと待っててね」

電話機の傍に置いてあったメモ帳とボールペンを手に、戻ってくる。

そして、メモ帳にボールペンを走らせる。

書き終わると、そのページをぴりっと切り離し、二人に渡した。

「それ、なのはの電話番号とメールアドレスよ」

「……………」

じつとそれに見入るアリサ。ポケットから携帯電話を取り出し……

「ああ、今日はきつと出ないわよ？」

ずるっ、と、椅子の上で器用にずっこけた。

「今日、大事な勝負があるって……………」

「「勝負？」」

なにやら穏やかではない単語に、怪訝な顔をする二人。

「えっと、勝負って…………？」

「簡単に言えば……………」

そこではばらく迷う桃子。

簡単に言い表すのは難しいと、言うてから気がついてたらしい。どにかずれているところは、なのはと似ていた。

「そう、」

ぼん、と手を打ち、ようやく口にした。

「意地っ張り同士の、意地の張り合い？」

かち、こち……………」

時計の秒針が、いやに大きく鳴った。

「……………すみません、分かりません」

アリサ、降参。

「……………あら？」

桃子は一人、首をかしげるのであった。

「ぜえ〜……………！ ぜえ〜……………！」

私は、肺を総動員して酸素を取り込む。実戦で撃つたのは初めてだけど……………反動が、予想以上にキツイ。気を抜いたら、飛行魔法が維持できなくなってしまいそうだ。

でも……………！

『魔力反応、消失。全ての魔力を削り取りました』

レイジンググハートが告げるのは、私の勝利！

「……………やった」

とうとう私は……………あの強敵を下したんだ！

「やったああああああ……………ゲホツゲホツ……………！ 勝つ、ゲフッ！」

『落ち着いてください、マスター』

落ち着け私。

「レイジンググハートの……………みんなのおかげだよ」

ぎゅっ、と罅割れたレイジンググハートを抱き寄せる。

「ごめんね。私も、魔力ギリギリだから、修復はまだ後で……………」

『構いません。ところで、マスター』

「ん？ なぁに？」

『彼女が溺死寸前です』

「へ？」

スターライトブレイカーの着弾地点……………そこに、水泡が浮かんでいる。

更に目を凝らすと……………

「がぼがぼがぼ……………！！」

水中でもかくフェイトの姿が見えた。

「ふえ、フェイトオオオオオ！？」

飛行魔法で加速し、勢いのまま水中に潜り、フェイトを救出。水上に上がり、何とか破壊を免れた廃ビルの傾いた屋上に、フェイトを寝かせる。

「うづう……」

青ざめた顔で呻いている……

とんとん、とんとん、と背中を叩く。

「げえっほ！ げほっ……おええ……！」

身体を丸め、喉の奥から、たんまりと水を吐いた。

「し、死ぬかと思った……！」

「ご、ごめん……まさか、泳げないなんて」

うかつだった……戦いで体力を消耗しているのに、水泳なんてハードな運動が出来るわけ無いのに。

「違ーう！ キミの砲撃で、だ！」

「……え？」

嫌だなあ、人聞きの悪い。確かに、ちよつと強い攻撃だったかも
しれないけど……

「なんだよあの無茶苦茶な馬鹿魔力！ 死ぬぞ！ ボクじゃなくても死ぬぞ！？」

ぎゃーぎゃーと怒り狂っている。

「もう、大げさなんだから」

「大げさなもんか！！」

立ち上がるうとするも、足に力が入らないようだ。

「ほら、まだ動かないの」

ふらつくフェイトを寝かせ、膝枕の体勢に持っていく。丁度、フェイトの顔を上からさかさまに見下ろす形だ。

ひとしきり騒いで、私もフェイトも、呼吸が整ってきた。

膝枕でフェイトを休ませながら、作り物の水平線を見渡す。

「いやあ……なーんにも無いねえ」

ちよつと……予想以上だったかも。私達がいるここ以外、見渡す限り水面だけだ。

「……『壊れた』んじゃなくて、『消し飛んだ』んだぞ
ちよつととがめる様な口調。

見下ろすと、フェイトの真つ赤なルビーのような瞳が、私を見上げていた。

「まあ……必殺技だし？ これくらい強力でも……」

「いいわけあるかつー!!」

フェイトが、頬を膨らませて噛み付いてきた。

しばらくにらみ合い……

「「ぶつ……」」

どちらからともなく、吹き出した。

「あはははっ……!! いいじゃない、別に!!」

「くふふっ……あつはははは! 良くない! 絶対良くないよ!」

「あはつ、あはははははっ……何笑ってるの、フェイト……!!」

「ふふふふふ……!! キミこそ、笑いながら戦略兵器ぶつ放すなよ! あははははは……!!」

「せ、戦略兵器!? 何ソレ、あははは!」

「だって、ドカーンって、廃ビルまとめて吹っ飛んだんだよ! あは、はははははは……!!」

「吹っ飛んだんだ……!!? すつごーい! あーはっはっはっは!」

「キミがやったくせに、何驚いてるんだよ……ぶぶぶつ……!!」

げらげらと、馬鹿のように笑い転げた。

「ねえ、フェイト?」

「ん?」

「私の、勝ちだよな」

「……うん。ボクの負けだ」

フェイトは、どこか晴れ晴れと、負けを認めた。

「全部、出し切った。力も、技も……………意地も」

もうフェイトは、偽悪の仮面を被っていない。

少し乱暴な、普通の女の子が、そこにいた。

「約束、覚えてるよね？」

あの夜、縁側で交わした約束。

「私が負けたら、ジュエルシールドを全部あげる」

「ボクが負けたら、何でも言うこと聞く……………だっけ？」

そう。全ては、このときのために。

フェイトと、友達になるために。

今こそ、言おう。

「あのね……………」

『なのはちゃんっ!!』

ぶっちん、と、通信回線が乱暴に開かれた。

「うるさいなあ……………!!」

なんてタイミングの悪い。下らない用事だったら容赦しないよ？

『大丈夫!?!』

「ああ、うん」

大丈夫、と言い掛けて。

『ひどい……………!!』

仮想空間の中。私の最大砲撃で根こそぎ消し飛んだ建造物を見て、エイミーが戦慄している。ひどいって。

『一体、何があったの!?!』

「ええと……………」

説明しづらい。

『まさか、またプレシアの次元跳躍攻撃!?!』

「いや、その……………」

つまり何か。

今のこの惨状を作り出すには、プレシア並みの攻撃力があるってことか。

『って、周辺魔力がほぼゼロ!?』

収束砲のエネルギーになりました。

『まさか……集積型の魔力爆弾が!?』

言うに事欠いて……!』

「ブフツ……!! ば、爆弾だつてさ! くくくく……!!」
膝の上で、フェイトが腹を抱えて笑いを堪えていた。

だが、その後の一言で、空気が変わった。

『それとも、こっちにも襲撃があつたの!?』

「こっち、にも……?」

『あ、やば……』

エイミイが失言に気付き、慌てた声を出した。

「どういうこと!? ちゃんと説明して!」

やがて観念して、事情を説明し出した。

この仮想空間と外が、完全に切り離されていたこと。

アルフが、爆弾を仕込まれて寄越されたこと。

「アルフに……!? そんな……そんな!!」

フェイトには衝撃が大きかったらしく、モニター内のエイミイに詰め寄った。

「アルフはどうなったの!? ねえ!？」

「フェイト、落ち着いて!」

腰の辺りを掴み、抱き寄せる。

「落ち着けるわけが……もっつ!」

その口を、掌で塞ぐ。

「いいから！ 黙って聞きなさい！」

「うー……！！！」

涙が滲む目で、私を睨み付けるフェイト。

「心配なのは、よくわかる。でも、今ここでフェイトが暴れても、何にもならないんだよ！？」

私だって、冷血漢じゃない。フェイト程ではないにせよ、それなりに面識のあるアルフに命の危険があると知らされて、何も感じないわけが無い。

でも、だからこそ……今は、冷静にならないと。

「それで、アルフに仕掛けられた爆弾は？」

最悪の結果を覚悟し、聞く。

「それは、大丈夫。秀人君が、なんとか摘出してくれた」

ほう……と、安堵する。

「あ、あ……」

フェイトの動きが止まり……ふにゃつ、と弛緩する。どうやら、

アルフが無事とわかって、一気に緊張が解けたらしい。

『でも』

そう。あのプレシア・テストロツサが、その程度で済ますような諦めのいい奴じゃないということは、よく知っている。

『多分、今も……クロノくん達は襲撃を受けている』

策が一つで終わりというわけではないだろう。万が一のときのために、保険を二重にも三重にも用意しているはずだ。

『爆弾を摘出した途端に、通信や操作が全部遮断されちゃったから、詳しくは分からないけど……』

秀人さん達を孤立させて、戦力を削ぐ気であるに違いない。そして、護衛がいなくなったところで……

「次は、私ってこと？」

私の持っているジュエルシードが、プレシアの最大の標的だろう。

『多分……ううん、間違いなくそう。』

そこはある意味一番の安全区域だから、二人は、そこで待機するようについてというのが艦長の指示』

今すぐにも、秀人さん達を助けに行きたい。でも、魔力も体力もカランプのままでは、行っても足手まといになるだけだ。

悔しいけど……本当に悔しいけど、今はここでじっとしているしかない。

「アースラからの救援は？」

増援でも何でも、秀人さん達が無事でいてくれるならそれでいい。『全力で結界に干渉してるんだけど、まだ小さな穴しか開けられていない状況が続いてる。だから、増援も、医療班も……』

「くそっ……!!」

何か無いの!?

(考える、考える……!!)

何かあるはずだ……!!

未だに、

……そうだ

小さい穴しか……

「エイミィ!!」

私には出来なくても!!

私は、胸元のレイジングハートを握り……

「だああらっしゃあああ!!」

バギンツ!!

頭部を殴り碎かれた傀儡兵が、重い音を立てて地面に転がる。

「クロノ! 何体倒した!？」

「五十から先は、数えていない!!」

ズガガンツ！！

誘導弾で傀儡兵を蜂の巣にしながら、クロノが答える。

「ああもう、何体隠し持つてるんだよ！」

ガゴンツ！！

騎士タイプの胴体に風穴が開く。

俺とクロノは、リンカーコアを『結んで』いるおかげで、完全に消耗するまで、まだ猶予がある。だが、結界をたった一人で維持しているユーノは……

「ユーノ、大丈夫か！？」

ユーノともリンカーコアを『結ぶ』こともできるけど、そうすると、結界の維持なんて高度な計算をしているユーノに、余計な負担をかけることになってしまう。

「うん、大丈夫……！」

言葉とは裏腹に、額にはびっしりと汗を掻き、膝は震え、今にも崩れ落ちそうだ。

「後援が来れば、負担も減るから……！」

アースラの連中だって、いつまでも指をくわえて眺めているなんてことは無い筈だ！

「それに、」

にやっ、と、ユーノには珍しく、不敵な笑みを浮かべる。

「ここで負けたら、なのはに、顔向けできないからね……！！ 絶対に死守する！」

たとえ戦闘に参加できずとも。ユーノは、果敢に戦っていた。

通常なら、アースラの出力に頼るか、何人かで交代しながら維持するような結界を、長時間、たった一人で支え続けている。いかにユーノが優秀な結界魔導師だといっても、疲労は蓄積する。傀儡兵に襲われでもしたら、無防備なまま攻撃を受けてしまうという緊張もあるはずだ。だがユーノは、俺達を信じ、全力で結界を支えている。

「……アースラのクルーは優秀だ」
その姿に思うものがあつたのか、戦闘時には無口なクロノが、口を開いた。

「きつともうすぐ、干渉を無効化して増援が来る。だから……！」

『Brake Impulse』

チユイイイイイイイイン！！

傀儡兵を振動波でバラバラに分解しながら、クロノが叫ぶ。

「もう少しだけ持ちこたえろ！ フェレットもどき！」

ユーノへの激励を！

『グオオオオオオ！』

「すつこんでろ！！」

『Blaze Cannon』！

バガアアアアアッ！！

二発の砲撃が、重騎士タイプ of 装甲を爆破。副次効果の爆裂が、内部機構を滅茶苦茶に引き裂いた。とりあえず、第……八陣くらいか？……までを片付けた。だが、おかわりとばかりに、また転送魔法陣が出現し、何体もの傀儡兵が顔を覗かせる。

「残存魔力、31パーセント……」

三分の一を切ったか。もし魔力が切れたら……と、そこまで考え、頭を振る。

（『もし』『たら』『れば』は、その時になつたら考える！ 今は、目の前の敵をブツ潰せ！）

俺は、拳に魔力を纏わせ……

『クロノくん、秀人君！』

待つてました！

少しばかりノイズ混じりの、随分と懐かしい声が聞こえた。

「遅れてゴメン！ 状況は！？」

すぐに、クロノが声を張り上げる。

「術者が限界だ！ 結界の維持を！」

「了解！」

ウンツ……

返事とほぼ同時、

「……はあっ、はあっ！」

ユーノが地面に手を突き、そのまま崩れ落ちる。 本当に……よく

頑張ったな、ユーノ！

「他に、怪我人が多数いる！ 転送ポートは開けないのか！？」

応急手当しかしていないアルフと、武装隊のヒヨっ子ども。今も、後ろのビルの中に引っ込めてある。ユーノと共にアースラに回収してもらうことができれば、自由に動き回り、遊撃に打って出ることが出来るようになる。いつの時代も、大変なのは拠点防衛戦だ。

「ごめん、今、全力で解析にあたってるから……」

あ……そう都合よくはいかないか。

「でも、援軍はいるから！」

そして、俺の目の前に、直径10センチ程度の、極小の転送ポートが開いた。

「秀人君、これを！」

僅かに開いた転送ポート。そこから、心強い「援軍」が現れる！

「お久しぶりです。生きていますか？」

赤い宝石。レイジングハート！

「一応な！ 手え貸せ！」

「了解しました」

ある意味、誰よりも心強い援軍だ！ これで、自分の魔法が使える！

レイジングハートを右手に握る。

結晶体とレイジングハートが擦れ、かりつ、と硬い音を立てた。

『？ 何ですかこれは？』

「ああ、これか」

右手が吹っ飛んだことをぼかして、説明する。

レイジングハートは『またですか』と、ため息一つで納得するだろうけど……なのはは、間違いなく怒る。そして泣く。というわけで、黙っておくのがベストだ。

『恐らく、無尽蔵に魔力を吸収し、蓄積するタイプのロストロギアでしょう』

レイジングハートは、そう結論付けた。

『簡単に言えば、ジュエルシードの亜種です』

多分だけど、ジュエルシードに辿り着くまで、プレシアが収集してきた候補の一つ。

とはいえ、さっきの魔力補充で完全に沈黙し、今はただの無機物になっている。

魔力を補充した、という話を聞いたレイジングハートが、何やら思案顔（顔無いけど）で考え込む。

『吸収……ですか』

「バキヤツ！！」

騎士タイプの頭部を握り潰す。

「打開策、何か出してくれよ！」

正直、クロノと連携する以上の考えなんて浮かんでこない。前にレイジングハートが言ったとおり、瞬間の閃きこそ強いが、長時間思考し続けることには滅法弱い、ドラッグレース仕様の脳みそだ。

『賭けになるかもしれないませんが、よろしいですか？』

「このままじゃ、どうせまた魔力が切れる。それなら、お前に賭けるよ」

今までだって……レイジングハートの言うことが、間違っていたことなんて無いんだから。

レイジングハートはしばし黙考し、『ある術式』を起動した。

『Sterlinght』

スターライト。

周辺に散らばった魔力を集め、再び利用する技術。攻撃にも、防御にも転用できる、かなり実戦的応用的な術式だ。

でも、何でだ？

「俺、スターライトには適性が無いんじゃない……」

練習の時は、いくら集めても、それを留めておくことが出来なかった。

『こればかりは、適性ですから』

と、レイジングハートも無理に習得をさせようとはしなかったのに。

「……賭けにもなっていないぞ」

練習で使えなかったものが、いきなり本番で使えるようになるなんて……フィクションの世界だ。

『ええ、確かに。以前のヒデトなら、無理でした』

粛々と術式の発動を準備しながら、続ける。

『あなたの右手。そこに埋まっている物は何ですか？』

へ？ 右手？

「ええと……カラッポの魔力結晶」

『その働きは何でしたか？』

確か……

「無尽蔵に魔力を吸収する………ああ!!」

そういうことか!!

理屈としては、筋が通っている。

魔力を『集める』ことはできるが、『留めて』おけない。だから、『留める』役目を、右手の魔力結晶に頼る。

だが、魔力結晶が一回こっきりの使い捨てタイプだったり、蓄積に長い時間が必要だったりしたら、もうアウトだ。

「ははっ……確かに、賭けだな」

リスクは高いが、リターンがあるかどうかも分からない。でも。

「やるぞ」

『よろしいのですか？』

レイジングハートが、少し驚いたように確認を取る。

たとえ、クロノに止められても、俺はやる。何故なら……

「俺は、お前を信じてる」

レイジングハートは、何度も何度も戦いを共にしてきた、仲間だから。仲間を信頼するのに、理由はいらないだろ？

「だからお前も、俺を信じてくれ」

『……』

レイジングハートが黙り込み……

『スターライトを、アカウント・吾妻秀人に合わせ、再編成。完了』
術式を、書き換えた。

「行くぞ！」

目を閉じ、意識を集中。自分を中心に、渦巻くようなイメージを描く。

ギューイイイイイイ……！！

そして……集まってきた魔力を、右拳の結晶体に。

だが。

シン……と、結晶体は沈黙したままだ。

(頼む……)

俺は、霧散していこうとする魔力を必死に繋ぎとめ、結晶体に送り続ける。

だが、しばらく経っても結晶体に変化は見られない。

駄目、なのだろうか。やはり、そう都合よくは行かないのだろうか。

(頼む……)

でも。

(頼む……!!)
それでも。

俺は、レイジングハートを信じると決めただ!

ドクン

と、結晶体が、鼓動を刻んだ。

ドクン、ドクン、ドクン、ドクン……!!

行ける。行ける!!

結晶体と、リンカーコアの鼓動。

バラバラのそれらを、時に押さえ、時に解放し、徐々に、徐々に同調させていく。

ドクンッ!!

一際強く、弾けるような鼓動を刻み……!!!!

「いっけええええええええええええええええ!!」

そして……

ギュゴアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!

起動、した!!

『結晶体、起動を確認。魔力の蓄積を開始しました』

「な? 信じてみるモンだろ?」

『……………私の見立てでは、成功率は十パーセント前後でした。マスターも含め、あなたたちは、とことん私の計算を越えて行きますね』

あきれたような賞賛を零す。

「さて」

睥睨する先には、うじゃうじゃと傀儡兵の群れ。そいつらは、けが人を避難させているビルをを目指していた。

「片付けるぞ！」

『Here we go!』

魔力結晶に吸いきれなかった魔力のカスが、俺の身体を中心に、放射状に広がっていく。なのはのスターライトとは、逆に………そう。

『S t e r d u s t』

星屑のように。

決めた。この技の、名前は………!

「スターダスト………!!」

手刀に構えた右手を、居合い切りのように、腰に構える。

『『『『『グオオオオオオオ!!』』』』』

危険を感じ、方向を換え、俺に殺到する傀儡兵。でも、もう遅い

!!

膨大な魔力を……俺の得意な衝撃波として………!

「ウオー………ル!!」

一気に、振り抜いた!!

そして発生する、桁違いに巨大な、魔力の大津波。

ガゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ………!!

それは、進行方向にあったアスファルトを、ビルを、天高くまで舞い上げ粉碎し、傀儡兵どもへと押し迫る！

効果範囲は……上は結界最上部。横は結界全幅。つまり……結界の端から端まで。

「逃げられねえぞ、鉄クズ」

……………ゴアアアアアアアアアアアッ！！！！

元々、装甲は大して厚く無かった傀儡兵どもは……悲鳴も無く爆砕され、ただのスクラップへと成り果てた。

ガラランツ……………

装甲の一部が、禿げたアスファルトとぶつかる。それを合図に、俺は戦闘態勢を解いた。

「ふう……キツかった」

ヴ……………

転送魔法陣が出現し……………

……………ウン

すぐに消える。癩癩を起こしたように、何度も、何度も……………

「無駄だ。もう、お前の転送魔法は届かない」

俺は、きつと見ているであろうプレシアに宣言する。

「ジャミングは、お前の専売特許じゃない。少しは考えておくべきだったな」

先ほどの、収束魔力波。

アレにはわざわざ不純物を混ぜた、結界全域にバラまいておいた。それらは、リーダーを乱反射させるチャフの役目を果たし、遠距離からの干渉を防ぐ。近距離……つまり、結界の中にいればさほど影響は無いが、このプレシアのようなタイプには効果的はずだ。

「安全圏から一步も出ずに、高みの見物を決め込むつもりだったん

第二十一話（後書き）

秀人とプレシア、いよいよ邂逅です。

一期も山場です。

どうか、一区切り付くまでお付き合ってください。

第二十二話（前書き）

作者の二号バイク、NSR250Rの修理が完了しました。
早く走りたいです。

第二十二話

初めて聞くプレシアの声は少し低く、こんな激情にまみれていても、高い知性を感じさせた。

『お前は……なぜ私の邪魔をする！？』

なぜ、か。

思わず失笑が漏れる。

「別に、ご大層な理念でお前の邪魔をしているつもりは無いよ」

正式な管理局員ではないし、次元世界の平和だの、俺の手には余る。

「俺の家族と、その周辺を守ろうと思っただら……結果的に、お前の邪魔をするようになった、っていうだけの話だ」

『ふざけるな……！！ そんな下らない理由で……！！』

「ふうん……それじゃあ、お前にはあるんだろうな？ 下らなく無い理由が」

今のプレシアは、冷静さを欠いている。もしかしたら、目的を聞き出すことができるかもしれない。

「お前、あんな危険なものを集めて何をしようとしてる？」

『そんなこと、お前には「まあ、最も」
間髪入れず、その言葉を遮る。』

「お前には何も出来やしないけどな。お前の手元には、たった九つしか無いんだから」

通信の向こうで、ギリツ、と歯を食いしばるような音がした。

『寄越しなさい……！！』

「嫌だね」

誰がお前みたいなきちガイに渡すか。

『それは、私たちに……私とアリシアに必要なのよ……！！』

アリシア？

「それは、誰だ？」

……プレシアが、ああまでしてジュエルシードに執着する理由。それが、『アリシア』らしい。人名っぽいけど……

『ああああああ！』

その質問には、答えが返ってこなかった。何かが砕けるような音と共に、通信が切れてしまった。

「……悪い、クロノ。お前ほど上手くは出来なかった」

これは、本来なら執務官（警察官と検察官と弁護士を混ぜたような職業）であるクロノの出番だったのだろう。ついじゃばってしまった。

「いや、十分だ。よくやってくれた」

労ってはくれるが、引き出せた情報は一つだけ。『アリシア』という名前。

「誰なんだろうな、アリシアって」

プレシアの大事な人……うーん、想像付かない。

そういえば、クロノは犯人のプロフィールに目を通していたんだっけか。

「クロノ、知ってるか」

「……まあ、な」

何故か、クロノは言葉を濁す。

「……？」

何か、言いづらい事情でもあるのだろうか。

そこに、いつものごとく明るいながら、色濃く疲労を感じさせるエイミイの通信が入ってきた。

『秀人君。転送ポートの準備、OKだよ！』

「……ま、戻るか」

アルフの傷も、止血しか出来ていないし……

「なのは達は？」

『もうアースラに回収済み』

勝敗は……まあ、聞くまでも無いか。

「……………戻ったら、話そう」

クロノは、考えた末にそう言った。

「頼むぞ……………よししょつと」

盛大にいびきをかいて眠るユーノを背負う。

「ふあああ……………」

俺も、さすがに眠いな……………戻ったら、どこかで寝よう。

「アルフ……………アルフツ……………!!」

フェイトは、アースラの廊下を全力で疾走していた。とはいえ、疲労が抜けるまでまだしばらく掛かるらしく、へろへろと覚束ない足取りだった。

あまりにも危なっかしいので、私が手を引き、先導していた。

「走らなくてもいいってば……………今、手術してるらしいから」

手術とはいっても、そこまで大仰なものではないらしい。せいぜい、臓器などに損傷が無いかどうかをスキャンし、問題なければ腹部の傷を縫合するだけで終わるそうだ。

秀人さんによって無理やり摘出された魔力結晶。あれは、本当にただ『仕込まれて』いただけであって、臓器などに『埋め込まれて』いたわけではなかったのが、幸いだった。

もし臓器など……………心臓に癒着していたなら、万事休すだったけれども……………なぜプレシアがそうしなかったのかは、今のところ分かっていない。

そして、手術室の前まで来る。私にはミッドチルダの文字は読めないが、扉の上でランプが点つているところを見ると、今もまだ手術が行われているらしい。

「ぐ……………ぐ……………」

「…………ふが」

そこに設置されていたベンチで、秀人とユーノくんが、いびきをかいて眠っていた。その傍らには、くしゃくしゃに乱れたタオルケットが落ちている。どうやら、ズリ落ちてしまったらしい。

疲労の度合いで言えば、私達より遙かに高いのだから仕方ないのかもしれない。

「もう…………カゼ引くよ、二人とも」

ふたりにタオルケットを掛け直す。

秀人さんの首に掛かったままのレイジングハートが明滅し、私に声をかけた。

『二人とも、単純に魔力切れ・体力切れです。一日も寝れば、回復するでしょう』

「そっか」

私達の勝負には、最初から最後まで、一切の邪魔が入らなかった。私が完全に消耗し切り…………ジュエルシードを奪うには、絶好の機会だったにも関わらず。

「また…………助けられちゃったね」

ありがとう、二人とも。

と、感傷に浸る私の視界の隅で、金色の髪の毛が、ふらふら、ふらふらと…………

「う……………う……………」

フェイトが、手術室の前をうろろろと行ったり来たりしている。行って、ちらつ。手術中を示すランプを見上げる。来て、ちらつ。また見上げる。うろろろ。ちらちら。

「少し落ち着きなよ」

ぴたつと立ち止まり…………

「だって、アルフが…………アルフがあ……………」

泣きそう…………というより、泣く寸前みたいな顔で、振り返った。

「はあ……………」

手の掛かる子……

「こつちおいで」

袖を引つ張り、無理やり私の横に座らせる。

「リンディさんの話、聞いたでしょ？ 命に別状は無いつて」

戻ってきた時、最初にその説明と一緒に受けていたはずだけど……

……多分、心配で頭が一杯一杯になってたんだろう。

「でも、おなかに穴が開いたって……」

「だから、それを今塞いでいるの」

ゆっくり、言い含める。多少なりとも冷静さを取り戻したのか、もじもじ動くのをやめ、大人しくなった。

「ボク……アルフに、何度も酷いことしちゃったんだ」

懺悔するように、珍しく、自分から話し始めた。

「頭、ぶつたり……髪の毛、ひっぱつたり……それで、血が出たこともあつて」

「それは、どうして？」

大体、想像できる。会って間もない頃のフェイトなら、多分……

「ボクの言うこと聞かなかつたから、つて」

はあ……やっぱり。アルフ、苦労してたんだね。

「アルフは、いつもボクのために言ってくれてたのに」

ぎゅっと固められた手に、自分の手を重ねる。

「フェイト、あなたは、どうすればいいと思う？」

「ボク、は……」

以前のフェイトだったら、多分、考えない。

でも、今のフェイトなら……

「……謝らないと」

顔を上げたフェイトは。

「ボクは、アルフに謝らないといけないんだ」

きつぱりと、強い意志を目に宿していた。

「……………うん」

ほら……………やっぱりフェイトは、ちゃんとこういうことを考えられる子なんだ。

フェイトは本来、とても優しい子だったんだろう。もし、本当に性根が悪なのであれば、アルフといえども、見放していたに違いない。その優しさを歪めたのは……………実の母親である、プレシアだ。

娘を利用し、悪事に加担させる母親なんて……………そんなの、母親なんて言えるのだろうか？

私は、フェイトの手前、なんとか怒りを飲み込んだ。

「そうだね……………ちゃんと、謝ろう」

よくできました。そんな感じで、フェイトの頭を抱き寄せる。

「ん……………」

安心したように、身体を預けてきた。その目蓋が、少しずつ、下りてくる。

「疲れたでしょ？ 寝てもいいよ」

頭を撫でてやると、僅かに頬を緩ませ……………

「……………」

返事は無く。フェイトは、私にもたれかかりながら、寝息を立て始めた。

「ふああああ……………」

静かになった途端、大きな欠伸が出てしまった。

う……………私も、そろそろ限界かも……………

でも、手術中のランプは、まだ点いたままだ。

ちゃんと起きてないと。ちゃんと、起きて……………

艦長室にいたリンディは、アルフの手術が完了したと報せを受け、手術室に足を運んでいた。途中、クロノとエイミィも合流し、廊下

に差し掛かったのだが……

「あらあら」

設置されたベンチに、折り重なるようにして、四人が眠っていた。
「……はあ。仕方の無い」

だがクロノも、無理に起こそうとはしない。
「アルフの麻酔が切れるまで、まだ数時間ある。それまで、寝かせてやるか」

初対面の頃と比べれば、随分と丸くなったものである。

なのはをリンディが、フェイトをエイミイが。そして、秀人とユ
ーノをクロノが、それぞれ仮眠室に運ぶ。

「クロノ、あなたも睡眠を取りなさい」

「いえ、魔力は空ですが、まだ動けますので」

必要書類の作成など、事務仕事はできる……と言いたいのだろう。
「有事に備えなさい。命令よ、クロノ」

いつ何時、プレシアの襲撃があるのか分からない以上、いつでも
戦闘に移れるようにしておくべきだ、とリンディは言う。

「事務は、全てが終わった後にすればいいわ」

「……………了解しました、艦長」

クロノは、それで納得した。

「はい、クロノくんの分のベッドメイク終了」

こうなることを見越してか、ちゃっかり準備を済ませていたエイ
ミイが振り返る。その目の下に、色濃い隈があることをクロノは見
逃さなかった。

「エイミイはいいのか？ キミもほぼ徹夜だろう」

直接の戦闘に参加はしていなくとも、隔離空間の設置・監修に加
え、戦闘中のオペレート、ジャミングの解消と、前線に次いで激務
だったのがエイミイだ。

「んー、私は、クロノくん達が起きてから、交代で寝させてもらっ
よ」

からからと笑い……………一転して、悪戯を思いついた子供の笑顔を浮

かべる。

「それとも、一緒に寝てあげようか？」

エイミィとしては、鉄面皮のクロノが狼狽する様でも見たかったのだろうが……

「いや、結構だ。三時間で交代しよう」

顔色一つ変えず、即効で断られた。

「……………」

すげなくされたエイミィが、少し悲しそうに顔でリンディを見る。

「……………」ふるふる。

リンディは無言で、首を横に振った。

「……………」クロノくんの朴念仁(？)!!」

エイミィは、そんなことを叫びながらばたばたと駆けていった。

「なるほど、まだ大丈夫みたいだな」

クロノは、もそもそと毛布を被りながら、そう結論付けた。

その、あまりにも鈍感な息子に、亡き夫であるクライド・ハラオウンを……そして、自身の苦勞を重ねる。

(……………頑張りなさい、エイミィ)

リンディは、将来は娘となるであろうエイミィに、深く同情するのであった。

ぼんやりと、昔の夢を見ていた。

『アリシア、ごめんなさいね』

目の前には、最愛の母。

玄関先で、身支度を整えた母親が、『アリシア』に謝っている。

『少し、慌しくなってしまうて……しばらく、帰れそうに無いの』
それに対し、アリシアは……きつと、寂しそうな笑顔で、母親を見送っていたのだろう。

『大丈夫だよ！ わたし、ちゃんと一人でお留守番できるもん！』

本当は、寂しくて堪らないのだろう。その内心では、「行かないで」と今にも泣きそうだった。それでも、母親のことが大好きだから……我慢して、見送るのだ。

『それじゃあ、行ってくるわね』

母親も、本当は一緒にいてあげたいのだろう。何度も何度も振り返り、アリシアの姿を目に焼き付けようとしている。

『ママ！』

アリシアの本音が、一瞬だけ顔を覗かせ、母親を呼び止めた。

だが、寂しいという本音が顔に出たのは一瞬。

『誕生日プレゼント、早く頂戴ね！』

そして、母親の姿が見えなくなるまで、ずっと手を振り続けて……

「……誕生日、プレゼント？」

フェイトは、馴染みの無いベッドの中で目を覚ました。

自分が母親にねだったものとは、なんだったのか。以前であれば、『面倒くさい』とそれ以上の思考を停止していたのだが……今日は、なぜか気になってしまった。

(思い出せ、思い出せ……！)

頭の中を必死に掘り返し、記憶を遡る。

自分と友達になりたいとか言う、変な子に会った。

リニスが姿を消した。

アルフを拾った。

その前は……

ズキンッ！！

「ぎっ……！！」

突然、針を差し込まれたかのような激痛が頭に走る。

「あ……」

その痛みが過ぎ去った後に、見たことの無い記憶が脳裏に蘇った。

自宅のテラス。地平線まで見渡せる、お気に入りの場所

(あ、れ？ ボク、こんなの、知らない……)

知らないのに、知っている。その違和感に、吐きそうになる。

母の勤める研究所がよく見え、帰りが遅いときは、いつもここから……

(知らない、知らない……!!)

それは、記憶の奥底に封印されていた悪夢。

その日、大きな地震があり、研究所を中心に光の柱が立ち上った

陽光のような暖かさなど微塵も感じさせない、全てを焼き尽くす、破滅の光。

「やだ……やだあ……!!」

思い出したくない。なのに、頭は思い出す。思い出してしまふ。

その光は、あつという間に広がり、自宅にまで届いて

逃げる間もなかった。

それは、母親が有事に備え張っていたバリアをあつさり貫き……

からだか、ひかりにのみこまれた

「うわああああああああああああああああああああああああああああああ……」

フェイトは、記憶の中で恐怖を思い出し、絶叫した。

「……………!? フェイト、どうしたの!?!」

なのはが飛び起きる。

「嫌あ! 嫌あああああああああああ!?!」

「フェイト! …… フェイト!?!」

なのはの必死の呼びかけにも答えず、頭を抱え、のた打ち回る。

「おい、何だ!?!」

秀人とユーノまで起き出してきた。

「わ、わからない! いきなり……………!」

「ユーノ、医務官のオツサン呼んで来い! 俺はクロノを呼ぶ!」

「わかった!」

念話を使おうにも、艦内は嚴重なプロテクトが掛かっていて使えない。携帯端末も持っていない二人は、人を呼びに走った。

「あああああ!?!」

がりっ!

「い……………った!」

フェイトが振り回した手が、なのはの顔を引っかいた。頬から、じわりと血が滲む。

「フェイト! 落ち着いて!」

なのはが何度呼びかけても、フェイトはただ叫び、暴れる。

医務官が鎮静剤を注入し、ようやく収まったのだが……………

「あの、こんなことしなくても……………」

頬にガーゼを張ったなのはが、辛そうにソレを見る。

「…………… 僕だって、やりたくてやっているわけじゃない」

クロノが、無然と腕を組む。

フェイトの両手は、頑丈な手枷で拘束されていた。

「でも!」「なのは」

言い募るなのはを制したのは、秀人だった。

「秀人さん……」

「フェイトが起きて、また暴れだして……大怪我したらどうする?」

誇張では無い。感情の暴走によってリミッターが外れた身体は、その耐久力の限界を簡単に超えてしまう。特に、フェイトのような少女なら、尚更だ。

「かわいそうだっていうのは、俺も同意見。でも、これもフェイトのためなんだ」

しゃがみ、目線の高さを合わせ、なのはを説得する。

「フェイトが落ち着いたら、ちゃんと外すから。な?」

「………わかった」

なのはは、渋々頷いた。

フェイトの隣のベッドには、手術を終えたアルフが寝かせられていた。丁度、麻酔が切れ、目を覚ます頃だ。

「アルフ」

秀人が声を掛けると、その目が、ゆっくりと見開かれた。

「………ああ、アンタか」

「調子はどうだ?」

「悪くないよ。まだ動けないけど」

と、横のベッドに眠るフェイトを見つけた。

だが、取り乱したりも、慌てたりもしない。

「………フェイト、負けちゃったんだね」

まだ身体を起こすことはできないようで、ふう、と息をついた。

「アンタか? それとも、そっちの子か?」

「あの………私」

なのはが、おずおずと挙手する。

アルフは、なのはをじっと見つめ、

「………ありがとう。フェイトを負かしてくれて」

何故かなのはに感謝した。

「え？ ……なんで？」

「フェイトは、ずっと追い詰められてたから」

強くなければならない。

負けてはいけない。

全ては、母のために。

半ば洗脳のように、それはフェイトの頭に刷り込まれていた。幼い頃より甘えも許されず、ただ母親のために力を蓄え続けてきた。

人格が歪んでも、なんらおかしくはない、異常な生活環境だ。そして、それを止められる者が少なすぎたことも、要因の一つだろう。

養育係であったリニスがいなくなっただけからは、それが更に顕著になり……結果が、なのはに会う直前のフェイトだ。

他者を痛めつけることに何ら痛痒を感じず……むしろ、それを見て笑うような残忍な性格に変貌してしまっていた。

「フェイトは一度、誰かにキツチリ負けておくべきだったんだ」
フェイトには、必要だったのだろう。

……文字通り、性根を叩き直してくれる誰かが。

「あの、アルフ？」

「何だい？」

「フェイト、言ってたよ。『アルフに謝りたい』って」

「……………そうかい。」

……少し、疲れた。もう少し寝かせてくれ」

アルフはそれだけ言い、また目を閉じた。

ピピピッ……

クロノの携帯端末が鳴る。

「全員、艦長から呼び出しだ」

四人は、そろそろと連れ立って移動する。

「単刀直入に申し上げます」

呼び出された先の艦長室。そこで、秀人、なのは、ユーノ、クロノの四人は、一列に並んで説明を受けていた。

「先日の戦闘の際、転送魔法から座標を逆算した結果……」

秀人によってジャミングされ、何度も繰り返された転送魔法。冷静さを欠いていたプレシアの隙を突き、とうとう……

「プレシア・テストロッサの拠点が、判明しました」

全員の背筋が緊張で伸びる。

とうとう、この時が来た、と。

「突入は、二日後になります。それまで、魔力と体力の回復に努めなさい」

「二日後？」

なのはが首をかしげる。

リンディは、ふつと表情を緩め、笑みを形作った。

「というわけで、明日は休暇です。ご家族や友人と、ゆっくり過ごしなさい」

「でも……」

どうにも、フェイトが心配らしい。

ぼん、とその頭に手が置かれる。秀人だ。

「僕と秀人が残るよ。フェイトとアルフのことは、心配しないで」

ユーノが言い、それに秀人が続ける。

「恭也とかに、ちゃんと経過報告してこい」

後ろ髪を引かれる思いのなのだったが、

「そんな辛気臭い顔してたら、起きたフェイトが心配するぞ?」

「ううう……わかった」

その言葉に、なんとか納得した。

そして、なのはは一日の短い休暇を過ごすことになるのだが……

第二十二話（後書き）

なのはは長女気質です。

、、、、プレシアさんも、決して最初から悪人だったわけではないんですよ？

第二十三話（前書き）

20万アクセス、1万5千ユニーク達成しました。

まあそれはさておき、、、

仮面ライダーW、Atoz、レンタルで見ましたがパラダイスロス
トを超える神作品でした！

ゴールドエクストリームと、主題歌への入り方が最高です！

やっぱ、仮面ライダーは最高ですね！

第二十三話

約束どおり、『アリシア』という名前の人物について、クロノから詳しく聞くことになった。

「アリシア・テスタロッサ。プレシアの、実の娘だ」

実の娘って…… フェイトだけじゃなかったのか？

フェイトは、そんなの知らないような様子だったが。

「享年、6歳」

「……………は？」

享年って……

「それじゃあ、アリシアはもう死んでるのか？」

「ああ。……………3年前にな」

そう前置きし、プレシアのプロフィールを語りだした。

聞いたところによると、プレシアは、ミッドチルダでは知らない者がいないというレベルの有名人だったらしい。

今から三年前のその日は、プレシアが開発の指揮を執っていた、新型動力炉の稼働実験が行われる日だった。理論はさっぱり不明だが、要は原子炉のようなものだろう。それも、前例の無い理論で作られた、全くの新型。

普通なら、何十にも安全対策をして、いざとなれば緊急停止もできるようにするのが普通なのだが……プレシアのいた企業のトップは、利益に目が眩んだのか、強引に稼働を決定してしまった。安全対策どころか、改善点がまだまだ残っていたというのに、だ。

押収した記録には、プレシアは最後の最後まで、安全装置の増設を訴えていたらしい。

そして当然のように、暴走した。

半径数十キロにわたって、結構な被害が出てしまった。研究所が辺鄙な地域に無かったら、災害レベルの死者が出ていたそうだ。

被害者は、多くの研究員。そして………研究所の近隣に住んでいた、研究員達の家族。

その中に、アリシア・テストロッサが含まれていたのだという。

トカゲの尻尾切りのように、企業側は全ての責任を開発者であるプレシアに押し付けたいらしいが……管理局は、そこまで無能な組織ではない。その後の調査で、現場主任と、社長ら数名が逮捕されている。

でも、そんなもの……何の慰めにもならなかったんだろう。

その直後、プレシアは失踪したそうだ。

娘の死。ジュエルシードというエセ願望器。そして、

『私とアリシアに必要なのよ!』

あの言葉。

「おい、まさか……」

その、あまりにも馬鹿馬鹿しい想像を、きっぱりと否定して欲しかった。

でも、どう考えたって、プレシアの目的は……

「プレシアの目的は、十中八九……アリシアの蘇生だ」

「……いや、無理だろ」

なぜなら。

「ジュエルシードは、万能の願望器なんかじゃない」

持ち主の願いを、一度でも完璧に果たしたことがあったのなら、まだ理解できる。

持ち主が何を願ったのか、判明しているものだけを思い出ししてみる。

シリアル10。なのはの同級生が、『想い人を独占したい』と願った結果は、街を巻き込んだ大破壊。

シリアル14。月村家の猫が、『大きくなりたい』と願った結果は、成長ではなく、体積の倍増。

つまり、願いを曲解する上、融通も利かない。

多分、21個全部を共鳴させて、出力を稼ぐつもりだろうが……共鳴したジュエルシードは、その不完全な願望器としての力すら失い、ただのエネルギーの塊となって、全てを破壊する。

たった四つで、あれだけの破壊力。もし、プレシアの手元にある九つが発動したとしても、破壊力は単純計算で2倍。

「プレシアだって、それがわからないほど馬鹿じゃない」
仮にも、研究職に就いていたんだから。

「ジュエルシードで願いを叶えるつもりなのか……もしくは、ジュエルシードを使って、何らかの手段を用いるのか……」
クロノも、頭を悩ませているようだ。

「………というか、さ。フェイトはプレシアの何なんだ？」
三年前に、アリシアは六歳。生きていれば九歳。丁度、今のフェイトと同じ年頃だ。

「アリシアの双子の姉か妹か？」
「………プレシアが失踪する直前までのデータに、フェイト・テストロツサという名前は一言も書かれていない」

おかしいな……

「プレシアは、アリシアを大事にしていたんだよね？」
娘を生き返らせた、と思うほどに。

「もしフェイトがアリシアの双子の姉妹だとして、戸籍さえ作っていないなんて、ありえるか？」

「……………」

クロノも、その辺で行き止まりになってしまっているようだ。

「拾い子か？ でも、」

以前、フェイトの身体検査を行った。その結果は……

「プレシアとフェイトには、明確な遺伝子の繋がりがある」

DNA鑑定の結果、フェイトは、プレシアの実の娘であることが判明した。

アリシアと、フェイト。二人の関係は、一体……

ビーツ

と、休憩室のブザーが鳴る。

『訓練室の準備、整いました』

エイミイとは別のオペレーターが、スピーカー越しに言う。

今は、決戦に向けて弱点の改善だ。

インターバルを終え、再び訓練室に戻る。

俺達のほかに、武装隊の何人かが訓練を行っていた。

決戦を控えているから、本格的な模擬戦は行わず、魔法の制御を行うのみ。

特に、俺の燃費の悪さは露呈したわけだし、対策を講じなければ、プレシアに辿り着く前にリタイアしてしまう。

そこで、使える魔法の多彩さでは俺達の遙か上に行くクロノに、いくつか教えてもらっている次第だった。

『Blaze Saber』

ブレイズセイバー。そう発音したS2Uの先端に、銃剣のような小ぶりの魔力刃が出現する。フェイトのより大分短い、その分軍用

ナイフのように厚みがある。

ゴトン

目の前に、ドアのような平べったい鉄塊が出現する。訓練用の仮想物質だ。

クロノは、ブレイズセイバーをひょいと持ち上げ……

斬！

鉄塊を、真つ二つに切り裂いた。

なるほど。威力もそれなりか。

「このように刃の形で固定してしまえば、魔力消費を抑えることができる。キミの使った掌打と同じだな」

あれの応用か。

「んー……」

魔力刃を使ったこともあるんだけど、手刀サイズが精々だ。『刃』なのだから、ある程度はリーチが長いほうが有利なのは分かっているのだが……

「よ……っと」

ヴ、ヴヴ……！！

あ、ダメだ。境界が曖昧に揺らいでいる。

このまま魔力を注いでも、すぐに破裂してしまう。

「刃じゃなく、『容器』と、『中身』をイメージしてみる」

クロノのアドバイスどおり、魔力で、刃の形をした『容器』を作るのだが……

「あー……」

やっぱり、ユラユラと曖昧な形にしかならない。

「僕に一度、手刀を突きつけたことがあっただろう。あのイメージでやってみるといい」

ああ……アレか。

手刀を構え……腕そのものを、『容器』として。

ウンッ……！！

「出来た！」

二の腕を包み込むような形で、刃の外殻が形成された。
「ふむ……」

クロノは、S2Uでコンコン、とその外殻を叩く。

「まだ構成が甘いな。これでは鈍器だ」
なら、より鋭く、より頑丈に。

うんうん唸ること、一時間弱。

ギンッ

ようやく、『刃』と呼べるだけの鋭さと、長さを持たせることが出来た。刃の全長は、1.5メートル程だろうか。腕の部分を除くと、約1メートルの片刃の形だ。

「ああ、そんなものだろう。後は簡単だ。魔力を流してみる」

言ったとおり、そこから先はスムーズだった。魔力刃が空色に染まり、僅かながら質量を帯びる。とはいえ、重量は殆ど感じない。これ、本当に切れるのか？

ゴトンッ

目の前に、クロノが切ったのと同じサイズの鉄塊が現れる。

「切ってみる」

よし。やってみるか。

腕を振り上げ……

「せいっ！」

斜めに振り抜いた。が。

スカッ

「ん？」

全く手応えが無かった。もしかして、空振った？ こんな近距離で？

「合格だ」

だが、クロノが顎で示す先。鉄塊が、滑らかな切断面を覗かせていた。

「おおお！ やった！」

腕には、まだ魔力刃が残っている。魔力も、殆ど消費していない。でも……

「これじゃ、傀儡兵には効果薄そうだな……」

刃はこれ以上伸ばせない。人間サイズの相手には有効な武器になるだろうが……傀儡兵を切り裂くには、リーチが足りなさ過ぎる。至近距離まで近づけば効かなくも無いが……

「あくまでこれは、牽制程度に考えておけばいい」

だからこそクロノは、先の戦闘では使わなかったのか。

もっと長く、遠くまで伸ばすことが出来れば……

「……よし」

こうすれば……どうだ？

「おい、何を……」

鉄塊から、十メートルほど間合いを取る。

腕を振り上げ……

「せー、」

斬撃の瞬間に、『容器』の中の魔力を、刃に沿って、細く、鋭く

……

「のっ！！」

衝撃波として、射出！

「！？ 馬鹿やめろ！」

クロノの静止は、遅すぎた。ぴしゅんっ、と小気味のいい音を立て発射された衝撃波は、

ズギヤギヤギヤギヤギヤギヤギヤ………

「あ」「あ」

地面を切り裂きながら奔り、

ドカーン!!

「ッギャアアアアア!!」「」

訓練中の武装局員を木の葉のように空中に吹き飛ばし、

ドゴオオオオン!!

訓練室の壁に、くつきりと跡を刻み込んだ。

「……………」

衝撃…………いや、斬撃波の通った跡。頑丈であるはずの床がザツク
りと抉れ、ぷすぷすと焦げている。

「……………」

沈黙が、痛い…………

「……………」何か、言うことはあるか?」

射抜くような目で俺を睨むクロノ。

「……………」いやあ

「ぐおおお……………」「い、痛てえ……………」!」「い、医者……………」!」

そして、戦闘不能レベルのダメージを負い、倒れ伏す局員達。

何だこの地獄絵図。

やったのは誰だ……………って、俺か。

額に青筋を浮かべるクロノに、俺は…………

「……………」どんまい!!」

殴られた。

「おおお……マジで殴りやがって」

まだ奥歯がガタガタしてる気がする。

「魔力刃を教えていたのに、なぜ飛び道具を開発するんだキミは！」

「いや……なんとなく、できるかなあって気がして、つい……」

「『つい』で貴重な戦力三人を病院送りにしてどうする!？」

「スマンツ！俺が四人分働くから!！」

平身低頭。

「……全く。キミの発想には驚かされるよ」

魔力刃としては失敗もいいとこだが、単純な飛び道具としてなら……かなり有効なんじゃないか？威力はディバインバスターには多少劣るが、貫通性能と命中精度は段違いだ。俺の、致命的ノーコンが解消される。

内部にあるだけの魔力しか消費しないから、ロスも少ないし……

何より、再び魔力を充填すれば、引き続き魔力刃として利用できる。

「まあ……傀儡兵相手なら、有効な技かもしれないな……」

少数相手なら魔力刃で。数が増えたら斬撃波で。

「だろ？」

少し得意げに、胸を張ってみた。

「調子に乗るなツ!！」

今度はS2Uでドツかれた。痛てえ……

訓練を終えシャワーを浴び、フェイトとアルフのいる部屋に向かう。

「んじゃ、またなー」

「ああ」

おざなりな挨拶を交わし、クロノと分かれる。

なんかいいね。学生っぽくて。

まともに中学高校に通ってたら、こんな感じの毎日が送れたのだからか。

「よーっす」

扉を開ける。

「ああ、秀人。お疲れ様」

ユーノは、アルフの横に座って治癒魔法を掛けていた。その手には、レイジングハート。

魔法の処理能力を上げるため、なのはが置いていったのだ。

『またやらかしましたね？』

「……すまん」

どうやら、バレバレのようだった。

「調子はどうだ？」

緑色の光を気持ちよさそうに浴びていたアルフは、ぱちっと目を開けた。

「あたしは……まあ、何とか」

「そうか。よかった」

アルフの腹の傷は、適切な縫合とユーノの治癒魔法のおかげで、大分塞がってきている。安静にしていれば、もう数日しないうちに完治するらしい。オオカミの生命力、たいしたものだ。

「ちよとフェイトの様子見てくるよ」

挨拶をして、奥の区画へ。俗に、営倉と呼ばれる懲罰房があり、その一室に、フェイトは寝かせられていた。

「フェイト、気分はどうだ？」

そして、隣のベッド……手枷をされたフェイトが、不満げに上目遣いで俺を見上げる。

「いいわけないだろ。こんなもんつけられて……」

「だよなあ……」

営倉とはいっても、ベッドもトイレも水道もあり……場末のビジネスホテル程度にはなっている。何より、フェイトは別に囚人ではない。また暴れだすことが無いよう、ここに隔離されているだけだ。

ベッドサイドに置いてあった、リンゴっぽい果物を手に取る。丸かじりにするには皮が硬く、フェイトの小さな口では食べるのに難儀しそうだった。

しゅびんっ

「剥けたぞ」

精神状態が不安定なフェイトに、刃物は厳禁。というわけで、指先に魔力刃をちよつとだけ展開し、果物の皮を剥いた。皿に並べ、フェイトに差し出す。しよりしよりと果物を齧りながら、ぽつりと一言。

「……………そんな使い方する奴、初めて見た」

確かに、『魔法』というにはアットホーム過ぎる使い方。

「力つてのは、使いようだからな。生かすも殺すも、使う奴の気持ち一つだ」

俺達の魔法は、人間くらい簡単に殺せてしまう。なのはの砲撃しかり、俺の拳しかり、ユーノの治癒魔法だって、使い方を変えれば、人間を内部から破壊できてしまう。

でも、俺達はこの力を、誰かを守るために使うことが出来る。

力そのものは、悪ではない。誰が、どのように、どのような目的で使うかが大事なんだ。

「気持ち、一つ……………？ でも、ボクは……………」

確かにフェイトは、酷いことをした。子猫を半殺しにし、民間人を襲い、傷つけた。

「大丈夫だよ」

その、少し傷んだ金髪を撫でる。

「フェイトの力を、正しく使える時がきつと来る」

「それは、いつ？」

無垢な表情で訊ねるフェイト。

「さあな。それは、フェイトにしかわからない」

こればかりは、本人が気付かないことには意味が無い。誰かに言われるままでは、これまでと変わらない。

「……よくわかんない」

眉を八の字にし、首をかしげた。

「いずれわかるよ。それまで、じっくり考えておけ」

「……わかった」

えらく素直になったもんだ。

「いい子だ」

ぐりぐりと頭を強めに撫でる。フェイトは嫌がるでもなく、されるがまま。

野生動物の餌付けに成功した気分だ。

本当は、アリシアについて何か聞けたら……と思っていたが、それはもういいな。

「ボクのおかーさんはね」

と、思っていたら、フェイトから話し始めた。

「昔は、すごく優しくかったんだ」

それは、報告書にも書いてあった。いかれる前のプレシアは、いっそ親馬鹿と言っても過言ではない程に、娘を溺愛していた。

「何度も何度も、優しい声で言うんだ。」

『アリシア』……って」

息を呑んだ。フェイトは、気付いている……？

「『フェイト』っていう名前は……一度も、呼んでくれたことが無かったんだよ」

それは、フェイトの自意識と、記憶の齟齬。フェイトにとって、プレシアは優しい母親。でも……その逆は？

「ボクは、おかーさんにとって何だったのかなあ？」

半ば自分に問いかけるように、そう言う。

「もしかしたら、ボクは……」

本当の子供じゃ、ないのかもしれない

そう言いたかったのだろう。でも、口にしたら本当のことになってしまふような気がして、言えない。

「プレシアにとって、フェイトが何なのかは……正直、俺にもわからない」

言葉を慎重に選び、フェイトに言い含める。

「でも、俺に……俺達にとって、おまえは『フェイト』だよ」
ぴくりと、フェイトがわずかに身じろぎする。

「なのはのライバルで、アルフの困った主人」

俺にとってのフェイトは……正直、はっきり言葉に出来ない。なんとというか……娘なつはの喧嘩友達みたいな、そんな感じ。

「だから、そんなに気にするなよ」

「……………うん」

あー……俺って、口下手だなあ。もっと上手く伝えることもできるかもしれないのに。

フェイトは、くるっと俺に向き直り……

「ありがとう……………ひでと」

「え……………」

ハッキリと……俺の名前を、呼んだ。

「……………ちょっと疲れた。寝るね」

ぼすつと枕に顔を埋め、表情が何えなくなってしまう。
ただ、僅かに見える頬と耳は……真っ赤に染まっていた。

「ああ。またな、フェイト」

きっと明日、全ての謎が明かされるだろう。

もしそれが残酷な真実だったとしても。俺は、全てを受け入れてやるう。

フェイトはもう、俺の身内なんだから。

決意を新たに、俺は独房を出て行った。

第二十三話（後書き）

次回はなのは編です。
早めに出ます。

第二十四話（前書き）

なのは編です。

ちよっとはじけてるかもしれない。

第二十四話

「おはよう、ございます……」

消え入るように小さな声でそう言い、およそ十日ぶりに、教室のドアを開けた。

時刻は八時十五分。ホームルームが始まるまで、まだ少しある。だからなのか、教室のいたる所で、いくつかのグループが談笑していた。

「……………」
からから、というドアの動く音に気付き、一斉に私に視線が集まる。

十日ぶりとはいえ、元々クラスに親しい人はいない。誰も、何も感じないはずだが……

「あー、高町さんだ。久しぶりに見た」

「あ、ホントだ、久しぶりー」

「どこ行ってたのー？」

話のネタに飢えているらしい女子のグループに、取り囲まれてしまった。

「あ、あの……？」

完全に及び腰になって、包囲の輪から抜け出そうとするのだが……
じりじりと追い詰められて……

とんっ

壁に背中がぶつかった。

「ね、どこ行ってたの？」

「何してたのー？」

「う、うっうっ……」

早くも帰りたいよお……

「はいはい、ストップ」

と、そこに、パンパンと手を打ちながら一人の女子がやってきた。

「あ、望」

「おっはよー」

……八代さんだ。

「もう、高町さん困ってるじゃん。ほら、散った散った！」

わざとふざけて、そのグループを追い散らした。グループの女子達は、きゃーきゃーと楽しそうに逃げ、また別の場所で雑談を始める。

「……」

八代さんの横顔からは、いまいち表情が読み取れない。

「……、……あり、がとう」

「ん」

短いやり取りだけをして、互いの席に戻る。まあ……こんなもの、だよ。クラスメイトの距離感は。

「ねえ、なのはさん？」

昼休み。私は廊下で、先生に呼び止められた。

「なに？」

「昨日、『高町さんはいつ登校しますか？』って電話があったんだけど……心当たり、ある？」

私に？

「ううん、全く」

私に用がある人なら、携帯電話に掛けてくるだろうし。

「そう……何かあったら、相談してね？」

結構、先生も変わった。頭ごなしに怒ることも少なくなっただけで、段々と、頼りがいのある教師に……

「富山さん？」

びくうっ！？ と、富山先生が跳ねた。後ろを振り返り、あから

さまに狼狽する。

「ははは、長谷川先生？ なな何でしょうか？ 申し送り事項も、不備は無かったと思うんですけど……？」

「職員室前の掲示板への記入がまだでしたよ」

「あ……」

その掲示板には、各部活動への連絡など……結構、重要な連絡事項を書くことになっている。

先生、大ポカだよ……

「ふう……朝に頼んでおいたのですが……仕方ない。書き方のイロハから教えてあげます。来なさい」

「あの、できますから！ ひとりでちゃんとできますからああああ手を引つ張らないで下さいいいいい！？ ごめんなさい長谷川先生！？」

フェードアウトしていった。

「先生……頑張れ」

訂正。まだまだ、道は遠そうだ。

学校は終わったけど……どうしようかなあ。『報告して来い』って秀人さんに言われたけど……母さん達は翠屋だし。仕事中心に行っても、話をする暇なんて無いだろうし。

うん、今日はもう帰ろう。

報告はメールでいいや。

冷蔵庫の中身は……確か、豚肉とじゃがいもがあったと思う。肉じやがにしようか。それとも、カレーにしようかと、夕食のことをあれこれ考えていたら……

すっ……

恐ろしく静かなエンジン音を立てて……何やら見覚えのある、黒

い車が止まった。そして扉を開け出てきたのは、やはり見覚えのあるメイド。

ああ……猛烈に、面倒事の前感がする……

「高町様、お迎えに上がりました」

ほらやっぱり！

「頼んでません！」

逃げるー！！

反転し細道に入って……

反則かもしれないけど、飛行魔法をちょっとだけ使って、塀を足場にジャンプ！

瓦屋根を、コンクリート屋根を、モルタル屋根を、飛び越え、乗り越え……着地！

（見えた！）

アパート！ あとは、一直線に……！

「あらあら、足がお早いんですね」

いきなり目の前に、メイドが現れた。

「ひっ！！」

ずざざざ……と、急ブレーキ。ど……どうやって追いついた！？ 車が入ってこれないような細道を、魔法まで使って飛び越えて来たのに！

「ふふふ……わたくし、高町様の健脚ぶりに驚いてしまいますわ。素晴らしい跳躍でした」

見られていた？ つまり……このメイドは、魔法も何も使わず、私の後ろに余裕でついて来ていた……？

「高町様」

すっ……っと、黒塗りの車が、私の目の前に止まった。

数分前の再現ビデオを見るように、メイドは、全く同じ角度でお辞儀をし……

「お迎えに、上がりました」

その目は言外に……明確に、語っていた。

逃がしませんよ？

と。

「……………はい」

私はガツクリとうな垂れ……車に、乗った。
出荷されていく羊の気分が、少しだけ分かった気がした。

「お飲み物はいかがですか？」

車内というか……下手をすれば、そこいらのホテルの一室のような空間で、メイドの接待を受ける。

「いえ……結構です」

緊張し過ぎて、喉を通りそうに無い。

「……………何で、今更」

「はい？」

私の呟きに、メイドが頷く。

「今更、何の話ですか」

月村さんか、バニングスさんか……どちらにせよ、最悪の別れ方をした相手だ。酷い誤解をされて、それを解くことが出来なかった。今でも、彼女達にとって私は、大事にしていた子猫を傷つけた、憎い相手の筈なのに。

「それは、お嬢様から直接お聞き下さい」

そして、車に揺られる？こと（恐ろしいことに、全く振動が無か

った)二十分。

「お待たせいたしました」

私は……月村さんの屋敷に到着した。

「ご案内いたします」といったメイドが早々に歩き出してしまったので、後を追う。

はあ……相変わらず、大きい家だ。

その長い廊下を歩ききり、扉の前へ。メイドがドアをノックする。

「お嬢様、お連れいたしました」

……覚悟を決めよう。どうせ、こちらの心証はマイナスゲージを振り切ってるんだ。今更、何を恐れるものがある。

私は、部屋に足を踏み入れた。すると。

「にゃー……」

「え？」

歓待の声は、足元から上がった。見ると、縞模様の入った灰色の猫が、私の足に擦り寄ってきていた。首には、小さな鈴が着いた赤い首輪。

「……もしかして、」

あの時の？

「そうだよ」

「……ッ!?」

いきなり背後から声を掛けられ、飛び上がってしまった。

「悪趣味だね……覗き見？」

「うん」

開けられたドアの後ろに隠れていたらしい。悪びれもせず、肯定する。そして。

「……」

「バニングス、さん」

腕を組み、むっつりと私を見る、バニングスさんもいた。

「……………」

「……………」

無言で、見つめ合う。

「……………」

なぜか、月村さんがほんわかと私達を眺めている。

「……………」

「……………」

「……………」

そして。

「「「だああああああ！！」」

いい加減、我慢の限界！

「何！？ 何なの！？ 言いたい事があるならさっさと言いなよ！」

無言でプレッシャー掛けるような真似して何のつもり！？

「あんたこそ何なのよ！ あの日のこと怒ってるなら、ちゃんと抗議しなさいよ！」

「はあ！？ 今更気にしてないことを、何で抗議しないとイケないのよ！」

「気にしなさいよ！ あ、あたし、あの後、すっごく謝りたかったのに！」

「知らないよそっこの事情なんて！ 気にしてないっいたら気にしてないの！」

「気にしなさい！」

「死んでもイヤ！」

「「むぐぐぐぐぐ……！！」」

額をぶつけ合い、至近距離から睨み合い。

あれ？

ふと我に返り、力を抜く。

「のわあっ！？」

バランスを崩したバニングスさんが床に倒れそうになり、それを月村さんが抱きとめた。

「……謝りたかった？」

何で？

「あの後、いろいろ考えたんだけど……」

月村さんが、バニングスさんを支えながら話を接ぐ。

「にゃ〜」

と、またしても子猫が私に擦り寄ってきた。

「高町さんは、やってないんでしょ？」

その様子にくすつと笑いながら、核心を突いてきた。

「……………うん」

やったのは、初めて会った時のフェイトだ。

「一昨日、アリサちゃんはどうしても謝りたいって言って、高町さんのお家まで行ったんだけど……いなくて」

一昨日……私とフェイトが勝負をした日。高町の家には母さんしかいなかった筈だ。

そもそも、私はあそこには住んでいない。

「学校に問い合わせたら、今日登校するって聞いて」「待ち伏せていた……ってことか。」

「……そういつことよ」

バツが悪そうに、バニングスさんが言う。

「あ……!!」

がりがりとして頭を掻く。何やら懊悩しているようだ。

そして、顔を上げ……

「高町!」

「は、はい!?!」

ずかずかと目の前まで歩いてきて、

「ひどいこと言って、ごめんなさい!」

がばつと、頭を深く下げた。

「……………」

そのまま、動かなくなる。

これは、私が「許す」と言うまで、動かないだろうなあ……
「いいよ。許す」

元より、あまり怒っていない。今冷静になって考えてみれば、あんな状況では、私は疑われて当然だ。親友である月村さんが大事にしている子猫を傷つけられ、怒るのも無理は無い。

「……………いいの?」

バニングスさんの表情は、まだ不安げだ。本当に許してもらえたのかどうか、図りかねているらしい。

「だから、いいよ」

「でも……………」

はあ……なかなか、難儀な性格をしている。サクッと納得してもらうには……あ、そうだ。思いついた。お互いに納得できる、解決方法。

「バニングスさん。歯を食いしばって」

「……………！ わ……………わかったわ」

そして、ぎゅっと目を瞑る。スカートをぎゅっと掴んで、これから来るであろう衝撃に耐えようとしている。

「行くよ」

左腕を振り上げ……………

びしいッ！！

でこピン。

「いったあ！」

額を押さえ、うづくまるバニングスさん。

「これで許してあげる」

……………さすがに、殴るのはやりすぎだからね。

「ふふ……………よかったね、アリサちゃん」

月村さんはどうやら、私がバニングスさんを殴る気なんて無いことに、最初から気付いていたようだ。

「くああ……………！ 効いたあ……………！！！」

バニングスさんが涙目になって、一部分だけ赤くなった額を擦る。「くすつ……………」

何となく面白くて、月村さんと顔を見合わせて笑い……………恥ずかしくなって顔をそらした。

あの日と同じ席に座り、紅茶を飲む。

「何だったら、本人連れてきて謝らせるけど？」

そのぐらいは、何とかしよう。

「え……………知り合いなの？」

「うん。色々複雑な事情があって、追い詰められちゃったみたい」
もちろん、それで全てが許されるわけではないだろうけど……………せめて、多少は印象を良くしてあげよう。

「その子、今は大分落ち着いてきてるし……………多分、素直に謝るから。」

そうしたら、許してあげてくれないかな？」

……まさか、私がフェイトを擁護することになるなんて、思いもしなかった。何となく、放っておけないんだよねえ……

「ねえ……それ、どんな子？」

バニングスさんが聞いてきた。どんな……？ ええと。一言で言えば……そう。

「可愛い子だよ」

見た目もどことなく小動物っぽいし……本性なんて、人に慣れない野生動物そのものだ。

見ていて飽きないし、つい弄くり回したくなる。

猫……ではない。フェイトは、一人でいることを嫌う。だからといって、犬というわけでもないし……あ、そうか。

狐だ。

猫っぽい犬。ピッタリだ。

「……」

二人は、目をまん丸にして私を見ている。

「？　どうかした？」

「アンタ……その子と、どういう関係なわけ？」

ああ……そういえば。忙しくて『お願い』を聞いてもらつたの、忘れてた。

「友達……候補、かな？」

そうとしか言いようが無いんだよね。

「候補って何よ……」

どこかゲンナリとした様子。

「え？　だから……『友達になるっ』って言ったけど、まだ返事が貰えずにズルズル一緒にいる……みたいなの」

「そういうの、世間では『友達』っていうんだけど？」
「そうなの？ でも、向こうからお返事貰ってないし……」
「向こうの気持ちも考えないで、友達面するのは、ちょっと……」
「少なくとも、私は……」
「私は？」
「私、は……」
カップを手元でいじり、尻すぼみになっていった。
何かを言おうとしているらしいのだけれど、まだ踏ん切りがつかないらしい。

ポーン、ポーン……

壁掛け時計が、午後五時を指し、鐘を鳴らす。

「ごめんね。そろそろ時間だから行くね」

席を立つ。タイムアウトだ。

明日に備えるためにも、これ以上ここに居座ることは出来ない。

「紅茶、美味しかったよ。ありがとう」

今日は、気持ちよくお別れすることができそうだ。

「待って！」

と、バニングスさんに呼び止められた。

「？」

月村さんは、なにやらニコニコと……いや、これはこの人のデフォルトの表情か。

バニングスさんは、椅子の下から包みを取り出し……

「んー！」

ぼすつと胸に押し付けられる。

「……開けていい？」

こくん、と肯定の頷き。ペリペリと包装を丁寧に剥がして……あ。

「これ……私の上着」

バニングスさんに破られた、上着。完璧に修繕されているどころ

か、ところどころグレードアップしている。

「……あたしが直したわけじゃ、ないけどさ」

顔を真っ赤にしてそんなことを言うバニングスさん。少し誤解していたけど……本当は、結構いい人だったんだね。

「ありがとう。バニングスさん」

そして、もじもじとして……

「アリサ、でいいわよ。友達は、みんなそう呼ぶから……」

「……え？ え？」

今、何て……？ 聞き間違い？

「私は……なのはのこと、友達だって……そう、思ってるから……！ だから、私のことは『アリサ』って呼びなさい！」

聞き間違いではなかったみたい。バニングスさんは、もうヤカンのように真っ赤だ。

「……」

でも、多分私も、同じような顔をしているに違いない。

月村さんに、すっと手を取られる。

「わたしも、『すずか』って呼んで欲しいな。なのはちゃん」

私の返事は……もう、決まっている。

「ありがとう……アリサ。すずか」

これからも、よろしく。

二人に見送られ、屋敷を出る。あの日曇天だった空は、今日は綺

麗な夕焼け。

茜色に染まる道を、スキップしそつなくらい元気良く駆け抜ける。

「はっ、はっ……あははっ」

嬉しくて、もどかしくて、つい笑いがこみ上げてきてしまう。道行くおじさんやおばさんが、怪訝そつな顔で振り返る。でも、全然気にならない。

だって、本当に嬉しいんだから！

「あーはっはっは！ いやっほー！！」

高町なのは。九歳の梅雨。

友達が、出来ました！

第二十四話（後書き）

本当は、結構悩んだんですよ。

フェイトと友達になる前に、アリサ達と友達になるかどうか。

なんというか、フェイトを後回しにして浮かれているような気がして。

ハルハルの能力不足で、このタイミング以外ではアリサ達を絡めることが出来なかった、、、というのもあります。

ご容赦下さい。

ご意見、ご感想お待ちしております。

第二十五話（前書き）

劇場版第二作、楽しみです。

第二十五話

ピピピ、ピピ。

目覚ましの音を、鳴り始めると同時に止める。

「なのは。朝だぞ」

布団をめくり、コアラのように真正面から俺にしがみ付いているのはを揺り動かす。この寝相、いずれはちゃんと矯正しないとなあ……

「……………うーん」

もそもそと動き……………半開きの眼で、目を覚ました。

「もっ、あさ……………？」

「そ。朝だ」

「……………そっかあ、それじゃあ、デッキブラシで洗わないとね……………」

駄目だこりゃ。完全に寝ぼけてる。

「なーのーは！ 起きーろー！」

頭を掴み、ぐわんぐわんと前後に揺さぶる。

「あうあうあう……………！ お、起きた！ 起きたよー！？」
よし。

「今日は大事な日なんだから？ 早く起きて仕度しなきゃ、リンディさんに怒られてクロノに皮肉言われるぞ」

「それは嫌ッ！」

「がばつと起き上がる。やっぱ、あの二人の名前は効果的だな。」

「朝飯どうする？ 俺が替わろうか？」

「ううん、大丈夫」

そして、寝巻きのまま台所に歩いていった。

心なしか、うきうきと踊っているようにも見える。

「おはよう秀人。……………よいしょつと」

出窓に置いてあるバスケットから、ユーノが危なげなく飛び降りる。そして、変身魔法を解除し、人間体に戻った。

朝食を頬張りながら、神妙な顔になる俺達。

「いよいよ、今日だな」もりもり

「……………そう、だね」ぼりぼり

「ほんと、早かったね」もぐもぐ

今日は、プレシアの拠点へ総攻撃を仕掛ける日。

昨日は全員、しっかりと身体を休め……………魔力と体力を満タンまで回復させた。

いつ戦闘になっても困らない。士気は高く、負ける気はしない。

「なのは、嬉しいのはわかるけど、しっかり切り替えるよ？」もりもり

昨日、にこにここととても嬉しそうな顔で帰宅してきたなのは、

『友達が出来た！』と、とても嬉しそうだった。携帯電話のメールで、桃子達にまで報せていたのだから、本当に嬉しかったのだろう。だからといって、今日の行動に支障をきたすようでは困る。

「うん。それは大丈夫」ぼりぼり

なのはは、しゃきつとした態度で答える。

「秀人、心配しすぎだよ。なのははその辺、ちゃんとしてるって」もぐもぐ

「そうだよな。悪い」もりもり

そう。いよいよ、今日だ。

「お、今日の鮭、濃い目の味付けだな」

塩辛くは無いが、いつもの味付けと違う。

「いっぱい動かさるうから、少し多めに調味料使ってみただ」
なるほど。確かに。

「そう？ 十分に美味しいけど」
ユーノはマイペースに箸を動かす。

「……」

「……今日、だよな？」

朝食を終え……俺達は、アースラのブリッジに集合していた。

「皆さん」

リンディさんは普段の柔らかな態度を封印し、厳格な『艦長』として、俺達の前に立つ。

出撃を控えた武装隊も、モニターで見ているだろう。

「いよいよ、この時が来ました」

偶然にしては出来過ぎていた、あの出会い。

俺達がユーノと出会い、ジュエルシードを始めて封印した夜。あの夜から、全ては始まった。

なのはとユーノ、レイジングハート。一人つきりだった生活に、三人の家族が加った。

負けられない相手……フェイトとの出会い。

幾度も衝突し、何度も負けた。

『友達になりたい』という願いを込めた、全力の勝負。その末に、

遂に勝利をもぎ取った。

フェイトにもまた、負けられない理由があった。それは、母のため。

そして、今。その全ての因縁に、決着が付こうとしている。

「プレシア・テストロッサの拠点へ、総攻撃を仕掛けます」

ざわ……と、アースラ全体が、にわかにさざめき立つ。

「まず、アースラ所属の武装局員が先行。進入経路を確保し、敵拠点の構造を把握します。その後、少数精鋭の突入部隊が最深部へ乗り込み、プレシア・テストロッサを確保。以上です」

本当に、至ってシンプルな作戦だ。それだけに、達成は難しいだろう。

武装隊が相手にするのは恐らく……あの時以上の数の、傀儡兵。プレシアの本丸を守る、強力な個体が出現するかもしれない。

さすがに、出てくると分かってさえいれば、以前のように自暴自棄の特攻をするような馬鹿は出ないだろう。

そして、俺達がプレシアを押さえることができれば、傀儡兵は機能を停止するはずだ。

「突入部隊は、四人」

問題は、その突入部隊だが……メンバーは、既に決まりきっている。

「クロノ・ハラオウン」

まずは、クロノ。執務官としての実力・経験共に、前線指揮官を担うに相応しい。目の前の敵を倒すことしかできない俺に、的確な指示を出してくれることを期待する。

「ユーノ・スクライア」

次に、ユーノ。攻撃こそ苦手だが、転送・捕縛・回復・強化など、現地での貴重なバックアップ要員。後援があると分かっていたら、俺も、他の局員も、安心して力を出し切れる。

「高町なのは」

そして、なのは。言うまでも無く、戦力の要。実戦で磨き上げた力は、恐らくは俺を上回る。その自慢の砲撃は、有象無象を寄せ付けない。露払いからトドメまで、オールラウンドで活躍するだろう。

「吾妻秀人」

最後は、俺。ジュエルシード事件の当事者として、また、ユーノの協力者として、最後まで関わり、見届ける義務がある。

「以上の四名を、最深部への突入部隊として編成します。質問があれば、今のうちに」

たった四人での突入。だが、負ける気は欠片も感じない。

「無いようですね。では……………」

全員をぐるりと見渡し……………」

「状況、開始！」

「……………了解！！」
「……………」

前線メンバー、ブリッジ、整備班……………その全てが声を揃え、声を張り上げた。

フェイトは、アースラの廊下を走っていた。懸命に足を動かし、その場所を目指す。

一応、精神状態は安定したと見なされ、アースラ内部であれば、自由に動き回ることを許可されていた。

とはいえ、片腕には未だ無骨な腕輪が装着されており、バランスを取るのが難しそうではあるのだが。

行き着いた先は、アルフの病室。独房を出られたら、真っ先にここに来ると決めていた。

ドアを開ける。

「おや、君は……」

アルフに治療を施していた医務官の男性は、フェイトの姿を見て、軽く驚いたようだった。

「おじさん、アルフの具合は？」

「おじさんって……私はまだ、二十代なのだが……」

少し凹んだような様子で、咳払いを一つ。

「ああ、正直驚いているよ。スクライア君の治療魔法という要因はあるのだろうけど……数日どころか、もう動いても問題無いレベルにまで回復している」

さすがは、生命力の強いオオカミをベースにしているだけのことはある。

「アルフ……アルフってば」

フェイトが声を掛けると、アルフは目を覚ました。

「……フェイト!？」

がばつと跳ね起きる。確かに、もう動いても問題は無いようだ。

「お願いアルフ。ブリッジってところまで着いてきて」

その切羽詰った様子に何かを感じ、アルフはベッドから起き上がる。

「オッサン、行っていいかい？」

少なからず世話になった相手だからか、一応許可を求めるアルフ。
「だから私は二十代だと……………ああ、構わんよ」
諦めたように、退院許可を出した。

ブリッジへのドアを開ける。

「え…………？ フェイト！？ アルフ！？」

突入に備え、ブリッジで待機していた秀人たち突入班が、目を剥いて驚いた。

それを無視し…………いや、最初から気付いていなかったのだろう。

リンディの目の前までやってくる。

「リンディ、あの…………」

恐らく、これがプレシアと話をするチャンスだと考えているのだろう。言葉を選んで、考えあぐねて…………出てきたのは、簡単な一言。

「ここにいさせて」

意を決して、リンディにそう頼み込んだ。

本来なら、却下されて当然のことだ。局員でも、協力者でもないどころか、元・容疑者の一味なのだから。牢に閉じ込められないだけでも、異例の温情措置なのだ。

だが、リンディは予想に反し、来ることが分かっていたようで…………
「特別よ？」

と、同席を許可した。

「……………フェイト・テストロッサ」

クロノが口を開く。やはり、拒否するのだろうか。だが、クロノが口にしたのは、俺の予想とは違っていた。

「ここにいたいというのなら、条件がある」

リンディは、クロノに任せるようだ。

「……………なに？」

フェイトは、どこか不安げに、その『条件』を尋ねる。
それは……

「最後まで、逃げる事無く……見届けるんだ」
真実と向き合え……そう、言いたいらしかった。きっと、何か真実の一端を掴んでいるのだろう。フェイトを見る目が、少しだけ弱弱い。

フェイトは。

「……………うん、頑張る」
その条件を飲んだ。

モニターの中では、今まさに、先行部隊が敵拠点へ足を踏み入れるところだった。

先行部隊の面々は、敵の拠点……その『庭』に該当する位置に転移した。

目の前には、巨大で、禍々しい気配を漂わせる城砦。あそこが、プレシアの居城。

「行くぞ！」

既に、プレシアは感づいているだろう。故に、傀儡兵が出現するより一刻でも早く、城砦へ乗り込む必要があった。

「……………妙だな」

だが、予想に反し城砦は、異常なまでに手薄……いや、無防備だった。巨大な鉄扉は施錠すらされておらず、手で簡単に開いた。絨毯敷きの廊下には畏も無く、妨害される事無く通過することが出来、一直線だった。突き当たった先の扉もまた、一人で簡単に開いてしまった。

そして、極めつけに。最深部どころか、最も手前の広間。その玉座に……

「プレシア・テストロッサ！」

プレシアが、悠然と腰を下ろしていた。

「あいつが……」

全ての元凶にして、フェイトの母親。プレシア・テストロッサ。もっと凶悪な面構えをしてるのかと思ったが……思っていたより、普通だ。

疲れ、やつれたようにこけた頬。紫色の口紅。どこぞのシャーマンがするような、幾何学的な模様を顔に描いている。化粧の毒々しさを除けば、妙齡の美女といった外見だ。

「おかーさん……！」

フェイトが、モニターに映る映像だと分かっていながら、一步前に踏み出した。

映像とはいえ、双方向通信によって、向こうとの会話は可能だ。プレシアと話がしたいという、フェイトの心境も分かる。だが、なのはが、その手を掴んで止める。

「ダメだよ」

これ以上、フェイトを傷つけさせない。そんな強い意志を感じさせる行動だった。

「でも、」

「フェイト」

「……………わかった」

それも、なのはに静かに見つめられ、引き下がる。

もっ少し……静観することによろ。

「そこを動くな！」

局員達は円状に展開。玉座を取り囲むようにして、デバイスを構える。

「プレシア・テストロツサ。時空法違反・公務執行妨害の容疑で、あなたを逮捕します！」

対して、プレシアは。

「……………愚かしいわね」

ただ、ぼそりと、そう呟いただけ。局員達によってデバイスを突きつけられていることに、全く動揺していない。ただ気だるげに、頬杖を突いている。

だが、局員達が『そこ』に足を踏み入れた途端、態度が豹変した。

「何だ、これは!?!」

「……………ツツ!?!」

局員達は『ソレ』を目にし、息を呑み……………手を触れようとした、その時。

「アリシアに触るなアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!?!」

ズガアアアアン!!

轟く大音声。目を焼く閃光。

「なっ……………!?!」

驚き、振り返った局員が見たのは……………黒焦げになり倒れ付す仲間達。

油断などしていなかった。いつ動いても、即座に鎮圧できるはずだ

った。

それは、わずか一瞬で崩れ去る。

そして。

「私の娘にいい……！ 触るなあアア！！」

悪鬼の表情で迫る、プレシアだった。

「ヒッ……！！」

デバイスを構えようとする局員の顔面を鷲掴みにし……異常な腕力で、そのまま宙に掴み上げた。

ギリギリギリ……！！

そのまま、冗談のような膂力で頭蓋骨を締め上げる。

「あ……がアッ……！！」

痛みに呻き、プレシアの手を振りほどこうとした拍子に、デバイスを取り落としてしまう。

仲間達は、距離が近すぎて攻撃魔法を撃つことができない。タダでさえ、狭い場所で魔法を撃つ危険は高い上、仲間がプレシアと密着しているのだ。巻き添えにしてしまう可能性も、十二分にあった。

バチイイインッ！！

「ぎゃっ……！！」

掴まれていた局員は、ゼロ距離から電撃を食らわされ一発で失神。「ああっ……！！」

ゴミのように放り投げられたその身体は、近くにいたもう一人を巻き込んで床に転がる。

『Photon Burest』

狼狽する残りの局員へ、攻撃魔法を仕掛けた。

ドゴオオン……！！

狭所での爆発は、その威力を数倍に増し……局員達を蹂躪する。

シールドは砕け、吹き飛ばされ、壁に叩きつけられた。

「……他愛もない」

気だるげに、プレシアが言う。
戦闘開始から、たった数分。それだけの時間で、先行部隊はプレシア一人に敗北した。

「管理局。見えているかしら……？ 聞こえているかしら……？」

『管理局。見えているかしら……？ 聞こえているかしら……？』

私は、モニターから目を離すことが出来なかった。

プレシアに吞まれていたわけではない。先行部隊の惨状に怖い
いるわけではない。

ただ、その映像のインパクトに、動くことを忘れていただけだ。

「……………フェイト？」

そう。それは、一見フェイトのようだった。

顔は、同じ。そっくりとか、瓜二つとかいうレベルを越えて、同
じ。

長く、量の多い金髪。閉じられてはいるが、その両の瞳も、フェ
イトと同じ赤い色をしているだろう。

だが、共通点といえばその程度。

残るのは、怖気を催すほどの異常な光景だ。

モニターに映る少女は、上下を密封された、瓶のような水槽の中
で、薄緑色の溶液に漬かっていた。

胎児のように溶液の中に浮かぶ少女の口からは、気泡が漏れてい

ない。つまり、生きていない。

「う……ッ！」

モニター越しとはいえ、人間の死体を直視してしまい……何より、死体を『娘』と呼び、瓶詰めにして保存している、プレシアの異常な行動が恐ろしくて、目をそらしてしまふ。

「あれは……何？ アリシアって、誰？」

「プレシアの、実の娘だ」

私の疑問に答えたのは、クロノだった。

「プレシア・テストロッサの娘、アリシア・テストロッサは……三年前に死亡している」

クロノが、諦めたように白状しだす。

「フェイト・テストロッサという名前は、プレシアの過去の経歴には、一言も登場していない」

だが、と言い、一拍置く。

「フェイトという『名前』は無かったが……『名称』は、存在していた」

名前ではなく、無味乾燥な名称。

「それは、人造生命……クロノンの製造」

え……？

「クロノン……？」

フェイトと瓜二つの少女。

いや、違う。あの少女がフェイトに似ているんじゃない……フェイトが、あの少女に似ているんだ！

「記憶転写型特殊クロノン。プロジェクト・フェイトFATE」

フェイト……？

私の小ざかしい頭脳が、勝手に結論へ辿り着いてしまふ。

フェイト。フェイト・テストロッサ。目の前にいるプレシアを母親と慕う少女。記憶の中にいるプレシアは、随分と優しい母親で……でも、ある境を機に、ぱったりとプレシアは愛情を見せなくなっ

た。

その『境』とは、十中八九……

『そうよ。フェイト……お前は、プロジェクトFATEの実験体、その第一号……』
アリシアの模造品よ』

それは、プレシアによって明言された。

フェイトは、アリシアのクローン。私はなかなか、その事実を受け入れられなかった。

でも、それとは関係なしに、プレシアの口からは悪意が吐き出される。

『私がアリシアを取り戻すまでの間を繋ぐ……ただのお人形』

一言一言が、フェイトの心を抉っていく。

『やっと、アリシアを取り戻す算段が付いた……』

恍惚とし、瓶詰め娘の遺体を撫でるプレシア。

『だから』

こちらを向き、表情を一変。嫌悪感を隠そうともせず、吐き捨てる。

『おまえはもう、いらぬわ。』

どこへなりとも……消えなさい！』

これが……曲がりなりにも、母親の言うことか！？

「フェイト、！」

母親から悪意を叩きつけられたフェイトは……地べたに、ぺしゃんと座り込んでいた。

「なんとなく……わかってたんだよ」

ぼつりと、寂しげにフェイトが言った。

「記憶が、ところどころ抜け落ちていたり、逆に、見たことが無いような光景を突然思い出したり」

この前の、突然のパニック。あれも、そういうことだったの？

「当たり前だよね……だって、ボクの記憶じゃないんだから」

フェイトの記憶ではない……なら、その記憶の、本来の持ち主は

……

「これは、あそこにいるアリシアの記憶なんだから」

その内心を知ることにはできない。けど、想像する事はできる。

自分の記憶の大部分が、自分のものでは無かった。

『優しい母親』だったプレシアが、愛情を注いでいたのが、自分ではなかった。

フェイトがどんなに頑張っても、プレシアは『優しい母親』になどなってくれない。

それは、アイデンティティの崩壊だ。

「わかってたんだよ。でも………!!」

堪えきれず、フェイトの頬を一筋、涙が伝った。

「昔のおかーさんは、優しかったんだ……！ それを、信じたかった……！」

一度堰を切ってしまった感情は、涙となってあふれ出す。私は……
…慰めも、同情も、何も出来ず、何も言わず……ただ、フェイト身体を、アルフと一緒に抱きしめる。

私と同じくらいの大きさであるはずの身体は、細く、小さく、今にも折れてしまいそうで……

「うええええええん………!! ええええええん………!!」

「フェイトッ………!!」

打ちひしがれたフェイトの泣き声が、胸に突き刺さる。

『あつはははは………』

耳障りなプレシアの嘲笑が、私の神経を逆撫でした。

「おまえは……ッ!!」

ただ、物理的に。極めてアナログに。物体と物体が衝突した際に発生するエネルギーの波を、私達は『揺れ』として感じ取っていた。

その轟音はプレシアの言葉を引っ込めさせ、発生した揺れは、その場にいた全ての者の動きを直前で硬直させる。

衝突した、二つの物体。

うち一つ。それは、アースラの内壁。

合金とも、カーボンとも、プラスチックとも違う、私にとっては未知の物質。ただ、私の常識を覆しうるだけの強度を持っているということは、間違いない。それも、アースラという艦船の最重要区画である、ブリッジを守るために構築された内壁。

その、非常識なまでに頑丈な内壁に……非常識な大穴が開いていた。

数ミリや数センチなど、植物の根が時間を掛けて侵食するなどという、ちんけな穴ではない。まるで、薄いアルミに、釘を金槌で打ち付けたが如き、大穴。

釘と金槌。二つで一つの、衝突した物体のもう片方。それは……

秀人さんの、右腕だった。

「……………お前は」

ぼそりと、低く、小さく……………それでいて、万人の耳に届く声が、

耳朶を打つ。

「……………もう、口を開くな」

誰も口を開かない。身じろぎ一つしない。リンディさんも、クロノも、ユーノくんも、アルフも、フェイトも、私も……………画面の向こうのプレシアさえ……………凍りついたように、口を閉ざしていた。

第二十六話（前書き）

エグい話が多分に含まれます。
耐性がない人は読み飛ばしてください。

第二十六話

『口を開くな』。

それは、プレシアに向けて発せられた命令のはずだった。だというのに、なのは達は、一步も動けない。

俯いたまま、めごっ……と、肘までめり込んだ腕を、壁から引っこ抜く。

魔法の発動気配は、一切無かった。つまり、正真正銘……単純な腕力だけで、壁を穿ったのだ。当然、引っこ抜いた腕は無傷では済まない。

握り固められた拳は、自らの握力か、衝突の所為か、グチャグチャにひしゃげていた。

あるはずの無い関節が急造され、骨が、肉を突き破って露出している。

それは徐々に回復はしているが、痛くないわけではないだろう。痛みが無くなるわけではないのだから。

痛みを脳に伝えるべき神経が干切れたか……もしくは、怒りが痛みを振り切ったか。恐らくは、後者だ。

ポタツ……ポタツ……

噴水のように噴出した血が、床に鉄錆びくさい水溜りを発生させる音と。

パチ……パチッ……！

何かが弾けるような音。

その二つだけが、だだっ広いブリッジにある、唯一の音だった。

アースラ内部で、訓練室など限られた場所以外では魔法は使えない。アースラに搭載された装置で、魔力の結合を打ち消されてしまっからだ。

なのに……秀人の身体を取り巻くように、空色の光が立ち上り、弾けるように帯電している。

魔力は……魔法の力は、多分に感情や、精神力に影響される。

普段なら、いくら秀人やなのはといえど、ここで魔法を使うことはできない。

だが、今は……秀人の魔力は感情に呼応し、異常なまでに高まっている。

時折稲妻が爆ぜ、アースラのエネルギーと、秀人の魔力がぶつかり合っていることを示していた。

そして、その色が空色……秀人の魔力光だということは、アースラが、秀人の魔力を打ち消しきれていないという、なによりの証だった。

感情。それは……『怒り』だ。

地底のマグマのように煮え滾り、天上のフレアのように燃え盛る……圧倒的な、いつそ暴力的なまでの、『怒り』。

その怒気に中てられ……なのは達は、呼吸することさえ、忘れていた。

いや、違う。この『怒り』に触れて、矛先が自分に向いてしまうこ

とが怖くて……何も、出来なかった。

『ふん……ふん！ お前が何を言おうと……私の邪魔はさせない！』
最初に動いたのは……動いてしまったのは、プレシアだった。

秀人が顔を上げる。さながら、獲物を捉えた肉食獣のように……
『怒り』の全ては、プレシアへと向けられた。

「口を開くなと……」

幸いなことに、なのは達はその表情を見ることは無かったが……プレシアは、真正面から見てしまった。

憤怒に染まる……鬼のようなその顔を。

「言わなかったか……？」

ずしん、と、重力が増したかのような錯覚を、なのは達は感じた。
威圧感、圧迫感……そういうレベルではない、文字通りの『重圧』
が、なのは達を真上から押し潰した。

『ひっ……！！』

プレシアは明らかに恐怖を覚え、一步後退する。その時点で、既に勝敗は決していた。

『な……舐めるなあああああ！！』

その恐怖を振り払うように、プレシアがデバイスを凧ぎ……

「敵拠点に、大量の魔力反応……ランク、いずれもAからAAランク……」

蚊の鳴くような声で、エイミーが報告する。この状況で発声できただけ、エイミーは立派だ。フェイトなど、とうに限界に達し、意識を失っているのだから。

「エイミー」

ぞっとするほど静かな声で、秀人が言う。

「先行部隊は全滅した。出撃する」
凍り付いているリンディに構わず、確定事項のように、そう言った。

「あ……あの、ちょっと待って。さっきのゲート、潰されちゃって……新しく開くのに、ちょっとだけ時間が……！」

「何分だ」

単刀直入に、そう聞く。

「にじゅっぷん……」

「十分でやれ」

「は、はいッ……！」

エイミイは、青ざめた顔と涙目でコンソールを叩き始める。

そして、しばし沈黙の後……ふと、秀人が表情を変えた。

「……………準備が出来たら呼んでくれ」

それは、いつもの秀人の声色。

もちろん、努めてそういう声色を作っているわけだが、なのは達は、それに気付かなかった。僅かながら自制心を取り戻し……端的に言えば、我に返ったのだらう。

だが、なのは達はそんなことを考えるより先に、重圧から開放されたことに安堵し、久方ぶりとなる呼吸を行う。

「はいっ！ お任せ下さい！」

エイミイは慣れない敬語と共に、びしっと敬礼した。

「……………」

その背中に、なのはが声を掛けた。

「秀人さん……だよな？」

なのはは、そう言ってから、あまりにも馬鹿な質問をしてしまったと気付いた。

だが、それを責められる者が、誰一人としてここにいただろうか？
誰よりも秀人を信頼するなのはさえ、そう感じずにはいられない

かったのだ。

秀人の怒りには、それだけ凄まじいものがあつた。

プレシアの所業に、堪忍袋の尾が切れた　ただそれだけとは、到底考えられない。無理やり言葉に表現するとしたら……そう。

自らの信ずる何かが、穢されたかのようにだつた。

「……………」

なのはは、恐々と確かめるように……秀人の指先をそつと掴む。そうして振り払われないと確認し、ぎゅつと両手で掴む。

秀人もそれを握り返し……ようやく、なのはに振り返つた。

「……ごめんな。怖がらせて」

ほん、といつものように頭を撫でられる。

「……………!」

たまらず、人前であるということも忘れ、秀人の腰のあたりに抱きついた。

「ごめんね。つい……」

なのはが、顔を赤らめて身体を離す。まだ僅かに指先を掴んだままというのは、単に甘えているだけだろう。

「もう手はいいの?」

ユーノが秀人に聞く。

「このとおり」

ひよいと持ち上げられた右手は、傷跡一つ無く治癒していた。その手で、床にへたりこんだフェイトを、横抱きに抱え上げる。

「ユーノはアルフを」

「ああ、わかつた。……ほら、アルフ」

「すまない……」

そしてユーノは、腰砕けになつたアルフに肩を貸し、立ち上がる。

そのままブリッジを後にし……クロノも、その後を追った。

秀人たちがブリッジを出て行った途端、空気が一気に弛緩した。

「こ……」

ぴたりと、作業する手を止めるエイミィ。

「怖かったぁ……！」

べしゃっ……と、そのまま突っ伏す。

「……………」

だが、リンディはそれを責めることはしない。というより、できない。リンディもまた、膝が震えて立ち上がることができないからだ。

管理局員として、提督として、アースラ艦長として……決して少くない数の修羅場を潜ってきたはずだった。

だが、あれは……埒外だ。あそこまで純粹で、高濃度な『怒気』は、未だ経験したことも無い。

『殺気』であれば、まだ耐えられた。戦場では、大なり小なり必ず経験するものだ。『殺してやる』という、言ってしまうばかりやすすい感情に過ぎない。

だが、『怒気』は違う。何をするのか、全く想像する余地が無いのだ。それだけに、恐ろしい。

それに加え、あの魔力。

確かに、感情に比例して魔力が高まるというのは事実だ。

しかしそれは、数値にして数パーセント、最大でも十パーセントに届くかどうかというレベルに過ぎない。あんな……艦船の阻害効果を上回る程の増幅など、あるはずがない。

オーバーSランク魔導師の魔力量は、平均して200万前後。魔力で強さの全てが決まるわけではないが、一つの基準にはなる。

アースラや他の次元航行艦には、魔力の結合を阻害する……AMアンチ・マギリング・フィールドFの発生装置が搭載されている。

まだ新しい技術のためサイズは巨大であり、十メートル四方もあるが、効果は折り紙付きだ。

最大魔力値300万以下の魔導師……すなわち、現時点で確認されている全ての魔導師は、魔法の発動すら困難になる。まして、無意識に流れ出した魔力が、体表に目視で確認できる『レベルの魔力結合など、誰にも……リンディにもできない。しかも、秀人はそれを無意識の内に行っていたのだ。』

つまり、あの時点で秀人の魔力は、300万を軽く超えていたということになる。

以前計測した際の、秀人の魔力量は150万前後。当然、これだけでも非常に高い数値なのだが……その、更に二倍。

記録が残っているだけでも、それだけの魔力を持った人間は確認されていない。

そう、まさに……

「……………非常識だわ」

リンディには、そう漏らすことしかできなかった。

「ありがとう」

フェイトをベッドに寝かせていたら、アルフに礼を言われた。

「何がだ？」

「あの時、プレシアの言葉を遮ってくれて」

……ああ。

「もし、最後まで言われていたら……フェイトは持たなかった」

あの時プレシアが言おうとしていたのは、きっと……フェイトを
決定的に殺す言葉。

ああしなければ、アルフが言うように、フェイトは正気ではいられ
なかったはずだ。

とはいっても、さっきキレたのはそういう計算じゃない。本気の
本気で、俺はプレシアに対して怒っていた。いや、今も、プレシア
への怒りが渦巻いている。

なのはが怖がるから今は抑えているが……戦闘になったら、抑え
きれると思えない。

まあ、その辺はクロノが上手く手綱を握っていてくれると信じよ
う。

「なあ、頼みがあるんだ」

頼み……？

「何だよ。言ってみろ」

「アタシも、連れて行ってくれ」

……

「それは、」

言葉に詰まる。

アルフは……回復したとはいっても、それはあくまで、普通に過
ごすなら、という前提

での話だ。戦闘なんて、とんでもない話だ。

「いいんじゃない？」

「ユーノ！」「ユーノくん！？」

思わず、なのはと八毛る。いきなり、何を言い出すんだ。

「行きたいっていうなら、連れて行ったほうがいいよ」

「でも……まだ、ダメージが」

残っている。そう言おうとした俺の眼前に、目にも止まらない速さで、拳が寸止めされた。拳の主……アルフが、不敵に笑う。

「ダメージが……なんだって？」

……一応、雑魚の相手くらいはできるか。でも、持久戦は厳しい。

「……………クロノ」

俺は、クロノに意見を聞いた。

「おい、フェレットもどき。きみには勿論、考えがあるんだろうな」
クロノはまず、言いたしっぺのユーノに確認を取る。

「簡単だよ。僕がアルフとワンセットで行動する」

サポートには秀でてているが直接的な攻撃力に乏しいユーノと、攻撃力はあるが長く戦えないアルフ。確かに、理にかなっているかもしれない。

「……………言っておくが僕も、自分のことで手一杯だ。手助けはできないかもしれないぞ。それでも、やるのか？」

「「やる」」

答えは、随分とあっさり出た。

ユーノとアルフは声を揃え、頷いた。

「……………ああ、わかった」

微妙ながら、戦力が増えた。

「秀人さん」

なのはが、こしょこしょと小声で話してくる。

「イザというときは、私がフォローするから……………」

「ああ、俺も気をつける。」

もしアルフに何かあったら、フェイトに顔向けできないから……………」

それと、もう一つ。

「先に行ってくれ。すぐ追いつく」

俺はきびすを返し、元来た道を逆走する。

「どうした？」

「忘れ物、だよ」

それも、かなり大きな。

「急げよ」

クロノは、さっさと行ってしまった。察しのいい奴で助かる。

「フェイト」

俺は、フェイトの寝るベッドに腰を下ろす。

「……寝ていてもいい。俺の独り言に、付き合ってくれ」

俺の今からやるうとしていることは、ただの自己満足の不幸自慢だ。

生傷を他人に晒して悦に浸る、馬鹿な行為に過ぎない。

でも、それがフェイトに必要ななら……俺は、喜んで馬鹿になろう。

「俺の身体の話は、もう知ってるだろ？」

ベッドの脇に置かれた、金属製のポッドを手取る。

メキッ……ガキキッ……

それを握り潰し……手の平サイズにまで圧縮する。

「この馬鹿力は……別に、欲しくて手に入れたものじゃないんだ」

そう。こんな力なんて、要らなかった。俺はただ平凡に……両親と共に過ごしたかっただけだったのに。この身体のせいで……俺は何もかも失った。

「骨格が筋力に耐えられるようになるまで、ベッドから一步も動けなかった」

痛みで暴れないよう、特製のベルトで全身をベッドに拘束され、縛り付けられた。

食事も排泄も治療も、全てベッドの上。

「一日に何度も骨が折れて、靭帯が千切れて……治療費も、かなり掛かった」

際限の無い支出に、家計は火の車。父さんは病気を患い、母さんは心を病んだ。

仲の良かったおしどり夫婦。そのはずなのに、いつも廊下で言い争って……いや、不満をぶつけあっていた。

「母さんが言ってたんだ」

もう、俺に聞こえることも気にせず、母さんは大声で叫んだ。

「『あんな子なんか、産まなければよかった』………って」

どんな怪我よりも、あの言葉が痛かった。だから、願った。

「………毎日毎日、鎮痛剤で薄らボンヤリとした頭で、カミサマなんてもの相手に、必死に願ったよ。

『身体を丈夫にしてください』

『怪我をしても大丈夫なようにしてください』

………って」

実際、カミサマはいたのだらう。俺の願いは、聞き届けられた。

「身体が筋力に馴染んで、どういうわけか、怪我がすぐに治るようになった」

俺は喜んだ。これで、母さん達に迷惑がかからない。家に帰れる………そう思った。

「でも、遅かったんだ」

父さんは、母さんは………もう、俺と一緒にいることさえ、嫌にな

っていた。

「俺は、遠い場所にある施設に入ることになった」
ハッキリと言えば、厄介払いだ。

「俺と同じような境遇のヤツが、結構いたよ」
親に捨てられた。親が蒸発した。親が死んだ。親戚中をたらい回しにされて来た。

男も女も、野良犬みたいにギラついた目をしていたっけ。
自分より年下を、自分より身長が低い奴を、成績が悪い奴を、自分より駆けつこが遅い奴を……自分の『格下』を、虐げる対象を、いつもいつも、捜し求めていた。
俺は、私は……コイツよりはマシだ、と慰めるために。

「でも、そんな奴らも……俺のことを怖がって、近づこうとすらしなかった」

腕力というのは、子供社会の中では絶対だ。それが、子供相応のものだったら、腰巾着が擦り寄ってきたりもするのかもしれない。

だが……グランドピアノを片手で持ち上げ、コンクリートの壁をぶち抜くような力は、明らかに異質で、異常で……異端だった。

「大人達には猛獣扱いされて、檻の中に閉じ込められた」
鋼鉄の扉の奥の、鉄格子の窓しかない薄暗い部屋に閉じ込められ、食事もトイレも睡眠も勉強も、全て一人で済ませていた。
扉の横にある、食事やらが差し入れられる小窓が、外界との唯一の接点だった。

「誰かと会話することも、滅多に無かった」
娯楽用に差し入れられる、時代遅れの漫画や小説。
その中に自分を登場させ、架空の友情や愛情で、自分を慰め続けた。

漫画の中のヒーローが、自分をこんな牢獄から連れ出してくれるのだと、妄想に耽っていた。でも、そんなことは有り得るはずも無く……

「何年かそこで過ごして………高校卒業の資格を取ったのと同時に、そこを追い出された」

就職し自立できるように………正確には、国からの支援金が打ち切られる年齢になると同時に、俺は呆気なく牢獄から解放された。

結局のところ、俺を助けてくれるヒーローなんて現れず………ただぞんざいに、扱ひ方の分からない『自由』を投げ渡された。

「必死で、生きるために駆けずり回ったよ」

泥水を啜って生きるのも、野垂れ死ぬのも、自由だった。

何者にも拘束されない代わりに、誰にも支えてもらえなかった。

今の職場に落ち着くまで、各地を転々とした。日雇いから短期………時には、合法なのかどうかも分からないような仕事、明らかに違法な品物の運搬まで。モラルなんかとうに無くなり、ただその日の食事と、雨風を凌げる場所を見つけるだけで一日が終わっていった。俺とそう年の変わらない奴らが………何の心配事も無いような能天気な顔で、親に洗濯してもらった綺麗な服で、ただ遊ぶ金を稼ぐための気楽なバイトをして、買ったアクセサリをジャラジャラさせて俺の横を通るたび………殺したいほど、妬ましくなった。

「今の職場に拾ってもらわなかったら、俺は泥棒か、人殺しになっ
ていたかもしれない」

そんな俺を拾ってくれたのが、今の上司………カントクだ。

日雇いの仕事現場の縁で、素性の怪しい俺を雇ってくれた。

企業を立ち上げたばかりで、とにかく若くて体力のある奴が必要だったのだと言った。

実際には、カントクの会社には俺を雇う余裕も、俺の保証人にな

ってアパートの敷金礼金を立て替える必要も、全く無かった。
一応は社長であるはずのカントクさえ、生活費だけが給料のような、
ギリギリの生活が一年以上続いていったのだから。

「……しばらく後に、探偵を雇ったんだ」

会社がようやく軌道に乗り始め、『貯蓄』という言葉の意味を、
身をもって実感した頃、

それでも生活費を差し引いたら殆ど残らないような給料を……なけ
なしの生活費を削って、何ヶ月も貯めて、ようやくその資金が溜ま
った。

「父さんと母さんを探してくれ……って」

散々な目にあってきた。

やっと救われる。そう思った。

離れ離れだった両親と再会して、ぎこちなくても、親子の関係を
取り戻し、また三人家族で暮らせる。

俺には、誰よりも幸せな未来が待っていると……そう信じていた。

「一ヶ月くらいで見つかったけど……遅すぎた」

カミサマはいなかった。

いたのは、俺に他人分の不幸を押し売りする、『現実』という名の
悪魔だった。

俺がこんな身体になったのも、交通事故で死ななかったのも……
全ては、俺を絶望に突き落とすために仕組んだ、悪魔の脚本だった
のかもしれない。

仕事熱心だったのか、おしゃべりだったのか。あの探偵は、現場
の状況まで、詳しく教えてくれたもんだ。

「母さん、は……」

不意に、目の前が滲むが……それだけだ。もう、流れるものは、
何も無い。

「俺……俺を、施設に預けた、その日の晩に……」
あの時、引き止めていれば……それをしなかったばかりに、母さんは。

「首を吊って……死んだんだ」

俺が生まれ育った家で。いつも食事をしていた部屋で。排泄物を垂れ流しながら、白目を剥いて死んでいたそうだ。

それを見つけたのは、病身の父さんだった。

「父さんも、その後すぐ……」

その父さんは、次の月に病気をこじらせて、一人で死んだ。今の俺が暮らしているような安普請のアパートで、孤独死していたらしい。もう、病気を治す気も無かったんだろう。病院の往診記録は、母さんが死んだ日で、ぱったりと途切れていた。

「俺の家は、とつくに取り壊されて無くなった」

自殺者の出た借家など、買い手も借り手も付くはずが無く……大家によって取り壊され、駐車場になっていた。

毎朝寝起きしていたベッドも、食事をしたリビングも、窓からの眺めが良くて気に入っていた屋根裏部屋も、何もかも、何一つ、残っていないかった。

「だから、俺にはもう……やり直せない」

やり直すべき両親はもう、この世にいないのだから。

「どんなに泣いて後悔したって、あの日には戻れない」

何度、夢に見ただろう。

あの日、道端で遊んでいなければ。
車に撥ねられなければ、今でも俺は普通の人間で、普通の人生を歩
んでこられたのかもしれないと。

何度、夢に見て泣いただろう。

あの日、母さんを引き止めていれば、母さんは死なずにすんだかも
しれない。

父さんと一緒にちゃんと病気を治して、二人だけでも幸せに過ごせ
たかもしれないと。

でも、もう遅い。

俺の家族は終わってしまった。どうしようもない程に、壊れてしま
った。もう、直すことも、取り戻すこともできない。

「でも、フェイトは……まだ、やり直せる」

フェイトの母親は、プレシアは……まだ生きているのだから。

「俺がプレシアの首根っこふん掴まえて、フェイトの前に連れて来
てやる」

どんな事情があろうと。どんな理由があろうと。

「プレシアに土下座させて、今までのことを謝らせる」

全ては、それからだ。

「もし、それでも無理だったら……どうしてもプレシアを許せなか
ったら」

フェイトは、プレシアにされたことを覚えているだろう。

もう、盲目的に従うことをやめたフェイトは、ちゃんと不満を訴
えることができる。怒ることができる。そして、その結果、プレシ
アとの決別を望むなら……

「アルフも連れて、俺ん家に来ればいい」

俺が、フェイトの家族になる。

「なのはと、ユーノと、俺と……五人で、楽しく暮らそう」
きつと、楽しい。寂しさなんて、感じる暇も無いだろう。

フェイトは毎日、なのはやユーノ、アルフと遊んで、喧嘩して、何
度も仲直りを繰り返して……今よりもつと、絆を深めていく。

「皿を突っつきあって食事して、取り分が多いの少ないの、つまん
ないことで騒いだりさ」

俺がしたかったこと。家族みんなでの食事。

「ああ、学校に通うのもいいな。友達を作って、放課後、おしゃべ
りしながら道草食って帰るんだ」

俺が出来なかったこと。普通の学校生活。

「誕生日には、みんなで盛大にお祝いするんだ。でっかいケーキ買
って、年の数だけ蝋燭立てて、その日の主役が一気に吹き消したり
して」

俺がしてもらえなかったこと。誕生日のお祝い。

したかったことを、できなかったこと、してもらえなかったこと。
全部、全部……俺が、叶えてやる。

「俺が、嫌でもフェイトを幸せにしてやる」

時計を見る。丁度、十分が過ぎていた。

「独り言は、これでおしまい」

「コトン……」

ベッドの脇に、それを置く。

フェイトの魔力光と同じ、黄金色のトライアングル。

バルディッシュ。クロノからガメておいた。

一人では心細いに決まってる。常に傍にいて、アルフと共にフェイトを守ってきた、フェイトの相棒なら、きつと。

『フェイトのこと、頼んだぞ。バルディッシュ』

届くはずの無い念話を、願掛けのつもりで送ってみる。

『言われるまでも無く』

……………え？

頭に直接響いた声……………念話に驚き、振り返る。

だが、フェイトは変わらず眠ったままで、バルディッシュも沈黙している。

聞き間違い……………だよな。

マスター登録されていない俺は、AMF下でマスター登録をしていないデバイスと、念話を行うことはできない。

……………ま、いいか。

「行ってくる」

さあ、行こう。フェイトの幸せを、取り戻しに。

秀人が出て行つてすぐ、フェイトはぱちつと目を開けた。どうと
いうことはない。最初から……正確には、廊下を秀人に抱えられて
移動していた時には、もう目を覚ましていたのだ。狸寝入りならぬ、
狐寝入りというやつだった。

「……………秀人も、辛かったんだ」

ベッドから降り、バルディッシュを手取る。ろくにメンテナン
スもされず、戦闘を続けたせいとか、細かな傷や罅割れが痛ましく刻
まれていた。

キンツ……………

デバイス形態に変形させる。

「あはは……………ボロボロ、だね」

そう。デバイス形態のバルディッシュは、あちこちがひび割れ……
すでに、限界近くに達していた。武器としての強度を保っている
かどうかも怪しい。

「ボクといっしょだ」

見てくれだけの、ポンコツ。

「おかしさんは、ボクのことなんて、最初から見てなかったんだ」
自分がプレシアの娘だというのは、ただのまやかしで。

「おかしさんが大事だったのは、アリシアだけだった」
自分は、アリシアの模造品だった。

でも。

「あいつらは……………『ボク』を見てくれた」

アリシアの模造品ではなく、一人の『フェイト』という人格とし
て。対等に扱ってくれた。

「あいつは……………こんなボクでも、友達になってくれるのかな」

高町なのは。フェイトの宿敵で、ライバルで……………『友達になりた

い』と言う、変な奴。

「あいつは……こんなボクでも、幸せにしてくれるのかな」

吾妻秀人。『嫌でも幸せにしてやる』と言った、不思議な奴。

「ボクは……どうすればいいんだろう」

彼に、彼女に……報いたい。でも、どうすればいいのかわからない。

「何から始めたらいいんだろう」

誰かのために、何をすればいいのか。

『Sir.』

迷える主に、寡黙な戦斧が答えた。

『私は、造物主の願いを託され、それを実現しうる者として作り出されました』

「リニスの……？」

バルディッシュの製作者。プレシアの使い魔にして、フェイトの育ての親……リニス。

「リニスは、何て……？」

ある日、忽然と姿を消してしまった。何も言い残す事も無く。彼女がバルディッシュに託した願いとは、一体……

『 あなたの未来を切り開く剣であれ。

あなたの生涯を支える杖であれ。

あなたのために強くあれ。

……そう、託されました』

「……………リニス」
目を閉じ、メッセージを反芻する。その目蓋から、一筋の涙が流れた。

「そつだよね。今のボクを見たら、がっかりしちゃうよね」
うじうじと悩んで、二の足を踏むような自分が、リニスに誇れる姿なわけがない。

「……………うん！」
顔を上げたフェイトは、吹っ切れたような笑顔を見せた。

バリアジャケットを装着。

「ボクは、もう一度強くなる」
己の覚悟を確かめる。

「リニスに、アルフに……………誇れる自分になるために！」
傷だらけのバルディッシュを手に立ち上がったフェイトの姿は、凛々しく、気高く……………

「行こう、バルディッシュ！」

誰よりも、美しかった。

バルディッシュのコアが……………黄金色に眩く輝いた。
光は広がり、バルディッシュを包み込む。そして……………

バキインツ……………！！
『Recovery complete』
全ての傷を、完全に修復した。

誰もが、知る由も無いだろう。

秀人がぶち抜いたブリッジの壁。丁度その場所に、AMF発生装置のコントロールユニットがあったことを。そして、秀人の拳が、

寸分違わずそれを砕き、ショートさせていたということ。全ては、偶然に過ぎない。だが、その出来すぎた偶然はまるで、フェイトを促しているかのようだった。

何も阻むものは無く、フェイトは魔法を発動する。

『いいのですか？ 使ったことの無い魔法です。失敗すれば、命を落とす危険もあります』

そう。フェイトは、転移魔法を使ったことがない。バルディッシュに登録されてはいるものの、いつもアルフにまかせっきりで、練習さえ怠っていた。

魔法の失敗は、直に命を危険に晒す。

ここで大人しく待っていれば……そう呟く、弱気な自分がいる。だがフェイトは、自分の弱さを、己の意思でねじ伏せた。自分は今もう、一人ではないと……

「ボクを支えてくれるんでしょ？」

『……………Yes.』

頼りになる相棒が、支えてくれると気付いた。だから……

「頼りにしてるよ、バルディッシュー！」

『Yes sir!』

フェイトはもう、迷わない！

ヴォンツ！！

そして立ち上る、黄金色の魔力光。

『術式構築・確認。座標入力・確認。必要魔力充填・確認。オールクリア』

驚くほどスムーズに、魔法は発動段階に入る。

フェイトの魔法の才覚が、意志と完全に合致した瞬間だった。

『主。その力は、何のために？』

バルディッシュは、再び主に問う。

何のために戦うのか、と……

「当然！」

その力を正しく使える日が、きっと来る。

(今が、その時だ)

フェイトは迷い無く、バルディッシュの問いに、あの日の言葉に……今こそ答える。

「ボクの友達を、助けるために……！」

フェイトは、飛翔する。

第二十六話（後書き）

今回は、かなりの難産でしたが、ようやく、フェイトを更生させることができました。
長かった、、、

第二十七話（前書き）

待たせた割に、短くて申し訳ありません。
精進します。

第二十七話

キーを差込み、イグニッションキーを回す。

この先必要の無いと分かっているけど、ついライトやウインカーの灯火類を確認してしまう。セルスイッチを押すと、ボンツ……と、低音と共にエンジンが始動し、アイドリングを始めた。

「向こうの状況はどんな感じだ？」

『ゲートはギリギリまで遠ざけたんだけど……やっぱり、転移してすぐ、敵兵に襲撃されると思う』

ま、今回はそうだよな。先行部隊があんなに簡単に突入できたのは、きつとプレシアが舐めきっていたからに違いない。事実、瞬殺だったもんなあ……

ヴォンツ、ヴォンツ……と、エンジンを空ぶかしして、調子をかめる。

「各部、問題なし……と」

俺がシートに座り、なのはがタンDEMシート。ここまでは、いつもの乗り方だ。

ただ、今日は……

「せ、狭い……！」

ユーノは俺のポケットにねじ込まれ。

「アルフ、ちゃんと掴まるんだよ」

「ああ、そうする」

なのはの後ろに、アルフが座り。

「……走るのか？ この状態で」

「カワサキなめんな」

クロノがリアキャリアの上に立ち、俺の肩に手を伸ばすという……どこの途上国のカブだと言いたくなる様な、凄まじい曲乗りだった。

飛行魔法でバラバラに飛んでいたのでは、飛行スピードの差ではらけてしまうし、アルフは普段のスピードを出せない。

だからといってアルフを抱えて飛ぶだけの余裕は誰にも無く……こうして、俺のバイクに五人ですし詰めになっている、というわけだ。

大半が子供と女。それぞれの体重は軽いが、五人合わせれば二百キロ近い。

600ccのエンジンを積んでいるとはいえ、いつもの速度が出せるのかどうか……ハイオク

入れて、エアクリ外して直キャブにして、マフラー換えて……と、突貫工事でパワーアップしてみたが、傀儡兵の追撃を振り切れるかどうかは、正直疑問だ。

もっとパワーのあるバイクも用意できないことも無かったんだが（管理局は予算潤沢）、身体に馴染まないバイクにいきなり乗せられて、いつもの運転ができるかどうかわからなかったから、いつものバイクを使う流れになった。

『あと五秒で転送するよ』

エイミイの声を聞きつつ、両足でバイクをしっかりと支える。

『3』

『2』

『1』

ガオオオオオオオオオオオオ……！！

レッドゾーン寸前まで吹かして……

『みんな、死なないでね！』

ゼロ。同時、目の前の景色が歪み……次に見えたのは。

『 』 『 』 『 』 『 』 『 』 『 』
グオオオオオオオオオオオオ！！
傀儡兵どもの、一斉攻撃！！

「うおおおおおおおおお！！」

一気にクラッチを繋ぎウィリー気味に急発進し、その攻撃をかわす。

キユゴガガガガッツ！！

無数に飛来したエネルギー弾や投擲の雨が、直前までいた場所を抉り、吹き飛ばした。

雑魚には構わず、一気に門に突撃する。蹴散らすのは簡単だが、温存しておいて損は無い。この先どんな敵がいるのか、全く分からないのだから。

でも……

(加速が鈍い！)

スピードメーターは、時速120キロあたりで停滞していた。やっぱり、過剰積載のツケが回ってきたか……！

「チッ……！！」

速度重視の飛行タイプが、確実に距離を詰めてきている。

ドンッ！ ドンッ！

「つとー！！」

なんとか、かわしたけど……さすがに、体重移動が難しすぎて傾け辛い。

「どうする？ ここでバラけて戦うのか？」

クロノは、流れ弾をひよいつと軽く避けながら聞いてくる。

一応、門までの距離は縮まってはいるけど……今こうしている間にも、門のあたりに大量の傀儡兵が集まってきている。このままのペースでは、あの日と同じか、それ以上の数の傀儡兵を相手取ることになってしまう。

だからといって、バイクより速く飛べる奴はいない。

ま、しょうがないか。

ギンツ……

魔力刃を構築。

目の前にいる数多くの傀儡兵を、正面から睨みつける。

「ちよつとばかし、足止めさせてもらおうか？」

プレシアの居城のどこかには、きっと傀儡兵の生産プラントがある。でなければ、あれだけの兵力をたった一人で生産・維持できるとは思えない。

俺達がここで大多数の傀儡兵を足止めし、その間になのは達が生産プラントを潰せば、あとはプレシアまで一直線だ。

「水を差すようで悪いが……生産プラントがあの中にあるのか、まだ確定したわけじゃないぞ。別の場所にあつたり、最悪、生産プラントなんてそもそも無いかもしれない」

クロノが言うことも尤もだ。でも、やってみないことには分からない。それに……

「俺達が足止めしておけば、なのは達が少しでも楽に進めるだろ？」

なのはは、いかに魔力が多かろうが九歳の女の子だ。体力にも恵まれていないし……何より。

「なのはの身体には、傷一つ付けさせないって決めてるんだよ、俺は」

「……過保護だな、君は」

そう言い、S2Uを構えるクロノ。俺が過保護なら、クロノはお人よしだ。

「悪いな。また付き合ってくれ」

ヴォンツ！！

あの日と同じように、魔方陣を展開し、ラインを伸ばす。

バシユツ！！

そして、クロノに繋げる。

あの時と違うのは、俺も、クロノも、万全の状態だということ。

これで、俺にはクロノの処理能力が加わり、クロノには俺の魔力が

加わる！

『グオアアアアアア！』 『グオアアアアアア！』 『グオアアアアアア！』
痺れを切らし、傀儡兵が突っ込んできた。さあて、と。

「うおおおおおおおっ！！」 「

行くぞッ！！

「ひゃあああああああ！！」

ひ、秀人さんの馬鹿……！ 私が……！ すっごい運動音痴で、自転車にも乗れないってこと忘れてるでしょおおおお？

『グオオオオオオ！！』

「きゃああああ！ どいて……！！！！！！」

見よう見まねでブレーキを掛けようと、して……

「届かないー！？」

スロットルを握るのだって精一杯なのに、ブレーキにまで手を伸ばす余裕なんてあるはず無いよー！！

『Float er』

ふわ、つと前輪が浮かぶ。

『Solid』

その前輪が、強化魔法の光を纏って……

めきぐしやべきっ

傀儡兵を、轢き潰した。

「……………」
ははは……… やっちゃった……… 自動車運転過失致死………

もう、引きつった笑いしか出てこない。

『オ、オオウ…………』

ミラーに映る傀儡兵が、ぴくぴくと悶えている。

『マスター、落ち着いてください。いつも乗っているではありませんか』

「いつもは秀人さんが運転してくれるんだもん…………」

「なのは！ 前！ 前ー！」
って、

『 『 『 『 ウオオオオオオオ！！』 『 『 『 『 『』

怒りに燃える傀儡兵たちが、目の前に迫っていた！

「いいいやあああああああー！！」

『Solid！』

前輪の強度を上げ、

ばじばじぐべきべきめきゃっ

撥ねて、轆いて、押し通る！

『 『 『 『 ギャアアアアアア！！』 『 『 『 『』

「ごめんなさああああああいー！！」

何て後味の悪いー！！

ガッ、ガガガガガガガッ！

「うわ、うわああああつー！？」

砂利やら砕けた石畳の欠片を踏んでしまい、一気にハンドルがぶれ出す。

「くっ、このっ!!」
ハンドルは、私の抵抗を嘲笑うかのように暴れ……!
ずるっ

「あっ……!!」
「こ……転ぶッッ!!」
「つとオ!!」

と、私の両側から手が伸び、ハンドルをがっちり握った。

「こんにゃろっ!!」
ぐわん、と大きく揺れ……なんとか、タイヤが地面に接地し直した。

とりあえず、転倒することは防げたけど……

「アルフ、運転できるの!?!」

ユーノくんが、私のポケットから顔を出し、風切り音に負けないように叫ぶ。

間違いなく、初めての筈。だが、

「ああ! もう十分見たからね!」

カキンッ、と、左下方でギアの変わる音。そして、

ガオオオオッ!!

アクセルを開け、加速!

まだ多少のぎこちなさはあるけど、間違いなく……乗れている。

「ははっ……なかなか、いいモンじゃないか!」

ガオンッ!!

「ひゃっほー!」

アルフは、その長い手足を存分に活かし、バイクを操る。殆ど直感的にバイクの挙動を見極め、コントロールしている。

すごい。さすが、狼を素体になっているだけあって、運動神経も反射神経も抜群だ。

タンクにへばりつくようにして、メーターを覗き見る。時速……

200キロオーバー!

門はもう、目の前だ!

ガソリンエンジンで爆走する、なのは達の姿が、それぞれ映し出されていった。

「でも……もう終わり」

秀人の気迫に怯えるという醜態は晒したが、プレシアの手元には、九つのジュエルシードがある。

「さあ……始めましょう」

アリシアのポッドを、愛おしそうに撫でる。その周囲に、九つのジュエルシードが浮かび上がり、旋回していた。

「取り戻すのよ……」

コンソールのキーを、叩いた。

ズズズ……

低く、庭園が唸る。そして、

ズゴゴゴゴゴ……！！

それは、巨大な震動へと変化した。

「私達の全てを……」

アースラのブリッジ。そこは現在、かつて無い緊迫感に包まれていた。アラートは鳴り続け、誰もが現状の把握と対処に追われていた。

「次元震、発生……」

「徐々に増加中！既に、中規模に達しています！」

エイミィは庭園内をサーチし、この次元震の発生源を探る。

「『庭園』の動力炉と連動しています。恐らく、足りない分の出力を補おうと……」

九つという、想定の半分にも満たない数。

それを補うため、動力炉を限界以上に稼働させているのだろう。

あの巨大な庭園を常時、準虚数空間に浮遊させ続け、完全に独立したエネルギー供給を実現させる動力炉だ。そのエネルギー総量たるや、ジュエルシードにも匹敵するだろう。

秀人たちの世界で言えば、原子炉のようなものにあたる。

適切に管理し、安定供給を続けるなら、さほど危険は無い。だが

……

「わざとバランスを崩して、意図的に暴走させているのかと」

炉心マルチダウン熔融させるのであれば……炉の破壊と引き換えに、莫大なエネルギーを発生させることができる。できてしまつう。

動力炉の暴走。

それは、プレシアが娘を失うことになった、直接の原因。あれは、未完成のまま強引に稼働を決定した上層部が引き起こした事故だった。プレシアには、非難される謂れは無い。

だが今回は、プレシア自身がそれを引き起こそうとしている。

「なんてことを……！」

リンディは、席を立った。

「私も出るわ。庭園内から、次元震を抑えます」

「了解！」

指揮権を副官に移譲。リンディは裾を翻し、ゲートへと向かった。

(必ず阻止する)

リンディは、歩きながら決意を新たにする。

(死者は、決して蘇ったりはしない)

リンディ自身が、それを知っていた。

十一年前。とあるロストロギアを追っていた、リンディの夫、クライド・ハラオウン。

彼はそのロストロギアを道連れに、この世から消滅した。

一片も……髪の毛一本として、この世には残らなかった。

悲嘆に暮れ、親友の言葉にも耳を貸さず、ただ部屋に閉じこもって泣くだけの日々。

提督という、それなりに高い地位にあったリンディは、上層部のみ公開されるロストロギアの資料を読み耽る日々を送った。夫を取り戻す。ただ、そのためだけに。

そして、候補になりそうな物を見つけた。それは、管理局の保管庫に、極めて嚴重に収められていることを知った。

普通ならば、躊躇したり、諦めたりもするだろう。だが、当時のリンディは、正気を失う一歩手前まで、追い詰められていた。

そしてその晩、リンディはデバイスを手に、着の身着のまま部屋を飛び出した。

地位になど、クライド無き生活になど……今更、未練は無かった。反逆者として追われることになるうと、クライドさえ取り戻すことが出来れば……そう、本気で考えていた。

そして、家を飛び出そうとした彼女が目にしたのは……たった一人で廊下に佇み、リンディに声を掛けるか、掛けまいかと葛藤する……クロノの姿だった。

そして、ようやく正気に戻れたのだ。

自分には、まだ愛する者がいるのだと、気付くことができた。

あの晩、クロノがいなければ……リンディもまた、狂っていたのかもしれない。

今のプレシアの姿は、リンディの可能性の一つだ。

愛するものを失い、引き止めるものも無く、ただ修羅の道を進むことでは己を保てなかった、もう一人の自分。

その気持ちは、誰よりも……本人よりも理解できる。

それでも。

だからこそ。

(必ず……止める！)

彼女を、止めなくてはならない。

彼女と同じ、一人の『母親』として。

第二十七話（後書き）

バイクは安全運転で乗りましょう。

ご意見、ご感想お待ちしております。

第二十八話（前書き）

今更ですけど、星光の殲滅者って可愛いですよね。、

第二十八話

ズズズズ……!!

いきなり、足場がぐらぐらと揺らいだ。

「うわっ……何だ!? 地震か!?!」

って、こんな場所で地震が起きるはずが無い。

『オオオオオ!!』

「るっせえ!!」

ザンツ!!

首を切り落とし、飛行タイプの撃ってきた魔力弾を回避する。
とんっ、と着地した、その時。

ボゴツ!

「うおわっ!?!」

唐突に、足場になっていた石畳が抜け落ち、巨大な穴が開いた。妙な極彩色の……原始的な恐怖を呼び起こすような、どこまでも続く穴。

「何だ、これ」

もう少し遅かったら、落ちていた。

『オオオオ……!!』

俺を追撃していた飛行タイプの一体が、その穴の上を通過しようとした、その時。

『オオオツ……』

まるで、いきなり見えない手に掴まれたかのように、穴に落ちていった。

何だ? 何が起こった?

「何で飛ばないんだ……?」

飛行タイプなのに。

「飛べないんだよ」

穴を迂回してきたクロノが、意味の分からないことを言った。

「？ どういう意味だ？」

「あれは虚数空間……魔法が一切発動できない空間だ。次元航行艦ですら、あれに落ちたら重力の底まで真つ逆さまだ」

恐ろしいことをサラツと言う奴だな……でも、

「そりゃ、好都合だ！」

いいこと聞いた！

『グオオツ！』

重騎士タイプ。とにかく装甲が硬く、二発、三発とこれ一体に消費させられる、厄介なタイプだ。だけど、

「そりゃっ！」

ゴンッ！

胴体を蹴りつけ、数歩後退させれば……

『オ、オオオオオオオオオオ………』

虚数空間の穴に、勝手に落ちていってくれる。

「……なるほど」

クロノが感心したように息を吐く。

ギャリリリリッ………！！

騎士タイプを三体纏めてバインドし、

『Blaze Cannon』

ゴンッ！！

『『『ギャアアアア………』』』

纏めて、穴に叩き落とす。

とはいっても、下手をしたらこっちが穴に落ちてしまうことも考えておかないと。

「インパクト！」

ドゴオオオン！！

広域版インパクトで、傀儡兵の足元を爆破する。ただでさえ凶体

のでかい傀儡兵。一度バランスを崩してしまえば、転倒は必至。そして、倒れた先には……大口を開けて待ち構える、虚数空間。

『オアアアア……!!』

さよならーっ、と。

クロノはクロノで、バインドで足を引っ掛け、誘導弾で穴に突き落としている。

「おっ」

さすがに、敵兵も馬鹿じゃないようだ。穴を迂回し突進してきている。

「……でも、所詮はロボットだな」

傀儡兵どもは、総じてガタイがいい。穴の隙間を縫うように走ってきてても、一直線に並ぶという……入れ食い状態になっていることに、全く気付いていない。

魔力刃を振りかぶり、

「はああああッ!!」

バシユンツ!!

斬撃波を射出!

ザンツ!!

騎士タイプ、飛行タイプを数体纏めて両断し、その後ろにいた重騎士タイプの装甲に亀裂を入れる。

『Blaze Cannon』

バオンツ!

亀裂の中に、クロノの放った砲撃が直撃。重騎士タイプは後退し、虚数空間へと落ちていった。

とりあえず、足止めは問題無く……

「秀人、下がれ!」

「つとオ!?!」

クロノの声を聞き、全力で後ろに跳ぶ。

ヴオンツ!!

かも分からないそれを、右へ、左へ、上へ、下へ、とにかく避けて避けて避けまくる！

ギョボンツッ！

「ぐアッ！」

「秀人！」

目の前が白く染まり、右腕に激痛が走る。

（ヤバ……！）

回復した視界の中、右腕を覗き見る。

まだ……腕は繋がってる。

「あつぶねえ……！」

右手の結晶体で受け止めなかったら、腕が吹っ飛ぶところだった。放っておけば治るけど……今は、いちいち修復を待っている時間は無い。

『ゴアアアアアア！！』

巨大な腕を振りかぶり、打ち下ろす！

「舐めるなあああアアア！！」

左腕に強化魔法を纏わせ、迎撃！！

バギイイイインツ！！

硬い！さすがに、雑魚とは装甲の厚みからして違う！

「こいつで……どうだアッ！」

ザンツ！！

魔力刃を、思いつき腕に突き立てる。よし、刺さった！

「ブレイク……インパルスツ！！」

S2Uから魔法を発動！突き立てた魔力刃から、体内に振動波を送り込む！！

ポオンツ！！

「チツ……」

破壊できたのは、肘から先のアーム部分だけ。わざと腕をパージして、ダメージを最小限に抑えやがった！

だが、この調子で腕を？い^もでいけば……

「なっ……!?!」

だが、そう上手くはいかなかった。

ビュウウウウ、ン……

光が軌跡を描いたと思ったなら、そこにすっぽりと収まるように、腕が元通りに修復された。

「はア!? そんなのありかよ!?!」

「君が言うな」

……………それもそうだな。

ギューイイイイイイイイイ……!!

四肢の先端に魔カスファイアが出現する。またあのビーム弾幕を撃つ気だ。

「させるかっ!!」

『Stinger Snipe』

クロノが誘導弾で誘爆を狙う。

ガキンッ!!

だが今度は、強固なシールドに阻まれてしまった。

「攻防共に死角無し、再生能力付き……」

思わず呆れてしまう。

ズババババババツ!!

「ぬおおおおおおおっ!!」

そして発射された弾幕を掻い潜り……

「ファイア!」

バレットを数発、試しに撃ってみる。すると、

ガガガガンッ!!

「駄目か……!」

攻撃中はバリアを張れないと思っていたが、そう上手くはいかないらしい。

『ウオオオオツ!!』

弾幕が止むと、今度は巨腕による攻撃。今度は、しっかりと表面がバリアで覆われている。やるうと思えば、ぶち抜けなくも無いけど……

「はっ!!」

バゴンツ!

回し蹴りにインパクトを纏わせ、巨腕を蹴りつける。

バリア越しに多少のダメージ……装甲の表面を凹ませることはできただけ、またすぐに直ってしまった。

「エイミー、何かわからないか!？」

クロノが、通信の向こうにいるエイミーに聞く。

『もう一度、そのでかい奴に攻撃当ててみて!』

「了解!」

『Blake Impulse』

チユイイイイイイン!!

振り下ろされた巨腕を回避し、振動波を打ち込む。

ボンツ……!!

『グッ……!!』

一瞬だけたじろぐ傀儡兵だったが、またしても腕だけを切り離し、そこを修復してしまう。

『……うん、やっぱり!』

だが、エイミーはそこから何かを掴んだようだった。

『別の場所にもう一つ、そいつと全く同じ反応があって、リンクし合ってる』

「別の場所……?」

しかも、リンクし合ってるということ……

『そこにいるもう一体も同時に叩かないと、いくらでも再生しちゃ』

お互いが、お互いのバックアップになっている……そいつのこと

か。

『今、そこになのはちゃん達が向かってるから……！ それまで、持ちこたえて！』

攻撃力も防御力も高く、再生能力もあって、パーツを切り離してダメージを抑える知能まで持ち合わせている。

そんな馬鹿げた敵を相手に、いつまでも時間稼ぎなんてしてられない……

……あれ？

「ダメージ……？ 待てよ……？」

思わず考え込んでしまう。

「どうした!？」

クロノが、ビームを避けながら聞いてくる。

「いや……回復するなら、腕を一々切り離す必要なんて……ダメージの大小を気にする必要は無いんじゃないか？」

その再生力が無限なら、ダメージのことなんて気にしないで戦うに決まっている。

「……………あ」

クロノが、腑に落ちたようにハツとする。

そう。ダメージを気にするってことは、つまり……

「「耐久力にも再生力にも限界がある」「」

ということだ。

「……………僕としたことが、再生能力に気を取られすぎていた」
じゃきつ、と、S2Uを強く握りなおす。

「どうする?」

これは、時間稼ぎの防戦なんかじゃない。道を拓くための、攻戦なんだ。

掃射時間を犠牲にする代わりに、攻撃範囲を広げたのか！

ドババババババババババババツ！！

「んがあああああああああつ！！！！」

シールドをかざし、砲撃を受け止める。

「やれ！ クロノ！」

俺の背後……庇う形になったクロノに、檄を飛ばす。

「はあああああつ！！」

『Fire！！』

クロノが発射した砲撃と誘導弾は……

バゴオンツ！！

砲撃の隙間を掻い潜り、砲身となっている小腕を叩き折った！

『グ……グ……グ』

またしても、腕を切り離す。けど……

ギヤリイイインツ！！

チェーンバインドが絡みつき、それを妨害する！

「今だ！！ 行け！」

「よっしゃああああ！！」

クロノの声に応え、飛び出す！！

小腕が無ければ、射撃や砲撃はできない。

さつきから観察し続けて発見したことだが、この巨大傀儡兵は……

…巨腕と小腕を、同時に動かすことはできない。憶測だが、同時に操れる腕は四本が限界なんだ。

いくら機械仕掛けでも、八本もの腕を干渉しないように同時操作するなんて出来ないのだろう。

そして今、あいつは小腕を切り離すことに夢中になっていて、俺の接近に対する反応が明らかに遅れている。

チャンスは一度だ！ 一撃で、あの巨体をブツ壊す！

両掌に、デイベインバスターとブレイズキャノンセット。そして、殆ど直感的に、

ぱあんっ！！

掌を打ち合わせ、二つの魔法を合体させた。

発生した魔力スフィアを発射するのではなく、魔力刃のフレーム内部に溜め込む！

「ウオオオオッ！！」

「Stinger Sniper！」

キュゴガガッ！！

それを阻もうとする傀儡兵に、クロノの放った誘導弾が突き刺さる！

俺は、完成したばかりの新魔法を片手に、一直線に巨大傀儡兵へと切りかかる！

狙うは胴体！ 正中線！！

「カラミティ……………！！」

災厄を、断ち切る刃！！

「デイベイドオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！」

斬ッッ！！！！

「……………」

振り下ろした刃は、巨大傀儡兵の正中線を、正確に切り割っていた。

「なのは達はどこだ？」

早いところ合流したい。

『庭園の……動力炉に繋がる通路！ そこからの最短距離は、S2
Uに転送済み！』

よし。

「クロノ、先導頼む」

「ああ」

いつ虚数空間が開くかもわからない以上、うかつに飛行魔法で飛ぶのは危険だ。バイクも無い以上、走って行くしかない。

無事でいるよ、なのは！

第二十八話（後書き）

次回はなのは編です。

ご意見感想、お待ちしております。

第二十九話（前書き）

30万アクセス突破しました。
ご支援、感謝いたします。

第二十九話

フェイトは、バルディツシュを手に庭園内へと降り立った。

いつもの通路。そして、いつもと違うのは、通路いっぱいには傀儡兵が立ち塞がっているということ。

『 『 ウオオオオオオオオオッ！！ 』 』 『 『 途端、襲い掛かってくる傀儡兵。』

侵入者へと、容赦の無い攻撃が加えられる。

『 Sonic move 』

だが、その攻撃がフェイトを捕らえることは無かった。

ガギユンツ！！

フェイトは、すれ違いざまにバルディツシュを一閃。傀儡兵の脚部を切断する。

ドドドドドッ！！

数体の飛行タイプが撃ち出すエネルギー弾の弾幕。

『 Arc Saber! 』

「はああっ！！」

フェイトは大上段から、光刃を解き放つ。

ザンツ！！

回転しながら突き進むそれは、弾幕を突き破り道を開け、その向こうにいた飛行タイプを両断した。

弾幕に開いた穴から、マントを翻しフェイトが疾走する。

『 Photon Lancer Multishot 』

フォトンランサーを掃射。

ガガガガガガガガガガガッ！！

魔力弾の豪雨は、傀儡兵の頭に、核に、武器に、吸い込まれるか

のように突き刺さり、

……………ドゴオン！！

一拍遅れ、爆発四散。

傀儡兵達は、何もできぬまま無意味な鉄塊へと成り下がった。

「やあああああつ！！」

フェイトは足を止めず、文字通りに道を切り開き、前へ進む。

（ボクは、アリシアじゃない）

戦いながらも、考える。

（ボクとアリシアは、別の人間だ）

それでも、覚えている。

あの事故の後……………つまり、アリシアが死に、フェイトが『作られ』、目覚めた時……………抱き締められた温もりを。それが、『フェイト』ではなく、『アリシア』への抱擁だったのだとしても、あの瞬間だけだったとしても……………間違いなく、プレシアに愛されていたのだと。とはいえ、かつてのように妄信しているわけではない。

プレシアはあの時、フェイトを捨てた。それ以前に行われていた暴行についても、『アレは虐待だった』と正しく認識している。

それでもフェイトには、プレシアに会わねばならない理由があった。『会っただ……………！！』

アリシアの記憶にあった、あの言葉。

ママ、わたしね……………

「会って、伝えるんだ！！」

その言葉を……………心を病むほどに愛した、アリシアの遺言をプレシアに伝えるという、理由が。

「バルディツシュ、いちばん近い道！」

フェイトは、この庭園の構造を殆ど把握していない。住んでいたのは、表層の居住区、さらにその一部だけ。

『ルート、既に登録済みです』

バルディッシュは呆気なく、あっさりと回答した。
バルディッシュの創造主、リニス。

プレシアの使い魔であり、アリシアの飼い猫で……フェイトの育ての親。

彼女はこうなることを……フェイトがプレシアと向き合おうとする
ことを、予想していたのだろう。

「よし、頑張ろう、バルディッシュ！」

『Yes sir』

バルディッシュは、どこか嬉しげに応じた。

ウンッ！！

新たな傀儡兵の部隊が出現する。

「邪魔だあああああッ！！」

だが、フェイトは止まらない。

ザンッ！！ ガゴンッ！！ ガガガガッ！！

切り裂き、打ち抜き、薙ぎ払い……瞬く間に殲滅していく。

それも、ただ闇雲に戦っているのではない。

脚部や武装などを破壊し、敵の数を減らすことなく行動を不能にしている。

なのは達には知る由も無い事だが、この傀儡兵達が現れる転送魔法陣は、自動制御。

傀儡兵の頭数に変化が起きると、生産プラントから増援が現れるように設定されている。

つまり、フェイトのように、『頭数を減らすことなく』敵を無力化してしまえば、増援は来ないのである。

そして、フェイトは動力炉までの近道……螺旋階段を目指し、稲妻

のように駆け抜ける。

バンッ！！

通路の突き当たり、巨大な扉を蹴破る。

その先に見えたのは、底が見えない程に長い螺旋階段。

遙か下方から、戦闘音が聞こえてくる。

「……もしかして」

目を凝らして見ると、時折、見慣れた桜色の光が散っている。

「やっぱり！」

吹き抜けを飛び降りる。

あえて飛行魔法を行使せず、自由落下の速度に任せる。

そして、見えた先で……

「……………ッ！！ 危ない！」

高町なのはの死角から、傀儡兵が戦斧を投擲していた。

「バルディッシュ！」

『Yes sir.』

バチッ……………バチバチッ！！

フェイトの身体の周囲に、稲妻が迸る。

『Sonic move』

全身に稲妻を纏ったまま、落下速度に、高速機動魔法による加速を加える。そして……

『Thunder Impact!!』

戦術も何も無い、身体ひとつでブチ当たる……………特攻を仕掛ける！

「間に合ええええええっ！！！」

バゴンッ！！

胴体を撃ち抜かれた傀儡兵が、吹き抜けを落下していく。

「はあああっ！！」

『Accel Shooter』

「シューーーーーー！」

バゴゴゴゴンッ！！

後から後から！ きりがなし！

「ユーノくん、そっちは！？」

「……芳しくない、かも！」

ギリッ……ギリリリリッ……！！

十本近いチェーンバインドで、傀儡兵を纏めて縛り上げている。そして、

メキヤメキヤメキヤッ！！

傀儡兵たちの身体を、捻じ切った。

……えげつない。でも、バインドを攻撃に転用するのは考え付かなかった。

「レイジングハート、次から参考にしよう！」

『All right』

「もう！ どこまで続いているの！！」

ただ延々と……妙に長い螺旋階段を、アルフの駆るバイクで延々と下る。

「あたし達は、いつも転移魔法で移動していたから詳しい構造は知らないんだけど……」

階段の段差を危うげ無く越えながら、アルフが言う。

手摺の下を覗き込んでも、ただ延々と続く螺旋階段しか見えない。

バイクごと吹き抜けにダイブしてもいい……というか、そうしたほうが早いのは当然だけど、そうした瞬間にバイクはただの重い荷物になってしまふ。何より……

『Caution!』

螺旋階段の中心……だだっ広い吹き抜けから、また数多の傀儡兵が顔を覗かせる!

「ああもう! 鬱陶しい!!」

こうして、敵にしつこく妨害されるっていうのが、一番の理由!

「アルフ、ユーノくん! 先行つてて!」

バイクから飛び降り、吹き抜けに身を躍らせる。

「ちよ!?!」「なのはっ!?!」

『オオオオオオツ!!』 『』 『』

いちいち対応していたんじゃ、間に合わなくなる!

何より、この三人の中では、私が一番戦闘力があるんだから……

私が一番、がんばらなきゃ!!

『Accel Shooter!』

「シューーーーーーッ!!」

キュゴゴゴゴツ!!

「次!」

『オオオオオツ!!』

次は、重騎士タイプ!

「デイバイン……!!」

『Divine Buster』

「バスターーーーーー!!!!!!!!!!」

ズバアアアツ!!

っている。

「こ、これは……ちょっと……無理……！」

「ぶフッ……！」

とうとう、吹いてしまった。我慢できないって。

「……………うがー……！」

あ、壊れた。

「助けに来たつつつてんだろー……！」

バゴオン……！！

まるで、フェイトの叫びにシンクロするように、螺旋階段が纏めて吹っ飛んだ。

『グウウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ……！！！！』

で……でかつ……！！

全体の形としては、二足歩行の人型だけど……とにかくサイズが桁外れだ！ さっきまで相手にしていた傀儡兵が、ミニチュアに見える！

ガシャコンッ……！！

そして、背中に装備した……これまた巨大な大砲が、私たちに向けてられる。

させるか！

「シュート……！！」

先手必勝！

砲口目掛けて、誘導弾を発射する。これで、あの砲は粉々に……

バチイイツ……！！

「え……？」

砲口に吸い込まれる寸前……障壁に阻まれてしまった。

絶好のチャンス逃してしまい……私の身体は、敵の照準の中。

更に、砲口内部には十分なエネルギーが充填されている！

ドゴオオオオオオッ！！

『Sonic Move』

『Flash Move』

レイジングハートと、フェイトのバルディッシュが同時タイミングで高速機動魔法を発動。その射線上から、緊急回避する。

ガキッ、ガキンッ！！

砲身が左右に可動し、もう一度私たちに向けられる。

「「させるかあっ！！」」

ギャリイイイインッ！！

緑色と、茜色。ユーノくとアルフが、チェーンバインドで砲身の向きを換える。

ドゴオオン！！

的をはずした砲撃は、私たちが下ってきた螺旋階段を、壁ごと大きく抉り取った。

「……っ」と

ザッ！

いつのまにか、最下層に到着していたようだ。こうして地面に立って見上げてみると、いかにこの傀儡兵が巨大であるのかがわかる。

ズシン……

『グロロロロ……』

同じく、着地を果たした傀儡兵。

足場を得たため、より巨体を活かした格闘戦を仕掛けてくるかもしれない。

ジャコンッ……！！

やっぱり。

背中に収納されていた、これまた超巨大なハルバードを取り出した。

「ぜえッ……ぜえッ……」

アルフは、無茶をしすぎた反動からか、ぐったりしている。ユーノ

くんがアルフを庇いつつ、巨大傀儡兵の死角に退避。

「はあっ!!」

『Arc Saber!』

フェイトが光刃を飛ばす。それを、巨大傀儡兵は棒立ちで迎えた。
ガキンツッ!

避けるまでも無い、ということか。光刃は、あっさりとバリアに弾かれてしまった。

「バリアも硬い!」

最大威力に近い誘導弾を、数発纏めて弾いたバリアだ。ディバインバスターでも、打ち抜いて本体にダメージを与えるのは難しいかもしれない。

「それに……ッ!!」

『ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

大上段から、ハルバードで薙ぎ払ってきた!!

ドガガガガガガッ!!

地面を、壁を、掘削機のように抉り飛ばす!

暴風のような攻撃の中、照れくさそうに……そして、嬉しそうに、フェイトが言う。

「でも……二人でなら!!」

私への信頼を、口にする!

ガキンツッ!!

再び、背中の大砲が私たちに向けられる。
でも。

「うん……!!」

フェイトが、私を信頼してくれている……

「うんっ!!」

それが……そんなことが、堪らなく嬉しくて……！

『ウオオオオオオツ！！』

「はあああああつ……！」

キュゴゴゴゴツ……！

『グアツ！？』

力が、沸いてくる……！

「アクセルシューター……フルパワー……！」

「フォトンランサー……マルチショット……！」

単発が効かないのなら、数で押す……！

「シュー……ート……！」

「ファイアツ……！」

ガゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……！

巨大傀儡兵が仰け反る……！

今がチャンスだ……！

「行くよ、バルディッシュ……！」

『L a n c h e r F r o m』

「こつちもだよ、レイジングハート……！」

『C a n n o n M o d e』

チュイイイイイイイイイイイイイイイ……！！

敵の大砲に、膨大なエネルギーが集まっていく。

第二十九話（後書き）

なのはシリーズにおいては、「強敵が味方になると弱くなる」という法則は適用されませんのでご安心ください。

第三十話(前書き)

短い上に、おもしろい、めんなさい、

第三十話

ズズウン……

巨大傀儡兵が、沈む。

バシユウウウツ………

レイジングハートとバルディツシュが、一仕事を終えたかのように排熱を行う。

「……………フェイト」

歩み寄り、その手を取る。

「……………」

無言で……………でも、確かに、フェイトは握り返してきた。

「ありがとう、助けてくれて」

「……………うん」

少しはにかんで、フェイトが笑う。

「フェイト……………!!」

アルフが、ユーノくんを荷物のように小脇に抱えて駆けて来た。

「アルフ……………ッ!!」

それを、フェイトがしっかりと抱きとめた。

と、その時。

視界の隅で何かが……………倒れたはずの巨大傀儡兵の巨体が……………!

『ウ、オオオオオオオオオ!!』

「なっ……………!?!」

うそ! まだ動けたの!?

『グガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!』

ブオオンツ!!

巨大傀儡兵は残った右腕で、へし折れたハルバードの柄を、私た

「……秀人」

あ、クロノだ。でも、どうしたんだろう？

額に、見事なまでに青筋が浮かんでいて……明らかに怒っている。

「……エイミイから連絡があった。君が破損させたブリッジの内壁

……その奥にあった、AMF発生装置のコントロールユニットが粉々だそうだ」

ああ、だから転送魔法で来られたんだ……

「……ツケに」

「出来るかッ！！」

「ごんっ！」

S2Uでしこたま殴られていた。

「まあまあ……おかげで、危ないところで助かったんだし、いいんじゃない？」

あそこでフェイトが助けられなかったら、墜とされていた。

差し引きゼロ、ってことで。

「それは……そうだが」

「そうなの。だから、結果オーライだよ」

『みんな、聞こえる？』

S2Uから、全体に向けて通信が入った。

『さつき、秀人君となのはちゃんが倒した二体の傀儡兵なんだけど

……』

エイミイだ。

『どうにも、あの二体が、他の傀儡兵の親玉……っていうか、生産プラントそのものだったみたい。

二体の間で循環するエネルギーの余剰出力で、他の傀儡兵を製造したり、動かしていたらしいんだ』

一応、念のために。

「レイジングハート、エリアサーチお願い」

『All right』

キンツ……

音叉を鳴らすような音を立て、波紋が広がる。

エリアサーチの結果は……

『周辺に、敵性因子と思われる熱量・質量・魔力を持った存在は、認められません』

「……本当みたい」

ところで。

「秀人さん達も、あのおっきいの倒したの？」

「ああ。でも、そんなに強くは無かったけどな」

秀人さんは、右斜め上に視線を外し、言う。

これ……秀人さんが、話を誤魔化す時の仕草だ。

「……嘘」

秀人さん……何を誤魔化そうとしているのかな……？

「な、何がだ？」

「……怒らないから。絶対に怒らないから。……正直に教えて？」

「いや、何のことだか俺にはさっぱり、」

この期に及んで、まだ白を切ろうだなんて……

「お・し・え・て？」

「ごりっ……」

キャノンモードの先端を、鼻先に突きつける。

「秀人……諦める」

クロノが、ふうとため息をついた。

秀人さんは、がっくりと肩を落とす。

「……わかったよ」

そして、クロノも説明に加わって……

「秀人さんの馬鹿……」

「おおお怒らないって言っただろー!?!」

さつきはさつき、今は今!!

「何で言ってくれないの!?! 同時に叩けば、もっと負担無く倒せたのに!?!」

リンクしているというのなら、一体の、同じ箇所に損傷を与えてしまえば、修復は行えない。

そんな簡単なこと、秀人さんが気づかないわけじゃない。なら、理由はひとつだ。

「また、私に負担をかけないようにって抱え込んだんでしょ!?!」

「……………ああ」

ぶちんっ……………

「……………レイジングハートツ!?!」

『All right.』

今日という今日は……………許さない!!

『Divine Buster』

「なのは、ストーーーーooooooooooooッブ!?!」

「ちよつと待った! 話を聞いてくれ!?!」

ユーノくんまで、庇い立てする気!?!?

「……………なに。言い訳なんて聞きたくない」

チャージ、完了。

「なのはには、大事な役割があるからなんだ!?!」

ぴたつと、発射直前で止める。

大事な、役割……………?!

「この先に、この庭園を動かしている動力炉がある」

『うん。そこから、数百メートルの距離』

エイミィが言うからには、本当なんだろう。

「動力炉には、ロストログアが使われているらしくて、封印魔法で

動きを止めることが出来る」

フェイトが、バルディッシュ振った。

「リニス……えと、ボクの先生みたいな人が、バルディッシュの中に色々とデータを残してたから、本当だよ」

なんとなく、話が読めてきた。

「でも、俺の封印魔法は乱暴すぎて……逆に、動力炉を暴走させるかもしれない」

「……………」

「だから、なのはには、できるだけ万全の状態で動力炉の封印に向かってもらおうと思って……」

「……話は、理解できたよ」

「なら……………」

「でも……一言くらい、欲しかった……………」

レイジングハート、砲撃はキャンセル。

（『…………… All right』）

少しくらい、頼ってくれたって……私、そんなに頼りないのかなあ

……………

「悪かった。今度からは、ちゃんと言うから」

凹んで俯いた私の頭に、ぽん、といったものように秀人さんの手が乗っかる。

「……………絶対だからね」

今日のところは……………許してあげよう。

「二手に分かれるぞ」

私と、ユーノくと、クロノは動力炉へ。

封印魔法が使える私と、結界魔法に詳しいユーノくん、それに、いざというときの保険にクロノ。

傀儡兵はもういないけど、崩れた瓦礫で道が塞がれていたとき、一々私が吹き飛ばしていたのでは、肝心なときに魔力が足りなくな

つてしまつかもしれない。
そこで、クロノが露払いを買って出た。

フェイトと秀人さんとアルフは、プレシアの元へ。

こちらは、秀人さんがどうしてもプレシアに一言ぶつけてやりたい、と望んだことだ。

「秀人さん、気をつけてね」

「任せとけ」

うん。秀人さんがいれば、こっちも大丈夫。

「ユーノ、クロノ。なのはのこと、頼む」

「うん。任せて」「ああ」

それにしても、秀人さんとクロノ……初対面は最悪だったのに、結構仲良くなったよね。

これも、秀人さんの特徴なのかもしれない。

もしかしたら、プレシアも説得できちゃったり……なんて、都合良すぎるよね。

「それじゃ、行こう！」

妄想はここまでだ。

「無茶はするなよ、なのは」

「秀人さんには言われたくないよっ……！」

まったくもう……！！

「ははは、そうだな。んじゃ、行くぞフェイト、アルフ！」

バイクではなく、自分の足で走っていく。

「フェイト……！」

秀人さんについていくフェイトに、声をかける。くるりと振り向いたフェイトに、一言。

「がんばれ！」

「……うんっ……！」

フェイトは今度こそ振り返らず、走っていった。

そして、次元震の中心部近くでしか発動できないという最大のデメリットがある。

リンディが今の今まで使用しなかったのは、そういうことだった。秀人たち突入部隊が道を開き、障害となる傀儡兵を全て止めたことで、ようやく発動できたのだ。

『動力炉も、じきに封印されます』

リンディは、宣告を下す。

『終わりです』

「まだよ！ 私は、アルハザードへ……！！」

『アルハザード……失われし都。禁断の秘術……そんなものは、もう失われています』

それは、管理世界の人間であれば、生涯に必ず一度は耳にするであろう御伽噺。

原初にして、至高の世界。

死者蘇生。時間支配。因果律操作。

神域の技法を誰もが使用し……なんらかの理由で、滅びた世界。

そんな世界は、最初から無かった。

そもそもが作り話だというのが最も現実的な話だ。

第一、本当に時間や因果律を支配できたというのなら、なぜ滅びたというのか？

この御伽噺の作者が未だに不明だということが人々の空想に拍車を掛け、一人歩きしているに過ぎない。

いよいよ、そんなオカルトじみたものに縋るようになってしまったのか、と、リンディはプレシアを哀れむ。

「違うわ」

だがプレシアは、それを確信を持って否定する。

「アルハザードは存在する」

『……………では、あなたは。そこに行って、何をするのか？』
「取り戻すのよ……………私とアリシアの……………過去と未来を……………」
神を、運命を呪う、呪詛を吐く。

「こんなはずじゃなかった、世界の全てを……！」

バゴンツ……！！

と、壁が破壊された。

「おかしさん……………」

フェイトとアルフが、姿を現す。

「お前に一つ、教えてやるよ」

更にその向こうから、瓦礫を踏みしめる足音。

ボロ切れ同然のジャケット。穴だらけのグローブ。プロテクター
が剥がれ落ちたブーツ。

「過去を取り戻すことは、誰にも出来ない」

秀人が、プレシアの元に辿り着いた。

第三十話（後書き）

今回は、ハルハルが一番書きたかった話を掲載します。
かなり早く上げられるので、お待ちください。

第三十一話（前書き）

ごめんなさい！！

ハードディスクがウボアーしてしまいました！！

遅れを取り戻すために、続きは明日、投稿いたします。

第三十一話

(やっぱり、似てるなあ……)

秀人は、初めて生身で相対するプレシアに、そんな意味不明の感想を抱いていた。

漫画のような巨悪をイメージしていて、モニター越しに見た姿はまさにソレだったのだが……こうして見ると、普通の人間であることに、戸惑った。

「お前は、お前たちは……なぜ、邪魔をする!? 何度も、何度も……!!」

憎憎しげに秀人を睨み付けるプレシア。

その傍ら、あの巨大な水槽の中には、フェイトにそっくりな少女の遺体。

フェイトはそれを、何ともいえない表情で、ただ見つめていた。

「……あなたが、俺の家族や知り合いを危険に晒すからだ」

次元断層などというものをこんな場所で起こされてもしたら、秀人たちの世界は、凄まじい被害を被ってしまう。カントクも、先生も、桃子も、恭也も、美由紀も、アリサも、すずかも……傷付き、最悪、死んでしまいかもしれない。

「もう、よせ。あんたがどう足掻いたって……その子はもう、死んでいるんだ」

プレシアもまた、ある意味被害者であるということは、秀人にも分かっている。

話し合いで止まってくれるなら……暴力に訴えずに済むのなら……それに越したことは無い。

「あんたがやるうとしてるのは、ただの無意味な虐殺だ」

「関係無い……! 私は、アリシアさえ取り戻せれば……!!」

(駄目か……)

諦観が、秀人の心を支配しかける。もう、誰かの言葉で止まれる段階ではないようだ。

(仕方ない。言葉が通じないなら……ぶちのめして、確保しよう)
「待って」

だが、フェイトが秀人を止めた。

「ボクに、話させて」

両手を横に広げ、秀人の前に立ち塞がる。

「……大丈夫か？」

「うん。……アルフも、お願いだから、ボクにやらせて」

「………わかった」

「ありがとう」

アルフを一撫でし、一歩、前へ。

「おかーさん……」

フェイトが、プレシアに一歩、近づく。

「お前の母親になった覚えは無い」

プレシアは、目も向けずにそう言った。

「てめえ……！」「アルフ、少し待て」

飛び出そうとしたアルフの手を掴み、止める。

「ううん。おかーさんは、おかーさんだよ」

笑みを浮かべ、母親への好意を言葉にする。

「ボクの中にある記憶は、アリシアの物なんだよね」

「そうよ。おまえは、アリシアの模造品だもの」

淡々と、フェイトを否定する。

「おかーさんは、ボクのことなんてどうでもいいんだよね」

「そうよ。私には、アリシアさえいればいいのよ」

暖かな言葉に、酷薄な返事。

だが裏を返せば……フェイトは、プレシアとの会話を成立させているということだ。

「おかーさん、覚えてる？ アリシアの、六歳の誕生日のこと」「六歳……アリシアが、死んだ年。」

「……………」
黙っているのは、肯定だろうか。

「ピクニックに行つて、シート広げて……花の冠、作つてあげただよね」

場違いなほど楽しそうに、自分のものではない思い出を語る。

「それが、何だつて言うの……！」

プレシアは激昂し……初めて、フェイトと目を合わせた。

「それは、アリシアの記憶よ！ お人形のお前じゃない！ 私の、アリシアの記憶なのよ！」

プレシアは、言葉のナイフでフェイトを切り刻もうとする。

「ううウ……………！」

アルフは怒り心頭で、変身魔法が解けかかっている。

「頼む。もう少しだけ、我慢してくれ」

「うん、知ってるよ。これは、アリシアとおかーさんの記憶」

だがフェイトは、寂しそうではあるが、微笑を崩さない。

「おかーさん……アリシアが、誕生日に何を欲しがっていたのか、覚えてる？」

劇的な、変化があった。

「……………あ……………あ」

ぱくぱくと、愕然とした面持ちで、フェイトの顔を……いや、アリシアの面影を、穴が開くほど見つめる。

「……覚えてない？」

「違うッ！！ 覚えてる……覚えてるわッ！！」

プレシアは、割れるような大声で、否定した。

だがそれは……暗に、今の今まで忘れていたということの、証明だった。

「プレゼント……アリシアの、誕生日プレゼントは……！！」

必死に思い出そうと、髪を振り乱し、かきむしる。

ふらふらと後ずさり……虚数空間の穴の方へ……！！

「ッッ！ 生まれ、馬鹿！！」

秀人の制止も空しく……

「ごっんっ……」

と、プレシアの身体が、アリシアの遺体が入った水槽にぶつかつた。

次元震の揺れで、不安定に傾いていたアリシアのポッドは、自重で傾いていつてしまう。

「アリシアッ！！」

我に返つたように、アリシアの水槽の、その金具部分を掴み止めようとした。

だが、質量の差から、プレシアの身体までもが、虚数空間へと吸い込まれるように……

「……あ」

落ちる。

「アリ、シア……」

落ちていく。奈落の底へ。

綺麗な花が咲く、どこまでも続くような草原。

それは、人が死の直前に垣間見る、走馬灯だったのだろうか。

自分と娘だけの、一年に一度の、楽しい時間。

かつて無いほど鮮明に、幸せだったあの日の風景が、目の前に広がる。

アリシアは、小さな手で一生懸命に花の冠を作ってくれて、少し楕円気味になったそれを、頭に乗せてくれた。

「アリシア、ありがとう……母さん、とても嬉しいわ……」
プレシアの口から、言葉が漏れる。心だけが、あの日に戻ったかのように。

「誕生日のプレゼントは、何がいい……？」
久しく忘れていた笑顔を浮かべながら、幻影のアリシアに語りかける。

「なんでもいいのよ……ぬいぐるみ？ おもちゃ？」

『本当に、何でも良いの？』

「ええ、もちろんよ」

『それじゃあ……』

アリシアへのプレゼントとは、なんだったのか。

『ママ、わたしね……』

妹が欲しいの

「あ……」

ハッと……夢から覚めたように、思い出した。

『妹がいれば、お留守番しても、寂しくないんだよ』

「そう……でも、ごめんなさい。すぐに用意することは……できな

いの」

『ふうん、そっかあ……じゃ、約束!』

「約束……」

『いつか必ず……妹に会わせてくれる?』

「ええ、約束するわ。いつか、必ず。あなたの妹に……会わせてあげる」

「おかーさん! ……おかーさんッ!」

穴の淵から、必死に手を伸ばす……自分を母と呼ぶ、アリシアとよく似た少女。

「妹………アリシアとの、約束……」

そう。最初から、間違えていたのだ。

『彼女』は、アリシアの代替品では……人形などでは無かったのだ。

「わたしは……何をしていたのだろう」

彼女は、アリシアではない。

「私は、いつも……」

彼女は、アリシアが切望した……妹だったのだ。

「気づくのが、遅すぎる……」

約束は、果たされていた。

「ごめんなさい………アリシア」

大事な妹を、愛してあげなかったことを。

神という存在が、あるとしたら。

「ごめんなさい………フェイト」

もう一人の娘を、愛してあげなかったことを。

残酷なまでに平等で、公平だ。しかし。だからこそ。神と
いう存在は……

「ごめんなさい……ッ!」

心の底から、謝罪した。

罪を償おうとする者には、平等に……

「気付いたなら……まだ、遅くない」

手を、差し伸べる。

「過去を取り戻すことは、誰にも出来ない」

救いの手は痛いほどに、力強く……プレシアを繋ぎ止めている。

「それでも……どんなに辛い過去、やり直したい過去でも……いま現在
に繋がっている」

腰元から伸びる、一本のロープ。それだけの装備で、虚数空間
へ飛び込んだ。

「過去を取り戻すことが出来なくても、あの日に帰ることができな
くても……」

彼は、そういう男だ。手を伸ばさずにはいられない、愚直なまでの、お人よし。

「現在いまを生きて、過去を償なうことは、きっと……誰にでも出来る」

吾妻秀人は、そういう男だ。

間に合った……！！

柱に命綱を結んで、虚数空間にダイブして……プレシアの手を、掴んだ。

「……………つくー！！」

でも、さすがに重い……！！

無理がある体勢で、プレシアと……プレシアが掴んでいる、液体が満タンに詰まった水槽を支えているんだ。

プレシアがアリシアを手放せば簡単だけど……そんなこと、絶対にしないだろう。

「この……！！」

フェイトとアルフが引つ張りあげようとしているけど……「いつは敵しい。

「手を、放しなさい」

宙ぶらりんのまま、憑き物が落ちたように涼やかな声で、プレシアが言った。

「このままじゃ、あなたまで落ちてしまうわ。私は、いいから……」「ざっけんな！！ 何、一人で勝手に諦めてんだよ！！ あんたは、

まだ……！！」

力を込めながら、プレシアに届かせるように、叫ぶ！

「フェイトに、謝ってないだろうがッ！！」

プレシアは、心底不思議そうに首をかしげた。その手は、水槽を保持し続けている為にうっ血し、青黒く染まっている。

「なぜ、そこまでするの……？ 私は、フェイトをさんざん虐めて痛めつけた……あなたにとっても、憎い敵なんでしょう……？」

確かに、憎くないと言えば嘘になる。

「超、個人的なことなんだけど……」

でも、憎めない。憎みきれない。なぜなら……

「……あんたつてさ、」

初めて見たときから、思っていた。

「俺の母さんに、似てるんだよ」

あの日、離してしまった手。

「マザコン野郎って笑いたければ、笑えよ……！！」

今は……この手を、絶対に離さない！！

「もうすぐ、増援が来る！！ それまで、諦めるな！！」

命綱は……まだ、ほつれていない。クロノ達が来れば……

ズズンッ……！！

と、庭園が、最後の抵抗のように、身を震わせた。

その揺れは、最深部に程近かったこの場所にも伝播し、地面を揺

らし……

「あ……」

フェイトの小さな身体を、宙に放り出した。

穴の淵に足を掛け、踏ん張っていたフェイトは当然、虚数空間の中に……！！

「フェイトオオオオオオオオ！！」

アルフの絶叫が、木霊する。

「フェイト、掴まれええええええ！！！！」

プレシアを右腕一本で吊り下げ、左手を伸ばす！！

ズルツ……

フェイトの手は、俺の手をすり抜けて……！！

「くそおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
お！！！！」

一瞬、庭園が揺れたのを感じ、プレシアはアリシアの水槽を持つ
手に力を込めた。

顔を上げた先。

「あ……」

穴の淵から、フェイトが投げ出される姿と、

「くそおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

「お！！」

秀人がフェイトの手を掴み損ね、叫ぶ姿が……静止画のように、目に飛び込んできた。

「フェイト……………」

それは、半ば無意識で行った行動だった。

『現在いまを生きて、過去を償う』。

秀人の言葉…………それが、その瞬間にプレシアの脳裏に浮かんだのかどうかは、不明だ。

「フェイトツ！！！！」

プレシアは、迷うことなく……

アリシアの水槽を手放し、フェイトの手を…………しっかりと、掴んだ。

「え…………？」

フェイトは、ぼかん…………とプレシアを見つめる。

「おかー、さん…………？」

必死な表情で、自分を助ける、母親の姿を。

「フェイト…………！ 放したら駄目よ…………！！！」

「おかーさん…………でも、アリシアが！！！」

虚数空間へ落ちていく、アリシアの亡骸。

「アリシアはもう、死んでいるの…………！！！」

とつとつプレシアは、現実を受け入れる。

「あなたはまだ、生きているのよ！」

アリシアの妹を…………娘を！ 二度も死なせて、たまるものですか！

「……………!!」

フェイトの目が、見開かれる。

「ボク……………おかーさんの子供で、いいの？ アリシアの、代わりにで

……………」

「馬鹿なことを言わないで」

しょぼくれるフェイトに、プレシアが微笑みかける。

「あなたは、アリシアの妹。わたしの娘……………フェイト・テストタロツサよ」

恐らくは、初めてであろう……………フェイトに向ける、笑顔だった。

「おかーさんっ……！」

母は娘を。娘は母を。

放さぬように。離れぬように。お互いを、しっかりと抱きしめた。

最後の手向けにと……………落ちていくアリシアを、瞬きもせずに見送る。

その二人の耳に……………ある声が、確かに聞こえた。

『 ママ……………約束、守ってくれてありがとう 』

それは、プレシアには懐かしく。

『 フェイト……………やっと会えたね 』

フェイトには、聞きなれない声だった。

それは、この場においてありえる筈の無い……………アリシアの声だった。だが、二人の耳に、アリシアの声は確かに届き。

第三十一話（後書き）

『プレシア生存』というiifは、そもそもハルハルがこの小説を書き始めるきっかけにもなった妄想です。

というか、この話を書きたいがための小説です。

続きは明日。

結構長めですので、お付き合いください。

第三十二話

「おりゃああああああ!!」

ブオンツ!!!

最も重い水槽が無くなったことで、俺とプレシアとフェイトは、アルフの気合と共に、穴から引つ張り上げられた。

「さ、さすがに、今回ばかりは………死ぬかと思った………!!!」

息も絶え絶えに、その場にへたり込んだ。

プレシアとフェイトは、お互いを抱きしめあっている。

解決………といえば、解決だ。九つのジュエルシードは虚数空間に落ちてしまったけど、主犯のプレシアは無事確保。次元震も、リンデイさんのなんとかシールドで抑えられていて、持ちこたえているでも。

あのアリシアって子の遺体………できればあれも、ちゃんと回収してやりたかった。

「ウー………」

アルフが唸りながら、フェイトとプレシアを見ていた。

「いいのか？ お前は行かなくて」

ひよこつと顔をこっちに向ける。

「あたしはまだ………アイツを許せない」

………そりゃ、そうかもな。フェイトを散々痛めつけた奴だ。フェイトを大事にしているアルフが、そう簡単に納得するわけがない。アルフ本人も、結構………いや、滅茶苦茶ひどい目に遭ってるし。

「でもさ」

と、アルフが俺を………正確には、右手の魔力結晶を見ながら、言う。

「それ、元はあたしの腹ん中にあっただよな」

「ああ」

「でも、臓器との癒着は無かった」

「……ああ」

なんとなく、アルフの言いたいことが伝わってくる。

「もしかして、プレシアは………最初から、いざとなれば取り出せるようにしていたんじゃない？」

「………どう、だろうな」

確かに、そういう見方もある。俺も最初は、理由を思いつかなかった。

もしかしたら………という、あくまで仮定の話だが。プレシアは、最後の最後まで、己の内にあつた修羅に、抗い続けていたのではないだろうか？

「あたしは、信じてみようと思うんだ。

今は無理でも………アイツが、ちゃんと反省してるってことが、納得できるまでは………」

その頭に手をやり、犬にするようにわしわしと撫でる。

「………好きにするといい。これから、時間はいくらでもあるんだからな」

さてと………

「急いで脱出しよう。もう、いつ崩れるかも分からない」

なのは達のことだ。ちゃんと封印はできているとは思いが………さつきから、細かな震動が続いている。もう、この庭園そのものが崩れ始めているんだ。

「プレシア、フェイト。脱出するぞ」

俺は、落ち着いてきた二人に言う。魔力以外にも、いろいろと消耗しているに違いない。

「おかーさん、立てる？」

「ええ。………ッー！」

立ち上がるうとして………すとん、と膝が碎けてしまった。

「………無理するから。」

「よいしょ」

プレシアを担ぎ上げて、背負う。軽いなあ……

「……………あ」

耳元でプレシアが何かを言おうとしていたが……………とにかく今は、脱出する方が先だ。

「行くぞー!!」

ズズズズズ……………

封印魔法を打ち込まれた動力炉は、始めは抗うように震動を増していたけど……………それが、ぴたりと止まる。

『Sealing Completed』

「よし!!」

動力炉の封印、完了!!

「クロノ、ユーノくん、戻るよ!!」

「了解だ」「急ごう!」

もう用は無い。一刻も早く、秀人さん達と合流しなきゃ!

ズシン!!

「え!?!」

今の揺れは……………!?!

「ちゃんと、封印したよね!?!」

走りながら、ユーノくんに聞く。

「ああ、手順も問題なく、魔力も十分だった!」

「じゃあ、何で!?!」

「単純に、この庭園そのものが壊れ始めているんだ! 急いで脱出

しないと、生き埋めだ！」

「まったく、最後の最後まで気が休まる暇が無い！」

「クロノくん！ 転送ポート、一番近くに開いたから！ なのはちやん達も連れて、急いで！！」

「一番近くって……それでも、直線距離で二百メートル以上は離れている。」

「秀人たちと……プレシアはどうなった！？」

「目の前の壁を、砲撃魔法で破壊しながらクロノが聞く。」

「ええと……魔力反応、四つ！ 健在だよ！！」

「秀人さん。フェイト。アルフ。そして……プレシア。」

「ヤツなら当然だ」

「うん。秀人なら、やってくれると思ってた」

「クロノとユーノくんは驚いた様子も無い。」

「でもまさか、あの益体の無い妄想が現実になるなんて……」

「……よし、バルディッシュに、データの転送、完了！ もう大丈夫！」

「それじゃあ後は、脱出用の転送ポートに向かうだけだ！」

「足元に開く虚数空間に気をつけながら、走る。」

「なのは！！！」

「秀人さん！！！」

「よかった！ フェイトも、アルフも無事で……」

「その秀人さんに背負われて……プレシアの姿が見えた。」

「……プレシア・テストロッサ」

「クロノが一步、踏み出す。」

「そして、感情を抑えた声で罪状を読み上げる。」

「時空法違反・特殊研究管理法違反・ロストログアの不正使用……」

「そして、児童虐待の容疑で、あなたを逮捕する」

「フェイトが、プレシアの服の裾を、ぎゅっと不安そうに握り締めた。」

「クロノ、今はまだ……」

秀人さんが、苦りきった顔で言う。

「……分かってるさ。今は、脱出する方が先決だ」

転送ポートに、大人数で一気に飛び込み、アースラに帰還。その直後、さっきまで転送ポートがあった場所が、虚数空間に飲み込まれた。

「あ、危なかった……！！」

ドッグの床に座り込む。全員、無事だ。

これで、一安心……

ズズズズ……！！

じゃない。もう震動は、かなり危ないレベルに達してきている。

「クロノ。もしこの庭園が崩れたりしたら、どうなる？」

秀人さんが、単刀直入に聞く。

「これだけの質量だ。たとえ動力炉を封印してあるとはいっても、周辺の次元世界には、少なからず被害が出る」

「具体的には？」

「……庭園の破片が、ワープアウトして落ちてくる」

大惨事だよ！！ 庭園の破片……遠めに見ただけでも、10メー

トル四方はある！ それが、無数に降り注いだりしたら……！！

山奥とかだったら、まだいい。でも、それが街中に落ちてきたりでもしたら……！！

「アースラの武器で、粉々にしたりとか……！！」

あの凶体だ。どうせ、山のように武器を搭載しているに決まってる。

「粉碎しようにも……封印した動力炉がまた活性化して……更に被害が広がることも考えられる」

「じゃあ、どうすればいいの！？」

ああもう、クロノに当たっても仕方ないっていうのに……！！

「あの庭園を、丸ごと封印するしか無いだろうな」

「丸ごと……」

あの、東京ドーム何個分かを数えるのも馬鹿馬鹿しいサイズの、庭園を……？

「なのは。ユーノ」

秀人さんが、その庭園を睨みながら、言う。

「俺達で、なんとかしよう」

……そうだよな。今ここで騒いでいる暇なんて、無いんだ。

頭が、すーっと冷えていく。そして、レイジングハートを握り締める。

「待って！ ボクも……！」

フェイトが加われば、成功率はぐんと上がる筈。

「バルディツシュ、もうヤバいんだろ」

え……？ 見た感じ、傷一つ無いけど……

「う……」

苦虫を噛み潰したような表情で、黙りこくる。じゃあ、本当に……？

「うん。間に合わせて応急処置したんだけど、ここに来るまでの戦闘で……」

バツが悪そうに、白状した。

「でも、魔力ならまだ余裕が……！！」

それに、レイジングハートが答える。

『これから行う封印魔法は、大量の魔力を消費します。バルディツシュが万全ならば、耐えられるでしょう』

それは、逆を言えば万全でなければ耐えられないということだった。

「もし、今の状態でバルディツシュを使ったら……？」

『全機能……機構から思考AIまでの全てが、全損します』

「……………」

フェイトはバルディッシュを握り締め、息を呑んだ。

機構……外装の損傷であれば、直せば直る。でも、思考AI……
要は、バルディッシュの心は、戻ってはこない。
つまり、バルディッシュは死んでしまう。

『……あなたが、望むのであれば』

「馬鹿なこと言な!!」

バルディッシュのその言葉に、フェイトが声を張り上げる。

「だから今回は、俺達に任せておいてくれ」

うん……それしか、無いよね。フェイトだって、バルディッシュを犠牲にしたくはないだろうし。ちょっとだけ、厳しいかもしれないけど……

「待つて」

意外な人物が、声を上げた。

「おかしさん？」

プレシアが、秀人さんを見ている。

「少しだけ、待つて頂戴」

「いたい、何だろう。」

「フェイト、バルディッシュを」

「うん」

疑いも無く、バルディッシュを差し出した。プレシアはそれを手に、極小の探查魔法で、バルディッシュの状態をスキャンする。

「機体の損耗は……外部は12%、内部が40%」

四割……大雑把に言っつて、半分が壊れているらしい。秀人さんの見立ては、正しかった。

そしてプレシアは、次に私を見た。

「あなたのデバイスを、見せてくれないかしら」

「え……」

レイジングハートを抱き、後ずさる。だつて……ついさっきまで敵だったんだ。警戒するな、つて方が無理だ。

「お願い。時間が無いの」

どうしよう………考えて、考えて。

「うっううっ………秀人さぁん………」

秀人さんに、委ねた。

「………それは、なのはが決めるといい」

「そんなぁ………」

私はまだ、そこまで割り切れないよ………

『マスター』

レイジングハート………？

『ヒデトは、彼女を信じたようです。ですから、私も彼女を信じてみようと思います』

………レイジングハートが、そう言うなら。

「………わかった」

本当は嫌だけど、プレシアに任せてみよう。

「………どうぞ」

プレシアに、レイジングハートを手渡す。

そしてプレシアは、バルディッシュと同じように、内部をスキヤンした。

「損耗率、内部・外部、それぞれ10%以下………っ！？」

これは………！？」

何か驚いた様子だ。さっきから、プレシアは一体何をしようとしているのだろう。

「あなた………」

秀人さんに何かを言おうとして、言葉に詰まった。

「秀人だ」

あ。そっか、名前………

「秀人。この二機を持ちなさい」

プレシアは、フェイトから受け取ったバルディッシュと、私達のレイジングハートを秀人さんに手渡した。

「ええと………持ったけど」

左手にレイジングハートを、右手にバルディッシュを持った秀人さんが、プレシアに聞き返す。私もフェイトも、両手の納まりが悪い。

「あの魔法を使いなさい」

あの魔法……って、例の連結魔法陣を？ 何でこのタイミングで

……

「でも、いくらアレで魔力を増しても、バルディッシュの機体が耐えられないことに変わりはない……」

秀人さんも同じようで、納得がいつていない。

だがプレシアは、予想外の提案をしてきた。

「あなたたちじゃない……バルディッシュとレイジングハートを、繋ぎなさい」

「……はい!？」

え、それって、レイジングハートとバルディッシュを、合体させるってこと!？

「そんなこと、できるわけが……!」

機体を制御するプログラムから、構成素材まで……レイジングハートとバルディッシュに、共通項はほとんど無い。

いや、もしあったとしても……そんなプラモデルみたいに簡単には……

だがプレシアは、確信を持って告げる。

「秀人になら……いえ、秀人にしか出来ないわ。秀人の魔力資質……」

……」

魔力資質……？ 確か、フェイトの電気がそうであるように、変換プロセスを経ずに魔力の属性を変換できる、ある種の才能。秀人さんに、そんな物が……？

「……………『結合』」

「ありえ、ない……………」

真つ先に反応したのは、クロノだった。

「ソレは、何年も前に、存在を否定されている」

そんなに珍しいの？

聞く限りでは、『結び合わせる』という、ごく単純なものに思えるけど……………ユーノくんまで愕然としている。

「あの……………具体的には、その『結合』の、何がありえないの？」
とりあえず、聞いてみた。

「たとえば、リンカーコア」

クロノの話は、いきなりその言葉から始まった。

「空気中の魔素を取り込み、魔力を精製する……………魔導師にとって、もう一つの心臓のようなものだ」

うん。それはユーノくんの授業で、何度か耳にした。

「その精製する魔力の大小の差こそあれ、機能的には、誰のものであろうとも大差は無い」

それも、聞いた。たとえ魔法が使えない人にも、必ずリンカーコアは備わっているのだと。

「だが……………例えば、僕と秀人のリンカーコアに、互換性は全く無い
なぜなら……………僕達二人のリンカーコアを動かしているのは、それ
ぞれ全く別の意思だからだ」

同じように、同じ魔法を習得したとしても……………その発動の際に踏まれるプロセスは、千差万別。

『同じようなもの』と、『同じもの』には、絶対的な隔りがある。
そういうことらしい。

「その、全く違うものを、文字通り『結び合わせる』……………言っ
てしまえば、水と油を、有機物と無機物を、プラスとマイナスを、完全

に融合してしまう。

それが、魔力変換資質『結合』だ」

……確かに、そんなことはありえない。でも……

「でも、あなたは……誰よりも、知っているのではなくて？」

「……………」

クロノは、グウの音も出ない。私とフェイトの勝負の日も、今日、大量の傀儡兵を相手取った時も……クロノは、秀人さんの能力を身をもって実感しているのだから。

もちろん、私たちも。

「だが、二機はAI搭載のインテリジェントデバイスだ。AIが衝^{コンク}突して、対消滅してしまうかも……！！」

「そのレイジングハートというデバイスは、少し特殊だわ」

……ユーノくんが、古代遺跡から発掘した、正体不明の出土品。

それが、レイジングハート。デバイスとしての使用が可能だったから、デバイスとして扱ってはいるけど……まだまだ、謎が多い。

「容量が、デバイスとしては異常なほどに大きい。自身の人格AIと、全ての魔法術式……その全てを合わせても、全体の10パーセントも使っていない」

うそ。 たったの一割も……？

あれだけ毎日、たくさん魔法を覚えて、登録して……それでもまだ、十分の一以下！？

「レイジングハート、本当？」

『Yes・No problem』

……………私、実はとんでもない子と契約しちゃったんじゃないだろうか。

「だから、バルディッシュと合体させたとしても、AIが対消滅することは起きない筈よ」

「信用していいんだろっな」

クロノが、用心深く聞く。

「腐っても科学者よ」

プレシアは胸を張り、太鼓判を押す。

「ひでと、お願い」

フェイトが、秀人さんを上目遣いに見た。

「ボクは……最後まで、ちゃんとやりたい」

秀人さんは、少しだけ考え込んで……

「……………よし、ちよつと待つてろ」

フェイトの頭を、ぽん、と軽く撫でた。

「行くぞ、レイジングハート」

『Yes , my b a d y 』

レイジングハートは、相棒、と秀人さんと呼ぶ。

「バルディッシュも、力を貸してくれ」

『Yes , , , , , my f r i e n d 』

「……………!!」

バルディッシュの言葉に、秀人さんが目を見開き……嬉しそうに、笑った。

「ああ！ それじゃ、二人とも……やるぞー！」

『 Stand b y r e a d y 』

ヴォオオオオンツ……………!!

秀人さんの足元に、魔法陣が展開する。

いつものように、魔法陣が分解し……

バシユツ……………!!

伸びたラインが、クロノ、ユーノくん、アルフの順に、繋いでいく。

「せめて一声掛ける……………」

残り少なくなっていた魔力を吸い取られ、げんなりしながらクロノが言う。

けどもう、既に諦めたかのような、気安い雰囲気か漂っていた。なんだかんだで、秀人さんには振り回されっ放したもんね……………

そして四人の魔力のラインが、レイジングハートと、バルディッ

シユを繋いだ。

「ヒュイイイイイイイイイ……！！」

レイジングハートとバルディツシユが、光に包まれる。レイジングハートは、桜色。バルディツシユは、黄金色。

二色だった輝きは、徐々にその色合いをシフトさせ、空色へ近づいていく。

「ぐっ……！！」

ユーノくんが、がくりと膝を突く。

二つの光は、次第に重なっていき……一つの光へ。

「う……！！」

アルフが、その場に倒れる。

一つになった光は、次第にある形へと収斂する。

「しっかりと、決着を着けるよ……」

ばたん、とクロノが倒れる。

そして……

「……来い……！！」

秀人さんが、魔力を最後の一滴まで注ぎ込み……

光の中から、一本の杖が現れた。

基本は、レイジングハートのキャンオンモード。その各部を補強するように、バルディツシユを思わせる外装が装着されている。レイジングハートの基本色である白と、バルディツシユの基本色である黒が、美しいツートンカラーを描いている。

核である赤い宝石の隣には、バルディツシユの……フェイトの魔力光と同じ、黄金色の宝石。少し地味であるモノクロの杖に、鮮烈な色を加え……

「……きれい」

「……………かつこいい」

その美しさに……………そして、その凄みに圧倒されてしまう。

レイジングハートでもあり、バルディッシュでもある杖が、二重音声で発声した。

『 United Heart Set Up 』

ユナイテッドハート^{結ばれた心}……………それが、この杖の名前。

……………まるで、私達を象徴するかのような名前。

『 さあ、マスター達。私を手を取ってください 』

「マスター……………」

「……………達？」
フェイトと、ぴったり同じタイミングで秀人さんを振り返る。そういえば、この杖は誰のものなんだろう。私？ それとも、フェイト？

秀人さんは、今度こそ魔力と体力をすっからかんに干上がらせ、床に倒れていた。その体勢で、答える。

「どつちも……………なのはと、フェイト。二人がマスターだ。中身も、そういう風にしてある」

「本当に……………よくやったわ、秀人」

プレシアが、秀人さんを膝枕で休ませる。ちよつとばかりプレシアが妬ましいけど……………今だけは、目を瞑ろう。

『 二人とも！！ 準備はいい！？ 』

エイミイの呼びかけに、私達は、声をそろえて……………！

「……………いつでも！！」

アースラのハッチが開き、目の前に、準虚数空間に浮かぶ庭園が現れる。轟々と唸り、今にも瓦解しそうな、巨大な質量を持った建

造物。

もしもあれが砕け、地球に、海鳴市に降り注いだりでもしたら……私の大事な人たちが、欠けてしまつかもしれない。絶対に、止めなければならぬ。

「……ボクね、」

と、フェイトが独白を始めた。目はしっかりと目標を見据えながら、それに耳を傾ける。

「ついこの間まで、おカーさんとアルフ以外、何もいらないうって思ってた」

初めて会ったときの……冷酷な敵。

「でも、今は……ちよつとだけ違うんだ」

それは、偽りの姿で。本当は、ただ寂しがりやなだけの、優しい女の子。

「ももこ、みゆき、きょうや……」

フェイトにつかの間の温もりを与えた、私の家族。

「ユーノに、ひでと。それから、それから……」

手を伸ばしたのは、ほぼ同時。

私と、フェイトの手が、

「なのは」

ユナイテッドハートを、手にした。

「フェイト……？ 今……」

今、私の名前を……

「ボクは、みんなを守りたい」

目の前には、照れくさそうなフェイトの笑顔。

「力を貸して。ボクたち二人なら……なんでも出来る……！」

「……うん！」

……暖かな気持ち、胸を満たしていく。

それは俗に……『友情』と、呼ばれる気持ちだった。

「やるよ、フエイト……」
名前を呼ぶ。

「うん、なのは……」
呼び返してくれる。

無敵の万能感が、全身を満たしていく……！

『 Sealing mode \ High END 』

桜色と、黄金色。二対の翼が、広がる。

シーリングモード・ハイエンド。

放たれるのは、最強の封印魔法。

魔力収束……スターライトで集めた魔力を、私たち二人の封印魔法に乗せて、打ち出す。本来であれば、機体も、肉体の限界もはるかに超えた、過剰出力にも程がある魔法。

今の私達には、『限界』なんて……きつと無い。

既に、十分な魔力は集まっている。

あとは、たった一節の言葉を、詠唱するだけ。

それは、レイジングハートとの契約の一節。

初めて魔法を使って暴走体を封印するときに、秀人さんが選んでくれた。

始まりの言葉。

それを今、もう一度口にしよう。

「……不屈の心は……」

れぞれ帰還した。

『皆さん』

エイミーではなく、リンディさんが直々に通信をしてきた。『皆さん』と言うからには、これはきつと全体通信。

『次元震の停止を、確認しました。これより、準警戒態勢へと移行します』

危機は脱した。

『囑託魔導師の皆さん』

囑託……つまり、私たちのことだ。

『あなた方の協力無しには、本件の解決はありませんでした。アー
スラ艦長として、また、一人の管理局員として、深くお礼申し上げます』

そっか………終わっただ。でも……

ちらりと、横を見る。

この事件が終わったら、フェイトは、事件の重要参考人として、連れて行かれてしまう。死に別れるわけではないから、一生会えないというわけではないけど……でも折角、仲良くなれたのに……

ぎゅっ

俯いていた私の手を、フェイトが握った。

「大丈夫だよ」

また、会えるから。

暗に、そう言われた気がした。

全く……そんな希望に満ちた顔をされたら、私が馬鹿みたいじゃないか。

「ん……」

でも、わざわざお礼を言ってやるのも癪だから……今は、こうして。

手を取って、少しでも長く……繋がっていよう。

私は、フェイトの手を握り続けた。ドッグに同員が来て、フェイトを連れて行く、その間際まで。

そして、ジュエルシード事件……後に、プレシア・テストロツサ P・T事件と呼ばれるこの騒動が終結して、一週間が過ぎた。

第三十二話（後書き）

レイジングハートとバルディッシュの合体というネタは、公式での没設定（本当）

、、これで、なんとか一段落です。

あとはエピローグで、第一期は完になります。

Asは、、現在、設定やらキャラクターを煮詰めている最中ですので、少し先になるかもしれません。

Strikersまでの三部作を予定しています。

第一部『なのはとフェイトの物語』

第二部『八神はやての物語』

第三部『吾妻秀人の物語』

って感じです。

ご意見感想、お待ちしております。

第三十三話（前書き）

ごめんなさいっ！

まさか、エピソードを書くのがこんなに難しいなんて思いませんでした。

第三十三話

ぴゅぴゅぴん……

「う……？」

無粋な電子音は、気持ちのいい睡眠から、私を強制的に現実へと帰還させた。

「うる、さいい……！」

薄目を開けて、カーテンを引いた窓を見る。

……確かに、もう日は昇っているけど……

「いま、何時……？」

携帯電話を引き寄せ、開く。

闇に慣れた目を、ディスプレイのバックライトが眩しく照らす。

「午前、五時……？」

誰だ。こんな時間に非常識な。

それに僅かに顔をしかめ、メールボックスを開ける。

「クロノだったら……ぶん殴ってやる……」

人の睡眠を…… よりにもよって、第二土曜日の朝を、台無しにしてくれて……！

ベッドの下。秀人さんは、布団の中でもぞもぞと身じろぎをした。
「……………すー」

また、布団を被りなおして、静かな寝息を立て始めた。

よかった。起こしちゃったのかと思った。

五日前から仕事に復帰し……それまで休んでいた分もガンガン働き、疲労困憊なのだ。

おかげで洗濯物が多くなって、我が家の洗濯機は回りっぱなし。食事もお肉が中心にな

って、エンゲル係数も鰻上りだ。

「つて、そつだ。メール……」
そして、表示された文章に目を通す。

『クロノだ』

よし、ぶん殴ろう。

『朝早くにすまない。だからひとまず、僕を殴ろうとするのはやめてくれ』

……ちつ、行動を読まれてる。

『さて、それでは用件の方だ』

スクロール。

『フェイトに会いたくないか?』

「えっ!!??」

フェイトに、会える!?

布団を跳ね飛ばし、起き上がる。

『フェイトとアルフは今日、時空管理局の本部へ護送される。時刻は、地球で言うところの午前七時だ。午前三時にその時刻が決定されたおかげで、こんな時間に連絡することになってしまった。すまない』

クロノ、ナイスだよ!!!

スクロール。スクロール。夢中で文章を読み進める。

『午前六時から午前七時までの一時間だけ、地球で面会が許されている。場所は……』

『海鳴臨海公園』

「……あはっ」

あまりに気の利いた待ち合わせに、笑みがこぼれてしまう。だつて、あそこは……

「なのは、どうした？」

あ、起こしちゃった……私の馬鹿。

「ごめん。でも、これ」

秀人さんに、携帯電話を渡す。それを徐々に読み進め……

「急いで準備するぞ」

「うんっ！」

さあて、ちゃっちやと着替えよう！

「ユーノ、起きろ！ おい！」

「ぐえっ……！」

バスケットの中にいたユーノくんを掴み上げ……

「ストラグルバインドッ！！」

バシイイイッ！

「ぎゃあああああああああああッ……！」

……変身魔法を強制解除され、床に落ちた。

ユーノくん、こんなのはっかり。

「な、な、何をするだァー！！！！！」

ネズミ柄のパジャマ姿で秀人さんに詰め寄る。

「フェイトとアルフに会える！」

押入れの中から服を取り出し、投げる。

「おっ……っど！」

反射的に受け取ったユーノくんの手を引き、脱衣所に消える。

お風呂に入ろうとしているのではなく、私が『女の子』だから、着替えは別々……ということらしい。私は別に、一緒でも構わないんだけど。

ハイソックスにスカート。無地の長袖シャツの上に、アリサから貰った上着を羽織り……母さんと姉さんからもらったりボンで髪をポニーテイルに纏め、準備完了。

「秀人さん、ユーノくん、もういいよー」

二人が出てくる。秀人さんは、ジーンズに薄手のジャンパー。ユーノくんは、ハーフパンツにパーカー。

「変じゃないよね？」

私なりに精一杯おめかししてみたけど……

「似合ってる。可愛いよ」

「そ、そうかな？ えへへ……」

褒められちゃった。

「二人とも、時間！ 時間！」

そうだった。

携帯電話を開き、メールをタイプする。

『今から海鳴臨海公園で、フェイトと会ってきます』……文面は、これでいいかな。

メールアドレスに載っている人全員に、一斉送信つと。ポケットに携帯電話を突っ込み、家を出た。

いつものようにバイク……ではなく、今日は……

「それじゃ、行くよ……レイジングハート」

『All Right』

ふわ、つと飛行魔法を発動し、浮上する。

「ユーノくん、お願い」

「りょーかい」

ぱしゅん……と、私たち三人の周囲に、五メートル四方の結界が発動する。移動式の結界だ。これで、誰かに見られる心配は無くなつた。

実は、秀人さんのバイクはもう無い。

脱出することが先決だったから、庭園内に置いてきてしまった。庭園を封印した後、取りに行ったただけ……バイクを置いていた場所に虚数空間が開いてしまったらしく、影も形も見当たらない。たつた。

『気にするな』って言われたけど……やっぱり悲しい。たつたの一月かそこいらでも、私たちの思い出が詰まった一台だった。

「はあ……」

ため息をついて、眼下に広がる町並みを眺める。

「こら」

ぼすっ、と頭を軽く撫でられる。

「そんな顔で、一週間ぶりにフェイトに会う気か？」

う……言われてみれば。沈んだ顔をしていたら、フェイトに申し訳ない。

笑顔、笑顔……よし。

「さ、急ごう！」

秀人さんとユーノくんの手を掴み、スピードアップ。

臨海公園まで、あと少し。

早朝の市街を、黒塗りの高級車が走っていた。

走行音は、恐ろしいほどに静かだ。車のポテンシャルを、熟練の

ドライバーが引き出したが故の、無音。

だが、それとは対照的に……

「鮫島、もっと飛ばしなさい！」

「駄目だよ、アリサちゃん。法定速度は守らないと……」

「私が法よ！ というわけで、ガンガン飛ばしなさい！」

「アリサちゃん……」

車内は騒がしかった。

ドライバー……鮫島は、法定速度ギリギリの速度で、海鳴臨海公園へと向かう。

「全く、何でこんな直前に言うかなあ……」

腕を組み、ドカッと座席に座る。

愛犬の散歩をしていた最中、いきなりなのはからのメールを受け取った。

「ふああ……」

隣のすずかも、大きな欠伸をしている。朝に弱い彼女をたたき起こし、車に押し込んだのもアリサの仕業だった。

「どんな奴なのか、面を拝んでやるうじやないの……！」

聞いた話では、あの日、子猫を半殺しにした張本人だという。理由はどうであれ、その罪に変わりはない。

「確か……『可愛い子』、だったっけ？」

「そんで、『友達候補』ね」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

そして二人は、今日の予定を組んでいく。臨海公園まで、あと十分ほどだった。

カラン

店のドアに、『CLOSED』の看板を出し、鍵を閉める。

そして、手書きのチラシをどさっと置く。

『喫茶翠屋、本日臨時休業。』

こちらのチラシをお持ちの方、次回ご来店の際にケーキ半額！』

「これでよし、と」

彼女……高町美由紀は、満足げに頷いた。

「おーい、まだか！」

ウェイターの格好から、普段着に戻った恭也がせつつく。

「はいはい！ 今行くよー！」

ばたばたと慌しく、スニーカーで駆けていく。

幸いにも、この翠屋のある大通りから臨海公園まで、走れば十分程度だ。

桃子は二人に後を任せ、先に向かっていった。

今日は掻き入れ時の第二土曜日。それを臨時休業にするなど、以前なら絶対にありえないことだった。さすがに、反省したのだろう。

「フェイト……会えなくなっちゃうのかな」

走りながら、どこか寂しそうな美由紀。

僅かな……一週間にも満たない期間ながら、汚い食べ方を矯正し、最低限のマナーを文字通りに叩き込み、髪の毛の手入れをしてやりたりと、色々世話焼いてやったのは彼女である。

「なに、死に別れるわけじゃない。また会えるさ」

なぜかフェイトの実戦訓練につき合わされ、日がな一日、木刀を振る羽目になった恭也。

「……………それまで、鍛えなおさねば」

何気に、フェイトに何本か取られてしまったのは苦い思い出である。剣の鍛錬を疎かにしていたことを、今更ながら悔やんだ。

「……………今日は、なのはと食事でもするか」

「そう言うと思って、料理の下ごしらえしてきたんだよ」

美由紀がサムズアップし、手柄を誇る。

「……………そういえば、今日が初めてか」

秀人との約束。週に一度は、家族で食事をする事。

先週は、なのはが疲労でダウンしていたためお流れになってしまったが、今日は大丈夫な筈だ。

「で、何を作るんだ？」

「ハンバーグとパスタ。後は、お母さんと一緒に即興で作るよ」
「いいな。きつと喜んでくれる」
二人の中では、なのはは一日、自分たちと過ごすことが決まっ
ているようだった。

「くー……くー……」

富山咲は、週末らしくベッドで惰眠を貪っていた。
一日の大半は寝て過ごし、日ごろの疲れを忘れる……それが、咲
のいつもの週末だった。
たぶんに漏れず、今日という日もまた、枕を抱き締め涎を垂らし、
怠惰な一日を満喫しようとしていた。

と、その睡眠を妨害する物があった。咲の携帯電話である。流行
の音楽の一節が、メールの着信を告げていた。

「ん、ん……」

だが、咲は起きない。

ピリリリッ！

今度は、メールではなく電話が着信した。

「んあ……？」

半分以上寝ている頭のまま、携帯電話を取る。

「はい……ただいまるすにしております……ピーというおとのあ
とに……」

……留守守を使つつもりらしい。

『富山さん、起きなさい』

だが、電話口から聞こえてきた声に、少しだが目を覚ます。

「あれ……はせがわせんせー……？」

『はいそうです。メールは見ましたね？ すぐに向かいますよ』

「めーる……？ はい、すぐに……」

「すぴー」

懲りずに眠りに落ちていく。電話の向こうで、すうつ、と息を吸う音がして……

『起きなさい!!』

「わひゃああああつ!!」
「ずでんつ!とベッドから転げ落ちた。」

「あた、あたたたた……! お尻打った……!」
『起きましたね?』

「そりゃ起きますよ……もう、何ですか?」

『ついさつき、高町さんからメールが届きました。件の彼女と、海鳴臨海公園で会うそうです』

「なのはさんが? ……何時に?」

『今からだそうです』

時計を確認。午前五時五十分。

「な、何でこんな朝っぱらに言うのよ……!!」

携帯電話を放り出し、洗面所に駆けっていく。ざぶざぶと顔を洗い、最低限のメイクを施し、髪をバレッタで纏める。

わたたとパジャマを脱ぎ捨て、クローゼットから服を引っ張り出す。いつもの癖でスーツを取り出し、ハツと気づいて今度はワンピースを取り出した。

時刻は、六時になるうとしていた。

「うええええん、間に合わない……!!」

ハンドバッグに携帯電話を開いたまま放り込み、原チャリの鍵を手に玄関を飛び出していった。

『変わりませんねえ、あなたも……』

電話の向こうで、長谷川が呆れて呟いた。

マンションの横に一台のセダンが停車し、クラクションを短く鳴らした。ヘルメットを被ろうとしていた咲は、それを放り出し、運

転手の顔も確認せずにセダンに駆け寄る。

「先生、ありがとー!!」

ダイブするように助手席に滑り込んだ。

「全く、世話の焼ける……」

律儀に咲がシートベルトを締めるのを確認してから、発進させた。

「でも、わざわざ迎えに来なくても……何ですか?」

ポーチから取り出した櫛で、寝癖を直しつつ聞いた。

「あなたのことです。あのまま原付で家を出ていたら、道路交通法違反で警察のご厄介になるのは目に見えていますから」

「うっ……」

実は、既に点数がギリギリの咲であった。

「……前にもこんなこと、ありましたねえ」

「ええ。小学五年生の遠足でした」

「違いますよ。四年生です」

珍しく、咲が正解を言い当てた。

「む……そうでしたか」

「はい。ちゃんと言ってますよ。寝坊した私を迎えに来てくれて、お弁当を半分こしてくれましたよね」

胸を張る咲に、ぼそりと言。

「覚えてるなら、なぜ寝坊癖が直らないのでしょうか……」

実は、こうして送り迎えをするのは今回だけではなかったりする。

「え? ……あ、あはは、それはまあ……ええと、何といたしますか

……」

途端、しどろもどろになる。それに苦笑しつつ、臨海公園に近づいていく。

「ねえねえ、先生」

「何ですか?」

くいくいと袖を引く咲。律儀に対応する長谷川に、咲は提案する。

「今日は秀人さんとなのはさんを連れて、動物園にでも行きませんか?」

「ふむ……悪くないですね。予定らしい予定もありませんし。ですが……」

長谷川は、その場면을想像してみた。

十代の少年と小学生の少女を連れて、動物園を歩く自分と咲

「………はは、まるで夫婦ですね」

何の気なしに言った言葉に、咲が過剰に反応した。

「えっ！？ ふ、夫婦……！？」

赤面し両頬に手を添え、かぶりを振る。

「も、もう！ 先生ったら何を言い出すんですか！」

「……？ はあ、済みません」

長谷川は、よく分かっているようだった。

「うふふ」

「……？」

咲が機嫌を良くした理由がいまいち分からず、首をかしげる。

「秀人さん………というのは、どのような方ですか？」

話には聞いているものの、実際に会ったことは無い。

「先生とは、きっと気が合いますよ」

咲は、妙な確信を持ってそう言った。

臨海公園は、目の前だった。

何分かの飛行を経て、俺たちは臨海公園に到着した。まだ早朝というだけあって、人はあまりいない。ジョギングをする人、犬の散歩をする人……その程度だ。

それも、事前に展開されていた認識阻害結界をくぐった途端、いなくなる。

さーと。待ち合わせは、確か遊歩道だったか。

「秀人さん、ユーノくん。こっちこっち」

俺たち二人の手を引き、ぱたぱたとなのはが走る。ポニーテイルの先端がびよこびよここと跳ね、抑えきれない喜びを表現していた。

雑木林を抜けた先……海沿いの遊歩道に、クロノと、アルフと……少し拳動不審なフェイトが待っていた。

「フェイト！」

喜色満面で走り寄っていく。

「ひう……！」

が、フェイトはアルフの背中に引っ込んでしまった。

「ふえ、ふえいと……？」

がびーん、とでも形容できそうな表情で、なのはが立ち尽くす。

「私と会ったの、嫌だった……？」

縋るような声。

そんな心配することは無いんだけどな。大方、久しぶりに会うなのはに、どんな態度で接すればいいのか悩んでいるだけだし。

「……ちがうよ。ちょっと、はずかしかっただけ」

恐る恐る、アルフの背後から出てくる。服は……少し地味だ。まあ、事件の重要参考人がフリフリのコスロリファッションなんて、着れるわけないんだけど。

長くて量のある金髪が、潮風に揺れている。

「よっ。久しぶり」

三人に、軽く手を上げて挨拶する。

クロノは目礼。アルフは尻尾を振りながら片手を挙げ、フェイトは控えめに手を振る。

「……………」

「……………」

じーっと見詰め合う、なのはとフェイト。

「んじゃ、俺たち向こうで待ってるから」

「時間が来たら呼びに来る」

水入らずで話をしたいだろうし、二人っきりにしてやろう。

「リンディさんとエイミー、来てないのか」

誰よりも真つ先に駆けつけてきそうなのに。

「艦長は事後処理、エイミーは仮眠に入った」

「ふうん……みんな疲れてるんだな」

確かに、なのはとユーノもあの後二日間くらい寝込んでたっけ。

「……あの翌日にピンピンして仕事に行った君が、異常なだけだ」

「何日もずつと欠勤してたんだぞ。身体は動くんだし、早いとこ復帰しないと申し訳立たないだろ」

普通の会社だったら、とつくに首にされているところだ。

「秀人、君に会わせたい人がいる」

「何だよ、藪から棒に。誰？」

クロノは、ユーノとアルフを見た。

「……できれば、秀人と二人きりのほうがいらしくてな。

ユー……フェレットもどき、犬。秀人を借りるぞ」

「誰が（フェレットもどきノ犬）だッ！！」

仲良いなあ、お前ら。だがユーノ、さすがにバインドカッターはやりすぎだ。アルフもその爪を引っ込めろ。

「は、離せ秀人！ わざわざ言い直しやがったぞこの野郎！」

「このチビー！ あたしは犬じゃなくて狼だ！」

「はいはい。すぐ帰ってくるから大人しくしてくれ……よっ」

ギョルルルッ！

ストラグルバインドで、二人を纏めて縛る。

「ひ、秀人おおお！」

恨みがましいユーノの声をスルーし、クロノの後を追った。

「この辺りでいいだろう」

何本か道を挟み、クロノは足を止めた。

簡易結界を展開し、懐からS2Uを取り出す。

「どうしても、君と話がしたいらしくてな。……ほら」

それを俺に渡し、ユーノとアルフがいる場所に戻っていった。

S2Uから、空中にモニターが投影される。相変わらず、意味不明にハイテクだ。

そのモニターに、真っ白い……囚人服のような服を着た、一人の女性が映し出された。

その人物に、俺は息を呑む。

「……久しぶりね、秀人」

「……………プレシア」

あんたかよ。

一週間ぶりに見るその顔は、あの呪的なメイクが剥がれ落ち、元の端麗な容貌となっていた。

「十分間だけ、あなた達と話をする時間を貰えたの」

十分？ たったそれだけか……でも、何でわざわざ俺に？

「フェイトはいいのか？ 色々、話したいこともあるだろ」

紆余曲折を経て、ようやくフェイトと向き合うことができたのに。ただの十分でも、フェイトと話したいんじゃない……

「……………駄目よ」

プレシアは首を横に振る。

駄目って……何でだ。もしかして、話をできる人物にも制限がされているとか？ やっぱり、主犯格だと色々厳しいんだろうか。

だが、違った。

「私は人間として、母親として……………娘に、最低の行いをしてきたわ」

表情に色濃く、悔恨を滲ませる。

「この罪を清算しない限り、私には母親を名乗る資格は無い」

「そんなこと……………！」

無い、と言いかけて、口を閉じた。

プレシアの罪は、重い。

もし本当に次元断層が発生していたら……数え切れない程の命が、失われていた筈だ。さらに言えば、フェイトを虐待していたという事実もまた、プレシアの言う『罪』なのだろう。

「大体、どうやって清算するって言っただよ！

ただ牢屋でじっとしているだけが、あんたの言う『償い』なのか！？」

代わりに出てきたのは、自分でも理解できない激情だった。

プレシアは瞑目し、努めて冷静に宣言した。

『私の刑期は、少なく見積もっても数百年……事実上の、永久幽閉』
『よ』

「……！」

でも、どこかそれに納得している自分がいる。即刻死刑にならないだけ、まだ温情措置だと考えられる。

「でも、そんな……！」

これじゃあ、救いが無さすぎる。

くすつ、と小さな笑い声が聞こえ、再び視線をモニターに移す。

『でも、100%、永久に会えないというわけでは無いのよ』

「………どうということ？」

とつくに脳がオーバーヒートして、思い浮かばない。

『私の知識と技術を供与し続ければ、減刑も可能』

「え………？」

減刑できる………？

『現在いまを生きて、過去を償う………あなたの言葉よ、秀人。私は私なりに………精一杯、『生きて』みるわ』

その表情は、これから獄中へ入るものとは思えないほどに澄んでいて、力強い。

本気………なんだ。本気で、数百年の刑期を相殺するつもりなんだ。

『もう一度、フェイトに会えるようにね』

「プレシア……」

どう声をかけるべきか。激励か、慰めか。だが、先に口を開いたのはプレシアだった。

『……吾妻秀人さん』

画面の向こうでプレシアは、改まって俺の名を呼ぶ。

その声は、僅かに震えていた。

冷静に振舞っていても……やはり、娘と離れ離れになってしまうことは、嫌に決まっている。

何かを言おうとしては、口をつぐみ……それを幾度も、幾度も繰り返す。

そして、プレシアが搾り出したのは……ありふれた、たった一言だった。

『娘を……フェイトを、よろしくお願いします』

そして、深々と頭を垂れる。

ザッ、ザザッ……

いよいよ、時間切れらしい。映像が、徐々に消えていく。

「……ああ、任せろ！」

同時、プツン……と、映像が消えた。

聞いたのかどうかは、分からない。だからあれは、俺の決意表明だ。

プレシアが帰ってくるその日まで……俺が、フェイトを守る。

三人が待つ場所に戻る。

「秀人、誰だったの？」

「ああ、プレシア」

特に隠すようなことでもないだろう。サクッと簡潔に伝えた。

「……………」

アルフの耳が、ぴこんと動く。

「……………ふん、あの女……………私にも言ってたよ。『フェイトを頼む』って。一々言われなくても、そうするに決まってるだろ」

なるほど。そのくらいの話をする程度には、なっているんだな。

「……………クロノ、さんきゅ」

S2Uを返す。

たったの十分。だけど、その十分を捻出するのにどれだけ苦労したかなんて、目の下の色濃い隈を見ればハッキリ分かる。

こいつはこいつで、プレシアの……………ひいてはフェイトのため、奔走していたんだ。

「別に、僕は何もしていない」

「たたく、礼くらい素直に受け取れっつーの。」

それから数十分、たわいも無い話をしたり、水切りの回数を競ったりしながら、時間を過ごす。

「……………そろそろ、時間だ」

柱時計は、午前一時五十分を指していた。

「……………そうか」

「いよいよ、本格的にお別れか。」

「そろそろ、認識障害も限界だ」

確かに。

早朝の数人しか通らないような状況であれば、認識障害結果は有効な人払いだ。確固たる目的も無い人は、無意識のうちにこの公園を避けるようにできる。

だが、今日は土曜日。朝七時にもなれば、この公園目当てに近所の住民が来てしまうか

もしれない。そうしたら、認識阻害は意味を成さなくなってしまふ。だからこそ、こうして早朝を選んだんだろう。

「たったの一时间……僕もまだまだ、力不足だな」

「そんなこと無い。一时间でも、十分でも……二人には、必要な時間だ。それを作ったのは、クロノ、お前の力だ」

「決まってたなら、僕に一声掛けてくれればよかったのに。結果は得意分野だよ？」

ユーノの結界魔法の腕は、クロノを上回っている。

「……いや。さすがに、民間人の手を借りっぱなしというのは体裁が悪くてな」

「管理局つてのも、大変だねえ……」

そこらへんは、大組織の弱みか。

でもまあ、そんなに気にすることでも無いだろう。

あの二人なら、きっと今頃……

「久しぶりだね、フェイト」

「うん。一週間ぶり……くらい？」

ひょこつと首を傾げる。

「くらい、じゃなくて、丁度一週間だよ」

「……」

「……」

……ええつと、何だっけ。

おかしいなあ……色々、話したいことがあったのに。フェイトの顔を見た途端、全部吹っ飛んじやった。

「……おかーさん、ね」

ぎりぎり潮風にかき消されない程度のか細い声で、フェイトが話し出す。

「しばらく、ボクとは会えないんだって」

「……………フェイトと違い、今回の事件の主犯のプレシアが、そんな軽い刑で済む筈が無い。そんなこと、フェイトが一番よくわかっているはず。」

「せっかく、仲直りできたのになあ……………」

それでも、理性と感情は別物で、折り合いなんて付けられない。

「もう怒ってないって言ってるのに……………ボクをいじめてたことも、ちゃんと償うんだって」

「そっか……………」

微妙な気分だ。改心したとはいえ、プレシアがフェイトを虐待していたという事実には変わりはない。私としては、プレシアにはしっかりと罪を償ってもらいたいけど……………それは、フェイトから母親と一緒に過ごす時間を奪うということだ。

「ボクたちも、しばらく会えなくなっちゃうんだよね」

「うん……………」

そして、フェイトもまた……………プレシアの言いなりだったとはいえ、実行犯として、この事件の中心にいた。

聴取が終われば、今度は裁判だ。リンディさん達は、可能な限り情状酌量を勝ち取ってみせると言っていたけど……………少なくとも、数ヶ月は会えないことは、もう確定しているらしい。

ああ……………久しぶりの再会なのに、どんどん暗い話になっていく。

「おかしさんが、言ってくれたんだ。『後悔しないように行動しなさい』……………って」

え……………？

「多分、今日を逃したら、ずっと言えなくなっちゃうんだ」

それって、もしかして……………

「何だかんだで先延ばしにしちゃってたけど、あの時の返事……………今、するね」

「う……うん……！」

心臓が、五月蠅いくらいばくばくと脈打つ。

(断られたらどうしよう………)
そんな懸念が、ぐるぐると渦巻く。

「ボクは、キミの友達になりたい」

やっと、言ってくれた。

感無量になり、抱き寄せようとして……

「でも、さ……」

あれ？ 何で困ってるの……？ ここは、感動の抱擁をする場面じゃないの……？

「友達って……どうやって『なる』の？」

……あれ？

迂闊だった。友達になろうにも……私、自分から作ったこと、一度も無かった。

「ええっと……友達っていうのは……その……」

……やばい。知らない。

「……知らないの？」

「ちょっと待って！ 今考え……じゃなくて、思い出すから！ すぐに……」

ど……どうしよう……！このままじゃ、フェイトと友達になれない……！

「キミ……もしかして、友達いないの？」

「はっつー!!」

フェイトの無邪気な一言は、ぶっすりと、私の心のナイーブな部分を貫いた。

「い、いるもん!」

涙が浮かんだ目で、反論する。まったく、失礼な!

「二人もいるんだから!」

「それ、多いの?」

「……………もう許して」

うっつう……………泣いてないもん……………友達は量より質だもん……………

アリサと、すずかっという立派な友達が……………

アリサと、すずか……………?」

『アリサでいいわよ』

あのときの記憶が、フラッシュバックする。

『友達は、みんな……………』

「あ……………」

何だ……………ちゃんと知ってるじゃないか。

「……………名前」

「え?」

「名前で呼び合うのが、友達なんだって」

多分、最初はそれでいいんだ。

「だから、『キミ』じゃなくて……………ちゃんと、『なのは』って、呼んで欲しいな」

きっかけは小さくても……………それで、友達になれば。

「知ってるかもしれないけど……………私、なのは。高町なのは、だよ」

フェイトが私の名前をちゃんと呼んでくれたのは、あの戦いの最中……………言ってしまうば、ドサクサ紛れの一度きりだけだ。

だから、ちゃんと呼んで欲しい。

フェイトは頬を染め、すつつ、と深呼吸。

「……………なの、は」

「ごによっ、と、蚊の鳴くような声で……………確かに、呼んでくれた。

「うん！」

それに、大きな声で返す。

「……………なのは」

恐る恐る、確かめるように。

「うん！」

ぱあつ、と、フェイトが笑顔を見せた。

初めて会ったときのような、諦めきった、冷酷なものじゃない。

フェイトの……………本当のフェイトの、笑顔。

「なのは！」

それが今、私に向けられている。あの頑なだった心を、開いてくれたんだ。

「フェイトっ！」

「ひゃあっ！」

うれしくてうれしくて……………今度こそ、フェイトを抱き寄せた。

「……………ありがとう、なのは」

最初は恥ずかしがっていたフェイトも、私の身体に手を回して、抱き返してくれる。

「なのは達がいなかったら、ボクはきつと駄目になった。

今だから言うけど……………なのはは、ボクの憧れだったんだよ」

「……………憧れ？」

何で……………？ 私、最初のうちはボロ負けして、敗走して……………とてもじゃないけど、憧れの対象では無かったと思うけど……………

「自分の力を信じて、仲間と力を合わせて、強敵に立ち向かう。

……………まるで、正義のヒーローだ」

手放しに褒められ、背中がむず痒くなってしまった。

「そんなつもりは無かったんだけどなあ……………」

正義とか、そんな小難しいこと知らないし。

「秀人さんと一緒にいて、恥ずかしくないように……秀人さんに、誇れる自分になるために、がんばってただけだもん」

「誇れる自分に……か」

密着しているせいで、フェイトの表情は読めないけど。何か、思うものがあるみたいだ。

「ごめんね。そろそろ、みたい」

「……うん」

柱時計は、午前六時五十五分を回ろうとしていた。

向こうから、クロノが戻ってきてしまった。

「なのは」

秀人さんと、ユーノくんも。

「フェイト、時間だ」

「あの、もうちょっとだけ……」

クロノは、時計を見る。

「あと五分だ。伝えたいことがあるなら、今のうちに」

「うん、ありがと」

そして、ちょこちょこ私たちの前にやってくる。

「あのね……もしかしたらボク、一年以内に出てこれるかもしれないんだ」

あくまで、可能性の話。でも、かなり高い確率。

「そうしたら、アルフも連れて、こっちで暮らそうと思ってるんだけど……」

何かを言いたそうに、ちらちらと秀人さんの顔を見る。

「ひでと、言ってくれたよね……？『ウチに来い』って」

秀人さんは、うーん、と考え込む。

「さすがに、今の家じゃ狭いなあ……」

六畳一間に、五人……確かに、無茶がある。

「え……」

がぁん、とショックを受けていた。

「そ、そつかあ……は、はは……」

フェイト……話は最後まで聞かないと駄目だよ。

ぼん

その頭に、秀人さんの手が乗る。

「『五人で』暮らせる家探すの、手伝ってくれよ?」

「え……?」

きよとん、と目を丸くする。

もう……お馬鹿さんなんだから。

「う……うんっ……!」

一転して、うれしそうに笑う。

あれ……? そういえば、ユーノくんとアルフは、どこ行った?

「うっ……ぐすっ……フェイト、良かったねえ……」

あ、いた。

「……でも、フェイト取られちゃった……ぐすっ」

喜びながらいじけるといふ、器用な真似をする。

「……」

その肩を、無言でぽんぽん、と叩くユーノくん。

……苦労性同士、気が合うみたいだ。

「午前七時。時間だ」

「うん……」

フェイトは名残惜しそうに、私の手を離す。

キーンッ!

フェイト達を中心に、魔法陣が展開した。

いよいよ、お別れだ。

しばらく会えない。その事実が、今更ながらのしかかってきて……

「フェイトッ……!」

思わず、駆け寄る。

「なのは」「駄目だ」

けど、秀人さんとユーノくんに肩を押さえられ、止められた。

「辛いのは、フェイトも一緒だ」

「でもお……！」

せつかく友達になれたのに、もう離れ離れなんて……

「なのは」

でも、私の名を呼ぶフェイトの表情に、悲しみは見えない。

「大丈夫。また、すぐに会えるよ」

いや……目じりに、薄っすらと涙が浮かんでいる。

秀人さんが言うとおり……フェイトだって、悲しいのを我慢して、私に笑顔を見せているんだ。私だけがぐずぐず泣いているなんて、みっともない。

ぐしぐし、と乱暴に涙を拭う。

「ふ、ん……！ さっさと出てこないと、フェイトのことなんて忘れちゃんだから……！」

意地を張って強気に、思ってもいないことを言ってしまった。

「ふふ……それじゃあ、がんばらなきゃ」

光が強くなり……フェイトの姿が、段々見えなくなっていく。

「またね。なのは、ひでと、ユーノ」

徐々に、徐々に……

「嘘だよ……！」

……意地を張るのは、もうやめる。

せめて、友達には素直に……笑顔を向けよう。

「フェイトのこと、ずっと待ってるから……！」

「……！ うんっ……！」

ぶんぶんと、大きく手を振る。

フェイトも負けじと、大きく手を振り返す。

そして、光が収まった。

「……………」
もう、そこにフェイトはいない。周囲を覆っていた結界も、同時に解除された。

「……………」さ、帰ろう！」

「ユーノ、お前はとうするんだ？」

秀人さんが、傍らを歩くユーノくんに聞いた。

そつえば……………ジュエルシードのことが全部解決した今、ユーノくんがここにいる理由は、もう無いんだった。

「……………ユーノくん、帰っちゃうの？」

「うーん……………一族からは、報告も兼ねて帰って来いって言われてるけど……………」

「そつかあ……………」

はああ……………何で、私が仲良くなった人は、私から離れていくんだろう。

「でも、まだ帰るつもりは無いんだよね」

……………え？

知らず知らず下がっていた顔を上げる。

「報告なんて手紙ですれば問題ないし、まだしばらく、こっちにいるよ」

「……………！ うんっ！」

良かった……………！ 本当に！

ぐっう……………

秀人さんのお腹から、盛大な腹の虫が鳴った。

「……………悪い、腹減った」

そつえば、朝ごはん、まだだったよね。

「もう、仕方ないなあ……………」

帰ったら、何か作ってあげる。

「せっかくこの辺まで出てきたんだし、どっかで食べていけない？」
「うん…………… 外食は高いんだけど…………… たまになら、いいよね！」
二十四時間営業の店もあるし。

そんなことを話しながら歩いていたら…………… 見知った顔ぶれが、こ
ちに走ってきていた。

「え」

しかも、妙に多い。

「なのはっ！ どこにいたの!？」

「探しても見つからないから、焦っちゃったよ」

「あ、ごめん…………… ちよっと別の場所にいたんだ」
アリサとすずか。

「あらあら…………… 遅かったかしら？」
母さん。

「うん、ついさっき行っちゃった」

「そんなあ……………」

べちゃつと座り込む姉さんと、

「だから、急げと……………」

呆れたように腕を組む兄さん。

「なのはさん、ちゃんとお話できた？」

「うん。っていつか先生、髪の毛ボサボサ」

「へっ!？」

あわあわと頭を撫で付ける富山先生。

「富山さんは猫毛ですからね……………」

懐から取り出した櫛で、富山先生の髪を梳かす長谷川先生。何で
そんなに手馴れてるんだろっ……………

「先生、しっかりしなよ…………… 大人なんだから」

「うっうっうっ……！ 小学生に言われたあ……！」
ちよつと涙目だった。

「それで……みんな、私たちに何か用？」

まず最初に口を開いたのは、アリサ。

「なのは、今日ヒマ？」

「ヒマって……何が？」

私の今日の予定なんか聞いて、どうすんだらうか。

「お洗濯とか、お掃除とかする予定だけど……」

「なのは……」「なのはちゃん……」

……なんでそんな、変な物体を見るような目で私を見る。

「……ああもう、つまりヒマなのね！ よし、決まり！ 今日、

私たちと遊びに行くわよ！」

ええと、これってアレだね。友達同士で、お出かけ……！

「うんっ！ 私でよければ……！」

どうしよう……友達と遊びに行くなんて、人生で初めてかも！

「ちよつと待ったー！」

と、姉さんがアリサの言葉を遮った。

「なのはは今日、私たちと一緒に過ごすんだよ！」

そのまま、がばつと私を抱き上げる……って、何するの!?

「ね、姉さん!？」

「秀人くんと約束でもあるんだから！ ね、恭ちゃん！ お母さん！」

うんうん、と後ろで頷く二人。

『秀人さん、一体姉さんたちに何を……』

『ああ、うん……週に一度は、なのはとの時間を持って、と……』

そういえば先週、食事に誘われたような気が……

「というわけで、なのはは連れて帰りま」

「待ちなさい！」

ぐわん、と視界がぶれ、気がついたら先生に抱きすくめられていた。

せ、先生まで!?

「なのはさんは、私たちと動物園に行くんです！」

「何で!?!」

どこからそんな話が出てきた!?

「そんなの、仮病で休んだ春の遠足のやり直しに決まっています！」

「きゃー！」

何でみんなの前で言うの!?! 先生の馬鹿!

「仮病じゃないってば! 本当に、熱が出てたんだから!」

三十七度だけど!

「気づかなくて御免なさい……! 駄目なお母さんを許して……! う、うづ……!」

うわ、母さんに飛び火した!?

「母さん、違うの! 熱って言うっても三十七度で、『振って沸いた休日最高!』って感じだったし……って、やべっ!」

「な〜のは〜さ〜ん〜……!?!」

バレたあああああああ!!

ぐいつと腕を引っ張られた。

「ちょっと、おばさん! なのはは私たちと遊びに行くんだってば!」

「お、おばっ……!?!」

アリサの大馬鹿! なんてことを!

「張っ倒すぞゴルアアアアアアア!」

先生、ヤンキー時代に逆戻りしてるうづうづう!?

「ああもう! 部外者は引っ込んでてってばー!」

ぐいつ！

もう片方の腕が、姉さんに引つ張られる。

「家族が優先！ 遠足なんて、また次行けばいいでしょ！」

「あアン！？ 地味子はすっ込んで背景に徹しろや！」

先生、何気に一番酷い……

「地味、子……？」

姉さんの顔から、すーっと表情が消えていく……ああ、修羅場だ

……！

秀人さん助けてー！

「はじめまして。私、三年生の学年主任を勤めております長谷川と申します」

「これはこれは、ご丁寧に……吾妻秀人です。……ええと、あちらの先生は」

「ははは、懐かしいですねえ……………後
でお置きですが」

「あの、これからはちゃんと行事にも参加させますので……」

「ええ、責任を持ってお預かりします」

保護者会！？

「なのはー！」

「なのはー！」

「なのはさんー！」

じり、じり……と、距離が詰められていく。

「誰と行くの！？」「」「」

「う、う……………！」

選べるわけ無いじゃん……だって、みんな同じくらい好きなのに

……

秀人さん、ユーノくん、兄さんってばー！

「ははは、モテモテだなあ……」

嬉しくないー！

「もう！」

「「「あ！」「」」

三人を振り払い、ダツシュ！

「秀人さん、ユーノくん！」

二人の手を掴み、走り出す！

「おいおい、どうするんだよ……」

「いいのかなあ……」

後になつたら考えるからいいの！

「さあ、行くよー！」

見上げた空は、綺麗な快晴。

この広い空の下には、幾千の、幾万の人がいて……きっと、それ以上の出会いと別れがある。

フェイトとお別れは悲しいけれど……きっとこれも、新しい物語のプロローグ。

どんな物語になるのかは、誰にもわからない。でも……

「秀人さん。ユーノくん。レイジングハート！」

両手に感じる温もりは、確かなものだから。

「ちゃんと、ついてきてね！」

私はもう、一人じゃないから

しゅー……と、車輪のベアリングを僅かに鳴らしながら、車椅子を進める。

座っているのは、小さな少女だ。年のころは、十歳程度だろうか。だが、その表情は妙に平坦……いや、見合わぬ厭世観が浮かんでい

た。

膝の上に乗せているのは、コンビニの袋。中に入っているのは、脂っこくカロリーの高い弁当と、自然界には存在しない色をした飲み物。

「……不味そ」

それでも、それを食べなければ生きていけないという事実が、少女を苛立たせる。

平日であれば、学生や会社員の視線を浴びながらの買い物。だが、今日は第二土曜日。普段であれば鬱陶しい好奇の視線も、そんなに多くはない。

それでも、比較的機嫌のいい状態であった。

と、通路の前方から、騒がしい集団が走ってきた。

先頭を切るのは、栗色の髪の毛の少女。その少女に手を引かれ走る、黒髪の青年と金髪の少年。そしてそれを追いかける、年齢も性別もバラバラな集団。

どたどたと走り抜けていき、その際に発生した風が、少女の異様に長い髪の毛を散らす。

「うぷっ……！」

顔を叩いた一房を乱暴な手つきで振り払い、不快に顔を歪める。

「チッ……！ 騒がしいっいたらありゃしない……！」

道を行く少女の前から、家族連れやカップルが、臨海公園の方向目指して歩いていく。

決まって、少女に好奇の視線を向け、すぐに逸らすという行動を取りながら。

それとすれ違いになる度、少女の眉間には皺が刻まれていく。

さらに一組……今度は、ボールを入れた袋を持った少年と、バスケットを提げた少女が前からやってくる。

「早朝練習、やっと終わったー……おい望、どこで食うんだよ、それ」

「健太つてば、食べることしか頭に無いわけ？」

二人の視線が、やはり、少女に向けられる。

「……………」

ぎっ、と睨みつけ……

「何見てるのよ！」

怒りを、叩きつけた。

怒りの赴くままに車輪を回し、足早に自宅を目指す。

自宅のドアを閉めたのと同じ、オートロックで施錠する。

「はあっ、はあっ……………」

僅かに汗ばみ、立てば膝まである髪の毛が、首筋に入はりついでいる。

「チツ……………」

またしても舌打ちをし、コンビニ弁当の入った袋を、乱暴にリビン
グに投げ捨てた。

「どいつも、こいつも……………！　へラへラ締まりの無いツラしやがっ
て……………！」

だが、ぶつける対象のいなくなった今、その怒りは自らのうちで
分解され……………ただ、言いよつた無い空しさが残った。

ちやりっ

胸元には、大人びた十字架のネックレス。それを、ぎゅっと握り
締める。

「……………パパ、ママ」

窓に切り取られた狭い空は、忌々しいほどに晴れやかな快晴だっ
た。

第三十三話（後書き）

Asは、やっぱりキャラ崩壊が前提で話が進みます。

ほぼオリジナルの話になりますので、投稿までにまた間が開いてしまいかも知れません。

更新がしばらく遅くても、見捨てないで下さい……（切実）

あと、ご意見ご感想、お待ちしております。

第三十四話（前書き）

それでは、A S 編の開幕です。

原作ファンの方、ごめんなさい。

第三十四話

………朝が来て、目を覚ました。

遮光カーテンを引いたというのに、忌々しい朝日は容赦なく差し込み、私から睡眠を剥ぎ取っていった。

時計を見ると、朝九時。

半端な時間に起こされたせいで、中途半端に眠気が残って不愉快極まりなかった。

「………チツ」

今日の朝も、舌打ちから始まった。

ベッドの上には、読み散らかした本や漫画が転がっていた。

開いたまま置きっぱなしにしていた所為だろうか。癖が付いて、きっちり閉じられない。

………いいや、別に。もう読まないし。大して面白くなかったし。

つい、半分寝ぼけたままの思考で………以前からの習慣で、ベッドから自分の足で降りようとしてしまう。そして、現実に引き戻された。

一生、足が動かないという現実に。

「………くそつたれ!!」

太ももの辺りを拳で強く叩いても………痛みどころか、僅かな痺れさえ感じることは無かった。

「………はぁ」

やめよう。叩いて直るわけでもないし………怒るのも疲れるし。

車椅子を引き寄せ、腕の力で身体を乗っける。

ドアを開け、埃っぽい廊下に出た。またしても、引きつぱなしのカーテンの隙間から陽光が入り込んできている。宙を漂う埃に陽光が反射していて、まるで私の怠惰を戒めているかのようだった。

まあいいや。別に、埃が積もったところで死ぬわけでも無いし。来週か、来月か……気が向いたら、掃除しよう。

リビングに向かう途中、二階に続く階段が目に入ってきた。

二階には、誰も使うことなく、物置になることもなく、空っぽのまま半年は放置されている部屋が四つある。

そのうち一つは私の部屋だけど、この忌々しい身体のせいで、二階へはまだ足を踏み入れたことさえ無かった。

今の私の部屋は、書斎になるはずだった部屋にベッドを置いただけの場所だ。

トイレにもリビングにも玄関にも近い、六畳一間。これなら、ワルルームマンションにでも住んでいるほうが楽なのに。
ぐう。

「あー……腹減った……」

車椅子の車輪を回し、生活臭ゼロのリビングへ。

聳え立つ冷蔵庫の下段を開き、出来合いの弁当を一つ、取り出す。

「……うへ」

見ているだけで、げんなりとしてしまう。

脂っこくて、変な匂いのある食べ物。正直、こんなもん食べたくない。

でも、自分で料理をしようにも、コンロが高すぎてうまく手が届かない。シンクで水をヤカンに入れ、茶を沸かすのが精一杯。

……結局、こんな不味い物体を食べるといふ選択肢しか無いわけだ。

レンジに放り込み、三分くらい待ってから取り出す。

「……いただきます」

当然ながら、返ってくる答えは無い。
言う必要が無いとわかっていても、つい口にしてしまうのは両親の躰の賜物だろうか。

ボソボソした鮭と、粘っこい飯と、変な色の漬物を口に入れ、お茶で流し込むという作業を繰り返し、朝食は終了した。

「うう……」
満腹感もそこそこに、不快感が胃に沈殿してくる。
だから、朝一番でこんなもん食べたくなかったんだ。

不快感が抜けてから、プラスチックの容器と、割り箸をゴミ袋に捨てる。そろそろ、一袋が満タンに……って、

「おえっ……！ 臭っせえ……！」
梅雨明けから間もないからなのか、変な臭いが漂っていた。
換気だ換気！

窓を開けた途端、ぶわつと吹き込んできた生暖かい風が部屋の埃を巻き上げ、ゴミの匂いとブレンドされ……要は、部屋中が臭くなった。

「……………くそったれ」
でも、窓を開けたまま放っておけば、多少はマシになるだろう。
その間に、風呂……じゃなくて、シャワーでも浴びるか。

タオルと着替えを持って、浴室へ。
浴槽には、入ろうと思えば入れる。でも、入ったが最後、私の腕力では出ることが難しくなってしまう。一度それで痛い目に遭って以来、私の入浴は専らシャワーだけだ。

シャンプーを多めに手に取り、髪の毛を洗う。
「ごっごっごっごっ……」

それにしても、我ながらよく伸ばしたものだ。
ほったらかしにしている間に、なぜか膝まで伸びてきてしまった。

ママが生きていたころは、一緒にお風呂に入って、背中を洗いつこをしたり、髪の毛を切ってもらったりしていた。でも、今は……鏡を覗くと……まるで、ホラー映画のような出で立ちをした子供が写りこんでいた。

はっ……言いて妙かも。

年中カーテンを閉め切った家に住む、陰気臭い子供。舞台設定もバツチリだ。

自嘲しつつシャワーで石鹸を洗い流し、浴室から這い出した。

リビングに戻ると、嫌な臭いはほぼ消えていた。

燃えないゴミの収集は、明日だったか……今夜中に出してしまおう。

さてと……部屋に戻ろう。

「……あー」

そういえばアレも、早く処分しないとなあ……部屋の隅に放置してある、珍妙なオブジェ。

「粗大、いや、資源ごみ……？」

目障りで困るんだよねー……金属バットがめり込んだテレビなんて。

「……まあいいや」

破片は捨てたし、躓いて怪我するなんてことは無いに決まってるし。放っておこう。

「あん……？」

電話機のランプが、チカチカと点滅している。

あーあ、またか……

イラつく手つきで、留守番電話の録音を再生する。

メッセージは二件。最初のメッセージは……

『テレビです。今度、あの事故について特番を組むことになっ

たので……』

「死ねッ!!」

バキッ!

拳で叩きつけるようにしてボタンを押して、再生終了。

「……ったく! どっから聞きつけてんのよ……!!」

片っ端から着信拒否リストに放り込んでやっているというのに、ゴブリのように沸いてきやがる。

あー、そうだった。残りの一件は誰だ?

また下らない用件だったら、電話機ぶっ壊してやる。

ぴっ、と音が鳴って、メッセージが再生される。

『石田です。最近、リハビリに来ていないじゃない? 確かに、あなたの足が動く可能性は低いわ。でも、治療法が分かった時に、間接が固着していたら……』

再生、終了。

「……無駄だよ、先生」

大体……治ったところで、歩けるようになったところで、どうなるの?

私が歩けるようになったって、パパとママは褒めてくれない。二度と戻ってこないのに。

頑張ったから報われるなんて、漫画の中だけだ。

せいぜい、お涙頂戴な不幸話が大好きなマスコミの、恰好の視聴率稼ぎの道具にされるのが関の山。

友達を作るうにも、こんな身体じゃできっこ無い。道行く人の反応を見ていればわかる。ちらっと私を見て、ふいっと顔を逸らす。

コンビニに行っても、図書館に行っても、全く同じ反応しかない。

二言目には、『大丈夫?』で、次は『手伝おうか?』だ。大きなお世話だ偽善者どもめ。

結局、私にはまともな未来なんて無い。それならいっそ……残りの一生を、この家に引きこもって暮らしていたほうがいい。

怠惰に。無為に。

起きて、食べて、眠くなるまで時間を潰して、眠くなったら寝る。

それが私……………八神はやての選んだ日常なのだから。

プルルルルツ……………

言っているそばから、電話が鳴った。

留守電に設定し直していないせいで、いつまでも鳴り止まない。

……………」

仕方ないから、受話器を取った。

「……………はい、どなた？」

受話器の向こうで、息を呑む気配。あーあ……………これは、一番ごぜい輩だ。

『ああ、やっと出てくれたのね！』

きんきん耳障りな声。受話器を耳から離す。

『心配してたのよ。ずっと電話しているのに、出てくれないんですもの』

……………誰だっけ、こいつ。

「何か用ですか」

『そろそろ、学校のほうへ出てきてくれないかしら？』

……………ああ、先公か。

『クラスの皆も、あなたが登校してくるのを待ってるわ』

阿呆か。会ったことも無い他人を待ちわびる子供なんて、いるわけないだろ。

……………ここで切ると五月蠅いから、言うだけ言わせてやるっ。

『あの事故のことは、残念だったけど……………』

……………あ？

今、なんだった？

残念……？

パパとママの死を、そんな一言で済ませやがったのか……？

黙って聞き流してやるうかと思っただけど……やめた。

『あなたのお父さん、お母さんも、きつとあなたが元気になることを』

「黙れ」

『望んで……え？』

「黙れつつつてんだよ」

こいつに……パパとママの何が分かる。私の何が分かる。

「てめえ、何様のつもりだ？」

したり顔で、人の心にズカズカと入り込んできやがって。

『私は、あなたのために言ってるのよ！ それを……！』

「あなたのために……それ、『自分のために』の間違いだろ？ お

前は自己満足、自己陶醉で酔っ払ってイイ気分なんだろうけどさあ

……正直、うぜえよ」

『教師に向かって何て口の利き方を……！ 人が気を使ってあげているのに！』

はン……これが本性か。

いい人面して近づいて、恭順しないとわかった途端に高圧的になる。典型的な偽善者だ。

そのカスが電話口でキーキー喚いている光景を想像しただけで笑えてくる。

「うるせえ黙れ偽善者」

がしゃん

受話器を置き、電話線を引っこ抜いた。

最初から、こうしておけばよかったんだ。

はあ……馬鹿馬鹿しい。

今日は何をして時間を潰そうかなあ……

「図書館にでも行くか……」

何か、適当に長い小説でも借りて、退散しよう。

平日の真昼間。時折すれ違ふのは、汗を流して営業に精を出すサラリーマンと、犬を散歩させる老人くらい。実に歩きやすい。引きこもっている内に、無意識に人の少ない時間帯を見つける能力が備わったらしい。

そういえばこの前、病院の帰り道に、変な集団とすれ違ったなあ

……
何人も連れ立って、悩みと無縁の楽しそうな表情で……

「……………チツ」

……………くそ。思い出したらまたイライラしてきた。

陰鬱な気分のまま、図書館に到着。エントランスを潜ると、快適な空調が私を出迎えてくれた。少しだけ浮いていた汗が、引いていく。

貸し出しカウンターから、白いカーデイガンのお姉さんが会釈する。

「……………」
「……………」
「……………」

会釈を返し、書架へ。

時代小説。現代小説。エッセイ。自叙伝。ドキュメンタリー。ノンフィクション。ティーン小説……………と、ここだ。この辺の本なら、私にも読める。

学園恋愛。非日常バトルもの。ロボットバトル。SF。異世界冒険譚。不条理ギャグ。剣と魔法の物語。

あ、これいいかも。

私は、剣と魔法の物語のシリーズを書架から……………書架から……………

……………
「……………届かない」

せめて、もう一段低い段に入っていれば……………

「はあ……………」

つくづく、このポンコツの身体が恨めしい。

今日は、厄日だ……

恨めしく本棚を眺めても、本が落ちてくるわけでもないのに。すっぱいブドウ……じゃないけど、諦めるしかない。誰かに頼むなんて情けない真似、したくないし。

仕方なく、下の段に入っていたSF小説を纏めて引っこ抜いた。

「……お願いします」

貸し出しカウンターに持って行き、カードを差し出す。

「あら、たくさん借りるのね」

「ええ」

会話終了。

「ねえ、八神さん？」

手揚げに本を入れていたら、お姉さんに呼ばれた。

「本、好き？」

じつ……と、なぜか探るような目でみつめられる。

「……」

どう答えるべきだろう。司書なんて仕事に就いているからには、このお姉さんはかなりの本好きなんだろう。ただ時間つぶし的手段に読書をしている、なんて答えたら、気を悪くするに決まっている。過干渉してこないこのお姉さんは結構好きだし……

「……ええ、好きですよ」

心にも無い嘘で、ごまかした。

「そう、よかった」

うれしそうな声に、ずきん、と胸が痛んだ。

「……それじゃ、」

俯き加減のまま、出口に向かう。

と、入ってきた人とぶつかりそうになってしまった。

「あ……すみません」

謝って、今度こそ外に出た。

あーあ……何やってんだろ……

ちやりっ

半ば無意識で、胸元の十字架に触れた。

「……………参った」

翌日の深夜。私は、冷蔵庫の前で途方に暮れていた。

「食べ物、無くなった……………」

朝起きて、何の気なしに読み始めたSF小説が以外にも面白く、夢中で読みふけっているうちに夜の十一時を回ってしまった。

こんな時に限って、買い置きのカップ麺も無い。

「しゃーない……………買いに行くか……………」

ああ、嫌だ。

もう出前もやってないし、ピザは高いしもたれるし。

鍵を持ったことを確認してから、オートロックの扉を閉める。

一日に二度も外出するなんて、久しぶりのことだ。

暗い夜道を、申し訳程度の街灯が照らしている。寒くは無いけど……………好き好んで出かけようとは思えない。でも、人目を気にせず出歩けるといふのは有難い。

財布には、現金で3000円くらい入っている。

私は障害者だし、追い剥ぎに狙われることも考えて、常に必要最小限の額しか持ち歩かない主義だ。……………持ち『歩く』機会なんて、この先一生訪れないんだけど。

「はっ……………」

下らない。つまらない自虐をしている暇があったら、さっさと用事を済ませて帰ろう。

車椅子で十分弱。いつものコンビニに到着した。

「らっしゅーせー……………」

やる気ゼロの店員に迎えられ、弁当のコーナーへ直行。

海苔弁、シヤケ弁……あと、軽めのサンドイッチと惣菜パン。

「2450円でーす」

無言で、千円札三枚を差し出す。

「550円、お返しツス。ありゃーとあしたー……」

とりあえず、幼稚園からやり直せばいいと思う。

からから……と車輪を回し、店を出る。

帰り道は、これまた一層薄暗い夜道だった。

民家も少なく、あつたとしても電気は点いていない。

いきなり、衝撃が走った。

「……ッ!？」

驚いて振り向く。すると、

「フーかまーえたア……!」

下卑た笑みを浮かべた男が、車椅子のハンドルを掴んでいた。

「な……んだテメ……! うムツ……!」

口を塞がれる。

「ひあはははは……!」

がしゃん、と車椅子から引き倒された。

「うー……!」

半年も引きこもっているうちに、警戒心がとことん鈍っていた……

人通りが少ない夜道なんて……こつこつとした手合いの巣窟だったこ

とにさえ、気づかない程に……!

「……ッ!……ッ!」

離せ、離せ、離せ!!

目いっぱい力を込めて、抵抗する。爪を立て、暴れ……

「ひひゃひゃひゃ……!」

辛うじて目に入る光景。そこは、鬱蒼とした雑木林……!!

「……!」

本能的な恐怖が、最後の抵抗を試みる。

がりつ、と、男の顔面をひつかいた。男は一瞬、私の口をふさぐ手を離し……

バキッ！！

「あがッ……！！！」

視界がブレて、そして、左頬に強い痺れが走る。

遠慮呵責も無く殴られた……そう気づいたのは、折れた歯が口から転がり落ち、錆臭い血の匂いが口内に充満してからだった。

「う……………」

ぐらぐらと、脳震盪なのか、恐怖によるものなのか……だけど、確かなことは。

もう、抵抗する力は残っていないということだった。

私はこの小汚い男に陵辱されて……きつと、死ぬ。

これで、終わりか。

恐怖でも、怒りでもない。ただ底なしの虚無感が、頭の中を支配する。

たった十年にも満たない人生が、今終わる……いや、違うな。

私の人生は、半年前……両親が死んでしまった時に、とっくに終わっていたんだ。

パパが死んで、ママが死んで……他にも、たくさん死んで。私だけが生き残ったのが、間違いだったんだ。

ブチッ……！！

胸元に下げていたアクセサリーが……洋服ごと引きちぎられた。何よりも大事な宝物が、ゴミのように。

「あ、ああ……！！！」

一瞬、虚無感を忘れた。

押し倒されたまま、男の握る十字架に手を伸ばす。

「か、えして……!!」

それは、その十字架だけは……!

「かえしてよッ……!!」

「あア……?」

男は、訝しげに私の顔と、手に持った十字架を見比べ……にたあ、と笑った。嗜虐心が疼いたのだろうか。私の手の届かないギリギリのところ、見せびらかすようにぶらぶらとチェーンを揺らし……

「ヒヒッ……返してやる、よっ!!」

「あっ……!!」

振りかぶり……遙か遠方の道路に、投げ捨てられた。

「あ、あ!!」

そして。

ギャリッ……

通りがかったトラックの車輪に巻き込まれ、手の届かない場所へと……消えた。

「なん、で……」

ぼそつ、と、切れた唇が、痛みを無視して言葉を紡いだ。

『何で』、と。

「なんで、わたしが……」

理不尽な事故に家族を奪われて。

無神経な奴らに平穩を奪われて。

たった一つの宝物さえ奪われて。

なんで、私だけが……!!

「こんな目に、遭わないといけないのよ……………!!」

憎い。

どろりと、ドス黒く粘りつくような『何か』が、胸の奥で脈動する。

憎い。

どろどろ、どろどろと……………ヘドロのように、あふれ出してくる。

薄汚く笑うこの男が憎い。

それは、恐怖を塗りつぶし、

平穏を奪った偽善者どもが憎い。

虚無の平野を、汚泥の如く侵略し、

家族を奪った事故が憎い。

たった一つの言葉が、全身を支配した。

憎い。憎い。憎い。憎い。憎い。憎い。憎い。憎い。憎い。憎

い。憎い。憎い。

憎い。憎い。憎い。憎い。憎い。憎い。憎い。憎い。憎

い。憎い。憎い。

どろどろとした暗闇が……はつきり目に見える形で、私の身体を
取り巻いている。

まともな神経の持ち主なら、怖気づくか、嫌悪する光景。
ただど私には、その得体の知れない闇が何よりも頼もしく……愛お
しく感じられた。

「……………ふふ」

「どうやら、私の『まともな神経』とやらは……壊れてしまつたら
しい。」

「ふふふ……あはははは！」

それが、何？

すつくと……立ち上がる。

呆気無く。いとも簡単に。

私を地べたに縛り付けていた足が、再び私の元に返ってきた。

まともな神経なんぞに固執していたら、絶対にありえなかったこ
とだ。

ああ、馬鹿馬鹿しい。

こんなことだったら、もっと早く……壊れていればよかったんだ。

「あはははは……！！ あーっはっはっはっはっはっはっはっは！！」

ああ、可笑的い。

「ひ、ひいいい……！！」

……………ああ、まだいたんだ。

みつともなく尻餅をついて……腰が抜けたんだね。

立場は、完全に逆転していた。

私は二本の足で地面に立ち、男は地面に這いつくばっている。

「……………刃以て、血に染めよ」

ふっと、頭に浮かんだ言葉を口にする。

闇は、私の命令を忠実に実行した。

ゴポツ……ゴポポツ……！
不定形だった闇の一部が分離・凝固し……紅色の短剣へ、変化する。

標的は……あの男。

「た、たすけッ……たすけてえッ……！！」

……逃がさない。

がきんっ

「ヒイツ！」

闇を操作し、男の身体を樹木に磔にする。

……恐怖に染まった顔が、よく見える。

「穿て」

これは、復讐の第一歩だ。

私を虐げてきた物すべてを……闇に葬ってやる。

「……ブラッディ・

ダガー」

ドガガガガガガッ……！！

「……！！……あ……！！」

ぞくぞくぞくぞくぞくぞくぞく。

気持ちのいい感触が、闇を通じて伝わってくる。

「……あ、あ」

ぼどっ……

男の身体から、両腕が肩から剥離する。

両足は……

「……あーあ、はずしちゃった」

膝から下はミンチになってるけど……大腿部が、中途半端に身体と繋がっている。どうやら、角度が浅くて切断しきれなかったみたい

い。

「……す、け……け、て……」

うわごとのように、男がつぶやく。

「……ふふ。いい格好」

闇が、ねだるように渦巻く。

「いいよ」

何を望んでいるのか……言葉が無くとも、ハッキリ分かった。

「食べちゃえ」

獲物……私を強姦しようとした男へ、闇が群がる。

「ごりごりごりゆごりゆぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ……！！」

骨を噛み砕き、肉をすり潰し……血の一滴までも、闇が貪る。

咀嚼音をBGMに、夜空を見上げる。街灯が壊れたおかげで、真
つ暗だ。

新月。

夜空のどこを見ても、闇夜を照らす月は見当たらない。

月も星もロクに輝かず、ただ暗闇だけが存在する……本物の、夜。

「……」

ずるりと、男の身体を貪りつくした闇が、戻ってきた。

手を触れ、意識を集中させる。

「……まだまだ、未熟者だけど」

闇の奥深くには、膨大な知識と経験値が埋もれている。

その全てが……私が欲しているとおり力だった。

「これから、よろしくね」

にっこりと……久しぶりに、心から笑えた。

「……ん？」

でも、おかしい。なんで、両目から涙が流れるんだろう。これっ
ぼっちも、悲しくないのに。

「それ、片付けて」

不自由の象徴……車椅子を、闇に沈める。

二本の足で地面を踏みしめながら……私は、家へ続く暗闇
へと歩を進めた。

第三十四話（後書き）

本当は、ヴォルケンリッターとキャックヤウフフする予定だったのですが、、、、、どうしてこうなったし。

ご意見ご感想、お待ちして、、、、、、いいのかな、これ。

第三十五話（前書き）

VividとForceの3巻、限定版に手を出したら負けかなと思ってる。

第三十五話

じゃきんっ

髪の毛に鋏を入れ、腰から下を切り落とす。

「……これでいいの？」

足元の受け皿には、黒々とした頭髮が散乱していた。

何も、イメチェンしようとか思ったわけではない。全て、これから行う儀式に必要な物質だ。術者の頭髮。魔力。そして残りは……

「うん、わかった」

ぶしゅっ

術者の血液。

手首を切り裂き、必要なだけの血液を抽出する。適当なところで止血。

それが、受け皿の中の頭髮と交じり合う。

ずももも……と、私の魔力がそれを飲み込む。

あとは、闇が教えてくれた通りの呪文を唱えるだけ。

「我、力を乞う者なり。」

汝が剣、我が怨敵を処断するもの。

汝が槌、我が仇敵を鎚滅するもの。

汝が盾、我が運命を守護するもの。

汝が鏡、我が願望を反映するもの。

我は乞う。

四種の力よ、我が手に集え。

我は王なり。

闇統べる王なり。

汝らが王なり。

汝らが王、八神はやての名の元に、馳せ参じよ……………」

すう…………と一拍置き、『その名』を呼ぶ。

私が持つべき、闇の力。その象徴。その名は…………

「ヴォルケンリッター!!」

ギイイイイイイインツッ!!

足元に、数学的な図形が展開する。正三角形の頂点に円を配置した、いわゆる魔法陣。

「ぐ…………うつつ…………!!」

体中から、膨大な魔力が搾り取られていく。でも、これは…………儀式が成功したという証だ。だから耐えられる。力を得る代償がこの程度なら、安いものだ。

「ぜ…………!! ぜ…………!!」

そして、体中の魔力が殆ど空っぽになる頃…………

がしゃっ

私の目の前に、プレートアーマーで全身を覆った者が四人……揃っていた。色合いに多少の差異はあれど、基本色は黒。

一人だけ、妙にちんちくりんなのがいるけど……感じる魔力は本物だ。

「……………剣の騎士」

紫がかった鎧。腰には、その名の通り、長大な剣が佩いている。

召喚と同時に、四人の基本スペックは把握している。この剣の騎士は、守護騎士……ヴォルケンリッターを統率する将という役割があるらしい。

スキルも近接オンリーという徹底ぶり。

「鉄槌の騎士」

あらー……やっぱり、ちんちくりんだ。

下手したら、私より身長低いんじゃないだろうか。鎧までミニサイズだった。

こんなナリで、本当にヴォルケンリッター随一の破壊力を持っているんだろうか果てしなく疑問だ。

それでいて、中距離・近距離戦闘をこなせて、防御力も水準以上。万能選手だ。

……………まあいいや。実戦で役立てば、何でも。

「盾の守護獣」

鎧越しても分かる、鍛え上げられた肉体。

使用術式の大半は、強固なシールド等の防御系ばかり。

命令を下すと、青白い光を纏い……その身を、狼のような姿へ変えた。

なるほど……二形態を使い分けられるってことか。

「湖の騎士」

最後の一人の使用術式は……回復と捕縛、索敵に転移。
直接的な戦闘力は一番低い。
なるほどね、後方支援タイプ……あと、現場指揮官か。

『剣』と『鉄槌』がオフエンス、『盾』がディフェンス、『湖』がバツク……そういう布陣で戦えば、どんな相手でもかなりの確立で撃破できる。

ネックなのは、個々の能力が尖りすぎていて、応用が利かないことぐらいか。

一角でも落とされれば、そこから綻んでしまう。とはいえ、落とされることなんてそうそう無いだろう。

ずるうつ……と、闇の中から一冊の本を拾い上げる。この本は、魔力の蒐集器として機能する上、闇の魔法を一時的に使用することもできる……自分で言うのもなんだけど、高性能な一品だ。ただ、高性能なおかげで一冊しか作れない。四冊作れば、もっと楽なんだけど……ま、無いものねだりしても仕方ない。

それを、『湖』に手渡す。

「行け」

守護騎士たちは、私の血肉を用いて作った分身のようなもの。だから、多くの言葉を交わさずとも意思を伝えられる。

「……」

四人は恭しく一礼し……隠蔽結界を展開しながら、町の方角へ向かっていった。

「さーて、と」

面倒な魔力の蒐集は守護騎士たちに任せて……私は、自分自身の力を磨こう。

「私たちも行くのか？」

練習台を、探しに。

以前、私が破壊した街灯は修理され、いつもどおりの光を灯していた。

人気の無い裏通りを、てくてくと歩いていく。
街灯も、民家も、どんどん少なくなっていく……

「や、やめてくれ……!!」

「だあかあ……大人しく財布出せば、見逃してやるっつってんだよお……」

「俺たち未来ある若人に、お小遣い恵んでくれよ、あア？」

みーつけた。

典型的な恐喝。それを行っているのは、茶髪に金髪。だらしない服装に、くわえタバコ。典型的なクズだった。まるで、誘蛾灯に吸い寄せられる虫けら。

「ねえ」

クズ共に、背後から話しかける。

「あア……？」

振り返ったクズの一人が、私を見て訝しげな顔になる。

「あなたたち、楽しい？」

げらげらと笑いながら、数の力を自分の力だと勘違いして……

「弱い奴を威圧して、力を誇示して……楽しい？」

「おい、何言ってる……」

「ひいいいっ!!」

私に意識を移した隙を見て、おじさんが逃げていった。

「あ、おい!! ……チッ!!」

「くっそ、財布が逃げちまっただろっつがよお……!!」

「おい、どうしてくれんだよガキ!!」

精一杯の睨みを利かせて、子供相手に本気で凄んでいる。

くすくす、と笑いがこみ上げてきた。

いい年をして、群れることでしか力を誇示できないクズ達が。

「わかるよ。力で何かを屈服させるのって、楽しいよね。うん、わかるわかる」

くすくす。

「何がおかしいんだよテムエー!!」

ぐいつと胸倉を掴もうと、伸ばされる腕。

「だって、私もすつごく楽しいから」

とととんつ

「……………あ?」「え」「へ…………?」

クズ達は、何が起きたのかわからないといった面持ちで、きょとんと見ている。

……………消失した、自らの肉体の一部を。

「いやだなあ……………クズの分際で、私に触れないでよ」

うぞうぞと、闇が蠢く。先端は、刃の形状。異常なまでに鋭い刃が、上腕部の半分から下を、足首を、両目を、串刺しにしている。

「ひやあああああああああああああ!! 腕、おれ、うで、うでええええええええええ!!?」「あああああああああ! 足がああああ!!」「いてええ……………いてええええええええ!!」

肩を足を顔を押さえて、ばたばたとのた打ち回る。

刃の先端に串刺しになっていた肉塊が、闇に食べられて魔力に変換される。

「おいしい?」

闇は、物足りなさそうに蠢く。

「大丈夫……………まだまだあるから」

今日は三人。大漁だ。

「さ、始めようか」

隠蔽結界を展開しているおかげで、邪魔は入らない。

思う存分……魔法の練習に励めるといふものだ。

「まずは……射撃誘導の練習」

「ひッ！！」

眼球を抉り貫いた肉の的を、前方につるし上げる。

狙うのは、胴体。

「闇に沈め……………」

簡易詠唱で発動させる。

「ブラッディ・ダガー」

ドドドドドドッ

「あ、あぎ、ぎ、ぎゃ……………！！！」

胃腸をズダズダに切り刻み、肋骨を切断し、肝臓を、肺を貫通し

…………最後に、心臓を破る。

「よし…………狙い通り」

初めて使った時は、何発か狙いがそれてしまったけど…………段々と、コントール能力が上昇している。この調子で行けば、百発百中の精度にまで磨き上げられるだろう。

ぐりんと白目を剥いて、男が死んだ。

もう全身スタボロで、的に使っても手ごたえが無くて面白くなさそう。

というわけで。

「はい、召し上げがれ」

「ごきごきばきごきゅん

あっという間だ。

残りの二人は、ガタガタと恐怖に震えながらその光景を見ていた。

「次は、近接攻撃の練習を……………」

さて、どっちにしようか。

「うわああああああああ！」「て、テメエが行けええええええええええつ！！！」

半狂乱になつて、さっきまでつるんでいた片割れを足蹴にする。

「あーあ……駄目じゃない。トモダチは大事にしなきゃ」

決めた。次はお前だ。

右足を掴み、さかさまに吊り上げる。

「嫌だああああああああああああああああ！！！！！」

もう、うるさいなあ。静かにしてよ。集中できないじゃない。

今度は、これだ。近接用の、魔力付加攻撃。

宙吊りになつた男の胸に、掌を当てる。

ええつと……技名は……

「……フランメ・シユラーク」

ボンツ……！！

「……！」

一瞬だけびくつと痙攣し……絶命する。

「ん……？」

背中を見てみると……威力が大きすぎたのか、身体の中身が道路にぶちまけられていた。

「あっちゃー……難しいなあ」

本当は、体内だけを綺麗に焼き潰すつもりだったのに。

「チツ……失敗か」

じゆるじゆると、道路にぶちまけられた臓器や血液、骨の欠片まで、闇が嚼り尽くした。

ほいつとセミの抜け殻みたいになつた死体を闇に放り、食べさせる。

「何だよオ……！！ 何で俺なんだよオ……！！！」

涙と鼻水で顔をどろどろに汚しながら、最後の一匹が聞いてきた。特に理由は無いんだけどなあ……ああ、そう。強いて言うな

ら。

「たまたま、そこにいたからだよ」

あんたたちと、同じ理由だよ。

「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け」
さっきの二人を喰ったおかげで、また一段と闇が活性化し……新
しい魔法を、使えるようになった。早速試そう。

「嫌だ！ 嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！ 助けて！ 助けて母ちゃ……！」
感謝して欲しいくらいだ。何の意味も、価値もない命を……私が
有効に活用してあげるんだから。

白色に輝く槍。さあて、どういう効果があるのやら……

「ミストルティン」

ざしゅっ！

「ぎゃっ……！」

槍は、男の残った右腕、両足、腹部、胸部に突き刺さった。

「あ、あ……？ いき、てる……？」

それ単体でのダメージは、肉体を貫通する程度の微々たる物だ。
死にはしない。

「はひゃ、ひゃひゃひゃひゃ！！ 生きてる、まだ生きて……！」

歪んだ歓喜の表情を浮かべ……

ビキンッ……

「……………」

男は、両の眼球を残し、動かなくなる。

全身が、石化していた。

「へえ……石化するんだ。それも一瞬かあ……え？ 的が小さいか
ら、早く固まっただけ？」

こんこん、と軽くノックしてみても、岩石そのものだ。

「魔法つて、何でもアリなんだ……ねっ」

細い小指を、ぺきつとへし折ってみる。

断面から、真っ赤な血がたらたらと流れ出してきた。

「……………！！……………！！」

ぎよるぎよると両目が動く。

「あはは。ちゃんと痛いって、わかるんだ？」

正確には、全身の筋肉を石化させているわけだから、痛覚もある。当然、心臓も肺も機能しているから、呼吸もする。

ただ、口と鼻を完全に塞いでいるから、死ぬほど苦しいだろうなあ……あらら、目が見る見る血走っていく。うわあ、苦しそう。

可哀想に……………一思いに、殺してあげよう。

「テートリヒ・シユラーク」

腕に、闇の魔力を纏わせ……………

ガゴンッ！！

石の身体を、粉々に打ち砕いた。

うひゃー……………とうとう素手で岩を砕いちゃったよ、私。

「うりうり……………」

闇は、石の身体をお構いなしに噛み砕き、飲み込んだ。

……………

闇が、まだ足りないかと訴えている。でも……………

「もう、三人も食べさせてあげたでしょ？ 今日はおしまい」

隔離結界、攻撃魔法と使い続けて、守護騎士も遠隔維持してるおかげで疲れた。

今日はもう、守護騎士たちも呼び戻して帰って寝よう。

あっちはどのくらい集まったかな。

「ん……」

歩きながら、『剣』『鉄槌』と視界を共有する。

「……うん、順調みたいだね」

なにやら、杖を構えた人たちと相対している。その足元には、同じような服装の人たちが転がっている。

見た感じ、相手方の実力は、『剣』『鉄槌』に遥かに及ばない。

百人で掛かってきたって、撃退できるだろう。

「『剣』、殺したら駄目だからね」

殺したら、魔力の源……リンカーコアが、取り出せなくなる。

「殺さなければ、腕や足の一本は飛ばしてもいいから」

ま、そういうことだ。

視界の向こうで……『剣』が、残った数人に襲い掛かる。

『盾』と『湖』に、『剣』『鉄槌』の回収を命じて、視界を閉じた。

今日は大量だ。三人を喰って、リンカーコアも多数を蒐集できた。

……そうだ。いいこと考えた。

「らっしやーせー……」

今日も今日とてやる気の無い店員に迎えられた。目指すのはは弁当じゃなくて……ドリンクコーナー。

「これと、これと……あとこれ」

かごの中に、チューハイだとかビールの缶をぽいぽい放り込んでいく。

祝杯というやつだ。

レジに持っていくと、金髪の店員は訝しげな顔をした。

売ってくれないというのであれば、魔法で催眠を掛けてやればいいのか。

「あー、すみません。お酒はハタチからなんでー、売れないんすけど……ま、いいや。オーナーいねえし」

こんな店員を雇っていて、問題ないんだろうか。素直にありがた

いけど……

「あのさあ、」

と、財布から現金を取り出す私に、興味本位で話しかけてきた。

「あんだ、足治ったの？」

……店員は、案外客の顔を覚えているものらしい。そこそこ通っている私が、今日は自分の足で歩いていることに気付いたようだった。

「ええ、問題なく」

少しイラツとしつつも、如才なく答える。答えてやったんだから満足だろう。

けど、店員は妙に真剣な顔で食いついてきた。

「どこの医者？ 教えてくんねーかな」

……めんどくせえ。

「海鳴総合病院の、石田って人」

敬語と愛想を彼方に投げ捨て、端的に教えてあげた。

「もういい？ 眠いんだけど」

店員は、メモ帳に汚いカタカナで『海鳴総合病院・石田』と殴り書いた。

「ああ、さんきゅー」

んじゃ、帰るか。

「ただいまー、っと」

家のリビングには、守護騎士四人が戻っていた。チェックしてみた感じ、大きな負傷は無い。楽勝だったらしい。

すっ、と『湖』が本を差し出した。

「ん」

受け取り、ページを確認してみる。かなり分厚い本の、最初の数ページが埋まっていた。

記されている魔法も、闇が保有しているものよりずっと低レベル。「あんな雑魚じゃ、この程度か……」

この本のページが全て埋まった時……闇の奥底に眠る、最強の殲滅魔法が完成する。

焦る必要は無いけど、ちんたらやっているのも性に合わない。もつと魔力の大きい獲物を、狩らなければ。

「……明日は、コレ使ってみるか」

瞑目し、今現在私ができる魔法をリストアップしていく。

結界魔法のバリエーションに、『魔力を持つものだけを閉じ込める隔離結界』という便利なものを見つけた。どうやら今日、蒐集した中であつたらしい。

クズを髑り殺すのも楽しくていいんだけど、やっぱり本命はこつちだ。

……明日は、私が現場に赴くでしょう。守護騎士の連携も、直に見ておきたいし。

ぷしゅつと缶のプルタブを開け、人生初のアルコールを口に含んだ。

「……………」

最初、つーんとした刺激臭が鼻をつき、続いて、人工的な果汁の匂いが口に広がる。

「……………悪く、無いかも」

くらくらと酩酊して……何というか、気持ちいい。

「んっ、んっ……………」

二口、三口と飲み……………

……………その後の記憶が消えた。

「あたまいたい……………きもちわるい……………おええええ」

リビングのソファで起きて、目にしたのは三本のお酒の空き缶。

酔っ払って、一晩で飲んでしまったらしい。

「これが世に言う、二日酔いというやつか……………キツい。」

本はどこにいったのかと思ったら、頭に敷いて枕にしていた。寝転んだままページをめくり、都合のいい魔法を探す。

「体内浄化魔法……………」

よし、これで体内のアルコールを飛ばせば大丈夫のはずだ。なあんだ。これさえあれば、いくらでも飲み放題だ。

早速、発動つと……………

「……………あれ？」

発動しない。何で？

「この、このつ……………何で!？」

調べてみると、何故か闇が発動を妨害していた。

「ちよつと、何すんのよ!」

……………。

「『飲みすぎです。少し懲りてください』だあ……………!？」

あんた、いつから主にそんな生意気なこと……………!

「いつ……………!？ たたたたた……………!！」

あ、頭が痛くて、怒るに怒れない……………

「お、覚えてるテメエ……………!! う、おええ……………!」

幻聴なんだろうけど、呆れたようなため息が聞こえた気がした。

結局、昼過ぎまでソファでぐったりしていた。

多少はマシになってきたけど……………まだ立ち上がると辛い。

「水……………」

ああ、駄目だ。シンクまで歩いていくのがキツい。

車椅子、処分するのは早まったかなあ……………

「……………」

「ん……………?」

気配を感じて目を開けると、赤い鉄兜が目に入ってきた。

『鉄槌』……？ 私に何か用でもあるんだらうか。

「……」
すっ……と差し出されたグラスの中には、氷水。

「……もしかして、私に？」

『鉄槌』は、こくんと頷いた。

「ああ……ありがと」

少し驚いたけど、助かった。

「んぐっ、んぐっ……ぷは……っ！……」

生き返る……！

にしても……

「あんたたち、自由意志あったんだ」

てつきり、私の意志を忠実に実行するだけの人形だと思っていたけど……ちゃんと考えることができるんだ。

からん、と、グラスの中で氷が滑る。そう、氷だ。冷蔵庫を開けたとしか思えない。

「……」
中世の物語に出てくるような鎧の騎士が、冷蔵庫から氷を取り、グラスに水を注ぐ……実にシュールな光景を、想像してしまった。

「ま、助かったよ。ありがと。ええっと……」

『鉄槌』、と言いかけて、少し悩んだ。

「ねえ、アンタたちの名前……」

ばっんっ……

「……あれ？」

いきなり、目の前から『鉄槌』が消えた。消えた……というよりは、強制的に闇の中に引き戻された感じだ。

「……」
「『アレは人形だ。名前など無い』……ねえ。はいはい、わかつ

たよ」

……違和感が残った。

まるで、聞かれたくないことを聞かれてしまったように、唐突に話を遮った。いくらなんでも不自然だ。

それに、二日酔いをたしなめた声と、今の声………トーンが違っていた。

前者は、暖かく柔らかい声で………後者は、冷徹で硬質。

まるで………

闇の中に、二つの人格があるようだ。

第三十五話（後書き）

自分で書いていてアレですけど、落差が激しいです。

というわけで、ヴォルケンリッターはこんな感じですよ。
闇の書の設定も、かなりいじくりまわす。

ご意見ご感想、お待ちしております。

第三十六話（前書き）

テレビを見て「かわいそうに」「とか言ってるのは飽きたんで、更新
します。

停電とのチキンレースです。

第三十六話

まったく……酷い目に遭った。今度から、酒は控えよう。

「おかげで、一日無駄にしちゃったよ」

ぶつくさ愚痴りながら、夜の歓楽街を歩く。警察官がパトロールをしているが、私を呼び止めるようなことはしなかった。

新たに覚えた、変身魔法のおかげだ。今の私の姿は、十代後半から二十代程度に見えている……はず。

「……………」

今日は、『湖』を連れている。もちろん、隠蔽結界を展開しながら。

歓楽街から外れて、裏通りへ。

本当なら、今日は守護騎士の連携を見ておきたかったんだけど……それよりも試してみたいことがある。

「ん。あったあった」

一際大きく……電気が点いているのに、どこか薄暗いイメージを受けるビル。

大仰な木の表札には、達筆な字でナントカ『組』と書かれている。世に言う、ヤクザ事務所だった。

「『湖』」

「……………」

指示を聞いた『湖』が、その身を包む結界を大きく広げた。

とにかく堅牢な結界で、『湖』が解除するか、それ以上の力をもって無理やり破壊するでもない限り、外には出られない。

「ここで待ってて。手出し無用だからね」

「……………」

こくん、と頷く『湖』を残して、中に入る。

「……嬢ちゃん。何の用だい」

受付にいた厳つい風貌の男が、のっそりと立ち上がる。

うわ……大きい。身長、2メートルくらいあるんじゃないかな？

「よッ……と」

変身魔法を解除。

いまさら、素顔が割れたところで困りはしない。

だって………目撃者は、一人も出ないんだから。

「……あ？」

大男からすれば、いきなり目の前に子供が現れた………としか思えないだろう。

とん、と大男の腹に手を添える。

「フランメ・シュラーク」

ボンッ………！

くぐもった爆音………そして、大男は鼻と口から、煙突のようにぶすぶすと煙を上げ、倒れた。

「うん………いい調子」

細かな制御も、問題無い。これなら………使えそうだ。

「おい、何の騒ぎだ！」「出入りか！？」

どやどやと、明らかに堅気ではない風体の男たちが出てきた。

おあつらえ向きに、短刀や拳銃で武装している奴もいる。

「……子供？」

怪訝な顔をして私を見て………その足元に転がる大男の死体を見て、血相を変えた。

「このガキがあああああー！！」

「待て、いくらなんでもありえんだらう」

「でも、どう見たって………」

「ごちゃごちゃごちゃごちゃ………サンドバッグが騒いでるなあ。

「『甲冑』、展開」

ぞぞぞぞぞ………！

影から、闇が起き上がる。

「……は？」「なんだ、アレ……」

両腕を広げて、告げた。

「おいで」

……！

轟々と、私を取り巻く闇が渦を巻き、私の身体へ収束していく。

試してみたかったこと……それは、新しい魔法の性能。

この前知ったことだけど、魔法をフルに使うには『デバイス』という道具が必要らしい。蒐集した連中の持っていた杖しかり、守護騎士たちの武装しかり。

でも……剣、ハンマーとか、武器として使えるならともかく、なんでも……『弱点』を手に持つ必要がある？

腕ごと切り落とされてしまったら、そもそも破壊されてしまったら、ロクに魔法を使えなくなってしまうのに。

そして編み出したのが、この『甲冑』という術式だ。

「……はあっ！」

バオツ！！

余剰魔力の竜巻を、吹き散らす。

「変身……ってね」

そして、私の姿は変貌していた。

体格は、成人女性に近いめりはりの利いた体格に。

髪の毛は白銀に染まり、地肌に赤い紋様が浮かび上がる。

全身を覆う装束は、左右非対称。編みこめるだけの攻撃魔法・強化魔法・補助魔法を編みこんだために、少しだけ歪な形になってしま

った。

これは常に複数の魔法が発動している状態であり、必要に応じて出力を上げ下げするだけで済むから、発動にかかるタイムラグも無い。

……まあ、燃費はすごいけど。

闇の魔力自体が膨大で、私自身の魔力もそれなりに大きいおかげで成立した。

ぎゅぱぎゅぱと手を開けたり、閉じたり。

……そんじゃ、ま。

「試運転、開始！」

脚部の高速移動魔法で、一気に間合いを詰める。そして、攻撃魔法そのものと化した腕を振るう。

パゴンツ！！

小気味のいい音をたて、スイカのように頭が爆ぜた。

「あはっ、呆気ないー！！」

「な……」

中途半端に匕首を抜いたまま、銃を持ったまま……無防備に硬直する。

「ぎッ……！！」

そのうち一人の顔を驚？みにして……爆破！

ボンツ！！

「あーっはっはー！！ ほらほら、ボサっとしてないでさあ……！！

頑張らないと死んじゃうよー……！！？」

ざしゅっ……ぐちゃっ……ぶちっ！！

手刀で心臓を貫く度に……頭蓋骨を握り潰す度に……脊髄を引っこ抜く度に……赤黒い悦びが、頭の中を快楽で染め尽くす！！

「ひやははははッ！」

ああ……楽しい……！！！！

「うわああああああ！！ バケモンだああああああ！！」
「パンッ！ パンッ！！」

拳銃が火を噴き、鉛弾を撃ち出す。

そんなオモチャが、私に通じるわけないじゃない！

「……あむっ！」
「がちゃん！」

「……へあ？」

口の中に広がる、火薬の匂い。

「銃弾噛み……なんちゃって」

ペろん、とキャンディーのように銃弾を乗せて、舌を出す。

何かの小説で見た技だけど、簡単なもんだ。

「プッ！！」

再び口に含んだ銃弾を吹き出す。

びすっ！

「……あ」

頭の中に返却つと。

「うおおああああああっ！！！」

「ん？」

抜き放った日本刀が、私の肩口で停止した。

へえ………そこそこ骨のある奴もいる。でも………しよせんはオモチャだ。『甲冑』を貫くには、威力が足りなさすぎる。

「これちよーだい」

ひよいつと指先で刀を摘み、取り上げる。

「この！」

今度は、懐の匕首を抜いて切りかかってきた。

「ひやはッ、やるじゃん！」

いつでも殺せるけど……ちょっとだけ、チャンバラに付き合っ
てやるっ！

ガキンツ！

相手の匕首に、力任せに日本刀をぶつけた。

「くツ……こんの、バケモンが！」

手がしびれているだろうに、懸命に匕首を振るっている。

「ほらほらほらあっ！！ がんばれがんばれー！ ひやはははは！
」！

ガキキキキキンツ！ バキツ！

あらら、折れちゃった。

「今だああああああああっ！！！」

正面に匕首……背後に拳銃が3、か。

「よいしょっと」

髪の毛に魔力を流し、操作。

形質変化。

腰までの髪の毛を、魔力で延長。

硬度強化。

絹糸並みのしなやかさに、刃の切れ味を追加。

衝撃加速！！

遠心力を、数十倍に増幅！！

「そりゃあっ！！！」

ザザザザンツ！！

ち探し出すのも面倒だし……そろそろ、お開きにしよう。
手をかざし、魔力を集める。

いくら『甲冑』を纏っているとはいっても、このクラスの魔法を使うには、多少のモーションと、詠唱が必要だ。
手のひらに、闇色の球体が出現する。

「サポートよろしく」

まだ、使い慣れてないからね。

……。

広域空間攻撃。闇の中に埋もれていた魔法の大部分は、この類。
今から行使するのは、その初步にあたる。

「闇に、染まれ」

手のひらサイズの隔離结界の中に、魔力を溜め込んでいく。

隔離されている空間を魔力で満たし、破壊し……現実世界へ一気にフイードバックさせることで、破壊力を生み出すのがこの魔法の真髄だ。

術式名称……………

「デアポリック・エミッション」

グアアオオオオオオオオオオオオオン！！

お。おお。すごい反動。

私を中心に発生した魔力の衝撃波は、凄まじい勢いで膨れ上がり
……………结界内を、蹂躪していく。

ギチッ、ギチッ……………！！

『湖』が展開する结界が、軋んで歪む。

オオオオオオオオ……………！！

衝撃波は鉄筋のビルを……………そして、無様に隠れていた残りのクズ

共を、飲み込み、破碎し……分子レベルにまで粉々にしていく。

「あ、あら……?」

ギチツ……ピキツ。

やべっ！ 結界にヒビが……！

「ちよ、ストップストップ！」

慌てて手綱を握りなおそうとするものの……一向に止まらない。

……、……。

「魔力の配分を、間違えた……?」

……最初に注いだ魔力が、多すぎたらしい。

「どうしろっていうのよ!？」

こうしている間にも、破壊力は増し続けている。

もういいや！ 制御放棄！

ギョゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「きゃあああああああああああ！！」

とつとつ結界が砕け、魔法が暴発した。

「ふぎやっ！」

余波に背中を押し出され、べしゃっ、と地面に顔からダイブする。

大部分の破壊力は結界の中で消費したはずだから、そんなに酷い被害は出ない筈だ。せいぜい、大型台風並みの突風が吹き荒れるくらいで……

「ちつくしよー……こんな無様な失敗するなんて……ぺっぺっ

！」

口の中に入ってしまった土を吐き出す。

さっきまで結界で覆われていた場所は、隕石が落ちたようにクレーター状に抉れ……ビルは跡形も無くなっていた。

「……ま、いつか」

で済んでいるけど……これも、要練習だなあ……

「ん？」

ここまで来て、ようやく思い至った。

何で逃げてるんだ、私？

目撃者なんて、皆等しく消してしまえばいいだけなのに……

もしかして、捨てたと思っていた良識が、まだ残っていたんだろ
うか。

罪無き人に、理由無く手を出してはいけないという……

……

「チツ……」

イラつく。

何が、『罪無き』だ。一番夕チが悪い連中じゃないか。

自称一般人なんて、一皮剥けばどれも同じだ。

普段は善人ぶって、他人の不幸を面白おかしく取り上げた情報媒
体を娯楽にして、『かわいそうねえ』とか、『大丈夫かしら』なん
てしたり顔でのたまう。

それを助長するのが、自称ジャーナリストのハゲタカだ。

わざわざ病室にまで押しかけてきて、カメラとマイクを突きつけ
て……

『ただ一人生き残ったご感想は？』

……だったか。

「……うん、あれは殺そう」

丁度、隣町に支部があったはずだ。片っ端からブツ殺しておかな
いと……今夜、ぐっすり寝られない。

……。

「『おやめください』……って言われてもね」

「んぎツ……………」

……………床にスライディングさせられた。

「い……………つてええ……………」

『甲冑』のおかげでダメージはゼロだけど……………気分的には痛いのよ！

「離れる、このやるっ！」

『甲冑』を解除し、元の姿に戻る。

「……………あー、クソツ……………どこだ、ここ」

妙に暗い……………というか、午後十時だから、消灯されていて当然か。ベッドと、テーブルと、テレビ、白いカーテン。ここ……………病院？

からから……………

「あん？」

背後から、妙に慣れ親しんだ音が聞こえてきた。

振り返った先で……………なんとというか、デジャブを感じる光景を見た。

「……………お姉ちゃん、誰？」

車椅子に腰掛けた女の子が、興味半分、怖さ半分くらいの表情をしていた。

「チツ……………さあね。誰だと思っ？」

「え？ ええと……………」

はっ、わかりやしねえって。

「……………魔女、さん？」

、は。

「は、ははは……………！」

魔女……………魔法使いじゃなくて、魔女……！
悪魔と交わり、人に災いを齎す異端者！

「ひやははははは……！ はっ、ははっ……！ 魔女……！ そう、
魔女！」

ああ、おかしい。

おかしくて、おかしくて……

「お、お姉ちゃ……！？ ひグッ……！！」

つい、殺したくなっちゃう。

首筋を、折れない程度の力で締め上げる。

「あ……あ、！」

ひゅーひゅーと、空気を求めて鳴る喉。

「……………ブチ殺すぞ、ガキ」

もう一段、強く締め上げる。

「ああ、そうさ……私は魔女だよ。大正解だ」

確かに私は、人並み以上の悪行を行ってきた。

でも、それを改めて突きつけられると……無性に、腹が立つ。

「魔女らしく、理不尽に殺してやるよ……！！」

決めた。殺そう。

……………。

魔力資質、極めて高し……？

「へええ……………いいこと聞いちゃったア……………！！」

余計に、殺す理由が増えた。

リンカーコアと心臓を、いっぺんに抉り出してやる……………！！

さあ、体中の水分を涙と鼻水にして泣き喚け。小便を垂れ流しながら命乞いをしろ。

クス共と同じように！

ざりッ……………！！

あと少しで、首が折れる。

目の端に涙を浮かび、無様な断末魔が見られる……………と、思っていたのに、ガキは、

「……………」

全てを受け入れるように、目を閉じた。

「……………おい、」

首を解放し、落とす。

「……………げほっ、げほっ！」

涙目で喘ぐ。

「何で、抵抗しない……………!?!」

違う。私が見たかったのは……………無様に命乞いをして、泣き喚く姿だ。

それをへし折って、殺すつもりだったのに……………!!

こんなの、ぜんぜん楽しくない!

「答える!!」

足元のガキを、問い詰める。

ガキは、呼吸を整え……………言った。

私は、お荷物だから

……………と。

「私の足、事故でこうなっちゃったの」「
こう、と言いなから、足をさする。」

「でも、院長先生は、『まだ動くかもしれないから、がんばって治療しよう』って……………」

動く可能性があるだけ、マシだろう。私なんか……………100パーセント、動かなくなっていたのに。

「だから……いろいろな治療法を試して、そのたびに、お金が掛か
って……」

……

「それでも、動かないの!!」

感情が爆発し、とうとう涙が流れた。

「お兄ちゃんとお姉ちゃんは……自分の物なんか何も買わないで、
真夜中までお仕事して、お金を稼いで、高い薬を買って！ 治療費
を払って!!」

俯く先には……足。

動かない、重石。

「なのに、なのに……!! 私の足は、動かない!!」

がす、がす、といっそ憎しみさえ持つて自らの足を叩く。

「だから……!! 私なんか、いなくなっちゃえば……!!」

「甘えんな。ガキ」

「……え？」

ガキは、涙に濡れた顔を上げた。信じられない……そんな気持ち
が、表情に見て取れた。

「悲劇のヒロインぶってるんじゃないよ。

お前の兄と姉は、お前の足を直すために必死こいて働いてんだぞ……

……!!?

今のお前の言葉は……お前の兄と姉の気持ちを踏みにじる言葉
だって、何で気付かない!？」

なぜ、ここまで怒るのか……自分でも、よく分からない。

人殺しの私でも……このガキを殺そうとしていた張本人でも……
そう言わなくちゃ、いけないような気がしたんだ。

ガキは……くしゃつと顔をゆがめ、言った。

「お姉ちゃんには、わからないよお……………」

……………キレ、た。

今度こそ、本当の本当に……………堪忍袋の尾が、ブチ切れた。

……………無言で胸倉を掴み上げ、至近距離から睨みつける。

「ならお前は……………わかるのかよ」

「なに、が……………」

二人も家族がいて、愛してもらっている奴に……………！

「自分の父親と母親が、目の前で焼け焦げて死んでいくのを見ていることしか出来なかった私の気持ち、わかるのかって聞いてンだよ……………」

一 一気に言い切り、呆然としたガキの顔を睨みつけ……………
一 一気に、醒めた。

「……………もういい、お前なんか知らん。……………これからも、ずっとずっとそうやって、無駄な人生を全うすればいい」

……………もう、殺す気も無くなった。

……………
うるさい。こんな甘ったれのリンカーコアなんて、奪う価値も無い。

「待って……………」

弱弱しく、呼び止められた。

「……………」

無視して、窓枠に足を掛ける。

「待ってよ……！」

縋り付くように、腰元を掴まれた。

「……………何」

「私は、どうすればいいの……………？」

……………この期に及んで。振り払うのは、簡単だ。

でも……………

「私は……………どうすれば……………」

あまりにも心細そうな姿に、庇護欲がそそられたのか。それとも、自分と似たような境遇のこいつに、同情したのか。

自分でも、よくわからない。

……………今回、だけだ。

「お前……………名前は？」

こうして、お節介を焼くのは。

「柳瀬、美香」

「美香。お前には、資質がある」

「ししっ……………？」

「そして、資質のあるお前には、二つの選択肢がある」
魔力の大きさじゃない。世界を憎む気持ちがあるのであれば……………

「このまま、庇護され続けて残りの人生を生きるか……………魔
の力を手にして、闇に生きるのか」

魔女に、なれる。

「もし、魔女になるなら……………私でよければ、教えてやるよ」
力の使い方。そして……………世界の呪い方を。
すっ、と手を差し出す。

「選べ」

手を取らなければ、人間として、光の中を生きる。
取るのであれば、魔女として、闇の中を生きる。

「私は……………」

美香は、ほんの少しだけ葛藤し……………

「……………魔女に、なる」

決意を込めて、手を取った。

「契約、成立」

美香の身体を抱きかかえ、窓の外に飛ぶ。

「わ、わ……………!?!」

驚いて、ぎゅっとしがみ付いてきた。

リンカーコア、励起。

「うあ……………!?!」

未知の感覚に、驚きの声を上げる美香。

そして。

「うあああああああああああああ!?!」

群青色の光の柱が、屹立した。

(……………すげ)

天を貫く極太の光を見ながら、感嘆を押し込める。

美香の魔力総量は……………『闇』を上乗せしていない状態の私を、
凌駕していた。

「……………契約」

「え?」

約束は、約束だ。

「教えてやるよ。力の、使い方を」

美香の魔力光は、群青………夜明け前の色。
闇統べる王………私の弟子に、相応しい。

夜の闇と、夜明けの群青。

二色が交じり合う場所で………私は、ただ一人の仲間を得た。

第三十六話（後書き）

うーん、、、微妙。

もしかしたら、大幅に書き直すことがあるかもしれません。

『甲冑』は、羽根の生えていない闇の書の意味を想像していただければOKです。

、、、そろそろ、秀人たちの話に戻ろうかなーって感じですよ。

ご意見・ご感想お待ちしております。

4月9日

最後の部分を大幅変更しました。

第三十七話（前書き）

遅れてすみません、

第三十七話

板張りの床を素足で踏みしめ、構えを取る。

「……………んじゃ、始めるか」

暑さと緊張感で流れた汗が顎を伝い、床に落ちる。

「ああ、いつでも来い」

相対するのは、恭也。両手に短い木刀を持ち、構えている。少しぎこちなさを感じるのは、ブランクが長いからだろうか。

ぎっ……………

僅かに床が軋み……………

だんっ！

それを合図に、一気に間合いを詰め……………

「おおおおっ！」

勢いのままに、掌打を振りぬく！

「はっ！」

紙一重で回避され、カウンターの突き技が繰り出される。

鳩尾を狙った一撃。

左手でそれを払いのけ、顎を狙ってアッパーカット！

がんっ！

木刀の柄尻でそれを受け止められる。

（ここ！）

左手でボディを狙う。この距離なら、木刀より拳の方が速い！

が……………

ぱんっ！！

「うわっ！？」

拳を打ち合わせていた柄尻から衝撃が発生し、弾かれた。

何だ、今の!?

まるで、攻撃魔法を喰らったみたいなの衝撃だ。

でも、恭也の……というか、なのはを除く高町家の面々は魔力ほぼゼロのはず……!

「おおりやつ!」

よくわかんねえけど、間合いを取るために、上段蹴り!

とんっ……

「は!?!」

何と、恭也は俺の脚をジャンプ台にして……跳んだ!

なんて身の軽さだ!

「はあっ!」

横尻ぎの一閃! 狙いは、延髄!

(間に合え……!)

左の二の腕を、射線上に上げる。左手を盾に!

ボグッ……!!

「……っぐあ!」

痺れと痛みが、いっぺんにやってくる。折れてはいないだろうが

……回復するまで、左手は使えない。

「おおっ!」

好機と見て、一気呵成に攻め込んでくる。

ひゅんっ!

縦横無尽に繰り出される刃。

半身に構え、右腕と足捌きのみで応戦するが、やはりリーチの差も相まってじりじりと追い詰められていく。

「はっ!」

再び、一閃!

「くっ!」

「ごきんっ!

拳と相殺。だが、

ぱあんっ！！

……、また！

どうあっても、獲物同士をぶつけ合うつもりは無いようだ。
しかも、マズい！ 衝撃で、腕が上に跳ね上げられた！

ひゅっ！

今度は、脇腹狙い！

「こんのっ！！」

身体を捻り、床の上を転がって退避する。

「はあ、はあ……！！ っしゃあ！」

腹筋で立ち上がり、感覚が戻ってきた左腕を構えに入れ、ファイ
ティングポーズを取る。

甘く見ていた。こいつ、下手したら魔法抜きでもクロノ並みじゃ
ねえの？

身体能力は高いし、剣術は冴えてるし……何より、あの意味の分
からん衝撃が厄介だ。

対策は………

「……シッ！」

実は、ある！

恭也の右側に回りこむ。

「っ！！」

思ったとおり、横薙ぎの一閃。この立ち位置なら、一刀しか使え
ない！

それに……再び、拳を合わせる。

二、三回受けて……衝撃のタイミングは、大体わかるようになって
た。

接触して、0.5〜1秒。多分、ブランクが無ければもっと速い
んだろうが……今は、十分に対応できるレベルの速度だ。

バチンッ！！

「ぬっ……!!」

対策。それは……

「弾かれるなら、弾かれないようにしっかりと握ればいい!」
「それだけだ!」

「ふんっ!」

ベキヤツ!

木刀を握り潰す。よっしゃ、これで手数が減る!

「……!」

残った一刀で、懸命に手数をカバーする恭也だけど……この勝負、俺が貰った!

ガスッ

木刀を肩で受け止め、間合いを詰める。

「うおりゃあああああああ……!」

渾身の……正拳突き……!

「……使ったつもりは、無かったのだが」

そんな一言を残して……恭也が、目の前から消えた。

「は!?!」

姿を探すより先に、ぞわっ……と、鳥肌が立つ。

回避……駄目だ、遅い!

ドガッ……!

「があっ……!!」

延髄に、クリーンヒットした。

「……これでも、倒れないか」

恭也も、運動とは別の汗を浮かべている。

あれだけの無茶な機動、生身でそう何度も使えるわけが無い。でも、多分だけど……少なくともあと一回くらいは、使える。

……そう何度も、使われるわけにはいかない。

あと一発。あと一発で決められなかったら……素直に降参だ。」

一本きりになった木刀を逆手に握り、互いのチャンスを伺う。じりじりと、円を書く動きで動き……

ビシッ！

「……っ!？」

何だ、目に何かが……!

「アレか……! くそ!」

俺が砕いた、木刀の破片か!

「決まりだ」

声だけの恭也の気配が、また目の前から消える。

探っても、探っても……恭也は見事に気配を殺している。

「……ああもう当たれええええええええええ!!」

ヤケクソで、裏拳を振る!

「ごしゃっ!

「がはっ!!」

あ、あれ……? 当たった?

「おおおおっ!」

無理やり目を開ける。

目の前には、木刀を振りかぶった恭也の姿!

「はああああああっ!」

「おりゃああああああっ!」

斬撃が俺の首を薙ぐ寸でのところで……俺の正拳突きが、恭也の顔を捉えた!

「どばあんっ……!!」

「げふっ……!」

恭也を道場の壁に叩きつけ……そこで、恭也が限界を迎えた。

「……参っ、た」

でも、俺もギリギリだ。

「ぜー、ぜー……！ど、どんなウエイターだよ……！」

まさか、あと一步にまで追い込まれるとは思ってもみなかったぞ

……

最後の一撃が、あとコンマ数瞬速かったら。あと数日ブランクが短かったら。

ああして倒れているのは、俺だった。

疲労困憊で、道場の床の上に身を投げ出す。

「あー………あちー………」

道場の外からは、じーわじーわと気の早いアブラゼミの鳴き声が聞こえている。

季節は、初夏を迎えようとしていた。

……ばあんっ！！

あ、終わったみたいだ。

茹で上がったそうめんから顔を上げ、道場を見る。

さつきから断続的に聞こえていた踏み込み音や、衝突音は聞こえない。

どっちが勝ったのかなあ……

「ま、秀人さんだろうけど」

言っちゃ悪いけど、秀人さんと兄さんの力の差は歴然だ。

異形の怪物や歴戦の管理局員、リアル魔法使い（プレシア）を相手に、常に実戦で力を磨き続けていた秀人さんに対して、剣に埃を被せていた兄さん。

前は強かったらしいけど、今は最盛期の半分も強くないに決まっ

ている。稽古を怠れば怠つただけ、力は削げ落ちていくのだから。

「ふふふふ……いい気味」

私をほつたらかしていた報いを、今こそ受けるといいよ……

「な、なのは……？ 二人の様子を、見てきてもらえる……？」

若干怯えた様子で、母さんが恐々と頼んできた。

「はい」

エプロンを畳み、椅子に引つ掛けた。

「準備は、僕らがやっておくよ」

人間形態のユーノくんが、慣れた手つきで稲荷寿司を皿に載せていく。

「うん。ありがとう」

それにしても、ユーノくんもこっちにかなり馴染んだよね。お箸だつて使えるし、日本語の小説を読めるほど言語も習得して……

「ねえ、ユーノ。後で古文の課題手伝つてよ。難しくてさあ……」

「うん、いいよ。源氏物語だっけ？」

今や、高校生の課題程度なら片付けられるほどになっている。

でも姉さん……そのくらい、自分でやろうよ。

机の上には、夏らしいさっぱりした味付けの食べ物所狭しと並んでいる。

うん。稽古でお腹を空かした二人には丁度いい量の筈だ。アスパラのベーコン巻きと鰹の叩きは、特に自信作。

「姉さん、兄さん運ぶから手伝つて」

「負けてること前提なんだ……」

勝手口からサンダルをつっかけ、道場へ。

「お待たせー。お昼ごはんできてるよー」

がらつと引き戸を開ける。

「よっしゃ、飯だ！」

秀人さんはタオルでぐいっと汗をぬぐい、跳ね起きる。

「おい恭也、飯だ起きろ」

壁際に座り込む兄さんの肩をぽんぽん、と叩いた。

「……………だから、何故お前はそうピンピンしているんだ」
姉さんが肩を貸し、立ち上がらせる。

「もう……………恭ちゃん無理するから。意地になるような年じゃないで
しょ?」

「……………すまん」

この稽古というのも、実は兄さんから言い出したことだ。

『恭也、お前ちょっと身体動かしたほうがいいぞ。身体硬くないか
?』

秀人さんの何気ない一言。それが、高町の人間に共通の、『負け
ず嫌い』に火をつけてしまった。

よろしい、ならば模擬戦だ……………と、あれよあれよと言う間に、秀
人さんと兄さんが対決する運びになり、じゃあ飯ができるまで一汗
かくかー、と道場に來たのが一時間前。

全くもう……………一汗どころじゃなくなってるよ。

「秀人さん、シャワーでも浴びてきなよ。上がったらずくに食べら
れるようにしておくから」

「悪いな。頼めるか?」

「もちろん」

秀人さんは自分の足で、兄さんは姉さんに支えられ、浴室に向か
った。

「おお、美味そうじゃん」

戻ってきた秀人さんは、食卓の上を見てそう言った。

「強いて言えば、どれがおいしそう?」

……………気付いてくれるかな?

「そうだな……………」

平静を装い、内心どきどきしながら言葉の続きを待つ。

「アスパラのベーコン巻き……かな」
よっしゃあ！

「それ、私が作ったの」

「さすがだなー……俺もレパートリー増やさないと」

私はこうした細かい料理が得意で、秀人さんは鍋でたくさん煮込むような料理が得意。

ユーノくんは、専ら仕込みや味付けのお手伝い。しっかりと役割分担ができています。

「あら、褒めるのはなのはの料理だけ？」

母さんとユーノくんが、最後の二品を持ってきた。

「いや、桃子の料理も十分に美味そうだ」

「良かった……たくさん食べてね」

よし、みんな揃った。

「それじゃ、」

いただきます！

「はい、秀人さん、ユーノくん」

二人の取り皿に、料理を取り分ける。

そして、早速私の料理を口にした二人が一言。

「うん、やっぱり美味しい」

「おいしいよ」

そう言ってもらえると、がんばって作った甲斐がある。

「まだまだあるから、たくさん食べてね」

次は、何を取ってあげよう。

「なのは。取り分けてくれるのはありがたいけど……なのはが食べてないじゃないか」

「いいの。好きでやってるんだから」

別に、すぐに無くなる量でも無いし。自分で食べるのもいいけど……作ったものを『おいしい』って言うてくれるのが、すごく嬉しい

いんだ。

「秀人さん、いつもお仕事大変なんだから一杯食べなきゃ」

「そうか？ 悪いな……」

ぱくぱくと料理を口にすする。

あ、お茶が無くなってる。おかわりを注いで……っと。

「さんきゅー」

「どういたしまして」

していることはいつもと同じだけど、大人数で食べるのも、たまになら悪くないね。

いつもは作らないような料理も作れるし、他の人の意見もこれからの参考にできる。

「ねえ、ユーノ」

ずぞぞつ、と素麺を嚙り、姉さんがユーノくんに聞く。

「ん？ 何だい？」

「……あの二人、いつも『ああ』なの？」

かつん、と、兄さんが茶碗を置く音がやけに大きく聞こえた。

「……………詳しく教えてもらおうか」

ずいつ、とユーノくんに詰め寄る。

「恭也、近い、近いって……」

「で、どうなんだ？」

姉さんは止めず、むしろ興味津々といった感じで様子を見ている。

「まあ、いつも大体あんな感じだよ」

さらつと告げられた言葉に、兄さんは食卓に額をぶつけ、姉さんは口を三日月にして、

母さんは妙に嬉しそうにニコニコと笑顔を浮かべた。

「何の話？」

目の前で、気になるじゃないか。

「あなたたち、仲がいいのね……っっていうお話よ」

「ふうん……?」

でも、何を今更?

そろそろ、私も食べようっと。

適当に取って、一口。

うーん……やっぱり、母さんの作った方がまだ美味しい。

私も作ってるけど、年季の違いだろうか……?

「ねえ母さん。この南蛮漬け、タレに何を使ったの?」

「うふふ、秘密」

「ええ〜?」

教えてくれたっていいじゃん。

「ねえ、秀人くん」

「何だ?」

箸を止め、顔を上げる。

「前になのが作った方と、今日の品、どっちがお口に合う?」

「え? ああ、そうだな……」

ぱくり、と一口。もしかもしかと噛み砕き、飲み込んだ。

「桃子には悪いけど、なのはが作ったやつの方が美味しい」

え……?

「ほんと? 正直、母さんの方が一枚上手だと思っけど……」

「そんなことで嘘は言わないって。俺、なのはの料理が好きだから。

自信持っていいぞ」

「う、うん……」

どきつとした。秀人さん、真顔でさらっとすごいこと言うなあ……

「ほらね」

母さんが、分かっていたように笑う。

まあ、秀人さんがそう言ってくれるなら。

食べ終わった後、食器を洗って、後は雑談の時間だ。

私の学校生活や私生活の報告がメインで、アリサとすずかと遊んだこととか、フェイトにビデオレターを送ったこととか、クロノか

らは時々メールで報告が来るとか、他愛も無い話をしながら、時間が過ぎていく。

お茶を注ぎ足そうと戸棚を開けた母さんが、困ったように頬に手を当てた。

「あら、お茶が無くなっちゃった」

そりゃ、いつもの倍の人数で飲んでいれば無くなるのも早いかな。

「私、買ってくるよ」

「そう？ 悪いわね……」

千円札を受け取って、外に出た。

「なのは」

あれ、秀人さん。

「どうしたの？」

「一人じゃ危ないだろ。俺も行くよ」

そうかな？ この辺、治安は結構良いんだけど。それに、まだお昼だし。

でもまあ、厚意は素直に受け取ろう。

「うん、ありがとう」

手を繋いで……少し遅いペースで歩く。

週に一度、家族と楽しく食事ができる。

休日には、友達と一緒に遊びに行く。

学校は面倒くさいけど、そこそこ面白い。

夢のように楽しい、充実した毎日。

こんな日が、いつまでも続くのだと思っていた。

だけど、私は愚かにも、すっかり忘れていた。

一度関わってしまった非日常とは、そう簡単には縁を切れないと

いうことを。

魔法という力はいつだって……争いの呼び水になるんだ、っていうことを。

『Caution!』

レイジングハートがおよそ一ヶ月ぶりに鳴らす鋭い警告が……穏やかな空気を切り裂いた。

第三十七話（後書き）

新しい仕事が始まったので、これから更新が滞るかもしれません。ですが、少なくとも週に一度は更新するようにはしますので長い目で見てください。

第三十八話（前書き）

一週間を少しオーバーしました、、すみません、、

50万PVを突破しました！

皆さんの応援のおかげです！

ありがとうございます！！

第三十八話

「え……」

突然の警告に私は、そんな間の抜けた声を出すことしか、できなかった。

ああ、認めよう。

鍛錬を怠れば、その分だけ力は削げ落ちていく……それは、私にも適用されてしかるべきだった。

平和に慣れきって……神経が、完全に鈍っていた。

ほんの一ヶ月前までなら反応できたはずのレイジングハートの警告に、呆けてしまったことが、何よりの証だ。

だから、気付かなかった。

振り向いた背後から、すぐ目の前に……鋭い凶刃が迫っていたことを。

得物は日本刀。

それを手にするのは、黒い鎧を纏った騎士。

ちくはぐな組み合わせの襲撃者は、迷い無く躊躇い無く……私の顔面へ、刃を突き出した。

「……………何やってんだ、てめえ」

けれど、その凶刃が私に届くことは無かった。

ビキッ……

ぎらぎらと輝く日本刀は、私の目の前数センチで、その進攻を止められていた。

「おい……………」

ビキッ、パキッ……………！

めきめきと、単純な握力だけで鋼を握り潰していく。

「秀人、さん……」

バキンッ！！

とうとう砕け散った金属片が、血と一緒にばらばらと落ちた。

「何やってんのかって……！！」

ぎちぎちと、拳が硬く握りこまれていく。

「……ア……アアア」

襲撃者は言葉にならない呻きを上げ、構わず日本刀を振り上げる。それよりも速く……

「聞いてンだよオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！」

グギヤアッ！！

その顔面に、鉄拳がめり込んだ！

「ゴ、ゴフッ……ギヤアッ……！！」

コンクリートの塀を何枚もブチ抜き、何件もの民家の庭をぶち抜き……ようやく止まった。

「怪我は無いな？」

手に食い込んだ金属片を抜き取りながら、私の心配をする秀人さん。

「う、うん」

ようやく、言葉が出せた。

「よかった。……あの野郎、死ぬ寸前までサンドバツグにしてやる」

安堵の笑顔から一転。憤怒の形相で殴り飛ばされた襲撃者を睨む。

でも……生きてるかな、アレ。顔面がべっこり凹んでるけど。

「……ア、ア」

顔を陥没させ、足が変な方向にひん曲がった状態で立ち上がった

た。

気持ち悪ッ……！

「……まともな状態じゃ無い。レイジングハート、スキャンだ」
すつと怒りを霧散させ、敵の身体をスキャンする。

『All light.』

そして、結果が提示された。

『あの鎧は、魔法により実体化したものです』

「つまりはバリアジャケットか。他は？」

『思考操作の形跡が見受けられます。生命反応が微弱ながら在るので、洗脳され、操られているのでしよう』

洗脳って……いきなり現実感の無い言葉が出てきた。

いやまあ、私もやるうと思えば出来なくも無いけど………それを実行するには、良心が咎める。

つまり、こいつを洗脳してけしかけた奴は、何本か頭のネジが飛んでるんだろう。

「……傀儡兵みたいに、四肢をもぎ取って動きを封じるのは無理か」
「だよな」

中身が人間……それも、何かの被害者だというのなら、力づくで叩き潰すわけにはいかない。バインドして、動きを止めて……

「やっぱりな。気づかない内に、結界の中に誘い込まれてた」

「え？」

結界……？

「さつきから、ユーノと連絡が取れない。真昼間なのに人もいないし、間違いないだろ」

『迂闊でした。まさか、私のセンサーに悟られずに結界を展開するなぞ……』

ぱんっ！！

「うおっ！？」

乾いた音が響いたのと同じ時、秀人さんが上体を思いっきり反らした。

ちゅいんっ！ という変な音と共に、塀に何かが当たり、砕けた。

「野郎ッ！」

『Impact！』

バゴオンッー！！

衝撃波でブロック塀を破壊する。

その影から転げ出てきたのは……オートマチック拳銃を構えた、さっきのと同じ鎧を身に着けた騎士だった。

「拳銃……？」

さっきの日本刀といい、なんでこんな変な武器ばかり……

「ア、ア……」「ウウ……」「ウアア……」

続々と増えていく、黒い騎士。

釘バット、鉄パイプ、匕首、拳銃、日本刀……まるでヤクザだ。

じりじりと、緩慢な動きで間合いを詰めてくる。

落ち着け。警戒を怠るな。これは、一ヶ月ぶりの実戦だ！

「レイジングハート、」

レイジングハートを掲げ、起動させる。

『Standby ready』

一ヶ月のブランクを感じさせない、力強い声が返ってくる。

よし……！

「セットアップー！！」

『Set Up！』

巻き上がる、桜色と空色。

バリアジャケットを装着し、デバイス形態のレイジングハートを

握る。

「それじゃ、軽くやつちゃおう！」

油断さえしなければ、雑魚に遅れは取らない！

「アクセルシューター！！」

誘導弾を形成。数は12！！

「バレット」

秀人さんも散弾を準備完了。

「オオオ！！」「アアアアアア！！」

凶器を振りかざし、迫る敵兵。

ふん……取り柄は、魔力気配の遮断だけ。攻撃力なんて、十回喰らったって私の防御は

貫けない貧弱なレベル。

「シューーーーーー！」

「ファイア！！」

キュゴガガガガガガッ！！

「ギッ……！！」「ギャアッ！！」

面白いように命中する。でも、やっぱり……

「うわ……」

ぶらぶらと、多分折れたらしい腕や脚を引きずりながら、ゾンビのように近づいてくる。

無駄に頑丈……というか、痛みを感じていないんだろっ。

「ストラグルバインド」

バチイイッ！！

秀人さんが、魔法効果を打ち消すストラグルバインドを仕掛ける。あの鎧はバリアジャケットの一種だし、思考操作が魔法によるものであれば、救出も可能かもしれない。

でも……

「……駄目みたいだな」

「……………うん」

バインドの効果で足止めは出来るけど……………それだけだ。

「解除。魔力の無駄だ」

『Ail Light』

バインドを解除する。

うーん、どうということ？ 魔法効果なら、打ち消せるはずなのに

……………

『単純に、向こうの魔法のほうが強力なのです』

ああ、効いていないわけじゃないんだ。

『もし、あの魔法を打ち破ろうとするのなら……………瞬間最大放出量を増やすしかありません』

もつと魔力を注げば、効くかもしれない。

「却下だ。魔力切れして負けるのが目に見える」

「だよね」

そうと決まれば、話は簡単だ！

「耐久力の限界までポッコボコにして、無力化する！」

『妥当な判断です』

じゃきん、とレイジングハートを構えなおし……………攻撃魔法を発動！

『Impact wall！』

インパクトウォール。

秀人さんの収束系最大技、スターダストウォール。その発動に必要な魔力収束スターライトの代わりに、インパクトを組み込むことで、速攻性と汎用性を持たせた簡易版。

さすがに攻撃範囲は小さくなるけど……………威力と扱いやすさは広域版インパクトを数段上回る。

「インパクトオ……………！」

こういう、雑魚の殲滅にはもってこい、ってね！

「ウォ……………ール……………！」

……グオオオオオオオオオオオオオオオオ！！

そそり立つ衝撃波の壁が、兵士の軍勢に迫る！

「オオオ……！」

ある者は逃げ、ある者は手にした得物でささやかな抵抗をしているけど……決まりだ！

「よし……ッ!?」

ずりゅっ……

胸元に違和感を感じるのと同時……ぷしゅん、と、衝撃波が掻き消えた。

「……あ……？」

わけが分からない。

術式に穴は無いはず。

発動工程にミスは無かった。

十分な魔力も注いだ。

「なのは……!?」

秀人さんが、驚愕に目を見開いて、私を……私の胸元を見ている。

「あ、あ……？」

見下ろした先、私の胸元から……漆黒の籠手が、生えていた。

「う」

痛みは無い。でも、そこには確かに、手があって……

「う」

手の平に、ピンポン玉サイズの桜色の光球を握っている。

「この、野郎……！」

秀人さんが、その籠手を捕まえようとして……

ずるっつ……！！

「うあああああああああああああああああああああつ！！」

極大の違和感と共に、全身の力が、ゴツソリと喪失した。

バリアジャケットが……まるで、腐り落ちるように崩れていく。

「あ、あああ……！！」

あの光球……あれは多分、魔法の源、リンカーコア。

魔力を生成する、魔導師にとっての、もう一つの心臓。

それを、抜き取られた。

「……くも、」

私の大事なものを、

「よくも……！！」

秀人さんと、ユーノくんと、レイジングハート……私たちを繋いでくれた……魔法の力を……！！

「よくも……やってくれたなああああああ……！！」

胸元の穴に、レイジングハートを突っ込む！

「なのは、何を……！？」

この穴の先に、必ずいる筈だ！

（ぶっ飛ばしてやる……！！）

でも……ダメージがここまでだなんて、予想外だった。
バラバラになりそうな身体を抱きしめ、痛みを堪える。
「なのは……なのはっ！くそっ……！」

多分、秀人さんが一人で敵兵を退けているんだろう。
あれだけの数……しかも、異様にタフネスが高い集団を。

なんとかして加勢しようとしても……すぐに力が抜け落ちてしま
う。

「く、うろう……！」

……馬鹿だ、私。

平和ボケして、勘を鈍らせて……挙げ句、自爆して秀人さんのお荷
物になって……

「秀人さん……ごめん」

ぷつん、と。

意識のブレーカーが……落ちた。

「なのは！」

くそっ……なんて馬鹿な真似を！

「レイジングハート、どうだ！？」

『……危険です。リンカーコアを無理やり抽出された上……砲撃に
より体内の臓器にまでダメージが及んでいます。非殺傷設定とはい
え、これでは……！』

自分の身体の中に砲撃を撃つなんて、何考えてるんだ！

「治癒魔法を……邪魔だおらアツ……！」

「ベゴンッ……！」

「ぐっ、うつつ……!!」

なのはを胸に抱えたまま、ごろごろと地面をバウンドする。身体を起こし、視界を前方に向ける。

「ア、アアアア……!!」

その攻撃は、俺たちどころか、その辺にいた数体の雑魚騎士を巻き添えにしていた。

「ちつくしょう！ お構い無しかよ!!」

再びなのはに治癒魔法を幾重にも施し、矢面に立つ。

粉塵が晴れ、ようやく敵の姿を見ることが出来た。

「……………!!」

敵は、ゲートボールのスティックのようなハンマーを持った、赤黒い鎧を着た騎士だった。雑魚とは違う、禍々しさの中に不思議な優美さを備えた鎧。

「どっというつもりだ！」

「……………!!」

返事は無い。ただ無言で、ハンマーを上段に構える。

その肩は、なにかに興奮しているかのように上下して……ん、もしかして……？

「……………怒ってる、のか？」

もしかして、なのはの砲撃で倒された（多分）仲間の仇を取りに？

「……………!!」

凶星。そして、返礼は……!!

ポポポポッ……!!

数十個の魔力弾……いや、鉄球！

「……………レイジングハート、治療は止めるな」

『了解。ですが、おそらくあの攻撃は防御を貫通してきます』

「だよなあ……………」

初撃も多分、あれの掃射だったんだし。

一つしかタスクを割いていない防御なんて、無いも同然。

でも、一応考えはある。

「じゃーん」

背中から取り出したのは……………あの雑魚騎士の一体が持っていた、釘バット。

「これで打ち返す！」

『馬鹿ですか、あなたは……………』

レイジングハートが脱力したように眩く。

「というわけで、強化よろしく！」

『……………はあ。了解』

幸いにも、雑魚騎士はチビ騎士の攻撃であらかた吹っ飛んでどこか行っちゃったし、一対一だ。

「さあ来い、チビ！」

「……………！！」

実は気にしているらしく、殺気立ち……………

ボバババババツ！！

鉄球を一齐に発射してきた！

「オラオラオラオラオラアツ！！」

ガキンガキンガキンゴキンカキン！！

くっくっくっくっ、硬ってええええええええ！！

手がびりびり痺れてきやがる！

それに、強化したバットが一発打ち返すことに凹み、歪んでいく！

「だああありゃああああああああああ！！」

全部打ち返すくらいまでは、持ってくれよ……！

ゴキンゴキンゴキン……カキインツ！！

うち一発を、正確にチビ騎士の頭部へピッチャー返し！

パガンツ！

「！！！」

頭に血が上って、判断力が低下していたのか……額に直撃し、仰け反った。

同時、全ての鉄球が制御を失い、あらぬ方向へ飛散する。

ピキッ……！！

チビ騎士の兜に亀裂が入った。

くそ……こんな状況じゃなければ、攻め込むには絶好の機会なのに……

「レイジングハート、そっちはどうだ？」

『脈拍は安定してきましたが、予断を許さない状況です』

「……タスク三つ、俺に割けるか？」

こうなったら、アレしかない。

「カウンター三連撃……決まれば、倒せる」

あのチビ騎士の鎧は、そんなに頑丈じゃない。

うまく『返』せれば、倒せるはずだ。

『……可能ですが、制御プログラムがまだ未完成です』

「どうせ、このままじゃ負ける」

負けるだけならまだしも……最悪、なのはが死ぬ。

「俺の身体なんてどうなってもいい。今、あいつらを退けるのが先だ」

それでこの結界を壊せればユーノを呼べるし、な。

『……可能な限りバックアップします。無茶も程ほどに』

「あいよ」

タスクは三つ。

ディバインバスターと、ブレイズキャノンと……魔力刃。いつでも発動できるように、スタンバイしておく。

「……………」
ガキッ……

チビ騎士が、ハンマーを構える。

「……………来い！」

半身に構え……右手を腰溜めに、左手を緩く突き出す。

「……………！」

ダンッ！！

地面が碎けるほどのスタートダッシュで、一気にハンマーを振り下ろしながら突っ込んできた！

でも……フェイトに比べたら、全然遅い！！

「はあっ！！！」

使えるだけの全魔力を、掌打に乗せて……！！

バチイイイイインッ！！

衝突！！

「……………！！！」

「こ、のおおおおおおっ！！！」

スピードはフェイト以下でも……パワーは俺以上か！

拮抗した状態から、チビ騎士のハンマーがじりじりと迫ってきている。

「うオオあああああああああ……拮抗を押し返す！」

碎けそうになる膝を叱咤し……拮抗を押し返す！

「……………！！……………！！！」

「こ、のやるおおおおおおおおお！」「
そろそろだ。もうそろそろ、チビ騎士は突進力を失う。そうすれ
ば……」

耐えて、堪えて……！

ふっ……と、突進が止まった！

「うおりゃああああっ……！」

ドゴオオオオンッ……！

左手から、ブレイズキャノン！

ガギユウウウンッ……！

右手から、ディバインバスター！

「喰らいやがれえええええええええエエツ……！」

発射した二つの攻撃魔法と並走し……魔力刃を振り下ろす……！

チビ騎士は、完全に攻撃を終えた無防備を晒している！

(貰った……！)

確信は、手応えとして返ってくる………筈だった。

ガギユンッ、ガギユンッ……！

チビ騎士のハンマー……そのヘッド部分がスライドし、弾丸のよ
うな薬莢を排出したのと同様。

ガオオオオンッ……！

「……あ？」

ディバインバスターとブレイズキャノンを、あっさりと撃墜し……

…先端を鋭利なピツケル状に変形したハンマーが、

「ぎゅっ……！！」

「……………が、あ、あ……………！！」

俺の胴体に、深々と食い込んだ……………

食い込んだだけでは止まらず、めきめきと骨が砕け、何かが潰れる音が、体内から聞こえた。

どろっ

一瞬だった。

ほんの一瞬で、俺の最大技は破られて……………俺は、負けた。

『秀人！？』

レイジングハートが俺を呼ぶ声が、妙に遠く聞こえる。

「げふっ……………！！」

喉の奥からこみ上げてきた、鉄臭い、液体だかよくわからん物を吐き出す。

ザッ……………

立ち上がれない俺達の周囲を、チビ騎士と……………その辺に散らばっていた雑魚騎士が取り囲む。

「なのはに……………ざ、わるな……………！！」

潰れた肺が、言葉を濁らせる。

ずるずると這いずり、なのはの身体の上に、覆いかぶさる。

少しでも、時間を稼ぐんだ……………！！

「……………！！」

ぎゅっ

「ぐっ……………！！」

背中に、刃物のようなものが食い込んだ。

「ア、アア……………！！」

俺が抵抗しないと見て……

ぐぐっ、ごきっ、ばきっ、がしっ、ぐちゃっ……！

「ぐっ……っ、うっ……ああ！」

全身を鈍器が殴打し、刃物が蹂躪し、つま先が傷の治りかけた腹を蹴り上げる。

傷の修復は行われているけど……流石に、数が多すぎる。

頭部を殴打されるたびに意識が飛びかけて……背中を切りつける刃物の鋭い痛みが、再び意識を繋ぎ止める。

「あ、あ……！！！」

徐々に、意識が薄れてきた。あまり痛みも感じない。

がぎゅんっ、

また、あの音だ。

チン……と、見せ付けるように目の前に薬莢が落ちる。

俺のしぶとさに業を煮やしたのか、チビ騎士が止めを刺すつもりらしい。

やべ……今回ばかりは、死ぬかも……

「秀人！ 秀人ッ！！ 気をしっかり持ちなさい！」

レイジングハートが、これまでに無く切羽詰った声を張り上げる。

「秀、」

バキンッ！！

その声が、不自然に途切れる。

「……人、……逃、」

レイジングハートは、チビ騎士のハンマーに叩き壊されていた。

ころん……と、ヒビだらけになったコアが、目の前に転がってくる。
その赤い宝石に宿る光が消え……………

途切れかけていた意識が……燃え上がった。

「て、めエ……………！！！」

血反吐を吐き散らす内臓を無視し、

「許、さねエ……………！！！」

断ち切られた靱帯や筋繊維を強引に再生し……………

「許さねエぞおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおッ……………！！！」

獣のような咆哮と共に、立ち上がる！！

「おおオまエエエ……………！！！」

自分が出しているとは思えない、おどろおどろしい怨嗟の音が、
喉の奥から絞り出される。

ゴボゴボゴボッ……………！！

「うつつうウウウオオオオオ……………」

撒き散らされた俺の血液が……………泡立ち、煮え滾り……………！！

ゴオウッ……………！！

烈火の如く……………発火する！！

第三十八話（後書き）

マジギレ秀人、第二弾。

うーん……原作からどんどん乖離していくな……

第三十九話（前書き）

珍しくいつもどおりのペースで投稿できました。
それでは、前回の続きからです。

第三十九話

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ！！

俺の血を熱源として、燃え盛る蒼炎。

俺のほぼ全身に刻まれた傷は、その炎に触れた箇所から、片っ端から修復されていく。

そして、レイジングハートが機能を停止し、治療が中断されたままになっているのはの身体を、蒼炎が包み込む。

ボロボロになっていたバリアジャケットが燃え上がり、その魔力を治癒魔法へと変換される。

ゴウツ！！

一步、前へ。

蒼炎の動きもそれに追従し、移動する。

それだけで、俺を好き勝手に痛めつけていた雑魚騎士が、一步後ずさった。

「……………！！」

チビ騎士の号令を受けた雑魚騎士の集団が、俺に殺到する。

「……………はアアツ！！」

ゴバアアアツ！！

近寄る雑魚騎士を、吹け上がる蒼炎の熱波がなぎ払う！

「……………ア！」

バックステップで回避しようとする雑魚騎士の鎧を、蒼炎が僅かに撫でた。

そして、

ポウンッ！！

爆発的に、発火する！

「ア、アアアアアア！！」

「ギャアアアアッ！！」

蒼炎に炙られた雑魚騎士達が、のたうち、逃げ惑い……

「ア……あ、あ……」

一瞬のうちに鎧を失い、倒れ付す。

だが、もうそんなものは考慮に入らない。

単に……チビ騎士を破壊するのに邪魔だったから、どかしたただけだ。

「……………！！」

先端をピツケルのように細くし、一点での破壊力を増したハンマーを振り回し……

ガゴオオオンッ！！

その先端は、再び俺の身体に突き刺さった。

「……………！！？」

どろっ……と、ハンマーの先端が……高熱で溶ける。

ブゴオオオッ！！

傷口からあふれ出た血液が炎上し、一瞬のうちに傷を塞ぎ……チビ騎士を吹き飛ばす！。

「……………！！」

ギユガガガッ！！

鉄球の一斉掃射。だがその大部分は、身体に届く前に蒼炎によって蒸発し……届いた数発もまた、ダメージにはなりえない。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！！！」

思考が怒り一色に染まり……この蒼炎で、いかに敵を焼き滅ぼすかだけが、めまぐるしく頭を駆け巡る。

蒼炎の残り火がちろちろと燃え……自然に鎮火する。

同時、無理に身体を動かしていた反動が一気に襲い掛かり、その場に座り込んでしまった。

「ゼエツ、……!!」

目の前には、広大な更地が広がっていた。

サーチするだけの魔力は残っていないから分からないけど……

……とにかく、あの騎士の連中は、倒せた。

「……………今は、一体……?」

キレている最中は、無我夢中で気にしなかったけど……………何だったんだ。あの蒼炎は。あの不死鳥は。

俺は、あんな形状に変われだなんて命じてはいないし……………そもそも、俺は炎を操る魔法なんて、一度も習ったことは無い。

それに……

「クリメイション・フェニックス……?」

あの、圧倒的な破壊力を持った不死鳥の名前。

命名したわけじゃない。唐突に、頭の中に浮かんできた名称だった。

つて、それよりも!!

「も、戻らなきゃ……………!!」

一応、治癒魔法は残してきたけど……………ちゃんと効いているかどうか不安だ!!

レイジングハートだつて、ちゃんと状態を確認してやらないと!

「ああもう、さっさと治れっつーの……………!!」

そのぐらいしか取り柄の無い身体なんだから……………!

いまいち動きが渋い身体を動かし、なのはを置いてきた場所へ戻る。

なのはは……………

「……………すっ、すっ」

良かった……寝てるだけだ。
問題は、

「レイジングハート……」

「……………」
レイジングハートは、答えない。

魔力を注いで修復しようにも、結界を破壊しようにも、もう殆どすっからかんで全く足りない。

「……しゃーない」

右手の魔力結晶に、意識を集中させる。

「スターライト……………も、無理か」

魔力を収束しようにも、レイジングハートがいなければまともに出来ない。

この辺は、魔導師共通の弱みか。

もういつそのこと、魔法そのものを継続的に身に纏えばいいんだけどなあ……………

出力の上げ下げだけすればよくて、タイムラグも無くなるし。

……………つて、

「お、おおう……………なんじゃこりゃ」

あたりに目を配ると、死屍累々と……………多分、雑魚騎士として使われていた人間が、その辺に転がっていた。

ポロボロの洋服……………これは、アロハシャツ？　それで、こっちは黒いスーツ……………妙につま先が尖ったエナメルの靴。

「……………ヤクザ？」

そっぴいや、雑魚騎士達の武器も、トカレフだの匕首だの、それっぽい物が多かった。

その辺の事務所の奴らを拉致つたのだろうか。

「う、うう……………！！」

一人、作務衣を着ていた男がうめき声を上げる。

「おいコラ、起きろヤクザ」

襟を掴み、頬を二、三回張る。

「あ……？」

ようやく焦点を結んだ目が、見開かれる。

「俺、は……生きている、のか？」

「まーな。んで……どこまで覚えてる？」

「あ、ああ……」

ヤクザが話すところによると……

「子供が変な姿に変身して、仲間達を殺した？」

「信じられないだろうが、本当だ……この場にいる人数より、ずっと大勢が……」

「……そうか」

子供……か。なるほど。

「顔は覚えているか？」

大体の特徴さえ覚えていれば、アイツに頼んで、似顔絵を描いてもらえる。

「ああ、確か……」

いくつかの特徴を聞き終えたところで、精神力を使い切ったのか、再び意識を失った。

さてと。

「どうやって、結界から出るかなあ……」

魔力は空。

周辺から集めようにも、スターライトは使えない。

外への連絡手段もない。

早いところ外に出て、なのはをちゃんと治療してやりたいんだが……

パリンッ……

「……え？」

今、結界のどこかに穴が開かなかったか……？

もしかして……

「ユーノか!？」

慌てて、念話と同時に肉声も出してしまった。

「……ユーノ?」

返事が無いってことは……ユーノじゃないのか?

「……………増援だったら最悪だぞ」

今のところ敵意は感じないけど……着々と、距離を詰めてきている。

あと、数十メートル。

ザッ……

姿が見えてきた。

遮蔽物が無くなっているおかげで、身を隠すつもりは無いらしい。青いスラックスに白いシャツを着て……………変な仮面で顔を隠した、長身の男だ。

じろじろとぶしつけに俺の身体を上から下まで眺め……………

「……………蒐集は無理だな。完全に肉体と同化している」

「は? 何のことだ」

シユウシユウ……………?

「まあ、そっちの少女の分が入っただけ、よしとしよう」

「……………?」

何のことだかさっぱりわからん。

「なあ、アンタ」

ぶつくさ言ってるだけで襲い掛かっては来ないし、とりあえず敵ではないだろう。

「……………」

くいつと首を曲げ、俺と眼が合った。

……………いや、仮面だからわかんないけどさ。

「悪いんだけど、結界の外まで連れ出してくんねーかな?」

結界に入れたなら、出ることもできるはず……

「……」

「あ、おい！」

用事は済んだとばかりに踵を返してしまった。

敵ではないにせよ、友好的でも無いか……まあいいや。

「勝手にやらせてもらうぞ」

バシユツ……

『ライン』を伸ばし、仮面男に接続する。

「……！？」

おー……つて、なんじゃこりゃ！？

結界・捕縛術だけで34！？

遠距離バインドに、これは……拘束結界？

それに、幻術魔法、変身魔法……

派手さは無いけど……速効性・汎用性・確実性は、俺が使うものに比べたら段違い……というか、別次元だ。

まるで、クロノの魔法が、更に磨きぬかれたような……お、あつたあつた。局所的結界破壊。

結界は残しておいて、後でユーノに頼んで修復してもらわないと

……

ついでに、ちょこつと魔力を拝借して……

ブオツ！！

「うおっ！？」

いきなり飛んできた回し蹴りを回避する。

「貴様……！！」

「怒るくらいなら、最初から手伝ってくれよ……」

「……ふん！」

ずかずかと大股で去っていった。

まずは……拝借した魔力で、結界の一部を破壊。

とりあえずはこれで、通信は外に通じる。
残った魔力をレイジングハートに注いで、修復を開始させた。

「……………」
さすがに、ここまでぶっ壊されていたら、すぐには直らないか。
結界の外は……………うわ……………もう夜だ。

あ……………携帯電話、道場に置いてきちゃった。

『ユーノ、俺だ』

念話でユーノを呼ぶ。

『秀人！？ 今、どこにいるんだい！？ この結界、防御が硬くて
全然破れなくて……………』

「んーっと……………」

位置情報を、探る。丁度、結界を挟んで反対側か。

『今、そっちに行くから……………』

「いや、その必要は無い」

……………妙に聞き覚えのある声が、割り込んできた。

「管理局囑託魔導師・吾妻秀人。並びに、高町なのは」

蔽つい法衣のようなバリアジャケット。手には、複雑な形状の杖

……………S2U。

「アースラへの出頭を、要請する」

黒い髪・黒い瞳の……………

「……………クロノ？」

およそ一ヶ月ぶりの、再会だった。

第三十九話（後書き）

ちょっと無理があるのは自分でもわかっていますので、
シッコミは
無用でお願いします、（汗）

第四十話（前書き）

36話のラスト（美香との出会い）を大幅更新しています。
先にそちらをどうぞ。

第四十話

「ふわああああ……」

自分の口から、そんな間抜けな大あくびが出た。

いやあ………だって、とにかくヒマでさあ………

………？

騎士団……？ ああ、アレ？ あんなもん、使い捨ての消耗品だからどうでもいい。

養分にしたクズの中からそこそこ使えそうな奴らを選んで、ヴォルケンリッター召喚の術式を弄くった術式で再利用してみたんだけど………どれもこれも、大した戦力にはならない。せいぜい、足止めと壁に使えるくらいだ。

そんな使えない奴らに、『闇の書』を持たせても無駄だし………作っちゃった分だけを消費し尽くしたら、また別の戦力増強の方法を考えよう。

………ずいぶん、帰りが遅いな。

滅茶苦茶でかい魔力反応が二つ見つかったから、手が空いていた『鉄槌』を向かわせたのが今日の夕方。もう日はすっかり落ちて、夜の時間になっている。

お、そうこうしているうちに午後九時。時間だ。

『鉄槌』の回収は後でいいや。

「ええっと、チョコレートと、マシュマロと……」

私が食べるために買ったおやつを、リュックサックに詰め込んでいく。

「まあ、病院食よか数倍はマシだろ、多分」

あれ、あんまし味が無いからなあ………二日で飽きる。

「別に、内臓の病気じゃないんだから………好きなもの食べさせてや

つてもいいじゃない……………って、違う違う!!」
賞味期限が近くて、食べる前に腐らせないためだから勘違いするな
よ!?!?

窓を開けて庭に出る。

「スレイプニル」

ばさっ…………

翼を展開し、飛ぶ。

「うーん…………いい空気」

夏の気候でも、フライパンみたいなアスファルトから離れば、
それなりに涼しいのだということを知った。

…………折角だし、あいつにも教えてやるうっつと。

この二ヶ月で、大分基礎力も着いてきたし、いっつも同じメニュー
のルーチンワークじゃ、やる気も削げる。

いつものルートを辿り、総合病院までやってくる。もう既に面会
時間は終了し、消灯されて真っ暗だ。

コンコン。

カーテンが引かれた一室の窓を、軽くノックする。

すぐに窓が開き、おかつぱ頭の少女……………美香が、嬉しそうに
顔を覗かせた。

「^{あね}姐さん、いらっしやい!」

この呼び名は、美香が勝手に言い始めたものだ。

『お姉ちゃん』だと、美香の実姉と被るから……………らしい。

どことなく、響き的に強そうだから、そこそこ気に入っていたり
する。

「よっ。……………ほら、土産」

リュックサックを、どさっとベッドに下ろす。

目で促すと、美香はいそいそとリュックサックを開けた。

「わー、お菓子だ！ …… 食べていいの？」

「ああ。好きにしる」

たかが菓子でそこまで喜べるなんて…………… 子供は単純でいいな。早速マシユマロの袋を開け、二、三個をいっぺんに頬張る。

「美味しいー！ …… でも、姐さんは食べないの？」

「甘い菓子は苦手なんだよ」

なんか、口の中がべたべたする気がするし。

「じゃあ、何で買ったの？」

…………… このガキ。

「間違えたただけだ。それで、賞味期限も近かったから……………」

「あと一ヶ月もあるのに？」

「…………… うるせえ、黙って食べー！！」

「むぐっ！？」

口の中に、板チョコを突っ込んでやった。

目を白黒させていた美香だったが、次第に嬉しそうに緩んでいく。

「それ食ったら、始めるぞ」

「もぐもぐ…………… はーい！」

びしっ、と威勢よく挙手する。

…………… 美香と初めて会ってから、大体二ヶ月。

私は、美香の師として、『授業』を行っていた。

「始める前に、復唱してみろ」

私が教えているのは、魔法と…………… このクソツタレな世界を生きていく、唯一の方法。

「はいっ！」

授業を始める前の、念押し。

「世界は、何があっても私たちを救ってはくれません。」

私たちを助けられるのは、自身の力のみ。

力を身に着けることだけが、自らを救うことが出来る、唯一の方法です」

「よろしい」

さて、何を教えてやるかな……ああ、そうだ。

「今日は……」

言いかけて……

「美香、この魔法を覚える前に、約束しろ」

「……？ はい」

「この魔法を使っているのは、夜だけ。もし使ったとしても、必ずその晩のうちに、部屋に戻ることに」

「……戻る？ 今日は、何の魔法を覚えてくれるの？」

わくわくと、嬉しそうにしている美香。

思わず顔が綻びそうになるけど……今は授業中だから、ぎゅっと引き締める。

遊び半分の気持ちで魔法を使うなんてこと、あつてはならないんだ。

「……約束できる？」

「はいっ！」

美香の身体は、その魔力に反して、小さくて弱い。

小規模の結界を展開しただけで、かなりの負担が強いられてしまっただけだ。

もし、発動に失敗してしまっただけ……考えたくも無い。

だから、この二ヶ月。美香には、徹底した基礎訓練を行ってきた。魔力運用と、初歩の初歩……それをいくつか。そろそろ、本格的に教えてやってもいい頃だろう。

「空の飛び方、教えてやるよ」

.....
.....
.....
.....

「ひゃー！ー！ー！」

背中に小さな羽根……ミニサイズのスレイプニルを生やし、落下しないよう必死に羽ばたく美香。

「ほらほらー、落ちたら死ぬぞー」

ふよふよと浮遊しながら、適当にアドバイス。

術式はしっかりコントロールできているし、問題は無いだろう。

夜食のカップ麺にお湯を注ぎ、蓋をする。

三分持つかない……

手元のストップウォッチを押し、計測開始。

一分……二分……

「ふにゅー……！！！」

ヒヨコのような羽根が、明滅している。

……三分。

さて、食べるか。

「あ、姐さー！ーん！！も、もう……もう無理……！！！」

ぶしゅん、と羽根が消えた。

「きゃあああああああー！！！」

数百メートル下に広がる地面へと落下していく。

「……三分二十秒」

スレイプニルで加速して、キャッチ。

「まだまだ……だな」

おつかしいなあ……もう少し、伸びてもいいはずなんだけど……
ぐいぐい、と、服を引っ張られた。

「何だ？」

「姐さん、今日はもういいよ。帰ろうよ……」

完全に、及び腰になっている。

……なるほど。この甘さが、成長を妨げているわけか。
そうと決まれば、話は簡単。

「姐さん……何で、地面に戻らないのでしょうか……？」

なぜか敬語。

「練習を続けるためよ、美香」

ばっさばっさとスレイプニルで上昇を続ける。

「姐さん……何で、さっきよりも高いところに向かっているのです
ようか……？」

ひくひくと、頬が引きつっている。

「お前をより高い場所に連れて行くためよ、美香」

眼下に広がる町並みが遠のき、人や自動車が豆粒のように小さく
なる。

「姐さん……何で、さりげなく私の身体を、手放そうとしているの
でしょうか……！？」

私は、にっこりと、聖母の気分で笑みを浮かべ……手を離れた。

「お前をここから落とすためよ、美香」

ぽいっとな。

そーれ、行つてこーい。

「うえええええええええええん！！ 姐さあああああああ……」

「……………」

美香が、豆粒の仲間入りをした。
フェードアウトしていく泣き声を無視して、ずるずるとカップ麺をすする。

「食べ終わったら迎えに行くからなー」

魔女への道は、険しいのだ。

「ぜえぜえ……………！ 姐さんの意地悪……………！」

数分後、病院の屋上。

息も絶え絶えになった美香が、私を見上げながら恨み言を言った。

「ちゃんと飛べたじゃないか」

最後のトライで、最初の倍の六分間、飛行を続けていた。

「そりゃ、飛ばなきゃ怪我する……………」

「そのくらいの覚悟でやらなきゃ、身にならないってよくわかった
だろ？」

実際、私だって……………闇の補助無しで飛べるようになるまで、あち
こちに打ち身や擦り傷……………酷いときには、骨折までしたんだ。
こうしてサポートしてやるだけ、ありがたいと思わなきゃ。

「むうう……………！」

「美香、……………美香？」

「……………」

あらら、すっかりへそを曲げちゃったか……………

「仕方ねえなあ……………後でアイスおごってやるから、機嫌直せ」

「あいすっ!?!」

「うおビックリしたー」

「買ってくれるの!?!」

「現金だなあ……………さすが子供。」

「ああ……………つつても、連れて行くのは無理だけどな」

車椅子で連れ出して……それが病院にバレたら、美香が怒られる。
「何がいい？ 二つまでだからね」
「チョコレート味と、バニラ味！」
「あいよ。んじゃ、部屋で待ってる」
「うんっ！」
美香を病室に戻らせ……

この辺にあるコンビニは……やっぱり、あそこだな。
「とうちゃーく……」
いつもの通り道に着地し、翼を消す。
てくてくと歩いて……いつものコンビニへ。

ピンポーン……

自動ドアの開閉音を鳴らしながら、見知った店に足を踏み入れる。
「……らっしやーせー」
今日も今日とて、あのやる気の無い金髪バイトがいる。

いつもの習慣で弁当売り場に行こうとして……直前で、クーラー
ケースに方向転換。

ハーゲンダッツ……は、やめておくか。子供に大事なものは、美味
い不味いではなくて、いかに腹いっぱい食うか、それが一番大事な
んだし。

一個百円くらいのカップアイスを四種類……チョコ、バニラ、抹
茶、バナナを積み上げ、レジに持っていく。

いつそのこと、全部抹茶味にしてやるうか……という、子供っば
い悪戯心も浮かんだけど止めておいた。まーたへソ曲げられちゃ、
面倒だし。

「……くかー」

……金髪バイトは、レジに突っ伏して寝息を立てていた。

……ただやる気無いんだよ……

「……チッ」

ガンツー!!

レジの前を、思いつき蹴飛ばした。

「んあ……!?!?」

のっそりと身体を起こし、目をこする。

「寝てんじゃねえよ……レジの金盗まれたらどーすんだ」

それでこのコンビニが潰れたら、私の飯はどうなる。

「あー、よかった……オーナーじゃなくて……ふあああああ……」

疲労の色濃い、大きな欠伸が出た。

たかがコンビニ……しかも、客足の少ない深夜。こんなバイトで、

ここまで疲れるようなことは多分無いはずだ。

だとしたら……

「あんた……いくつバイトしてるの?」

掛け持ちくらいしか、考えられない。

「あー……工事現場と、引越しと、深夜コンビニ」

前半分は、短時間・バイトにしては高収入……そして、体力を必要とする仕事。

「呆れた……そんなに金が必要なの?」

「ああ。いくらあっても足んねー」

……即答かよ。

ま、いいんだけどね。レジ叩いてくれれば。

四つで五百円以内に収まり、つり銭をポケットに仕舞う。

「……つーか、お前まだガキなんだから夜遊びすんなよ」

「大きなお世話だ」

「あのなあ……」

例えば、これだけ無礼な物言いをする子供に、律儀に忠告するなんて、見た目と違って割りといい奴?

「最近、行方不明事件が頻発してるらしいぜ?」

「知ってるよ」

……つーかその犯人、私だし。

「そんじゃねー」

「真っ直ぐ帰れよ」

「やなことだ」

ぷらぷらと袋を揺らしつつ、コンビニを出た。

「美香、ただいま……………美香？」

「すう……………すう」

時計は、午後十二時を指していた。待ち疲れて寝てしまっていて
も、おかしくはない。

「……………美香」

可愛い弟子の、無邪気な寝顔。

「ん……………ん」

髪を手櫛で梳くと、僅かに身じろぎし……………また寝息を立て始める。
毎日毎日、復唱させてはいるものの……………この子の根っこは、変わ
らない。

それは多分に、家族の存在が大きいのだろう。

「お兄ちゃんに、お姉ちゃん……………か」

もともと一人っ子で、今や天涯孤独の私には、眩しいほどに羨ま
しい。

「でも、結局は……………いなくなっちゃうんだよ」

パパとママは、いつまでも私と一緒に。

私がおばさんになっても、おばあちゃんになっても。

でも、そんなのはただの幻想で。

世の理不尽は、あつという間に幸せを掠め取っていく。
でも。だからこそ……………

「お前は、私が守ってあげるから……………」

私は。

私だけは。

絶対に、美香を置いていかない。

「んう……?」

「あ……起きちゃった?」

「んーん……ちようど、起きようと思ってたとこ」

「アイス、食べる?」

温度操作をしていたから、まだ溶けていない。

「……食べるー」

寝ぼけていて尚、食欲に忠実な様子に苦笑し……アイスを手渡した。

ペリペリと蓋を開け、緑色のアイスを、スプーンで一口。

その瞬間……

「に、苦あい!」

美香の目が、一気に開いた。

「ひゃーっはっはっは!!! 引っかかった引っかかったー!」

大・成・功!

「うー! バニラか、チョコって頼んだのにー!」

ぶんつ、と投げられたアイスの容器をキャッチする。そのラベルには、『抹茶』の文字が燦然と輝いていた。

「姐さんの意地悪ー!」

枕を振り上げ、ぼすぼすと私の身体を叩いて怒る。

「あはっ、ごめん、ごめんってば!」

ああもう、なんて弄り甲斐のある子なんだろう。

結局、美香にはバナナアイスを進呈する……という条件で、許してもらった。

「三つも食べて……腹壊しても知らねーからな」

美香は、ぴたっと手を止めて、まじまじと私を眺める。

「……………ねえ、姐さん」

バニラのカップアイスを食べながら、美香が不思議そうな顔を
して聞いてきた。

「何だ？」

何か、魔法のことかわからないことでもあるんだろうか。

「何で姐さん、そんな変な喋り方してるの？」

「……………はい？」

「へ……………変？ 何が？」

「女の人っぽい喋り方したり、男の人っぽい喋り方になったりして
るよ？」

え、うそ……………

「お、おかしくない、ヨ……………？」

ちゃんと、パパと一緒に練習した標準語なんだ。変なわけが……………

「えー、おかしいよー」

「けらけらと笑われた。」

「は、はは……………おかしいんだ……………そっかあ……………

……………

「凹むわあ……………」

「あ、あれ……………？ 姐さん？」

「がっがっ。」

一気に残りを食べつくして、涙を堪えるのだった。

「そういえばね、院長先生がいなくなっちゃったんだって」

「ぴたりと、抹茶アイスを口に運ぶ手が、止まる。」

「それで、新しい先生がよその病院から来る……………って」

「へえ……………」

「適当な相槌を打ちつつ、私は……………」

あのジジイを殺した夜のことを、思い出していた。

でっぷりと太った男だった。

頭頂部は薄く、顔全体がてらてらと脂ぎり、目はどんよりと濁っている。

男のいる部屋。

革張りのソファに、毛足の長い高価な絨毯。マホガニーのデスクに、壁際にずらっと並べられた古酒。

「……………ふああ……………」

一本で万単位もする葉巻をくわえ、紫煙を燻らせる。
成金、という言葉がここまで似合う姿も、そういない。

プルルルツ……………

「……………」
がちやつ、と、アンティーク調に仕立てられた電話を耳に当てる。

「私だ」

尊大な態度が許されるのも、男の社会的地位が高い証拠なのだろう。

電話の内容は、要約すれば次の一言だった。

わが社の新薬を、買ってもらいたい。

病院が、薬を買う。

傍から聞く分には、何もおかしくはない。

だが、その内情はこうだ。

ある会社が、新薬とは名ばかりの、効果の薄い薬品Aを安価に作る。

それを、名のある大病院が買い上げ、完治寸前の患者に薬品Aを

使用する。

もちろん、治療薬として最低限の効果はあるため害にはならず、当然のごとく完治し……カルテには、薬品Aを投与した、という事実が記述される。

それにより、薬品にAは、『薬品Aを投与した患者が完治・全快した』という事実が付随する。

新薬Aは、『 の治療薬』という肩書きを得、飛ぶように売れ、製薬会社は利益を得るのである。

「ああ。だが………わかっているだろうね？」

もちろん、得をするのは製薬会社だけではない。

新薬は、保険適用外………つまり、全額を患者側が負担する。当然、病院の売り上げにも繋がるが、それ以外………病院以外にも、潤う場所がある。

その新薬Aを試用するかどうかを決めるのは、最高責任者………院長なのだから。

製薬会社は、「ウチの新薬を宣伝してください」と、誠意を持って、お願いするのである。

誠意………つまりは、賄賂。

「2000? ……馬鹿を言っちゃいかん。500だ。それより下は無い」

………この男が、町で三本指に入る大病院の院長だとは、初見では誰にもわかるまい。

「………ふん、まあいいだろう」
500。つまり、500万円が、この男の懐に入ることが確定した瞬間だった。

がちゃん、と電話を切り、どっかりとソファに身を預ける。

「チツ……貧乏人が」

500万円。一般家庭の年収にも匹敵する額を、鼻で笑う。棚に収められたヴィンテージワインの栓を抜き、グラスに開ける。

「……柳瀬くん、君にはまだまだ、治療を続けてもらおうよ」

あの患者とその家族は、実に扱いやすい。

二度と動かない足を、『動く可能性がある』と二ンジンをぶら下げ、尻を引っぱたけば……いくらでも新薬を買っていく。疑問も持たず、目を輝かせ……感謝さえ浮かべながら。

そこから得た臨床データを高値で製薬会社に売れば、また利益に繋がる。

利益が、利益を産んでいくのだ。

「くはははははっ……！！……これだから、医者はやめられんわ……！」
欲望にべたついた、醜い笑み。

……この男が、町で三本指に入る病院の院長だとは、初見では誰も気付くまい。

ワインを、再びグラスに注ぐ。

「……躊躇い無く殺せるクスで安心したよ」

「！？」

院長は、驚きにグラスを取り落とした。

ワインが絨毯に零れ、黒い染みが広がる。

「美香は、私のモノになったんだ」

その染みは、零れたワインの量とは釣り合わないほど、その面積を広げ……

「美香の足は、医学ではもう治せない……それはまあ、仕方ない」

床一面を黒く染め上げ、その色合いをより濃くしていく。
「でも」

院長は、異常な光景にガタガタと震える。

「それを隠して、美香を縛り付けるようなブタ野郎は、許さない」

床一面の闇の中から、『甲冑』に身を包んだはやてが、姿を現した。

「死んでもらうよ」

ビキュンッ！！

院長がつい先ほどまで座っていたソファとデスクが、真っ二つに両断される。

「ひいっ……！！」

後ずさり、どんっ……と、棚に背中をぶつける。

目の前に現れた化け物は、絶対零度の殺意を撒き散らしながら、真っ直ぐに歩を進める。

「ま、待ってくれ……！！」

ざくざくと、辺りの物を切り刻みながら迫る闇に、命乞いを始めた。

「金をやるう！ 一生遊んで暮らせるだけの、金！ い、いや、宝石でも、マンションでも、好きなだけ……！！」

びたりと足を止める。

脂汗をだらだら垂らしながら、安堵の表情を浮かべる。

「……………お前には、それしか無いんだな」

深い哀れみを浮かべた……まるで、養豚場の家畜でも見るかのよ
うな顔。

「……………へぁ？」

それが、院長がこの世で見た、最後の光景だった。

.....

「.....」
はやての目の前で、引き千切られた五体がずぶずぶと闇に沈んでいく。

今日は、楽しむような気分では無いらしい。

「.....はあ」
やれやれ、とでも言いたげなため息を残し、ずぶずぶと自らも闇の内に沈んでいく。

残されたのは、主を失った豪華な部屋だけだった。

「.....さん、姐さん」

ゆさゆさと身体を揺さぶられ、回想から引き戻された。

「あ、ああ、悪い。何だ？」
聞いていなかった。

「新しい先生が来る、って話」

「ああ、その話か.....んで、何て人なんだ？」

美香は、チョコアイスをパクつきながら、

「石田先生、って言うんだって！」

「え.....」

実に聞き覚えのある名前を、告げた。

第四十話（後書き）

美香を今後どう活かすか、思案中です。
ご意見ご感想、お待ちしております。

第四十一話（前書き）

お待たせしました、、、ギリギリ一週間です。

第四十一話

主が出払い、無人となった八神家。

その玄関口に、雲のような闇が蠢く。

……蒼炎の不死鳥に飲み込まれた瞬間に、闇の書の自動防御プロ
グラムによって発動された、脱出用の転送魔法。

どさっ

そこから排出されたのは、真紅の頭髪が目を引き、小さな人影。
露出した細い手足の輪郭から、それが少女であると判別できる。

「……………あ、！」

投げ出された衝撃で、少女は僅かに呻く。戦闘中でさえ、一言も
発することが無かったというのに。

その身を包むのは、簡素な衣服と……既に原型を留めない、闇色の
鎧。

蒼炎の破壊力は、鎧の耐久力を遥かに上回っていたらしく、飲み
込まれたほんの一瞬でほぼ全損していた。

そのポロポロになった鎧が蠢き、しぶとく再生を試みる。が、

ゴウッ……………！！

蒼炎の残滓が、その闇を完全に吹き散らした。

それによって完全に焼失してしまったのか、もう再生する気配は
無い。

「う……………？」

倒れたままの少女の臉が、僅かに開く。寝ぼけているように胡乱だ
った瞳は、次第に焦点を結び……確かな理性の輝きを宿した。

「アタシ、は……………？」

頭の片隅に、ヘドロのようにこびりついた記憶を閲覧する。

目の前で命乞いをする、敵兵の生き残り。

戦の勝敗は、既に決していた。

僅か5人と侮った数百の敵兵は、目の前の士官を残し、無残な肉片に姿を変えた。

自分の傍らには、一冊の本を携えた人影。

彼が、命令を下したのだ。『殲滅せよ』、と。

殺す必要なんて無かった。ただ、リンカーコアを奪ってしまえば、用は無い筈だった。

一人殺してしまう度に、抵抗した。だが、その度に……

どろどろと、粘りつくような闇が身体を覆う。

こうして、闇の契約の強制力で、意思を剥奪されてしまう。

腕が、自分の意思とは関係無く、得物を振り上げ……

これは、誇りを賭けた戦ではなく、飢えを満たすための狩猟。

自分達は、誇りある騎士ではなく、蒐集の道具。

それこそが、闇の書。

「そうだ、アタシは……！」

がばつと、一気に起き上がり、自分の身体を見渡す。

己を拘束する鎧は、見当たらない。

見慣れない、自分の肉体が直に空気に触れていた。

「……うそ」

あの忌々しい鎧が、無くなっている。

鎧……闇の呪縛から逃れることが出来るなど、思いもしていなかった。

「逃げなきゃ……」

とはいえ、それも……再びあの闇に沈められてしまったら意味が無い。精神は、再び闇に封印され……

「奪われるのは、もう嫌だ……！」

人格、記憶、尊厳、絆……そして、名前。

その全てを、闇に……ひいては、歴代の主に奪われてきた。

闇の呪縛が解け、それを見咎める主がない今こそが、最大の脱出の好機なのだ。

「……」

一瞬、今代の主の顔がちらつく。

憎悪に染まり淀んだ瞳。血に愉悦を感じる歪んだ笑み。

それだけを見れば、歴代の主と共通。

だが、慣れない酒に酔い潰れるなど、人間味のある一面もある。

それでも、今はまだ、本来の人格を保つていようと……

「あいつだって、いずれは……」

僅か9歳の女の子。哀れに思う気持ちも、無くはない。

「アタシたちのことを……」

次に浮かんだのは、三人の『仲間』のことだった。

顔と名前は、忘れて久しい。

どのような経緯で、闇の書に組み込まれてしまったのかも忘れた。ただ、『仲間である』という曖昧な確信だけが、単独での逃亡を僅

かに躊躇わせた。

「……………くっ!!」

しかし、闇への恐怖がそれらを振り払った。

ばんっ!

ドアを開け放ち、方角も考えず……………素足のまま、夜の道へ飛び出す。

ただ遠くへ。

夜の闇、物陰、暗がり……………まるでそこから、今にも自分を捕らえようとする手が伸びてくる錯覚を覚えてしまう。

ただ遠くへ。

この世界に関する最低限の知識は、召喚の際に与えられている。逃げれば。逃げてしまえば。

「どうにでも、なる!」

ただ、遠く。闇の魔手が届かぬ所まで。

俺は現在、アースラのラボルームで待機している。

先に収容されたなのは……………あっちは、蒼炎の効果なのか、問題ないレベルにまで持ち直した。当面の間は絶対安静だが、命に別状は無い。

でも。

「……………レイジングハート」

目の前、何かの容器に入る相棒に声を掛けるも、返事は無い。ただ沈黙し、これ以上壊れないよう、神経質なまでに保護されている。

それもそうだ。何せ、全機能の8割が破損したんだ。人格A Iと、活動記録……記憶が残っていたのが不思議なくらいの損傷なんだから。

放っておいたら、勝手に自壊していつてしまう。

「……………」
「ひび割れて……今にも砕け散りそうな状態。」

「……………」
「すまない」

全部、俺の力不足が招いたことだ。

己の技量を見誤って……………このザマだ。
今回は運がよかっただけで……………

「……………」
「くそっ!!」

ガンッ!!

苛立ちのまま、壁を殴る。

頑丈な壁は、僅かに軋むだけに終わる。

「何が、AAAランクだ!」

いい気になっていた。

『稀有な才能』だの、『百年に一人の逸材』だの持て囃され……その実、それが満更でもなかった馬鹿な自分をぶん殴ってやりたい。

ガンッ!! ガンッ!!

二度、三度……己の身を痛めつけるためだけに、拳を叩きつける。

「何が、なのはを守る、だ！」

皮膚が裂け出血し、筋繊維が千切れ、骨に亀裂が入り……………だが、すぐに治る。

その後、あの蒼炎の力が無かったら……………なのはは、殺されていた。そして、不死身の俺だけが生き残るといふ醜態を晒していたに違いない。

ガゴンッ！！

「肝心なときに何も出来ない俺が、どのツラ下げて……………！！」
「堅牢と思い込んでいた防御は、紙くずのように破られた。
必殺と思い込んでいたカウンター技は、かすりもしなかった。」

ゴキンッ！！ バキッ！！

腕が疲労で垂れ下がるまで、何度も、何度も拳を振るう。
己の無力を……………己の愚かしさを、少しでも、この身に刻み込むために。

「くっそがあああああああああああああああああああああ
！」

……………ゴゴンッ！！

思いつきり額をブチ当てた壁が、とうとう完全に陥没した。

「はあ、はあ……!!」

どろっとした血が額から流れ、顔を濡らす。

その傷も、即座に塞がる。

「くそ……」

脳震盪でも起こしたのか、立っていられなくなった。

「……俺、こんなに弱かったんだな……」

自分への怒りが過ぎ去り……途方も無い無力感が、全身を苛む。

「……桃子達に、何て言えばいいんだよ……!!」

ぐしゃっと髪を掴んでも、答えは……いや、もう出ているのかも
しれない。

「もっと俺に、力があれば……!!」

そう。俺に、もっと力があれば。

チビ騎士の武器……あの弾丸の出力に負けない力があれば。

カウンターを弾き返されないだけの力があれば。

なのはを、レイジングハートを守れたんだ。

「くそオツ……!!」

何十分かしただろうか。

壁に背を預けて座り込んでいた俺の耳に、ドアのエアロックが解

除される音が届く。

「入るぞ」

ドアが開き、クロノが入ってきた。

「………よう」

一ヶ月ぶりだが、今は旧交を温めているような気分じゃない。

「………気は済んだか？」

半眼で、陥没した壁を見やり言う。

「……」

答えられず、黙り込んでしまう。

八つ当たりで艦内を破壊して……情け無いたらありゃしない。

「まあいい。それより、艦長室に行くぞ」

「……………ああ」

のっそりと、鉛のように重い身体を引きずり起こす。

そして、クロノの後を追った。

艦長室には、リンディさんとエイミィが待っていた。

「秀人君、久しぶりね」

「おひさー」

にっこりと笑うリンディさんと、ひらひらと手を振るエイミィ。

「……………久しぶり、です」

そして、挨拶もそこそこに着席する。

「まず、秀人君。あなたを襲った集団についてです」

部屋の照明が落とされ、モニターが表示される。

そこに、古ぼけた映像記録が映る。

漆黒の鎧を身に纏う、四人の騎士。そして、一冊の本。

「S級指定ロストロギア……『闇の書』」

S級……つまり、A級のジュエルシールドよりも、ランクが上。

「この騎士達は？」

俺達を襲った奴も、確かに映っている。あんなのが、あと三人も

いるのか……

「この四人は、闇の書を守護する戦闘プログラム」

「プログラム……？ にしては、随分と……」

どう見ても、機械の思考じゃなかった。

「プログラムとは言っても、0と1で作られているわけじゃないわ。

古代ベルカ……過去に存在した実在の人物を再現して、使役している」

なるほど……思考は生身の人間ってことか。

「これまでも、何度か確認していたのだけれど……」

「僕たちが到着するころには、とつくに姿をくらましていた」
ぶすつと、忌々しそくに口にした。

「あいつら、なのはからリンカーコアを抜きやがったけど……そう簡単に取り出したり出来る物なのか？」

第一、奪ってどうするって言うんだ。

「それが、闇の書の最大の特徴だ。リンカーコアを蒐集し、666の頁を埋める。その頁には、蒐集した魔導師が使える魔法が記され、それを使用できるようになる。

……一切の制限無く、万全のパフォーマンスで」

「……反則じゃねえか」

普通、魔法の習得には割かし時間が必要だ。

習得とは、『発動できる』というだけじゃない。ミス無く発動でき、コントロールの失敗が無くなって、初めて習得した、と言える。

それを、ただリンカーコアを奪うだけで……？

つまり、その闇の書の主は、なのはが使える魔法をそっくり丸ごとコピーしやがったってことか。

「だからこそ、ロストログアに指定されている」

「……でも、それってS級に指定される程か？」

それだけ聞くななら、ただの魔法の記録メディアじゃないか。蒐集しなければ、ただの本。蒐集したとしても、それを使えるのはたった一人。

A級のジュエルシードのほうが、よっぽど危険だ。

「もちろん、続きがある。

闇の書の別名は、『呪いの魔導書』。主となった人物の人格を侵食し、破壊衝動・殺戮衝動で支配する」

どんな聖職者であろうとも、と付け加える。

「そして、666の頁を埋めた闇の書は……破壊衝動のままに暴走

し、蓄えた膨大な魔力を炸裂させ、周囲一体を消し飛ばし……主も
るとも、消滅する」

最後に表示された映像は、瓦礫さえ残らなかった死の荒野。地図
の縮尺が正しければ

……東京都と同規模の都市。それが、丸ごと。

それでいて、これは被害が少なくて済んだ方らしい。じゃあ、被
害が多かったら……と考えたら、空恐ろしい。

……いや、待てよ？

「待て待て。消滅するって……それじゃあ、何で現存するんだよ」

それも、ロストログシア指定されるほどの昔から。

「そこが、この闇の書の厄介な所だ。たとえ、発動前に撃破に成功
したとしても……数年の後に、また新たな主の元へ向かう」

「本来、この闇の書はキミが言うとおり、偉大な魔法を後世へ伝え
るための記録媒体だった。

その知識を得るに相応しい者かどうかを書が自身で判断し、守護騎
士達が篡奪から守り、破損したとしても、自らのバックアップ機能
で再生する」

なるほど……聞くだけなら、優れた品物だ。

「だが、何代目かは知らないが、闇の書を改変してしまったんだ」

「書の自意識……管制プログラムを封印し、守護騎士を戦闘プログ
ラムへ変換し……再生機能は、終わらない悪夢の火種にされてしま
った」

その結果は、聞かなくても分かる。

「主を得ては暴走を繰り返し、倒しても倒しても蘇る……呪いの魔
道書に」

ああ……確かにそりゃS級だわ。

使い減りしない上に、自らの意思で行動するジュエルシードみたいなものじゃないか。

「つたく、どうしてこう常識外れの輩ばかり出てくるんだよ

「……守護騎士の一角を退けるキミも、大概非常識だがな」

俺だって、ワケわかんねえよ……

「つーか、あの弾丸みたいなのは何なんだ？

使った途端、いきなり出力がハネ上がって……」

「弾丸……？」

ああ……アースラの局員達は、まだ交戦したこと無かったんだっけか。

「実は……」

俺は、チビ騎士との戦いの様子を……蒼炎で撃退した部分まで、詳しく説明した。

そして、クロノ達が驚愕の表情を浮かべる。

「カートリッジ・システム……！！」

「……すまん、説明してくれ」

正直、勝手に驚かれても理解できない。

「基本的に、リンカーコアは一定の魔力しか運用できない」

最大魔力量が1000なら、上限は100。

その中から、5や10をやりくりするのが、普通の魔法戦闘だ。

「だがそこに、事前に容器に貯めておいた魔力を『解凍』することで、出力の増加を図るのがこのシステムの特徴だ」

「便利じゃないか」

素直にそう思う。事前に、予備タンクを外部に用意しておけるなら……イザというとき、決め手になるかもしれない。

「けれど、普及していない。なぜだか分かるか？」

出力の一時的なブースト……二トロか。

一時的に爆発的な出力を得られるが……

「後遺症が残る……で、合ってるか？」

本来なら、ガソリンの爆発する温度しか想定していないエンジンの素材は、規定外の熱で変質し……二度と元に戻らない。

「使えるなら、僕が真っ先に使っている」

魔力量が少ないクロノならではの、切実な感想だった。

「普通の人間より、遥かに頑健な身体を持つ守護騎士だからこそ、使えるシステムだ。」

……危険極まりない、物騒なシロモノだよ」

……へえ。

つまり、普通より遥かに頑丈な肉体があれば、いいわけだな？

「リンディさん、頼みがある」

いきなり話を振られたリンディさんは、何も言わずに俺を見つめる。

「確か、前回のプレシアの件での報酬は、まだ保留してあった筈だ」

俺は、囑託魔導師……つまりは傭兵みたいなものだ。

管理局の提示する報酬で、特定の仕事をこなす。

俺達は、半ばなし崩しでその立場になったから頓着していなかったが、あの件での俺達への報酬は、日本円にすれば一軒家がポンと一括で買えるくらいの金額になるらしい。

主犯の確保・説得に始まり、傀儡兵の無力化、動力炉の封印、ジュエルシードの封印と、自分で言うのもアレだが八面六臂の仕事ぶりだった。

現実感の無い金額を提示され、あの時は尻込みしていたが……今こそ、必要な時だ。

「俺の、専用デバイスを用意して欲しい。条件は………」

普通のデバイスじゃ駄目だ。俺の魔力の出力に耐えられて、尚且つ、魔力を高速運用できるだけの処理能力を持った……レイジングハーフト並みのデバイスが最低条件。そして……

「……おい、まさか」「ちよ、ちよっと……秀人君、本気？」

クロノとエイミーが、顔を引きつらせる。

信じられない、という思いと、コイツならやり兼ねない、という確信が、ごっちゃんになったような表情だ。

「カートリッジシステムを、搭載できること」

第四十一話（後書き）

というわけで、とうとう秀人が専用デバイスを手に入れます。
名前も、機能も、しっかりと設定できたかなー、と思うので、お楽
しみに。

ご意見ご感想、お待ちしております。

第四十二話（前書き）

今年のコミケ、開催されるかどうか心配ですね、、、
劇場版第二作の情報が入ればいいのですが。

第四十二話

瞼に差し込む、人工的な光。
眠る邪魔になるそれを鬱陶しく思いながら、つらつらと記憶を探る。

母さん達と食事をして……お茶が無くなったから、秀人さんと買
いに行つて……

「あー……買って無いや」

ポケットに入れたままの千円札を探るが、何故かポケットが無い。
というより、着ていた服じゃなくなっている。

「……んー？」

何か、大事なことを忘れているような……
お茶を買いに行つて、それで、それで……

「あああああつー!!」

思い出した!!

がばつと跳ね起きる。そして、

「あ、いたたたた……!!」

胸の痛みで、ベッドにうずくまる。

「つて、ここは……？」

きよろきよろと周囲を確認する。真っ白いベッドシートに、仕切
りのカーテン。雰囲気としては、学校の保健室に近い。いや、ここ
は……

「……アースラ？」

「おや、目が覚めたのかな？」

カーテンが開き、見覚えのある顔が覗いた。

「あ……お久しぶりです、オペル医務官」

プレシア事件でも世話になった、オペル医務官だった。やっぱり、アースラに運び込まれたらしい。

「調子はどうだい？」

ゆっくりなら、身体を動かしても痛みは走らない。ただ、胸の奥にぽっかりと穴が空いたような喪失感があつて……試しに、ダメ元で魔力を探ってみるかな。

リンカーコア、起動……っ！？

「うッ」

再び、刃物で切り刻むような痛みが全身に広がった。

「……………最低、最悪です」

……………やっぱり、ダメだった。

「その痛みの原因は、わかっているね？」

リンカーコアの強引な摘出……それもあがるが、

「私自身の砲撃魔法、ですよね」

……………キれていたとはいえ、さすがにやり過ぎた。

「あの……秀人さんと、レイジングハートは？」

倒れてしまつてからの記憶が無い。こうしてアースラに運び込まれているということは、敵を撃退したんだろうけど……嫌な予感がある。

念話も使えないし、不便なものだ。

「……………それに関しては、後にクロノ執務官から説明がある。それまで、安静にしていなさい」

「はい……………」

隙を見て、こっそり探しに行こうと。

「ああ、そうそう……ちょっと手を出してくれるかな？」

「？……………はい」

言われるままに、手を出す。

がちゃんっ

「……………はい？」

ええと……何コレ、腕輪？

「ちょっとした計測器みたいなものだから、心配しなくていいよ」
何故か申し訳なさそうに苦笑し、ファイルを纏めて席を立った。

時計が一分経ち、少しの間なら、戻ってこないと確認する。スリ
ツパをつっかけ、ベッドを降りる。

秀人さんはどこかなー……

「……ん、あれ？」

自動ドアが開かない。小癩にも、施錠されたらしい。

「あーあ、困った困った……」

なーんてね。ドア横に、非常用レバーが隠してあるってちゃんと
知ってるんだから。

がきょんつ、とレバーを倒す。これでエアロックが解除されて、
手動で開閉できるようになる。

「楽勝楽勝」

と、ドアの敷居を跨いだ途端……

ビーン！！ ビーン！！

「うわっ!?!」

けたたましいブザーが腕輪から鳴った。

『警告します。要監視者には、そこから先への出入りが許可されて
いません』

まさか、この腕輪って……！

『警告します。要監視者のあなたには……』

監視用の、手枷だ！

隣の部屋に詰めていた大勢の局員がわらわらと……！

「確保ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」 「全力で安静にさせるおおおお
！！」 「また囑託がやらかしたぞ！ 俺達の余暇が……！！」 「こ
の爆弾娘！ 大人しく寝てろ！」 「明日の定時上がりが懸かっ
てるんだ！ 捕まえ……じゃなくて、保護しろおおおお……！」

思考ダダ漏れで、ゾンビのように群がってくる。

っていうか、誰が爆弾娘よ!?

「残業代出るならいいじゃない!」

ビキッ……………

「あ、あれ…………?」

地雷を踏んだっばい感覚が…………

「……………その金を使う時間が欲しいんだ……………
……………」

ぴったりハモった!

「来るなー!」

もう何のために逃げているのかも、すっかり忘れて逃亡する。

が、スリッパ履き+痛みでダッシュが効かず、もたついているうちに追いつかれてしまった。

ぎゅるるるるっ!

「むー! むー!」

あっという間に簀巻きにされ、打ち上げられた初鯉のように担ぎ上げられる。

「丁重かつ、嚴重に扱え! 隙を見せたら噛み付いてくるぞ!」

わたしは動物じゃないー!

「むもももー!」

その抗議さえ封じられ、わっせわっせと病室に強制送還。

っていうか、『定時に上げられるぞ』なんてエサをぶら下げて尻をひっぱたくような真似をするのは、多分…………!

げしっ!

「…………ぶはっ!」

身体を起こした勢いのまま、私をバインドする一人に蹴りを見舞う。しゅるっ、と、口元を縛るバインドが消えて、言葉が自由にな

った。

「ひ、一人やられたぞ!!」「だから、油断するなと……!!」
すっすっすっ……!!

思いつきり胸を反らし……肺の隅から隅まで酸素を吸入し……!

「クロナオオオオオオオオオオ!!　ハゲろおおおおおお
おおおおお!!」

アースラ全体に響き渡るような大声で、クロノに呪いを掛けてや
った。

「なんとということ……!!」「ただでさえ、ストレスを溜め込みや
すいクロノ執務官に向かって……」「むっ……!!」

「ハゲろ!　十代後半で生え際の後退に悩め!　20代前半でバー
コード状にハゲろ!　三十代で落ち武者にムグググググ!」

再び……というか、より嚴重に口元を二重に拘束された。

「……」「……」「……」「……」「……」

ぼふんっ、と医務室のベッドに投げ込まれる。

ばしゅん、と、今度こそ完全に施錠されてしまった。

「む……」

さっきは気付かなかったが、部屋の隅に置かれた籠の中には、私
の服が畳まれた状態で入っていた。洋服の上に、私の携帯電話が鎮
座している。

何気なく取り、電源を入れ……

ぶるるるるっ!

「……うわぁ」

電源を入れた途端、大量のメールが着信し、留守番電話が数十件

表示された。

いちいち全部見るのは時間が掛かりそうだから……電話帳から、高町家の電話番号を呼び出す。

ブルがちゃっ

早っ。

『もしもし、なのは!?!』

「あー……うん、そーです」

『心配したんだよ!!』

姉さん……すごい涙声だ。

明日は月曜日で、普通に翠屋の営業日なのに、寝ずに待っていてくれたんだ。

罪悪感がひしひしと……

「ごめん……いろいろ、トラブルがあつて……」

なおさら、本当のことを言うわけには行かない。

「でも、大丈夫。秀人さんも無事だから」

多分、ユーノくんも今頃アースラに召集されている頃じゃないかな。

「ごめんね。せつかくの日に……そういうわけだから、今日はもうそっちには戻れそうに無いや」

『そっか……でも、無事ならそれでいいんだ』

ほーっ、と、安堵の息をつく姉さん。

「うん……うん……それじゃ、また」

その後、母さんと兄さんにかわってもらい、同じような説明をして、電話を切った。

電話を切った時点で、午前二時。こりゃ、明日は学校行けないなあ……

「あーあ……」

携帯電話を籠に放り、ベッドに倒れこむ。

数時間寝ていたとはいえ、深夜にまで起きているほど、不規則な

生活は送っていない。

シーツを被り、目を閉じる。

私の身体はまだ休息を欲していたらしく、あっという間に眠りに落ちていった。

小部屋を借りて、ユーノと向かい合う。

「秀人、それ……………本気？」

アースラに到着したばかりのユーノは、そりゃあもう凄かった。

結界に気付かずに行ったことをかなり悔やんでいて……………えらい勢いで号泣して。

あんな巧妙な結界、普通は気付けないし……………第一、あれは自分で何とかできなかった俺の責任だと言っても、いやいや、僕の責任だ……………とユーノも譲らなくて、結局クロノが場を収めてくれるまで、そんな押し問答が続けられていた。

そして落ち着いた今、俺は、自分のデバイスを持つことを明かしていた。

「もちろん、本気だ」

なぜ真つ先にユーノに教えるのかと言うと……………

「レイジングハートとの契約の解除、どうすればいい？」

俺のアカウントの削除のためだ。

「レイジングハートは、そんなこと望まないと思うよ……………？ それに、まだまだ容量には余裕があるんだし……………何も、契約を解除しなくても」

確かに、レイジングハートの容量は大きい。二機分の思考AIを入

れても、ありったけの術式を入れても、まだ余るくらいに。でも……
「処理速度は、一人のマスターしか想定していない」

そもそも、以前フェイトに指摘されたが……効率が悪いんだ。

「この前、気付いたんだ。レイジングハートのレスポンスが、少しずつ……でも、確実に悪化してる」

「……………」
ユーノが、押し黙る。俺の言わんとしていることに、思い至ったようだ。

「限界なんだよ。デバイスの共有は、もう……………」

それが、少しの誤差でも。その誤差が、生死を分けることになる。実戦ではよくあることだ。俺なら別にいい。でも、もしなのはだったら……そんなこと、それこそ、レイジングハートは望まない筈だ。そもそも、共有するっていうのは俺達が未熟で、半人前だったから可能だった事だ。

だけど、既になのはは一人前の魔導師と言っても差し支えない。するだけ無駄……それどころか、害にしかならない。

それでもこの一ヶ月、俺のアカウントを残しておいたのは、襲撃が無かったからこそその平和ボケと……レイジングハートの我が侂だ。

「……契約の解除には、デバイス側からの認証が絶対に必要なんだ。ストレージなら、そんなに難しくは無い。でも、レイジングハートはインテリジェントデバイスだから」

……………どっちにせよ、レイジングハートとは話をつけないとな。

「……………明日の朝、なのはも連れて行く」

「そうだね。なのはも立ち会ったほうがいいだろうし」

小部屋を出て、仮眠室に向かう。

「はぁ……………」

その道中で、ため息が出てしまう。

恋人に別れを告げる前って、こんな気分なのかねえ……彼女なんかいたこと無いから、わかんねーけど。

「怒るだろうなあ……念話の周波数をチューニングして、ハウリング攻撃されるかも……いや、マルチタスクを強引に起動させられて、頭痛地獄か……？」

どう転んでも、いい展開にはならないだろう。

でもまあ、別れ際のビンタくらいは、覚悟しておこう。

『そう……闇の書が現れたの……』

クロノは、執務官としての権限を利用し、裁判を控えて拘留中のプレシアと面会を行っていた。

モニターに映るプレシアは、すっかり憑き物が落ち、柔和な雰囲気漂わせていた。

のど元に通された、呼吸器系へ直結するチューブは痛々しいが、この一ヶ月の集中治療のおかげで、即座に生命に関わるような状態は脱した。

「拘留中で、刑も確定していないところを済まない。だが、どうしても貴女の協力が必要不可欠なんだ」

とうとう確認された、魔力変換資質『結合』を持つ魔導師、吾妻秀人。

その、特異すぎる魔力に対応した専用デバイス兼、初のミッドチルダ式カートリッジシステム搭載試験機。

プレシア程の科学者の力を、使わない手は無かった。

もちろん、プレシアには拒否権があるのだが、そんな選択肢は初めから除外されている。

『構わないどころか、願ったり叶ったりよ。』

初めての技術提供が、秀人のデバイス作成だなんて……それも、兼ねてから提唱されていた、ミッドチルダ式カートリッジシステム。

元科学者として、これ以上になく魅力的な研究だわ』

プレシアの、ひいてはテストロツサ一家にとっての、大恩人。その恩に、報いないことなどありえなかつた。

『機材と、秀人のバイタルデータを用意してもらえるかしら。すぐにでも始めさせてもらおうわ』

「早速、手配しよう」

手元のキーを操作し、機材とデータの手配をする。

これで、準備は整つた。

「こちらでも、メカニツクマイスターが研究を始めている。そのデータも、纏まり次第そちらに送る」

『ええ。……………ねえ、クロノ執務官？』

「何か、足りないものでも？」

『いえ、その……………』

先ほどまでのキレのいい態度から一変、妙に腰が引けている、弱気な態度を見せる。

『……………フェイトは、元気がしら？』

別の場所で裁判を待つ、娘の心配だつた。負い目がある反面、やはり気になるらしい。

クロノは、キーを叩く手を止める。

「ああ。それはもう……………」

遠い目をして、この一ヶ月の苦労を思い出す。

思い出す。

思い出す……………

「手に余るくらいだ」

その並々ならぬ苦労を感じ取つたのか、プレシアは頂垂れた。

『ごめんなさいね……………どんな様子？』

「最近は、幾分大人しくなっているんだが……………」

今現在のフェイトの様子を思い出し……………途端に眉根を寄せる。

「……………アレは、いい傾向なのだろうか」

『……………本当に、手間を掛けて申し訳ないわ』

と、そこで面会時間終了のチャイムが鳴った。

「……では、頼んだぞ。プレシア・テストロッサ」

『ええ、クロノ執務官』

ぷつんつ、とモニターが消える。

「秀人のデバイス、か……」

S2Uを懐から取り出し、物思いに耽る。

「秀人の魔力量からすれば、当然のことなんだろうな」

ぐつと、知らず知らずのうちに、歯を食いしばっていた。

あれだけの魔力量と資質を持つのなら、一般に流通しているモデルでは、到底スペックが追いつかない。専用機を得るとするのは、至極当然の流れだ。

専用機を得て、その魔力を使いこなせるようになれば……秀人の力は、飛躍的に上昇するだろう。

「……僕は、守護騎士に勝てるだろうか」

それに比べて、自分は……

キンッ

S2Uを起動。

「僕は……」

一応は、これも自分の専用機だ。自分の少ない魔力量を十二分に活用し、迅速かつ正確な運用を可能にする……自分にとって、長年を共にしてきた相棒。

だが、それも……敵の守護騎士達の圧倒的な白兵戦能力、カートリッジシステムによる爆発力……それらを相手に、どこまでやれるのか……

「僕に、もっと魔力があればな……」

父に関しては、データが不十分なために何とも判断し難いが……

母は。

衰えぬ膨大な魔力と、超大規模の魔法の展開を可能にする、正真正銘の怪物だ。

だが、自分にはその一割程度の魔力しか無い。
二人の師匠に鍛え上げられ、最大魔力量に依存しない戦い方を習得したものの……

「秀人。僕は……いつまで、君の隣で戦える……？」

それは、クロノが執務官になってから初めて漏らす、弱音であった。

翌朝、私のいる医務室に、秀人さん、ユーノくん、クロノ、エイミイがやってきた。

「悪いな、朝っぱらから大勢で」

「いいよ。丁度、起きたところだし」

ベッドからおりて、スリッパを突っかける。

「……あれ？ レイジングハートは、一緒じゃないの？」

「てつきり、秀人さんが持つてるんだと思ってたけど……」

「……」

途端、秀人さんが険しい表情になった。

「……まずは、来てくれ」

「？ ……うん」

ユーノくんも、何だか所在なく落ち着かない。

「……じゃ、行くうか」

「うん」

秀人さんと手を繋ぎ、廊下を歩き出す。

「…………？」

でも、なんだろう。いつもの秀人さんに比べて、何か、違和感がある。

「……ここだ」

連れて行かれた先は、ラボルーム。プレシア事件のときにも、レイジングハートのメンテナンスをしてもらったりした所だ。

ドアを開けて、中に入る。

「レイジングハート」

入ってすぐ、レイジングハートがいた。

「……………」

「どうしたの？」

が、気配が感じられない。

「厳しい戦闘の所為で破損して……休眠させてるんだ。今、起こしてもらうから」

秀人さんが目配せし、クロノがレイジングハートに繋がった機械を操作する。

そして……

「……………ここは、アースラ……………ですか」

途切れ途切れ、時々ノイズ交じりの声で、レイジングハートが話し始めた。

「……………！ 秀人、秀人！？」

って、うわぁ！？ ど、どうしたの！？

「れ、レイジングハート、落ち着いて……………！！」

びかびかと点滅し、異様なまでに興奮したレイジングハートを、なんとか落ち着かせる。

「私も、秀人さんも、ちゃんと無事だよ……………だから、落ち着いて」

「……………申し訳ありませんでした、マスター」

驚いた……………こんなに慌てたのなんて、初めて見たかも……………

「レイジングハート……………」

秀人さんが、相変わらず険しい表情のまま話し始める。

「秀人……………よかった。無事だったのですね」

「ねえ、レイジングハート……あの後、どうなったの？」

『……………それ、は』

もごもごと、言いづらそうに言葉を濁す。

「いいよ、話しても」

だが、秀人さんの了承を得て、あの後の状況を説明してくれた。

敵の大將格が現れたこと。

秀人さんの必殺技が、通じなかったこと。

レイジングハートが、全損寸前まで破壊されたこと。

なんとか、命からがら危機を脱したこと。

「……………そんな」

……………私が自爆した後、秀人さんは相当に危ない状態だったらしい。

「私が、あんな無茶をしたから……………」

「違う。俺の力不足だ」

秀人さんが表情を変えないで、ぱつぱりと言う。

そうか……………感じていた違和感の正体が、ようやくわかった。

秀人さん、今朝から一度も笑っていないんだ。

「レイジングハート、大事な話がある」

秀人さんが、改めて話を切り出す。

その言葉の響きからして、かなり重要な話。

『……………今後の、敵への対策ですね』

レイジングハートは、話をはぐらかそうとしている。私には分からないけれど……………何かを察したのだろうか。

「違う」

『では、複合技のパターン変更でしょうか？』

「違う。話を、聞いてくれ」

『あ……ああ、一番大事なことを忘れていました。技全体の、魔力運用の最適化ですね。そうすれば、今度は敵に有効打を与えることが出来る筈です』

レイジングハートが、のべつく間無しにしゃべり続ける。その言葉の先を、言わせまいと。聞くまいとして……でも、秀人さんは、それを無視して、言った。

「契約を、解消しよう」

『……………』

一瞬のうちに、沈黙する。

「……………」

秀人さんは、もう何も言わない。

ユーノくんも、辛そうに俯いている。

『……………嫌です』

「……………その我侭で、なのはの身を危険に晒すことになっても……………か？」

薄々、私も感じていた。

……………術式の展開に、意思とのタイムラグが発生している。特に、私と秀人さんが、別々の術式を同時発動した際、それが顕著になる。私でも気付くことに、レイジングハートが気付かなかった筈が無い。

『……………嫌です』

レイジングハートが、そう繰り返す。

「……………我侭を、言うな」

秀人さんの言葉にも。

『……………嫌です』

ユーノくんの言葉にも。

「レイ、」

『絶対に、嫌です!!』

びりびりと、部屋中に反響するような大声を出した。

『私は、そんなに頼りになりませんか!?!』

「違う、そうじゃない」

『私にはヒデトの資質を見極め、伸ばしていく義務があり、それが私たちの契約の筈です!』

「……………俺の資質は判明した。あとは、俺一人でも伸ばしていく」

『魔法の発動補助は、どうするのですか!? 人一倍、術式の制御が下手糞な癖に!! カウンター技だって、私がいなければ自殺行為にしかならないのですよ!?!』

暴言に近い言葉で、必死に言いすぎる。でも、秀人さんは淡々とそれに返す。

「……………俺の専用デバイスが、近いうちに製造される。術式の運用は、ソイツに任せるつもりだ」

『……………!!』

……………確かに、それは必要かもしれないけど……………

「秀人さん……………本当に、マスターやめちゃうの?」

レイジングハートは、私達の出会いの切っ掛けで……………そのマスターであるということは、私達の大事な繋がりだった筈なのに……………

「秀人。もう一度聞かせて。」

……………本当に、いいの?」

ユーノくんの念押しに、秀人さんは僅かに黙り……………言った。

「……………ああ。なのはを、危険に晒すわけないはいかない」

一瞬の油断が、命取り。それは、よく分かるけど……………

「俺の分のアカウントを削除すれば、タイムラグは無くなる。何の問題も無い」

『問題ない、ですって……………!?!』

その一言に、もう一度レイジングハートが猛る。
より激しく、光が明滅し……………

翼を、形作った。

「……………な」

クロノの驚愕をよそに、レイジングハートが自立的に飛翔し始めた。

ひゅん、ひゅん、と……………助走をつけるように旋回し……………

『この……………浮気者!!』

カコーン!

「ぐおっ……………!!」

秀人さんの額に、クリティカルヒット。

「秀人……………」

「うわぁ……………」

超痛そう……………

『馬鹿者! 大馬鹿者!』

二発、三発……………秀人さんの頭に、体当たりを敢行する。

「い、いてっ……………!! いててっ!!」

気が済むまで秀人さんに暴行を加え……………ぽすっ、と、秀人さんの頭に着地した。

『……………何故、わかってくれないのですか』

光の羽根が『へにやっ』としなり、人間臭く感情を表している。

『……………認めましょう。確かに、もう共有は限界でした。マスターの力を発揮するには、私がマスターの専用機になるしか、ありませんでした』

そっか、やっぱり……………レイジングハートも、気付いてたんだ。

「ですが……理屈では、割り切れないのです。私は、マスターのデバイスであると同時に、あなたのデバイスでも、ありたかったのです」

「レイジングハート……」
相棒の、可愛い我俣。

「……了解、しました。秀人のアカウントを、削除します……」
なんとかしてあげることが、できないだろうか。

「……まあ、待て」

レイジングハートの奇想天外な行動に吞まれっぱなしだったクロノが、それを止める。

「秀人、君は肝心なことを説明していない」
え……？

「説明する前に、レイジングハートが……」

「言い訳をするな」

「理不尽だ……」

相変わらずの二人だった。

「エイミイ、説明を」

「はいはい」

軽い調子で返事をするエイミイ。

最初から、エイミイが説明していれば良かったのに……と思ったけど、秀人さんの口から言わなければ、レイジングハートは絶対に納得なんかしなかっただろうし、仕方ないのかな。

「秀人君のデバイスは、インテリジェントデバイスになる予定なの
びこん、と羽根が反応する。

やっぱり、辛いんだろうな。自分以外の誰かが、秀人さんに寄り添うのが。

「でも、今から思考AIを1から構築していたら、時間がかかりすぎる」

……確かに、魔法の運用システム構築なんて、気が遠くなるような作業が必要だろう。

「だから、レイジングハートのデータを流用しようと思うんだ」

「え……それって、」

私に向かい、ぱちりとウインクを決めるエイミー。

「言わば、レイジングハートの姉妹機になるわけだ」

『姉妹機………ですか』

「定期的にレイジングハートとデータのリンクを行い、システムの調整やデバッグを行う」

お、おおお………これって、かなりの名案なのは。

「私と秀人さんは気兼ね無く魔法を使えるようになって、レイジングハートは、姉妹機を通じて秀人さんとの繋がりを保てる………ってこと？」

「イグザクトリィ!!」

びしっ！ とサムズアップ。

「すごいよエイミー！ 見直した！」

「えー？ えへへ、そう？」

「うん！ クロノの補佐官がこんな軽い人なのは何でだろうって、いつも不思議だったんだけど、これで納得だよ！」

「………持ち上げてから、しっかり落とすんだねー」

………あれ？ 何で沈んでるの？ 褒めてあげたのに。

「なのは………言葉というのは、時として思わぬ威力を発揮するから、気をつけよう？」

「？ ……うん、わかった」

何故かユーノくんに窘められてしまった。

「ね、レイジングハート。そうしようよ」

『………条件が、一つあります』

「何だ？ 言ってみ」

『私の姉妹機の命名は、私に任せてください』

自分の写し身であり、大事な人を守る盾。その名前を、自分で付けたいのだと言う。

「デバイスの完成には、まだ時間が掛かる。何せ、ようやく設計が始まったばかりだからな」

「……いつごろ？」

「高町なのは。君のリンカーコアが、再生し終える頃になるだろう。

…… オペル医務官の見立てでは、あと四ヶ月といったところだな。

それまで、じっくりと考えておくといい」

四ヶ月、かあ……

「その間にまた襲撃があったら、どうしよう？」

正直、秀人さん一人じゃあ、大変だ。

「闇の書の守護騎士達が蒐集を行えるのは、一人につき一回。一度蒐集された魔導師の元に現れたという記述は無いから、安心していい」

なるほど。

「でも……アースラのみんなが戦っているときに……」

じろり、と、クロノが私を睨む。

「では、魔力を失った君に、何が出来る？」

「う……」

キツい一言が、突き刺さる。

私には、戦う以外に脳が無い。デスクワークもできなければ、機材を活用することもできない。

大人しくしているのが、一番いい。

「なあ、俺は？」

秀人さんが控えめに拳手し、聞く。

「君のリンカーコアは、通常の魔導師のものとは比べて特異だ。高町なのはを襲ったのと同じやり方では、抽出は不可能だろう」

それじゃあ、ひとまずは襲撃される心配は無いってこと？

「闇の書の主が、それを可能にするだけの力を手に入れるのが先か、秀人のデバイスが完成するのが先か……どちらにせよ、通常通りの生活を送っていてくれればいい」

四ヶ月……猶予があるような、無いような。

「……護衛も付けるから、心配はいらない」

……何故か、微妙な顔をしながらそう言った。

……まあ、気にしなくていいや。

「かつこいい名前、付けてあげようね」

『当然です。私の、妹になるのですから』

……秀人さんのデバイス完成まで、あと四ヶ月。

これが、後に『闇の書事件』と呼ばれる物語の、プロローグだった。

第四十二話（後書き）

ようやく、二期の話が動き始めます。

実は、書いてあったプロットの大部分を没にしたので、手探り状態での発進です。

どうぞ、最後までお付き合いください。

ご意見ご感想、お待ちしております。

第四十三話（前書き）

遅れましたすみませんort

第四十三話

ここは、とある一室。

広さは八畳ほど。窓は無く、扉には、嚴重な対衝撃・対熱・対魔法処理が施されている。

俗に言う拘置所なのだが……この一室の住人は、そんな状況などお構い無しに、うきうきと調子つ外れな歌などを歌っていた。

くるくると、無駄に洗練された無駄の無い無駄なターンをしながら、部屋の一角へ移動していく。

「ふふふーん、ふーん、」

いわく、伝説は塗り替えるものらしい。

清楚なワンピースを可憐に翻しながら、調子つ外れの歌は続く。

ニコニコと、子供の無邪気さを百倍濃縮したような笑顔を浮かべながら。

「ふふふーん、ふふふーんふーん」

……よほど、気に入ったらしい。

ばこん、と箱を開ける。

目に見える面には、奇妙な覆面を被った……俗に、『ヒーロー』と呼ばれる格好のものが、印刷されていた。

八畳間に置かれた唯一の娯楽……テレビと、DVDデッキ。

その脇には、大量のDVDが積み上げられていた。

アニメであったり、特撮であったり、タイトルはとにかく多いが、唯一の共通点は……その全てが、男児向けである、ということだった。

「ちょうへんしん、かめんらいだー うがー」

歌詞を端折りつつ、トレイにディスクをそっと置き、読み込みを開始させた。

しゅいいいいん、かりかり……と、使い込まれたDVDプレイヤーがディスクを読み込み、タイトルを映し出す。

「……………」
わくわくしながら、本編再生のボタンを押した。

物語も佳境。

番組もそろそろ終盤に向けてのスパートに入っており、強力な敵との、バイクチェイスが映し出されていた。

「おおおお………！」
目は星を浮かべたようにきらきらと輝き、両手は興奮でぎゅっと握り締められている。

甲高いエキゾーストを奏でながら、追い抜き、追い越し……時には前輪を浮かせるアクロバティックなアクションに、少女はすっかりと心奪われていた。

「ふああ……………かつこいい……………」
敵を倒し、さあ次回予告を見ようとしていたところに、無粋な雑音が割り込んだ。

ビーツ……………

来客を報せるブザーだ。

「……………誰だよ、まったくもう」
仕方なく、一時停止をして対応する。

「はい」
『僕だ。入るぞ』
がしゅん、と重苦しい音を立て、ドアが開く。

「なーんだ、クロノか」
「いきなり、ご挨拶だな……フェイト」

そして、どちらからでも無く、透明な衝立を挟んで椅子に座った。
「アルフト、おかーさんはどうしてる？」

これは、クロノが来る度に聞いている。

「アルフの腹部の傷は、完全に治癒した。最近では、走り回りたくて落ち着かない様子だな。プレシアの呼吸器系の疾患も、何とか治療が間に合ったよ」

そもそも、あそこまで重篤になるまで症状を放置していたことが不自然なことなのだ。

「……会える？」

「ああ、アルフに関して言えば、すぐに会えるだろう」

上目遣いで聞くフェイトに、クロノは丁寧を受け答える。

ある程度付き合ってみればわかることなのだが、クロノは少し言葉が厳しく無愛想ではあるが、冷血というわけではない。当たり前前の気遣いくらいなら、出来る少年だった。

「事情聴取に協力的で、素行にも問題は見られない。君との面会も、じきに設けられるだろう」

「やった！」

ぱっと嬉しそうに笑い……

「…………おかーさんは？」

心配そうに、そう聞いた。

途端、クロノの表情が濁る。

「…………プレシアに関しては、正直難しい。アルフと違って、大規模事件の主犯だからな。技術協力による司法取引を続ければ、いずれは……だが、まだ断言は出来ない」

主犯であり、次元犯罪者であるプレシアとの接触は、執務官以上の階級にある者にしか認められていない。

それ以外の者には、音声通信どころか、アナログな手紙での交流、執務官を通じての伝言さえ禁じられている。次元犯罪者とは、そこまでしなければならぬほどの重罪人なのだ。

「…………そっか」

目に見えて落ち込むフェイト。

「だが、いい報せもある」

「え……?」

「実は、……………」

クロノが説明を続けるにつれ、きょんとしていたフェイトの表情が、徐々に輝いていく。

「マジで!? いいの!?!」

「ああ」

クロノは、珍しく笑みを浮かべ、それをフェイトに向けた。

「その許可申請も、すでに提出してある。まあ、問題なく受理されるだろう」

「ひゃっほう!!」

ぐっとガッツポーズを取った。

「……まあ、とにかく楽しみにして……」

ビーツ!!

と、部屋のブザーが、先ほどより強めに鳴った。

『クロノ執務官、緊急事態です。すぐにアースラへ帰還するよう、リンディ・ハラオウン提督より連絡がありました』

「了解だ」

思考を切り替え、席を立つ。

「すまない、フェイト。少し早めに切り上げる」

俺は現在、時空管理局、その地球支部のような場所に連れて来られていた。

アースラの連中と同じような制服を着た局員達からじろじろと注目を浴びつつ、エイミィに教えられた通りのルートを歩く。

そのエイミィ本人はというと、今日俺が対面する、マリエルとかいう人物を呼びに先に行ってしまった。

「うわー……超気まずいんだけど……」

さすがに、Tシャツにジーパンという格好は浮きすぎているけど……それだけでは無いらしい。ひそひそと、悪意は感じないものの噂話をしているのが、何組かいた。

「……」

何の気無しに、そちらを見る。すると……

「……ひっ！」

明らかに怯えて、そそくさと足早に立ち去っていつてしまう。

うーん……何でだろう。俺、そんなに目つきも態度も悪くないと思っただけど……

「おお、ここだな」

そうこうしている間に、到着した。扉の前に設置されたブザーを押す。

ドアが開き、先に来ていたらしいエイミィが顔を出した。

「あ、秀人君。ごめんね、一人で来させて」

「めっちゃ注目された……」

「あー……」

『やっぱりか』とでも言いたげな表情で苦笑する。何か理由でもあるのだろうか。

「後で説明するよ。さ、入って」

部屋の中は、思っていたよりも整頓されていた。用途がわからない機材がいくつもあるものの、椅子やテーブルなど、普通に生活している痕跡が見受けられる。

「んで、どういう人なんだ？ マリエルさんって」

メカニックマイスター……とにかくすごい技術者、ということだけは聞いているものの、その性格や嗜好は全く聞いていない。

まあ、部屋を見た感じ、そんなヤバい人じゃなさそうだけど。

「……説明は、難しいかな？ とにかく、会えば分かるよ。……」

……嫌でも」

「？ そうか」

「それじゃ、行こうか」

そして、おもむろに席を立った。

「ここじゃないのか？」

てつきり、ここがその人の部屋だとばかり……

「ここは、ただの休憩室だよ。マリエルが、二人以上人間が入れるくらいに部屋を片付けるから、って」

……………うん、めっちゃ不安だ。

歩くこと数分。どんどん人通りが無くなり、薄暗く、かび臭くな
っていく。

「到着ー」

……………ここ？

この、どっからどう見ても物置というか、ゴミ屋敷的な場所が？

「マリー、入るよ」

その扉を、エイミィは躊躇無く開け放つ。

「……………」

まず見えたのは、薄汚れた白衣。薬品でも溢したのだろうか、変
な色に変色し、ところどころに穴が空いている。

それが、もぞもぞと動いている。

「……………」

もそもそと、聞き取れないほどの小さな声で何かをつぶやきなが
ら、手元のメモに何かを書き込んだり、かちやかちやと黄ばんだキ
ーボードを打鍵していたり……あからさまに、マッドサイエンティ
ストだった。

「すまんエイミィ。用事を思い出した」

くるつとUターン。

さーて、帰って飯食って寝るかー。

「待って待ってちょっと待って！」

エイミーが、俺のベルトを掴んで必死に引き止める。

「マリー！ マリーってば！」

そして、残った左手で白衣の背中をべしべし叩いた。

「……んー？ ああ、エイミーか……」

綺麗な中性的な声を出しつつ、のっそりと白衣の背中が振り返った。

「……ソレが、例の坊や？」

厚ぼったく、顔の大部分を隠すような眼鏡……その奥で、瞳が怪しく輝いている。

「うん、そうそう！ ……ほら秀人君、挨拶挨拶！」

「……知らないよ。調査済みだから」

積み上げられていた山から、一冊のファイルを器用に抜き出した。

「……読もうか？」

調査済み……つまり、俺の過去のこともしっかり記入されているらしい。

「……勘弁してくれ」

「そう」

ぽいっ……と、片隅に置かれていた箱にファイルを丸ごと投げ捨てる。

ジュウツ……！

僅かに焦げ臭い匂いをさせて、ファイルは完全に焼失した。シュレッターみたいなものだったらしい。

「いいのか？」

「覚えたから」

ぷいっと、また背中を向けてしまう。

「……専用デバイスの開発。バイタルデータが必要だからちよつと来い」

横柄に自分の隣を指差す。

「ご、ごめんね、秀人君……変な子だけど、根はいい子だし、腕も確かだから……」

道理で、エイミィと仲がいいわけだ。

「あ……………忘れてた」

がたん、とマリエルが慌てた様子で立ち上がり、ぱたぱたと部屋の隅にあったシャッターへと駆けていく。

途中、くるつと立ち上がり……………

「……………何してるの？ 来なよ」

……………クロノと違うところは、『相手は必ず自分の話を理解している』と思い込んでしまう癖がることだな、うん。

がらがら……………と、シャッターを開ける。

「え……………？」

そして、あるはずの無いソレが、俺を出迎えた。

「……………お前、プレシアの庭園に捨てていっただろ」

何種類かの機械油と、ガソリンの匂い。

「ガソリンエンジン……………前々から興味があったから、勝手に回収させてもらった」

既に型遅れの、古臭い車体。

「……………なかなか、興味深い研究材料だった」

度重なる酷使によりやつれた、漆黒のフルカウル。

イグニッションに刺さったままのキーには、見覚えのあるキーホルダー。

間違いない。

「……………俺のバイク」

虚数空間に消えたと思っていたけど……………拾っていてくれたのか。

「もう調べつくしたから、返す」

「……………さんきゅー。マリー」

親しみを込めて、エイミィと同じ愛称で呼ぶ。

「ん」

拒否は、されなかった。

ふいつと踵を返し席に戻り、かちゃかちゃかちゃかちゃ……と、猛烈な勢いで打鍵していく。

「……こうなったら、三日は動かないんだよね。帰ろうか？」

「ああ。……マリー」

どうせ聞いてはいないだろうが、それでも言っておこう。

「バイク、ありがとな。それと……俺のデバイス、よろしく頼む」

「……ん」

ひらひらと、『さっさと帰れ』とばかりに手を振る。

苦笑しつつ、ガレージからバイクを引っ張り出した。

「……さーて、帰るとしますか。」

「ヤバイ。」

来た時の数十倍、注目されてる。

「……ぷくくくっ」

「笑うな」

俺は……バイクをがらごろ押しながら、支部の廊下を歩くと
いう前代未聞の行動を取っていた。

「……しょうがないだろ。トランスポートまで、道はここしか無い
んだから」

「ふふ、でも、すっごい目立ってるし……！』『……王』に、また一
つ伝説が増えちゃった」

ん？ 今、なんだった？ 笑い声で、聞き取れなかった。
「エイミイ、今なんて……？」

ビーツ、ビーツ！！

響き渡る警報。アースラと同じく、これは……

「緊急事態！？」

第四十三話（後書き）

次回は……！ 次回こそ、早めの投稿を……！

第四十四話（前書き）

ある意味クロノ回です。

いやー、プロットが無いと大変です。

第四十四話

ピーッ！ ピーッ！！

「これは……！？」

一ヶ月ぶりに感じる、緊迫した空気。

周囲でくつろいでいた局員達が、一斉に駆け出していく。

「緊急警報！？」

まさか………まさか！

「ああ、くそつ。こんな時に………！」

彼らの後を追う形で、私もその場から駆け出した。

「リンディさん！」

ブリッジの扉を開け、入る。

リンディさんは、すっかり戦闘モードになった表情で、私を見据えた。

「なのはさん。あなたには、医務室での安静を命じていたはずですよ。開口一番、そう切り出した。」

「……………」

ぎりつ………と、一瞬だけカツとなり、歯を食いしばる。

なんとか理性で爆発を防ぎ………心を落ち着けた。

「即刻、ブリッジから出て行きなさい。ここは、戦えない者がいる場所ではありません」

厳しい………時空管理局の責任を、認識した目。

リンディさんだって、何も私を邪魔者扱いしているわけじゃない。私の体調と……これ以上、非日常へと関わらせまいとする、優しさからの対応だろう。

でも、だからこそ………

「お断りします」

それを、真正面から見返す。突っぱねる。

「回復し、戦線に復帰した時のことを考えてください。守護騎士達の戦闘を見ておくことは、後の戦闘を有利に運ぶことに繋がる筈です」

「戦線に復帰って……………本気なの？」

「はい」

……………非日常、上等。

最初から最後まで……………しっかりと関わり抜くつもりで、ここにいるんだから。

「……………それは、秀人君に止められてでも、曲げないつもり？」

……………確かに、秀人さんなら渋るだろう。過保護なあの人のことだ。自分ひとりで、勝手に背負い込んで片をつけようとするに違いない。でも、私がやると言えば……………

「秀人さんなら、止めません」

最後には納得して、一緒に戦ってくれる。

「……………わかりました。許可しましょう」

リンディさんは、そう言って許可を出した。

「ありがとうございます」

さて……………現地の様子はどうなんだろうか。

前回の戦闘では、何もできないまま終わっちゃったから……………今回は、しっかりと目に焼き付けておこう。

「映像、出ます！」

オペレーターの一人が声を張り上げる。

ブンッ……………

ブリッジ内に巨大なモニターが表示され、現地の様子が映し出された。

クロノが率いる、アースラ武装隊。

彼らに円状に囲まれ……全く怯む気配さえ見せない、二人の人物。

一人は、片刃剣を佩いた紫色の鎧を着込んだ……多分、女性。

もう一人は、群青色の鎧越しにもわかる屈強な肉体をした、男性。

二人は背中を合わせ、包囲の輪を観察している。

「……あれが、守護騎士」

画面越しにも、びりびりと威圧感を感じる。

私が相手にしていた雑魚騎士なんて、比較するのもおこがましい程だ。

「あれが……！」

思わず、握る手に力が加わる。

秀人さんが引き分けたのとは、違う個体らしいけど……それでもあいつらは、憎い仇だ。

「……くそっ」

こんな時に、見ていることしかできないなんて……！

でも、見ていることしか出来ないなら……思う存分、目に焼き付けてやる。

何か、掴むことができるはずだ。

『時空管理局執務官、クロノ・ハラウンだ。君たちには、傷害および、殺人未遂の容疑が掛けられている。武器を捨てて、投降すれば……』

その、言葉の途中に……

『ぐあっ……！』

群青の守護騎士が、かなりの速度で局員の一人に接近し、拳を振るった。

ただの拳。魔法陣の展開も無かったはずのソレは、局員が咄嗟に張った防御を易々と貫き、沈めた。

『攻撃、開始!』

クロノの号令の元、大量の射撃魔法が守護騎士たちに襲い掛かる。
バツ!!!

青騎士が、両腕を広げる。

展開するのは……………三角形の魔法陣。

「何、あの術式……………」

魔法文字も、私達が使うものとは全く違う。

『……………』
そして、動こうとしていなかった紫騎士が剣を抜く。

『……………!』

それを、クロノに振るう!

『くっ!!!』

ガギイイインツ!!!

クロノは、プロテクションを展開して……………え、受け止めた?

「何で……………?」

どう考えたって、あそこは回避する場面だ。

続いて、青騎士も三角形の魔法陣を展開し……………

ズバババババババツ!!!

杭状の魔力弾を、大量に射出した。

確かに、凄い弾幕だけど……………速度は、私のアクセルシューター以上、フェイトのフォトンランサー以下……………くらいかな。

クロノなら、余裕で……………

『……………!』

あ、あれ……………?

どうして、また防御魔法を展開するの……………?

『おおおおっ!』

そして、そのまま弾幕に向かって、真正面から突っ込んでいった!
『ク、クロノ執務官!?!』

回避を選んだ局員が、愕然としている。

「、馬鹿！」

わざわざ、敵の弾幕に突っ込んでいくなんて……！
私や、秀人さんくらいの魔力があれば無理じゃないけど……クロ
ノの魔力じゃ、自殺行為にしかない！

バキンッ、バゴッ……！！

クロノのバリアジャケットを、容赦なく削っていく。

ビシュッ！

防御を突き抜けた一発が、クロノの額を掠める。危ない……あと
少しで、目を潰されていた。

「はああっ！！！」

失明のリスクを払ってまで詰めた距離。

「馬鹿、あの馬鹿……！ 何してるのよ……！」

あんな、接近戦の鬼みたいな敵に、ダメージを負ってまで接近す
るなんて……！！

「おおおおっ！」

決死の突貫も、ブレイクインパルスも……

「……」

バキイイイインッ！！

青騎士の防御に、呆気なく吹き散らされる。

「……！！！」

青騎士が、防御を解除して拳を振るう。

近距離バインドをするには、絶好の好機。けど……

「っ、おおおおっ！」

クロノは、魔力で強化した自分の拳を撃ち合わせた。

「っく！」

だが、青騎士の方が威力で勝り、クロノは拳から出血する。

「……」

ブオンッ！！

紫騎士の剣。

『ああああっ！！』

それを、武器としての強度に欠けるS2Uで、わざわざ受け止めた。

「どうしちゃったの、クロノ……？」

クロノは、冷静な戦闘が出来ていない。

あれだけ口を酸っぱくして、私達の戦い方に口出ししていたクロノが……まるで、当の私達のような戦い方をしている。

得意のバインドも、誘導射撃魔法もまともに使わず……不得意な体術と、ダメージ無視の突貫戦法。

「クロノ……！」

ダメだ、このままじゃ……！

守護騎士達の攻撃は、緻密に計算されたロボットのようには正確で、隙が無い。

更に……

『ア……』

『オオオ……』

『アアアア……』

わらわらと……雑魚騎士まで沸いてきた。

かなりの数だ。私が潰した時の、数倍の数は確認できる。

『な、何だこいつら……！』

『くそつ、どけー！ クロノ執務官が……！』

……同員達は雑魚騎士の数に押され、クロノの救援に向かえない。指揮官が冷静さを欠いている現状、戦列は意味を成していない……ただの烏合の衆に成り下がっている。

「まずいわね……」

「……このままじゃ」

全滅。

そんな、不吉な言葉がよぎり……いてもたっても、いられなくな

った。

ガンッ！

椅子の背を蹴飛ばす。

「な、何ですかあ……！？」

座っていた、エイミイの代理を務めるオペレーターに命令する。

「通信繋いで！」

「は、はあ……？」

ぼかん、とボケた返事を返すオペレーターの胸倉を掴み上げ、至近距離で睨みつける！

「早くしろオ！」

「ヒイツ……！ は、はいいつ……！」

……よほど凄い顔をしていたらしい。恐怖に顔を引きつらせながら、命令に従った。

「つ、繋がりましたあッ……！！！」

涙目で報告してきた。

「ご苦労！」

「ひいつ！」

インカムをむしり取る！

今の私に出来るのは……この程度！

「なのはさん、あなた何を……！」

リンディさんを無視して、思いっきり息を吸い込み……！

「クロノオオオオオオオオオオッ……！」

大声で、現場に怒声を送る！

『クロノオオオオオオオオオッ!!』

唐突な声に、クロノは、今しがた打ち込もうとしていたS2Uを取り落とした。

「な、何だ!? 君か、なのは!？」

慌てて後退し、魔力弾をやり過ぎす。

『何やってるの!? そんな、らしくない戦い方して!』

「……………」

クロノはその言葉に、ぐっと歯を食いしばった。

『クロノの戦い方は、そんなのじゃないでしょ!? さっきから、

何を……………!?!』

そんなの。

彼女が言う、『そんなの』とは……………

力には力。敵に真正面から挑んでいく戦い方。

魔力の少ない自分には、致命的に合わない戦い方。

吾妻秀人、高町なのはのような、魔力に恵まれた人間にしか出来ない戦い方。

「うるさい!」

クロノは思わず、そう叫んでいた。

『な……………!』

通信の向こうで、なのはが息を呑む。

「……………口出しを、するな!」

(僕はやれる! 少ない魔力でも、平均以下の体格でも……………!)
それは、不安。

AAA+認定を受けてはいるものの、運用技術によるものが大き

いクロノにとって……絶対的な魔力の少なさというのは、後ろ暗いものがあった。

（彼らと、共に戦える！）

周囲にいる仲間も、誰も彼も、才能に溢れ、努力が成果として結実し、今も尚成長を続ける、真の一流。今、自分に怒声を送るなのはと……幾度と無く共闘した秀人は、その最もたるものだった。

自分は、彼らと肩を並べるに値するのだろうか？

それが、クロノが抱く不安の正体だった。

自分には、高町なののような、圧倒的威力の砲撃魔法は放てない。

自分には、吾妻秀人の身体のような、強力な資質は備わっていない。

自分には、フェイト・テストロッサのような、見失いそうになるほどの機動力は無い。

自分には。

自分には。

自分には、何があるのだろうか。

それは、劣等感、と言い換えてもいいかもしれない。

（僕は、やれる……！　なのは、秀人と同じように……力で、敵を打ち倒せる！）

だから、このような暴挙に走った。

周囲に……そして、自らに認めさせるために。

「戦闘は、問題なく続行できている！　君は、引っ込んでいろ！」

『ちゃんと目の前を見て！ クロノの目の前で、何が起こっているのか、ちゃんと見て！！』

なのはの、必死の説得。

だがそれも、頭に血が上ったクロノには届かない。

「目の前……？ そんなの、守護騎士が二体だ！ それ以外に、何が……！」

ビキツ……と、通信に奇妙なノイズが走った。それが、なのはがインカムを握り潰し掛けた音だとは、クロノに気付く由は無かったが……彼女の怒りが頂点に達したということだけは、理解できた。

『クロノ……あなたの敵は、守護騎士だけ……？』

静かな……氷のように、静かな声。

『あなたの仲間は、今どうなっているの……？』

「あ……」

それが、文字通り、クロノに冷や水をぶっ掛けた。

「……！」

クロノは、今になってようやく、自身の置かれた状況を振り返った。

見ることさえ忘れていた、オペレーターからの現状報告を、目の前に表示させる。

敵勢力、増大。いずれも、C〜Bランク。

武装隊、三割が戦闘不能。

「僕は……！」

自分の馬鹿さ加減に、ようやく思い至った。

そしてそのツケが、今頃、このタイミングで回ってきた。

バキインッ……！！

「……！ し、しまった！」

両腕を拘束する、青白いバインド。

見れば、青騎士が魔法陣を展開していた。

そんな初歩的な見落としをするほど、我を失っていた。

「……！」

そして、紫騎士が迫る。

解除は、間に合わない。

「……」

そう悟った瞬間、クロノの内心は、驚くほどに冷静……いや、諦めで満ちていた。

(……駄目だった)

圧倒的な諦観の念が、クロノの全身から抵抗する気力を奪い去る。

(僕は、秀人のようには戦えなかった)

自分の力は、ここ止まりだった。

秀人と肩を並べて戦うなど……土台、無理な話だったのだ……と。

(執務官……魔導師としても、僕はこの程度だった)

オペレーターからの情報を見逃し、増援にも気付かず、ただ不利な状況だけを、作り出してしまった。

自分の無意味な意地で、指揮すべき、守るべき仲間を危険に晒してしまった。

ゆつくりと、スローモーションのように映る景色の中、凶悪なまでに鋭い刃が、真っ直ぐに振り上げられていた。

あの剣を頭に受ければ、死ぬだろう。

「……ははっ」

その事実とは裏腹に、自虐的な笑みが零れた。

(……………受け入れよう)

この愚か者を断罪してくれるのなら、何でもいいと。
目を閉じようとさえ、考えていた。

『結界前方に、転送ポート開きます！　これは……………地球支部からの……………』
オペレーターのような報告も、もはや耳を素通りする。

……………オオオオオオオ……………！！

「……………？　これは……………」

特徴的な、何度も耳にした音。

「まさか……………！」

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！

内燃機関の、爆発音！

「うおりゃああああああああああああつ……………！！！！！！」

黒塗りの二輪に跨り、凄まじい速度で突っ込んでくる！！

ドガッ、ガギャッ……………！！

「ア……………！！」「アギャッ……………！！」

局員達に迫る雑魚騎士たちを、猛烈な勢いで跳ね飛ばしながら！
鎧袖一触という言葉を具現化したように、一直線に障害物を跳ね
除けるその姿。

窮地に立たされ、生傷を増やし続けていた局員達の表情が一変。

「うおおお！　増援だ！！」

「しかも、よりもよってお前かよ！」

「執務官を頼んだぞ！」

驚きと、喜びが入り混じった声援を受けつつ、秀人のバイクが疾走する。

『秀人さん！？』

アースラから、なのはが驚く声が聞こえた。

「……………！」

紫騎士が驚き、身を引こうとするより早く……………

ズガシャアッ！！

「……………！！！」

真正面から、微塵も減速せずに衝突した！

バイクの外装の欠片を撒き散らしながら、紫騎士が投石器で放られたように吹き飛ばす！

がりがり、鎧と地面が火花を散らす。体勢を立て直そうとするところに、更に……………

ベギッ、ゴギヤッ……………！！

追撃の、轢殺攻撃！

「……………！！……………！！！」

更に激しく転がり、

ドゴオンッ……………！！

電柱に背中から激突し、海老反りになり止まった。

右腕にありえない関節が追加されて尚、剣を手放さないその戦意は敬意に値するが……………

「ふんッ！！！」

急制動によるジャックナイフで後輪を浮かし……………

ドズンッ!!

操縦者含め、300kg近い重量のほぼ全てを乗せた後輪で、紫騎士の兜を踏み潰した。

「……………!!」

ビクンッ! と痙攣し……………動かなくなる。

兜が大きく罅割れ、手足が変な軌道を描き……………見た目は轢殺死体そのものだった。

「え、えげつねえ……………!!」

「うえ……………!!」

「……………かわいそう」

局員が言った通り……………もはや、哀れにさえ思えるほどだった。

「……………」

まとわり付く闇が、紫騎士の傷を修復し始める。

一体きりとなった青騎士は、それを一顧だにせず構えを取った。

「……………、今だ、掛かれ!!」

それを攻め時と見た局員達が、一気呵成に攻撃に転じる。

「……………」

戦闘音をよそにバイクを降りた秀人が、険しい顔でクロノに歩み寄ってくる。

「……………」

クロノはそれを、死んだ魚のような目でぼうつと見ていた。

「クロノ……………」

劣わるように、両肩に手が乗せられる。そして……………

「歯ア食いしばれッッ!!」

「ゴギンツッ!!」

……渾身のヘッドバットが、クロノの前頭部に直撃した。

「くあああッ……………!!」

頭を押さえ悶絶するクロノ。

「な、何をする!」

若干、目に光が戻ったクロノが秀人を睨みつける。

「目、覚めたかよ」

「……………! ああ、不本意ながらな!」

少なくとも、活力は戻ったらしい。

だがすぐに、肩を落としてしまう。

「……………僕には、無理だった。君のように戦うのは」

「……………は?」

呆気にとられる秀人を無視し、続ける。

「君たちのように、才能が無い僕には……………」

ぐずぐずと、拭えぬ劣等感が口をつく。

秀人は、ぽりぽりと頭を掻き、うーん、と悩ましく唸り、言う。

「そんなことで、悩んでたのか」

かっ頭血が上る。

「ああ、そうさ! 君にとっては、そんなことだろう! 魔力の大

小、才能の有無なんてことは!」

クロノは、自分の言葉に反吐が出る思いだった。

醜い劣等感を言葉にして、妬む相手に八つ当たりするなど……………人

間として、恥ずべき行為だ。

だが、止められない。

「魔力の大小、才能の有無が、本当に力の全てなのか?」

「……………全てではないにせよ、かなりの要素だろう!」

聞き分けの無い弟を諭す兄のように、諭す。

「お前、前に言ってたよな。少ない魔力、乏しい才能を努力で補っ

て、AAA+認定を受けたって」

「あ、ああ……」

劣等感が疼き口ごもるクロノに、秀人が言った。

「魔力量っていうハンデがあつて、才能が乏しいってことも分かつて……でも、お前は努力を怠らなかつた。諦めなかつた。」

それは、何のためだ？」

「……………」

クロノは、あの夜のことを思い出す。

あの夜……父が殉職した日の夜。

常に笑顔を絶やさない母が、誇りある時空管理局の提督が、背中を丸めて泣いていた。

いつも自分を背負ってくれる大きな背中が、妙に小さく見えて。

その涙を止められない自分の無力が、本当に悔しくて。

その涙を止めたいと……止められるだけの力が欲しいと、確かに願った。

それが、クロノ・ハラオウンという魔導師の原点。

今の生き方を決めた、始まりの夜。

「でも、まだ僕は……弱いままだ」

「……………なあ、クロノ」

そこまで聞いた秀人が、半笑いで言う。

「お前、結構バカだろ？」

本気の本気で、バカを見るような目だった。

「な……何だと!？」

怒るクロノに、秀人はやれやれ、と首を横に振る。

「母親の悲しむ顔が見たくないなんて理由で、才能が無い分野に飛び込んで……それで、執務官にまでなっちまうんだもんなあ……苔の一念、岩をも通す、と言うか……」
でも、と前置きし、言った。

「努力だけで執務官にまでなれたなら……それは、立派な『才能』じゃないか」

はっと、雷に打たれたように我に帰り、秀人と目を合わせる。

「実際、俺となのはは、何度かお前に模擬戦で負けてるんだぜ？」
それもまた、事実だった。

二人の能力検定試験の際、秀人とは引き分け。なのはに至っては、絡め手に引っかけりノックアウトされていた。

「お前に才能が無いなんて言われたら、俺らは立つ瀬がねーよ」
からからと快活に笑い、ぽん、と軽く、しかし力強く、クロノの肩に手を置く。

「胸を張れ、クロノ！」

お前は強い！

俺が、なのはが……アースラの皆が、保証してやる！」

クロノは、ぽつんと立ち尽くし、秀人の言葉を反芻する。

お前は強い！

「そんな、ただの気休めが……」

だがクロノは、自分の中から、劣等感が拭われていくのを確かに感じ取っていた。

「気休め、が……………」

ぼたぼたと、地面に水滴が落ちる。

「つく、う、うつつ……………!!」

自分は、なんと些細な事で悩んでいたのだろうか。

秀人は何も言わず、ただクロノを見つめる。

お前は強い！

その、たった一言が、無責任な一言が……………。今までの実った努力も、実らなかった努力も…………『力が欲しい』という想いの全てを、肯定してくれた。

自分が力を求めたのは、何の為か。

誰かに認めてもらうためか？

地位を築くためか？

いいや、違った筈だ。

「僕は……………」

誰かの涙を止めたくて…………その『誰か』の対象が、徐々に広がって…………彼らを、この手で守りたかったのだ。

それを守るならば…………自分の魔力や才能なんて、些細なことではないか。

それらはあくまで手段の一つであり…………目標では、無いのだから。

胸を張れ！

「ふん……………」

ぐいっと、目元を袖で乱暴に拭う。

僅かに充血した目。

「行くぞ、クロノ！」

「ああ、秀人！」

二人の魔導師は肩を並べ……敵の懐へ、飛び込んでいった。

第四十四話（後書き）

最近、あまりラノベとか読めません、、、時間が欲しいです。一週間くらい。

第四十五話（前書き）

NSRのセンターシールが抜けた、
、
とうとうこの時が、
、
泣
（

第四十五話

嫌な予感がした。

「……………!？」

いや、予感なんて、漠然としたものじゃない。
はつきりと……………嫌な感触が、私の体をぬるりと撫でた。

「姐さん？ どうしたの？」

私の膝の上に頭を乗せ、ごろごろと寝そべっていた美香が顔を上げる。

「ごめん、ちよつと待って……………」

これは……………守護騎士からのフィードバック？

今日、狩りに向かわせたのは、『鉄槌』と、『湖』だったわけ。

「ん……………!」

意識を集中し、二人の視界情報を覗き見る。

『湖』は、無事だ。超至近距離からの攻撃を喰らい、完全にノックアウトされている。

闇の中に回収……………完了。

じゃあ、『鉄槌』は……………？

「……………嘘」

……………反応が、無い。

「嘘……………嘘よ」

守護騎士と私は、強固な契約の鎖で結ばれている。

『湖』のように、たとえ戦闘不能になっても、ある程度の操作は可能だ。

だけど、『鉄槌』からの反応が、これっぽっちも無い。それは、つまり……………戦闘不能以上の要因で、私とのリンクが断ち切られたということだ。

闇の呪縛は、一般的な解呪の魔法如きでは軋みもしない。

「ただ、一番簡単な方法がある。それは……」

「……っ！」

「うきゃっ……！ あ、姐さん！？ どうしたの！？」

美香をベッドに投げ、窓の外へ飛び出した。

そう、それは……

守護騎士が、殺されるということ。

「無い……そんなこと、絶対に無い！！」

スレイプニルにありつただけの魔力を注ぎ込み、空を翔る。

私の魔力を分け与えた、私の分身が……そんな簡単に、やられるもんか！

そして、しばらく飛んで……結界があった地点へ、到着した。

周辺に、戦闘痕は無い……って、当然か。結界の中で戦ったんだ。

「……よし」

「……うん、まだ残ってる。」

「結界、修復」

……。

了解。その声と共に、周囲に薄い帳が下りる。

そして現れたのは、ボロボロに荒廃した住宅街だった。

「……」

ざくざくと砂利を踏みしめ、最後に『鉄槌』の反応があった地点に向かう。

確か、最後に見た光景は……

「何だったのよ、あのでっかいトリは……」

青く燃え盛る、巨大な怪鳥。

あんな巨大な魔力の塊、私でも作り出して、操作できるかどうか……それに、使用者の男の意思とは違う、独自の意思を持ち合わせて

いるようにも見えた。

……、……。

「わかってるよ」

考察は後回し、だよね。

そして、その地点に到着した。

「……………いない」

何も無かった。

挟り取られ、高熱でガラス状に溶かされていて、道路も、家も……

…………… 『鉄槌』の反応も、何も。

「……………いない」

ずしゃっ……………と、砂利に膝をついた。

現実的に考えて……………その可能性は大いにあっただけど……………本心では、認めたくなかった。

でも……………もう、認めるしかない。

「『鉄槌』、死んじゃったんだ……………」

完膚なきまでに敗北し。

再生も不可能なレベルにまで、消滅してしまったんだ。

言葉にした瞬間、

「う……………！」

ぼろぼろと、自分でも戸惑う程の涙が、両目から溢れてきた。

「う……………！！！」

ぎゅゅつと目を閉じ、歯を食いしばっても、止まらなかった。

わけがわからない。

私にとっての守護騎士は、ただの道具。

最強の殲滅魔法を完成させるための、ただの駒。

それだけのはずだったのに。

「……………!!」

……言葉にならない絶叫が、響き渡った。

「……………」

散々泣き喚いて……泣き疲れて眠って……いつの間にか、日が変わっていた。

「……………」

直接地面に寝転び、ぼうっと薄紫の空を見上げる。

……自分でも、驚いた。

まだ私に、誰かの死を悲しむだけの良心が残っていたなんて。

「認めるしかない、か……………」

私にとっての守護騎士は、道具で、駒で……………大事な、
、
だったのだろう

歪んだ感情だということ、自分でもわかる。

当の本人達のことを無視した、勝手な思い込みに過ぎない。

もしも守護騎士達に感情が残っていたら、『はあ?』と呆れ返るに違いない。

でも、知ったことじゃない。私がそうと決めたのなら、そうだ。

「はああああ……………」

津波の前兆のように、すーすーと心が穏やかになっていく。そして……………

「……………があああああああああああああッ!……………」

バゴオオオオンッ……！！

爆ぜる程の魔力と……極大の憎悪と殺意が、全身を支配した。

「あんの……クソガキがああああああああああ！！」

最後に映っていた、若い男。顔は覚えた。
アイツだ。アイツが『鉄槌』を殺した！

バサアッ……
スレイプニルが、半ば無意識に羽ばたく。
憎い仇を、探し当てると。
五体を引き裂いて、地獄の釜に放り込めと。

「……ブチッ殺してやるッ！！ 細胞単位までバラバラにして……
酸で永遠に溶かし続けてやるッ！！」

……言われるまでもない。
あの男だけは……、この手で直々に！！

「ふんぬっ！！」
ガキイインッ！！

紫騎士の片刃剣と、俺の魔力刃が衝突し、甲高い音を立てる。
「ぬぐぐぐぐっ……！！」
膂力は、ほぼ互角。

『Blaze Cannon』！
ガオンッ！！

すかさず、クロノのカットが入った。

「……っしー!!」

パァンッ!!

足元にインパクトを発動し、跳ぶ!

「……!!」

なぜか、紫騎士もそれに合わせて後退した。

こりゃ、またあの攻撃が来る!

「避ける!!」

「言われなくても!!!!」

ズバババババツ!!

杭状魔力弾の掃射を、バック転で回避する!

今度は、クロノも回避を選んだ。

だが、逃げた先には……!!

「アァア……!!」

雑魚騎士の集団!

「ああもう、邪魔くせえ!!」

インパクトウォール!!

ゴババババツ!!

纏めて薙ぎ払って一掃……!!

「……!!」

ブォンッ!!

「うおおっ!!」

頭ストレスを、片刃剣が切り裂いた!

ちゅいんっ、と髪の毛が一房、宙に舞う。

「この歳でハゲたらどうしてくれんだオラァ!!」

インパクト!!

ドパァンッ!!

紫騎士の体勢を崩し、

「おりゃああっ!!」

防御魔法……間に合わない！ 両腕を体の前で交差して、衝撃に備える！

「ぐあつ……！！」

「ぐあつ……！！」

交差させた腕が、纏めてヘシ折れ……いや、砕けた。完全に感覚が消失し、防御する能力が失われる。

「ぐつ………がつ………！！」

勢いのまま、景色が凄まじい勢いでスクロールしていく。

そして、相対速度が無くなったことで、ようやく俺は侵入者の全容を見ることが出来た。

漆黒の翼。漆黒の装束。そして……白銀に輝く長髪。

「誰だ、てめえツ………！！」

俺の問いに、侵入者の女は……にイ、と、邪悪に笑った。

再び、女は拳を振り上げ………って、マズい！ 両腕、使えね………！！

「はあああああつ………！！」

防御、間に合えツ………！！

バキイイインンツ………！！

………防御も何も、あったもんじゃない。

殴り飛ばされた拳句、ビルを三つも四つもぶち抜き、地面に背中から叩きつけられた。

「………いつ………てえ」

主に、地面で摩り下ろされた背中がずきずき痛む。

「ドラゴンボールじゃあるまいし………」

軽口が出せる程度には、重症では無いらしい。

「チツ………これで死なないとか………どんな身体してんのよ」

未だ膨大な魔力を秘めたままの手をぶらぶらとスナップさせ、しかめつつらを作る。

「まあいいわ……これで死なれちゃ、面白みが無いし」
傲然と言い放ち、歯をむき出して獰猛に笑う。

「アンタに殺られた『鉄槌』の痛み………一億倍にして返してやるッ!!」

「ナイトメア……!!」

その黒装束から、何の前兆も無しに、デイバインバスター並の砲撃が迸る!

「うおおおっ!!」

死ぬ気で体を動かし、インパクトで自分の身体を弾き飛ばす!

ズゴオオオオッ!!

着弾地点を、容赦なく消し飛ばした。

一切のタイムラグ無しで、あれだけの威力を………なんて滅茶苦茶な……!!

飛行魔法を行使。上空の女に肉薄し、拳を………!

バスッ………!

俺の拳は、女が軽く差し出した掌に、あっさりと受け止められた。

何だ、今の感触………!?

ただのパンチじゃない。インパクトとバレットを付与した、破壊力の塊だぞ!? その纏わせた魔法が、あっさりと散らされた!

それに………

「くっ………!!」

何て握力! 抜け出せない!

「………」

俺の抵抗を嘲笑うかのように、急激に温度が上昇していく！

「はい、右手もーらい」

そしてそんな、軽い調子の言葉を合図に、

ボンッ………！

「………！」

………右手が、爆ぜた。

五指が炭化し、ボロッ………と落ちる。

「があ………！」

痛みで飛びそうになる意識を、根性でつなぎ止める。

………何せ、右手首が吹っ飛ぶのは二回目だからな。

「秀人！」

クロノが、誘導弾をいくつも放ちながら追いついてきた。

槍のように構えたS2Uに、ブレイクインパルスを纏わせながら…

…！

「駄目だ、来るな！！」

そのまま突っ込んだら、コイツの思うツボだ！

バスバスバスバス………！！

やはりと言うべきか。

誘導弾は、女の体表に触れた瞬間に四散してしまった。

「離れると………！」

S2Uを、女に繰り出す！

バシユンツ……！

やはり、四散。

S2Uを繰り出すも弾かれ、あのノーモーション砲撃が放たれる！

『Protection!』

バチイイインツ!!

俺とクロノ、二枚重ねの防御魔法が軋み、たわみ……

バキンツ……！

砕けた。

二人揃って地面にたたき付けられる。

「ひやはははは……どうした？本気出せよ」

上空から俺達を見下ろす女が、余裕の嘲笑を浮かべ、言う。
本気？

「そんなもん、さつきから思う存分出しとるわ！」

女は、つまらなさそうに鼻を鳴らした。

「焰の鳥」

……あ。

「……忘れたとは言わせないよ。あんたが、私の『鉄槌』を殺したんだ……！」

あの不死鳥のことは、クロノにも話していない。知っているのは、俺と、あのチビ騎士くらい……

「お前、まさか……!?!?」

俺の問い掛けに、女は再び残忍な笑いを浮かべた。

ざっ。

ざっ。

その両脇に、紫騎士と青騎士が侍る。

「……私が、守護騎士を束ねる主にして、闇の書の主……」

恭しい一礼と共に、名乗りを上げる。

「『闇統べる王』」

第四十五話（後書き）

今現在、プロットと本文が同時進行するという意味不明の事態に陥っております。

なので、少しばかり矛盾点が出てしまつかもしれませんが、ご容赦ください。

第四十六話（前書き）

金曜日の新人研修会に遅刻してしまったわ！

上司が「今日は直帰でいいけど、月曜日に事情聞かせてね」です
って！

うふふふふ、もうどうにでもなれ

ハハッ、ワロス、、ワロス、、ort

第四十六話

私は、モニターに映る人物に目を奪われていた。

くすんだように光沢の無い銀髪。

退廃した雰囲気、左右非対称の黒い装束。

色彩が抜け落ちたような全身像の中……毒々しい、血のような紅い瞳と、同色のアクセント。

「あいつが……」

闇の書の、主。

何て、禍々しい魔力……

「……リアルタイム映像を、無限書庫のユーノ司書の元へ」

「了解」

知らず知らず、冷や汗をかいていた。

「なのはさん、」

プレシアのように、気が振れているわけじゃない。

ごく自然に、呼吸をするように……殺気を振りまいているんだ。

モニターから、あの紅い瞳から、目が離せない。

身体感覚がおかしくなり、五感のうち視覚だけが鋭敏に研ぎ澄まされ、瞬きもせず、じっと、じっと……

「なのはさんっ!」

……ッ!?

「あ……」

私、今……?

夢から覚めたように、身体感覚が戻ってきた。

「吞まれたらダメよ」

「は、はい……」

しまった……無意識のうちに、引き込まれそうになっていた。
ぱんっ！

自分の頬を張り、痛みで気合を入れる。

……ちゃんと、しっかりと見るんだ。動きのクセや、特徴……弱点を。あの膨大な魔力を持つ敵を切り崩すには、真正面から無策に挑むのは馬鹿のすることだ。

ただ……その弱点があるのかどうかは、疑わしい。

一見、バリアジャケットに見える装束。

だけど、さつき秀人さんにノーモーション砲撃を放った際、あの黒い装束から滲み出すように、魔法文字がちよろつと見えた。

つまりあれは、魔法そのものが服の形をしているのだろう。それも、文字で真っ黒に染まるほどの、膨大な術式の塊。

私が真似をしたら、一分も持たずにガス欠を起こす。

規格外の魔力と、それを完璧に御する能力。

以前クロノのやつが、私たちのことを『化け物』呼ばわりしたことがあったけど……あいつは、正真正銘の怪物だ。

「秀人さん……」

……疑っているわけじゃない。でも、心配で、心配で……思わず、口をついてしまった。

でも、私には心配する資格は無い。あんな馬鹿な真似さえしなれば……今頃、秀人さんと一緒に戦えていたんだから……

「ちくしょう……」

魔力を失った今の私は、ただの無力な子供に過ぎない。
モニター越しの戦場が、いやに遠かった。

……力が欲しい。

心の底から、そう思った。

「……で、その王様が何の用だ？」
軽口を叩いて、探りを入れる。

「……」
ギロリと、殺気を湛えた瞳で睨み返された。
がつん、と、網膜を通じて脳を揺さぶられる。

「くっ……!!」

……唇を噛んで、それに耐えた。

横を見れば、クロノもまた、S2Uを握る手が強張っている。

「敵討ち、って、言わなかった……?」

そういえば、テツツイがどうのこうの、言っていたような気が……

テツツイ……鉄鎚?

鎚って、ハンマー…………あ!

チビ騎士のことか!

「思い出したみたいね」

「……ああ」

居心地が悪い。敵だったとはいえ、あの状況では間違いなく……

「……返り討ちにしてやったぜ?」

あえて、軽口で返してみた。

ギョドンッ!!

「うおっ!!」

一抱えほどもある魔力弾が、飛び退った俺達の足元に着弾した!
いちいち威力にビビッてる暇は無い!

とにかく、攻撃だ!

足元をインパクトで弾き飛ばし、『王』に肉薄!!

ガキイイインッ!!

青騎士の張ったシールドがソレを阻む。

「……リアクティブ・アーマー!!」

バゴオオオンッ!!

「バリアごと、青騎士を吹っ飛ばす！」

「……………」
紫騎士は無感動に、剣を俺の首に振り下ろしてきた。

パンッ！！

前面にインパクトを発生させ、回避。

「死ねッ！！」

同時、『王』のノーモーション砲撃。

クロノがバインドで俺の腕を絡め取り、射線上から引きずり上げた。

「フランメ・シユラークッ！！」

ゴウッ！！ と、黒い炎を纏った拳が迫る。

「インパクトッ！！」

それを、同じくインパクトを纏った拳で迎撃。

じりじりと拮抗し……………にやあ、と『王』が笑う。

「ひやはっ……………死ねエツ！！」

その黒い装束から、紅い短剣が無数に出現した！

ヤバイ、この至近距離じゃ……………！！

咄嗟にインパクトを解除し、身体を丸める！

ドドドドドッ！！

……………！！

一発、二発、三発……………！！

致命傷を避けつつ、魔力で補強したジャケットで受ける。

さすがは管理局の訓練服だ。もともと、頑丈な繊維を格子状に編みこんでいるおかげで、軽量かつ強靱。少し魔力を通しただけで、かなりの防御力になってくれた。

「つてええ……………！！」

……………それでも、衝撃までは殺せなかった。ついでに何本か、腕に刺さったままだ。

「……………そういや、初めてかもな。敵が連携して襲ってくるのは」

「確かにそうだな」

いつもいつも、単独か、烏合の衆かの両極端しか無かった。

「くひひひひつ……！ 楽しい楽しい………こんなに遊んでも壊れない玩具、初めてだ……！」

嗜虐的な笑みを浮かべ、ぎゅっばぎゅっばと両手を開いたり閉じたりと、抑えきれない喜悦が漏れ出している。

「……言ってる」

タイプ的には、『王』はオールラウンダー。ほぼ全距離に対応できる万能型。

「………」

紫騎士は近接特化型。遠距離攻撃もできるのだが、使おうとしている様子は無い。

「………」

青騎士は防御・拘束の支援をメインに、肉弾戦が主な戦い方。要は、アルフとユーノを足して二で割ったような奴。

攻撃・防御を紫騎士・青騎士で分担し、どうしても出来てしまう隙を『王』が埋める。

単純だが、隙の無い布陣。

さすがに、三対二じゃ分が悪い。

「さあ、次はどうするのかな………!?!」

『王』の瞳が妖しく輝くのと同時、

ゾゾゾゾゾツ………!!

………という理屈かは知らんが、奴の周囲にあった平面の影が、Z軸を与えられたかのように立体的に浮かび上がり、刃を象った。

「な、何だありや………!?!」

魔法………と呼ぶには、あまりにも異質な力だ。

「………恐らくは、魔法なのだろう。あんな怪奇な術式、見たことも聞いたことも無いがな」

「………せめて、ユーノがいてくれたらなあ」

何か、的確なアドバイスなり対処なり、対策を立ててくれただろ
うに。

さあ……互いに、様子見は終わった。
いよいよ、第二ラウンドだ。

……ガキユンツ。

……紫騎士の剣。その峰に据え付けられた、カートリッジが消費される。

ゴウツッ!!

そして、爆発的に増大する魔力!

「……! 来たぞ」

俺を屠った、チビ騎士のハンマー。あれと同じ原理なら、これま
では比べ物にならない程の威力が、あの剣に宿ったことになる。

剣の腹を叩いて、剣筋を逸らす………普通の剣には有効な戦法
も、通じないと思っただろうがいいな、これは。

「……青騎士の方は、デバイスの類は所持していないようだ。お
そらく、攻撃の要は紫騎士で、『王』と青騎士はあくまで後衛なの
だろう」

「どっ叩く?」

ここは、クロノの指示に従おう。

「……正直、数の差もあって厳しいな。君の『結合』で、僕とリン
カーコアを同期させても、確実な勝利は無い。だから今、艦長とエ
イミイが増援を要請している。それが到着すれば……」

「おお、数の差は埋まるな!!」

ブオツッ……!!

紫騎士の剣が、俺達がいた空間を激しくなぎ払った。

「「セーの!!」」

振りぬいた姿勢のままに、ブレイズキャノンをお見
舞いする!

「……」

ガドオンツッ!!

「あーもう！ またアイツかよー！！」

青騎士のシールド。とにかく頑丈で、始末に終えない！

『Stinger Snipe！』

一面のみのシールド。それを迂回し誘導弾を放つ。

「はいはい、おつかれー」

……その攻撃は、『王』の装束に吸収されてしまった。

「これじゃ、うかつに魔法で攻撃できねえ！ 直接攻撃で……！！」

……紫騎士相手に、それは無謀だ！」

近づけば紫騎士の剣。離れば青騎士と『王』の攻撃魔法。こちらからの魔法攻撃は無力化され、数の差もある。

「やってられつかー！！」

俺は早々に、正面衝突を放棄した。

「回避に専念ー！！」

「あいよー！！」

とにかく、避けて避けてく時間を稼ぐー！！

。

「で……その増援つての、いつ来るんだ！？」

ガギッ！ ゴギッ、ガギンツ！！

絶え間無く続く攻撃を迎撃・回避し続ける。

「おかしい……！ そろそろ来てもいい筈なんだがー！！」

『王』のばら撒く、滅茶苦茶な数の魔力弾を回避しつつ念話を繋ぎ、どこかと通話を始めた。

「そちらに何か異常があったのか！？ こちらも長くは……は！？」

何だつて！？」

聞き返し……

「……………ふー……………」

額に青筋を浮かべながら、大きく大きく深呼吸し……

「馬鹿言っでないで、さっさと来いッ！！！！」

クロノにしては珍しく、声を荒げて叫んだ。

「……ったく！ 面倒な……！」

律儀に敵の攻撃を迎撃しながら、毒づく。

「おい、クロノ……？ 何かあったのか？」

クロノは、呆れ半分、怒り半分といった感じで説明した。

「……」とことんピンチになったところに、颯爽と登場するのが力ツコイイ』らしい」

「……大丈夫か？」

「……」

返事は無かった。

「はーっはっはっはー！！」

と………緊迫した戦場の空気をぶち壊す、高笑いが響き渡った。

「天が呼ぶ！ 地が呼ぶ！ 人が呼ぶ！」

そして、どこかで………一昔前の特撮番組で聞いた口上を、ノリノリで名乗り上げる。

「悪を倒せと、ボクを呼ぶー！！」

ああ………この、思わず脱力するほどに阿呆っぽい声は、間違いない。

がばっ、とビルの給水塔の天辺に仁王立ちする影が一つ。

「聞け、悪人ども！ ボクの名は………！！」

そして、ノリノリ最高潮。口上を格好良く締め括ろうとした瞬間、『王』が腕を振るい、

どかーん。

「ぎゃー……!?」

……無防備に高い場所に立ち、腕まで組んでいた人影の足元を吹き飛ばした。

命中こそしなかったものの、足場を崩された所為で数メートル下まで落下した。

「あいてて……おいこらぁぁー！」

よじよじ、と再び給水塔の残骸の上に立ち、『王』をビシィッ！と指差す。

「名乗りの最中と、変身中は攻撃しちゃいけないって暗黙のルールを知らないのか……！」

うがー、と髪を逆立たせて怒る、その姿……

「……フェイト!?」

……だった。

完全な不意打ちに近い攻撃を喰らっておいて、命中の直前に飛び退るなんて素早い反応、出来る奴は限られている。

でも、アレは……

「……クロノ、『増援』ってまさか……アレか？」

「……ああ、アレだ」

クロノは、苦虫を噛み潰したような声で、肯定した。

「……どうしてあんなった」

「……………艦長に聞いてくれ」

「……………は？」

『王』も、ぽかんと放心している。そりゃそうだ。

すたつ、と俺の隣に着地したのは……………おお、お前も久しぶりだな。
「アルフ」

「……………や。久しぶり」

とつても気まずそうに、目をそらした。

……………相変わらず、フリーダムな主に振り回されっぱなしのようだった。

「ボク、参上！！」

びしィッ！！ と、無駄に洗練された無駄の無い無駄な動きで、ポーズを決めた。

ヒュウウウウッ……………

……………悲壮感を含んだ風が、戦場に吹き抜けていった。

「……………フェイト」

私は、ふらふらとモニターに歩み寄った。

綺麗に整った顔立ちに……………底抜けにバカっぽい、自信満々の表情。
「フェイトだ」

三ヶ月ぶりに見る……………友達の顔だった。

『ひでとー！ ひっさしぶりー！』

スピーカーを通じて、フェイトとアルフの声が聞こえてくる。

「でも、何で……？ しばらくは、会えないんじゃない……」
数年単位は、覚悟してたのに。

「司法取引と言ってね。プレシアが技術を供与することで、刑期を減らすように……フェイトさんとアルフさんは、あなた達の護衛をすることで、刑期の短縮をする、ということになったのよ」

そっか……フェイトはフェイトなりに、ちゃんと考えてたんだ。

「と……」

ビキイツ……！！

ブリッジ内の空気が、戦闘とは別の意味で凍りついた。

「リンディさん。エイミィ」

「え、ええ……」「何……でしょう、か？」

あれ……何でそんなに怯えてるのかな？

「私、頼んだよね？ フェイトのこと、お願いしてますって……」

私はただ、ちょっとだけ……ほんのちょっとだけ、聞きたいことがあるだけなんだけどなあ……？

「誰が、フェイトに無駄特權オマな属性を増やせと言いましたか……？」

さあ……元凶は、一体誰かな……？

リンディさんとエイミィはだらだらと冷や汗を流し、

「え、エイミィ！ どういうこと……！」

「ウエ！？ デッキとテレビ、部屋に用意したの艦長じゃないですか……！」

「作品をチョイスしたのはエイミィよね！」

「しょーがないじゃないっすか！！ デイズ二とジブリの隣に並んで、間違えて注文しちゃったんですから！ それにオツケー出したのは……………！」

「エイミイも反対しなかったじゃ……………！！！」

「わかりましたから、黙ってください」

醜く責任転嫁をする二人の元凶を、黙らせる。

あの二人が加勢に加われれば、こちらから細々と指示を出す必要は無いだろっし……………

「……………双方向通信を、切ってもらえる？」

ちよつと、秀人さんには聞かれたくないかなあ……………って。

エイミイが戻ってきたことで、席を交代したオペレーターの女性に優しく微笑みかけた。

「い、いえ、でも……………！」

「切ってもらえる？」

「は、はいいいいっ…！」

……………気弱なオペレーターは涙目で、パネルを操作した。さあ、これで心配する必要は無くなった。

「二人とも……………お話を、しましょう？」

「……………」

引きつった顔をする二人。そして、数分後……………

「……………あ……………！！？」

断末魔の悲鳴が二つ、アースラに響いた。

「……ふん、何かと思えば」

四人になった俺達を見て、『王』が吐き捨てるように言う。

「塵芥が一つ二つ増えたところで、」

バサツ……！！

「何が変わるものか……！！」

羽ばたく翼。その両翼に、膨大な魔力が集まり、今にも射出され
そうに……

「それでもないよ？」

。あ？

俺の隣にいたはずのフェイト……が、対角線上、『王』の背後数
メートルにいた。

「なっ……ぐあッ！！」

驚いて振り返った『王』。そのバリアジャケットの右肩が、思い
出したかのように弾けた。

フェイトの手にするバルディッシュ。その刃に、闇色の残滓がこ
びりついていた。

斬った、のだろう。

俺はおろか、クロノも、守護騎士さえ気付かない程の速度で。

「それでさあ……」

ダルそうにバルディッシュをひゅんひゅん手元で弄び、

「なのはをいじめたの、おまえ？」

バギユッ……！！

……今度は、辛うじて見えた。

バルディツシユの横っ面で、『王』の顔面をすれ違い様にブツ叩いた。

「ブツ……!!」

鼻血こそ流さないものの、顔面を押さえる『王』。

「……!!」

ようやく反応を見せた守護騎士達が、主を害するフェイトに照準を合わせる。

ギユイイイツ!!

青騎士の、全方位から捕獲するバインドが、

ゴウツ!!

紫騎士の、膨大な破壊力を宿した剣が、それぞれフェイトに迫る。足の遅い魔導師だったら、バインドに捕まった拳句、バツサリと切り捨てられてしまふに違いない。だが……

「おまえ？ それとも、おまえ？」

ガギンツ!! バギンツ!!

全方位から迫るバインドはフェイトを捉えることはできず、剣は空振りし……共に、両肩の鎧を失う結果になった。

「ねー、ひでと？」

あくまで平然と……だがしかし、確かに怒りを含んだ声で、俺の名を呼ぶ。

「……守護騎士のうち、一人だ。今ここにはいない」

「ふうん……まあいいや。全員連帯責任。痛みをもって償ってもらおうと」

『Size form』

バシユンツ!!

バルディツシュが、鎌に変形。バチバチと帯電するソレは、フェイトの怒りを写したように、激しい。

「フェイト、アルフはクロノと協力して守護騎士を押さえておいてくれ」

まだまだブランクもあって、思うようには動けないだろう。雑魚騎士を武装局員が、守護騎士をクロノ達が抑えておいてくれれば……

「『王』は、俺が叩きのめす」

あのガキを、ボッコボコにしてやる。

「ああ、任せた」

クロノはあっさりと承諾。フェイトとアルフもまた、守護騎士に狙いを定めたようだ。

第四十六話（後書き）

長いので二分割です。
後編へ続く。

第四十七話（前書き）

というわけで後編です。
一気に話を進めます。

第四十七話

「クソガキがああッ……！！！」

顔面に痛打を食らった『王』が、憎しみに満ちた声を出す。

「ハッ……こんなもん、痛覚を遮断すればいいんだよッ！！！」

……便利なもんだ。

「……ひでと、あんまりやりすぎないでね。ボクの分が、なくなっ
ちやうから」

「……」

フェイトは、紫騎士と真正面からにらみ合う。

「鈍った身体には、丁度いい運動かもねえ……」

アルフは、指をポキポキ鳴らしながら青騎士を見据える。

「勝てよ」

「互いにな」

ぱんっ。

クロノとハイタッチを交わし、それぞれのターゲットへ向かう。

「今生の別れは済んだ？」

「火葬土葬水葬鳥葬、好きなの選ばせてやるよ」

「オトモダチが一緒じゃなきゃ、何も出来ないんじゃないっけ
？」

「守護騎士がいなけりゃ、戦力は半減だな」

互いに浮遊しながら、挑発の応酬。

「ハッ……！！」

『王』は嘲笑……そして、憎しみを浮かべる。

「私を舐めるなよ……！！ 守護騎士がいようと、いまいと……！！」

バサアッ！！

漆黒の翼が、はためく。

「お前は、私に触れることも出来ないんだからなッ！！」

ギョオオンッッ……！！！！

「うおおっ！？」

慌てて回避。

「はっええ……！！！」

目にも留まらぬ速度……フェイトが瞬発力でそれを作り出しているのだとすれば、『王』のそれは最高速度。

すれ違い様に俺の急所を狙ってくる『王』に、カウンターで攻撃を加えようとすると、悉く回避され、逆に裂傷を負ってしまう。

バババババッ！！

翼で空気を捕え、器用に旋回しながら、俺の周囲を多角的に飛び回る。

くっそ、ダメだ、このままじゃ……！ 速度が違いすぎる！

ヴォンッ！ ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ……

……！！

地上へ戻り、停めてあったバイクに跨りエンジンを始動。タイムラグを置かず、速攻で走り出し、一気にフルスロットル！

「制空権って知ってるー！？」

上空から、魔力弾の豪雨が降り注ぐ！

「地べたを這いずり回る虫けら……一息に、踏み潰してやるよっ！！」

スピードメーターが200km近くを指しているのにも関わらず、『王』は悠々と俺を追い抜き、攻撃魔法の雨を降らせる。

下から攻撃されることは無くなったけど……！！

「ひやははっ……そんなドン亀じゃ、私には追いつけない!!」
……悔しいが、その通りだった。『王』の最高速度は、俺のバイクを大きく上回っていた。

「それに……!!」

ドンッ!! ドドドドドドッ!!

砲撃、誘導弾があちこちから迫る。

「くっ!!」

ハンドルを操作し、回避!

「旋回が、遅いッ!!」

ゴウッ!!

強化魔法を纏った蹴りが飛んでくる。

「くっそ!!」

それに、バイクに跨ったまま蹴りを合わせ相殺。

その勢いに押し負け、タイヤが一瞬、路面を離れてしまう。

慌てて接地させ、アクセルを開けるものの、『王』の速度にはまだ追いつけない。

(くそっ……もっとパワーがあれば……!!)

『おいアガツマ。聞こえているか』

……つと。

「な、何だ……?」

いきなり通信に割り込みがかかり、拳動が一瞬乱れた。

『おい。聞こえているなら返事をしろ』

中性的な声。それに、このぶっきらぼうで無愛想な口調は……

「マリー、お前か?」

『それ以外に誰がいる』

……ああ、マリーだ。間違いない。

「悪いけど今忙しい、……ッとお!?」

ギヤギヤギヤッ!!

リアブレーキを踏み込みロックさせ、テールスライドで敵の砲撃を回避。

『戦闘中か？ なら、都合が良い』

「何がだよ！」

戦闘音にかき消されないように、大声で対応する。

『おまえのバイクな、バラしたついでに色々と……………まあ、説明は順次で良いか』

「あ！？ 何だって!?!」

今何か、サラッととんでもないことを言わなかったか!?

『とにかく、キーをもう一つ、右に回してみる』

「戦闘中にエンジン止めてどーすんだよ！ アホか！」

今は、とにかくエンジンを全開に回さなきゃ間に合わないってのに！

『アホはお前だ。この私が、その程度のことには気が回らないと思っただか』

いや、でも……………うん……………

「……………！ ああもう、知らんぞ！」

どうせこのままじゃ、追いつけないんだ。なら少しだけ、マリイを信じてやろっじゃねえか！

……………カキンッ。

……………回した。マリイが言ったとおり、エンジンが止まることは無い。だが……………

カキンッ、カキキッ……………ギキンッ！！

「お、おいマリイ……………!? なんか、明らかにヤバそうな音が……………！」

エンジンの内部どころか、バイクの全体から、軋むような悲鳴が

……！

それでいて、全く走行に異常をきたしていないことが、また俺の不安感を加速させる。

『おまえの過去の戦闘記録を見るに、そろそろ、そのバイクのパワー・強度では追いつかないだろ？』

……まあ正直、元が普段乗り用の、何の変哲も無い600ccのバイクだからな。

実は、初っ端に紫騎士に突撃した時点で、フレームがガタガタになっている。

『そこで、デバイス技術の応用だ。普段の状態は、スタンバイモード。魔力は一切食わず、通常のモーターサイクルと何ら変わりはない。だが、起動させれば……』

バキヨンッ！！

「カ、カウルがあああああ！？」

パージされて、ポイ捨てられたああああああああつ！？

ガキヨン、グキグキグキ……！！

「フレームがあああああ！？」

丸見えになった内部機構が、何か動いてるうつつうつつ！？

『フレームや構成素材は、とあるデバイスの構成素材と同じ、高硬度軽量魔導合金に変換され、新たなエンジンのパワーに耐えられる構造に組み替えられ』

ジュウウウウウウツ……！！

周辺の魔力が収束・物質化され、新たな物質へと構築されていく。以前の外装が、丸みを帯びたラインだとすると……新たな外装は、直線。徹底的に空気抵抗を抑え、突き抜けんとする鋭いライン。

ハンドルの切れ角は極端に小さくなり、挙動の操作の大半は、体重移動で行う形に移行する。

『わたしスペシャル、C H X - カソリン M a g i c a 魔力 ハイブリット・V

型8気筒エンジン搭載・両輪駆動二輪型陸戦用特殊戦闘装備……

……『スレイプニル』に変形を果たす』

ガ……………ギンッ！！

変形を終えたバイク。

ヴァオンッ、ヴァオンッ……………

枷から解き放たれる寸前の猛獣のように、エンジンが低く唸り、解放の瞬間を今か今かと待ちわびている。

なんか……………開けるのが怖くなってきたんだが。

「最大出力は……………？」

念のために聞いておこう。ちなみに、ホンダのレース用マシン R C 2 1 1 V の最大出力は、オーバー 2 4 0 P S ^{馬力}。市販車の出力が最大でも 2 0 0 P S というのだから、その出力は押して知るべき、である。

だが、バカに技術を与えると、ロクな真似をしないというのがこの世の常であり……………

「最大出力は……………753ps!」

「お前やっぱ真正銘のアホだろおおおおおおおおおおお
!?!?」

超自慢げに、無表情でサムズアップをしている姿が何故か脳裏に浮かんだ。

『王』が旋回し、数多の攻撃魔法と共に突っ込んできた!

ええい、もういいや! 開けちまえええええええええっ!!

ヴァガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアンッ!!!

雷鳴のようなエキゾーストを絶叫し……………景色が消えた!!

咄嗟に展開した体表の魔力に、もはや質量さえ伴った風が叩きつけられていく！

「ぬぐあああああああああ！！！！」

暴れだしそうになる前輪を、上から魔力を噴射することで路面に押さえつける！！

バゴツ、バゴツ……！！

断続的に聞こえてくる破砕音は、進行方向にあった民家やら何やら、障害物をシールドがなぎ払い、突き抜ける音。

どちらにせよ……地上においては、『王』に一撃を加えることはできない。

なら、どうする……？

「使ってみるか……魔力資質ってやつを！！」

これまでの俺の戦い方は、ただ魔力を振り回しているだけだった。大した知能の無い暴走体や傀儡兵、雑魚騎士にはそこそこ戦えた。だけど、この守護騎士どもには通じない。チビ騎士にやられた時のように、あっさりと破られてしまう。

……今こそ俺の魔法を、一つ上のステージに、進める！

「……」
スロットルを操作し、『王』の攻撃を回避しながら意識を集中する。

これから行うのは、スターライトの応用だ。

(周囲の魔力を集めて………)

ギユウウウウッ……！！

右手の魔力結晶に、魔力が集まってくる。『王』が馬鹿みたいに

！
先へ、先へ……………！！

……………ギョウウウウウン！！

「なっ……………！？」

圧倒的な速度で俺をリードしていた『王』が、驚愕と共に振り返り……………あつという間に、視界の後方へ消えていった。

「ぐ……………おおおお！！」

リアブレイキと魔力放出と気合と根性で180度転回！！

真正面から、『王』に向けてスロットルを開ける！

ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ！！！！

レポートでもしたように、あつという間に距離が縮まる。『王』

ご自慢の速度が、そのまま回避不能の状況へと追い詰めた。

「くっそおおおおおおおっ！！！！」

ビュインツ！！

決死の思いで左手をハンドルから放し、魔力刃を展開。

狙いは……………！！

「その翼！ 貫ったああ！！」

斬ツ！！

「、あ

「ばさっ……………と、羽根を撒き散らしながら地上へ墮ちていく、『王』の両翼。

信じられない……………そんな表情で、呆然とソレを見つめる『王』。

そして……………

「……………あああああああああつ！！！！」

数秒後、コントロールを失った『王』が地上の重力に捕まり、墜落していった。

ガキンツ……

バイクを通常形態に戻し、ウイングロードで地上へ……『王』の墜落地点へ降下する。

「ゼー……ゼー……!!」

なんてバイクだ……マリーの奴滅茶苦茶しやがって……!

『ふむ。最高時速毎時530kmか……出力を抑えてしまえば、こんなもんか』

今、なんつった……?

「ふ、ふざけんな……こんなバケモン、これ以上パワー増やしてどうする!? 最大値いくつなんだよ!?!」

『913psが理論最大値だが? すぐに作業に取り掛かってもいい』

「……遠慮しとく」

マリーに冗談は通じない。

会って一日で、それを痛感した。

『王』は……ああ、いたいた。民家に墜落したらしい。運のいい奴め。

「よう、王様……ご機嫌麗しゅう?」

ウイングロードの上から、見下しながら言っちゃった。

「……てめえええええええっ!!」

プライドを打ち砕かれた『王』は、そこいらのチンピラのように、力任せに拳を振るってきた。

「……」

ぱしんっ、と左手で軌道を逸らし……

ドゴッ!!

「ぐっ……!!」

ボディブロー一閃。

「おりゃあつー!!」

続けて、腹部を思いつき蹴り飛ばし、叩き落す!!

ドガンッ!!

再び地面に背を叩きつける。

(……やっぱりな)

ウイングロードを解除し、バイクから降りた。

「があッ……!! このオっ!!」

やけくぞに放たれた、残心も何も考えないハイキック。

スウエーバツクで回避し、軸足を払う。宙に踊り、全くの無防備になった背中に、膝を叩き込む。

「ああああああああああ!!」

ズバババババババツ!!

装束から全方位に向けて、砲撃魔法・射撃魔法がバラ撒かれる。

俺に当たりそうな弾だけを撃墜。

「何で、何で、何で……!! 練習したのに! いっぱいいっぱい、たくさんたくさん殺したのにいいいいいい!!」

がむしゃらに振るわれた、ただ威力が大きいだけの拳を、魔力を収束させた左掌で受け止める。

「……確かに、一撃一撃の威力なら、俺はお前には勝てないさ」

ビュンッ!!

駄々っ子のように暴れ、残った右手で捌く。

ポバツ!!

爆炎が迸る……寸前に、腕を上に乗ね上げる。爆炎は、空しく空を焼いた。

「お前の攻撃は、ロクに俺に命中しない。何でだろうな?」

「知るかあああああああつー!!」

ギユッ……パスッ……

攻撃魔法を発動しようとした瞬間に、ストラグルバインドを発動する。

「ぐっ……は、放せ!!」

装束が明滅し、片っ端から無効化されていく。

「発動タイミングも、攻撃範囲も考えない。ただデカイ魔力を、威力にだけ重点を置いた術式に乗せて、闇雲にばら撒くだけ」

確かに、初見では驚いた。狼狽して、対処に遅れたけど……メツキが剥げればこんなもんだ。

「下手なんだよ、お前は。戦い方が」

傲然と、言っただけだ。

「抵抗しないサンドバッグを殴って、いい気になってたか？」

ドズツ、ドズツ、ドズツ……！！

三度、腹部に膝蹴りを叩き込む。

「はッ、あぁッ……！！ な、何で……？」

がくがくと膝が震え、顔色が青白くなっていく。

「……痛みは無くても、呼吸をして、酸素を供給することができなければ、肉体は機能を低下させる」

……こいつは、油断と慢心の塊だ。

自分には強大な魔力がある。だから負けない。

自分は痛みを感じない。だからいくら攻撃を喰らっても平気。

自分には守護騎士がいる。だから力を磨かなくても大丈夫。

……下手に初期能力値が高かったからこそ、それが仇になった。

もしこれで、俺と同じように絶え間ない鍛錬を重ねていたら……きつと、俺は勝てなかったに違いない。

「……終わりだ」

左手の魔力刃にストラグルバインドを。右拳に封印魔法を、それぞれ纏わせる。

ザンツ！！

漆黒の装束を切り裂き、無防備な地肌を露出させる。

「ああああ！！放せてんだよおおおおおお！！」

影を刃に変える。だがそれは、さっきまでの鋭さも大きさも無く、脆弱なシロモノだった。俺の身体を貫くことには成功するが、致命傷にはなり得ない。

魔力刃を一閃。ぱりん……と、刃は儂く砕け散った。

「……………ひっ!?!」

いよいよ身を守る術が無くなった『王』に、拳を振り下ろす！！

「シーリング・インパクトッ！！」

ゴゴンツ……………！！

とても肉体を殴ったとは思えない感触。だが確かに、俺の右拳は……………それに付随する封印魔法は、『王』のリンカーコアを確かに捕えた。

「ああああ……………！！」

力の源泉を塞がれ、苦しむ『王』……………いや、そこにいるのは既に、ただの無力な女に過ぎなかった。

「嘘だ……………こんなの、嘘だ……………！！」

見る見るうちに萎んでいく、凶悪な魔力。

「私が、『閻統べる王』である私が、負けるなんて……………そんなことあるわけがッ……………」

ザッ。

と、足音。

「……………魔力の供給が途切れたからだろうな。守護騎士達は、溶けるように消えた」

バリアジャケットに無数の切り傷が刻まれたクロノ。

「あいててて……けっこー強かったな……アルフ、だいじょぶ？」
髪留めが吹っ飛び、ボサボサ髪になったフェイト。

「折れちゃいないよ。フェイトこそ……」

打ち身で青あざを作ったアルフ。

それぞれ三者三様に、満身創痍だった。

中でも、一番傷が多いんじゃないかと思うクロノは、それをおくびにも出さず、苦しむ『王』の目の前で足を止め、言った。

「闇の書の主。殺人・民間人襲撃・時空法違反・公務執行妨害の罪により、あなたを逮捕する」

……何はともあれ、これで解決か……？

いや、待てよ……？ 何か、忘れているような……？ 何かを忘れてる。何か、何か……！！ そうだ！！

「……なのはっ！！」

『は、はい……！？』

「リンカーコアは、どんな様子だ！？」

『え……？ 相変わらず、反応あんまり無いけど……』

そうだ……『王』を倒したなら、なのはのリンカーコアが再生するはずだ！

それで、再生してないってことは……！！

「まだだー！！」

まだ一人、守護騎士が……！結界魔法の使い手が、残っている！
！残った魔力で維持しているんだ！ もう一撃、封印を……！！

……キュゴンッ！！

「うあっ！！」

そして……突如として発生した加速感に、身体を真横に吹き飛ばされた。

「秀人！ ……ぐあっ！！」

クロノも不意打ちで蹴り飛ばしたのは……

あの日、結界をあっさりと破って進入してきた仮面の男だった。

「……てめえ！！ 邪魔するな！！」

拳を振り上げ、振り下ろす！

「邪魔をしているのは、そちらの方だ」

パシッ……

それは、あっさりと受け止められてしまった。

ぎちぎちと拮抗。

「何すんだよっ！！」「この野郎！」

フェイトがバルディッシュを振るい、アルフが射撃を放つ。

それを、流れるような動きで回避し、間合いから脱出した。

「…………… 守護騎士は四人。鉄槌の騎士は欠員。剣の騎士、盾の守

護獣は敗北…………… さて、残りは何人かな？」

「……………！！」

そいつは、まさか……………！！

「湖の騎士。高町なのはのリンカーコアを奪った」

あの時も、今も、ここにはいない。まさか……………！！

「…………… こいつが保険にしていたのだろう。『湖』は現在、結界の外で待機している」

「！ エイミィ！」

『了解！』

早速、サーチを任せる。だが、奴ら守護騎士には気配というものが戦闘中以外はほとんど無い。本気で隠れられたら、アースラのリーダーでも見つけられるかどうか……………！！

「そうそう、『湖』は、直接的な戦闘力こそ低いが、ある技能があるってな」

「おりゃあああああっ！！！」

仮面の向こうで、はつきりと……嘲笑を浮かべた。

「……ッ！！」

俺とクロノが駆け寄った瞬間、透明な檻のようなものが俺達を包み込んだ。

「クリスタルケージ……こんな高等魔法を、一瞬で!?」

技巧に優れるクロノがかなり驚いていることから、それがいかにデタラメな技量なのか、よくわかった。でも、こんなもん!!

「だありゃあああああああああっ!!」

バギンツ!!

正拳突きで、叩き壊す!!

「こんなガラス一枚……!! って、うおおっ!!」

ぎゅるるるるるっ……!!

破壊をトリガーに、更に別の拘束魔法が仕掛けられてやがった!!

「くっそおおお!! 卑怯だぞてめえ!!」

「そっだそっだ!! 正々堂々たたかえ!!」

見れば、隣ではフェイトとアルフが同じように転がされていた。

「……とはいえ、リンカーコアの封印とは厄介だな。下手に手を加えれば、リンカーコアそのものが破損してしまう」

無視すんな!!

「……お前ほど偏った能力も珍しいな」

魔力操作と、強化魔法……それから、リンカーコア結合。その三つにだけ突き抜けた三角形が、俺の能力グラフだ。

「……生憎、取り柄が少なくてな」

暴走体相手に、死ぬような思いで磨いてきた封印魔法だ。そう簡単に破られてたまるかっての。

「……短く見積もって、三ヶ月といったところか」

三ヶ月。……俺の封印魔法が、効力を失うまでの期間だ。長いやら、短いやら……でもとにかく、向こう三ヶ月は、敵の襲撃は無い。それだけが、不幸中の幸いだろう。

「では……」

「待てッ！！」

去つていこうとする仮面の男を、呼び止める。

「お前は、誰だ！？ 何の目的があつて、闇の書に手を貸している！？」

ぴたりと足を止めた仮面の男は、少しだけ考えたようなそぶりを見せる。

「……我が名は『追跡者^{チェイサー}』。闇の書の完成を目指す者」

追跡、者……？

意味を問いただすより先に、転移魔法で『王』ごと逃げられてしまった。

「くっそ！ なんだよアイツ！！」

同時にバインドが消滅し、身体の自由が戻ってくる。

『強装結界、解除………通常の隔離結界へ移行しました』
オペレーターの悔しげな声。試合に勝つて……勝負に負けた。そんなところだろう。

くいくい、と服の裾を引っ張られる。フェイトだった。

「ひでと、戻ろ？」

……そうだな。ここにいたって、仕方ない。

「そうだな。なのはいろいろ、話もしたいだろ」

「うんっ！！」

ボサボサになつてしまった髪を整えながら、快活に笑う。

「アルフ、どうしたの？」

フェイトの問いに、拳動不審に辺りを伺っていたアルフがびくつとなつた。

「え？ ああ、いや………ユーノはどこだろう、って………」

もじもじと、消え入りそうな声量で言った。

「……諸々の説明は、アースラに戻つて、休息を取ってからにしよう」

「う
クロノが場を収め、全員でぞろぞろと転送ポートに向けて歩いていく。」

(三ヶ月……………か)

言うなれば、嵐の前の静けさ。

最短で三ヶ月。それで、俺が施したリンカーコアへの封印は解ける。追跡者が言ったとおり、『王』は、更なる強敵となって俺達の前に再び立ちふさがることだろう。

だけど、恐れることは無い。

「うゅ？」

「ん？」

歩きながら、フェイトとアルフの肩に手を置く。

「頼りにしてるぞ」

最初、ぼかんとしていた二人は……

「うんっ！」

「おうっ！」

サムズアップと共に、頷いた。

俺には、こんなにも大勢の仲間がいるのだから。

闇の書。

王。

守護騎士。

追跡者。

それぞれの思惑を胸に、このバッドエンド確定の物語は序章を終えた。

第四十七話（後書き）

ここから、日常編が少しの間だけ続きます。

エンディングの案はいくつか出来ていますので、どうぞ最後までお付き合いください。

第四十八話（前書き）

クビは免れました。

、、、話は変わりますけど。

普段、授業中はおしゃべりにケータイに居眠りに好き勝手する奴が、行事になった途端「ちゃんとやれよ！」とか言ってくるのって間違っていないませんか？

第四十八話

パパの転勤が決まった。

単身赴任ではなく、ママも私も、生まれ育った関西地方から、関東地方のそこそこ大きい街へお引越し。

よくわからないけど……パパは相当に仕事ができる人であつたらしく、東京では支社長の待遇だそうだ。

この先十年以上は住むことになるということで、思い切つて家を買つた。ローンではなく、豪儀にキャッシング一括で。

豪邸……というほどではないが、写真を見る限り、家族で住むには十分に快適そうな、一軒家だつた。

当然、今の3LDKのマンションよりも部屋は増える。

物置にでも使うのかと思つていたら、「そろそろ下の子を……」とか、子供の前で言わないで欲しいようなことを言つていた。ほんと、勘弁して欲しい。

いくら小学校低学年でも、ちゃんとわかつてるんだよ？

まあ、それはさておき……実際に引越すまで、大体一ヶ月くらい。

おかげで私も、関西弁の訛りを矯正するのに一苦勞、二苦勞……ちよつと大変だつた。

けど、いつも帰りが遅いパパと、練習という名目でお喋りできるのがたまらなく楽しかつた。

一ヶ月が過ぎた。

学校の友達とお別れするのはちよつと寂しかつたけど、悔いなくお別れできたと思う。

がらんと広くなつた家で、クリスマス・イブと引越し祝いを兼ねたごちそうを食べて、翌日の朝、出発した。

生まれて初めて乗る飛行機に興奮する私を見て、パパとママが苦

笑する。

そしてそれが、最後に見た両親の笑顔だった。

最初に感じたのは、衝撃だった。

ぐらぐら、なんて易しいものじゃない。まるで、巨大なミキサーに放り込まれたように平衡感覚が無くなり、今足をつけているのが床なのか天井なのかすら、わからないほどの揺れだった。

何もわからないまま泣き叫び、両親にしがみつき………そして、暗転。

あまりの衝撃に、失神していたおかげで気づかなかったけど………多分、墜落したんだろう。

次に感じたのは、熱だった。

「……あ、」

意識を取り戻した私が見た物は、ほんの数分前まで『飛行機』と呼ばれていたスクラブの山と、燃え盛る炎。

そして……あちらこちらに散らばる、赤黒いもの。

それは、太かったり細かったり、大きかったり小さかったり、真っ直ぐだったり曲がっていたりと様々な形があった。

だけど、その色は……生々しい赤と、煤けた黒の二色のみ。

腐った果実のように黒い表皮が弾け、中から赤が覗いていた。

「………！ あ、ああ………！」

目のピントが合い、焦点を結んだ先……その赤黒いものの全容が、目に飛び込んできた。

ソレは、歪んだヒトの形をしていた。あるべき場所にあるべき部

位が無い。けれどソレは、紛れも無く、人だった。

……俗に、『死体』と呼ばれる物体だった。

「ひいっ!!」

悲鳴を上げる。だが、逃げられなかった。

別段、酷い状態にはなっていない。足も多分繋がっているし、大した出血も無い。

「う、ん……!」

うつぶせのまま、何とかして後ろを見る。

熱で変形し、ドロドロに溶け固まった金属。黒焦げになった、何らかの残骸。

下半身の上に、そんなものが固まった数百キロはあるのかという大量の瓦礫が積もっていた。腰から下がどうなっているのか、自分でもよくわからない。

シートの残骸がクッションとなっていなければ、下半身をすり潰されていたに違いない。その点、私は幸運であり……不運だった。

「パパ……ママ……? どこにいるの……?」

きよろきよろとあたりを見回し……私の前方、数メートルに投げ出された両親の姿があった。私と同様、瓦礫に埋もれ、自分ひとりでは動けそうにない。だが人一人いれば、なんとか動かせそうな大きさだ。

「……………っ」

その手が、僅かに動く。

まだ、生きている……!!

「どいて!! どいてよ!!」

瓦礫から抜け出そうと足掻くが、数百キロもの重量を動かすには遠く及ばず……ただ、見ていることしか出来なかった。

そして……激しい炎は、すぐ目の前にまで迫ってきていた。

「逃げ、て……げほっ、げほっ……!!」

熱に焼かれ、からからに乾いた喉で叫ぶ。だが、両親は動けないにせ、高度数千メートルから落下したのだ。今このとき、存命しているだけでも十分な奇跡だった。

当然、無傷なはずは無いだろう。身体の内部は、ぐちゃぐちゃになっっているに違いない。

「……や、て、……まえは、……子、だ……」

「は……て……、あな……は……、……あわせに」

両親の、おそらくは最後の言葉。

それが、聞こえない。轟音にかき消され……両親の言葉が、届かない。

そして、いよいよ炎が、両親の身体を舐め始めた。

「いやあ……!! いやあああああ……!!」

泣いても、叫んでも……炎は、その歩みを止めない。

両親の肉体を、末端から物言わぬ消し炭にしようと、侵攻してくる。

「……はやて、……うび、……めで……う」

「

聞かないといけない。なのに、言葉は届かない。いくら耳を澄まして、周囲の音が邪魔になって、届かない。

「あ、あああ……!! ああああああああああああああああ
ああ!!」

叫んでも、暴れても……私は、その場から一步も動けない。

そして、無力な私の目の前で……両親は、炎の向こうへ消えた。

その日は、十二月二十五日。

世間は、クリスマスだった。

「パパ……ママ……」

……自分の声で、目が覚めた。

目を開けると、そこは見慣れた住処。埃っぽい淀んだ空気と、カ
ーテンで囲まれた、薄暗い空間。

背中感触から察するに、ソファに転がされているらしい。

「……あれ？」

……なんで私、こんな場所に？

ズキッ……！！

「うぐっ……！！」

腹部に走る鈍痛。

「う、うう……！！」

身体を丸めて痛みを耐える。

その痛みが、敗北の記憶を呼び覚ます。

「畜生……！！」

あの『鉄槌』の仇に、返り討ちにされて……

「……」

恐る恐る足に力を込めてみると、幸いなことに動いた。

けど……自分を満たしていた、無敵の全能感がキレイさっぱり消

え失せている。

「……はあー！」

気合を入れ、胸の奥……リンカーコアに意識を集中する。

ゴウツ……！！

魔力……一応は、出せるか……精々、美香と同程度だけでも……

自分の影に、闇に、呼びかける。

「おい。……おいてば」

……。

反応が、無い。

「……ふむ」

つまり、こついうことだ。

あの男の魔法。あれには、私の力を戒める効果があった。それは、確かに私に命中し、効果を発動した。ただ、それによって封じられたのは、私自身の力ではなく、闇の書のみだった。

「運がいいやら、悪いやら……」

確かに、負けた。言い訳のしようが無いほどの、完敗。惨敗だった。

けど、妙にさっぱりした……というか、冷静に事態を飲み込めた。
「私、まだまだ弱かったんだなあ……」
慢心……それに尽きるだろう。

「その通りだ」

！？

「だ、誰！？」

……力を得たものは、それに溺れる。過去に、己の無力を悔やん

だ者なら、特にその傾向は強い」

そいつは、私の寝そべっていたソファの真後ろの壁に、腕を組んでもたれかかっていた。

「……降って沸いた、巨大な力。ゲーム感覚で試しこそすれど、本気で磨く事は無く……井の中の蛙に終わる」

「誰だ……って、聞いてるだろ！！ 答える！！」

そいつは、変な仮面を被った男だった。

表情は読めず、声色も平坦。

体格から判断するに、多分男だけど……それすらも怪しい。

ともかくにも、胡散臭い奴だ。

その胡散臭い奴は、私が聞いているのか、それすら興味なさ気にべらべらとしゃべり続ける。

「それ故に……力を得たとしても、結果的に……無力であることに変わりは無い」

「！！！！」

無力。

「お前に……！」

無力。その一言が、私の逆鱗に触れた。闇を操れない……そんな不安感を一瞬で消し飛ばす。闇の書の補助は無い。だから、

「お前にツ……！！！！」

リンカーコア励起。魔力精製。術式構築。術式名称……

今の自分にできる最大限の技術を駆使して、

「何がわかるツ……！！」

『ナイトメア』……！！

叩き潰す！！

ツドオオオオンツ！！

発射された砲撃は、室内を余波で滅茶苦茶に破壊し、不審者に突き進む。

だが……

「……………又ルい」

バチイイインツ！！

仮面の男が展開したシールドに弾かれ、弾道を天井へ逸らされてしまった。

そんなに硬いシールドでは無かった。だが、進行方向の斜めに展開されたシールドは、砲撃のベクトルを逸らし、最小限の動きのみで、無傷を勝ち取った。

「くそつたれ……！」

二発目は……………出さない。

私の中の冷静な部分が、撃っても無駄だと、冷酷に判断する。

「何で、どいつもこいつも……………！」

私の力を、簡単に対処しやがるんだ……………！

「……………娘」

仮面の男が、またあの平坦な口調で、私のことを呼んだ。

「……………力が欲しいか？」

……………答えるまでもない、質問だった。

いや、きつとこいつは、私があると答えるかも承知の上で、それを聞いている。

「だったら何よ……………」

「答える。力が欲しいか？」

……………曖昧な返事は、聞き入れるつもりは無いらしい。

「答える。」

……力が欲しいか？

守護騎士の仇を取れるだけの力が。」

憎い仇を殺戮するだけの力が。」

今度こそ、何者にも屈せず、何者をも這い蹲らせるだけの力が。」

だから……答えるまでも無いんだっての。」

「欲しいよ」

力が欲しい……けどそれは。」

「でも、お前には頼らない」

……私の復讐は、私自身でのみ完結させる。」

「……では、どうするっていうのだ？」

……はい？

「お前は、どのようにして……一人で力を得るといふのだ？」

……。

「また、その辺の適当な奴でも使って練習する……」

「……」

仮面の男は無言だけど、明らかに呆れたような気配を見せた。

「な、何！ 文句ある！？」

「……何の進歩も無い」

「うっせー！」

何なんだ、コイツ……！

「お前が真に力を欲するというのなら……協力してやろうと言っているのだ」

……胡散臭い。とにもかくにも、胡散臭い。

まずは、コイツの素顔を見ないことには……

「……………本当に？」

声色を変え、恐る恐る……弱弱しく聞き返す。

「……………本当に、協力してくれるの？」

意図して泣き顔を作り、『孤独で哀れな少女』を演出。

「私の味方になってくれるの……？」

「……………技術の供与は惜しまない」

堅苦しい言葉……でも、僅かに柔らかい雰囲気を感じた。

……嘘を嘘と見抜かせないコツは、幾分かの真実を織り交ぜるところ。

だからまあ……心細いというのは、守護騎士を失った今の私の本音だ。

「……………あ、！」

ガタッ！

ソファから下りようとして、転げ落ちる。

……もちろん、フリだ。

「……………」

仮面の男が、すっと手を差し出す。

「ありがとう……………」

ぐっとその手を掴み……

ギョルルッ……………！！

「！？？」

そのまま、私の手ごと、拘束魔法で縛り上げる！

「ひっかかってくれて、本当にありがとう……………！」

「貴様……………！」

さすがに、反応が早い。すぐさま魔法に亀裂が入り、砕かれそうになっている。だが、それよりも早く発動させる！

「……ストラグルバインド！」

……『鉄槌』が最後に蒐集したガキが持っていた、術式の一つ。効果は、対象に付与された全ての魔法効果のキャンセル。

一見、とても便利そうな魔法だけど……実のところ、使いどころは殆ど無い。

例えば、魔法で強化された武器での攻撃を受けるとする。その強化魔法をストラグルバインドで打ち消したとしても、単純な武器での一撃がまだ残っていて、結局はそれも防がなければならぬ。つまり、二度手間を食うよりは、最初からストラグルバインドの分の魔力も費やして、防御魔法で防いだほうが速いのだ。

それ故に、この魔法は極端に習得者が少なく、マイナーな魔法となっていたのだろう。

ボシュンッ……！！

仮面の男の姿は、魔力の塵となって掻き消える。

「やっぱり……」

あれは、本当の姿じゃなかったんだ。

さーて、そのツラ押んでやろうつと。

目の前に人影は見当たらない。逃げられたんだろうか？

ぐにゅっ

……その考えは、あっけないほど早く否定された。

つま先にめり込む、生温い感触。見下ろした先にあったのは……

「……………猫？」

灰色っぽい毛並みの、上品そうな猫。それが、リビングのフロア

リングにぐでーっと伸びていた。

「……まさか、コイツが？」

首根っこを掴んで、目の前まで持ってくる。

どこからどう見ても、猫だ。こいつが、あの仮面の男の正体……？

「ん、んん……？」

にわかには信じがたいが、割と大き目の魔力を持っている。正確には、『大きい魔力の支流』とでも言うべきか。大本になる何者かの魔力を分け与えられているらしい。

システムのには、守護騎士に近いか。

「……残念だったね」

うまいこと私に取り入って、利用するつもりだったんだろうけど

……私は、他人に利用されるのが大きらいなんだ。

パパの財産を狙って、病室にまで押しかけてきた顔も知らない親

戚に、私を出汁に視聴率を稼ごうとするマスコミ。

そんな輩ばかりを見てきたおかげで、すぐにわかったよ。

こつこのつを、『ミイラ取りがミイラになる』って言うんだっけ？

でも、どうしよう……こいつが目を覚ましたら、絶対に逆襲される……

それどころか、正体を知られたからには……とか言って、マジで殺られるかも……

「……参ったなあ」

守護騎士がいれば……闇の力があれば……

「ん？」

私を補助する守護騎士の不在。

私を補助すると言った目の前の猫（敵対予定）。

……コイツ洗脳して、私の奴隷にできないかな？

魔法の指南役と、守護騎士の代用品を一挙に手に入れられる。

「……やってみるか」

物は試しだ。

「ん……っと」

猫と、大本（主人）を繋ぐ魔力のラインに、自身の魔力を接続する。

途中にあったプロテクトと思しき障壁は、強引に破壊して。

これで、準備は整った。

「……………」

どきどきする。そういえば、こうやって魔力を細かくコントロールするのは、初めてだ。

攻撃魔法や防御魔法なら、目分量に気分量で大雑把に魔力を注げば問題なかったんだけど……これは、ほんのミスが命取りになる。

魔力の総量を変えず、中身だけをそっくりそのまますり替える。

要は、人工心肺の魔力版だ。

「……………ん、このっ！！」

私の魔力を注ぎ込みつつ、主人からの魔力の流れを徐々に遮断していく。

魔力の流れは細かくて、緩急があって……流れる水以上に、複雑だ。

「えいつ、このやろっ……………！」

掴もうとすればするだけ暴れる魔力流を調節し、時にせき止め、時に解放し……私の魔力の比率を、徐々に高めていく。

汗をだらだら流して苦戦すること……体感時間で数十分。

「……………いいよっしゃあ……！」

……猫に繋がる魔力のラインは、私の物を一本残すのみとなっていた。

「なーんだ、うまいじゃん、私……！」

少し時間は掛かるけど……我ながら、かなりうまくいった。

魔力流への干渉を阻むプロテクト……これは、数が多ければ多いほど防御率もアップする。だがそれは、折角の魔力流に堰を作ってしまうのと同じだ。

だから私は、その『堰』を、『水門』に置き換えた。

普段は、全くプロテクトの意味を成さない。水門で言えば、上がりっぱなしの状態。

そして、今回のように……私との魔力流へ干渉するような真似を受けた際に、『水門』が下がり、『堰』となる。

簡単に言えば、PS装甲と、TF装甲の違い。
フェイスソフト
トランスフェイス

……パパのパソコンに入っていたアニメが役に立つとは。

完全に私の魔力に染まった影響なのか、灰色っぽかった猫の体毛は、漆黒へと変じていた。

「あはっ……いいね。『魔女の手下』っぽくて」

どうせなら、黒ローブに三角帽子、ついでに箒でも用意してやるうか。美香には大ウケするだろうな。

「……にゃあ」

あ、起きた。

「お前は、誰だ？」

確認……そして、最後の仕上げのため、そう聞く。

「……私は、リーゼ……」

ぼうつとした様子で名乗った。

リーゼ……それが、こいつの名前か。

「リーゼ。お前の役目は何だ？」

「……閻統べる王、八神はやて。あなたに尽くすことです」

「ふふ……！」

やった……完璧だ。

「リーゼ。お前に、命令を与える」

「はい、我が主。何なりと」

……無表情なのが、少し気に食わないけど。ちょっと、呪縛が強すぎたかな？

まあいいや。

「私に、戦い方を教える」

「はい、我が主。私の持てる全てを、献上致します」

今の私は、ただの無力な魔導師に過ぎない。

魔力は有限、特殊能力は封印。……まして、身体能力なんて小学生そのものだ。これだけのハンデを負ったのだから、これまでの戦い方なんて、出来るわけがない。

「……訓練に関して、一切の加減を禁ずる」

「外傷を負われた場合は、如何にいたしますか？」

ただの骨折だけでも、動きは確実に鈍る。切り傷を負えば、血だつて流れるだろう。

「……訓練の継続に支障が出ない程度に治療。完全な治療は、一日の訓練を終えてからとする」

……自分の中の甘えを、消し去るために。痛みは糧に。敗北の底から、這い上がってやる。

「首を洗って、待ってるよ……!!」

そして、今度こそリベンジだ!!

第四十八話（後書き）

次は……次は……誰の話にしようかな。
順当に秀人一家が、もしくは……とりあえず、お楽しみに。

第四十九話（前書き）

仕事が面倒で大変です。
フリーター時代は、気楽でよかったなあ。

第四十九話

アースラの転送ポート。

とんとん。

戦闘は終わって、そろそろ、戻ってくる頃だ。

とんとん。

秀人さんと、アルフと……フェイト。

「なのはちゃん……もうちょっと、落ち着いたら……？」

とん。

無意識のうちに帰っていた貧乏ゆすりを止める。

エイミイを見上げる。

「……だって、何ヶ月も会ってないんだよ」

連絡だって出来なかった。

忘れてるなんて、絶対に無いと思うけど………どういふ顔で会えば

いいのか、分からない。

ウウン………！

転送ポートが輝く。そして……

バシュッ！！

光が収まり、前線メンバーがわらわらと戻ってきた。

けが人も多く、待機していた医療班がストレッチャーに彼らを乗せ、医務室へ走っていく。邪魔にならないよう、壁際に立って彼らを見送り……自力で歩けるメンバーの中に、ぴよぴよこ動く金髪を見つけた。

「あ

「あ

向こうも、私を見つけた。

「……」

「……」

私は、どう声をかけたものか思い悩んでいて……フェイトは多分、認識した光景に、思考が追いついていない。

口を半開きにして、ほけー……っとしている。その間抜け面といったら、もう……

「ぷっ……」

ああ………なんというか、笑えてくる。

「あ、ああ………！ 今、ボクのこと笑っただろ！？」

目を吊り上げ、ずかずかと歩いてきた。

「ごめんごめん……」

目の前にやってきたフェイトは、まあ何と言うか……ボロボロだった。

バリアジャケットは解除しているから、服は小綺麗なワンピースでも、髪はボサボサで、身体は土ぼこりでザラザラ。擦り傷や青あざも多い。

「大丈夫？」

「うん、へいきー」

にへら、と締まりの無い笑顔を浮かべる。

「おお、良かった」

「ダメだよ、フェイト……ちゃんと手当てしないと」

と、人混みの中から秀人さん、アルフ、それにクロノが出てきた。
「……………」

クロノは、ちょっとバツが悪そう。

「ごめんね？ 怒鳴っちゃって……」

ちゃんと謝っておこうつと。

「いや……………ありがとう」

あら、珍しい。クロノが素直だ。

「うひひひひ……」

と、エイミイがとても頭の悪そうな笑いと共に、クロノへ意地の悪い視線を送る。

「クロノくん、泣いちゃったんだもんね？」

「ぐっ……!!」

気まずそうに、恥ずかしそうに俯く。

「ふふふ、もう、クロノくんだったら……」「エイミィ」

調子に乗って、更に何かを言おうとするエイミィを、秀人さんが遮った。

「は、はいっ!!」

条件反射のように直立不動となり、背筋をピンと伸ばすエイミィ。

「……あんまり、俺のダチをいじめてくれるな」

「はっ！ 失礼いたしました！」

……よっぽど、怖かったんだろうなあ。

横ではクロノが、「『ダチ』とはどういう意味だ……?」と首を傾げていた。

教えてあげてもいいんだけど……面白そうだから、黙ってしよう。

「……ま、いいや。艦長への報告もあるし、戻ろう」

「はい！」

と、私の目の前にいたはずのフェイトが素早く秀人さんに駆け寄り……あるうことか、腕にしがみついた。

「な……何してるのよおおお!!?」

慌てて、フェイトを秀人さんから引き剥がす。

全く、油断も隙も無い……!!

でもフェイトは、不満タラタラな顔で、しぶとく秀人さんの腕にしがみつく。

「いいじゃん別に少しくらい!!」

「ダメだったらダメ！」

「少しくらいボクに貸してくれたっていいじゃん!!」

するつと私の手から逃れ、ひょいっとジャンプし……秀人さんの右肩に、横座りした!

「こ、こらあああ!!」

頭を両腕で抱え込んで、なんて羨まし……じゃなくて!!

「秀人さん、怒っていいんだよ!？」

そう言ったのに、秀人さんは何故か私を宥める。フェイトを、背負ったまま――!

「まあまあ……………全然重くないし、いいって」

「でも……………!」

「久しぶりに会ったんだし、このくらい許してやってもいいんじゃないか?」

むぐぐ……………まあ、秀人さんがそう言うなら、ちょっとくらいなら……………

話の流れから、自分の勝利を感じ取ったらしいフェイトは、

「べー!」

勝ち誇った表情で、ぺろ、と舌を出した。

「こ、こら……………!」

秀人さんが慌てて止めさせたけど……………手遅れだった。

ぷちんっ……………

堪忍袋の尾が、ブチ切れた。

「こ、の……………!」

カーーーッ……………と、自分でも分かるくらい、頭に血が上っていきのを感じる。

「返せ……………!」

そんな、目的語が抜け落ちた叫びを上げ、フェイトに飛び掛かる!

「か・え・せ……………!」 秀人さんは、私のなだからあああ

……………!」

秀人さんの左肩に跨り、フェイトをぐいぐいと押す!

「わたしもんか……………! ひでとは、ボクのもんだー!」

フェイトも落とされてたまるか、と押し返してきた!

「ふえ、フェイト……………!」

「……………ど、どうしようか？」

おろおろするエイミィとアルフ。

「………知らん。先に行ってる」

諦めた様子で、さっさと部屋を出て行くクロノ。

「うにゃー！」

「このぉー！」

負けて……………たまるかあああああああああー！

「……………うっ」

酷い目に遭った……………まだ両肩がギシギシいってる気がする……………

「……………というわけで、しばらく襲撃は無いものと思われませう」

クロノの報告を横に聞きながら、両肩をほぐす。

「ごめんなさい……………」

なのはが、俺の左手を握りながら謝った。

じと……………と、俺の右手を握るフェイトをやぶ睨みする。

「……………ふああああ……………」

フェイトは我関せずと、大あくびを隠しもしない。

「闇の書の主に関しては、秀人の方が詳しく説明できるでしょう」

「お願いできるかしら、秀人さん？」

……………つと。俺か。

まず、説明から始めるか。

「封印魔法が届いたのは、奴のリンカーコアのみ。闇の書は、残念ながら取り逃がしてしまいました」

詰めが甘く、逃げられてしまったのは痛恨のミスだった。全く…

…俺も、まだまだだな。

でもまあ、当面の危機は無いだろう。

「闇の書は、言ってしまうえば魔力の増幅装置です。俺と同程度……まあ、仮に100として、それを100倍の10000に増幅するのが闇の書」

資質があれば、極めて危険な災厄を齎すシロモノだが……

「元になる数……つまり、奴自身の魔力が1になってしまえば、100倍にしたところで、それは100。ただ大きいだけで、それ単体では脅威にはなりません」

大きな魔力があっても、それを御する能力がほぼゼロだった奴は、何も出来ずに大人しくしているだろう。少なくとも、襲撃してくるような馬鹿ではないはずだ。

「……なるほどね」

「猶予期間は、なのはを参考にすればいいでしょう」

なのはは流石に聡明で、俺の言おうとすることをあっさり理解していた。

「蒐集も、ある意味封印の一種。蒐集の影響が私から抜ける頃には、奴も同じく、封印魔法を破る」

そういうこと。

「現場での報告は以上です」

あとは、リンディさんの判断だ。

「……闇の書の細かい機能については、ユーノさんが現在、調査に当たっています。上がってきた報告の中には確かに、魔力の増幅という項目もありました。なので、秀人さんの報告は、十分論理が通ります」

なかなか、好感触だ。

「ですが、一点だけ。闇の書の主の魔力についてです」

はあ……ダメか。

「増幅装置……とおっしゃいましたね。それはつまり、なのはさんと比べ、魔力の回復にも差が出る、ということでは？」

「あちゃー……すっかり見落としてた。」

「猶予期間については、あまり樂觀はできませんね」

「……はい、そうです」

「同じ人物に一度だけ、という蒐集の制約があるにせよ、今のなのはさんは、魔法で自分の身を守ることが出来ません」

「……だよなあ。アイツ、復讐する気満々だったし、俺ではなく、弱体化したなのはを真っ先に襲うだろうし……」

「悩んでいたら、リンディさんがパンツ、と手を叩いた。」

「護衛を付けましょう」

「……護衛？」

「なのはさんと同レベルの戦闘能力を持ち、常になのはさんと行動することが出来る、専属の『護衛』を」

「……いやいやいや。」

「いるわけ無いじゃないですか、そんな都合のいい人」

「俺の変わりに、なのはが答えた。」

「私並に強くて、あまり管理局の縛りを受けず、自己判断で行動できる人なんて……」

「なのは並に強い……それは、クロノも当てはまる。けど、クロノは管理局の中でも比較的高い地位にいる。なのはにかかりつきりで護衛なんて、不可能だろう。」

「それが、いるのよ……秀人君」

「あれ……？」

「リンディさんが、気さくモードになった。」

「さあて、誰かしら？」

「リンディさんの視線は、俺……ではなく、俺の右隣を向いていた。……おいおい、まさか。」

「……フェイトとアルフ、ですか？」

「ええ、その通り」

「いいいいイヤっほおおおおおおおウ!!! やったああああああ!!!」

フェイトが歓声をあげ、なのはに抱きつく。

「わあああああっ!?!」

「フェイト、危ないってば!」

いきなり抱きつかれ、転びかけた二人をアルフが支えた。

「なのはー! よろしくねー!」

百パーセントの、明るい笑顔。それにほだされて、なのはも笑顔になった。

「あ、あはははは………うん、よろしくね、フェイト」
少し照れている。

「ボク、ハンバーグとオムライスがいいな!」

「え、作れってこと……? そっちの『よろしく』だったの!?!」

「どっちも!」

「………もう、しょうがないなあ」

そう言いながらも、満更ではなさそうだった。

そんな増埒を遠目に眺めながら、我が家を思い出す。

「………あ、やべ」

今更ながら、別の壁が生まれた。

「部屋………どうしよう」

今現在の、俺達三人で住んでいるアパートは、元々は单身向けの物件だった。

なのは、ユーノと同居するにあたって、大家さんの了承は得たものの………更に二人増えたら、定員オーバーだ。

「護衛中は任務として扱いますから、皆さんにはお給料も出ますよ」

金銭的には問題なし、と。

んじゃ、まあ……引越しでもするか。

「でもしばらくは、あの狭いイクか……」
準備期間を含めて、最低でも一月は、あの一室で暮らすことになりそうだ。

あの八畳一間に、五人……すし詰め・イモ洗いという言葉が、これほどまでに似合う状況もそう無いだろう。

風呂もトイレも流し台も常に満員。そろそろ本格的に夏だから、体温で更に暑苦しくて、動くたびに互いの身体がぶつかってしまふ。部屋の中は、なのはの本、ユーノの資料、俺のバイク用品、フェイトの玩具、アルフの雑貨で、足の踏み場も無くなって……

「……………くくっ」

大変だということが分かりきっているのに、つい笑ってしまう。五人で暮らして、騒いで、じゃれ合って……そんな生活、楽しいに決まっているじゃないか。

「……………秀人さん」

裾が引かれた。

フェイトと手を繋いだなのはが、にこにこ無邪気に笑いながら、言った。

「楽しみだね」

……………ああ、そうだな。楽しみだ。

さて……………なのは、フェイト、アルフ……………残り一人は、どこ行った？

戻ろうとしていたクロノを捕まえた。

「ユーノはいつ頃戻って来る？」

何日も前から、姿を見ていない。

『ちよっと、調べ物をして来る』と言い残して、それっきりだ。

「先ほど、件のフェレットもどきから連絡があった。まだ少し調べ

たいことがあるから、先に帰っていて欲しい……とのこと、
「あいつ、目の前のことに集中しすぎて突っ走るからなあ……やれやれ、仕方ない。」

「駄目！ 連れて帰る！」

……無理やりにも連れ帰って、休ませよう。そう言おうとした瞬間、殆ど同じことを考えていたらしいのだが、がーっと吼えた。

「みんなで帰って、みんなで晩御飯！ ご飯抜きなんて許しません！」

ふう……と、クロノがため息をつく。

「……だろうと思って、通行許可を人数分確保しておいた」

段々、いい意味で力が抜けてきたな。頑固な堅物も、いろいろと俺達に影響されているらしい。

「で、ユーノはどこにいるんだ？」

「無限書庫……まあ、書庫とは名ばかりの、膨大な未整理データの山だ」

その中から、闇の書および、古代ベルカの知識を発掘しているらしい。

発掘……？ そんな、大げさな……

俺達は、実際に案内されるまで半笑いだった。

そして、転送ポートからその場所まで案内され……言葉を失った。

山。

比喩表現でもなんでもなく、正真正銘、それは『山』だった。それも、ギッチリと本を納めた書架が、四方八方どころか、果てが見えないほど上下に連なっている。

「……………す、つげえ」

試しに、近場にあつた本棚に接近してみる。無重力のようだが、進みたい方向へ意識を向ければ、すんなりと移動できた。

「無限書庫には、あらゆる世界の出来事が、『本』という形になって絶え間なく更新されている。どこの誰が、何のために、いつ創ったのか、まったくの不明。そのあまりに膨大なデータ量は、活用するには難しく、長年放置されていた」

クロノの説明を聞き、納得。

……………確かに、ろくな検索装置も無い以上、自分の手でデータの山を掘り返すしかない。

そんな時間があったら、他のデータベースを使った方が早い。

……………既存のデータならば。

ここにある膨大な知識の中にはきっと、闇の書に関するものがある。

ユーノはそう信じて、この場所に足を運んだのだろう。

「うわー！ 何コレ何コレ！ たのしー！！」

飛行魔法ともまた違う感覚に、歓声を上げるフェイト。

「う……………落ち着かないなあ……………」

逆に、アルフは居心地が悪そうだった。

「あんまり遠くに行くなよー？」

……………まあ、俺達以外に人はいないみたいだし、遊ばせておいても問題無いな。

「あいつは……………ああ、結構遠くまで行ったんだな」

クロノがユーノの位置を探査し、僅かに驚く。

……この数日、こもりつきりで調査をしていたんだろう。あいつはどうにも学者肌というか、熱中すると時間の観念を忘れてしまう悪い癖がある。

「全員で行くことは無いだろう。僕が呼んでくるから、君たちはこの辺りにいてくれ。本は、自由に閲覧してくれて構わない」

と言って、クロノだけがすーっと移動していった。

……途中、

「どれどれ……？」

おお……本そのものも、大判の図鑑くらいのサイズがある。

一冊を抜き出し、頁をめくる。

「……駄目だ、読めん」

「こつちも……」

ミッド文字もあまり読めないというのに、この本は更に複雑な文字がびつしりと埋めつくしていた。

隣の本を抜き、同じように捲る。最初に抜いた本とは、更に違う言語だった。

何冊も捲ってみたが、言語もバラバラ。たまに言語が同じように見えても、文体がバラバラで、結局違う言語だったり……『内容が分からない』ということだけが、共通だ。

「あー！」

と、俺と同じように、本を物色していたのはが、驚いたように声を上げる。

「これ、日本語だよ！」

「え！？」

驚いて、その本を覗き込む。

「……」SSS・旅客機墜落事件概要？」

それは、一昨年のクリスマスに、世間を騒がせた事件の名前だっ

た。

「……なんで、こんな物がここに。」

「これ、一昨年のクリスマスに起こった事件だよな？」

変な気分……切迫感、とでも言えるだろうか。」

何かに突き動かされるように、二人して食い入るようにその本の頁を捲っていく。

図鑑並みの厚みは伊達ではなく、途中、難解な表現や、意味不明な文字の羅列があったりと、読みづらかった。

だがそれでも、事件の概要、被害者の総数、……そして、原因が、極めて克明に、まるで、その時その場所で見えたかのように記されていた。

「……あの事故、結局は原因が不明だったんだよね？」

「ああ。……でも、実際は違ってたみたいだ」

読み進めていくと、原因の箇所には辿り着いた。

それによると、原因は……

「大規模な魔力噴出による、駆動系の破損……？」

「おいおい……マジかよ。」

「魔力噴出って……」

なのはが、強張った表情で呟いた。

魔力噴出。

それは、術式に乗せた魔法ではなく、ダイレクトに魔力そのものがあふれ出てしまう……言ってしまうえば、暴走状態のことを指す。

何らかの影響で、誰かの魔力が制御不能の状態に陥り、結果……旅客機を墜落させた。

その魔力の持ち主は、きっと……

「生存者、一名」

ニュースでは、7歳の子供だった、としか報道されていない。男児なのか女児なのかも不明だが、ほぼ間違いなく、この子だろう。生きていれば、なのはと同一年。

次のページで、名前が分かるはず……そう思い、ページを捲る。

「あれ……？」

次のページは、白紙だった。なんでこんな唐突に……

「ちよつと待つて」

なのはが、白紙のページと、前のページとの隙間を開く。そこには、ほんの僅かに、ぎざぎざした……明らかに、意図的にページが破り取られた痕跡があった。

何で、この頁だけが……首をかしげる俺達の元に、クロノの念話が入った。

『秀人、今から戻る』

「ああ、わかった」

動揺は、声に出なかつたと信じたい。

……それじゃあ、本を戻そう。

「……………」

いや、待った。

この事件は、魔法絡みの事件だ。しかも、何やらキナ臭い。頁が破られているということはつまり、少なくとも、誰かにとっては、見られては困る資料なのだろう。

今回の闇の書事件と無関係かもしれないけど……念のためだ。

本を、目印を付けて書架の裏に隠す。今度来た時に回収しよう。

「なのは」

呼ばれたなのはは、こくんと頷いた。

「うん、秘密だよね？」

「ああ、頼む」

短いやり取りをして……俺達は、クロノ達が戻ってくるのを待った。

さっきの本……何故あれが妙に気になったのか、その理由は、最後までわからなかった。

第四十九話（後書き）

すみません。こんな、分かりやすい伏線しか張れなかったんです、

展開は、仕事中の脳内妄想で補っております（笑）

第五十話

「ふああああ……」

あー……眠い。

「……もう朝、か」

「……そうだね」

「……うん」

自宅へ向かう道。空はすっかりと白み、早朝の空気を漂わせていた。

戦闘直後は、その高揚感で眠気を感じないけど……事後処理をしているうちに、ドカンと眠気がやってくる。

でも、久しぶりだなあ、この感覚。

微妙に湿気た空気の中を、疲れた身体を引きずって歩く、この感覚。

ちょっと違うのは、背中にのしかかる微妙な重さと温かさ。それと、両隣を歩く足音。

「すー……すー……」

「くー……くー……」

足音に混ざるように、二つの寝息が聞こえてくる。俺の背中……それと、隣を歩くアルフの背中から。

「秀人、代わろうか？」

「いや。お前だって疲れてるだろ」

ユーノも、何だか足取りが怪しい。それとなく進路を修正してやっているが、右へフラフラ、左へフラフラ……正直、危なっかしくて見てもらえない。

ジョギングをする人、犬の散歩をする人、新聞配達のカブ。

徐々に街が朝に向けて動き出す中、俺達はようやく、俺の家に到着した。

転送ポートから、ほんの数メートル。だけど、体感ではもっと長く感じた。それだけ疲れていたんだろう、きつと。

ポケットから鍵を取り出し、開錠。

まず、なのはとフェイトをベッドに寝かせて……押入れから、予備の布団を出して……

どさっ。

そのまま、布団に倒れこんだ。

どさっ。ばたんっ。

多分、アルフとユーノも同じように……ま、いいや。

「おやすみ……なさい……」

今は、ゆっくりと寝て……ぐう。

「はああああ……」

マリエルは、深い深いため息をつき、椅子に座ったまま大きく身体を逸らす。

「リンディさんも無茶振りするよ……」

机の上に足を投げ出す。その際に発生した風で、積み上げられていた紙の山の数枚がヒラヒラと落ちる。

それを、空中で器用にキャッチし、自身のアイデアに目を通す。

「……やっぱ、こうなっちまうんだよね」

指先で紙片を弄び、ぐしゃっと丸め、放った。既に丸められた紙で一杯になっていたゴミ箱は、それをぽすんと弾く。

「ま、これで行くつきゃないよね」

パネルを操作し、3Dの図形を立体的に出現させる。

その立体は、かなり無骨な形状をしていた。立方体を乱雑に積み上げたような形状に、思い出したように曲線が加わり……かと思えば、また直線になる。

洗練されていない……それどころか、内部機構すら煮詰まっていな

い、未完成の試作品……更に、その草案。未完成の未完成。とはいえ、全くノウハウの無かった技術を組み込み、必要な機能を開発、一応の成果に仕上げたのは、メカニックマイスターたる彼女の技量の高さを示していた。

。ピピピッ、ピピピッ。

と、コンピューターの動作する音のみがあった部屋に、通信を報せる電子音が無味乾燥に響く。

「……つたく、少しは休ませろつての」

鬱陶しそうに、その通信を受ける。

目の前に、囚人服の上に白衣を羽織るといふ、なんとも奇抜かつミスマツチな格好をした女性が映し出される。

「お………珍しいじゃないか。許可が下りたのか？ …………プレシア」

プレシアを目にしたマリエルは、ほんの僅かだが………挑戦的に口角を吊り上げた。

皮肉とも取れる挨拶をスルーし、切り出す。

「バルディッシュの構成素材のサンプル、助かったよ」

振り返った先に鎮座していたのは、秀人のバイク………最近、『スレイプニル』という愛称を得た。その構成素材の多くは、バルディッシュの刃の素材と、ほぼ同質のものが使用されていた。

初陣を経た後に回収した。

どの箇所にも、どの程度の負荷が加わったのかを解析する予定だ。

『それは何より………で、そちらは進んでいて？』

「………あんまり。めぼしい成果は上がっていない」

この、恐らくは管理局が保有する中ではトップクラスに優秀な技術者をして悩ませているのは、他でもない。

極めて特殊な魔力資質を持つ、秀人の専用デバイスの開発である。

「既存のデバイス設計じゃ、どう小細工したところで強度が足りない。カートリッジシステムの出力に、耐えられないんだ」
かといって、十分な強度を持たせたら、巨大かつ鈍重になってしま
う。

『そこへ更に、リンカーコア結合の負荷も想定すると……』
ぼん、と再び3Dモデルを出現させる。

「これが、小型化の限界」

『確かに、これでは駄目ね』

秀人は、瞥力にこそ目を見張るものがあるものの、体格的には平
均的な男性である。

これをそのまま装着するとなれば、上半身の動きが制約されてし
まう。

それでは本末転倒だ。

一般的な杖型にしてしまえば、いざとなれば棍棒代わりに使える
か……という考えもあったのだが、マリエルの美学に反したことも
あり、没になった。

「そもそも、秀人の希望じゃないからな」

秀人が求めたのは、手持ちの武装ではなく……

『『甲冑』、だったかしら？』

「そ。正確には、『腕の一本や二本が無くなるうと、問題なく魔法
の発動補助をしてくれる形状』。腕が無くなる時点で、問題大アリ
だつての……あのバカ」

『確かにあの子、遠距離は得意じゃないみたいよね』

秀人が使える魔法は、近接戦闘系の魔法に偏っている。一応、射
撃や砲撃も可能なのだが、命中率は低く、ゼロ距離から叩き込むよ
うにして使うのが常だ。

『と思つて、新たな素材を鍛造してみたわ』

研究者時代は、動力炉の開発に携わっていたプレシアだ。軽量か
つ堅牢な素材の開発は、お手の物だろう。

「助かるよ。これで小型化が進む」

転送されたデータを、嬉しそうに眺めるマリエル。

プレシアもまた、マリエルの草案を受け取り、目を通す。

「システムは？」

人格AIはプログラム、カートリッジシステムはドライブ、それらの式は出来ているのだが、肝心のもの……それを走らせる大元になるOSが、未定となっていた。

プレシアの疑問に、マリエルはあっさりと答える。

「ベルカ式」

……プレシアは、息を呑むと同時に、納得した。

「……ああ、確かに」

秀人の戦い方は、汎用性と範囲攻撃に重きを置いたミッドチルダの魔導師のものではなく……近接戦闘による一撃の破壊力・突破力に重きを置いた、ベルカの騎士のものだった。

ならば、ベルカ式を選択したのは当然といえる。

「………と、言いたいところだけど」

感心した様子のプレシアに、マリエルは肩をすくめ、おどけた調子で言う。

「全然、データが足りていなくてね。聖王教会の石頭どもには、困ったもんだ。

無限書庫の中から必要なデータが全て見つかるのは、まだずっと先だろうから、取り急ぎ、見つかったデータを活用する」

そう、時間が無いのだ。

三ヶ月から四ヶ月……それは、世間一般からすれば、十分な期間に思えるだろう。

だが、今だ研究段階のカートリッジシステムを搭載するという暴挙に加え、秀人の魔力資質による負荷に耐え、更には武器としての強度まで求められるのだ。

本来なら、数年のスパンで取り組むべき大仕事。

「ベルカの術式を、ミッドの術式でエミュレートする、擬似ベルカ式。」

……まあ、『擬似』じゃあ聞こえが悪いから、『近代ベルカ式』とでも呼ぼう」

『近代、ベルカ式……………』

ゆっくりと呟くプレシア。

『……………教会が、黙っていないでしょうね』

もし、それが実用化されたとしたら……………資質が無くとも、ベルカ式の魔法が使えるようになる。

聖王教会……………厳正な宗教集団である彼らの中には、ベルカ式に適正があるということを、一種のステータスのように感じている輩も少なくない。

その希少価値を無くしてしまう研究が明るみに出れば……………どのような目に遭うか、想像に難くない。

「『データを取りたいのに、あなた達が騎士も資料も貸してくれないから、自分で自己流で作っちゃいましたー』……………って、ことで」

違法性は無いのだから、問題は無い。

あくまで、そう言い張るつもりのようなのだ。

「ま、コイツはデータ収集のための試作機だからね。一般の局員に出回るのは、まだ当分先の話さ。十分にデータを集めて、危険がないように改良して、それから公に発表する」

『秀人は実験台、ということ……………？』

プレシアの声に、僅かに険が混じる。

カートリッジシステムだけなら、何とかなる自信があった。だがそれは、ミッドチルダ式による運用を前提としていたわけで……………未知のOSとの相性は、全くの不明。

影響はゼロかもしれない、もしくは、誤作動で命を削るかもしれない。

それを、秀人で試そうと言うのだ。実験台以外の、どのような言

葉が当てはまるのか。

「でも、そのくらい理由が無けりゃ、囑託局員一人のために専用デバイスを建造したりはできないんだよ」

秀人に専用デバイスを……という話をリンディが打診した際、上層部からは猛烈に反対された。

『階級すら無い囑託魔導師のために、管理局の資金を費やすとは何事か』、と。

だが、カートリッジシステム搭載型デバイスのデータ収集のための実験機、という話になった途端、掌を返したようにあっさりと承諾された。

未完成のカートリッジシステム。もし実用化に漕ぎつければ、管理局の戦力は飛躍的に上昇する。だが、現状では不安定で、場合によっては使用者の命を脅かす機能でもある。

公募したところで、協力者など現れるはずも無い。

だが、秀人は自ら進んで志願していて、異様な耐久力もあり、何より。

「秀人は、囑託魔導師だから」

いざとなれば………使い捨てることが、できるわけで………

「……我が組織ながら、悪辣だよなえ」

じつとその話を聞いていたプレシアが、重い口を開く。

『気が変わったわ、マリエル。先ほどの素材は、提供を取り止める』

「……そうかい」

ふう、と息をつく。

これで、振り出しか………そう考えたマリエルだったが、続くプレシアの言葉を聞き、放心することになった。

『より強靱で、秀人に負担を強くない素材を改めて開発する』

のだろう。

データ量がテラバイトに達するまで、その時間は掛からなかった。

「……………」

僅かに覚醒した意識。

まだ身体は付いてこなくて、思考だけが緩やかに回転を始めた。
ええと……………フェイトと暮らせることになってくユーノくんを迎え
に行つて……………帰り道、秀人さんに背負われて……………ああ、そうだった。
それで、寝ちゃったんだ。

「ん……………」

眩しさを我慢して、目を開ける。すると……………

「すう……………すう……………」

目の前で……………文字通り、ほぼゼロ距離で眠るフェイトの顔が目に入ってきた。

朝日を浴びて輝く金髪。白磁の肌。長い睫。

「……………おお」

不覚にも、ドキツとした。忘れがちになるけど、フェイトって美少女なんだ……………つて、いかんいかん。早く起きなきゃ。

ベッドから身を起こすと、床で雑魚寝する三人……………秀人さん、ユーノくん、アルフ、が
眼に飛び込んできた。

もう……………私が床でも良かったのに。

皆を起こさないように、足音を殺しつつ抜き足差し足、台所に向かう。

ちらつと時計を見上げる。午前十一時。完全に寝坊だ。

「……ま、いいか」

今日は、自主休校ってことで。

「別に、会いたい友達もいないし……」

苦い思い出が、僅かに蘇る。

結局あの子とは、友達になれず終いだっただなあ……

全部、終わったことだ。今更、悔やんだところでどうにもならない。

さてと……五人分の昼食でも、作りますか。

冷蔵庫の中を確認。

「あ……足りない」

食材は、三人分が限界だ。どうやっても、五人分には足りそうに無い。

「……買いに行くか」

寝癖を整え、家計用の共用の財布をポーチに入れる。服は、このままでいいや。

(行ってきます)

心の中で言い、ゆっくりと部屋を出た。

すたすたと住宅街を歩き、スーパーを目指す。

片道十分……いつもだったら、レイジングハートと話でもしながら歩くんだけど、今日はそれが無い。十分がこんなに長いなんて知らなかったなあ……

スーパーで買い物を済ませ、店を出る。

五人分にもなれば、やはりずっしりと重い。

フローターを使って運ぼうとして……クロノの忠告を思い出した。

『君は日常生活の中で、結構な割合で魔法を使用しているな』

そりゃあ、便利なもの。魔法陣や魔力光を発生させないレベルな

ら、何の問題も無い筈だった。

『当面的の間、そういった用途での魔法の使用を控えるように。魔力を察知され、追跡される可能性がある』

……はいはい。頑張って手で運びますよー、っと。

ビニール袋を担いで、えっちらおっちら。

荷物が多いときは、秀人さんとバイクで来たり、魔法で飛んだりしていたから、忘れがちになる。

「自分のバイク、欲しいなあ」

まあ、あと七年は我慢しないと無理なんだけど。年齢的にも、背丈的にも。

「あ……た、高町!!」

……と、つらつらと考え事をしながら歩いていたら、誰かに呼び止められた。

声で、何となく誰かは分かった。

「……………八代さん」

件の、八代望その人だった。

ランドセルを背負ったまま。学校帰りに、こっちに来たらしい。

「あ、あのさ……」

「学校はどうしたの？ まだ、お昼休みの時間じゃない」

「半日授業だったから……………これ、今日のプリント」

私と彼女は、友達じゃない。

だから……………言葉に親しみなんて、込めるべきじゃないんだ。

「ありがとう。用は済んだ？」

意図的に無表情の仮面を被り、突き放す。

「何で今日、学校休んでたの……………？」

「あなたには関係ない」

「……………！」

言葉の棘に突き刺され、びくつと強張る。

傷ついた表情。握り締められる手。それを見て、胸が痛まないと言え、嘘になる。でも、仕方ないんだ。

……………以前、八代さんはジュエルシードに憑かれ、とても危険な目に遭った。

その原因こそジュエルシードだけど、暴走の切っ掛けは……………私だった。迂闊に仲良くなって、下手に八代さんの気持ちに触れてしまつて……………

だから、今度こそ。今度こそ、私は失敗しない。絶対に、クラスメイトを魔法関係のイザコザには、巻き込まない。そう決めたんだ。

もし、魔法に関することに少しでも触れたら……………例え、これ以上に嫌われても、突き放すと。

「……………ごめん、でも、本当に何でもないから」
顔を伏せ、踵を返す。

「待って……………」

呼び止める声を無視して、歩き出す。

もうこれ以上、彼女と関わってはいけない。私は、彼女にとって……………疫病神みたいなものなんだから。

「待って……！」

意外と強い力で手を引かれ、引き止められた。

「放して」

少しだけ険を強めた言葉を突きつける。

でも、私の手を握る手は、緩まない。

怒っているわけでも、泣いている訳でもない。ただ、悲しさだけを浮かべ、私の目を見つめる。

「……………もう、やめようよ」

「……………え？」

一瞬、耳を疑った。

「絶交とか、そういうの……もう嫌なんだ」

それは、静かな言葉だった。

「学校で知らんぷりしたり、避けたり……そういうの、全部やめようよ！」

でも、その言葉は……確かに、私の無表情の仮面を剥がしていく。

「え……あ、あの……」

しどろもどろに、身を引く。でも、しっかりと掴まれた手が、私を引き止める。

「前みたいに……あの日の、前みたいに……」

いつしか私は、逃げようとするのを止めていた。

「……友達に、戻ろうよ」

……やっぱり、駄目だ。

私は、非情になり切れない甘ちゃん……どうしようもない、寂しがり屋だ。

だから、こんな風に真っ直ぐに言われたら……何も、言えなくなってしまう。

「高町は、私のこと……そんなに嫌い？」

「そ、」

そんなこと、無い。

「私は……ッ!？」

大事な事を伝えようとして……いきなり、押し黙ってしまった。

……今、何かが……引……か……

身体に染み付いた、一種の第六感。

魔力察知能力に。

ほんの微量だけど、これは……魔力だ。

発生源は……向こうの、雑木林？

「八代さん、ごめん。本当に、ごめんなさい……でも、お願い。ちゃんと、返事するから、今日は……」

ほんの微弱的な魔力は、徐々に小さくなっていく。

もしかしたら、何か起きているのかもしれない。ここで八代さんと一緒にいたら、以前の二の舞になってしまう。

「……ごめんツ！ 明日、ちゃんと返事するから……！」
手を、やさしく振り解く。

「高町！ ちよつと……！」

「ごめん、ともう一度呟きながら、荷物を放り、走り出した。

雑木林の中は、昼間だというのに薄暗く、圧迫感を感じさせた。

「……」
「ごくりと、怯んで生唾を飲んだ。

「ええい……行くぞ……！」

魔力が弱くなったとはいえ、成人男性一人を叩き伏せるくらいの力は残っている。

自らを鼓舞し、土の地面に歩を進める。

僅かな魔力を頼りに、雑木林の中を探索していく。

ガサッ

「！」
「今、何か動く音がした。

茂みの影から、紅い何かがちらちらと見え隠れしている。

「……………」

警戒しながら近寄り……その正体を知った。

「女の子……？」

簡素なワンピース……それ以外に、何も身に着けていない。明らかに訳ありな風体の、紅い頭髮が目を引き少女だった。赤毛を通り越して、完全に紅色の頭髮は、この世界の人間ではないということを明確に示していた。多分何か巻き込まれて、ユーノくんみたいに、ここに漂着したんだ。

「ちょっと、どうしたの！？ 大丈夫！？」

背中に手を添え、上体を起こす。

……顔が悪い。それに、妙に冷たい。呼吸は………ある！

『秀人さん、秀人さん！！』

緊急コール。

『な……何だ、どうした！？』

飛び起きたらしい秀人さんが、すぐに応じた。

手短かに状況を説明して、位置情報を送信。

『わかった、すぐ行く！！』

あとは……この子を！

「高町！」

は！？

「八代さん、どうして……！？」

何で……！？ ちゃんと、置いてきた筈なのに！！

「あんな逃げ方したら、『何かあります』って隠してるのバレバレよ！ その子、けがでもしてるの！？」

ズボンが汚れるのも構わず、膝を地面につき、倒れた少女の状態を確認する。

「目立った外傷は無し。脈はあるけど………体温が低い」

妙に慣れた手つきで、てきぱきと各部をチェックしていく。
ハッと気付き、八代さんの肩を掴む。

「駄目……！ 八代さんは、『こっち』に関わったら……！」
……また、何かに巻き込まれてしまう！

「今は、そんな事情は後回し！」

でも、八代さんは逆に私を叱り付けた。

「近くに病院……は、無いか。……高町、ケータイ持ってる？」

「あ、ご、ごめんなさい……家に」

財布以外、持ってくるのを忘れてしまった。

「で、でも、人呼んだから……！」

……ダンッ！！

「なのはッ！！」

飛行してショートカットしてきたのだろう。秀人さんが、唐突に目の前に着地した。

「うおあッ！？ そ、空から人が……！？」

……しまった、見られた！

「高町……今、その人……？」

ああ、どうしよう、どうしよう……

「……ああ、もういいや！ 両方とも来い！」

秀人さんは秀人さんで焦っていたらしい。

紅髪の少女と、私と……何故か八代さんを抱えて……ええええええええっ！？

「行くぞ！」

飛行魔法を、行使した！！

途端、すっ飛んで行く風景！

第五十話（後書き）

折角だから、のぞみんを巻き込んでみました（笑）
段々、構想が練れてきたぞー！

第五十一話（前書き）

ウボアー残業多すぎてラノベが読めない、、
でも、それのおとしもの12まで読みました。

あ、あと。

pV850000、ユニークが640000を超えました。ありがとう
うございます！

第五十一話

数分間の空の旅は、あっという間に終着した。

ばんっ！ と秀人さんがドアを開ける。

「ユーノ！ アルフ！ ちょっと手エ貸せ！！」
保護した女の子を小脇に抱え、室内に飛び込んだ。

ユーノくとアルフは、治療魔法を使うことができる。とりあえず、アースラ医療班に連絡するまでの応急処置はできるだろう。

さて、こっちは……

「八代さん、大丈夫？」

「ぜー、ぜー……！！ 全然、大丈夫じゃないわよ……！ お、おえ……！」

全力で飛ばしたとはいえ、たったの数分……本気の空戦訓練に比べたら朝飯前……じゃなくて、昼飯前だ。

……でも、風を切り裂いて飛ぶ感覚を知らない八代さんは、疲労困憊だった。

「……ちや、ちゃんと、説明……ゲホッ！！ しなさいよ……！？」
「あ……」

そうだなあ……ノリで連れて来ちゃったけど、面倒くさい。

いつそのこと、抱えたまま空戦機動に持ち込んで、意識をブラックアウトさせてしまう手もあるよね……って、駄目だ。飛ぶだけの魔力が無い。

「高町っ！ 黙ってないで……」

説明するか、すつとぼけるかの二択。

「やだ」

後者に決定。

「んがっ……………！！ さっき、説明するって言ったじゃない！ こん
な……………」

さっきは情にほだされて、あやうく口を滑らせるところだった。

「気が変わったの。お願いだから、もう帰ってよ……………」

……………何で、わかってくれないんだろう。

「私は、」

ひくっ……………と、のどが詰まるような錯覚を覚える。

……………これから言おうとしているのは、八代さんの気持ちを、踏み
躪る言葉。こんな私を、『友達』と言ってくれた彼女の気持ちを傷
つける、最低の行為。

でも……………でも……………八代さんの身の安全には、代えられない。

私一人が嫌われる程度の代償で、彼女が平穩無事に暮らせるなら
……………安いものだ。

「私は、あなたみたいな人……………！」

ばくばくと、罪悪感に早鐘を打つ心臓を押さえつけ、決定的な一
言を……………！！

「なのは、どこ行ってたんだよー！？」

さっき秀人さんが駆け込んだドアが、内側から、どばん！ と開い
た。

「起きたのに隣にいないから、ボク……………」

と、その目が私の隣にいた八代さんに向き……………

「……………ひうつッ……………！！」

ばんっー！

……ドアの向こうに、引っ込んだ。

「……え、ええと……？ ごめん、よく聞こえなかったんだけど……」

「……なんでもない」

これは……フェイトに助けられた、と考えてもいいのだろうか。

……冷静に考えたら、事情も話さず納得しろ、というのも理不尽かもしれない。

「八代さん」

口調を正し、告げる。

「あなたには、ちゃんと事情を説明する。信じて……とは言えないけど、最後まで、ちゃんと聞いてくれる……？」

八代さんは、私の本気を悟ったのか、重々しく頷いた。

「……わかった」

そして、私は彼女を家に招き入れた。

「お邪魔します」

八代さんは躊躇無く、私達の家を足踏み入れる。これで、八畳一間に合計七人……パンク寸前だ。

診察を受ける少女を見ていた秀人さんが、私達を振り返った。

「おお、さっきの子。悪かったな、つい勢いで……」

困ったときの癖……頭を掻いて、ぺこりと軽く頭を下げた。

「あ、いえ……」

八代さんも、毒気を抜かれたように軽く応じた。

その、秀人さんの背中から。

じーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーと、顔半分だけを出して、八代さんを伺う赤い瞳があった。言わずもがな、フェイトだ。

「あなた、さっきの……この家に住んでるの？」

八代さんが声をかける。すると、ぱつと秀人さんの背中に隠れてしまう。

「え……？」

困惑し、言葉が途切れる。

また、フェイトが顔を出して、じーーーーーと八代さんを観察し出す。

「あー……気にしないでやってくれ」

秀人さんが、フェイトの頭をぼすぼすと乱暴に撫でる。

「あの、あの子は……？」

「さっきからアルフとユーノが………っというかフェイト、ちょっと離れてくれ。歩きにくいっつーの」

「………やだ」

「まったく……人見知りはいらないぞ？」

コバンザメのようにくつつくフェイトに苦笑しながら、八代さんを招く。

例の女の子は、ベッドの上に寝かされていた。

アルフが体の状態を調べ、ユーノくんが細かな外傷を塞いでいく。

「どんな状態だ？」

ユーノくとアルフは、なんとも言えない顔で振り向き……

「………はあ」「」

と、ため息をついた。

「お、おい……？ 何だ？ ちゃんと説明してくれよ」

二人で顔を見合わせ、ユーノくんが頷いた。そして、病状を告げる。

「………空腹による貧血」

「………はい？」

秀人さんも私も八代さんも、きつと同じような表情を浮かべていたことだろう。

「単に、ハラが減ってただけ……？」

「は、ははは……何それ……」

べしゃっ、と思わずへたり込んでしまった。
全く、人騒がせな……でも、大事にならなくてよかった。
そうと決まれば……

「……………よっし！ ご飯作ろうか！」

遠回りしちゃったけど、結局必要なのは食事だ。

「高町、これ……………」

と、八代さんが手に持っていたビニール袋を差し出してきた。あ
……………そういえば、置きっ放しにしてきちゃったんだ。それを、わ
ざわざ拾ってきてくれていたらしい。

「ありがとう」

多めに買っておいだから、冷蔵庫の中身も総動員すればたっぷり
作れそうだ。

包丁とまな板を準備して、野菜を水洗いして、準備完了。

「なのは、手伝うよ」

と、コバンザメを引っぺがしてきた秀人さんが、腕まくりをして
台所にやってきた。

「フェイトは？」

「置いてきた」

くいつと指差した先では……

「……………」

漫画を広げ顔を隠し、コミュニケーションを完全拒否したフェイ
トと。

「私、八代望つていうの。高町のクラスメイトで……………」
懸命にコミュニケーションを図る八代さん。

「……………」

フェイトは、頑なに目を合わせようとしない。

まあ、育ってきた環境が環境で、まともにも他人と接したことが無
いから、仕方ないのかも……………。

「ごめん八代さん、その子、人見知りが激しくて………フェイト、返事くらいしてあげなさい！」

「………ううう」

助けを求めるように、アルフを見つめる。が、アルフはユーノくと共に、少女の看病に掛かりきりで、救援は望めない。

「………これ読むでるから無理」

結局また、漫画本を取り出してしまふ。

「あ、それ………仮面ライダーSPIRITS？」

ぴくん、とフェイトが反応した。

「………うん」

おお………フェイトが返事をした。

「私の幼馴染がそういう漫画たくさん持ってて、よく読むんだけど

………」

「………何巻？」

漫画本で顔を隠したまま、ぼそつと聞いた。

「え？」

「何巻、が、好き………？」

顔を隠しているのは変わらないが、目はしっかりと八代さんを見つめていた。

「………大丈夫、かな。」

「………はあ」

でも、何だか寂しい気もする………。

「大丈夫」

ぼん、と秀人さんの手が、私の頭を軽く撫でた。

「………」

無言で、人差し指を口の前に立てる。

「へえ………あなた、高町の友達なんだ」

「うん。なのはは、ボクの初めてのともだち」

「どづいつ理由で知り合ったの？」

「おかーさんに言われて探し物してたら、なのはも同じもの探してて」

「へえ……それで？」

「ぶつとばしたら、ぶつとばされた」

「……でも、今は一番の友達なんだ」

「……」

「……一番。」

「フェイトに、なのは以外に友達が出来たって、なのはが一番だよ」

「……うん！」

照れくさくもあるけど……それ以上に、嬉しい。

「……よし！」

包丁を手に、食材を刻む。

フライパンに油を敷き、鍋と共に火を掛ける。

秀人さんのサポートが追いつかないくらいのスピードで、料理を仕上げていく。

うん……今日は記念日だ！ 思いっきり豪華な昼食を、用意しよう！

そして、一時間後。

「できたぞー。机の上片付けろー」

台所を、シンクまで一杯にするほど大量の料理が埋め尽くしていた。

「ごはんだっ！！」

フェイトが、ぱつと顔を輝かせる。

隣では、八代さんがびっくりした様子でそれを見ていた。

「あ……」

我に返ったフェイトが、恥じ入るように俯いた。

「ユーノ、アルフ、その子はどうだ？」

「うん、血糖値も安定したから、そろそろ目を覚ますはずだよ」

「やれやれ……………ごめんよフェイト、お待たせ」

集中していた二人が、やや疲れた様子で立ち上がった。

「初めまして。僕はユーノ・スクライア。この家の同居人をやつてるよ」

「アタシはアルフ。フェイトと遊んでくれてありがとうね……………ええと、ヤシロ？」

「はい、八代望です。初めまして」

自己紹介も済んだところで、食事の時間だ。

予備の座卓も引つ張り出して、料理を並べていく。

「う、う……………」

食事の匂いに釣られて、例の子がようやく目を覚ました。

髪の毛の紅色に反して、瞳は綺麗なブルー。

「おはよう。ご飯、食べるよね？」

「……………んー」

フラフラとした足取りで、ちゃぶ台の脇にちよこんと座る。

頭が半分くらい寝ている状態でも、しっかりとフォークを握んでいる。

よし、それじゃあ……………

「……………いただきます！」

「

作りたての料理が、次々に各人の胃に消えて行く。

「うわ……………うまー！ 何コレ何コレ！ 拘置所のご飯よりずっとおいしい……」

「こ、拘置所!?!」

一番喜んでるのは、やはりフェイトだ。フォークでハンバーガーを、スパゲッティを、次々に口に詰め込む。ハンバーガーが食べたいって言ってたの、覚えておいてよかった。

「これ……高町が作ったの？」

「うん。……そういえば、八代さんも料理するんだっけ？」

以前、葉山君にお弁当を作っていた気がする。

「……………負けたわ。でも、どうしてこんなに上手なの？」

「訳あって、二年くらい自分で家事やってたから」

「……………そっか」

それ以上は、聞いてこなかった。

見れば、例の子の持つフォークは、ちゃぶ台や皿の端っこをかつん、かつん、と突つつくだけで、全く料理を口に出来ていない。

「しゃーなーな、もう……………」

秀人さんが、少女の手から取ったフォークでハンバーガーを切り分け、女の子の口元に持って行く。女の子は、ふんふんと匂いを嗅ぐや否や、ぱくつと食いついた。

「……………はぐっ」

もぐもぐ、ぐくん。

二口目、三口目と続け……………

「……………んぁ？」

ここにきて、ようやく完全に目が覚めたらしい。

吊り目気味のブルーの瞳が、秀人さんの顔を間近で捉えた。

「よっ。おはよう」

爽やかに挨拶する秀人さん。フォークを返却して、自分の食事に戻る。

その秀人さんの顔を、じーっと、じーーーーーと、無言無表情で見つめ、そして……………

「ぎゃあああああああああああああああああああああ
あっ！！！！！！？」

「うおおおッ!？」

思わず秀人さんが仰け反るほどの悲鳴を上げた!

どんどん!!

がんっ!

どすんっ!

……左右と上の階から、苛立たしく壁や床を叩く音が聞こえた。
これだから、集合住宅は困る。

「お、おま、おまえはッ!!」

女の子は、フォーク片手にワナワナと震え、秀人さんを睨みつけた。

「……悪い、何かしたっけ？」

「ざけんなっ! 忘れたとは言わせねえぞっ!!」
が、ガラ悪ッ!!

「いや……マジで身に覚えが無いんだが……」

困惑する秀人さんに、今にも飛び掛って行きそうな剣幕。

アルフとユーノくんが、僅かに身構える。

「え? え?」

緊迫した空気に、八代さんが戸惑ったように左右を見渡す。

「……!」

女の子が、フォークを逆手に構え……

ぐわっ……

「ねえ、教えて……？ 何で高町は、私と絶交したの？
でも、約束は約束だ。」

「秀人さん……」

「ああ。あの高台でいいな？」

「うん」

「ここじゃなくて……いつも、魔法の練習に使っている、あの高台で話そう。」

「あの……もしかして、また……？」

「うん。飛んでいく」

ひくっ、と顔が引きつった。

「どうする？ やめる？ それでもいいけど」

「……上等！ ドンと来なさい！」

開き直った人間は、意外と動じないものだ。

本日二回目となる飛行に、八代さんは悲鳴一つ上げずに耐え切った。

……唇が紫色だけど。

秀人さんは、軽く人払いの結界を展開して、歩いて行ってしまった。

私の好きなように……そういうことだろう。

「あのね……」

そして、話せる限りのことを話した。

ユーノくん、秀人さんとの出会い。

魔法の力。

ジュエルシードの力と、それがもたらした結果。

「あの地震……私が……？」

無言で頷き、肯定。

「……もう、あんな危険な目に遭わせるわけにはいかない」
だから遠ざけたのだと、告げた。

魔法の力は、災厄を呼び寄せてしまうものだ。

「………じゃないわよ」

俯いていた八代さんが、ぼそりと呟いた。

「………そういうことだから。もう私に、」
関わらないで。

そう言おうとした瞬間、伸びてきた手が、私の胸倉を思いつきり
掴み、引き寄せた。

「ふざけんじゃないわよ!!」

「………え？」

目をぱちくりさせて、目の前いっぱい広がる八代さんの顔を見
つめる。

「魔法だとか、災厄だとか言って………！ 私の気持ちなんて、
欠片も考えてないじゃない！」

「………違う!!」

聞き捨てのならない言葉に、私の頭に血が上った。

「ちゃんとあなたのことを、考えた結果だ!!」
八代さんの胸倉を掴む。

「あなたには、もう傷ついて欲しくないから………だから………!!」
「それが、考えてないって言ってんのよ!!」

もう、完全に頭に血が上って、冷静な言葉が出てこない。

がくがくと互いを揺さぶり、思いの丈をぶつけあう。

「私にさえ関わらなかつたら、あなたはジュエルシードに取り込ま

れずに済んだんだ！」

「だからって、どうして絶交になるのよ！ もう、終わったことじゃない！」

「私の近くにいたら、また巻き込まれるかもしれないからだよ！！」「そんな確証の無い考えで、私を避けてたっていうの……！？」

「そうだよ！ なのに、何でまた私に近づいてきたのよ！ クラスで孤立していた私に対するお情け！？ 馬鹿にしないで！！」

どんっ、と八代さんを突き飛ばす。

尻餅をついた八代さんは、すぐに立ち上がり……私に掴みかかってきた。

「私は……お情けとか、関係無しに！！」

ぐるんっ、と視界がひっくり返る。

地面に背中がぶつかり、一瞬だけ息が詰まる。

見上げた先……空を背景に、八代さんの顔がアップで映った。

「高町と、友達になりたかったの！！」

……一瞬、思考が固まった。

「……最初は、いつも無愛想で、お高くとまってる嫌な奴だと思ってた。

付き合い悪いし、サボり魔だし、根暗だし……でも、気付いたら目で追ってた。『いつも、何の本読んでるんだろう』『どんな性格の人なのかな』……『お話、したいなあ』って。

授業参観の日、初めて自分から話しかけて……内心、すごくドキドキしてたんだよ？」

……思えば、意識して築いていた壁を乗り越えて、声を掛けてきてくれたのは……八代さんが初めてだった。不躰で無神経だったけど……確かに、私の心に触れた。

「一緒に、肝試ししたよね。夜に学校に忍び込んで……本物のお化けが出ちゃって、大変だった」

ジュエルシードの搜索の際、運悪く二人が巻き込まれてしまった。でも、翌日にはけろっとした顔で、『おはよう』って言ってくれたっけ。

「健太のサッカーの試合、応援しに行ったよね。高町、柄にも無く熱心に応援して」

「でも……………その帰りに」

「……………うん、少しだけど、覚えてる」

あの日。葉山君の気持ちを知ってしまった……………いや、前から薄々感じていたんだろっけど、目の前で聞いてしまった八代さんは、ジュエルシードを発動してしまった。

「あの時は、高町を許せないって気持ちが一杯になって……………人をたくさん巻き込んだじゃった」

「……………」

「確かに、高町の言うこともわかるよ。二度も、ジュエルシードっていう危険物の騒動に巻き込まれたんだから」

でも、と前置きして、私の手を引っ張って立ち上がらせ、言った。

「絶交したまま途切れるなんて……………そんなの、絶対に哀しいよ」

ぱきん、と、頑なに我を押し込めていた堰に、罅が入った。

「さっき、私の気持ちのことしか話さなかったけど……………高町は、どうなの？」

「どっ……………って？」

ひび割れは、堰をあっという間に侵食し、結界寸前にまで追い込む。

「……………私のこと、嫌い？」

こんなにも一生懸命に、気持ちを伝えてくれている。

それが、照れくさくて……………胸の奥がぽかぽかして……………嬉しい。

「……………そんなこと、無い」

堰は、完全に決壊した。

鉄砲水のように、押し込めていた感情があふれ出し始める。

「わ、私は、八代さんと仲良くなりたい。

いつかまた絶交することになるかもしれない、けど、喧嘩別れするかもしれない、けど………私は、」

緊張で、言葉にどもりが出てしまう。

「あなたの、友達になりたい」

それが、私の本心だった。

「つまらないことで、喧嘩になるかもしれない」

「何度でも、仲直りすればいい！」

「学校を休んで、会えない日が続くかもしれない」

「だったら、私から会いに行く！」

一陣の風のように、私の不安を悉く吹き飛ばす。

「それでも望は、私の友達でいてくれる……？」

望は、一瞬だけ驚いたような顔をして………いっそう強く、手を握った。

「あつたり前でしょ、なのは！」

………深かった溝が、すれ違っていた気持ち………ようやく、結びついた。

第五十一話（後書き）

やっぱり、「友情とはぶつかりあうことで生まれる」というのは間違いないと思うんですよ。

喧嘩の一つでもしないと、すぐに音信不通になったりしますからね。

第五十二話（前書き）

今回はカオス回です。

第五十二話

……目を閉じて、意識を集中する。

胸の奥。心臓の隣辺り。

そこに、リンカーコアがあるものと仮定してイメージすると、より正確な魔力運用が出来る……リゼのアドバイスだ。

「すー……はー……」

一気に大魔力を搾り出すのではなく、緩やかに、全身の回路を使って、魔力の純度を上げて行く。

「十分です。では、次の工程へ」

高めた魔力を、手元に集中させていく。

ポウツ……

球状の魔力が、薄らぼんやりと実体化を始める。

脳裏にイメージするのは、守護騎士の一体……『剣の騎士』。

そして、手にしていた……

「召喚」

守護騎士システム……その中から、武装のみを選択。不定形だった魔力が、結実する。

「焰の魔剣」

バキインツ！！

そして、手に感じる、確かな重み。

「初めてにしては、上々の出来です。主」

目を開ける。

「……当然でしょ」

右手には、無骨な片刃の剣が握られていた。

シユッ……！！

リーゼの手に、ほぼ同じ刃渡りの片刃剣が出現する。
要した時間は、数秒も無いだろう。

確かに私は、細かな魔力運用が苦手だ。

短所を無視して、長所を徹底的に伸ばすという方法もある……と
いう話を聞いたが、それでは駄目だ。

あの忌々しいライダー野郎……あいつも、魔法こそチャチかった
けど、魔力の運用技術は相当のものだった。それこそ、このリーゼ
に匹敵するほど。

だとしたら、短所を克服しないことには勝てない。

全てのパラメーターを、バランス良く向上させていくというのが、
私のプランだった。

だからこうして、訓練を重ねているわけだが……

「チッ………まだ、あんたと同じようには出来ないか」

リーゼは、感情の無い顔をふるふる、と左右に振った。

「私のこれは、ただの魔力刃です。主のそれは、一部とはいえ守護
騎士を使役する、召喚魔法。求められる技量の土台が違いすぎます」

「そーなんだけどさあ………」

思い起こすのは、『鉄槌』の死に際。

目の前に襲い来る、巨大な猛禽。

「アイツの、あの不死鳥。」

あれも召喚魔法なんですよ？」

だから、私も召喚魔法で対抗……と思ったんだけど。

「はい、そうです。かなり……いえ。正直、ありえない規模の」

淡々と……それでいて、僅かな畏怖を感じさせる。

「そんなに難しいの？」

ただのデカイ炎の鳥だったら、簡単に出来る。

ただ攻撃魔法に炎の属性を追加して、形を整えればいいだけ。

多分、私にもわかりやすいように言葉を噛み砕き……話しました。「魔法とは、要は弾丸です。一定のエネルギーで射出された後は、そのエネルギーを消費するのみ。いずれは消えます」……そんなもん、いちいち確認しなくても分かっている。それをわざわざ口にするということは……これから口にする事への反例のためだろう。

「ですが、あれは……… 召喚されたモノが、独自にエネルギーを発生させ、自らを維持していました。つまり、」

「術者から独立して、エネルギーを永続的に維持し続けられる。

簡単に言えば、『生きた魔法』ってトコ？」

先回りして、さくつと回答。

「その通りです」

「でもさ、それって使い魔と何が違うの？」

自意識を持つて、自己を維持する魔法生命体。それは、使い魔と同じじゃない？」

「私を含む『使い魔』という存在は、存在の基盤となった依代が、必ず存在します。

その依代に、マスターのリンカーコアの一部を移植・共有することで、魔法生命体となります」

びよこびよこ、とリーゼの猫尻尾が揺れる。

リーゼの依代は、元マスターの飼い猫だったっけ。

「ですが、あの不死鳥が発動する際に用いたのは、リンカーコアの断片のみでした」

あの、撒き散らされた血液は違うんだらうか。

「あれは、単なる構成素材です。依代ではありません」

う、ううん……？」

私は、足りない頭をなんとか回転させる。

「……依代ってというのは、魔法を発動させるための核になるもの……」

…構成素材は、出来上がった魔法の、外殻になるもの……？」

「ほぼ正解です」

と、リーゼは言った。

「自身の魔力のみで、自意識を持った存在を創り出す……？」

それは、生命を創造することに等しい。

もし、そうだとしたら……

「無機物に生命を宿すことも、

果ては、死者を蘇生することも可能でしょう。

神域を侵す……まさに、真性の『魔法』です」

なによそれ……反則じゃない。

「ですが、彼はまだ、意識的に召喚を行えているわけではないようです」

「え？」

どういうこと？

映像記録は、『鉄槌』が殺された時点で途切れている。そこから先は推測しかできないんだけど……

「私は、全てを観察していましたから」

「……………ああ、そうだった」

このリーゼは、私が従えるまで、影でいろいろ暗躍していたんだっただけ。なら、守護騎士や敵をマークしていたのも頷ける。

「あの不死鳥は、『鉄槌』を撃破した後、リンカーコアの断片へと還元され、術者の体内へ還っていきました。彼はそのような指示を出していませんでしたから、恐らく、あの不死鳥自身の判断でしょう」

んー……えーと……

「つまりあの不死鳥は、『呼び出された』っていうより、『自ら出

てきた』……？」

リーゼは、こくと頷いた。

うわぁ……ありえないにも程がある。

「それ、おかしくない？ リンカーコアが、勝手に一部を切り離して出てくるなんて」

まるで、リンカーコアそのものに意……

「申し訳ありません。ここから先は、私の推測になるのですが……」

「彼のリンカーコアは、先天的・後天的……何らかの要因で、変異してしまっただけでしょう。休眠状態になることも無く、常に体内で大量の魔力が循環していました」

体内での、魔力の循環。

奇しくもそれは、さっき私が行った、魔力の純度を上げる工程そのものだった。

それを年がら年中、行っている……？

「恐らくは、外的な衝撃で肉体が著しく損傷してしまったのでしよう。」

意識を失った肉体の危機……それに生存本能が、リンカーコアの起動という形で反応し、損傷を修復し、回復させたものかと」

……一般人のリンカーコアの大きさだったなら、それは肉体の機能を正常に戻す程度で済んだ。本当に、ただそれだけだったなら、それはごくありふれた感動話として埋没したことだろう。

けれど、あいつのリンカーコアは多分、そんじょそらの魔導師なんか比較にならないほど大きく、強大だった。そして、それまで一度も起動させておらず、加減が利かなかったということもあり、結果……

「どんな怪我でも、宿主の無意識のうちに修復してしまうことが定着した」

正解、というふうに、リーゼが首肯する。

「そして、それを繰り返すうちに、リンカーコアに自我が芽生えた」

宿主の危機に際して、外敵に能動的な攻撃を加えるほどに。

「じゃあ、アイツを蒐集するのは無理か」

「そのほうが無難でしょう」

下手したら、闇の書の中で大暴れして、大爆発するかもしれないし。

「まあ、まずは地力を鍛えるときですか」

まずは、アイツと対等に渡り合えるようにならなくちゃ。

ぶんつ、と剣を振る。

「うおつととと……！ お、重つ……！」

刃の重量に負けて、身体が大きく流されてしまった。

「腕の力だけで振るうから、流されるのです。」

下半身で地面を掴み、上半身全体で……」

ヒュンッ……！

快音と共に、リーゼの剣が宙を風ぐ。

「このように。」

まずは、コレを切れるようになりましょうか」

「ごすんつ。」

リーゼの目の前に、魔法で組んだであろう物質が出現する。

触ってみた感じ、鉄に近いだろうか。

何だ、こんなもん……この剣なら、余裕で切断できるに決まっている。何せ、『剣』が自動車を切断するトコ、見たももんね。

思いつきり剣を振りかぶり……

「うおりゃー！」

ゴキーンッ

「いつ……!!」

電気が走ったような衝撃が、腕全体に伝わった。

剣は、刀身の半分ほどを物質にめり込ませ、そこで停止していた。

「……ったああああああああああい!?!」

思わず、剣を取り落としてしまった。

「力任せに叩きつけたら、どんな名剣でも意味がありません」

魔剣を拾い上げるリーゼ。

カンッ……!!

そして、バターを切るように、あっさりと物質を切断する。

「この剣は、勢いと重量で叩き斬る西洋の剣・速さと鋭さで切断する東洋の剣、双方の利点を併せ持っています。使いこなせれば、接近戦で大きな力になるでしょう」

剣を受け取り、もう一度、仮想物質の前に立つ。

これをぶった斬れば、とりあえずは合格か……

何度か素振りをして、その都度リーゼに構えを矯正してもらった。

ひとまず、基礎の基礎……くらいは、形になったと思う。

よし、もう一度……!!

「お待ちください」

勇んで剣を手にした私を、リーゼが引き止める。

「ただ斬るだけでは、何も身につきません」

「ぐ……そ、そうだった」

あのライダー野郎の、憎たらしいまでに的確な言葉を思い出した。

『サンドバッグを殴って、いい気になってたか?』……だったな、

確か。

「そもそも、敵は立ち止まってはくれません。止まった的を相手に、いかに好感触を得ようと、実戦では無意味なのです」

「ずず……と、仮想物質が浮かび上がる。」

でっかい板状の物質は、バレーボール大の球状に形を変える。

「そして、常に一対一とは限りません」

二つ、三つ、四つ……お手玉のように、空中を踊る。

魔法で物質化させた、仮想物質。

それも……非殺傷設定にしていない。ぶつかれば、半端無い怪我を負うだろう。

思わず浮いてしまった冷や汗を拭い、魔剣を握る手に力を入れる。

「……始めて」

そして……

「それでは、主……どうかご無事で」

ギョオオオオンッ！！！！

一斉に、襲い掛かってきた！！

「うあああああああああああああつ！！！！」

目の前に迫ってきた鉄球に、大上段から魔剣を振り下ろす。

ギギンッ！！

「う……………くうっ！！！！」

切断には至らず、目の前数十センチで拮抗。

「横！！」

リーゼの声。でも、もう間に合わない……………！！

ぐきっ……………

「……………げふっ！！」

……………肺の中の酸素を、血反吐と共に吐き出した。

「あ、あ……………！！！！」

ずきずきと、体験したことのない痛みが、全身を支配する。

これが、痛みか。

痛い。苦しい。辛い。

今すぐにでも、痛覚を遮断したい。

でも……………これから戦う奴らは、皆これを覚悟しているんだ。痛み

を知らない半端な覚悟じゃ、勝てっこない。

「……………あああああつ！！！」

膝を叱咤し、立ち上がる。

「主！！！」

再び、リーゼの声。だがそれは、私の身を案じるものではなく、注意を怠った私を叱責するものだ。

「実戦でしたら死んでいきます！」

「わ、かってる……………！！！」

リーゼは私に、痛み止めの魔法だけを施す。完全には消さず、ギリギリ動けるレベルに留める。

「起きなさい！ もう一度です！」

再び、四つの鉄球が飛来する！

「こん……………ちくしょおおおつ！！！」

一発目を、剣で弾く！

二発目は、横！

ビュオツ……………！！！」

跳躍し、回避！

一発を捌けば終わり、じゃない。よけた弾も、すぐに軌道修正をして再来する。

斬ろうにも……………

ガリインツ！！！」

球の曲面が、刃を滑らせてしまい、かすり傷程度にしかならない。

「くっそおおおおおつ！！！」

ボグツ……………！！！」

「うぐアっ……………！！！」

強烈な衝撃と、焼けるような痛み。失われる、左肩の感覚。左肩を砕かれた。

そして、動作が鈍ったところに、残る三発が殺到！

「くウツ……………！！！」

魔剣をかざし、受け止める！

バギンツ！！

「……あ」

魔剣が砕けた、次の瞬間。

鉄球は私の視界を埋め尽くし……

……暗転。

ここではない、どこかの景色。

それを、俯瞰するように……それでいて、一人称で体験しているような、奇妙な視点で眺めていた。

「うつ……うあああ……！」

一人の少年が、泣いていた。

少年の姿は、異様だった。

四肢を強靱なゴム質の器具で拘束され、さらにその身体を、ベッドに四方から縛り付けられていた。さながら、芋虫のように。

拘束具の一部が、丁度腕の形に隆起する。

……自動車のタイヤよりも、遥かに強靱なゴムが。

ビキィッ……！

それに遮られた、鈍い、嫌な音が聞こえた。生木をへし折るような、怖気を催す音が。

「びくっ……！！」

少年の身体が、びくんと跳ねた。

この何度と無く続く痛みに、少年は涙を流していたのだろうか。

「い、痛い……痛い……いいいいいい……」

癩癢を起こし、拘束具の中で身体を暴れさせる。

拘束具の一部に、亀裂が入り……

バツンッ！！

……とうとう、破断した。

ガシャンッ！

弾け飛んだ拘束具の先端が、既に何も飾られなくなった花瓶を砕く。

ばたばたばた……と、明確に苛立ちを感じさせる足音が、病室に近づいてくる。
そして……

「……何を、しているのっ！！」

ガタンッ！と力任せにドアを開き、女性が現れた。

シミと、皺だらけの洋服。

かつては整えられていたであろう髪の毛は、ボサボサの枝毛だらけ。

頬はげっそりとこけ、濁った瞳だけが顔の中心でキラキラと輝いていた。

「お母さん、痛い……！！」

少年の言葉からするに、この恐ろしい女性は、母親らしい。

だが、彼女の顔に、痛みを苦しむ息子を慈しむ気配は微塵も無く、床に落ちた拘束具の一部をギリリと睨みつけ、拾った。

「あああああもう！ また器具を壊して！！ 弁償するのが、一体誰だと思ってるのよ！！」

がりがりとう頭を掻き、拘束具を壁にバシんと叩きつける。

「何度も、何度も、何度も！！ 何回言えばっ！！」

母親が手を振り上げる。

「吾妻さん！」

そこに、音を聞きつけてきた看護婦が割って入った。

「息子さんに、何をしようとしているんですか！」

両腕を掴み、少年から引き剥がす。

「放しなさいよおおおっ！！」

完全にヒステリーを起こした母親が、看護婦の腕の中で暴れる。

やがて、男性の看護師や医師によつて、完全に取り押さえられた。

「吾妻さん、落ち着いてください」

壮年の男性医師が、穏やかな表情を母親に向ける。

その背後で、『研修医』のプレートを胸につけた若い女医が、怯えるように立ちすくんでいた。

「ああ、そうでしょうねえ！ 器具が壊れたら、また新しい器具が必要になるものねえ！？ あんた達医者は、病院は、何も困らないでしょう！」

「吾妻さん、これが無ければ、あなたの息子さんは……」

医師は、やるせない顔で言葉を詰まらせた。

……これで拘束していなければ、恐らくあの少年は、自らの腕力で、命を落とすことになりかねない。

だがそれでも、少年の規格外の筋力の前には対症療法にもならず、こうして幾度と無く破壊されていた。

「そう言つて、また新しいものを売りつけるつもりなんでしょう！」

「？」

「……」

肯定も否定もせず、沈黙する医師。

「あなたたち、もしかしてわざとコイツの病気を治さないで放置してるんじゃないの！？ ……ああ、そうよ！ そうに決まってるわ！ この詐欺師！！」

再び、暴れだした母親を看護師らに取り押さえる。

医師は、傍らの女医に短く指示を出した。

「鎮静剤を」

「は、はいっ……!!」

研修医は、緊張に震える手で注射器に薬品を充填する。そしてそれを、母親の肘関節あたりの血管に注入した。徐々に、身体を弛緩させていく母親。

「あんな、子供……産まな……ければ……」

諦観と、絶望に満ちた恨み言を残し、母親は意識を失った。

「……ひとまず、他の病室に運んで下さい」

「はい」

看護師らは母親を背負い、退室していく。

「……吾妻君。すまないね」

医師は、部屋の片隅にスピアしてあった予備の拘束具を、少年に装着し直す。

そして、その医師も、女医を伴って退室していった。

再び無音となった部屋に、少年のすすり泣く声が寂しく反響した。
「いらない……」

みきみきみき……と、再びあの音の前兆が聞こえ出す。

「こんな『力』……いらないよお!!」

また、生木をへし折るような音がして、視界にスパークが散った。

意識が、緩やかに現実に戻還する。

「……主、起きられましたか」

心配そうに、治療魔法を私に施すリーゼと目が合った。

そっか……顔面に鉄球を喰らって、ノックダウンされたのか。

それで、あんな変な夢を見てしまったのだから。夢にしては、妙にリアル……まるで、本当に誰かの記憶を、追体験しているようだ

った。

「……………うん」

身体は……………まだ、起きられない。暖かく柔らかな枕に、再び頭を預ける。

ふと、自分の枕になっているものが何なのか、気付いた。

「膝枕？」

「はい。お嫌でしたか？」

いや……………全然。というか、むしろ……………

「これ、イイかも……………」

なんとも言えない安心感がある。

「申し訳ありませんでした」

リーゼが、心底申し訳なさそうに謝罪した。

「その……………訓練に、熱が入りすぎてしまいました……………」

猫耳が、ぺたんと伏せられる。

「いや、あれでいい」

まだ顔面に鈍痛が残っている。だけど、もしあれが、仮想物質の鉄球じゃなかったら？

答えは簡単。死だ。

「『一切の手加減無用』……………ちゃんと、約束どおりだよ」

今後も、この方式の訓練を続けよう。

「主。あなたは少し、目先の敵に気を取られすぎです。全方位を警戒しなければ……………」

リーゼから、さっきの訓練でのダメ出しを喰らう。

「うん……………」

それにしても、リーゼってば肌スベスベ……………

「この数ヶ月は、徹底した実戦訓練をあひゃうっ！？」

さわさわ、つと、太ももに手を這わせる。リーゼは、聞いた事が無い珍妙な悲鳴を上げ、飛び上がった。

「あ、あの……………あまり撫で回さないでもらえると……………あっ……………助かります」

「えー聞こえない」

撫で回して、指でなぞって……

ぺろん

「ひゅうっ……！ 主、悪ふざけはお止め下さい！」

肌を舐められ、身じろぎするリーゼ。

膝を抜けば、私の頭が地面に落ちるとわかっているためか、それをしないで耐え続ける。

と、私はソレに気付いた。

ぶるぶると、柔らかかそうに揺れる二つのブツ。

次の瞬間、私の頭はたった一つの欲望に支配された。

揉みたい。

……と。

その欲望のままに、太ももへ気をつけている隙を突いて……！

もにゅっ！

「……！ みきゃあああああ……！」

ゴッキイーン！！

リーゼの拳骨が、先の鉄球並みの威力を持って落とされた。

「げふっ……！！」

痛みと共に、またしても絶たれる意識。

でも、何となく本望だったりして……

第五十三話（前書き）

昨日は土曜日なのに出勤ウボアー……

代休は火曜日……せめて来週月曜日にして、三連休にするくらいしてくれよ……と、無茶な願い事をする今日この頃。

でも、就職できただけありがたいと思わなくちゃ。

第五十三話

なのはと望を置いて、家に戻ってきた俺を出迎えたのは、緊迫感だった。

それを発しているのは……というか、他に誰がいようか。

「……………！ てめえ……………」

拾ってきた、紅髪だ。

普通にしていれば可愛いつり目も、今や単に刺々しいプレッシャーを放つだけ。

「よっ。ただいま」

まあ、相手は子供だし……理由を聞き出すまでは、余計な刺激を与えないようにするか。

パンツ！！

「お」

意外なほどに熟練した身のこなしで、俺の顔面を殴ろうしてきた。ただ、それがあまりにも真正面からの攻撃だったのと、事前に警戒していたということもあって、平手で受けることができた。

「よいしょつと」

ドンツ！

背中から、床に投げ落とす。

「うあつ!?!」

そのまま関節を固め、怪我をしないように軽く押さえつけた。

「ストップだ」

「……………」

真っ先に懐のバルディッシュに手を伸ばそうとしていたフェイトを、空いた手で制する。

ユーノとアルフも、それに倣って手出しをしなかった。

「……くそっ！」

組み敷かれた紅髪が、汚く毒づいた。

「無茶するなよ。また倒れるぞ」

もう俺が倒しちゃったけど……などと、冗談を交えて呟いてみる。

「上等だテメエ！ 二分でブツ潰してやる！！」

が、ぎゃいぎゃい騒ぐだけで、実行には移せそうになかった。

今はこうして制圧できたとしても、魔力が回復してしまつたら、それも難しいだろう。

「……ねえ、」

……フェイトが、紅髪の目の前にしゃがみ、視線を合わせた。

「あのね、ひでとには、キミをいじめようとか、そういうつもりは無いんだよ。もちろん、ボクだってね？」

穏やかな言葉。

一言一言を言い含めるような……それでいて、氷のような意思を込めた口調。

フェイトがこうして、流暢に言葉を出せる相手は、二種類だ。

まずは、俺やアルフのような、心を許した相手。

そして二つ目は……フェイトが、『敵』と認識した相手だ。

さっきの行動で、この紅髪は後者に認識されてしまったらしい。

「でも、キミが何の理由も無く、ひでとを傷つけるっていうなら……」

つう……と、フェイトの手が、紅髪の首筋をなぞり……

「うるすよ？」

……と、極めて真剣な口調と表情で、告げた。

俺は……

「じぶー」

「ごっちゃん！ と、割と本気で拳骨を落とした。

「いったあ！？」

途端、フェイトの纏っていた冷酷な気配が霧散した。

「女の子がそんな汚い言葉を使うな！」

「だって……！　だってこの子が……！」

涙目で、あせあせと弁明する。

全く……　本当はちゃんと分かっているくせに、気持ちが悪走して口走ってしまっただから。

「すまん、気を悪くしないでやってくれ。口はちょっと悪いけど、根は良い子だから」

空いた手で、フェイトの頭を下げさせる。

「ぎゅっ……！　ひ、ひでとお………！」

「ちゃんと謝りなさい」

フェイトは、頭を押し潰されながら、同じく目の前に這い蹲る紅髪を恨めしそうににらみつけた。

「放してえ………！　そいつ、ころせないいい………！！」

「まだ言うか」

むぎゅっうっうっうっうっうっうっうっうっうっうっ………！！

「めり込むめり込む！　っていかもう額がタタミに埋まりかけてるってばー！」

ぴーぴー泣き言を言うフェイト。

「秀人……　あんまりフェイトを怒らないでやってくれよう………かわいそうだよ………」

俺の手を、アルフがちょこんと摘まんで懇願してきた。

「こういう時にしっかり言っておかないと、定着しちゃうだろ。お前はフェイトを甘やかしすぎだ」

聞けば、保護した当初は虫歯だらけだったらしいじゃないか。自分で歯磨きもさせないだなんて、過保護が過ぎる。

まあその後、延々と続いた虫歯治療で泣きを見たのか、今ではしっかりと歯磨きをするようになったそうだ。

言えば分かる子なんだから、言っておけるのが本当のやさしさ……　だと思っぞ、俺は。

「ご、ごめんなさいいいいいっ!」

フェイトはようやく謝った。

ぴょんっ、と飛びのき、アルフの背中に隠れる。

俺は、すっかりおとなしくなった紅髪を解放した。

(ユーノ、手出し無用で頼む。あと……)

(ああ、クロノに中継しておくよ)

さすがにユーノは察しが良い。

魔力を持った、異世界からの漂流者。一応は俺も管理局員の端くれだけど、こういうイレギュラーはクロノの仕事だ。

この場に更に人が増えたら、逆に言い辛くなってしまっただろうから、通信で状況を報せることにする。

(秀人。もどき。僕だ)

(とうとうフェレットでさえなくなったな!?)

ユーノが素でツッコみを返した。

(……では、聴取に関しては秀人に一任しよう)

(スルーすんな!!)

(おいユーノ、大事な話してるんだから騒がないでくれよ)

(え、これ僕が悪いの……? なにそれ理不尽……)

「……」
紅髪は、ただ黙って俺たち……じゃなくて、俺の顔を睨み続けている。
「……」

だんまりを決め込んだまま、一言も発しない。

いきなり情報を晒したりはしないか。なら、まずは……

「お前、俺の記憶にも残らないほど弱かったんじゃないのか?」

とりあえず、何でも良いから揺さぶりをかけてみよう。

「あア!?!」

「ちゃりっ……！」

効果は、劇的だった。

「紅髪は、ワンピースのポケットから十字架……みたいな、変わったアクセサリーを取り出した。」

「っていつか、ソレ、まさか……！」

「……起動！」

『An……fan……g……』

「濁った電子音声と共に、十字架（？）が赤く輝く！」

「！」

「やっぱり、デバイス！」

「身構える俺たち。だが……？」

「……あ？」

「魔力光は、すぐに電池切れを起こしてしまったかのように弱弱しくなり……消えた。」

「あ……！？ き、起動！ 起動！」

『……』

「……駄目っぽかった。」

「多分、起動に必要な分の魔力が足りていないんだろ。」

「起動しろってんだろこのポンコツうつつうつつうつつうつつ……！」

「癩癩を起こして、ぶんぶんと十字架っぽいデバイスのチェーン振り回す紅髪。」

「そりゃー」

「その手から、フェイトがデバイスを掠め取った。」

「あっ……！！ 返せテメエ！」

「やーだよー」

「ひよいひよい、と持ち前の素早さで回避する。」

「返せー！」

「ひでと、パス」

「おっ」

放り投げられたデバイスをキャッチ。

「うがー！ 返しやがれー！！」

「はいはい、ちょっと待ってる」

突っかかってくる紅髪の頭を掴み、押し留めながらデバイスを観察する。

十字架かと思っていたけど、実際にはちょっと違うみたいだ。

なんとというか……剣玉みたいな……まあいい。試しに、起動してみるか。

何でかは知らんが、プロテクトが外れているみたいだ。

セットアップ……じゃなくて。

「起動」

で、合ってるよな？

ギンッ！！

正解だったみたいだ。待機状態だったデバイスが発光して、戦闘形態に変形する。

「……………え？」

手に感じる、ずつしりとした重み。

その形状は……長い柄と、先端に装着された……ハンマーヘッド。

(ちょ……秀人、それ！)

(えー……)

見覚え……どころじゃない。

その機能も、破壊力も……この身をもって体験している。

それを持っているということは、この少女は……

「おい……おいおい……マジかよ」

思わず、目の前にいる少女を凝視する。

フェイトの肩までしかないような、小さな身体。

確かに、あいつもこのくらいの背丈だった。

「お前……あの時の……」

それに、コイツの髪。着込んでいた鎧と、殆ど同じ色。オマケとばかりに、俺に恨みを持つていとすれば……

「……ふん、やっと思い出しやがったか」

目の前で傲然と腕を組む……ただし、相変わらず頭を俺に掴まれたままでいる……この少女は。

「チビ騎士？」

「誰がチビだっ!!」

ぶすん、と。

残りカスみたいな魔力が、溶けて消えた。

望と手を繋ぎながら、家路に着く。

反対方向なのだから、途中で分かれてもいいんだけど……何となく、望を家まで送って行くことにした。

「……そっか、お父さんが」

「うん。だから、母さん達がちょっと忙しくなっちゃって」

道中、色々な話をした。

不幸自慢は大きらいだけど、望にはサクッと話せた。

アリサ、すずかにも話せたし……私の性格みたいなものだろうか？

とはいっても、変な負担を強くないように、極力軽く。

「ちょっと脳波が弱いだけで、身体は健康そのもの……なんだって別に、私が自分で確かめたわけじゃない。

あくまで、母さん達からの受け売りだ。

「え……お見舞いとかは？」

「……そういえば、あんまり行ってないかも」

……一時期。ほんの一時期だけど、私は父さんに恨みを抱いてい

たことがあった。

父さんさえ、倒れなかったら。

一過性のものだったけど、そのあまりにも自分勝手な考えが後ろめたくて……足が遠のいてしまっていた。

最後にお見舞いに行ったのは、いつだったか。

「行かなきゃ駄目だよ」

望が、真剣な表情で言った。

「意識が無くつたって……全部じゃないかもしれないけど、言葉は聞こえてることだって、あるんだよ」

……

「なのに、何も言っただけじゃなかったら……お父さん、きっと寂しいよ」

「そう……なのかな？」

そんなの、フィクションの世界だけだと思うんだけど……

「私のお父さん、医者だからたまに話してくれるけど……実際に、

昏睡から回復した患者さんが、覚えてたっていう例もあるんだから」

「え……望のお父さん、お医者さんなんだ」

「うん。最近、勤め先の病院で何かあったらしくて、忙しそうだけど……って、それはいいから」

ちっ……うまく話が逸れたと思ったのに。

「ちゃんと、お見舞いに行くこと。わかった？」

「うん……そうする」

父親の顔くらい見に行かなくちゃ、だよな。

「ありがとう、望」

すっ……

と、もうすっかり慣れたことだけど、私達の真横に、音も無く黒

塗りの自動車が停車した。

窓が開き、派手な金髪がひょいっと身を乗り出した。

「ハ―イ、なのは。奇遇ね」

「アリサ。一週間ぶり」

そこで、アリサと望は、互いの存在に気がついた。

「初めまして、八代望です」

「ご丁寧にどうも。私はアリサ・バニングス」

予想外の邂逅……でも、なかなか友好的だ。

対人コミュニケーション能力が高い人って、得だよね………うらやましい。

「……ところで、なのはとはどういう関係？」

アリサがそう切り出して、望は若干、声を硬くして答えた。

「……『友達』、ですけど？」

「奇遇ね。私も、なのはの『友達』よ」

バチィッ……！ と、何故か火花が散ったように見えた。
何だろう、あれ。

「……ああ、あなたが。さっき、なのはから聞きましたよ」

「へえ………何て？」

「前の学校の、元クラスメイトさんですよね？」

ビキッ………と、アリサの額にうっすらと青筋が浮いた。

「なのは、言ってたわよ？ 『今の学校に、友達らしい友達はいない』って。何ヶ月か前に。」

……現クラスメイトのあなたはいつ、なのはと友達になったのかしら？

「ついさっきですけど、何か？」

にこり、とアリサが微笑む。

「ああ、それじゃあこれから、どんどん知らない一面が見えてきて面白いわよ？」

……私は、とづくに知ってるけどね」

望もまた、にっこりと綺麗な笑顔で返した。

「付き合い始めて数ヶ月って……ちょっと倦怠期が始まる頃ですね？」

「バチバチバチツ……！」

「仮想の火花が、一層激しくなった。

「ついさつき……って、言ってたわよね。どんな切っ掛けがあったのかしら？」

「ちなみに私は、交際を申し込んだら、快く受け入れてくれたけど、ふん、と、望が鼻で笑うような変な声を出した。

「さつき、言ってくれたんですよ。『望と友達になりたい』……って。自分から」

「……ぶるっ。」

「あれ？ 何だか、寒い……もう夏なのに。」

「うふふふふふふふふふ」

「あはははははははははは」

「あ。何でだろう。半袖じゃなくて、七部袖にしておけばよかったかなあ。」

「うふふふふふふふふふふふふふ」

「あはははははははははははははは」

「二人は妙に平坦な笑い声で、愉快そうに笑っていた。うーん、よく分からないけど。」

「二人とも、仲良くなれてよかったね」

「二人は、仲良くずっこけた。」

「『あのねえ……！』」

「わ。息ぴったり。」

「『……』」

「二人は、気まずそうに顔を逸らした。」

「アリサが、それを取り繕うように明るい声で、私に言う。」

「なのは、今から私の家に来ない？ 新作のRPGが入ったんだけ」

ど……お茶とお菓子でも食べながら、遊ぼうよ」

タイトルは、ゲームに疎い私でも知っているような、大作RPGだった。

「あ、そのゲーム私も持つてる。なのは、私んち来ない？ 今日、お父さんもお母さんもないから」

右からアリサが、左から望が、互いを押し合いながら、迫ってきた。

「なのは、お菓子好きよね？ ウチのメイドも、あんたに会いたいたって言うてたし」

「なのは、あんまり広い家じゃ落ち着かないし、人が多くて疲れるでしょ？ 私の部屋で、二人水入らずで遊ぼうよ」

んー……よくわからないけど。

「ゲームはアリサの家でみんなで遊んで、セーブデータを望のメモリーカードに残せば良いんじゃないかな？」

そうすれば、また集まった時に遊べる。なかなかの名案だ。でも、二人はお気に召さなかったようだ。

顔を見合わせ、ふううう………と、長いため息をつく。

「……鈍感」

正直、心外だった。

第五十三話（後書き）

なのはは、ある意味秀人以上の主人公です。
主にハーレム的な意味で。

第五十四話（前書き）

YAMAHA・ポッケが修理完了。
たった3馬力の可愛いヤツです。

第五十四話

「……にしても、よく生きてたな、お前」

周囲一帯ごと焦土と化したと思ったんだが……

「ざっけんな！ マジで死に掛けたんだぞ！」

ころころと、よく表情の動く奴だ。本当に、プログラムなのかどうか疑いたくなる。

「それはお互い様。俺だって、お前に殺されかけたんだからな」

あの、魔法かどうかも怪しい不死鳥が発動されなければ、とつくに殺されていた。

「おかげで、相棒は今も入院中だ」

レイジングハートの修理は難航しているらしく、いつそフレームを新品に換装する、という案も出てきている。

「はっ……だから何だって言うんだよ」

ふてぶてしい。

完全に、没交渉だ。

それじゃあ、仕方ない……

「交渉役を、呼ぶからな」

あまり、脅迫じみた手は使いたくなかったが……。

「ふん、呼びたいだけ呼べば良い。あたしは、絶対に口を割らないからな！」

自信満々。

「……いいんだな？」

ずい……っと、顔を近づけて凄む。

「なにが……だよ」

意地でも引かず、ぎろつと睨み返された。

「もう一度、聞く。いいんだな？」

「呼びたきゃ呼べつつつてんだろ！」

「よしわかった」
冥福を祈るような気持ちで、メールを送った。
にらみ合うこと、十分。
フェイトがあくびをしてアルフに窘められ、ユーノは緊張したま
ま。
そして。

ガタガタガタガタ……バキツバキツ!!

ドアが、不穏な音を立てて、軋みだした。
って、おいおいまさか……

「な何だ誰だ敵襲か!?!」
チビ騎士は懐に手をやり……ハッ、と、デバイスが俺の手にある
ことを思い出した。

ドアはいよいよ持って、耐久力を使い果たし……
どかーん! と、吹っ飛んだ。

「守護騎士の現物サンプルはどこだああああああああああああ
あああッ!?!」

ドアを蹴破り、白衣姿の小柄な人影が踏み込んできた。
吹き飛んだドアがくるくると回転し、本棚に命中。中身を盛大に
ぶちまけた。

「……よう、マリィ。早かったな」

「どこだあ……!?! サンプルはどこだあ……!?!」

ぎよるぎよると部屋の中をサーチする、その狂気じみた迫力に、
俺たちは……そいつを呼び出した俺ですら、完全に硬直していた。
……ってというか、メール出してからまだ十分も経ってないぞ……

マリィ。

さては、リンディさんかクロノを脅したな。
『おいクロノ、生きてるか』

『……ま、りー……！ きん、しかんざい、は、やめろ、と、いっ
た……だろっ……』

ぶつんっ……と、念話（+クロノの命）が途切れた。

……注射一本でKOかよ。

『アイツも苦勞が絶えないな……周囲が変人ばかりで。なあユ一
ノ』

『……その筆頭が言うなよ』

ん？ 姿が見えないが、どこ行った……？

「……………きゅー」
いた。

ちやぶ台の下へ、フェレットの姿で潜んでいた。

ピキーン、と、マリーがチビ騎士をロックオン。

「見つけたああああア……………！！」

「……………ひイツ！」

守護騎士の見る影も無く狼狽し、内股で後ずさる。

その華奢な腕を、マリーが猛禽のような所作で捕獲する。

「さあ来い！ ひん剥いて、隅から隅までじっくりねっとり分析し
てやる！」

ふふふふ……まさかの生きてた標本！ 与えたもつたモルモット、
髪の毛一本まで美味しくしゃぶらせてもらおうか……………！！

本気で舌なめずりまでするその姿、まさに捕食者。

または変質者。

「ひでと……………なに、コレ」

「コレとか言うんじゃないありません」

ひっし……………と俺にしがみつくフェイトに至っては、人扱いしてい

ない。

アルフが、耳をぺたんと伏せながら、フェイトの頭を撫でる。

「よしよし、大丈夫だよフェイト。」

アルフは、こっちから手を出さなければ害は少ないから……」

崇り神……まあ、あながち間違ってもいない。

抵抗も空しく、ずり、ずり、と出口まで引きずられて行く守護騎士。

目に恐怖で涙が浮かび、助けを求めて左右に揺れる。

「た、すけて……！」

よほど、マリーが恐ろしいらしい。

……それでいいのか守護騎士。

「なのはとレイジングハートに謝るって約束するなら、助けてやつてもいいぞ」

仕方ないから、助け舟だ。

俺が殺されかけた程度のことは、多目に見てやろう。

……なのはと、レイジングハートの分は、後でしっかりと侘びを入れさせるけどな。

「あ、あたしは悪くねー！ 誰が謝るか！」

よし、もう止めない。

「マリー、持ってけ」

「研究研究解剖研究……！」

「かい……！？」

さりげなく含まれた猟奇的な単語に、臨界が近づく。

「さあ……！ 一緒に来てもらおうか……！」

そしてとうとう……

「いやあああああああああああああっ！！ ごめんなさい
いいいいいいいいいいいいっ！！」

……結果。泣き喚くチビ騎士から、四人がかりでなんとかマリィを引き剥がす頃には、皆ぐったりとしていた。

「どうだ、渾身の演技だっただろう」

マリィが、額の汗を拭うような仕草をして、相変わらずの無表情でそんなことをのたまった。

「……」

四人が、異口同音にこう感じた。

『百パー本気だっただろ』、と。

「ぐすっ……」

チビ騎士は、返してやったデバイスをがっちり握り、部屋の隅に座り込んでいる。

倍増した警戒心は、マリィ一人に向けられていた。

……結果として、俺たちへの警戒を解くことには成功したわけだが。

「ただいま……っつて、何これえ！？ ドアが……」

ばたばた、と、なのはが風通しの良くなった部屋に駆け込んできた。

「秀人さん秀人さん秀人さん！ ドアが………あれ？」

そして、部屋の中心に居座るマリィに気付いた。

「……どなた？」

「マリエル・アテンザ」

実に簡潔な回答だった。

「いや、そうじゃなくて」

「レイジングハートの修理を担当している」

「え！？ あ、これは失礼を……」

相棒の主治医、と聞き、態度を軟化させる。

「そして、ドアを破壊したのは私だ」

「さらっとカミングアウトしないで下さい！」

「ついでに、本棚も中身ごと壊した」

「帰れ！」

飛び掛ろうとするのはを、ユーノが羽交い絞めにして止めた。

「止めないでユーノくん！ こいつのメガネ、ばっきばきに砕いてやらないと気が済まない！」

「まあとにかく、」

マリーは悪びれもせず、部屋に居座った。

「ソイツを連れて行く、というのは本当だ」

「……！！」

ビクツ！ と、チビ騎士が背後で強張るのをはつきりと感じつつ、マリーに言い募る。

「拘束の後に事情聴取、で済む話じゃないんだろ？」

「ああ」

まあ隠すことも無いかと、マリーは話してくれた。

「正直に言えば、守護騎士を構成する真性古代ベルカエンシエントの術式と、アームデバイスのデータが欲しい」

カートリッジシステム搭載デバイスはともかく、術式……？

そんなもの、一体何に使うっていうんだ？

「おまえ、本気か？」

マリーが、怪訝そうに俺を見る。

「お前の専用デバイスは、ベルカ式対応だと言っただろう？」

「聞いてねーよ！！」

初耳だぞ、そんなこと！

「……そうだったか？ まあ、とにかく必要なんだ」

「でも、なんでベルカ式？ ミッド式じゃだめなのか？」

「駄目というわけではない。単に、ミッド式の魔法というのは、どうしても遠距離がメインになりがちで、近接先頭の術式は少ない」
確かに、そうかもしれない。インパクトは、そろそろ威力的に厳しい。ブレイズセイバーと、フラッシュムーブ、ソリッド……そのくらい。あとは、砲撃魔法を至近距離でぶっ放すくらいだ。

「そいつの構成術式の中には、失われた古代ベルカの魔法や、カートリッジシステムについての記述があるはずだ。それを解析し、使用可能にすれば、守護騎士とも互角に渡り合えるようになる」

それは、なかなか魅力的な提案だった。

カートリッジシステムは自分で言い出したことだが、ベルカ式の魔法は考えたこともなかった。

「遠隔・広範囲に特化したミッド式と、近接・単騎に特化したベルカ式。どう考えたって、おまえはベルカ式の方が馴染む」

だが、話を聞いていたなのは、難色を示した。

「そんな、敵と同じ力なんて……」

抵抗が無いわけじゃない。それでも、これから先、強力な敵を相手にすることを考えたら、使えるものは何でも使っていかなければならない。

……今度こそ、なのはを……レイジングハートを、守るためにも。

「なのは」

意外にも、それを諫めたのはフェイトだった。

「力は、どこまでいってもただの『力』で、それを活かすか、ころすかは、使う人の気持ち次第なんだよ」

それは、以前俺がフェイトに伝えた言葉だった。
ちゃんと覚えててくれたのか。

「ひでとは、力の使い方を間違えるようなひと？」

「………違う、けど」

「なら、いいんじゃないかな？」

「……………」

じつと、考え込むのは。

理屈では分かっているけど、感情は割り切れないらしい。

「それにさー！」

ぱっ、と、フェイトが口調がいきなり軽くした。

「『敵と同質の力で戦う』って、ライダーみたいでちょーカッコいいじゃん！」

「ぶっ……………！」

なのはも、思わず吹いてしまっていた。

「そうだよね……………ありがとう、フェイト」

よしよし、とフェイトの頭を撫でる。

「ごめん、秀人さん」

「いや、気にしないでいい」

壁際のチビ騎士に、歩み寄る。

チビ騎士は、一瞬ビクツと強張ったものの、襲い掛かっては来なかった。

「……………何だよ」

「聞いての通りだ。お前の身柄は、時空管理局が預かる」

「……………ああ、もう好きにしろよ」

既に、諦めているらしい。

でも、このまま引き渡したとしたら……………待っているのは、尋問だけだ。

「……………その前に、一つ聞かせる。リンカーコアの蒐集、あれは、やりたくてやっていた事か？」

それが、聞きたかった。

俺は最初、守護騎士達は、自ら進んで蒐集を行っているのだと思

っていた。

「だけど、こうして接して、言葉を交わしてみても……疑念を感じた。確かに、蒐集を行っているのはこいつらだ。それは間違いない。けど……それを、主が無理矢理やらせているのだとしたら、話は別だ。」

「どうなんだ？」

「……アタシは、闇の書の守護騎士だ。」

「主の願いを叶えるのが、アタシ達の存在意義。」

「殺せと言われたら……女子供でも、殺してきた」

「……………」

「でも」

持ち上がった視線が、俺とぶつかる。

「アタシ達は、殺したくて殺したことなんて、一度も無い」

そこには、確かな意思と……誇りがあった。

「そうじゃなきゃ……………誰が……………」

俯き、肩を震わせる。

その姿は、冷酷な敵でも、残忍な殺人者でも無く……………ただの、哀れな子供だった。

「よし……………わかった！」

「ぱんつ、と膝を叩き、立ち上がる。」

「なんか、すっごいデジャブを感じるよ……………」

「うん……………もう馴れたけど」

「なのはとユーノが、顔を見合わせて生暖かい笑みを浮かべていた。」

「？ ねーねー、なんの話？」

「フェイト、いいから……………」

「アルフにやんわりと止められるフェイト。」

「……リンディさんから聞いていた通り、か……」
成り行きを傍観するマリエル。

が、反対は無い。

俺は、チビ騎士の脇に手をいれ、『高い高い』をするように、抱え上げた。

呆気にとられるチビ騎士に……言った。

「お前、ウチに来ないか？」

第五十四話（後書き）

うああ、、、内容が薄すぎる（汗）

精進あるのみです、、、

第五十五話（前書き）

、
、
アームドデバイスって、基本無口ですからキャラ作りが難しいです、

第五十五話

鉄鎚の騎士は、困惑していた。

「ウチに来て……本気か？」

「ああ、マジだ。お前さえ良ければ……だけどな」

今、自分を抱き上げているのは……

「アタシはお前を、殺そうとしたんだぞ」

そう。操られていたとはいえ、自分が死の寸前にまで追い込んだ、一般人の少年だ。

恨まれて当然……いや、確かに恨まれてはいる。だが、それにし
ては軽すぎる。

「ああ……俺はいいよ、別に」

何だろう、この少年は。自分の命というものを、あまりに無造作
に扱っている。

「どうせ、放っておけば治るし」

不貞腐れているわけでも、自暴自棄になっっているわけでもない。

ただ単に、自分というものに、少しも頓着していない。

「また、そういうこと言う……！」

傍らで、栗毛の少女が眉を吊り上げ、少年を睨んでいた。

「……………ひでと、」

金髪の少女が、悲しげに少年を見つめる。

「で、どうする？」

意図的にそれを聞き流し、鉄鎚の騎士に聞いてくる。

「待て」

成り行きを傍観していたマリーが、口を挟む。

「それは、お前の一存で決定できることではない」

少年は、そこまで高い立場にいるわけでは無い様だった。

「何より、私はそのデータの持つて帰りたいんだ」

……珍しい研究素材を逃がしたくない、という一心だろうが。面倒くさそうにマリィを見やり、ため息をつく。

「わかった。データがあればいいんだな」

くるつと鉄鎚の騎士を振り返ったのと同じ、少年の魔力が発動した。

足元に、ミッド式魔法陣が展開。

身体の周囲の魔力が、一本のラインとなり、そして……

「ちよつとくすぐつたいぞ」

「え……？」

バシユツ！

「うあつ!?!」

鉄鎚の騎士の身体に、突き刺さった。

「……!!」

目を瞑り、やってくるであろう痛みを覚悟し……

「……？」

が、痛みは無い。むしろ……

「魔力が……回復した？」

干からびていたリンカーコアに、魔力が補充されていた。

「ほう……これが、例の」

白衣の女は、それはそれで興味深そうに観察していた。

「マリィ、それこっちに渡せ。あと、お前のストレージも」

少年が、白衣の女に言った。

「……チツ」

舌打ちを一つ、懐へ仕舞おうとしていたハンマー状のデバイスと、カード状の機器を差し出す。

「油断も隙もねーな、お前は……」

両手にデバイスを持ち、それにもラインを繋げる。
魔力のラインが、鉄鎚の騎士と二機のデバイスを、少年を中継するようにして繋がる。

そして次の瞬間、見えない手で、身体をまさぐられているような感覚が走った。

「ひゃんツ!？」

鉄鎚の騎士は、意外と可愛らしい悲鳴を上げた。

「ちよつと我慢な」

「ちよつとつて……ひゃうっ! ど、どれくらい……!？」

「んーつと」

腕を組み、焦らすようにゆっくりと、時間を算出する。

「五分くらい、いってみようか?」

「ふ、ふざけんな……ひゃあああっ!？」

そして、きっかり五分後。

ぷつん……とラインが途切れるのと同時、奇妙な感触は消え去った。

「はひー……はひー……!」

息も絶え絶えにくったりとする。

「よーし、これで許してやるっ」

……いっそ、一発殴ってくれたほうがマシに思える制裁だった。

「マリー、これでいいな」

差し出されたのは、カード状の機器のみ。

「……確かに」

口惜しそくに、ハンマー型デバイスに目を遣りながら、返された機器を操作する。

「おい、何だったんだ、今の……?」

何故か魔力が回復して……全身がむずがゆくなった、

「お前のデバイスとリンカーコアのプログラムを、丸ごとコピーしてマリーのデバイスに記録した」

「……………はあ!？」

さらっと告げられた衝撃の真実に、素っ頓狂な声を上げる。

「でもやっぱり、ベルカ式ってのは難しいな。何が何やら、さっぱりわからなかったから、丸ごとコピーする羽目になっちまった」

「いやいやいや、そうじゃなくて!」

少年に詰め寄り、がっくんがっくんと前後に揺さぶる。

「何でお前が、『蒐集行使』を使えるんだよ!？」

「ええ…………？」

今度は、少年が呆ける番だった。

「蒐集って、何が？」

「すつとぼけんな! 今、お前が使ったアレだよ、アレ!」

「リンカーコア結合のことか？」

「そう、多分それ!」

「いや、今のは単に、リンカーコアを接続して、情報を片っ端からコピーしただけだぞ」

「全然『だけ』じゃねーよ!」

守護騎士の身体は、プログラム…………つまり、文字列の情報で出来ている。

それを片っ端からコピーした……………ということは、全身を隈なく探られたのと同義で……………あのむずがゆさも領ける。

「あ……………確かに、ちよつと似てるかもね」

栗毛の少女が、こくこくと頷いた。

「カットペーストか、コピーペーストかの違いくらいかな」

中性的な少年が、それを補足。

「闇の書の蒐集能力っていうのは、元は秀人がやったのと同じように、術式などをコピーするだけの安全な機能だったらしいよ」

「……………ああ、そうだよ」

闇の書の生き証人である彼女は、ごく僅かながら、それを覚えていた。

「アタシたち守護騎士も最初は、その知識を狙う輩から、主を、知識を守るための存在だった」

それが、何代目かの悪意ある主により、改悪され……

「……今じゃ、自分の名前も思い出せないけどな」

ははっ……と、自虐的な笑みを浮かべる。

と、少年が口を開いた。

「ヴィータ」

全員の注目が、少年に集まる。

「文字列の中に、それだけ読める文字があった。

多分、お前の名前なんじゃないか？」

「……アタシの、名前？」

確かめるように、「ヴィータ……」と、小さく呟く。

「そう、だ……」

バラバラだった記憶のピースが、その名前を基点として、がちがちと次々に繋ぎ合わされていく。

「アタシは、鉄鎚の騎士………ヴィータ」

ガシユン！

「うお」

少年の手の中で、ハンマー型デバイスが突然暴れだした。

そのまま手を離れ……鉄鎚の騎士、改め、ヴィータの手の中に納まる。

「そして、そのデバイスの名は……」

「思い出したよ」
僅かな微笑みを浮かべ、相棒の名を呼ぶ。

「起きろ、グラーファイゼン」

チビ騎士……改め、ヴィータとグラーファイゼンが、紅い魔力を輝かせた。

「よかつたな……ヴィータ」

俺のほうを向いたヴィータは、やや気恥ずかしそうに唇を尖らせた。

「ふん。うっせーバーカ……」

きんつ……と、グラーファイゼンが金属音を鳴らす。

「……………貴公、名は」

まだ少し寝起きのような声で、そう尋ねた。

「秀人。吾妻秀人だ」

『よくぞ、我が使い手を救ってくれた。貴公には、いくら感謝しても足りぬ』

礼儀正しいを通り越して、堅苦しいなこいつ。

「それで、どうする？　ウチに来るか？」

わき道に逸れてしまったが、まずは返事を聞かないと。

「条件は、何だ？」

「いや、別に条件とかは……………」

何も、従属させようとかそついうつもりじゃないし。

「違つ」

が、否定された。

「アンタは、敵であるアタシのために、力を尽くしてくれた。アタシはベルカの騎士として、その恩に報いなければならぬ」「ちよつとばかり寝かせて、飯を食わせて、魔力を回復させて、名前を覚えてあげただけなんだから……」

「……それが、アタシの誇りだ」

「……ほんとと、主もデバイスも、堅苦しいことだ。」

「わかったよ、ヴィータ。条件は二つ」
本人が望むなら、いいよな。

「一つ。定期的にマリーの所に通い、データ提供をすること」
さっきの一回だけでは、必要最低限のものしか得られなかった。俺の専用デバイス製造のためにも、細かなデータが必ず必要になるだろうから、それを戴くとしよう。

「ここまでは、いいか？」

「ああ」

ヴィータは、一切のタイムラグを置かずに頷いた。

「二つ目」

まあこれは、条件というか、家事の分担に近いかもしれんが……

「お前を、我が家の『お買い物係』に任命する！」

時が、数秒間停止した。

「……………はあ！？ おか……………！？」

「うむ。お買い物係だ」

なたしても、ヴィータは慌てふためいた。

「あ、アホかお前は！ そこはほら、もっと……………重要な条件を出すところだろう！？」

「あ、それいいかも」

なのはが、ぼんと手を打った。

「私そろそろ学校に復帰するし、夕食の買い物、してくれるならかなり助かる」

今までは、俺かなのは、もしくはユーノが時間を見つけては買いに行っていた。

けど、俺は仕事で帰りが遅れることがあったり、なのはは学校帰りに友達と遊びたいだろうし、ユーノは何やら研究に没頭していることがある。

誰かが、決まった日時に行ってきてくれるなら、なのはの負担も少なくなる筈だ。

「お買い物……おかいもの……アタシが……？」

悩ましげにぶつぶつ考え込むヴィータ。

「頼めるか？」

「………ええい、お買い物係でも何でもやってやるよコンチクシ

ヨー！」

………やけっぱちだった。

さて………事後承諾になるけど、話を通すでしょうか。

『クロノ。おい、クロノ。生きてるか』

「誰が、死ぬか……！」

返事は、玄関からあった。

ゼーゼー言いながらも、しっかり二本足で立っていた。

「マリーー！ 勝手な行動をするなど、言っておいたはずだろう！」

「ふん。ワタシはお前の部下ではない」

守護騎士を独自に確保しようとしていたことを、今更ながら怒られていた。

「まあ座れよ。説明すつから」

ちやぶ台が用を成さなくなったので撤去し、ぐるっと適当に陣取る。

「……ってわけで、こいつウチで引き取ろうと思うんだけど」

「……………はあ」

何かを諦めたようなため息をつく。

「……………それが、どういうことかわかっているのか？」

「ああ。闇の書の主は、守護騎士の一体を取り戻しに来るだろうな。これだけの力。生きていると分かれば、四分の一とはいえ、そう簡単に諦めたりはしないだろう。」

「逆に言えば、常に俺たちに闇の書を引き付けておくことが出来る。一般人への被害は、少なくすることが出来る。」

「第一、」

ぐるっと、部屋に揃った面子を見渡す。

俺、なのは、フェイトはAAAランク相当。ユーノ、アルフはAランク相当。

合計5人の高ランク魔導師が揃っている。

更に、ヴィータを戦力に数えることが出来れば、体制は万全だ。

「管理局は、これ以上のメンバーを、この事件のためだけに用意できるのか？」

確かに、管理局にも俺たち以上の実力者はゴロゴロいるに違いない。が、人材不足が常態化している管理局で、この事件のためだけに、トップメンバーを贅沢に投入することなんてできないだろう。

「……………君は、高町なのはを危険に晒すことを良しとしなかったのは？」

「フェイトとアルフが護衛についてる。心配する理由が無いならばあつ……………と、フェイトの目が輝いた。」

「アルフ、アルフ！ 聞いた！？」

「うん、よかったねフェイト」

「いやっほー！」

どーん、とアルフにタツクル。

ゴロゴロと床を転がり、俺の膝の上に着地した。

「……………」

黙りこみ、考え込んでしまうクロノ。

多分、アースラからの対応の遅れが心配なんだろう。

「お前もこつちに拠点持ったらどうだ？」

「なに…………？」

「前線基地みたいな感じで。そうすれば、現地に常駐できる上に、守護騎士の監視も、闇の書への対処もスピーディにできるんじゃないか？」

「ふむ……………確かに、名案だな。よし、それで行こう。」

艦長やエイミイにも、話を通しておく」

と、話を聞いていたマリーが「早速、準備に取り掛かる」とだけ言い残し、開け放しのドアへすたすたと歩いていく。途中、足を踏まれたフェイトが「ぎゃーす！」と悲鳴を上げたが、お構い無しだった。

「何だ、アイツ…………？」

「……………マリーの突飛な行動に、理由を求めただけ無駄だ」

ふう、と、仕事に疲れたサラリーマンみたいなため息をつく。

まあとにかく。

「よろしくな、ヴィータ」

何やら、奇妙な縁だが……………

「ようこそ、我が家へ」

今日からは、家族の一員ってことで。

第五十五話（後書き）

とにかく、強引にでも話を進めます！

次回は久しぶりのはやて編です。

第五十六話（前書き）

ついに、、、ついにこの日が、、、！

PVが、10000000を突破しました！

はじめのうち、5000000も行けば御の字だろっと思っていました。

皆様、どうもありがとうございます！！

第五十六話

私は、何度目か数えるのもバカバカしく、リーゼの膝枕で傷の治療を受けていた。

「うづう……痛い……超痛い……」

今日も今日とて、実戦訓練。

魔剣を振るい続け、鉄球をよけ続け、斬り続け……最後の最後には、またしても顔面レシーブだった。

「はぁ……当たり前ですよ、主。すぐに熱くなって、考え無しに突貫するから……もつと状況を冷静に判断してからですね……」
くどくどと小言を言ってくる。

おつかしいなぁ。

もつと従順な人格を設定したつもりなんだけど……

「そんなことでは、一生掛かっても彼らには勝てませんよむかつ。」

「うっせーこの野郎！」

むにゅつ。

柔らかい胸を、鷲？みにしてやった。

「にゃああああああああああああああっ……！」

リーゼが飛び退り、同時、頭が地面に落ちて「ごん」と音を立てた。

「あ、あ、主！ 私の胸を揉むのはお止め下さいと、何度も……！」

「ふん、そんなモンぶら下げてるお前が悪いんだよ……」

おー、痛い……でも、もう起きられる。よっこいしょつと。

「……はぁ」

リーゼが、諦めたようにため息をついた。

「確かに、そういった弱点はあるものの……技量としては、なかなかの上達振りです」

ちらつと目を遣った先には、スイカのように真っ二つになった鉄球の残骸が、いくつか転がっていた。

「あなたには、優れた剣の才が有るようです」

「ふーん……」

剣道なんて、習ったこと無かったからよく分からないけど……才能が有るのは、いいことだ。

ぴぴっ。

と、今日だけは傍らに置いていた目覚まし時計が鳴った。

おっと、時間時間……

「主？」

首をかしげるリーゼ。あ、そういえば……言ったことなかったっけ。

「どこへ行かれるのですか？」

「美香に会いに行く。お前も付いてきて」

「美香……？」

面倒だから、歩きながら説明しようっと。

……

「なるほど……」

道中、リーゼはあごに手を当て、何か考えていた。

ちなみに、リーゼの容姿は色々な意味で目立つから、服を量販店で買って行った。

別にパクってもよかったんだけど、リーゼの「あなたは『王』であって、夜盗では無いはずです」の一声によって却下された。

耳をハンチング帽、尻尾をカーゴパンツに仕舞いこみ、伊達眼鏡を掛けた姿は、まあ割と街中に溶け込んでいるようにも思える。Tシャツが猫柄の染め抜きなのは、ちよつとしたシャレだ。

「つまりその方は、主と師弟の契約を結んだのですね？」

「うん。とはいっても、魔法的な儀式は何も無かったけど」

「いわば、義兄弟の盃……みたいな？」

「……………」
リーゼはまたしても、何かを考えこんでいる。

美香のやつ、元気にしてるかな。

久しぶりに……しかも、夜じゃなくて昼に会いに行ったら……
…多分、すっごい驚くだろうな。それに、リーゼのことも……

「ふふ……………」
目を真ん丸くして、ほけーっと驚く姿が目には浮かぶ。

「主は、彼女をとて好いているのですね」

と、リーゼが突然、そんなことを言い出した。

「……………はア!？」
突拍子も無い発言に、思わず声が裏返ってしまった。

「ち、ちがうし!」
否定しても、リーゼはただ微笑むだけだった。

「主のそんな優しい顔、初めて見ました」
「だから、誰が、誰を好いているって!？」 テキトーなこと言っな

!」
何人かが、くすくすと笑いをかみ殺しながら通り過ぎて行く。

「あーもう! さっさと行くよ!」
「はい、主」

リーゼの手を引き、ぐいぐいと通りを進んで行く。

商店街を抜け、住宅街を抜け……段々と、人氣が無くなっていく。
草が生えっぱなしになっている、なだらかな丘を登り……

「へー、こんな建物だったんだ」
到着したのは、妙な存在感のある、白い建物。

ここが、美香が入院している病院。

何食わぬ顔で、自動ドアをくぐる。若干弱めの冷房が、私達を出迎えた。

ばたばたと、ナース服や白衣を着た人が忙しそうに走っている姿を見ると、やはりここは病院なんだなー、と、当たり前前の感想を持つてしまう。

腐ったミカンのな院長はサクツと殺しておいたから、多少は雰囲気が出る。

「すみません、見舞いに来たんですけど」

「はい、どなたでしょう？」

「えーっと……柳瀬美香って子の」

「え……？」

と、その名前を聞いた看護婦の顔が、明らかに引きつった。

「……失礼ですが、柳瀬さんとの続柄は？」

最近の病院は、セキュリティが厳しいらしい。

「あー………友人です」

「……少々、お待ちください」

あ、信じてないなコイツ。

「……」

意識を集中して……魔力発動。

「主」「わかってるってば」

うるさいリーゼを制し、魔法による暗示を行使する。

後遺症は残らない。あくまで、この場を凌ぐための……

「『私は、柳瀬美香の友人です。部屋の番号を教えてください』」

言霊をかけられた看護婦は、とろんとした目になる。

「……はい、柳瀬美香さんは、503号室です」

よっしゃ。

「どーも。行くよ、リーゼ」

効果が切れる前に、スタコラサツサだ。

チン……

エレベーターが五階で止まる。

と、廊下に足を踏み入れた途端……

「もう、放っておいてよ!!」

実に聞き覚えのある声が、えらい剣幕で張り上げられていた。

あーあ、タイミング悪い時に来ちゃったかなあ……

病室のドアの横に立ち、聞き耳を立てる。

「美香……お願いだから、話を聞いて……」

「うるさい! 帰って!!」

そして、がちゅん、と何かが割れる音。

「……また、来るからね」

とぼとぼ、という表現がぴったりと合う様子で、一人の女性が病室から出てきた。

気配を消しているから、私達には気付いていない。

コイツが美香の姉貴か……って、えええ!?

「司書のお姉さん……?」

「え?」

「やべっ……! 気付かれた!」

「あなた……八神さん?」

美香の姉は、私がよく足を運ぶ図書館の司書……美穂さんだった。

……

待合室のベンチに、三人で腰を下ろす。

「まさか、八神さんがいるなんて、思いもしなかったわ」

「お互い様ですよ」

姉と、兄がいるとは聞いていたけど……まさかこの人とは。

「……でも、いつ美香と知り合ったの？ あの子、ずっと入院しているのに」

夜に窓から忍び込んで……駄目だ言えない。

「私も一時期、足が不自由だったからその縁で」

「ああ、そうだったわね」

車椅子で図書館に通っていたからか、すんなりと信じてもらえた。

「そちらは？」

すつと、リーゼを示す。

「リーゼ……親戚です」

「初めまして。リーゼと言います」

私の家族構成なんて知らないだろうから、これでいい。

「それで……今日は、美香のお見舞いに来てくれたの？」

「はい」

「……今日は、無理かもしれないわ」

「あー……」

やたらと癩癩おこしてたけっけ。

「……はあ」

ずーん……と、やっぱりダウンナーな雰囲気。

「入院生活が長くて、鬱憤が溜まるのも分かるんだけど……最近、特に不機嫌で」

……げ。

まさか……私か？ 私が最近、顔を見せないからなのか？

だとしたら、美穂さんとはぼっちりだ。

「ちよつと、顔だけでも見ていきます」

心配そうにする美穂さんを残し、美香の病室へ向かう。

リーゼを部屋の外に待機させ、病室のドアを開ける。

「帰れって言ったでしょ！」

ぶんつ！ と、いきなり文庫本が顔面めがけて投げつけられた。それをキャッチして、ベッドの上に放り返す。

「せっかく来てやったっていつのに、随分な言い草だね」

「……………え？」

そこで、私の顔に気付いたのか、美香が呆ける。

「……………姐、さん？」

「久しぶり、美香。元気してた？」

ベッドの脇まで行って、ぽんぽん、と頭を撫でる。

じわー……………っと、美香の目が潤んでいく。そして。

「姐さんの……………バカー！！」

「おおおっ……………？」

どん、と思いつきり抱きつかれた。

「うつうつうつ……………！！」

ぐいぐいと、遠慮の無い全力で抱きしめられて、正直言えば、ちよつと苦しい。

でも、しばらく放置してしまった罪滅ぼしだ。好きなだけ、甘えさせてやるつ。

そして、十分くらいの後、ようやく美香が離れた。

「……………ごめんね、美香。ちよつと、忙しくて」

魔法を教えてやる、そういう約束だったのに……………ゴタゴタと忙しくて、おざなりにしていた。

「でもね、美香。せっかく見舞いに来てくれた姉ちゃんに、あんまりひどいこと言うもんじゃないよ」

本当に、見舞いに来てくれる人がいるってことが、どれだけ幸せかわかってるのかな？

「でも……………」

「でも、じゃない。後でちゃんと、謝っておきなさい」

「……………はあい」

「お、うまそうじゃんコレ」
小さなテーブルの上に置いてあったフルーツの盛り合わせの中から、桃を取り出してかじりつく。

「姐さん……」

呆れるような視線から逃げ、もしかもしかと果物を頬張る。

そのとき、廊下から数人の騒がしい足音が聞こえてきた。

うるさいなあ……病院なんだから、少しは遠慮しろっつもの。

「あ……このフロアは、四部屋しか無くて、二つしか使っていないよ
うっわ……警沢。」

私が言いそうになっていた言葉を、美香が肯定した。

「私は別に、大部屋でも良いって言うてるのに、お兄ちゃんとお姉
ちゃんは……」

ぶつぶつ、と愚痴る。

個室の病室がいくらするかには知らないけど、かなり高額なはずだ。
美香に余計なストレスを与えないよう、かなり無理しているに違
ない。

「やさしいお姉ちゃんだね」

「……でも、私のために変な我慢とか、しないでほしい」

「喧嘩の原因はそれ？」

「うん。お姉ちゃん、『欲しいものは無い？』って、いつもそれば
っかり」

……うーん、難しいなあ。

どっちの気持ちも、よく分かるんだけど……

……、……！？

と、隣室が、またにわか騒がしくなり始めた。

(……うっさいなあ、もう！)

さっきから、人が考え事してるのがやがやと……いい加減、我慢

の限界だ。

怒鳴り込んでやるう。

「美香、ちよっと待ってて……」

「ちよっと！ 静かにしてよ!!」

病室の中にいた大勢が、ビクツと振り向いて……

第五十六話（後書き）

続きは、近日投稿！

三連休だぜひゃっほう！

第五十七話（前書き）

そろそろ、オーズも最終回ですね、、、、、

プリキュアを見ていて、キュアビートの変身・必殺技バンクが可愛すぎてテンションだだ上がりです！

第五十七話

また、いつもの夢か……？

意識はハッキリしているのに、身体が無くなったように、見ていることしか出来ない、もどかしい状況。

『……………うるさい』

……………いや、違う。いつもの夢じゃない。

俯瞰するのは、いつもとは別の病室だ。ベッドシートを頭から被り、外界をシャットダウンしようとしているのは、声からして小さな女の子だろう。

ドンドンドン！！

鍵を掛けた病室。そのドアが、激しくノックされる。

『××さん！ ××さん！』

ここが病院だと配慮している雰囲気は欠片もない。

『事故の状況を説明してください！ ××さん！』

下賤な好奇心を満たさんとする、下衆の所業だった。

『唯一の生存者であるあなたには、それを語る義務があるんですよ！』

ただ一方的に自分の要求を叩きつける、不快極まりない声だった。『うるさい……………うるさいうるさいうるさい……………！』

少女は、泣いていた。

『たすけて……………！』

か細い声。

ドンドンドン！！

それは、ドアを叩く音に容易く掻き消され、誰にも届かない。

『誰か、たすけてよお……………！……………！』

ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンド『思い出せ思い出せ思
い出せ』ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンド『思
い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ』ドンドンドンドンドンド
ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンド
いつしか、壊れたテープレコーダーのように、延々とそれをリピ
ートする。

いつドアを破られるかも分からない。

その恐怖に怯え、シーツを被り、がたがたと震える。

『パパ……ママ……！……！……！』

シーツの中で呼ぶのは、両親。

だが、両親はいつまで経っても現れない。

『思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思
い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出
せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ』ドンドンドンドンドンド
ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンド
ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンド！

『あああああああああああああああああああああああああッ！
あああああああああああああああああああああああああッ！
！……！……！……！』

悪夢。

見ているだけで、吐き気を催すほどの、悪夢だった。

この少女が誰なのかは知らない。実在するのかも……もしかした
ら、ただの俺の妄想なのかもしれない。けど、それでも……
「や、めろ……！……！……！」

意識だけの自分。

何も手出しが出来ない自分。

夢でもなんでも……それが腹立たしくて。

「やめる……!!」

気体のような身体に力を込めて、拳を握り……!

そこで、唐突に目が覚めた。

「……………くっそ」

跳ね起きる。

五体の感覚。寝起きでぼやける視界を擦り、乱暴に眠気の残滓を振り払う。

「ん……………」

隣で、なのはが寝ている。ユーノとアルフが動物形態になり、丸まっている。

フェイトがタオルケットを蹴飛ばし、クロノを足蹴にして寝ている。

……………俺の家だ。

「……………」

「……………ヴィータ?」

ヴィータだけは、起きていた。

壁に背を預け、じっと宙を見据えている。

「……………」

ずっと起きていた……………わけでは、無さそうだ。

特徴的な紅髪に、寝癖が混じっている。

「……………なんだ、早起きだな」

ヴィータは軽口には応じず、俺と目を合わせた。

「なあ、秀人。お前……………」

……………何だ?

何かを言いかけて、思いとどまったように、口を閉ざしてしまった。

「……なんでもない」

もしかしたらこいつも、悪夢を見たのかもしれない。

「そっか。んじゃ、起きようぜ。もう朝だ」

悪夢を見て目が覚めるなんて、ガキっぼいにも程がある。

さて、もう起きるとしよう。

窓の外からは、太陽が顔を覗かせていた。

「ヴィータ、クロノ。それじゃ、留守番を頼んだぞ」

俺、なのは、ユーノ、フェイト、アルフの五人は、玄関先から部屋の中に声を掛けた。

「ああ、行つてくるといい」

部屋の中には、クロノと、

「……いつてらっしゃい」

まだ少しぎこちない、ヴィータが見送ってくれる。

今日は、ヴィータを我が家に迎えた翌日。

ついでに、なのはが桃子たちと過ごす日でもある。

この後ヴィータは、クロノの護衛のもと、マリーのラボへと向かう予定になっている。

……一人で向かわせるのは、色々とデンジャラスだからな。

猫に鰹節というか……飢えた肉食獣の巣穴に、ウサギを放り込むようなもんだ。

「クロノ……今度は一撃死するなよ……?」

「……………うるさい」

隙を突かれ、薬物注射でKOという無様な敗北を喫したクロノは、弱弱しく目をそらした。

「大体、お前がマリーにあんなメール送るからこうなったんだろうが!」

おつ……よっぽど恥ずかしかったのか、クロノの口調が崩れてい

る。

「いやあ……………スマンかった」

まさか、クロノを制圧してまで飛んでくるとは思わなかったんだ。
「だいたい、お前はだな……………」

うへ、小言が始まった。

「行ってきまーす！」

なのはの手を引き、ダッシュした。

「あ、おいコラ待て！ まだ話は……………」

とりあえず徒歩だ。

転移魔法を使いたいところだけど、口うるさい執務官がすぐそこにいるからな。

「クロノってば、やっぱり口うるさいなー」

頭の後ろで手を組み、てくてくと歩くフェイトが愚痴る。

「もっと女の子らしくしろー、とか、スカートであぐらをかくなー、とか、ピーマンのこすなー、とか……………まったく、キミはボクの兄貴かつつうの！」

思い出してはぷりぷりと怒り、歩調が荒くなる。

「三日に一回はきてたよー。ね、アルフ」

「いや、あたしのほうは週に一回くらいだったけど」

「え、なんでー！？ ずるい！」

……………あいつがそんな足しげく面会に行っていたことのほうが驚きだわ。

そういえば、クロノは一人っ子だとか言ってたな。つい年下に世話を焼いてしまう性分なんだろうか。兄弟がいない分、他人の世話を焼くとか……………無いな。

年下というか、むしろ…………

「フェイトだからなあ」

「フェイトだから」

「フェイトだもんねえ」

「フェイトだし」

俺、なのは、アルフ、ユーノの異口同音な感想に、フェイトが叫ぶ。

「りふじんだー!？」

「フェイト、ピーマン食べられないの?」

なのはがふと思いついたように、何気なく聞いた。

「う……だって苦いんだもん……」

「他には?」

「えーっと……にんじん、なす、きゃべつ、れたす、とまと、かぼちゃ……」

「野菜、殆ど全部駄目じゃない……」

超お子様の味覚だった。

「じゃあ、好きな食べ物は何?」

「甘いもの!」

……けどリンディさんが『また虫歯になるから』って、あんまり食べさせてくれない」

「そうなんだ……」

ちらっと、なのはと目が合う。

念話で、以心伝心。

今夜、野菜尽くしで。

OK。

野菜嫌い、なんとかしよう。

今日はまず、全員で食事をして……その後、なのはの父親の見舞いへ行く予定だ。

望に言われたから、久しぶりに様子を見に行くことにしたらしい。

「……病院、か」

つい口をつき、出てしまった。

今朝の夢は、一体何だったんだろう。

似たような夢は、何度も見た。けど、それは俺自身の体験であつて、あんな異常なものではなかった。

あの女の子も、多分知らない子だ。

それに、あの目の覚め方……俺があの子を助けようとしたら、急に現実に戻された。夢なんてそんなものかもしれないが、少しタイミングが不自然だった。

うーん……考えても考えても、答えが出ない。

歩きながら考えていたら、ぐいつと手を引かれた。

「みゆき、げんきにしてるかな？」

「ああ、多分……というか、アイツが元気じゃなかった事なんて無いだろう」

「あはははは！ みゆきのやつ、いつつも走ってるしな〜！」

けらけらと、面白そうに笑う。

どうせなら、ということ、フェイトがいることは高町家の面々には秘密にしている。

主に、美由紀へのサプライズだ。

妙にウマが合うらしい二人は、年の差を感じさせないほど仲が良い。フェイトの精神年齢は、そんなに高くないと思うから多分、美由紀の精神年齢が……

「秀人さん、姉さんにそれ言ったら駄目だからね」

……おお。バレバレだったか。

「もう、すぐ悪ノリするんだから……」

「悪い悪い……」

わざとらしくぶいっとそっぽを向くのはに、これまたわざとらしくへこへこ謝る俺。

そんな心地よいじゃれ合いを続けながら、桃子達が待つ高町家へ向かった。

インターホンを押し、玄関を開ける。

「あ、来た来た！ いらっしやーい！」

ばたばたばた……と、美由紀がフローリングをスリッパで疾走してきた。

「ぶフツ……………!!」

まさに、フェイトが言っていた通りだ。

「さあさあ、上がって上がって!」

「あー、ちよつと待った。……………おい、」

ドアの影に隠れていたフェイトを、ちよいちよい、と手招き。

「?」

首を傾げる美由紀。

「みゆきー! ひさしぶりー!」

びしつとポーズで決めたフェイトに、美由紀は……………

「……………」

完全に、フリーズしていた。

「……………え、あれ? どしたの、みゆき? ジェノサイダーがフリーズベントくらったみたいな顔になってるよ?」

一般人に分かりづらい例えをするな。

つていうか、どんな顔だ。

「みゆき? おーい……………」

「……………フェ、」

ふえ?

「フェイトだあああああああああああああああああああああ
つ……………」

どごーん! と、全体重を乗せたタックルで飛び掛っていった。

「ぎゃー!」

咄嗟にバック転で、タックルを回避。

ずざざざざ……………! と、庭の芝をスライディングする。

「……………うわぁ」

痛そう……………

「……………フェイトッ……………」

すぐさま復活。ずれた眼鏡を直し、

「フェイトー……」

再び、タックルを敢行。

「うわああああああ……」

どしーん、と、今度こそ命中した。

「フェイトフェイトフェイトー！ 戻ってきたなら何で連絡よこさないんだよこいつめー！」

力いっぱいハグし、くるくると回転する。

「ごめーん！ あやまるから、あやまるからー……」

「ゆるさーん……」

楽しそうだ。

「美由紀？ どうしたの……って、あらあら」

奥から様子を見に来た桃子が、その様子を見て苦笑した。

「母さん、こんにちは」

「お帰りなさい、なのは」

毎晩メールか電話で話をしているから、よそよそしさは皆無だ。かくいう俺も、ちよくちよく近況を報告していたりする。

「悪いな、桃子。あと二人分、追加よろしく」

「はいはい、任せてくださいな
さーて。」

「おい、美由紀、フェイト。先に食べちまうぞ」

「……はい……」

体中に草の切れ端をくつつけた二人が、元気よく返事をした。

「よう、元気そうだな恭也」

「秀人も変わり無いようで何よりだ」

「少し日に焼けたか？」

少し、褐色が混じっている。

「ああ、鍛錬を再開し始めたんだ」

……ほほう。

「俺とフェイトに負けたのが、そんなにショックだったか。そうか

そうか」

「……………まあ、そういうことが理由にならなくも無い」

素直じゃないなあ……………ま、それでも負ける気はしないけど。

「今度、また組み手しようぜ」

「ああ、望むところだ」

襲撃が無い間は、恭也を相手に実戦訓練をしてもいいかもしれない。

「ちょっと、秀人、恭也……………料理を運ぶの、手伝って欲しいんだけど……………」

両手で器用に大皿三枚を持ったユーノが、恨みがましく言ってきた。

「おお、悪い悪い……………」

「手伝おう」

こういうことは、男衆の仕事と相場が決まっている。

そして、三人で料理を並べ終え……………ついでに、急遽必要になった追加分の料理を手伝ったりしながら、時間が過ぎて……………

「準備できたよー！」

「……………はい！」

食事の時間になった。

メインは、野菜の天麩羅。細麺の Pasta や冷製トマトスープなどと、夏らしいさっぱりした料理が食卓を埋めていた。

「……………」

「いただきまーす！」

「……………」

めいめいに箸を伸ばし、天麩羅を、白身魚のフライを、Pasta を小皿に取り分け、口にする。

「おお……………この天麩羅、衣に味がある」

「あ、ほんとだ……………母さん、どうやったの？」

「食べ終わったら、レシピを教えてあげるわ。今度からは、なのも作れるわよ」

「恭ちゃん恭ちゃん、ケチャップ取って」

「自分で取れ。……というか、何に付ける気だ」

「え？ パスタ」

「却下だ味音痴め。というか、お前も妹を見習え。嫁の貰い手が無くなるぞ」

「う、うっさいわばけー！ 自分こそ、忍ちゃんとギクシャクして
るくせにー!!」

「ぐっ……大きなお世話だ！」

「ユーノ、この着っていうの、使いづらいよ………口で直接食べ
ていい？」

「駄目。使い方、教えてあげるから。ほら、人差し指と中指を……」

「うあー……指が攣りそうだ………そうだ、ユーノが食べさせてくれ
よ」

「えー!？」

「その魚がいいな。あーん」

「いや、その……」

「(あーん)」

「フォークじゃ、駄目かな……?」

「(あーん)」

「………はい、あーん」

「あぐあぐ………うん、うまいじゃないか」

全員、概ね好評のようだった。

「うっうっ………やさいがいっぱい………」
約一名を除いて。

「あら、フェイトは野菜が苦手なの？」

「うん………だって、苦いし、エグいし………」

桃子はにっこりと、優しいようできて………実は厳しい笑みを浮か

べた。

箸でかぼちゃの天麩羅を持ち、フェイトの口元に持って行く。

「はい、あーん……一口で良いから、食べてみて」

「かぼちゃって、なんかデロっとしてる……」

「一口食べて、駄目だったら無理しないでいいから」

「……はい」

「……やんわりと諭され、しぶしぶ口にした。

口に入れるときは、ぎゅっと目を瞑り……」

「もぐもぐ……あれ？ デロっとしてない」

不思議そうに、一つ食べきった。

「煮物にすると粘りが出ちゃうから、それが苦手だったのね。どう？」

「きらいじゃない……というか、おいしいかも」

「じゃあ、次はナスをいつてみましょうか？」

「うえ……汁がえぐいんだよ……」

「かぼちゃは食べられたでしょう？ なら、きっとナスも食べられるわよ」

「……わかった、食べてみる」

さすが、このへんは三児の母の面目躍如。

俺だつたら、無理矢理にでも食べさせていたかもしれないところを、自分から食べるようにうまく誘導した。

「フェイトが野菜食べてる……」

アルフが、信じられない、といった様子でそれを見ていた。

フェイトが、野菜をぱくぱくと食べる。

「食べられたじゃない。偉いわフェイト」

頭を撫でられたフェイトは、一瞬何かを考え、桃子の服の裾を引いた。

「……ねー、ももこ」

「なあに？」

「料理って、ボクにもできるかな？」

……………そうきたか。

「……………」
「なのも、じつと耳を澄ましている。」

「それはもちろん、練習すれば出来るけど……………どうしたの？ なのは達には、作ってあげるの？」

「うん、それもあるけど」
次にフェイトが口にした言葉は、沈黙をもたらした。

「おかーさんに、作ってあげたい」

……………プレシア。

彼女は、今もまだ獄中にいる。直接に言葉を交わすことが出来るのは、管理局の中でもかなり上の地位にいる者に限られていて……………料理を覚えたとしても、作ってやれるかどうかは……………

「……………フェイト」
多少の事情を知っている桃子は、フェイトを抱き寄せた。

「わ……………なに？」
「今度……………なのも一緒に、翠屋へいらっしやい。時間を見て、教えてあげる」

「え？ 母さん、私は別に……………」
料理の腕に不自由が無いなのは、遠慮しようとしていた。

「なのは、行って来いよ」
週に一回の家族の時間。それを増やすチャンスを、わざわざ見逃す手は無い。

「……………まあ、秀人さんがそう言うなら」
しづしが言っているような振りをして、微妙に口角が上がっている。

どんなに大人びていたとしても、なのははまだ9才の女の子だ。母親との時間が嬉しいのは、当然のことだろう。

「……………早く、プレシアさんに会えるといいわね」
「……うん」

それからしばらく、桃子はフェイトを胸に抱いていた。

「……ああもう、湿っばいのは無し！ なし！」

ぶんぶん、と、大きく腕を振り、『湿っばい空気』とやらをリセツトする美由紀。

桃子の腕から離れたフェイト。その目は、微妙に赤くなっていた。
「へへへ……………ごめんごめん！ なんでもなーい！」
明るく振舞い、残った料理を平らげていった。

「それじゃ、食事も終わったし……………そろそろ行くか」

食べ終わった料理の皿を、流し台で手分けして洗った。

次は……………病院へ、なのはの父親の見舞いだ。

「そっぴや、病院までどうやって行くんだ？」

「車で行きましょう。8人乗りだから、ギリギリ乗れるわ」

「おっけ。なのは、荷物持ったか？」

「うん……………」

気の無い返事。どうやら、緊張して堅くなっているらしい。

車庫から出てきたワゴン車に乗り込む。

俺となのは、フェイトの三人は、真ん中のシートに並んで腰掛け
た。

「でっけー車だな……………」

「それはもう、うちの業務車両も兼ねてるから」

ハイエース・スーパーロングを、慣れた手つきで操りながら、桃子が答えた。

俺も、18になったら取らないとな……………運転免許。あと、だいた
い五ヶ月。

「……………」

五カ月後に、免許だとか何とか、言っていられる状況であれば万々歳なんだけど。

いつも、魔法の練習に使っていた高台とは、町を挟んで反対側。開発の手も殆ど入っていない、自然豊かと言えば聞こえは良いが、要は雑草が生えっぱなしの空き地が延々と続く、寂れた地域。

その真ん中に、ヘリポートまでを備えた巨大な病院がデーンと居を構えているのは、滑稽でもある。

「はい、到着」

ぞろぞろと、八人で車から降り、病院のロビーへ向かった。

「はい……………あら、高町さん」

受付にいた看護師とは、顔見知りらしい。

「夫の見舞いに参りました」

「はい、それでは……………」

渡されたのは、病室の鍵。501と、刻印されている。

エレベーターで5階まで移動し、501を目指す。間取り図を見た感じ、どうやらこのフロアは四部屋で贅沢にスペースを使っているようだ。

途中、通りがかった502のドアの前に、今時の若者っぽい格好をしたねーちゃんが直立不動で立っていたので、全員で会釈をしながら歩いた。

ベッドでは、人工呼吸器や、何に使うのかも分からないような管を通した男性が眠るように瞼を閉じていた。

「うわー……………きょうやにそっくりだな、このひと」

「そりゃ、父親だからな」

「？ ちちおやだと、似るの？ ボク、おかーさんとあんまり見た目似てないけど」

「多分、フェイトは父親に似てるんじゃないか？」

「ふーん……」

あまり普通じゃない生まれ方をしたフェイトには、理解し辛い内容だったらしい。

「じゃあ、ボクとひでとのあいだに子供ができたら、どっちに似るの？」

「ブツ……！ ゲホツ、ゲホツ……！」

いきなり、何を言い出すんだこいつは……！

「フェイト、変なこと言わないで！」

なのはが、顔を羞恥で赤くして怒鳴った。

「え、ええ！？ ボク、なにかへんなこと言った？」

やっぱり、わかっていなかったらしい。

「言った！ そんな、秀人さんの……子供だなんて……！」

ちらつ。

目が合った。

「……！！ と、とにかく！」

あ、逸らした。

「そういう話、禁止！ 禁止 ……！！！！！！」

「なのは、ちょっと声大きいって……！」

このフロアには、少なくとももう一組、見舞い客が……

はたはたはた……！！

ほーら、やっぱり……

スリッパを鳴らして、501に足音が近づいてきていた。

しゃーない、とにかく、謝らないと。

ばんっ！

「ちょっと！ 静かにしてよー！」

扉が開いて、さっきのねーちゃんが……あ？

「私の妹分が入院してるって言うのに……非常識……だと……」

さー………っと、見る見るうちに血の気が引いて行く。

その子は、散切りの髪をした………なのはと同一年くらいの、
小さな女の子だった。

第五十七話（後書き）

今日もポツケでウイリー訓練、、、結構楽しいです。

次回か次々回で、大幅に物語を進行させます。

第五十八話（前書き）

コミケが近いですね。

劇場版第二作までには、A S 編は完結させたいです。

第五十八話

ドアを開け放った先……待ち受けていた面子に、その驚愕に、動きを固められてしまった。

「すまん……少し、はしゃぎすぎた」

目の前で頭を下げるのは、憎たらしい仇の代表格……不死身の怪力野郎。

私の顔をブツたたいてくれたアホっぽい金髪赤眼や、ジエノザウラーみたいにビームをぶつ放す砲撃バカ。嫌らしい魔法でちくちく手間を取らせたガキに、犬女。砲撃バカの血縁者らしい奴らも、顔を揃えていた。

「……………」

私の素顔は、幸いにもこいつらにはバレていない。

速攻でリンカーコアを起動させ、ブラッディダガーでもゼロ距離でブチ込んでやれば……今の弱体化した私でも、一人くらいは仕留められる。

殺るか？　ここで……

狙うなら、リンカーコアを抜き、弱体化した砲撃バカだ。

『おやめください、主』

……リーゼか。ずっと念話を通じて、こちらの様子を伺っていたらしい。

『一人仕留めたとしても、残りの人数に押しつぶされてしまいます』
……………そう、だね。

何も、いまこの場でドンパチしてたら、美香に危険が及んでしまう。

だから、今は。

『リーゼ。一人残らず、顔を記録しろ』

『了解』

一人でも多く、敵の姿を記録して……………独りになったところを、個別に狩ってやる。

「……………」

怪力野郎が、怪訝な顔をする。

ここで怪しまれたらアウトだ。アクシデントとはいえ、私の顔も、相手方にはれてしまっている。なるべく自然を装って……………

『主。全員の顔を記録しました』
よし。

「……………それだけ。もう騒ぐんじゃないよ」
撤退だ。

去り際にもう一度振り返り……………

「……………」

怪力野郎の顔を、目に焼き付けた。

ぱたん

扉を閉める。

「高町……………ね」

多くは無いけど、珍しくも無い苗字だった。

「主」

ネームプレートを見上げていたら、廊下の向こうからリーゼが歩いてきた。

「いったん戻るよ」

「はい」

行動は、夜からだ。

病室に戻ったんだけど……………

「……………」

美香が窓の外に目を遣って、頑なに口を閉ざしている。

美穂さんはどう声を掛けるべきか、おろおろと狼狽していた。

……はあ、言ったそばからこれか。

「美香」

「私、悪くないもん」

「美香」

「……………」

むすつと、より頑なに口を閉ざす。

「そう、話してくれないんだ。じゃ、バイバイ」

さくつと踵を返し、出口へすたすたと歩を進める。

「えっ……………」

後ろで、美香が振り返る気配がしたけど……聞き分けの無い子供のことなんて、知ったことじゃない。

「……………」

引き止めるような視線を無視して、いよいよドアに手を掛けた時

……

「ごめんなさい！ 謝るから帰らないでー！！」

「……………」

ベッドに歩いていき、

「ゴンッ！」

「いいったあ……………！！」

お仕置きの拳骨を、美香の頭にお見舞いした。

「ごめんなさい……………」

涙目になる美香。

「謝る相手が違つたる」

「うっ……………」

そして、バツが悪そうな顔で、美穂さんの方を向いた。

「……………お姉ちゃん、ごめんなさい」

「……………いいのよ。私も少し、言葉がきつかったわ」

……………はあ、全く、手がかかる。

「ほら、これでも食べな」

ぽいっと、ポケットの中からチョコ菓子をとり出して、美香に放

る。

「ありがとー！」

「ちゃんと歯磨きするのよ？」

「はぁーい」

その後、リーゼを紹介したり、雑談に興じたり、差し入れ代わりの漫画をまわし読みしている間に、夕方になってしまった。

そろそろお暇することにしよう。

もう少しいてもよかつたんだけど……

「すう……」

美香、寝ちゃったし。

美穂さんが玄関まで見送りに来てくれた。

「今日は、いろいろとありがとうね。八神さん」

「別に……大したことはしてませんよ」

単に、遊びに来ただけだし。

「それにしても、美香があんなに素直に話を聞くなんて……少し、妬けてしまうわ」

ふう……と、疲れたため息をつく。

でも、それは……

「逆じゃないかな？」

「え？」

「私は、美香のオトモダチ……突き詰めれば、ただの他人。

他人には良いところだけを見せようとするし、無理してでも笑顔を作る。」

……誰だって、友達には嫌われたく無いからね」

友達がいたことの無い私に断言は出来ないけど、推測はできる。

「でも、美穂さんは『お姉ちゃん』でしょ？ 好きだから……本当
に嫌われることは無いってわかっているから、つい我俣を言っちゃ
うんだよ」

好きな人には、つい我俣を言って、甘えたくなくなってしまっ。

私も両親に対してしたことがあるから、よくわかる。

「だから、本当の意味で信頼されて、慕われているのは美穂さん。これは間違いないから安心してよ」

「……………八神さん」

「『はやく』でいいよ」

「はやくちゃん、本当に、ありがとうね……………」

「……………」
そして、美穂さんは病院の中へ戻っていった。

「……………」

美穂さんの、去り際の笑顔が頭から離れない。

他意の無い、純粋な感謝を表す笑顔。

……………世界を滅ぼす。

それが、私の最終的な目的。それに対して、躊躇いは無い。

美香は私の身内だから、生かす。

でも……………美穂さんは？ 美香のお兄さんは？

なんだろう。胸が、モヤモヤする。

「……………ねえ、リーゼ」

「はい、主。何でしょうか」

「……………」

「主？」

でも、そのモヤモヤを言葉にすることができなくて、黙り込む。

「……………なんでもない」

……………私は、どうしたいんだろう。

深夜。

「……………」

私とリーゼは、また病院の中にいた。

病院とは言っても、病室ではなく、総合受付のカウンターの中だ。理由は簡単。あの、高町とかいう男の住所を調べるため。

ぶぶん……と、パソコンが立ち上がる。

魔法は必要最小限……… 監視カメラと警報システムに、リリーゼが細工を施すのみ。

物理的に何かが無くなるわけでも、データが破損するわけでもない。ただ見て、もとに戻すだけ。これなら、誰にも気付かれない。

「んーっと……」

パソコンには疎い私だけど、フォルダからデータを閲覧する程度のことは可能だ。

こういふ個人情報には、普通、パスワードが設定されているのが普通なんだけど……… 担当の職員がボンクラだったのか、面倒くさがっていたのか、自動でログインできた。

馬鹿は、身内以外に多ければ多いほど良い。

『入院患者』という、そのままなフォルダ名のフォルダを開く。

「あつた」

あつさりと見つかった。

「それほど、離れていないな……」

住所をメモに取り、パソコンの電源を落とす。

魔法は便利だけど……… こうした、アナログなやりかたを忘れさせられてしまうのが、欠点といえば欠点だ。

個人情報はゲットしたことだし……… 帰るか。

さーて、帰ってから戦闘訓練だ。

………

「ほい、ほいっと……!!」

スウエーで鉄球を回避し、すれ違い様に刃を入れる。

カキンッ……!!

力でねじ込むのではなく、刃を、滑り込ませるように……………斬る！！

「せいやッ！！」

キンッ！！

うん…………この魔剣の扱いにも、大分慣れてきた。

今現在、私の魔力は、リーゼの言うランクにするとA。闇の書によるブースト抜きの状態がAAAだから、まずまずの回復だ。

最初のうちは避けるだけで精一杯だったこの訓練も、仕上げの段階に入っている。

「はい、ラスト！」

キ、キンッ！！

最後の鉄球が、上下左右に斬り裂かれた。

「見事です」

「ふん…………ざつとこんなもんよ」

かしん…………と、魔剣を鞘に収める。

「では、訓練を次のステップへ移しましょう」

「次って…………？」

「……………主、御手を」

「？……………はい」

言われるままに、手を差し出す。それをリーゼが握り…………

ウンッ……………！！

展開する魔法陣。記述された術式は……………転移！？

「え、え！？ ちょっと、リーゼ！？」

「お達者で」

文句を言うよりも早く、光が私を包み込み…………

バシユンッ！！

「う、わあああああああああああああ！！？」
……ここではないどこかへ、転送された。

光の渦を抜けて、一瞬の停滞。そして。砂利の地面が、目の前に迫ってきていた。

「うおつとオ！？」

ザンツ！！

……なんとか、足から着地に成功した。

「……なんだ、ここ」

見渡す限り、草原と荒野を半々にしたような、静かな風景が続いている。上空に浮かんだ二つの月が、その静けさに拍車を掛けている。た。

時折吹く風が、草をさらさらと鳴らし……

ガサツ

いや、違う。風じゃない！

「……」

魔剣を鞘から抜き放ち、正眼に構える。

ガサガサガサツ……！！

二、三、四……まだ増える。

集中しろ。狙うのは……出足だ！

「グアアアアアツツ！！」

「はぁッ！！」

身体を回転させ、背後に一閃！！

ザンツ！！

「ギャフツ……！！」

どつっ……と、目の前に墜落する。その姿は……

「犬……いや、狼？」

とにかく、イヌ科の肉食獣に酷似した姿だった。

「グルル……」「フウウウ……」「グルウ……」「ガルルル……」

……！」

草の影から、虎視眈々と、私を狙う。

そうか……訓練の次のステップは……！

「 「ガアアアアアアアアアアッ！！！！」 「

敵との、実戦！

「ぜあああッ！！」

ザンツ、ザシユツ……！！

生きた肉を切り裂く、久々の感触。

だけど、殆ど自前の筋力だけでその行為を行うのは初めてだ。

鉄球と違って、繊維が複雑に絡み合った肉はゴムのように柔軟で、刃を通しづらいことこの上ない。

「ガウツ！！」

飛び掛ってきた二頭。うち一匹は、首を切断したが、もう一体はしとめ損ねた。

右前足を失いながらも、私の二の腕に喰らいついてきた！

グチュツ……！！

強化した握力で、その頭を握り潰す。

「ガアアアアアッ！！」

「っ……！！」

「ったく、リーゼの奴……！！」

「アアアアッ……ガヘッ……！！」

さあ……お披露目と行くのか!!

「……ロードカートリッジ!!」

魔剣の峰に据え付けられたスリットが開き、

ガキユンツ……!!

内蔵されていた機能を、解放した。

内部のカートリッジに充填されていた私の魔力が、魔剣の威力を
倍増する!!

ゴオオオオツ……!!

魔力は黒炎となり、魔剣に絡みつき……!

バギインツ!!

「ウゴアアアアアアアアツ!!」

野獣の乱杭歯を、下顎と纏めて根こそぎ破壊した!

「オツ……ゴホツ……!!」

戦闘力を失った野獣が、背を向けて逃走を図る。

逃がすものか!

「死ねえエエエエエエエエエエエエツ!!」

斬撃波を発射し、敵の群れと、野獣の四足を切断する。

これで……とどめだ!

カートリッジに残った全魔力を乗せた、渾身の一撃!

「紫電……一閃ツ!!」

……ガゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ

！！！！！

攻撃の余波で、草原が炎上する。
生き残った敵は、いない。

「はははははっ！ どうだ、リーゼー！」

リーゼからの返事は無い。

つまり、まだ終わっていない。

「……とりあえず、」
ぐるりと見渡す。

草原と、荒野の世界。さっきみたいな獣達が、弱肉強食の掟に従う世界。

「この頂点に、なってみるか」

本当、練習には丁度良い。

私は魔剣と、空になったカートリッジを手に、荒野を歩き始めた。

第五十八話（後書き）

次回、なのはに転機が訪れます。

第五十九話（前書き）

車検が近い、、、憂鬱です。

第五十九話

七月末日。

私は、屋上の給水タンクの日陰に腰掛け、ぼうつと空を眺めていた。

「あー……本日も、晴天なりー……終業式、いまだ終わらずー……」
ふわぁ……と、大きな欠伸が出た。

そう。今日は、一学期の終業式だった。

だった、というのは、私は絶賛サボタージュ中だからだ。ロクに換気もされていない体育館で、無駄に長い校長の話を聞いていられるほど、私は気が長くない。

屋上の鍵は、ちょこつと魔法を応用した念動力でシリンダーを回転させて開けた。

しっかりと施錠もしたから、バレる心配は殆ど無い。

「あーあ……」

やはり、レイジングハートがないと寂しい。

……修理、いつ終わるのかなぁ。

少し顔を出して覗くと、体育館の渡り廊下から、そろそろと生徒たちが溢れ出てきていた。

ようやく終わったらしい。さーて、教室に戻るか。

……

「……高町さん」「はい」

教卓まで歩き、じつとりと恨みがましい目つきで私を見る富山先生から、成績表を受けとった。

「なーのはっ。成績どーだった？」

望が、ひらひらと成績表を片手にやってきた。

「望は？」

「あー……算数と理科が2で、3が殆ど。4は家庭科だけで、5は無し」

良いのか悪いのか、分かりづらい成績だった。

さて、私はどうかなーっと。

「あ、オール2だ」

なんだか、ちよつと得した気分。

「へえ、オール2かー……って、えええええっ!？」

望が素っ頓狂な奇声を発した。

「な……何、いきなり？」

びっくりしたなあ、もう。

「オール2って……え、うっそ、マジで!？」

「うん。ほら」

机の上に置いた成績表を、二人で覗き込む。

「うわ……マジだ! マジでオール2だ!」

学科の点数面はAなのに、意欲・関心・態度がF……まあ、こんなものか。

「……な、なあ」

あ、葉山君だ。

「あん? 何よ健太」

ぎろっ……と、葉山君を思いつき邪魔物扱いする望。

「その……よかったら、夏休みの宿題、一緒にやらねー?」

「え?」

夏休みの宿題?

「……そんなのあつたっけ?」

正直、覚えてない。

「なのは……あんだねえ」

呆れた視線を向けられた。

貰ったプリントを確認すると、休み中の課題一覧が記載されていた。

「ちゃんとやってきてくださいね！」

檀上の先生が、主に私にむけて言った。

「提出率が悪いと、私が長谷川先生に怒られます！だからお願い！ちゃんとやってきて！」

「ははは……さっちゃん先生、相変わらずだよね」

「そうだね……」

「まあ、心配はしてないけど。なのはなら半日あれば終わっちゃうでしょ？」

「多分ね」

読書感想文なら空で書けるし、他も同じく。

「そ、そうか……」

葉山君は少ししよんぼりして、席に戻った。

ちよつと、悪かったかな？

望に目で尋ねると、気楽な笑いが返ってきた。

「いーのいーの。ったくあのアホ、性懲りも無く……」

「はあ……」

「ハヤマ、どんまい！」「よくやった！」「俺達に希望が無いってことが、よく分かった！」「ナイス

人柱！」「ナイス玉砕！」

「う、うっせーよ！？ほっとけ！」

それを友達らしき男子たちが、口々に慰める。

キーンコーンカーンコーン……

お、時間だ。

「はい、それじゃあ皆さん。有意義な夏休みを過ごしてくださいね。解散！」

さよーならー！

大合唱が、響き渡った。

「なのは、このあと暇？」

「……うーん。暇と言えば暇なんだけど。」

明日、フェイトについて、リンディさんの上官に会う以外、何も予定が無いし。

「うん、付き合っよ」

「やった！実は、前から気になってたお店があったんだ」

「へえ……」

「前に行ったら閉まってて、店の前に置いてあった割引チケット貰ったんだよ」

ぴらっ、と、鞆からそのチラシ兼チケットを取り出した。

「この、碧屋って店！」

「……………マジかよ。」

「いらっしゃいま……せ……？」

眼鏡に三つ編みの店員……姉さんが、私たちを出迎えた。

「ま、窓際の御席へ、ドウゾ……？」

なかなか混乱しているらしく、接客がぎこちない。

でも、私も、あまり人のことを言えたほどでもない。

「ドウモ……」

一昔前のロボットのように、ガチガチの動作で席に移動する。

「わー……やっぱり、雰囲気がいい店だね」

隣で呑気にはしゃぐ望が少し憎らしい。

……久しぶりに来たな、この店も。
記憶の彼方に消えかけた風景だけど、どこか懐かしい。

姉さんが厨房に引っ込み、わたわたと身振り手振りで何かを伝えていた。

「ご注文は？」

数分後、オーダーを取りに来たのは兄さんだった。
さすがに、姉さんよりは落ち着いている。

「……ミックスサンドと、デザートにシフォンケーキを」

「かしこまりました」

一礼し、去っていく。

肉親に恭しい態度を見せられ、照れ臭いやら、恥ずかしいやら……
とにかく、調子が狂う。

「じゅっくりどうぞ」

サンドイッチは、すぐに出てきた。

「ね、ね！今の店員さん、かっこよくない!？」

……世間一般の評価というのは、あまり当てにならないものだ。

「はあ……健太も、せめてあれの半分、いや、三分の一でも落ち着
きがあればなあ……」

サンドイッチをつまみながら、望がぼやく。

「でもさ……落ち着きのある葉山君なんて、葉山君じゃないよ」

彼はもつと……こつ、アホじゃないと。

「あはははは……言えてるかも！」
爆笑する。

「お待たせしました」

と、話をしているところに、デザートにシフォンケーキが来た。

「あ、ども……ゴフッ……」

びっくりして、噎せてしまった。

「ちょ、大丈夫!？」

「ゲフツ……な、何で……!？」

テーブルの脇に立っていたのは、ウエイトレスではなく、パーティシエが着ているような服を着た(事実

パーティシエが着ている)店員……というか。

母さんだった。

「……え? ……え!？」

望が、私と、母さんの顔を見比べる。

あまり自覚は無いけど、私達って似てるらしいから。

……はあ、もう。

「母さん、何してるの……」

「あら、せっかく娘が友達を連れて来たのよ。挨拶くらい、いいじゃない……ねえ？」

母さんが望と目を合わせた。

「は、初めまして。なのはの友達で、八代望って言います」

「初めまして。高町桃子です。なのはと仲良くしてあげてね」

「あ……ハイ!」

「この子、目つきと態度と言葉遣いは悪いけど、根は優しい子だから……」

「はい、それは知ってるから大丈夫です!」

「私達のせいなんだけど、人付き合いが苦手で、なかなか友達も出れないみたいで……」

「もう!いいから仕事に戻ってよ!」

恥ずかしいなあ、もう!

「はあい。それじゃあ、楽しんで行ってね」

そう言って、厨房に戻った。

「ったく、もう……！」

ケーキを一口、大きめに切り分けて口に運ぶ。

兄さんと姉さんは、明らかに父さんに似ている。

さっきの二人との血縁に気付かれなかったのも、そういうことだろう。

「やっぱり、美人な人だったねー。さすが、なのはのお母さんだ」

……え？

「『さすが』って、何が？」

「え……？ だから、なのははお母さん似だから、可愛いんだね……って」

変なこと言うなあ、望は。

「私、別に可愛くなんか無いよ？」

可愛いっていうのは、フェイトとか、望の方がじっくり来る。

「……………」

がしっ……と、両肩を掴まれる。

「……？」

「嫌味かコラー……！」

がつくんがつくと、前後に揺さぶられた。

「ああああ……？」

店内にいた他の客の目が、一斉に集まる。

「あんたが可愛く無いなら、私はブスか！？見るに堪えない醜女か

……！」

「あうあうあう………」

何で怒ってるのか、よく分からない……

「はあはあはあ………」

店員に注意される頃には、望はすっかりバテていた。

追加注文したアイステイーを飲み、一息ついた望は、今度は言い

聞かせるように話し出した。

「少しは、自信持ちなさいよ。謙虚と、卑屈は違っただからね」

「……………」

自信……………か。

「……………考えとく」

多分、無理だけど。

店を出た所のすぐ近くに、大型の貨物車が路上駐車していた。

……………秀人さんも、お仕事してるのかな。

「なのは、どーしたの？置いて行っちゃうぞ」

「うん、」

ミチッ……………

……………今の音、何？。

きよるきよると辺りを見渡すが、発生源は分からない。

気のせいならいいんだけど……………何だろう。

プチッ……………！

やっぱり、気のせいじゃない！

バツンツツ！！

次の瞬間、私の目に飛び込んできたのは……………

「、の」

貨物車の荷紐が中途から千切れ、

「…………アああああッ！！」
届けええええッ！

ガシヤアアアアンツ…………！

なりふり構わずに、望に飛びついて…………地面に転がった。

「ぜー…………ぜー…………！」

望は…………！？

「…………あれ？」

きよとん…………と、私の腕の中にいた。

「よかった…………！」

ぎゅうつと、望を抱きしめる。

「なのは、頭、！？」

どろつ…………と、汗とは違う、錆臭く、生温い何かが、額を伝い、
視界を朱く染め…………

「あ…………」

ブツンツ…………と、意識が強制シャットダウンされた。

警察が通報を受けて駆け付け、事後処理にあたっている。

桃子達は営業時間を切り上げ、なのはが担ぎ込まれた病院に急行
していた。

「…………なのは」

望は、辛そうに俯いている。

事実、辛いに違いない。

「…………大丈夫よ、望ちゃん」

その肩を抱く桃子は、気丈に振る舞っていた。

転がる時に額を割ったものの、傷跡は残らないそうだ。
意識を失ったのも、単にショックによるもの、と診断された。

「……………いの一番に駆け付け付けた秀人ら……………特にフェイトは、それを聞いた瞬間に、崩れ落ちた。」

護衛とは言え、フェイトは保護を受ける少女に過ぎない。

今日、なのはと共にいなかったのも、明日の下準備のためであった。

それでも泣いて、泣き疲れて、ソファで眠ってしまった。

恭也と美由紀は、心配する傍ら、なのはが見せた現象について、話し合っていた。

「……………美由紀、見たか」

「うん。さっきのって……………」

二人は、畏怖を込めて、その名を口にした。

神速。

と。

美由紀はおろか、恭也ですら、使いこなすことが難しいそれを、なのはが使った。

わずか9歳の、女の子が。

しかも、肉体が限界を迎えただけで、『神速』が破綻したわけでは、無かったのだ。

練度で言えば、恭也をも凌ぎ、全盛期の父親にも匹敵するだろう。

「……………あれ』を、使えるかもしれないな」

恭也と美由紀は、そのまま黙り込んだ。

「……………秀人は？」

ユートの一声に、全員がハッとする。

いない。

つい先程までそこにいた秀人が、忽然と姿を消していた。

第五十九話（後書き）

Forceのなのはさんが、
どんどん機動兵器と化している件につ
いて

第六十話（前書き）

フリーター時代に払い忘れていた年金の督促状が、、、 総額25万円。

、、、 どうせ、自分が60になっても貰えないなら、払う意味は無いですよね。

無駄金になるのが目に見えています。

上司は「払っておけ」と言っていますが、、、 どうしようかなあ。

第六十話

時間は、数時間前に遡る。

秀人は、会社の事務所にいた。

デスクに腰掛け、型遅れのノートパソコンで、在庫表をチェックし、発注書を作成していた。

「…………ふああ」

と、応接間とは名ばかりの、仕切で区切られたブースから、大きな欠伸が聞こえてきた。

「…………あーあ、まだ昼前か」

ふて寝していたらしい。むくりと起こした身体は、二メートルにも迫る巨体だ。横幅もあるが、その殆どが筋肉。黒く日に焼けた肌が、いかにも肉体労働者らしい。

彼は、秀人が勤める建設会社の現場監督兼…………アルバイトを含めても、両手の指で事足りる小規模な会社の、社長だ。

従業員達からは、親しみを込めて『カントク』と呼ばれている。

「クソ…………あの野郎」

その彼が、明らかに不機嫌だった。

それもそのはず。

今日は本来なら、新たに建てられる施設の基礎工事を行っているはずだった。

その割と大きめの案件を、他社に奪われてしまったのだ。どうということはない。

…………それが、合法的に行われたのなら、の話だが。

今回、その案件を掻っ攫っていった建設会社は、業界では名を馳せる悪徳業者…………というか、ヤク

ザだった。
コストダウンを唄った粗悪な材料。手抜き工事。作業は下請に丸投げ。安全管理も何も無い。

そんな連中が奪った仕事とは……病院の、新しい病棟を建てる仕事。
事。

「タチの悪いジョークだぜ……」
ふて腐れ、煙草に火を点ける。

秀人が、見るに見兼ねて発言する。

「カントク、俺、半日で上がりましようか？」

ノート貸してくれれば、明日までに上げておきますけど」
仕事が無いなら、いるだけ人件費の無駄だ。

「いや、ヒデはいる。……おい、ヨシ！」

代わりにカントクが呼んだのは、中卒でアルバイトの美彦だった。
「ういーッス。何スカ、カントク？」

金髪から色が抜けて黄色髪になった、軽そうな若者だ。

「帰れ」

しっしっ……と、邪険に手を払う。

「いきなり何スカ!？」

納得出来るわけも無く、食い下がる。

「仕事が無えのにいてもしょうがねえだろ」

「そりゃまあ、そうッスけど……」

「んじゃおめえ、パソコンできっか？」

「うっ……!ハイテクは、苦手ッス……」

「フオーク、動かせっか？」

「……無免ッス」

「顧客対応、できっか？」

「……さいなら」

消沈して作業着を着替える美彦に、カントクが声をかける。

「ま、詫びにメシ奢ってやるから許せ」

がばつ、と、一変して喜色満面になる美彦。

「マジっスか!? ひゃっほー!」

いいタイミングで、美彦の腹がグウ……と鳴る。

「美彦、お前、朝飯食ってきたか?」

現場ならともかく、待機で、そんなに腹が減る筈が無い。

秀人の問いに、美彦はからからと笑った。

「節約ツスよ、節約」

朝食代の数百円すら惜しんで、どうしたいと言っのだろうか。

「深夜にコンビニの廃棄弁当、食い溜めてるから大丈夫ツス!」

「いや大丈夫じゃねーし……」

まあ、秀人は秀人で、そういう経験がある以上、あまり強くは言えない。

「おい、メシ食ってくらあ!」

カントクが残りの社員に声を掛け、秀人と美彦を伴って事務所を出て行った。

食べに行く、とは言っても、洒落たレストランなどは眼中に無い。

育ち盛り食べ盛りの男子が二名、仕事柄大食漢の男性が選ぶのは、

専ら……

「カントクカントク、肉食いたいツス肉!」

「焼肉……なら、バイキングだな。ヒデはどうだ?」

「あ、ハイ。問題無いです。つーが大歓迎です」

高カロリー高タンパクの、炭水化物だった。

……席に着き、いきなり大量の肉をゴツソリ持って行った三人に、店員がぎよつとした。

ガツガツと掻き込むように食べる美彦。

もりもりと詰め込むように食べるカントク。

ぱくぱくと流し込むように食べる秀人。
流石、肉体労働者だった。

腹がある程度ふくれ、雑談が始まった。

「でも、そのナントカ商会って、そんなに酷い奴らなんスか？」
と、美彦が軽い調子で聞く。

「鉄骨縛るのに、手間が掛かるからってハーネスの本数を減らすよ
うな奴らだ」

……ぴたり、と。秀人の箸が止まる。

「……事故は？」

「ああ、現場ではバンバン起きてるだろうよ。コトを荒立てたくな
いから、救急車も呼ばねえらしいけ
どな」

ふん、と、忌ま忌ましそつに烏龍茶を煽る。

「……そうですか」

ため息をつき、また肉に箸を伸ばす。

「ちょ、それだけツスカヒデさん!？」

ガタンツ、と、椅子を蹴立てて立ち上がる美彦。

その目は、若い正義感に燃えていた。

「悪徳業者に、一杯喰わせてやるうとか……!」

「……あのなあ、美彦」

言い聞かせるように、カントクが言う。

「一杯……どうやって喰わせるんだ？」

「えっ……えーっと、それは」

途端、ごにごによと口ごもる美彦。

「仮に、手段があったとして、やってどうなる？」

俺達が、業界から追われて刑務所入ってオシマイだ」

「うっう……納得できないッス」

秀人も、憤りを感じないかと聞かれれば、答えはノーだ。
だが、納得するしか無いのだ。

それが、たとえグレーゾーンだろうが、合法であれば、納得するしか無いのだ。

P r r r r r ……

と、秀人のポケットから、携帯電話の着信音が響いた。目で了解を取り、電話を取り出す。

相手は、

「……桃子？」

まだ、翠屋は営業時間真っ只中の筈。

怪訝な顔で、通話ボタンを押す。

「桃子、どうした？」

「な、なのは、なのはが……!!」

「おい、落ち着け。なのはが、どうしたって？」

動揺し、まともな会話が成り立たない。

「がさごそ、と、電話口の向こうで音がする。」

「秀人、俺だ」

「恭也か。……一体、何があったんだ？ なのはがどうか……」

「落ち着いて、聞いてくれ」

ただならぬ雰囲気、秀人の表情が張り詰めていく。

話を聞き終えた瞬間、走り出していた。

「今日、なのはが友達を連れて、翠屋に来たんだ」

カントクや美彦を振り返りもせず、店を飛び出し、職場まで。キを取り出し、バイクに跨がる。

「その、帰り道で……近くのトラックから、荷物が雪崩落ちて」

キュボツ！ と、エンジンを点火し、フル加速で走り出した。

『なのはが、友達を庇って飛び出したんだ』

大通りを、路地を、最短距離で駆け抜ける。

『それで、なのはが頭に怪我を……』

ギヤギギツ！と、タイヤ痕を残す程のフルブレーキを掛ける。
入口を、受付を、全力疾走し……

バンツ！

「なのはッ！！」

病室に飛び込む。

ベッドの中では、なのはが寝息を立てていた。

……近付いて、息を呑む。

なのはの頭には、額を隠すように、包帯が巻かれていた。

「ひでと……」

フェイトが、ふらふらと秀人に寄っていく。

「ごめんなさい……ボク、なのはの『ごえい』なのに……！
なのはのそばを、はなれちゃった……」

秀人にしがみつき、しくしくと涙を流した。

「……相手は？」

それを宥めながら、恐らく一番冷静であろう恭也に聞く。

「カタギリ商会、という連中だ」

「……なに？」

啞然とする秀人に、恭也は押し殺した口調で続ける。

「治療費と、慰謝料の額だけを告げて、それっきりだ」

「……………」

そこに、白衣を着た壮年の男性がやってきた。

「あ、お父さん……」

望の父親。そして、この診療所の医師でもある、八代信義だった。

「高町さん、お待たせしました」

カルテを置き、なのはの容態について説明を始めた。

「まず、命に別状はありません。失神しているのは、極度の疲労によるものです。じきに目を覚ますでしょう」

まずは、一安心だった。

「……ふう」

ぱたん、と、フェイトが倒れ込み、秀人が支えた。

「あの、先生……怪我の方は……？」

桃子が聞く。

「幸いにも、切断面が綺麗でした。適切に処置すれば、縫う必要も無いでしょう。傷痕も残りません」

「……」

秀人は無言で、医師の話に耳を傾ける。

「……」

いや、聞いてなどいなかった。

……もう、それ以外を考える余裕が無くなったのだろう。

無言のまま、病室を後にした。

敷地から出て、すたすたと歩き続ける。

「……は、」

かたかたと、噛み合わせ歯が鳴る。

「はは……」

口角を吊り上げ、狂ったように笑い出した。

「くはははははっ……………、ああ、そうだよ」
哄笑から一変。

虚ろな無表情で、歩き出す。

「……美彦、お前は正しかったよ」
したり顔で納得していた数時間前の自分を、ぶちのめしてやりたかった。

「……………」
そう。

災害というものは、誰にでも起こりうることだ。

「関係が無いなんて、有り得ない……………」

ふらふらと、夢遊病患者のように……………しかし、方角は一直線に。
すうっ……………と、俯いていた顔を上げる。
その顔は……………

「落し前、付けてもらっぞ……………！」

恐ろしいまでに、凄惨な笑みを浮かべていた。

ドンッ……！

飛行魔法を、行使。

一直線に、敵の下へ

あるビルの、最上階。

「……………ええ、そのように計らって下さい」
仕立ての良い高級スーツに、高価な腕時計。
装飾品の一つ一つから、この男性が、所謂『成功者』であること
を物語っていた。

「そうです。積荷が落下してしまったのは、不運な事故。委託業者

の怠慢が招いたこと……」

……但し、ろくでもない類の。

こうして下請を生贄に、損失を免れる。

いつもの手口だった。

「被害者の方には、十分な保障をするように。では」

がちゃん、と電話を切る。

「ふう……まったく。たかが事故くらいで手を煩わせないで欲しい
ものですね」

テーブルでポーカーに興じていた、筋者らしき巨漢達が男に話し
掛けた。

「カタギリさん、どうかしたツスカー？」

「いえいえ、ただの現場事故ですよ」

ただの……で済ませるあたり、罪悪感など微塵も感じていないの
だろう。

「あーあ、カタギリさんが下請クンせつつくから……」

「イジメはよくないですよー？」

男……カタギリは、にこやかな笑みを貼付けたまま、それを鼻で
笑う。

「いえいえ、私は単に、ぼやいただけですよ。『資材の積み込みが、
遅いようですね』と……それを、

下請さんが耳聴く聞き付けたに過ぎません」

「ははは、違いねえや！」「そうそう、下請さんの自業自得！」「
次はどこに『依頼』しますうー？」

「ぎゃはははは！」

げらげらと、室内に下卑た笑いが満ちる。

「そうですねえ……では、本来この案件を落札したはずだった所に
でも……」

……ゲスな話に夢中なカタギリ達は、気付かない。

窓の外。

一つの影が、迫っていることに。

人通りの無い裏路地に面しているとはいえ、地上十階。
その影は、一切の減速無し……どころか、むしろ加速し……！！

ガゴシヤアアツ！！

コンクリートの壁と、強化ガラスをたやすく破壊突破し、室内に
突撃してきた。

「な……何ですか一体!？」

デスクの残骸の中から、カタギリが這い出す。

彼が、そして、室内の男達が見たものは……

「……………覚悟は、出来ているだろうなあア……………!？」

地獄の鬼をも喰らい尽くす、悪鬼羅刹の威容だった。

第六十話（後書き）

スーパーお仕置きタイム、はっじまるよー

そしてフォーゼがダサすぎて泣けた、、

第六十一話（前書き）

ツーリングに行こうと思っていたら、峠のど真ん中で立ち往生、、、
スプロケットが脱落していました。

わずか50kmで終わりを迎えた初ツーリングでした、、、

第六十一話

しいん……と、沈黙する室内。

カタギリ達は、理解を越えた状況に、ただ立ち尽くすだけだった。

「……何者だ、テメエ」

取り巻き兼ボディガードの男達が、拳銃を秀人に向ける。

「脅しじゃねえ。分かる……うごツ!？」

ゴズツ!

「……」

正に、問答無用。頭蓋骨が陥没寸前にまで衝撃を受け、意識を失う。

「……」

向けられるのは、圧倒的な……暴力的な、敵意。

「うおお!」

殺られる。

本能的に察した男達は、躊躇い無く発砲した。

パンパンパンツ!

乾いた銃声が響く。

それが、ワンサイドゲーム開始の、ゴングだった。

チュインツ!!

着弾地点に、既に秀人はいなかった。

ドボオツ!

ソバットを叩き込まれ、内臓に損傷を受け、

ガンツ!

脳天に肘打ちを喰らい昏倒する。

「うおおおっ!」

ヒュンツ!

大振りのナイフが、秀人の皮膚を僅かに削ぎ落とす。

「ははははは……最近、俺達のシマを荒らしてるヤツがいるって話ありやお前だったのか！」

「……？」

内心、首を傾げる秀人だったが……どうでもいい話だった。

「おらああああっ！」

真っ直ぐに突き出されるナイフ。

ベキンッ！！

秀人の右フックが、ナイフ諸とも、顔面にめり込んだ。

「……」

ひとまず、この部屋にいたゴロツキはいなくなったが……肝心のカタギリは、階段から一目散に逃げ去ってしまった。

この辺の危険察知能力は、さすがドブネズミといったところだろうか。

「……3階か」

が、秀人がそれを見逃す筈が無かった。

追跡魔法を辿り、現在地を割り出す。

どうやら、地下の駐車場を指しているらしい。

階段から下りる事も考えたが、そろそろと気配が増えてきた。相手にはならないだろうが、足止めをくらってしまう。

「なら……」

キュイイイ……！

拳に魔力を集中させる。秀人の十八番、インパクト。それを……

「ブチ……抜けるッ！」

床に目掛けて、振り下ろした！

ゴバァンツ!!

ビルが激震し、天井が崩落する。

「うわあああっ!?!」

「な、なんだあああ!?!」

ガラガラと降り注ぐ瓦礫が、敵を混乱に陥れ、戦意を奪つ。

一つ下のフロアに降り立つや否や、既にチャージ済みの左拳のインパクトを……再び床に、叩き付けた。

「もう一丁……うおらああああっ!!」

バゴンツ!!

二撃。

バゴンツ!!

三撃。

バゴオオオンツ!!

まさに、災厄だった。

ビルが、見る見る内に廃墟へと代わっていく。

バゴンツ!

そして、最後の床を突破した。

今まさに発車しようとしていた下品なベンツの前に、秀人が降り立つ。

ギュギギギツ!

恐慌に駆られたカタギリがアクセルをベタ踏みし、後輪をスピンさせながら急発進する。

「……………」

ひょいっ、と避け……すれ違い様に、バンパーを鷲掴みにした。持ち前の怪力でリアを持ち上げられ、後輪が空しく空回りをする。

運転席のカタギリは、数刻前の余裕などとうに無くし、血走った目で、アクセルを踏み続けていた。

「……………ふん」

ゴロンッ！ と、ベンツを上下にひっくり返す。

「ヒイ……………ヒイ……………！」

ずりずりと、高級スーツを土だらけにして、カタギリがベンツから這い出してきた。

ズシンッ！！

「ヒッ……………！」

その目の前に、秀人が立ち塞がった。

恐る恐る顔を上げ……………初めて、秀人の顔を見た。まだ、あどけなさを残すほどの、年若い少年。それを、カタギリは好機と見たのか……………

「な、なあ……………？ 条件は、何だよ？」

「懐柔に、掛かった。」

「か、金か？ 金なら、すぐに用意して……………」

「ザッ。」

「一歩、前へ。」

「何だったら、オヤジに口利きして、幹部に取り立ててやっても……………」

「……………！」

「ザッ。」

懐柔を歯牙にも掛けず、カタギリへの間合いを詰めていく。

「い、依頼主の倍……………いや、三倍の報酬も出すから！ た、頼む……………」

……！」

ザッ。

「あ、あ……」

ここに来て、カタギリはようやく悟った。

「……」

……振り上げられる、右拳。

この男の目的は、金や依頼では無く……

……拳が、空色の光を纏う。

「いや、だ……！」

何でもする！

何でもくれてやるから！た、たすけて……！」

……懇願は、かけらも聞き入れられず。

「断る」

最初から、自分の命が狙いだった。

……断頭台のような拳が、振り下ろされた。

「うわあああああああああああああああ……！」

断末魔の絶叫を上げ、カタギリは、失禁しながら意識を失った。

バゴンッ！

それは、カタギリの頭蓋が砕かれた音……ではなく。

頭の数センチ横の床に、秀人の拳がめり込んだ音だった。

「……お前の命なんて、背負う価値も無い」

そうして、踵を返した秀人の目の前に、

「……クロノ」

法衣型バリアジャケットに身を固めた、『執務官』が立っていた。が、秀人にそれ程、驚いた様子は無い。

「時空管理局囑託魔導師・吾妻秀人。民間人への、魔法を用いた暴行。建造物の破壊。守秘義務違反の現行犯で……」

ガキンツ。

無骨な手枷が、秀人に嵌められる。

「君を、逮捕する」

「……了解。クロノ執務官」

秀人は、特に抵抗せず、それを受け入れた。

「……さて、」

アースラ、艦長室。

そこに、秀人は手枷を嵌めたまま立っていた。

目の前にいるリンディとクロノは、厳しい表情だ。

「吾妻秀人。自分が行った行動について、釈明はありますか？」

「無いです」

即答だった。

「……」

言いたいことは言い終わった、と言わんばかりに、無言になる。

「……」

「……」

「……………」

「……………処罰は、追って通達します。」

それまで、営倉入りを命じます」

「はい」

呼び出された武装隊に両脇を固められ、秀人は退室していった。

「ああああ、もう……………!!」

机に突っ伏し、リンディが頭を抱える。

「……………何で、こんな時に限って……………!!」

今、管理局は闇の書事件を追っている。

その重要な手がかりに、『犯罪組織の集団失踪』

……………闇の書の主である、八神はやてによる『練習』である。

故に今回の出来事は、下手をしたら秀人の立場を危ういものにしてしまう危険があった。

ただでさえ、秀人を自身の陣営に引き込みたい輩が増えてきているのだ。

「被害者にもあまり同情は出来ないけど……………はああ……………」

被害者……………つまり、カタギリ達が、なのはに怪我を負わせた元凶だということとは調査済みだ。

「……………気持ちは、分かります」

クロノにしては、随分と物分かりのいい台詞をはく。

「でも、なのはさん達に、なんて説明すればいいのかしら」

「……………有りのまま、伝えるしか無いでしょうね」

リンディは、しばし黙考し……………

「明日は、秀人君にも同席してもらいましょう」

明日フェイトは、リンディの上司二人と、軽い面接を行う。

一人は、秀人と同じく、地球出身の、とても穏やかな紳士だが……………
もう一人は、陸士から少将にまで上り詰めた、生粋の叩き上げ。

「彼は一度、ビシツと怒られる必要があるわね」

必ずや、秀人に良い影響があるはずだと、リンディは信じた。

「少将、『あの話』にはかなり怒ってるみたいだし」

管理局において、秀人・なのは・ユーノの三人は、かなり話題になる人物である。

二十にも満たない若輩ながら、各能力（秀人の格闘・なのはの砲撃・ユーノの結界）はAAA以上と、目を見張るものがある。

初の魔法戦闘で、暴走したロストロギアを鎮圧した。

模擬戦ではあるが、執務官を撃破した。

砲撃魔法で強装結界が壊れた。

武装隊二十人掛かりで維持する強装結界を、一人で、かつ長時間維持し続けた。

次元震を押さえ込んだ。

最近、無限書庫を開拓し始めた。

……これだけなら、まあわかる。が、問題はその先だった。

独断先行は当たり前。

武装隊を舎弟にした。

執務官にタメ口を利いて許されている。

最凶のマッドサイエンティストと大魔導師に、愛機を製造させている。

施設内をバイクで爆走。 闇の書の主をタイムマンで退けた。

…… 等等。

この噂を聞いた新兵の間に、『実力さえあれば、好き勝手に許される』という風潮が生まれてしまっ

ていた。元凶と言うには、いささか理不尽だが。

「では、高町なのは含め、説明は私が」

「頼んだわ、クロノ執務官」

なのは達の元に向かうクロノ。その足取りは、当然のように重い。医院の受付へ名を告げ、病室へ向かった。

「失礼する」

病室の中には、見知った面々がいた。

「あ……クロノ」

なのはは目を覚まし、身体を起こしていた。

気まずそうに、見舞いの者達に囲まれている。

その額には、痛々しくガーゼが当てられ、包帯が巻かれていた。

「傷の具合はどうだ？」

「もう……みんなそればっか。かすり傷だつてば」

いくら林念仁のクロノとはいえ……女の顔に傷が付くということの意味が分からない程、愚かではない。

「秀人のこと、なんだが……」

そこへ追い撃ちをかけた訳では無かったが、説明を始めた。

「……………ふう」

一通りの話を聞き終えたのはが、ベッドに倒れ込んだ。

「ヤクザを襲撃って……………はぁ、もう……………」
怒る気も失せた様子だ。

「秀人がやらなかつたら、俺がやっていたがな」

恭也が、しれっと言った。

「秀人さん、どうなっちゃうの？」

「今、艦長が手を尽くしているが……………減刑するので手一杯だろうな」
「そんな……………」

辛そうな表情をするなのは。ポーカーフェイスを維持しつつも、
内心ではクロノも辛かった。

「週に……………いや、四日に一度は、必ず面会できるように取り計らう。
だから、その、なんだ……………」

もごもごと口ごもり、ようやく口にできたのは、ありきたりな一
言だった。

「元気を出せ」

「……………」

「……………」

クロノ・ハラオウンという人物を良く知るなのはとユーノは、ぼ
かん、とした様子でそれを聞いてい
た。

「……………何だ。僕が励ましの言葉を掛けるのが、そんなに意外か」
不本意そうにそう聞く。

「うん」

「すつごく、意外」

「……………まぁ、それはそれとして」
流した。

「フエイト」

「え、ボク？」

「明日の面接だが、秀人も参加することになった。そのつもりで「フェイトツ！」

がしつ、と、異様な素早さでフェイトを捕獲。

「うわ！ な、何……もがもが!？」

シートを被り、周囲をシャットダウン。

（フェイト！ 明日、秀人さんの様子をちゃんと見てきて！）

（い、いいけど……）

ずいっと目の前に迫るなのはに、フェイトは赤面する。

（それと、伝言！

『本当にかすり傷だから、心配しないで。あまり無茶ばかりすると、今度は私が怒るから覚悟しておいて』

……いい!？)

（な、ながいよ!？)

（覚えて! 今!)

（うええん!)

「……何してんのよ、二人して」

もこもこ動くシートに、望が呆れた声を出す。

そして、どたばたと足音が近付いてきて……

「なのは!」

「なのはちゃん!」

「高町!」

アリサ、さすが、健太の三人が、押しかけ……

「静かにしなさい!」

看護婦に怒られ、解散の流れとなった。

第六十一話（後書き）

さあ、部品代を数えろ、
（泣）

第六十二話（前書き）

夏季オートバイ教室へ行ってきました。

最後の一時間は、ビギナーの特権を行使し、二輪用コースを独占。思う存分、バイクを走らせて満足です。

第六十二話

翌日。

「秀人」

営倉の硬いベッドで寝ていた秀人が、目を覚ました。

「艦長がお呼びだ」

「りょーかい」

その手には、相変わらず無骨な手枷が嵌められたままだ。虜囚の身である証。

が、秀人は不自由な手で器用に顔を洗い、寝癖を整えた。

「……」

「……」

無言で廊下を歩く二人。クルー達は、何とも言えなさそうな顔で、二人を一瞥していく。

「……気にするな、とは言わないぞ。むしろ気にしろ」

「わかってるよ」

秀人は、やれやれとでも言いたげに、首を振った。

転送ポートから、地球支部へ移動する。

秀人……正確には、その腕の手枷を見て、通りすがった局員達が目を見剥く。

「まだ少し、時間があるな……」

時間に神経質なクロノが、それを余らせるようなことは有り得ない。

つまり、口実だ。

「レイジングハートの改修も、仕上げの段階に入っている。折角だし、会っていくか？」

「……」

秀人は、しばし悩む。

クロノは、当然オーケーすると思っていたが……

「……いい。やめとく」

バツが悪そうに、ぼそぼそと断った。

「？ 何故だ？」

「多分……いや、絶対に怒るし……」

……今回の大暴走。

危なっかしい秀人を気にかける余り、小言が多くなる傾向がある
レイジングハートのことだ。

烈火の如く、秀人を叱り付けるに決まっている。

しかも最近では、自立飛行まで身につけ、ダイレクトアタックま
で可能としているのだから……

「……アレ、マジで痛いんだよ」

「なるほど」

うむ、と、尤もらしく頷き……

「では、会いに行こう」

「どうしてそうなる！？ 行かないつつってんだろ！？」

逃走を図る秀人。が。

ピンッ！

「なんじゃこりゃー！？」

秀人の手枷は、クロノのS2Uから伸びたワイヤーと接続されて
いた。

「成る程、成る程…… 秀人を諫める適役は、レイジングハートだっ
たのか。」

艦長が言っても、僕が言っても、高町なのはが言っても、効果が
無いわけだ……」

ニマー……と、Sっ気たつぷりな笑みを見せるクロノ。

「さあ行くぞ。言っておくが、拒否権は無い！」

「い、嫌だ！」

メキメキメキメキ……！

「行かないからな！絶対に、行かないからな！」

壁に指をめり込ませ、必死の抵抗を見せる秀人。

……腕力の無駄遣いである。

「くっ……！ この、筋肉ゴリラめ……！」
なにげに、クロノも酷かった。

「そうか……そんなに嫌か」

一瞬だけほつとする秀人だったが……

「では……向こうから、来てもらうとしよう」

「クロノくん。連れて来たけどー……」

ひよこひよこと、エイミイがガラスのような素材で出来た容器を
抱えて、やってきた。

「てめ……ッ!?!」

ぞわあぁ……と、秀人の直感が、危機を訴える。

ばきいん!と、容器から『中身』が飛び出してきた。

『秀人才オオ！ そこに直れエエッ!』

「ぎゃああああッ!! 般若が来たああああッ!!」

足をもつれさせながら、曲がり角の向こうへ逃走する。

『逃がすかああッ!』

レイジングハートはフィンを展開し、ピンボールのようにそれを
追う。そして……

「ぎゃああああ、」

「ゴキーン！」

……何やら、質量を無視した鈍い打撃音が響いた。

「ああああ……」

フェードアウトしていく悲鳴。

そして、バタツ……と、倒れる音がした。

クロノがそちらへ向かうと、頭にでっかいタンコブを乗せた秀人が倒れていた。

しゅるしゅる、と、例の治癒により消えるタンコブ。

「さて、そろそろ時間だな」

クロノは秀人を肩に担ぎ、面会を行う部屋へ向かった。

クロノとエイミィは、フェイトを迎えに行き、今現在、この部屋にいるのは二人だけだった。

『秀人』

「……何だよ」

むすつとした表情で、頭上に視線を向ける。

会議室のソファにもたれ掛かる秀人の額に、レイジングハートが器用に鎮座していた。

『マスターの件……あなたが怒るのも、無理はありません。』

「……じゃあ、何で怒った」

『……私が言わなければ、あなたは二度も三度も無茶を繰り返します』

「……」

当たっているだけに、言い返せない。

『無茶をする前に、その筋肉で出来ているような頭で、思い出してください。』

あなたが無茶をすることで、マスターがどれだけ心細い思いをするのか……私だって、マスターの

半分くらいは、心配しているのですよ？』

そして、片翼でべしべしと頭をはたいた。

「……わかったよ」

レイジングハートを、手の平に載せる。

「……傷はもういいのか？」

見たところ、目立った亀裂や欠損は見当たらなくなっている。

『およそ八割……といった具合です。あとは、全体的な耐久力を強化するだけです』

「そっか」

素っ気なく言うてはいるが、心底から安堵していた。

『それと、マリエル技官から朗報が』

「何だ？」

『あなたの専用機が、ロールアウト間近です』

「マジか!？」

『はい。あとは、AIを組み込むだけと。』

守護騎士から得られたデータが、非常に有用だったらしいです』

「ああ、ヴィータのやつ、最近ずっと出ずっぱりだったよな……」

彼女は彼女なりに、秀人への恩を返している最中なのだろう。

レイジングハートが何故か難色を示した。

『ただ、AIが………なんといいますが、中々のお転婆娘でして』

AIの教育を任されていたレイジングハートが、珍しく弱音を吐いた。

『……育て方を、間違えたかもしれません』

育児に悩む、母親のようだった。

「………何か心配になってきた」

朗報のはずだったのだが………

『ああ、いえ………機体性能は、折り紙付きですよ？』

正直、これまで存在した全てのデバイスの常識を覆し、凌駕する

………現代のロストログアです』

「………いいのかなあ、俺がそんな良いもの貰っちゃって」

今更、そんなことを言い出す。

パシユツ

と、ドアが開く。

「あ、ひでと！」

一番乗りしたフェイトが、飛び込んできた。

いつものラフな私服ではなく、レースの付いたブラウスに、黒いスカート、

同色のベストに赤いネクタイという、パリツとした正装だ。

「おー、似合う似合う！可愛いなあ」

ひよいつと、脇に手を入れて抱き上げる。

「わーい！……って、そうだ。でんごん、でんごん」

ギリギリで忘れずにいたフェイトが、うんうんと唸りながら、なのはからの『伝言』を伝える。

「『かすり傷だから、心配しないで。無茶したら、今度は私が怒るからね』……だつてさ」

「……怒ってたか？」

「うん。もどつてきたら、『おはなし』するって」

「……はあ。そうか、ありがとうな」

お話〓お説教。

憂鬱になりながらも、覚悟を決めるのだった。

「お待たせ。準備はいいかしら？」

「ああ、はい。大丈夫です」

「おっけーだよ」

リンディ。

「その様子だと、反省したようだな」

「ふん……反省はしたけど、後悔はしてないぞ」
クロノ。

「あはは……ええと、秀人、くん……？」

「後で覚えておけ」

「ひいいい……！？わざとじゃないのに……！」

エイミィと続き、それぞれ席についた。

そして、待つこと数分。

パシュツ……

ドアを開け、二人の人物が入室してきた。

リンディの将官服と似た……恐らくは、それ以上の身分の者が着る制服を着た、総白髪の男性。

「やあ、リンディ君。しばらくぶりだね」

「グレアム総司令も、ご壮健なようで何よりですわ」

ギル・グレアム艦隊総司令。

アースラ含む、次元航行艦隊を統べる……通称『空』の、実質トップ。

リンディの資質を見抜き、育て上げた師である。

そして、もう一人はと言うと……

「ふん……手早く済ませろ。私は暇では無い」

無愛想に鼻を鳴らし、グレアムの隣にどっかりと腰を下ろした。

こちらはまだ、グレアムとは意匠が異なる将官服を着ている。

「わざわざご足労頂き、ありがとうございます。」

……レジアス少将」

レジアス・ゲイズ少将。 またの肩書を、首都防衛司令補佐。

数多の次元世界を股に架ける巨大組織・時空管理局。

そのお膝元……通称『陸』の、次期トップとの呼び声も高い武闘派である。

面識の無い秀人や、常識の無いフェイトなどは、「このオッサン、誰？」という状態なのだが……

「……………」

クロノとエイミーは、完全に凍りついていた。

仕方の無いことかもしれない。管理局の实质ツートップが、唐突に目の前に現れたのだ。

「さて、まずはこちら、フェイト・テストロッサについてです。クロノ執務官」

「え……あ、ハッ！」

気を取り直し、慌ててエイミーから資料を受け取る。

「ご報告した通り、彼女はジュエルシード事件の重要参考人です」
フェイトは、ほけー……っと、虚空を見ている。

「責任能力の有無。」

意思の所在について、共犯というよりは、むしろ被害者であることは明白であり……」

その後も続く報告に、二人は黙って耳を傾けていた。

なのはの護衛、という話になったところで、レジアスの眉が僅かにひそめられた。

だが、まだ口は出さず、最後まで報告を耳に入れた。

「………… フェイト・テストロッサについては、以上です」

「ふむ…… フェイト君、と言っのかね」

まず口を開いたねは、グレアムだった。

「うん。おじさんは？」

「おじ…………… ははは、物怖じしない子だね」

「こ、こら……！」

顔面蒼白になるクロノ。 が、グレアムは気にした様子も無く、

穏やかに笑う。

「構わないよ、クロノ執務官」

そして、フェイトと視線を合わせた。

「きみは、友達や家族は大事かい？」

「うん、宝物だよ！」

「なら、その気持ちを裏切らないように……嘘にしないようにしたまえ。それを約束してくれるなら、

私は、きみの地球での生活について、口を挟んだりはいしないよ」

上々。そう思った一同だったが……

「ふん、護衛だと？ 正規局員に任せておけばいいものを、でしゃばりおって……」

レジアスの否定的な言葉に、場が凍った。

「そもそも、九歳の子供に何ができる。」

「それは……それは……」

事実として、護衛対象であるのはが負傷してしまったことが負い目になり、黙り込んでしまった。

「まずは、クラナガンあたりの更正施設に入り、社会への復帰を目指すべきではないのか？」

「……」

正論であるがゆえに、リンディ達も口を挟めない。

「子供の遊びで務まるほど、管理局の責務は……」

「おい、オッサン」

秀人を除いて。

「今、なんだった？」

『子供の遊び』、だと？ろくにフェイトの気持ちも考えないで、決め付けるんじゃないよ」

バチツ……と、秀人とレジアスの間に、火花が散った。

「……貴様が、吾妻秀人か」

忌ま忌ましそうに、秀人を睨む。

「少しばかり腕が立つからと言って、図に乗っているようだな」

例の問題のことだろう。

「囑託魔導師とはいえ、貴様は民間人だ。

下手に関わろうとせず、自身の生活を守っていればいいものを……」

「その『自身の生活』の中に、たまたま魔法って要素が入ってるんだよ。

だいたい、あんなヘナチヨコ古本女に手を焼いているような管理局員に、身の安全を任せられるか」

「目先の対処しか頭に無いような愚か者には、大局を見ることなどできんようだな」

「目先にも対処できないノロマよかマシだ」

「貴様……!!」

「レジアス、そのくらいにしないか」

ヒートアップしかけた二人を、グラムが止めた。

……クロノなどは、顔面蒼白で意識が飛びかけていた。

冗談抜きに、十円ハゲが出来そうだった。

「まあ、よかろう。」

……フェイト・テストロッサ」

「は、はい……」

フェイトは、すっかり怯えて緊張していた。

「ひとまずは、現地での生活を許可してやろう」

「え……いいの!？」

「投げ出したくなったら、その青二才を通して連絡するがいい。すぐさまミッドチルダに引き戻してやる」

「あ、青二才……」

リンディが、少しショックを受けていた。

「……吾妻秀人」

「何だよ、レジアスのオッサン」

「たとえ力があるうとも……子供が戦場に出ることは、間違っている」

「……」

「それを、ゆめゆめ忘れるな」

「……ふん。知るか」

レジアスと秀人は、終始険悪なまま、接触を終えた。

リンディは二人の見送りに。

クロノ、エイミィは、心労からぐったりともたれ掛かっていた。

「ねーねー、ひでと」

くいくいと、フェイトが秀人の袖を引く。

「あの、ふとつちよの方のおじさんさあ」

「ああ、レジアスのオッサン？ あの人なあ……」

顔を見合わせた二人は、うん、と頷き……

「怖いけど、いい人だよな」

「口は悪いけど、間違った事は言っていないよな」

意外なことに、異口同音に、その人柄を肯定した。

「……はあ」

そこに、リンディが戻ってきた。

「秀人くうううん……！」

……怨霊と見紛うほど、恐ろしい声だった。

「今度という今度は……堪忍袋の尾が切れました！」

……ここまで怒るリンディを見たのは、初めてだった。

「囑託魔導師・吾妻秀人！」

「……はい」

「あなたへの罰則を、言い渡します……！」

ごくりと唾を飲み込む秀人。

「無人世界での、単身生存演習！ 場所は……」

……なにやら、『生存』などという生臭い言葉が出てきた。

「生存、演習……！？」

「く、クロノくん、大丈夫？真つ青だよ？」

「は、ははは……いや、いくら何でも、まさか……」

引き攣った笑いを漏らすクロノ。どうやら、トラウマがあるらしい。

「第48管理世界……！」

クロノが、白目を剥いて失神した。

第六十二話（後書き）

ここから、新展開です。

第六十三話（前書き）

さて、コミケですね。かくいう私も、三日目に一般参加してきます。

第六十三話

「……………」

秀人は、海鳴市の路上を、一人で歩いてきた。

例の訓練という名の懲罰の下準備のために、一時的に釈放されたのだ。

下準備とは、他でも無い……………」

「有給休暇……………」申請、通るかなあ……………」

社会人の憂鬱である。

「はあ……………」

足取りは重く……………」しかし、すぐに会社に到着してしまった。

(……………」どう考えたって、無理だ)

常識的な社会に属している(つもりの)ごく常識的な(つもりの)

一般人である(つもりの)秀人に

は、自分の仕事をほり出し、一月近い休暇を取るような非常識さは持ち合わせていなかった。

「よっし、バックレようつとー!!」

そうと決まれば、足取りは軽くなる。

トントントント、と階段を駆け上がり、ガチャッとドアを潜る。

「おはよーございまーす!」

元気に挨拶。今日も、気持ち良く始業できる……………」

「あら、遅かったわね秀人君」

(そう考えていた時期が、俺にもありました……)

「間違えました」

「がちゃん。」

ドアを閉め……再び開ける。

「おう、ヒデ！待ってたぞ座れ座れ！」

……そう言うカントクの目の前。

出された茶をすする、妙齡の美女。

馴染みではあるが、場違いな……リンディ・ハラオウンだった。

「……何やってるんスカアンタはあああああああああ！！
？」

……事務所に、秀人の切ない叫びがこだました。

「いつやー、まさか、ヒデの奴にこんな美人の知り合いがいたとは

……」

「あら、お上手ですこと」

つい先日、自分がふて寝していた応接間で、リンディをもてなす
カントク。

「……」

その、鼻の下を伸ばしっ放しにするカントクの隣に、ムスツとし
たしかめっ面で腰掛ける秀人。

「それでは……」

「ええ、ええ。コイツでよければ、いくらでも使ってやって下さい」
ぼん、と秀人の頭に手を置く。

それをやんわりと払いのけ、

「カントク、本気ですか？」

……俺一人で、僻地に出張なんて」

そう。リンディが取った手段とは……秀人が社会人であるということ、正攻法で最大限に利用することだった。

「あアん？　ウチが今敵しいって、話したろうが」

例の仕事が流れてしまい、財政的にはストレスなのだ。

たった一人の従業員をレンタルするだけで、流れた仕事の倍額が出るのだ。経営者としても、断る理由が無い。

「お前の知り合いなら信用できるし、特別手当も出て万々歳だろ」

「え……ええと、俺、家族が……」

「たったの二ヶ月よ」

「なのはが……」

「面会の時間は取るわ」

だからだと、暑さとは別の理由で、汗が吹き出して来る。

知らぬ間に、退路が一つ一つ潰されている。

（管理局は万年人材不足だけどね……？）

にやあ……と、浮かべるは女狐の笑み。

（予算だけは、潤沢にあるのよ……？）

（き……汚ったねえええ〜！！）

そして秀人は、第48管理世界へ放り込まれることが確定してしまった。

「……」

締め、無言で荷物を纏める秀人。

「……………」
不自然なまでに秀人に背を向け、荷造りを手伝うのは。

「秀人さん」

「お……………おう、どうした？」

「下着と、雑貨はリュックに入れておくから」

「……………頼む」

ちくちくと、突き刺さるようなプレッシャーが、なのはから発せられていた。

「秀人さん」

リュックサックに、下着とTシャツを入れる。

「おう」

タオルを綺麗に折りたたみ、リュックに入れる。

「二ヶ月、かかるんだよね」

「……………おう」

歯ブラシとコップを、入れる。

「夏休み、終わっちゃうね」

「……………」

髭剃りと櫛を、入れる。

「夏休み、終わっちゃうね」

「……………すみません」

「ううん、気にしてないから」

「……………」

かちゃん……………と、リュックの金具を閉じる音が、いやに大きく聞こえた。

「気にしてないから」

「……………」

……………秀人の胃が、ピンチだった。

「……なあ、フェイト」

「……なに、ヴィータ」

部屋の片隅に、被害が及ばないように待避していた二人が、こしよこしよと小声で話していた。

ユーノとアルフは、無限書庫の探索に……と、既にいなくなってしまった。

「アイツ、なにやったんだ？」

「あー……ええと……わるものをやっつけた、らしいんだけど」

「……それが、何で辺境世界に放逐されることになったんだよ」

「知らないよ……ボクにきかないで」

「つかえねー奴……」

「なんだと!？」

がたつと立ち上がる。

「フェイト、ヴィータ」

それを、恐ろしく平坦な声が瞬間冷却した。

ぱたん……

箆笥の戸が、閉じる。

「悪いんだけど、少し静かにしてくれるかな？」

「「はい」」

再び、置物に戻る二人。

「えっと……それじゃあ……」

荷物を抱え、玄関に。

靴を履き替え……

どすん。

「おわっ」

バランスを崩しかけた。

後ろを見てみると、なのはが、秀人の背負うリュックサックを掴んでいた。

「どうした……?」

「……ちややだ」

「え……?」

ばっ、と顔を上げる。

「行っちゃ嫌だ!」

ぶるぶると、目いっぱい涙を溜め……縋るように、秀人を見上げていた。

「えと……何日かに一度は、面会オーケーらしいから、それで……」

「毎日がいい」

「な、」

「毎日会えなきゃ嫌!」

……まるで、というか、まるつきり、駄々っ子だった。

「……ごめんな」

申し訳なさそうに、玄関の扉に手をかける秀人。

ギュリリリリッ!

その手に、桜色のチェーン……バンドが絡み付いた。

「なのは……」

「うっう~~~~!」

両手で、チェーンをしっかりと握りしめる。

とつとつ、ぼろぼろと涙が零れてしまった。

「なのは」

それを見たフェイトが、なのはに近付く。

「だめだよ、それ以上は。ひでと、こまってるよ」

「困ればいいんだ……………秀人さんなんて、困っちゃえばいいんだ
！」
「なのは！」

バキンッ！

フェイトが、バインドを砕いた。
「うきゃっ……………」

反動で尻餅をつくなのは。

ずいつ、と顔を近づけ、フェイトが凄む。

「これ以上わがまま言ったら、おこるからね」

「……………だって、」

「なのは！」

「うう~~~~!!」

「二人とも、少し落ち着けよ……………」

秀人が仲裁する。

「はあい……………」

フェイトは渋々頷くが……………」

「……………」

なのはは、何も言わなかった。

「……………じゃ、行ってくる」

なのはの頭を撫でる。

それを跳ね退けるような真似はしなかったが……………」

「……………」

むすー……………っと、膨れっ面のままだった。

秀人は、そのまま地球支部へと向かった。
「時間ギリギリだな」

「わりい」

クロノが先導し、転送ポートへ。

「では、もう一度確認するぞ」

基本は自給自足。現地の動植物を狩猟する。

定期的に執務官が査察に入るが、期間中は基本ノータッチ。

主に、この二つ。

……正直、罰ゲーム以外の何物でも無い。

かく言うクロノも、同様の訓練で死にかけて以来、トラウマになつていた。

「植物を採る時は、よく吟味することだ。

一見無害そうに見えて、とんでもない毒性を持っていたりする」

「……具体的には？」

「周囲の色彩が反転して、ありもしない花畑が見えた」

「……」

食料の安全性すら保証されないらしい。

「動物を狩猟する際、それがどのような生態の生物なのか、よく観察しておく。

一頭を仕留めたら、数十頭の群れに追われるということもありえる。

他にも、翼竜に啄まれたり、角獣に刺されたり……」

「あーもう！ 不安になるからやめろっつーのー！！」

すたすたと、覚悟を決めて転送ポートに入る。

「んじゃ、行ってくる」

「死ぬなよ」

そして、転送ポートが輝き……

バシユツ！

「秀人が、その中に消えた。」

「一方その頃。」

「……、」
「なのはは、膝を抱えて、壁とにらめっこをしていた。」

「秀人が出て行った、その翌日。」

「なのはー」

「……なに」

「おなかすいた」

「時計を見れば、そろそろ正午だった。」

「……ちよつと待ってて」

「不機嫌でも、家事を怠る気はないらしい。」

「冷蔵庫から三人分、肉や野菜を取り出した。」

「もぐもぐと、いつもの半分の面子で昼食を食べる。」

「ふと、フェイトが思い出したかのように言った。」

「「そついえば、きょうやとみゆきに呼ばれてなかったっけ？」」

「あ……」

「なのはにしては珍しい、うっかりだった。」

「幸いにも、約束の時間は夕方だ。」

「「そうだった……」」

「「ボクとヴィータも行っていいよね？」」

「「んー……」」

「かちかち、とメールを打ち、確認。」

「「うん、来ていいって」」

「「いや、アタシは……」」

「「渋るヴィータ。」」

なにげに、彼女も人見知りの気があった。

「駄目。」

「一応、保護観察の身なんだから」

「……わかった」

そして、夕方。

バスを乗り継ぎ、高町家にやってきた。

「ああ、来たのか」

出迎えたのは、恭也だった。

「早速で悪いが、なのは、道場へ来てくれ」

「……？うん、わかった」

「ボクはー？」

「母さんが、家の方でケーキを用意して待ってるぞ。」

ええと……ヴィータだったか。君も、家の中で待っていてくれ」

「ももこのケーキ！」

「……ほら、いくよヴィータ！」

「わかったから、引っ張るんじゃないよ……」

道場に入る。

静謐な空気に、無意識のうちに身が引き締まる。

恭也が座った対面に、綺麗に正座する。

「なのは。この前……友達を助けた時、どんな状態だった？」

「どんな、って……」

その時の体験を、思い出す。

「時間が止まって、自分だけが、その中を動ける……みたいな」

「それは、あの時が初めてか？」

「ううん。フェイトとの戦闘でも、たまに……」

「……」

「そういえば……あの時、兄さんも動いてたよね？」

恭也は、考え込んでしまった。言つべきか、言わざるべきか。

御神流。

「もしかして、兄さんは自由に『あの状態』になれるの？」

「……ああ」

恭也は、話すことにした。

既に、少なからず命のやり取りをする世界に足を踏み入れているなら……むしろ、教えておいた方が助けになる。

「……本来なら、基礎の技から習得していった、その先にある奥義なんだが」

「兄さんが使う、剣術のこと？」

「ああ。感覚を掴んでいるのなら、あとは、基礎を積むだけでコントロールできるようになる……かもしれない」

基礎を積む。

つまりは、剣術を学ぶ、ということ。

「私が、剣術を……」

「なのは次第だ。」

修業の間、俺は、なのはを肉親とは思わない。

……それでも、やるか？」

どこかで、聞いたような話だ。

『強くなりたい』という意志に対して、友人が聞いたこと。

あの時の答を……もう一度。

「やる」

確かに、告げる。

「……わかった」

恭也は立ち上がり、神棚に手を入れた。

かたん……と、板が外れ、奥に空間が現れる。

そしてそこから、全長80センチ程の、古びた木箱を取り出し、戻ってくる。

それを、なのはの目の前に置いた。

「……………」

なのはは、吸い寄せられるように木箱に見入る。

和紙の札で封印されたその箱からは……………得体の知れない、呪力のようなものが漂っていた。

「……………この封印は、父さんも、俺も、解くことができなかった」

ぐっ、と恭也が力を込めても、開く気配は無かった。

箱を封印する札。あまりにも達筆……………日本語なのか、それどころか、言語なのかすら怪しい一文が、添えられていた。だが……………

(……………読める?)

何故か、そこに書かれている意味が、読み方が、直接頭に伝わってきた。

「これを開けることが出来たなら……………御神流の全てを、お前に伝える」

要は、入門試験だ。

「……………」
『我、ここに……………其の名を似って、汝を封印す』

「……………」

あっさりと読んでみせたなのはに、驚くことも無く見守る恭也。

「『其は、海にして空。其は、対にして一』」

書かれた文字が、桜色に発光している。

恐らくは、この箱の中身……………その所有者の魔導師が施した、封印なのだろう。

全体的に、魔力を持たない人間が大多数を占める地球において、これほど有効な封印は無い。

「『汝が名は……』」

そして……その名を、告げる。

「『二刀一対

回天・桜花

』」

バチッ……！

と、札が焼失した。

「……」
箱を開けると、そこには……

「……刀」

長さにして、約60センチほどの小太刀が二振り、納められていた。

「その箱は、父さんが生家から持ち出した物で……御神流の創始者の刀らしい」

目で促され、持ち上げてみる。

「……」
鍛造された鋼の、ずっしりした重み。

「それが、『人を斬る』ということの重さだ」
「……」

鞘から抜く。

長い間封印されていたというのに、刃は曇り一つ無く、鏡のよう

だ。

「明日から、稽古をつけてやる」

「……よろしく、お願いします」

鞘に納め、道場を後にした。

「……秀人さん」

今頃別の場所にいるであろう秀人に向けて、口にする。
もう、不貞腐れているのは終わりだ。

「私、頑張るから」

かしゃんと、二刀の鞘が、それを激励するように鳴った。

第六十三話（後書き）

、いや、、、なのはがチャンバラやったら、面白いんじゃないかと、

第六十四話（前書き）

職場にGが出た。職場ごと焼き払いたい。

第六十四話

秀人が異世界に放り出されて、数秒後。

「うおおおお！？」

秀人は、落下していた。

着地点は、遙か下方。

雲が掴める程の高空に、投げ出されてしまったらしい。

「秀人か？」

と、あわてふためく秀人とは対照的に、マリーはいつもの調子だ。

「マリーか！」

おい、どーなってんだコレ！？ 座標指定やったのはドコのどいつだ！？」

矢継ぎ早に質問する秀人。

「……今、こっちでも大騒ぎだ。お前の反応が、ロストしている」

「……………」

その一言で、沈黙する。

「……………これも、訓練のうちか？」

「いや……………直前に、ハッキングを受けている形跡がある。これに乗じて……………な……………た……………」

この通信すら、ジャミングされているらしい。

「おい！？」

「……………」

ぶつんと、とうとう完全に通信は途切れた。

……………なんとも、不吉である。

「どこのどいつだ畜生！……………、って、やべえ！……………」

気付けば、大地が近付いてきていた。

「くそっ……このッ！どーなってやがる！」

……どういうわけか、この世界では魔力が練りにくい。
飛行魔法は、どう考えても間に合わない！

「こっとなつたら……！」

魔力を魔法陣ではなく……直接、体内を循環させる。

地面まで、あと50メートル、40メートル、30、20……！

「うおりゃああああああああああああ！！！」

炸裂効果だけを強化した、ブレイズキャノンを発射。
それは、威力が減衰する前に、地面にぶつかり……

ゴバアアアツツ……、！！

爆風を、撒き散らした。

「ぐえフツ……！！」

急降下から、突然真下から爆風に跳ね上げられ、そのGに呻く。
だが、おかげで何とか、地面に激突することだけは避けられた。
残り10メートルは、自由落下で降り立った。

ドシャツ！！

「くろう……！いつてえええ……！！」

足の痺れが治まり、周囲を見渡す。

「……マジで異世界だな」

空には、月のような衛星が二つ、並んでいた。

「どーすんだ、俺……」

想定されていた世界では無い以上、発見されるまで、どれだけか
かるやらわからない。

その間に、闇の書の主が活動を再開すれば……
「……はあ。考えててもしゃーないか」
秀人は、とりあえず歩き回ってみることにした。

気温は20度前後で、湿度もそれほど高くない。
針葉樹の森林と、乾いた地面。

先も感じた通り、魔力が結合しにくい点を除けば、快適な気候だ。

「……………」
がさり……と、森林の葉が、不自然に揺れた。
足を止める。

ザザザザザツ………!

「……いきなりか」

そして……

『ホキヤアアアアア!』

猿のような、体長2メートル程の獣が、飛び出てきた!

「ツしゃあ!!」

ドボオツ!

狙い定めたような中段蹴りが、猿の鳩尾に減り込んだ。

『ゲツ……………!』

白目を剥いて昏倒する猿。

だが、秀人は退却を始めていた。

『キヤアアアアアアアアアアアアアアア!』

『……………』

「うおおお!冗談じゃねええええ!!」

猿は、集団で迫り来るのだから!

走り、跳び……小規模にインパクトを発動し、追い付く個体には
拳をくれてやり、
ひたすら走りつづける。

そして……

「つて、崖!?」
道が、途切れた。

『フシユルルル……!!』
血気盛った猿達は、円陣を組んで秀人の退路を絶つ。
「面倒だけど」

一体ずつ、無力化していくか……と、思ったその時。
ダッ!

猿達が、いきなり森に走り込んで行った。

「……!!」
そして、上空から近付いて来る、段違いの殺意!

『ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!!!!』

全長50メートルを優に越える、有翼の爬虫類……ドラゴンが、
迫ってきていた。

「いきなり突飛すぎんだろおお!!!!!!」

『ゴハアアアアアアアアアアアアアアアアッ……!!!!』
ゴオオオオッ!

吐き出される、火炎のプレス。

「あつちいいいい!!!!!!……つて、うわあああ……!!?」
それに煽られ……秀人は、崖から足を踏み外した。

ドボオオオン!!!

「……ぶああっ!!」
崖下の川の中から、秀人が顔を出す。

「あー、川で助かった……」

『キシヤアアアアアアッ!!!!!!』

「助かってねえええ!!?」

ドゴオン!!!

水面から襲い掛かってきた、魚とも蛇とも判別し難い生物に、バ

レットをぶつけ……

『ブオオオオ！』

「そりゃあああー！！」

陸に上がった所を待ち構えていた猪を、川に蹴り落とし……

『ギキヤアアアアー！！』

「また出たああああー！！」

ドラゴンの火炎から身をかわし……

「はひー……」

ほうほうの体で、巨木の根本に開いた穴に身を隠す。

「ぜー……ぜー……！！ ったく、グルメ界かここは！

暴走体並みの獣が、ゴロゴロしてやがる……！！」

「……ん？」

と、奇妙……というか、場違いな物を見つけた。

草の繊維を寄り合わせた紐に、竹のような板が、いくつも繋がれている。

明らかに、人工物だ。

しかも、そんなに古くないどころか、まだ繊維が緑がっている。

「俺の他に、誰がいるのか……？」

秀人は、何の気無しに、それに手を触れ……

「ゆ……行方不明！？」

「ぶフォッー！！」

「ぎゃーー！！」

……上から、なのは、フェイト、ヴィータである。

なのはがクロノと通信中にいきなり立ち上がり、肘がフェイトの湯呑みを力チ上げ、
気管に麦茶をダイレクトでぶち込み、噎せた拍子に吹き出された麦茶がヴィータの顔を直撃した。

「テメエ喧嘩売ってんのか！」

「げふつげふつ……し、仕方ないだろー!?」

「クロノ！説明……いや、今すぐウチに来て説明しなさい！」

「だいたいお前は、考え無しに行動し過ぎなんだよ！動く前に周囲を確認しろ！」

「ヴィータの動きがトロいんだよ、この鈍重騎士！」

「ど、どん……!? ……よーし、ちよつと表出るコラ。」

速さだけが取り柄の羽虫に、思い知らせてやらあ！」

「羽虫だとう!?」

「ああ、もう……!」

じゃきつ……と、なのはの手が、腰に穿かれた回天・桜花に伸びる。

そして……

「二人とも、うるさいっ！」

ゴ、ゴンッ！

「ぎゃあッ!」

「ぎゃふッ!」

二人の脳天目掛け、鞘打ちの二連撃が決まった。

「大事な話してるんだから、喧嘩はあとにしなさい！」

「はい……」

最近……あの二刀を手にして以来、折檻がますます過激になって

きた。

何と言つか……

「ええと……オニに、」

フェイトは、クロノから（嫌々）教わった、地球の諺を思い出す。

「……かなぶん？」

惜しい。

「金棒だろ」

「そう、それ！」

あっはっは……と笑う二人の背後に、まさしく鬼の気配。

「だれが……鬼だって？」

「あ、あははは……？」

愛想笑いでごまかす。

「グイータ、外でくんれんしよーぜ！」

「お……おっ。行くか！」

ざざざざっ！と、左右になのはを攪乱し……

「行ってきまーす！」

玄関から、走り出して行った。

「もう……夕ごはんまでには帰るんだよー！」

少しは、落ち着いたらしい。

「で……どうということ？」

「……ああ、今説明する」

返事は、玄関の向こうからだった。

ちゃぶ台を挟んで、クロノと対話する。

「じゃあ、丸つきり想定外の場所に、飛ばされちゃったってこと？」
「……ああ。だが、直前まで、マリーと通信が通じていた。
少なくとも、人間が生存できる環境では、あるみたいだ」

「……」

「本当に、済まない……」

「ちやぶ台に額を擦りつけるほど、頭を下げる。」

「いいよ、許す」

「が、なのははあっさりした様子だ。」

「別に、クロノの責任ってわけじゃないし。それに、ね……」

「コンコン、と、二刀の鞘をノックする。」

「……ちょっと、やらなくちゃいけないことも、あるし」

訓練の際、秀人は必ず寸止めにして、怪我が無いように心掛けていた。

だが今回は、今までと違い、身体を鍛える訓練。しかも、指導するのは恭也。

当然、怪我也するだろう。

「今なら、あんまり心配かけないで済むから」

「そうか……と呟く。」

「既に、搜索隊を出している。見つかり次第、こっちに送り返すから……」

「うん、よろしく」

「そして、席を立つクロノだったが……」

「あ、そうだ。夕飯、食べていきなよ」

「なのはに、そう呼び止められた。」

「……なに？」

「秀人さん、いきなり行っちゃったでしょ？」

「だから、材料が余って困ってるんだ」

「賞味期限が、と、やたら所帯じみた事を言われ……」

「分かった。相伴に預かろう」

『あー……ユーノくん、アルフ？』

早速、念話を繋ぐ。

数秒後……

『……なのは、かい？』

一気に五十も老けたような声が、帰ってきた。

『……だいじょぶ？なんか、死にそうだよ』

『無限書庫って……数秒毎にデータベースが更新されるから、マジ無限……闇の書関連の資料、集める

だけで、二日過ぎちゃったよ……ははは』

ちゃんとした検索システム構築しなきゃ……と言う。

『そんなに根詰めても、効率上がらないよ？一旦、アルフ連れて帰ってきなよ』

ところで、アルフの反応が全く無いのだが……

『アルフなら、さつき』落ちた』。しばらく起きないかも……あ……また、更新された……探さなきゃ、捜さなきゃ……』

亡霊のように繰り返すユーノに、なのはが焦る。

『帰ってきなさい！今すぐ！』

かくして……秀人の代わりにクロノが入るといふ、いつもと違う変則メンバーでの夕食となった。

カランカランカラン！！

「うおっ！？」

秀人が触れた途端、絵馬モドキがけたたましい音を鳴らした。

そして……明らかに秀人を標的にしているであろう殺意の塊が、

減速することなく迫ってきている。

「……上等！」

流石に、腹も据わった。

拳を撃ち合わせ、ファイティングポーズを取る。

そして……

「ヒッハー！夕食ゲットオ、お、おぉ……？」

「うおりゃああ……あ、？あ……？」

ぱちくりと目を見開く二人。

襲撃者は見るからに幼い少女である。

セミロング……というか、切らなかつたから伸びた、という風情の不精な髪型。

整ってはいるものの、全体に纏う退廃的な空気が、全てを台なしにしている。

何より、手にした片刃の剣。

ぼたぼたと、真新しい血を滴らせ……

(……うわぁ)

ドン引きだった。

何故、こんな場所に子供が……と訝しむ秀人。

それと同じく、襲撃者……

八神はやてもまた、戸惑っていた。

何故？

(どうしてここに、こいつがいる……！？)

「なあ、君……」

口を開く秀人。

はやては、剣を握る手に力を込め……

ズズウン……！！

巨木が、めきめきと倒れた。

「くそつ、見つかったか！」

はやてが、この世界での最終標的に設定している、大火竜。

そいつが、はやての根城であるこの場所を、秀人を足跡に突き止めてしまったらしい。

「くそつたれが！」

秀人を放置し、一目散に逃げ去っていく。

とりあえず、あの大火竜の狙いは秀人だ。

余裕で逃げられる。そのはずだったが……

「おい、ちょっと待て！聞きたいことがいくつもある！」

驚くほどの健脚で、はやてに追いついてきた。

「おいコラ……！」

『グルルルル……！』

果たして、危惧の通り。

大火竜は、はやてもついでに捕捉した。

「なについてきてンだよテムエ！ 竜の歯クソにでもなってる！」

「無茶言つな！あんなモン、こんな環境で相手にできるか！」

「じゃあ何で着いてきたんだよ！バラけりゃ、どっちかは逃げられたのに！」

「それは！……あれ、何でだろう？……何となく？」

首を傾げる秀人。

「、」
ぷつん、と、はやての我慢の限界を突破した。

「ざっけんなテメエエエ！」

「悪かったああああ！」

『グルアアアアアアアアアア！』

「ぎゃああああああああ！」

ドツゴオオオオン！

二人仲良く、巨大な火炎弾に吹き飛ばされた。

……波瀾万丈な、サバイバル生活が幕を開けた。

第六十四話（後書き）

さあ、リアルモンハン生活の始まりだ。

ゝゝゝ、浮気じゃないよ？

第六十五話（前書き）

ハルハル所有のZX9R、ずっとE型だと思ってパーツ集めて、いざノーマルに戻そうと思ったら、、、C型でパーツが全て無駄に、、、ORZってレベルじゃねーぞ、、、

第六十五話

『グルルルル……!』

大火竜は、秀人たちを吹き飛ばしたはいいもの、見失ってしまったらしい。

荒野の上空をぐるぐると旋回し、ふいっと去って行った。

ゴソッ……

と、地面が隆起し……

「……行ったか？」

「……さあね」

頭から土だらけになった二人が、這い出してきた。

「……」

とにかく、抜き足差し足忍び足。

魔力もゼロにし、竜の巨体が入り込めないような、峡谷に退避した。

「まだついて来る気かよ」

「つれないこと言うなって」

「チッ……」

はやても、さすがに二度も大火竜をおびき寄せせる愚行は犯さない。

『ギユアア!』

途中、岩場から飛び出して来る亀のような猛獣は……

「……うぜえ死ね」

『ガ、ガガガ……!』

魔剣を脳天に突き刺し、絶命する。

「おい……!」

反射的に、殺生を咎める秀人。

「が、はやては淡々とした表情と口調で、言った。」

「馬鹿かお前は。ここは日本じゃ無いんだ。スーパー行けば食べ物が買えるわけでも、

蛇口捻りや飲料水が出てくるわけでも無い」

「あ………そういや、そうだった。すまん」

突飛な事態に忘れかけていたが………これは、サバイバルだった。

「………食べるの、それ？」

「骨と甲羅以外は。結構イケるよ………よいしょっと」

ずるずると、最小限の身体強化魔法のみを使い、獲物を引きずっていく。

「………」

何となく着いて行った先は、またしても、同様の絵馬モドキが仕掛けられた洞窟だった。

「………」

おもむろに魔剣を取り出し、巨大亀の甲羅の継ぎ目に擦込み………

「よっ………と！」

バカンツ！

甲羅の一角を、テコの原理で割り開く。

「えらく硬い剣だな………」

呆れながら、そう呟く。

「おい、お前」

「あ、ああ………何だ？」

「手伝え。捌いてる間に腐っちまう」

「………」

一瞬、躊躇する秀人だったが、腐らせるくらいなら、食べてやっただろうが供養になる………と、手伝いはじめた。

ベリベリと甲羅を剥ぎ取り、内臓と肉とを分ける。

そして、運び込める大きさになった食料を、洞窟に運び込んだ。

中は、思いの外涼しい……というか、寒いくらいだった。

肉を、岩塩を砕いた塩の山に放り込む。

「肉は保存が利くから後回しで」

てきぱきと指示を出すはやて。

く……

その腹が、可愛らしく鳴った。

「……飯にするか」

「……うん」

はやては、僅かに赤面し、頷いた。

がつがつと、割と品の無い食べ方で、煮込んだモツにかぶりつく。

「んじゃあ、お前……はやても、この世界に飛ばされてきたのか」

「まーね……じゅるるっ」

零れそうになった肉汁を、これまた下品に音を立てて啜る。

「……」

焦りも極限になれば、一回転して平静になるらしい。

はやては堂々と、素顔と本名を晒し、事情を説明した。

『不慮の事態で、魔法の訓練中、この世界に飛ばされた』

と。

ある意味、嘘は言っていない。

「今日で丁度、二週間くらいかなあ……？」

「二週間……」

初日にして、逃げ回ることしかできなかった秀人には、信じ難い事実だった。

「意外と何とかなる物だよ……ペッ」

……べちゃっ、と、足元に苦みがあったらしき一部を吐き捨てる。

「……………」
ぴくぴくと、何かを言いたそうに秀人のこめかみがヒクつくのに、
は yet は気付かなかった。

「ってなわけで、どーせ長居するなら、目標でも作るうか……………って
ことで、あの大火竜

を狙ってるんだよ。…………げっぷ。もう食べられないや」

そして、食べ残したモツの残りを、無造作に鍋の中に投げ込み…………

「…………っだあああああああ！ もう我慢できん！」

秀人の我慢が、限界を迎えた。

「な…………何？」

「何だ、お前のその行儀の悪さは!？」

「…………はい？」

「食べ物に対する敬意は無いのか!？」

「きよとん…………としていたはやてだったが、次第に苛立ちが出始め
た。」

「私が獲物をどう扱おうが、あんたには関係無いじゃん！」

「お前、言ったよな? 『食べるために狩った』……………って。」

「狩ったなら、全部食べえ!それが、狩られた命に対する礼儀だ!」

「う、ぐぐぐ……………」

「……………ここで『はい、そうですか』と言える程の素直さがあるのな
ら、」

闇の書の主などやってはいないわけで。

「うるっせえええええ!!」

結局、ブチ切れて飛び掛かって行った。

「ごろこれごろ…………と床を転がり、取っ組み合いに発展した。」

「むぎゃー!!」

噛み付き、引っ掻き…………

「いてててて!! やめんか!」

バチーン！という快音響かせ、はやての尻を叩く。

「みぎやああああ！！」

やめるこのロリペド野郎おおー！」

ぶうん、と振り上げた足が、秀人の顎を正確に蹴り抜いた。

「げくつ……！おらああああつ……！！」

ばちーン！

「ひぎやあああああ！

尻はやめろつつつてんだろおおー！！」

……魔剣を使わないだけ、まだマシかもしれない。

「ぜー、ぜー……！！」

「はあ、はあ……！！」

二人は消耗し尽くし、地面に転がっていた。

なんと無意味な闘争だろうか。

「食い物、粗末に、すんな……！！」

尚も言う秀人に、はやては……

「……あーもう！わかったわよ！食べばいいんでしょ！食べば！」

鍋に残ったモツ煮込みを、ヤケクソのように掻き込んだ。

「げつぶ……ど、どうだ……」

青ざめた顔で、勝ち誇った顔を見せる。

「いや……うん、ええと……一人で全部食べ、って言いたかったわ

けじゃ、無いんだけど……

「……は？」

「粗末にしなければ、残りは俺が食ったんだけど……」

「……」

ばちーン……と、全ての力を使い果たし、はやては倒れた。

(やっぱり私、こいつ嫌い……)

「っだああああ！」

ガシィッ!

なのはが振り下ろした木刀は、恭也の竹刀に受け止められた。

「こ、の……！」

「腕力に頼り切りになるな！」

対して、恭也の竹刀はぴくりともしない。

カァンッ!

「あっ!?!」

竹刀が回転、木刀が巻き取られ、跳ね上げられてしまう。

反射的に、木刀を目で追うのは。

バシンッ!

その額に、竹刀がヒットした。

「あっ……！」

「何のための二本の得物だ。手から離れた時点で、捨てたものだと
思え」

「はい……」

ひりひりする額をさすり、聴き入るなのは。

「もう一本！」

「はいっ！」

木刀を拾い、再び恭也へ挑みかかった。

「今日はここまで」

「……ありがとう、ごさい、ました……」

へろへろになりながらも、しっかりと礼をする。

「うづう……オデコが痛い……」

「よしよし、よく頑張ったぞ」

練習後、美由紀がなのはを膝枕し、額に氷枕を乗せた。

「でもさー、いいの？ユーノに頼めば、パパツと魔法で……」

「それは駄目」

「え……」

「怪我がすぐ治るなんて気持ちで修業してたら、絶対に強くなれない」

「……」

「だから、駄目」

「……そっか」

特に何も言わず、なのはの髪を撫でる。

「全く、こんな可愛い我が妹に……恭ちゃん！」

「……修業に怪我はつきものだ」

恭也は、バツが悪そうな顔で、反対側に座っていた。

「そりゃ、足りじいたりはするだろうけどさ！」

アレなら寸止めできたでしょ、恭ちゃんなら！」

「姉さん、いいから……」

「……痛むか？」

今更のように、なのはを心配する。

「超痛い。秀人さんに言いつけてやる」

「やめてくれ……」

ゲンナリする恭也。

「だめ。絶対言ってる……」

くすくす、と、楽しげに笑う。

思えば、三兄妹だけで過ごすなど、いつ以来だろうか。さらさらと、夏の夜の生暖かい風が、草を鳴らす。

「な〜んか、いいねえ。こついうの」

仲良し三兄妹みたいでさ……と、少し茶化して言う美由紀。
恭也となのはは、顔を見合わせて笑い……

「おい！ももこがスイカきるってさー！」

フェイトの元気いっぱいな声が、その時間を終わらせた。

「……ところで、スイカってなにー！？　ボク、たべたことなーい
！」

歩いてくればいいものを、縁側から大声を張り上げる。

大声を出すことが、楽しいらしい。

「流石に、近所迷惑だな」

「そうだね、いこつか」

「ひゃっほー！スイカだー！」

美由紀が、目を輝かせて飛んで行った。

「……姉さん」

「フェイトと仲が良いわけだ」

二人も苦笑しつつ、ヴィータや桃子が待つリビングへ歩いて行っ
た。

第六十五話（後書き）

あれ、、、あんま話進んでない、、、（汗）

第六十六話（前書き）

ああ、、、今日でオーズが終わってしまふ。
フォーゼはダサすぎて、最低視聴率を記録しそうな悪寒が、、、

第六十六話

秀人がサバイバルを始めて、一週間が過ぎた。

『グガアアアアア！』

はやての手助けもあったおかげか、一番の心配事だった、飲料水や寝床の問題はクリアした。

『ギャギャギャ！キキー！』

最初はあたふた、はやての後を着いていくのも手一杯だった秀人だが、今では、すっかり……

『ギユイイイイ！』

『ギャアアアア！』

『キキイイイイ！』

『グガアアアア！』

「うおおお！！ヤバいやばい流石に死ぬコレは死ぬううう！」

すっかり、獲物として野獣たちに匂いを覚えられていた。

ダダダダツ！と荒野を疾走し、数えるのも馬鹿らしくなるくらい大量の野獣たちを引き連れる。

と、すこし前方に、薄い煙が立ち上る。

念話が使えない世界での、アナログ極まりない合図手段……狼煙だ。

「あそこかつ！」

そこを目指して、一気にスパートを掛ける。
そこは、対岸が低いため、地平線からは分かりづらい谷だった。
後方に引き連れた獣たちは、頭に血が上って、そもそも気付いていないが。

「はやてええええつ!!」

大声で合図し、急旋回。

昂ぶる獣たちの股の間をスライディングでくぐり抜けた。

最前列にいた獣は、唐突に目標を見失い、多々良を踏む。

『ギユエフツ……!!』

その背に、後続の獣達が、勢いのままに玉突き事故を起こした。

ボゴオツ!!

と、崖の手前の大地が、不自然に隆起する。

結果それが、姿勢を崩したところにトドメとなり……

『『『『『ギヤアアアアアアア!!』』』』』

野獣の群れは、谷底へ転落していった。

「ぜえ、ぜえ……」

片や、魔力結合を阻害される環境で、体力魔力を絞り尽くした秀人。

「やあやあ、ご苦労さん」

片や、十分な時間を確保し、簡単な物質操作の魔法を一回使ったのみのはやて。

……『保存食大量ゲット』という結果を得るために支払った労力が、違いすぎである。

「おら、いつまでも寝てんな。さっさとずらからないと、また竜が来るぞ」

「少しは、休ませろ……！」

ゼーは一言いながら、谷底まで歩いて下る。

谷底で獣を解体し、隠れ家の洞窟へ運び込んだ。

野菜の採れないこの世界では、ビタミンが不足しがちだ。

だから、とれたてで、鮮度が落ちないうちに、生で食べておくのが習慣になっていた。

ただ、ビタミン豊富とはいっても……

「不味ッ……!!」

ロクに火を通していないおかげで、味は散々だ。

「つか、寄生虫とか大丈夫なのかコレ……あぐっ」

「言わないでよ。食べられなくなっちゃう……はぐっ」
固い繊維を無理矢理噛み千切り、腹に詰め込む。

この数週間、口にするのは肉ばかり。

焼肉、塩漬肉、干し肉、燻製肉、生食……

「あーあ、（なのはノリーゼ）の料理が食べたい」

二人して、そんな気持ちを抱いていた。

「げぶっ……」

5キロも食べないで、二人は満腹になった。

「んじゃ、残りは……」

「いつもと同じ、塩漬と燻製」

「あいよー」

肉や内臓を加工すれば、後は自由時間（？）だ。

…… 娯楽も何も無い、非常にストイックな環境で、やることなんて限られている。

まずは、寝る。

そして……

「…… 1 1 2、1 1 3、1 1 4、1 1 5」

筋トレである。

薄暗い洞窟の中で、黙々と腹筋を鍛える秀人。

その横では……

「ぐ、ぐじゅう、ろく……ぐじゅう、なな……」

はやてが、ひーひー言いながら腕立て伏せをしていた。

リーゼとの修業とも違う、地道な運動にはまだ不慣れのようだった。

「1 2 0、1 2 1、1 2 2、1 2 3……はやて、無理するなよ。

子供のうちから筋肉付けすぎると、身長伸びなくなるぞ…… 1 2 4、

1 2 5、1 2 6……」

「ろく、じゅう……！はあ、はあ……うっさい……集中できないでしょ……！」

「ああ、悪い。…… 1 4 0、1 4 1、1 4 2、1 4 3、1 4 4、1

4 5、1 4 6、1 4 7、1 4 8……あー、駄目だ。

ちっとも鍛えた気にならん」

もともと、桁外れな筋力を誇る秀人だ。

通常のトレーニングなど、今更、食後の運動程度にしか意味が無い。

「やっぱり、身体よりこつちかな」

見様見真似の座禅を組み、意識を精神の内部に向ける。

「すうー……はあー……」

リンカーコア、起動。

薄らと、秀人の身体に、空色の魔力光が膜のように纏わり付く。

やはり、平常に比べると、その輝きは曖昧で、弱い。

「……」

すぐにギアを繋ぐのではなく……アイドリング状態のまま、体内に留める。

このまま外部へ出力しても、すぐに散ってしまう。

体内を循環させ、純度と密度を上げていく。

意識するのは、あるキーワード。

(俺の、魔力資質……『結合』)

この世界は、常時AMFが展開しているような環境だ。

だが本来なら、秀人の魔力資質の前には、意味を成さない筈。

いつかの日、AMF環境下で、300万という桁外れの数値を記録した時のように。

今、秀人は満足に魔法が使えていない。

それはつまり、魔力資質を引き出せていないということだ。

あの力を完全に引き出すことができれば、飛躍的な戦力向上ができる。

「……………」

手を突き出し、魔法を行使する。

近接攻撃魔法・ブレイド。

普段なら、特に意識せずとも発動できる、ごく初歩の魔法。

「うくつ……………」

それが、まともに行使できない。

魔力刃の基となる魔力のフレームが、構築できない。

いつも、どれだけ杜撰に魔法を行使していたのかを痛感する。

……………秀人、なのは。

二人に共通するのは、高い魔力、優れた才能……………そして、それに見合わぬ魔導師歴の浅さだ。

なにせ、初めてリンカーコアを起動させたのが、命懸けの実戦。

その後も、訓練より実戦の中で才能を開花させるような、言ってしまうえば異常な環境が続いた。

直感で、手探りで、魔法の腕を磨いてきた。

そして支払われたツケが……………レイジングハートの大破。

……………それを、繰り返さないためにも。

「ぐぐ……………」

徹底的に、鍛え上げる。

「……………はアツ！」

そして、気が遠くなるほど……………実際には、もっと短いだろうが…

…とにかく、なんとかフレームの構築には成功した。
あとは、それをとにかく維持するのだが……

「うあ!?!」

パキイン……!

フレームは、呆気なく碎け散った。

「くそっ……」

悔しげに舌打ちする。

だが、すぐに……

「……もう一回!?!」

また、一から始めた。

「……」

それを、無言で眺めるはやて。

(……なんでこいつ、こんなに頑張ってるの?)

あんなやり方、効率が悪い。

疲労と、成果の釣り合いが取れていない。

なのに、それを止めることなく愚直に、反復している。

それを維持できる……いや、こんな世界に飛ばされて、自分を鍛えようなどと思える意思是、いったいどこから生じているのだろうか。

(私は、こいつらを殺して、『鉄槌』の敵を取って……)
はやてを支えているのは、負のモチベーション。

復讐という、わかりやすいものだ。

最初、秀人もまた、自分への復讐のために鍛えているのかと思っ
た。

だが、秀人の態度からは、それが感じられない。

ならば、何故……？

「……………」
考えて、考えて……気付けば、秀人はぐったりと気絶し、無防備
に寝転がっていた。

「……チャンスか、これ？」
疲労困憊。

しかも、全く警戒していない。
またと無いチャンス。

シュツ……
鞘から、魔剣を引き抜く。

カキン……
秘蔵のカートリッジを、装填。
まだ、秀人には明かしていない。

今なら、殺せる。

もともと、秀人と一週間暮らしていたのは、成り行きと、気まぐ
れだ。

そして今、チャンスがやってきたことで、気まぐれは終わった。

「……………」
魔剣を、振り上げ……

振り……下ろさない。

「……………」

すたん、と腰を下ろし、秀人の顔を覗き込む。

「お前は、どうして……………」

『鉄槌』の視界を、通じて見た光景。

ボロボロになって、それなのに…………もう一人いた、白い衣服の少女を、身体を盾に守っていた。

「…………守るための、力？」

一応の解答に、たどり着いた。

そして、そのあまりの価値観の違いに愕然とした。

「ば…………馬鹿じゃないの？ 力は、敵を排除するための……………」

だが事実、秀人は『そう』してきた。

その力は、その怒りは…………誰かのために。

「…………自分より大切なものなんて、あるわけ無い！」

苛立ちの末に激昂し、魔剣を秀人の頭、数センチのところ突き立てる。

「他人のための力なんて、まやかしだ！」

認めるわけには、いかなかった。

「どっちが、真に強くなるのか……………！」

誰かのために強くなる秀人。

自分のために強くなるはやて。

どちらが、より強いのか。

「見極めてやる！」

……不意打ちではなく、真っ正面からの打倒を、誓った。

第六十六話（後書き）

最近、この小説の行方が分からなくなってきました。

S t S 編のエンディングは、既に文章に起こしてありますが、、
途中経過が、、

第六十七話（前書き）

あああああ！ オーズが終わってしまったあああああ！！
良い最終回だったよおおお！！

でも震災で1話減ったのと、1000回記念で2話を使い潰した影
響で伏線回収しきれてねええええ！！

フォーゼに期待！

もういいからネタライダー街道を突き進んでくれ！

第六十七話

いつもの高台に、訓練用の結界が展開していた。術者はアルフ。久々に、ユーノの手伝いに時間を貰い、フェイトに付き合っていた。

中では、バリアジャケットに身を包んだフェイトと、短パンにジャケットを合わせたような戦闘服のヴィータが、激しく打ち合っていた。

「そりゃー！」

「うおらあぁっ！」

バギインツ……！

「ふにゆううう………！」

「ぐううう………！」

鏝ぜり合いの体勢から、互いに牽制の魔法を放つ。

ドガガガガガッ！

射撃魔法がぶつかり合い、また間合いが開く。

「ハーケン………セイバー！！！」

ギュルギュルと回転しながら追尾する、ハーケンセイバー。

「………はッ！」

ヴィータは、気合い一発。

パキイン！

グラーフアイゼンの一撃で、ハーケンを破壊してしまった。

『Photom Lancer』

「ファイア！」

間合いを詰めさせまいと、射撃魔法を放つ。

ガギギギギッ……！！

シールドで弾くが、それだけ距離を離される。

「くらえっ！」

『impact!』

秀人を真似るように、衝撃波を放つ準備をするフェイト。

「……」

対してヴィータは、野球ボール大の鉄球を二つ、出現させる。

「あはッ……！こんな距離で、ボクの魔法を破れるもんか！ はア

ッ！」

ゴパン！！

発射される衝撃波。

回避か、迎撃か。だがヴィータが取った選択肢は、ありえない三

つ目……正面突破だった。

「ハッ！！！」

ガギインッ！

グラーファイゼンに打ち出された一発目の鉄球は、フェイトの衝撃波とぶつかり……掻き消されたり

はしないものの、減退を余儀無くされる。

後は衝撃波との波状攻撃で、ヴィータをノックアウトするだけ……
…そう考えていたフェイトの思惑は

、呆気なく砕かれる。

「らあぁっ!!」

ガツキイイイン!!

ヴィータは、二発目の鉄球を……一発目の鉄球目掛け、打ち出した。

ガチインツ!!

寸分変わらず、一発目の鉄球に衝突。

ビリヤードのように、推進力を中継し、一発目が勢いを取り戻す。
結果……

バキンツ!

鉄球は、フェイトの衝撃波を突破した。

「えっ!?!うわわわわっ……!?!」

まさか、こんな手で突破されるとは思っていなかったのだろう。
姿勢を崩し、決定的な隙を晒してしまう。

「どりゃあぁっ!!」

「ぎゃあぁぁっ!!」

そして、勝敗は決した。

「うっうっ……ちくしょー!!」

「ああ、動かないでよフェイト。バンソーコーが貼れない」
「負けたぁ……」

うー……と、不満そうにむくれる。

「自信あつたのに……」

そんなフェイトに、ヴィータがアドバイスをする。

「アタシらの技術は、防御の上からブチ抜くことに長けてるからな。ああいうシチュエーションは、恰好の獲物だ」

ヴィータの戦法は、古代ベルカの騎士の、引いては、守護騎士の戦い方だ。

「防御したから安心……ってわけじゃないんだよ。

防御したなら、それが破られた時、どうやって立て直すか。

そこまで考えないと、戦場では生き残れない」

「……むらさきのやつ、そんなたかかいしなかったぞ」

「そりゃ、意思を剥奪された操り人形じゃ、技術なんて活かしようが無いだろ」

その言葉に、フェイトがさー……つと青ざめる。

「あ、あいつ……あれがほんきじゃなかったの？」

アルフと二人掛かりで、相当に苦戦したのだ。

しかも、結局勝負は……闇の書の一時封印による消滅という預かり試合というオチ。

ヴィータは、人差し指をフェイトに突き付け、言い放った。

「ベルカの騎士、ナメんなよ」

「ぐぬぬ……きょうは、ちょうしがわるかったただけだもん……ね、バルディッシュ……？」

と、相棒に目を向けたフェイト。次の瞬間……

「あーーーーー！？」

素っ頓狂な悲鳴を上げた。

何故なら。バルディッシュの、黒いボディ。

それを真つ二つに縦断するように、大きな亀裂が入っていたのだ。

「ば、バルディッシュユー!?」

『修復できます。問題ありません』

「そういうもんだいじゃないー!」

あたふたと魔力を注ぎ、応急処置をする。

「なんで、こんないきなり……!」

「あー……おめえ、気付いてなかったのか?」

慌てふためくフェイトに、ヴィータが、頬をぼりぼりと掻きながら、衝撃的なことを言った。

「アタシのグラーファイゼンとそいつじゃあ、そもそも強度が違いすぎたんだ。

打ち合う度に、ちよくちよく割れてたぞ」

「んなつ……!ほんと、バルディッシュユー!?」

『……Yes, sir』

「なんで、もつとはやくいわないんだよ!もおおお!」

『修復すれば済みます。ご心配には及びません』

相変わらずクールに返す相棒に、フェイトが怒った。

「ばか!」

いまはなんとかなっても、いつか……なおせないくらいにブツ壊れちゃうだろ!」

クロノに緊急コールを躊躇い無くかける。

『クロノだ。どうしたフェイト、珍しいな』

「実は……」

そして、事情を説明した。

「……ってわけなんだ。なんとかかしてよ」

『……まあ、そういうことなら、』

「うんうん!」

『マリーに頼むか』

「ばいばい」

ぶちっ、と通信をちょん切る。

すぐさまクロノからのコールが掛かり、嫌々渋々、それを受ける。

『あのなあ!』

「やだ。あいつきらい!」

……相当に、怖かったらしい。

「あいつだけはやだ!」

フェイトの相棒、バルディッシュは、育ての親であるリニスの特製だ。

複雑な変型機能、高度な演算能力、人格AI……と、採算を度外視した高性能機。

だが、だからこそ、メンテナンスも複雑かつ面倒極まりなく……

『設計図が紛失したワンオフ品を弄れる技術者なんて、僕はマリーくらいしか知らん』

マリーは変態だが、腕は確かだ。

「うづう……」

だが、背に腹は代えられない。

相棒の傷を癒すことが第一だ。

「フェイト、あたしも着いていくから……」

アルフが宥めて……

「……うん」

フェイトは、小さく頷いた。

『それと、ヴィータ。君には、マリーから直々に召集がきている』

「……」

フェイトを下した、ベルカの騎士が脂汗をかいていた。

「あー、その……なんだ。アタシはちょっと腹痛があるから、今

回は……」

どこで覚えてきたのか、仮病まで使ってバツクレを決め込もうと

している。

「うわぁ……」「見苦しい……」

主従コンビも、ジト目にならざるを得ない。

「うっせー！」

アタシにだって、苦手なモンくらいあるんだー！」

キレて叫ぶヴィータ。

「……」「……」

……なぜか、フェイトがアルフの背に隠れる。

アルフも、何か緊張した面持ちで、ヴィータを……いや、その背後を見ている。

「あん？……なんだおめーら。変な顔して……」

「……腹痛とは、興味深い」

「はヒイツ……！？」

金縛りにあったかのように、瞬時に凍りつく。

どこまでも沈んでいくかのような、ダウンーボイス。

「……プログラムなのに、腹痛。生理現象。……興味深い」

幽鬼の如き、ほの暗く、しかし確かな存在感。

「あ、あ、あ……！」

ぎち、ぎち、ぎち……と、硬直した身体を後ろに向けようとす
るヴィータ。

「……迎えに来たよ」

白衣の悪魔が、そこにいた。

「うぎゃああああああああああつ！」
……ヴィータは、情けない悲鳴を上げ、魔法まで使って逃亡を図る。

「あ……」
ぼつりと寂しげに、声とも吐息ともつかないものを呟く。
「逃げちゃった……」

『おいマリー……！』
通信の向こうで、クロノが頭を抱える。
『何で、そこにいるっ！？』
「モルモ……じゃなくて、ヴィータが呼んだのに、来ないから……」
（今、すぐく自然にモルモットって言いかけたなこいつ……）
（やっぱこわいよコイツ……）

『許可は取ったのか！？』
許可、とは、転送ポートの使用許可のことだろう。
が……

「……取ってない」
『……』
クロノは、完全にフリーズした。
「でも、だいじょぶ……もーまんたい……」
『んなわけあるかアツ……！』
……壊れた。

「いや、ホント……ワタシ、地球在住だし……」
マリーは現在、地球支部に駐留している。
確かに、異世界を跨ぐわけでは無いのだが。
『地球支部から海鳴市まで、何十キロあると思ってる……？』

電車、バス……果てはタクシーにも乗れない社会不適合者が、どうやって!?!」

「ん……」

すっ……と、後ろ手に持っていたソレを、胸の辺りに持ってくる。

「あ、それ……!」

それは、黒地にオレンジのフレアパターンが栄える、やや派手な

……

「ひでとのめつとじゃん!」

オートバイ用の、ヘルメットだった。

「あの馬鹿、ワタシのラボに預けっぱなしでいなくなったから、邪魔で邪魔で……」

だから、返すついでに乗ってきた」

「……乗ったのか、アレに」

「うん」

身長が150ちょっとしか無く、筋力も絶望的なマリイが。

「……楽しかった」

意外と、多芸なのかもしれない。

いや、それより……

「よく、つかまらなかつたね……」

妙に感心したフェイト。

「捕まる……誰に?」

ワタシ、信号はちゃんと守ったよ?」

「……」

いちいち突っ込んでいては、頭の血管が持たない。クロノは、傍聴に徹した。

「青は、『進め』」

正解。

「黄は、『急いで進め』」

……………可能であれば停止、が正しい。

「赤は、『注意して進め』」

……………アウトー！

「ほんとに、ほんとーに、つかまらなかった？」

むしろ心配そうに聞くフェイトに、マリーは、かくつと首を傾げ

……………

「捕まらなかったけど……………変な奴らに、なんか追い回されたような気がする……………」

白くて黒い、四輪と二輪……………」

パトカーと白バイである。

ナンバーは、修理の際に取り外し、そのまま付け忘れてしまったらしい。

不幸中の幸だ。

ぱたっ……………

と、通信口から、枯れ枝が落ちるような、はかない音が響いた。

『きゃー！クロノクーン！？』

そばに控えていたエイミィの叫びもセットで。

「それで」

「ぴいっ！？」

ぐわっ……………と、いきなり超至近距離に顔を寄せられ、飛びすさる。アルフにも、反応できなかつた。

「ワタシに、なにか用……？」

「え、えと……」

すっ、とバルディッシュを見せる。

「ヒビが、たくさんはいつて……だから、なおしてほしいな、っ
て」

「む……」

ぴく、とマリーの頬が反応する。

「これ……バルディッシュ？」

知っているかのような、そんな口ぶりだった。

「こわれたらいやだから……」

「いいよ」

「え？」

見れば、マリーの顔からは、ダウンナーな雰囲気は消え去っていた。

「一日だけ頂戴」

バルディッシュをつかみ取り、手元にコンソールを出す。

「エイミィ、支部までの転送許可を。すぐに取り掛かる」

『ああ、うん……』

「では、また」

パシュツ……！！

……いかなり現れて、突風のように去って行った。

「……なんか、ちがうひとみたい」

ヴィータの身柄を確保しに、アパートに突撃してきた時とは、別人のようだった。

その疑問に答えたのは、向こうのエイミィだった。

『マリーは、人格にすごいムラがあって……気分の静動の切替が
激しいの』

「……ふーん」

あまり分かっていなさそうだった。

「……バルディッシュ、無事に帰って来られるかなあ……？」

「……魔改造されてなきやいいけど」

……不安が尽きない二人だった。

さて、すっかり忘れ去られたヴィータはと言つと……

「うわああああん……！」

自分の影に怯えるように、まだ逃げていた。

……ヴィータ、哀れ。

第六十七話（後書き）

いやあ、、、ハルハルが書くと、ありとあらゆるキャラが崩壊しますね。

ごめんなさい。

第六十八話（前書き）

フォーゼ、ダサ格好良いじゃないですか!!
ヒロイン可愛いし、意外と化けるかもしれません。

そしてゴージャスは神回でしたね！

第六十八話

ラボに戻ったマリエルは早速、監獄のプレシアと通信を繋いだ。

『あら、何かしら……って、それは』

すぐに、マリエルが手にするバルディッシュに気付いた。

『バルディッシュ……？』

『お久しぶりです』

数ヶ月ぶりの再会だった。

「……………」

無言でスキャナーに設置し、内部の詳細な情報を表示させる。

すると、出るわ出るわ……エラーメッセージの嵐。

「……………これはひどい」

『本当……管理局の技術部は、ボンクラの集まりなのかしら』

かつての使い魔の作。

それが、ここまで粗末な扱いを受けていることに、怒りすら覚える。

それは、マリエルも同様らしく……

「直すよ」

『了解だわ』

がちやがちやと、資材の山を掻き分け始めた。

『……ねえ、マリエル』

がちやがちや、がさごそ。

「……………なに？」

『こんなこと言うのも変かもしれないけど……少しは整頓なさい』

「一見、乱雑な部屋。」

それでいて……実は、きわめて機能的な配置」

『……………』

片付けられない人間の、常套句だった。

『なら、この前の中間報告……試作型カートリッジユニットはどこ？』

「……この山の、一番下」

指差したのは……分解された、もしくは組み立て途中のまま放置されたパーツ……要は、ゴミの山だった。

『……片付けなさい』

びくびくと、こめかみを引き攣らせながら言う。

「……や。面倒臭い」

ぶいっ、とモニターから顔を逸らす。

ブチッ……

とうとう、プレシアがキレた。

『片付けなさいッ！』

平然とした様子のマリエルだったが、怒鳴られるのは嫌だったのか……

「なんだよもー……」

ぶちぶち言いながらも、ジャンクパーツを仕分け始めた。

『ふう……』

だらしない友人と付き合うのも、苦勞するものだ。

ジャンクパーツの山と格闘する小柄な身体を眺めつつ、ぼーっとする。

『プレシア・テストロッサ』

と、珍しいことに、バルディッシュの方から話し掛けた。

『あら、何……？』

向こうで準備を進めるプレシアも、少し面食らったようだ。

『我が主は、常にあなたのことを案じていました』

『……そう』

罪を清算し終えるまで、母親面はしない。

そう決めているからなのか、表立ったりアクションは見せない。

『……そちらの調子は、どう？』

『毎日を、友人と楽しく過ごしています。最近では、料理にも挑戦されて……』

『まあ……でも、怪我が……』

『それも含めて、教わっています。初めて触れる事柄に、よく取り組んでいますよ』

『保護観察で、不自由な思いはしていない？』

『ハラオウン執務官の尽力で、その点は問題ありません』
とはいっても、やはり気になって仕方が無いのだろう。

矢継ぎ早に、質問を繰り返していた。

プレシア・テストロツサ。

その本性は生粋の、『親バカ』なのであった。

「……修理」

ぼそつ、とした声に中断されるまで。

「……始める」

流石に、始めれば早い。ジャンクパーツの山は、綺麗に整頓されていた。

『そ、そうね……』

恥じ入るように、表情を取り繕う。

『それに合わせ、いくつか要望があります』

「……言ってみ？」

『構成素材を、より強度の高いものに交換・補強を』

「……………そのつもり」

『当然ね』

構成素材は、秀人の機体にも採用した新型の魔導合金に変更する予定だ。

ヴィータのグラーフアイゼンから得られた技術を基にした素材で、強度はもちろん、

軽量かつ、粘りのある素材となった。強化には、うってつけだろう。

『それから、もう一つ』

……………むしろ、こちらが本題だ。

『私に、カートリッジシステムを搭載して頂きたい』

今日もまた瞑想し、魔法構築の基礎を反復していた。

さて、俺達が先日、多くの獲物を仕留めたのはなにも、無目的な乱獲がしたかったわけじゃない。

「……………」

こうして、時間の全てを、魔法の基礎練習にあてるためだ。

「……………ハッ！」

ビシュンッ！！

手に、魔力刃を発動。

そして、分解されそうになるソレを、とにかく維持できるようコントロール。

「……………」

5分が経過した。

初めのうち、一分も持たなかった惨状に比べたら、小さいながらも大きな一歩……

「ていやー」

パライイン！

「俺の一步がああああああああ！！？」

上手くいったのに！

「はやてええええ！」

「ひゃーっはっはっは！」

愛剣を片手に腹を抱えてバカ笑いをするはやて。

「邪魔すんなつつつたる！！」

「ひやはははは！ちよつと叩いた位で割れる脆い魔力刃なのがいけないんじゃない！」

「ぐっ……！！」

確かに、そうだけど！

「ほれほれ、二刀流〜」

剣を鞘に収めて、見せびらかすように、左右の手にそれぞれ魔力刃を完璧に構成して見せる。

「ぐぐぐ……！！」

畜生……才能の壁が憎い！

「……最初に使った魔力『だけ』で構成するんじゃないなくて、分解さ

れた箇所新しく魔力を注いで維持してみな」

……アドバイスは、してくれるんだな。

「……」

確かに、これはこれで維持がしやすい。

もう一度、集中して……

「こちよこちよこちよ」

「ぶほあっ!!」

パキーン!

集中を断ち切られ、またしても砕け散った。

「つたく、お前は……!!」

アドバイスしたと思ったら邪魔しやがって……

「ほらほら、集中集中」

はぁ……

思わず、ため息が出てしまう。

「なのはなら、こんな真似はしないのに……」

まして、練習の邪魔をするなんて有り得ない。

「……おい」

「……おい」

バカ笑いから一転して……不快そうに、眉間に皺を寄せて、俺を睨んでいる。

……何だ?

何か、こいつの地雷でも踏んだか?

「私に、誰かを投影してんじゃねえよ」

「……すまん」

よく分からないけど……

「マジむかつく……死ねッ!!」

ビュンッ!!

「うわっ!?!」

あつぶね……

「……決めた。殺そう」

剣を握る手に、ぎちぎちと力が籠っている。

やべ……マジでキレてる!

「ま……待て。落ち着け。話し合おう!」

「問答無用だアッ!」

振り下ろされる先は……躊躇い無く、俺の額!

ガシンッ!

魔力で補強した掌で、なんとかギリギリ受け止める。

「はア……!!」

その頬は、酔ったように紅潮して……とても、言葉で正気には戻せそうにない。

「ええい、許せ!

俺は今のところ死ぬわけにはいかん!」

ガスッ!

両手が塞がった状態から、中段蹴りではやてを蹴り飛ばす。

……もちろん、女の子を足蹴にするのに抵抗はあるけど、命が懸かっているなら話は別だ。

ザンッ……!

はやては自分から後ろに跳び、蹴りの威力を軽減した。

……中途半端な射撃は、隙を作るだけ。

となると、残るのは接近戦だが、ほぼ無手の状態じゃ不利だ。

魔力刃は……駄目だ。まだ、実戦には耐えられない。

「……………！」
腕に魔力を集中。
とりあえずは、これで！

ガシユツ……………！

「い……………ってエー！」
おいおい……………強化魔法を突き抜けたぞ！？
力尽くじゃ、こっちはいけない。
やっぱり、剣のセンスが半端無いなコイツ……………！

……………っていうか、なんでいきなりガチバトルになってんだ！？

ガギギンツ！！

「何が、そんなに気に食わなかったんだよ！？」
「知るか！ とにかく、ムカついたからブツ殺す！」
め……………目茶苦茶だ、こいつの思考回路！

「ミドリムシの方がまだ思慮深いわ！この単細胞！」

「い……………言ったなああああ！？」

……………実は気にしてたのか？

「言ったから何だバーカバーカ！」
半ばヤケになって、幼稚な罵声を浴びせる。

「生皮剥いでやるこの脳筋！」
「やってみるバーカ！ ……ごめん嘘ですやっぱりやめてえええええ

！」

くそ……せめて、インパクトが使えるれば……！

使えないことも無いだろうが、対人制圧用の威力調節版は、まだこの環境下では使いこなせない。

大威力では、はやてに重傷を負わせかねないし……

(そうだ！)

確か、恭也の奴が前に……！

「……！」

思い出せ……あの時の、恭也の動きを！

「らあああつ！」

「フンッ！」

「ごりっ……！」

肉をえぐる、不快な感触と痛み。

「……」

「つかまえ……たっ！」

「！？」

密着している今なら……使えるはずだ。

足腰で地面を捉え……捻りを加えて……接触面に、伝達！

零距离で……！

「破アツ！」

「パンツ……！」

「ぐっ……！？」

この技の利点は……一切の魔力を必要としないこと。

つまり、初見の魔法戦では必ず決まる。

たしか、『徹』……とかいう技だ。

「！」

剣を握る手から、僅かに力が抜けた。

「おおっ！」

腕に食い込んだままの剣を、掠め取る！

「あっ……！？」

意識が逸れたところで……

「寝てる！」

首筋に、『徹』を叩き込む！

「かはっ……！」

どろっ……と気絶し、倒れ込むはやて。

「……あぶねー奴」

付き合い始めて一週間。そろそろ、地が見えてきたってことか。

「……はあ」

うまくやっていけるかどうか、激しく不安だ。

第六十八話（後書き）

夏も終わりですねぇ、、、

第六十九話（前書き）

年上の従兄弟が結婚しました。

リア充爆発しろ。

第六十九話

……夢を見ている。

起きた時には忘れているかもしれないけど、今、『これは夢だ』と自覚できる、いわゆる明晰夢。

見下ろしているのは、閑静……というか、民家や施設が少ない、寒々しい路地だった。

舗装もおざなりなその路地を、二人の人間が歩いていた。

『……』

一人は、重い疲労に表情を塗り潰された女性。

まだ30代にも見えるが、白髪が多く、肌には張りが無い。

『……』

もう一人は、その女性に手を引かれる、小学校低学年くらいの男の子だった。

……あ！

思い出した！

この子、前にも夢で見た、あの子だ！

確か、前は病院のベッドで呻いていたはず。

今、こうして歩いているということは、無事に退院したんだろうか。

けど、妙に重苦しい空気を纏っている。

母親の方は、息子と手を繋ぐ……というより、重い荷物を牽引しているような、

義務感だけのよう感じた。

……まあ、前の『夢』でも、かなりヒステリックな感じだったし、もしかしたら、もともと大して子供に愛情を持っていないのかも。

先に沈黙を破ったのは、男の子だった。

『……お母さん、どこに行くの？』

不安と共に、母親に聞く。

『……あなたが知る必要は無いわ』

投げやりで、ぶつきらぼうで……面倒臭そうな声。

とても、母親が息子に使う声じゃない。

『う、うん……ごめんなさい、お母さん』

可哀相に、しよげてしまった。

……子供を何だと思ってやがるこのババア。

夢じゃなかったらブツ殺してるぞ。

……でも、夢だから手出しはできない。

こうして、親子を見続けるしかできない。

くそ……歯痒いな。

そして、妙に高く、不自然に隙間が無い、灰色の扉が現れた。

……そして、無言で扉の横を歩くこと何分か。親子は、大きな鉄

扉の前で、足を止めた。

……ただの鉄扉。錆びているわけでも、まがまがしく尖っている

わけでもない。

なのに、何でだろう。

その鉄扉が、魔窟への門に感じられるのは。

母親は躊躇せず、扉の横のインターホン

『……x xです』

……？

不自然なノイズが走って、名前の箇所だけが聞き取れなかった。

カシャカシャカシャ……

鉄扉は、電動式のスライドドアだった。

その向こうから、仕立ての良いスーツを着た壮年の男性が歩いてきて、親子を出迎えた。

『やあ、これはこれは……お待ちしておりました』

にこやかな笑顔だけど……これは、欲を覆う仮面だ。

パパの財産を狙ってきた、自称『親戚』のクズどもと同じ、醜い顔。

『……』

何かに怯え、母親の袖を引く男の子。

だけど母親は、顔をしかめて、その手を振り払い……告げた。

『あなたは、今日からここで暮らすの』

『……！？』

男の子が、驚愕に目を見開いた。

『だから、ここでお別れよ』

『や、やだよ……！なんで……！』

『……もう、疲れたのよ』

対して母親は、何の感慨も抱いた様子も無く、踵を返した。

『お、お母さ……！？』

ぐいつ……と、男の子の腕を、胡散臭い男が掴んだ。

『やあ、初めまして。わたしは、ここの園長だ。これからは、ここを自分の家と思ってくれ』

言葉こそ柔らかいが、とても子供の手を引く力加減じゃない。

何より、さっきのやり取りを見ながら、笑顔がピクリともしていない。

ずりずりと、門に引きずられていく。

『お母さん……』

呟く一言。

助けを求めるように、手を伸ばし……

「……っ」

……なぜかその手を握り締め、下ろしてしまった。

「さあ、行こうか！」

園長を名乗る男に手を引かれ……母親は、一度も振り返らず、去って行った。

「……」

全てを……自分が、母親に捨てられたことを悟ったのだろう。子供っぽかった顔から、一切の表情が欠落した。

……

そこで、いきなり場面が変わった。

身体感覚が無いことだけは、変わらないけど……

場所は、窓が少ない白い大部屋だった。

「……ふん」

園長は、先ほどまでの笑顔はどこへやら。

本性が浮き出たような歪んだ表情で、男の子を突き飛ばした。

「……」

男の子は、されるがまま。

人形のように床に転がり……思い出したかのように、のろのろと起き上がった。

「鈍臭えなあ。……おい、てめえらの新しいオトモダチだ。

仲良くしてやれ……しっかりと、な」

そして、園長が出て行くや否や……

「へへへへ……」

この中では、一番体格の良い、年長のガキがのしのしと寄ってきた。

多分、腕力に物を言わせ、他の子の食事を横取りしているんだろ

う。

こいつだけが、繕った跡が無い綺麗な服を着ているのも、多分……

『おい新入り。持つてるモンよこせ』

この服も、奪い取ったのだろう。

『……無いよ』

少年には、手荷物など何も無かった。

『あ？使えねーな、このチビ！』

どんっ、と乱暴に胸を押され、べしゃっと尻餅をつく。

くすくす……

昏く、陰鬱な笑いが耳朵を打つ。

……こんな環境にいれば、性根が腐っても仕方ないか。

『ああ、そっか』

白々しく、嫌味つたらしく、事実を突き付ける。

『お前も、親に見捨てられたんだっけな！』

クソみたいな、ゴミ親にさあ！』

取り巻きが、室内の傍観者が、げらげらと笑った。

こうして、新入りを徹底的にいびり倒し服従させるのが常套手段。

この子も、たやすく屈する……答だった。

『……違っ』

じょう……と、虚無だった男の子の瞳に、活力が漲った。

『あ？』

予想と違う反応に、ガキ共がぼかんとする。

『お父さんと、お母さんは……ゴミなんかじゃない！』

思わぬ反抗に、顔がヤカンのように真っ赤になっていく。

『て……めえ！』

『……一！』

男の子に、デブを筆頭にガキ連中が群がっていく。
リンチされてしまっただろう。
せめて、一発はくれてやれ……と、祈った矢先だった。

ゴギヤツ……！

……と、鈍い音が鳴った。

ビタンツ！

『おゲツ……！』

デブの巨体が、轢き殺されたカエルのように、壁にへばり付いた。
ずるう……つと、血の帯を引いて崩れ落ちるデブ。

『ひゅー……』

その顔は白目を剥き……顎が、グロく割れていた。

……ど、どんな腕力よ？

『……お母さんは、悪くない……！』

ぎろっ……と、凄まじい眼光を放つ。

彼は、臆病な羊などでは無かった。

それを見誤ったガキ共に、退路は無い。

『ひっ……！』

リーダーを失った取り巻き達が、たじろぐ。

『ぼくが、悪いんだ。ぼくが、ぼくが……！』

ギチギチギチ……！

ゴム紐を幾重にも結束させるような音が、固められた拳から聞こえる。

『……ぼくがあああああああ……！』

感情を爆発させ、獣のように叫んで……！

グシャツ……！！

クソガキの顔面が弾けた……のではなく、その横、数センチ。コンクリだか何だか知らないけど、壁。その壁に、腕が突き刺さる音だった。

……何となく、察しがついた。

『こんな力、いらぬ』という、この前の言葉。この子が捨てられたのって、多分……

『うがぁアアアアアッ！』

思考を遮る咆哮。

ゴズン、ゴズン……！

がむしゃらに、力任せに拳を振り下ろす。

壁を、近くにあったテーブルを、本棚を……目につく物を、片っ端から打ち砕き、引き裂き……

破壊していく。

その度に、ガキ共の顔面が恐怖で引き攣っていくのは、どこか痛快だった。

『はアー……！はアー……！』

ひとしきり部屋を破壊し続け……ぎろっ、と部屋を睨み回す。

『また、お父さんと、お母さんを悪く言ってみろ……！』

彼を突き刺すのは、歓待でも、拒絶でもない。

……怪物を見るかのような、恐怖の視線だった。

『……今度は本気で、お前たちをぶん殴ってやる!』

……そうだ、それでいい。

思うようにならないのなら……その『力』を、思う存分、振るってしまえばいい。

そうすれば、居心地の良い居場所を、自分で作ることができる。

私からすれば、そうするのが当たり前。

なのに、何で……？

『……………』

何で、そんなに泣き出しそうな顔をしているの……？

……………そこで、私の意識は浮上した。

目を覚まして、まず目に飛び込んできたのは、

「あーもう、勘弁しろよお前……いきなりキレイやがって……」

心配そうに覗き込む、吾妻秀人の顔だった。

「うっさい……………いたた、このロリペド野郎、思いっきりやりやがって」

「なんかすげえ不名誉なレッテル貼られた!」

「後でペナルティだからね」

「理不尽だ……………」

今気付いたけど、延髄のところに、濡れタオルが置かれていた。

「……………あんた、強いね」

剣を持っていた私を、まさか素手でノックアウトするなんて。

「それしか取り柄が無いし」

……確かに。

「あんだ、インファイトしかできないもんね……」
射撃・砲撃魔法が役に立たないこの世界では、それが更に顕著になっただけだ。

「まあ……けど、それに関しては、負ける気はしないかな。誰が相手でも」

事実、『鉄槌』とも、カートリッジが無ければ殆ど互角だった。

技術は荒いけど……天性の才能ってやつに違いない。

格闘……というよりは、殆ど喧嘩だけだ。

「決めた。お前へのペナルティ」

「な、何だ……？」

及び腰になる秀人に、王の判決を言い渡す。

「私に、喧嘩のやり方、教えてよ」

……その才能、そっくりそのまま、奪ってやる。

秀人は、拍子抜けしたように笑みを浮かべた。

「ああ、いいぜ。俺でよければ、いくらでも」

すつ、と、右手を差し出してきた。

「契約成立ね」

その手を、握り返す。

初めて握る秀人の手は、大きくて、ゴツゴツと硬くて……暖かくて。

パパの手と、少し似ていた。

第六十九話（後書き）

VividとFORCE 4巻は、通常版を待つことにしました。

第七十話（前書き）

最近、寝オチすることが多くなりました。
、、、疲れてるのかな？

第七十話

「せやあっ!」

はやてが、俺の腹部めがけて突きを繰り出す。

強化魔法の恩恵で、そこらのボクサー崩れより、よっぽど鋭い。

「……」

……けど、馬鹿正直すぎる。

二の腕の側面で突きをいなし、掴み……アームロックを狙う。

「……!」

はやてが、関節技を察知して素早く身を引く。

二度も固められれば、流石に感づかれるか。

「はあっ!」

関節技に気を配るあまり、過剰に腕が縮こまり……思いつきり、俺の制圧範囲に踏み込んでいる。

ガンツ!!

足踏みをして、威嚇。

「っ!?! やあああっ!」

すっかり騙されたはやては、ろくすっぽ狙いも定まっていないうちを繰り出してきた。

すっ……

慌てず、一步だけ擦り足で後ろに下がる。

「あっ……!?!」

気付いた時にはもう遅い。

ボフッ!

軽く掌低を当て、迎撃。

「ぎゃんっ……………!!」

いかに強化されていようと、それは子供の体格。三十キロも無いような身体が、地面を転がる。

立ち上がるうとしたところに、

ガツンッ!!

鼻先数センチに、足を振り下ろした。

「勝負あり、だな」

実戦だったら、頭を地面とサンドイッチして砕いていた。

「くそつたれ……………」

はやては、忌ま忌ましそつに、負けを認めた。

あの日から、更に一週間。

俺達は、ひたすら組み手に励んでいた。

「……………」

ぶすっ、と頬を膨らませ、いじけるはやて。

「まあ、そう腐るな。なかなかセンスあるって、お前」

「あア!？」

強化魔法まで使って、結局負けた私に対する嫌味か!

ルールとして、俺は一切の魔法、『徹』のような技術は使っていない。

それに加えて、俺からは決して打ち込まず、カウンター技だけで戦っている。

でも、それは……………

「できるだけ体格のハンデを埋めるためだろ」

「ムカつく……！余裕こきやがって！」
それでも、はてはいたくプライドを傷付けられたらしく、機嫌が直らない。

「……もう一回」

「え？ いやいや、少し休めよ。今日はもう動きっぱなし……」

「うるさい！もう一回勝負しろー！！」

顎を狙った右のアップercut。

「うわっ、と、と……！？」

それに左フック、右ストレートと続く。

重さは無いが、鋭く速い。

どうやら、関節を取られないように……瞬発力をメインに据えたらしい。

やっぱり、センスあるわこいつ。

体格のハンデを補うことを、ほぼ直感で覚えるなんて。

(……ワクワクするじゃないか)

思わず、笑みが浮かんでしまう。

「こつちからも行くぞ！」

そろそろ俺の方からも、打ち込んでみるか！

「お……おうよ！」

僅かに頬をひくつかせながらも、果敢に応じる。

「うおおおおっ！！」

「たああああっ！！」

ガアンッ！！

俺の生身の掌打と、ありったけの魔法で強化されたはやての拳が、
激しく衝突した！

.....

その後も、何本か勝負し.....とりあえずは負けずに済んだもの、
かなり際どい場面もあった。

魔法は抜きとはいえ、さすがに年長者の意地がある。

「はー.....いい練習になった。なあ？」

タオルで汗を拭き取り、向こうを振り返る。

「さわやかに、笑ってんじゃ、ねえ.....！」

.....あちゃ。

相手が子供だったこと、忘れてた。

「水汲んでくるから、そのまま休んでろ」

『ギヤオオオン.....!!』

おー、今日も呑気に飛んでるわ。

あの巨体じゃ、流石にこの渓谷にまでは入って来られないだろう。

「.....にしても、アレを倒す、ねえ」

俺は別にどうでもいいんだけど、はやてはどうしてもアイツを倒
したいらしい。

初めて会った日、竜から逃げ切った後に聞いた。

『お前、何でこの世界にいるんだ？』

と。

対する答えは、簡潔だった。

『修行』

……よくもまあ、剣一本で生き残ってきたものだ。

というか、剣一本でこんな世界に弟子を放り出すとか……アイツの師匠どんだけ鬼だよ。

「よっこらせつ、と」

水を桶に汲み、ねぐらに戻る。

「くう……くう……」

……寝てるし。

しかも、剣を側に放ったまま。

「……」

……あの剣、前から気になってたんだけど……少しだけなら、いい、よな……？

恐る恐る、剣に手を伸ばす。

「……ふぁ？」

はやてが、もぞりと身体をよじった。

「……！」

マズい、起きたか……！？

「……くう、くう」

「……ふう」

どうやら、ただの寝相だったらしい。

ガシャッ。

とうとう、剣に手が触れた。

持ち上げて、目の前に掲げる。

装飾の類は無く、あくまで、質実剛健な『武器』として造られて
いるようだ。

柄の径は、やや細い。

これは、はやての手に合わせているのだろう。

すらっ……と、鞘から抜く。

無骨、という言葉がぴったりの、片刃の刀身が現れる。

「……？」

刀身の峰の部分に、何か……スライドするギミックがある。

「……ん」

内部を、軽くスキャンしてみた。

この内部構造……

「……似てる」

ヴィータのグラーフアイゼンに、そっくりだ。

じゃあ、これってもしかして……古代ベルカの、アームドデバイス？

「んん……んん……」

うめき声にハツとする。

はやてが、何かを捜し求めるように手元を探っていた。

うわ、危ね……！

慌てて、剣を鞘に納めて、はやてに握らせる。

「ん……」

抱きまくらのように剣を胸に抱き、再び寝息を立てはじめた。

にしても、ベルカのアームドデバイスか。

それを与えた、こいつの師匠って一体……

「まあ、今度聞いてみるか」

今は、まず鍛えなきゃ。

「……」

リンカーコアを起動。

体内で精製した魔力を……手に、魔力刃として出力。

パチッ、パチッ……！

当然のように、端から分解されていく。

魔力を補充していけば、維持は簡単だけど……それだけじゃ進歩

が無い。

パシュン……

魔力刃を、魔力に還元する。

通常の魔法が分解されてしまうなら……通常より、密度を高めればいい。

まあ、かねてから考えていた、『結合』の応用……その一つ、『圧縮』だ。

「……」

ウウン……

手の上に魔力スフィアを展開し……それを、硬く、小さく、押し固めていく。

「……っ、くそ」

パシュツ……

が、失敗した。

最初は球体だった魔力スフィアは、押し固める過程で歪に変形し……泡が弾けるように、消えてしまった。

変に歪ませたら、どこかが決壊してしまうらしい。

それじゃ駄目だ。

もっと均等に、形状はそのままに、大きさだけを縮めるようにしない。

……ふと、何かがひっかかった。

(……形状はそのまま、押し固める……?)

なんか、どつかで聞いたことのある現象だけ……何だったっけ？
「おっと、いかん。集中、集中」

練習とはいえ、使える魔力は限られている。
集中して練習しないと。

……でも本当、何て言うだったっけ？

……

秀人が行方知れずになって、もうじき一月になる。

八月の末日。

今日も茹だるような暑さの中、道場で、恭也を相手に木刀を振る
っていた。

「……せいっ！」

恭也の、適度に手加減した一撃がなのはに迫る。
手加減しているとはいえ、達人レベルの一撃だ。

なのはも、最初のうちは避けられずに当てられるか、転がされて
いたが……

「……」

緊張するわけでも無く、半歩後退し、皮一枚、触れる寸前で回避
する。

「……」

驚愕する恭也。

その隙を見逃すのではなく……

「やあっ！」

渾身の一撃を、恭也の胸に叩き込んだ。

ガキンッ！！

それは、左の木刀で防御されてしまったが……

なのはは、恭也に初めて、『防御』という選択肢に追い込んだ。

「……………今日はここまで」

「ありがとうございました！」

最近では、ぶっ倒れることも無くなり、持久力のアップを実感できる。

バケツと雑巾を用意し、道場を掃除する。

「……………なあ、なのは」

と、恭也がなのはを呼び止めた。

「ん、なあに？」

「最後の……………どうやって避けた？」

「え？ どうっ、て……………普通に、見てから避けただけだよ」

「……………見えたのか？」

訝しげに聞く恭也に、なのははサラッと、とんでもない事を言った。

「うん。目が慣れたから」

確かに、手加減はした。だがそれは、威力を弱めたというだけで

……………

速度は、微塵も衰えていないのだから。

「な、慣れ……………？」

「うん。最初のうちは、軌跡が見えるくらいだったんだけど、もうすっかり。」

……………よし、お掃除終了！」

啞然と立ちすくむ恭也を尻目に、道具をさくさくと片付け、母屋に帰って行った。

「……………」

ヒュッ、ヒュッ！

何故か無言で、一人木刀を振る恭也。

(ま、負けられん……！)

兄の面子にかけて、末の妹に負けるわけにはいかないのだった。

そして、母屋で集まり、桃子らと談笑していた時だった。

ピリリリッ。

なのはの携帯電話が、着信を告げた。

「ごめん、ちょっと待ってて」

席を立ち、廊下に出て相手を確かめる。

「……リンディさん？」

『突然ごめんなさいね、なのはさん』

「いえ……それで、ご用件は？」

『レイジングハートの修理が、完了したわ』

「本当ですか!？」

一ヶ月半。長かったけど……ようやく終わったんだ!

「すぐ行きます!」

『あ、それから、バルディッシュの修理も完了したからフェイトも連れてきてもらえる?』

「はい。……で、場所は?」

アースラでは無く、もっと本格的な設備が整っている場所にあるらしい。

『地球支部……なんだけど、なのはさんは行ったこと無いわよね?』

「はい」

『それじゃあ、案内役をよこすわ』

「エイミイですか?」

『いえ……あの子は今、秀人くんの捜索に加わってるから……』
「ああ……」

「そういえば、と思い出す。」

「進展は？」

『ごめんなさい、まだ……』

「そうですか……ああ、失礼。」

「で、私はアースラに行けばいいんですか？」

『ええ。転送ポートは……』

「家の中庭に開いて下さい。フェイトも連れて、すぐ行きます
ぱたん、と携帯電話を閉じ、リビングに戻る。」

「ごめん母さん。急用だから、フェイトも一緒に出かける」

「あら……そうなの？ ケーキ、出来上がる所だったんだけど」

「ごめん、また今度……フェイト、行くよ」

「まって、なのは！ ボクはケーキたべてから……」

「駄目。ほら、行くよ！」

「うわーん！ ももこのケーキ！」

「安心しろ、フェイト」

「ヴィータ……もしかして、とっておいてくれるの？」

「ああ」

「ヴィータは、優しく笑い……」

「お前の分も、アタシが食べてやる」

「このやるー！！」

「はいはい、もう行くからね」

「ケーキ！ ケーキ！」

「じたばたもかくフェイトの首根っこを掴み、中庭まで引きずって
行った。」

アースラまで来れば、流石に諦めがついたらしい。
「もう……きゆうようってなんだよ？」

私に手を引かれながら、ぶつくさと言っている。

「レイジングハートとバルディッシュ、直ったって」

「まじでっ!？」

「女の子が『まじ』とか言わないの。」

……そう。だから、呼び出されたんだよ

「ひゃっほー!バルディッシュに会えるー!」

喜色満面で、私の手を振り回す。

……で、案内役って誰だろう。

「あ……あの……」

と、オドオドした声の女性局員が、話し掛けてきた。

背は、姉さんと同じくらいかな？

……思い出すのに時間が掛かったけど、思い出した。

「あなたが案内役？」

「は、はい……!わたくし、フィアット二曹が、拝命いたしました

……!」

この人、エイミィの代役でオペレーターやってた人だ。

「……それでは、ご案内致します……!」

……それにしても、何でこんなに怯えているんだろう。

「……ねえ、フィアット」

本人に聞いてみよう……と思ったのだけだ。

「ひいっ!？」

あ、ムカつく。

「フェイト、ちょっと待っててくれる？」

「？ うん、いいよー」

さてと。丁度、そこに人気の無い談話室が……

「フィアット、お話があります。こちらに来て下さい」

「えっ、えっ……？あの、案内……？」

「すぐ済みます。来なさい」

「ひいひい……！」

ずりずりと……って、今日の私、引きずってばかり。

「はい。甘くしておいたよ」

使い捨てのコップにコーヒーを注ぎミルク砂糖を入れて、手渡す。

「あ、ありがとうございます……」

びくびく、おどおどして……嫌になっちゃっ。

「ねえ……フィアット」

真横に座り、物理的に距離を縮める。

逃げようとしたフィアットの肩をガツチリと握り、逃亡を阻止。

もう、お話くらいさせてよ。

「ひい……なんで、ありませんようか……」

「私、あなたに何かしたっけ？」

正直、本当に覚えが無い。

フィアットは、がばつと面を上げ、涙目で叫んだ。

「け、蹴飛ばしたじゃないですかあー！」

「え、ええ……？」

したっけ、そんなこと？

「わ、わたしの椅子、があんつ、て、があんつ、てえ！

そのあと、胸倉掴んで脅したじゃないですかあ！」

うん。嘘じゃなさそうだ。

……あ。アレか、もしかして。

『通信繋いで!』

『は、はあ……』

『早くしろオツ!』

『は、はいイイイイ!』

トチ狂ったクロノに怒った時の、アレか。

「いやあ、ほら……状況が状況だったし？」

「ひどいですよう!」

「……ってなわけで、誤解は解けたのでした」

「勝手に纏めないで下さいい!そんなんだから、あちこちで……ハ

ッ!？」

ん……?

「あちこちで……何だって?」

「あわわわわ……!」

「逃げるなッ!言えッ!」

「ひああああ!言えないですううう!」

フィアットをソファに組み敷き、尋問していたら……

「なーのはー。まってるのあきちやった……ん?」

……冷静に、考えてみた。

今の私は、か細い女性局員を、人気の無い談話室に拉致し、ソファに組み敷いている。

下手をすれば、性犯罪者そのものの姿である。

「?なにしてるのー?」

でも良かった。
フェイトが無知で……

「おい、駄目じゃないか。休憩時間以外、談話室は入室禁止になっ
て……」

が、話し声を聞いてきたクルーが、手に持っていたファイルを、
ばさっと床に落とした。

「……二曹を、手籠めに……!?!」

ちがーうー!?!?

「なん……だと?」

「イヤッハー! 録画だああああ!」

「『背徳の愛! 美人局員と少女!』タイトルは、これで決まりね!」

「……ああ、うん」

しゅらあん……

二刀を、鞘から引き抜いて……

「いい加減にしろおおお!」

……結局、誤解を解くのに一時間も架かってしまった。

……なあにやってんだろ、私。

第七十一話（前書き）

来週日曜日、、、楽しいはずの三連休。その日曜日が、仕事で、、、
（泣）
ツーリング行きたかった、、、

第七十一話

アースラの連中は、しっかりシメておいた。

「す……すみませんでした」

へこへこと、妙に腰の低い態度で、フィアットが私達を先導する。
「っていうかさあ、」

頭の後ろで手を組み、ぷらぷらと気楽に歩くフェイトが、口を開いた。

「なんでそんなに、なのはがこわいの？」

一瞬、きよとんとしたフィアットは、あたふたと弁明を始めた。

「え、ええと……やはり、苦手意識と言いますか……」

「うん。でも、それだけじゃないよね？」

フェイトって、基本的にはお馬鹿さんだけど……たまに、妙に鋭いんだよね。

「そうなの、フィアット？」

「うづう……は、はい……」

……さて、どういう話だ？

「噂に、なっているんです。吾妻秀人さん、高町なのはさん……あなた達、お二人は……」

「……噂？」

口ぶりからすると、あまりいい噂じゃないんだろうな。

「つまり、その噂を聞いて、私のこと怖がってたわけ？」

「は、はい」

なるほど。

下手に戦闘中の私を知っていたことが、噂の裏付けになってしまったわけか。

「それに、その腰の……」

ん？腰の……って。

「刀のこと？」

かんかん、と鞘を叩く。

「ひい……！」

びくっ、となつて後退つた。

「何よ……別に抜いてないでしょ」

「なのはー……かたなもちあるいてるひとつ、たしかにかなり」
わいよー」

……そう、なのかな？

「別に、必要なとき以外は使わないのに……」

ファイアットが拳手し、聞いてきた。

「必要な時、とは……？」

うーん、そうだなあ……

「まず、敵に襲われたとき」

当然だよな？

二人は、うんうん、と頷く。

それから……

「悪い子にお仕置きする時、とか」

当然だよな？

「いやいやいや、ねーよー！」

「思いつきり悪用じゃないですかあー！」

え、えええ……？何で総ツツ「喰らうの……？」

「やっぱり、あの噂は本当だったんだ……！」

じりじりと距離を取り、逃げの体勢に入る。

「だから、噂って何なのよ!？」

「きゃああああ!!！」

あ、逃げた!逃がすかあ!

じゃきつ!

鞘から二刀を抜いて……!

「ちょ、なのは!？」

「待てええええ!!！」

思いつきり、ブン投げる!

ガゴンツ、ガスンツ!!

投擲された二刀は、フィアットの制服の、袖と裾を壁にガツチリと縫い止めた。

「ひいい……!?!おかあさあん……!!！」

「さあ……洗いざらい、吐いてもらおうか？」

そんでもって、噂とやらを広めた元凶を突き止めて……!

「……何してんの?」

と、平坦ながら少し不機嫌な声が、行進を阻んだ。

振り返ると、いつ見ても変わらない白衣の姿。

「あ、まりー」

「マリーさん?」

引きこもりに見えて、意外にもアグレッシブで行動力溢れるこの人のことだ。

多分、痺れを切らして迎えに来たんだろう。

「……遅い」

「す、すみません」

「見せびらかしたかったのに……」

「……」

「……」

……反応に困るような台詞は、言わないで欲しい。

「……そ、それじゃあ、行きましょうか？」

「うんうん！バルディッシュにも、はやくあいたいし！」

壁に突き刺さっている回天桜花を抜き、かちん、と鞘に納める。

「あああ、おろしたての制服が……！」

「あ……」

フィアットの制服に、穴が空いていた。

「おかあさんに怒られる……」

ずーん、と落ち込んでしまった。

……いやー、ごめんごめん。

「貸して。繕って返すから」

「え、いや、あの……」

有無を言わず上着を剥ぎ取った。

「じゃ、案内ありがと。制服はクロノにでも渡しておくね」

「じゃーねー」

手を振りフィアットと別れ、すたすた歩きだしたマリーの後を追った。

直後、後ろがにわか騒がしくなる。

「フィアット貴様、何だその服装は！！サービス規定を忘れたか！」

「ひいひい！違うんです三佐どの！！これには訳が……」

聞かなかったことにしよう。

……ドンマイ！

さて、直に対面するのは実に久しぶりだ。

「元気にしてるかな？」

多分、秀人さんが行方不明になったことも、知ってるだろうけど

……

「あんまり」

「……そっか。やっぱり、そうだよね」

レイジングハート、落ち込んでるだろうなあ。

「違う……会えば分かる」

「……？」

ロック解除されたドアを開け、ラボに入る。

すぐ目の前に、円柱状の容器に入った、レイジングハートが……

『……しくしくしく』

って、レイジングハートおおお！？

「ちょ、何で泣いてるの！？」

そんなに寂しかったの！？

『マスターまで、浮気を……！』

「浮気……」

って、まさか、回天桜花のこと！？

「ち、ちがうよ！？これは……！」

『私というものがありながら……！』

「違うんだってばー！！」

……一度くらいは、見舞いに来るべきだったかもしれない。

『……そういうことでしたら、納得です』

フェイトはバルディッシュを抱えて、そそくさと退散した。

「……………」
手元に魔力スフィアを浮かせ、何やら瞑想する秀人。

ゴキッ……

その魔力スフィアが、ごく僅かに収縮する。

「……………」

ゴキキッ……………!

また更に収縮し……………内部に、魔力を凝縮していく。

「く、ううう……………」

滝のような汗を流し、分解が追いつかないよう、全霊で圧力を更に高める。

「……………」

そして、手中の結界が限界を迎える寸前……………

……………ギンッ……………!

一際強い光と共に、分解がぴたりと止まった。

「……………」

残ったのは……………力強い輝きを放つ魔力スフィア。

恐る恐る、圧力を弱める。

……………だが、分解は始まらなかった。

「いよっしゃあああああ……………!」

喜びのままに、両手を上げて歓声を上げる。

「うっさい、なあ、もう……………!」

皮で作ったお手製のサンドバッグをリズムカルに叩きながら、はやてが顔をしかめた。

「成功はいいけど……実戦で、呑気にそうしていられる時間なんて無いでしょ」

「今はまだ……な。けど、感覚は掴んだから」

あとは反復あるのみ……と、また魔力を練りはじめる。

「ふん……終わったら、組み手するからね」

「いや、今日は反復に使うから……」

「……チツ」

汚く舌打ちをして、またサンドバッグを殴打する。

だが、やはり地味な基礎トレーニングは気が乗らないのか、一時間もしないうちに、秀人にちよっかいをかけはじめた。

「ねえ、組み手……」

「ん……」

「組み手しようよー！」

「明日な……」

集中している秀人は、つれない態度。

むかむかむか、いらいらいら……と、堪え性の無い地の部分が首をもたげてきた。

「何だよ、バーカ！」

手元に転がっていた、拳大の石ころを掴み、秀人に向けて投擲した。

「ちよ、おま……！」

慌てたせいで、密度を保つための結界に穴が空き……その中にスポンツ、と、見事にホールインワンを決めた。

……とてつもない圧力の中に、唐突に異物を放り込む。
それが、どのような結果を引き起こすのか、はやてにも、秀人に
も、分かっていなかった。

石ころは、瞬時に圧縮され赤熱。内部の熱エネルギーは逃げ場に
たどり着くことも無く、自身の分子
構造を破壊し、気化。結果……

超高温の『プラズマ』が、発生した。

……ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！
空全体を揺るがすような爆音を轟かせ、秀人とはやてが身を潜め
る渓谷が……崩落した。

『……グル』
その爆音は、岩山の頂で羽根を休める大火竜の耳にも、当然のよ
うに届き……

『ガルアアアアアア！！』

巨大な翼が空気を叩き……巨体は、渓谷の跡地へと猛スピードで
向かって行った。

第七十一話（後書き）

テーマは、『靈知の太陽信仰 Nuclear Fusion』で。

縮退は、あんまり理屈が分からなかったort
これだから文系脳は、、、

第七十二話（前書き）

ペースが遅くて申し訳ありません。

第七十二話

「う、ううう……?」

なんとか、防御が間に合った。

はやては、土砂の中からのそのそと立ち上がり、頭にこびりついた砂を払う。

「……くっ」

その最中、不自然に体勢を崩し、膝を突いた。

熱波や爆風は防げたとはいえ、洞窟内という狭所で増幅された爆音は、はやての鼓膜を破壊し、
三半器官に甚大なダメージを与えていた。

「……」

ふらふらと覚束ない足取りで、周囲を歩く。

「や、べえ……!」

今まで、はやて達の身を隠していた渓谷は、原型を留めない程に崩れてしまっていた。

「……私達のいた洞窟が、渓谷全体のウィークポイントだった……
ってこと?」

「……つたく、どんだけツイてないのよ……!」

私『達』。そう、自分のほかにもう一人……

「秀人……!?!」

自分は防げたが……爆心地にいた秀人は、どうなったのだろうか。
「……うげッ!?!」

見覚えのあるスニーカーが、土砂から突き出していた。

「……」

ためしに、軽く引っ張ってみる。

ぐい、ぐい……と、確かに手応えが返ってきた。

……どうやら、足だけがもげて転がっているわけでは無さそうだ。
両手でその足を掴み……
「よっこい……しゅっ……！」

ズボッ！！

……と、どこかの童話のカブの如く、秀人を引っっこ抜いた。
「……」

秀人は、辛うじて息をしていたが……

「……黒焼き？」

と、思わずボケてしまうほど、見事な黒焦げだった。

「うわぁ……生きてるかな、コレ。とにかく、治さないと……って、あれ？」

そこで、はやては首を傾げた。

……先程まで、炭化したような真っ黒だった秀人の皮膚が、パリパリと剥がれ落ちていく。

「……！？」

その下から見えたのは、血色の良い、やや濃い肌色。

……新しい、皮膚だった。

「……治癒魔法？でも、意識も無いのに……」

更に、異常なことが起こった。

「……！！」

はやての耳が、『風が吹く音』を、確かに捉えた。
つい先刻、破れたばかりの鼓膜に。

「治っ……た？ 嘘……？」

信じられない、と。

だが、確かな事実として、傷は治癒している。

「……どういこと？」

治ったにせよ、理由も無いのでは気味が悪いだけだ。

「……死ぬかと思った……死なないけど」

秀人が、目を覚ました。

やはりというか、何と言うか……傷は、既に治癒していた。
意識無意識の関係無い、秀人の特異体質。

「今のは、おまえの力？」

「……あー、いや、単なる、治癒魔法」

「ホラ吹いてんじゃねえ」

「……いや、まじで」

ほぼ知られた……にも関わらず、頑なに体質のタブーを隠す。
いつもなら、それで良かった。

どうせ、それ以外では説明が着かないのだから。

だが……次にはやてが口走った言葉に、すべての動きを止めた。

「大体、もしそうだと……何で、私の傷まで治る」

「……なに？」

……険しい顔。

はやては、初めて見る秀人の顔に動揺した。

「え……」

その、豹変とも言える如実な変化に、腰が引けてしまった。

だが秀人は、はやての両肩を握り、ぐいっと身体を近付ける。

「ち、近いつての……!!」

「どづいうことだ？」

お前の傷が、治ったって……お前の方こそ、何か魔法でも使った
んじゃないのか？」

「いや……気付いたら、治ってたけど……」

「……………」

口に手を当て、ふらふらと後ずさる。

「嘘だ」

「ありえない」

「そんな馬鹿な」

……………口からこぼれるのは全て、事実からの逃避であり、同時に……………その真実を肯定する言葉だった。

「おい……………何だか知らないけど、とにかく落ち着けてのはやてもまた、混乱していた。」

何が起ころうと、妙に肝が据わっている秀人がこんなに取り乱すなど……………

この一ヶ月の間、殆ど無かったのだから。

『ギヤオオオオオン!!』

「「!!」」

その、原始的な恐怖を呼び起こす咆哮に、目を覚ました。

「チツ……………!話は後で、ちゃんと聞くからな!」

「……………わかったよ。で、どうする、また安全地帯探して逃げるか?」

「……………」

一瞬の思考。

彼我の戦力差。

A M F 環境下での経験値。

地对空戦闘。

様々な要素を加味し、判断した結果。

「……叩く！」

いよいよ、この世界における最終目標へ、手を出すことに決めた。

地平線の向こう、小さな黒点だったソレは、あっという間に、全体像を見せた。

「うわ……やっぱデカいな。で……勝てそうか？」

不敵な笑みで、はやてを挑発する。

「勝つ！」

勝てる、では無く、勝つ。

それがはやての決意であり、判断だった。

「はやてが指示を出せ。俺は、それに従う」

秀人は、はやての作戦に乗ることにしたようだ。

『ゴフウ……！』

大火竜の口元から、口内に蓄えたブレスが僅かに溢れる。

「ブレスを回避！その後、接近戦を仕掛ける！」

「了解！」

はやては魔剣を構え、秀人は魔力スフィアを出現させ、圧縮を開始する。

そして……

『ゴハアアアアアアアアアアッ！』

地上目掛けて、プレスが発射された！

キュゴオオオオン！

プレスは、辺りに目茶苦茶に破壊を撒き散らし、粉塵を巻き上げる。

ボツ！！

粉塵の中から二つ、飛び出してくる影があった。

「「うおりゃあああああつ！！」」

当然、はやてと、秀人である。

瓦礫を足場に、大火竜の前後から、攻撃を仕掛ける。

『ガアッ！』

大火竜が羽ばたく。

ビュオオオツ！！

それによって、突風が発生。

「うわっ！？」

「きゃあっ！！」

煽られ、再び地面へと逆戻りしてしまった。

「何だよアレ！近付けないじゃん！」

「私に聞くな！こんなの、想定外よ！！」

「……勝つって言ったじゃねえかこのへっポコ指揮官！」

「へ、へっぽこ言っなあー！」

『ゴアアアアアアアア！』

そしてまた、ブレスが発射される。

ドゴオオン！！

「あークソ！ブレスを避けて近づくにしても、あの風が……」
「少しの間だけでも、あいつを地上に落とせれば……！おりゃあっ
！」

「あっ、馬鹿！」

再びジャンプし、大火竜に剣を突き立てようとする。

が、当然、そんな考え無しの攻撃が通じるはずもなく……？

「ガアッ！」

バヒユウウウツッ！

「きゃああっ！」

やはり、突風に飛ばされた。

錐揉み回転してしまい、体勢を立て直すことが困難になる。

「っ、とオ！」

秀人もまた、空中に身を躍らせ、はやてをキャッチした。

ゴオオオオ！！

隙を見逃さず、猛烈な火炎を吐き出す大火竜。

不自由な空中で、小規模なインパクトで射線上から逃れ、我が身を盾に、はやてを庇う。

「……くそっ！」

だが、やはり小規模。

待避は十分でなく……秀人の背中を、火炎が蹂躪した。

「うがあああああっ！」

神経を焼く激痛に悶え、地面に墜落する。

「うぐ……!!」

流石に、延髄にまでダメージが及ぶとなると、回復には時間が掛かる。

「おい、しつかりしろ!!」

はやてがその腕から抜け出し、秀人の肩を支える。体格差もあって、引きずるような形だ。

『ガアアアッ!!』

攻撃が来ないと分かった途端、大火竜は急降下。地表を、大火竜の爪がえぐり取る。

「……っ!!」

躊躇い無く、瓦礫の山を転げ降りる。

「イツ、てえ……!!」

そのまま、秀人を背負って駆け出す。

「おい、俺は、いいから……!!」

揺られながら回復しつつ、秀人が言った。

ほんの数十秒。

回復を待つ間、大火竜を引き付けておけばいい。

「俺を囮にして、イツを攻撃……!!」

……なのは辺りが聞けば、大激怒するような台詞。

「ふっざけんなッ!!」

当然、はやても怒った。

「おまえは、イツに勝つための、私の手駒だ!

まだ、使い捨てるタイミングじゃないんだよ!

そういう台詞は、手足と目ン玉と齒ア全部無くなってから言いやがれ!!」

なかなか、外道な理由だった。

「……鬼畜め」

苦笑いし、

「……んじゃあ、悪いけどこのまま逃げ続ける。もう少し……すり

や……完、治……」

かくん、と秀人が脱力する。

(やべ、死んだ!?)

……死んでない。

「くう……くう……」

秀人は回復するため、意識をシャットダウン。
戦闘中に睡眠を取るといふ、荒業を敢行した。

「ええい、首に息が当たってこそばゆい……!」

身体強化魔法を使っているとはいえ、男性一人というのは重い。

「重いよ、この野郎……!ハラワタぶちまけて、軽量化してやる
うか、、!」

憎まれ口を叩きながらも、律儀に秀人を背負い直す。

ドゴオン!ドゴオン!

「ひイツ!!」

ブレスを避け、跳ぶ。

「きやああっ!」

爪を避け、転がる。

「はひー、はひー……!!」

逃げても逃げてても、上空を飛ぶ大火竜との距離は開かない。

「不公平よ!あいつばっか、重力を無視しやがって!! 万有引力
どこ行った!??」

「……おい、今なんつった?」

「あ、生きてたんだ」

……

「いま、不公平って……その後、」

「あいつばっか重力を無視して、万有引力 ……」

「それだ！」

がばつ、と、はやての背から飛び降りる。

「え……おい……ウエルダン状態だった背中はどうした？」

「寝たから治った！」

「……RPGじゃねえんだぞ」

「まあいいから。とにかく……！」

そして、はやては秀人の案を聞き、検討し、時に補足し……

「……よし、それで行くわよ！！」

作戦が、決定した。

はやてと秀人は、一定の距離を、つかず離れず駆け出す。

プレスでは、どちらか片方しか攻撃できない。

『ゴアアツ！！』

火炎のプレスを、自らの突風で拡散させ、広範囲へと撒き散らす。

やはりこの大火竜、相当な知能を持ち合わせている。

とはいえ、威力は弱まる。

秀人とはやては、バリアジャケットの防御力のみで、炎に耐え、走りつづける。

『ゴアアアアアツ！！』

同様の攻撃を、二度、三度と繰り返し、二人にダメージを蓄積させていく。

だが、二人に焦りは見えない。

むしろ……勝利を確信した、笑みさえ浮かべている。

「……もう少し！」

「……あと少し！」

そして、何度目かの熱波。それに揺さぶられ……

ゴガガガガガガガガガガン！！

崩れかけていた溪谷が、完全に崩壊した。

瓦礫は山になり……新たな、足場を作り出す。

だが、制空権という優位は崩れない。

大火竜は、上空を旋回し、粉塵が止むのを待つ。

晴ればまた、プレスを上からぶつけるのみ。

『グアツ！？』

……と、唐突に、見えないワイヤーで引つ張られたように、大火竜の身体が、ガクンと空中でバランスを崩す。

「無駄だ……もう、浮かぶことはできねえよ」

ふわり、と、秀人の身体が軽々と浮かぶ。

まるで、重力から解き放たれたように。

「この惑星の重力とお前の身体を、『結合』させてや
つたんだからなあ！！」

……超高密度の魔力による、魔法の行使。

それは、単純な攻撃とも防御とも、補助とも違う……全く新しい

秀人自身のキャパシティは、既に満杯。

ならば、

「ロード、カートリッジ!!」

ガキインツツ!!

外部の魔力を、使うまで!

「だあああああああああつ!!」

一振りで、灼熱の炎を切り払う。

そして……魔剣に炎の残滓を残したまま、第二撃!

「はあああつ!!」

斬ツ!!

秀人の一撃は、大火竜の両翼を、根本から切断した!

『グ……ギアアア!』

いよいよ、増幅された重力のままに落下する大火竜。

墜落死させるには高度が足りない。

だから……

「はやて!今だあああああつ!!」

大火竜の背中から、飛び降りて退避する。

「!」

粉塵の中からはやてが突撃する。
バリアジャケットを残し、全ての魔力が、一点……右拳に、一局
集中している！

「ブツ潰れるおおおおお！」

ドズウンッ！！

落下速度をも破壊力として加算した……全身全霊の一撃が、大火
竜の胴体を、真芯から捉えた！！

「グオ……ガアア………」

立ち込めていた粉塵が晴れる。

その向こうに浮かぶシルエットは……

「ガア………！」

大火竜………？

いや、違う。

ズズウ………ン………

大火竜は崩れ落ち、

「はぁ………」

右腕を振り抜き、残心を取る……はやての姿があった。

秀人は、はやてに歩みより、右腕を高く上げる。

はやても、無言のまま右手を上げ……

パアンッ！！

軽やかな、ハイタッチを交わした。

「いよつしゃああああ!!」

はやては、がばーっ!と両手を振り上げ、全身で喜びを表現する。

それを、端から秀人が見ていることに気が付いたはやては……

「な……何ニヤニヤしてんだよテメエ!」

げしっ、と、赤面したまま秀人に蹴りを入れた。

「いつて! ……でも、よく頑張った」

「ふん。本当なら、私一人でやるべきだったんだらうけど……」
かしかしと、ごまかすように頭を掻き……

「ま、三割はおまえの手柄にしといてやるよ」

どこまでも不遜に、秀人に感謝した。

「厳しいなあ……あ、そうだ。返しておく」
手に持ったままだった魔剣を返却する。

「そついやおまえ、何で、カートリッジのこと……」

(ギクツ)

寝ている際に、こっそりいじってました。

等と、言えるはずも無く……

「さ、さあて、獲物、さつさとバラそうかなっ!？」
下手くそなごまかしを、始めた。

「……後で、じっくり聞かせてもらうからな」
今は、その体力が惜しい。

と、秀人とはやてが、大火竜に近付いた時だった。

……大火竜の身体が、淡く、黒色の光を発する。

これは……

「……魔力光？」

その魔力光は、大火竜の身体を包み込み、徐々に小さくなっている。

そして光は……人型に収束し、収まった。

「……嘘」

はやては驚愕のあまり、感情をせき止められる。

「おい、どうということだ……!？」

秀人も、困惑している。

何故なら。

その人型は、漆黒の頭髮に、目立つ猫耳、尻尾を持つ……

はやての使い魔、リーゼだったのだから。

第七十二話（後書き）

次回から新展開です。

第七十三話（前書き）

ツーリングで行った相模湖が、えらく濁ってました。
台風って怖いですね。

近所では、駐車場に置いてあったホーネット250が横倒しになっ
ていて、、、所有者の方、ご愁傷様です。

第七十三話

じわ……と、リーゼの下の岩場に、赤黒い液体が染み出す。

「……！リーゼ！！」

はやてが、その身体を助け起こす。

「なんで……なんで……！リーゼ！」

言葉らしい言葉にならない。

その色は、見慣れたものだ。

だがそれが、近しい者が流すものとなると、意味合いが違ってくる。

「う……」

リーゼが、意識を取り戻す。

「あ、るじ……」

「！リーゼ、気が付いたの！？」

リーゼは、こんな状態になって尚、冷静な言葉を紡いだ。

「主が、最後に使われたのは……古代ベルカ拳技、奥義……『シユ
ヴァルツェ・ヴィルクング』、

……お、お見事な、一撃、でした……」

「そんなこと、聞いてない！なんで、リーゼが竜に……！」

「『修練の門』……結界魔法に、対象を閉じ込め……試練を与え成長を促す、古代ベルカの、禁呪です

……ゲホッ！」

びちゃっ、と、咳と共に血を吐き出す。

「発動対象は……魔力ラインが、繋がっている者に限り……己を、
理性無き暴竜と化し、

最終試練とすることで、発動……」

それ故の、禁呪。

「おまえ、そんなこと一言も……!!」

泣きそうな目で、リーゼを問い詰める。

「ご命令、でしたから……『修業に、一切の手心を加えるな』、と」

「……私の、せい?」

いいえ、と、リーゼは首を横に振る。

「あなたが、強くなれること……それが、私の望み、私の使命……」

……

「馬鹿……この大馬鹿!!」

「ご心配、なさらず……私の命が尽きれば、じきに、この世界から出られます……」

……大火竜として、その命を担保に維持してきた結果は……死を以て、解除される。

A M Fの影響も、消えるだろう。

「……やだ、やだよ、そんなの……!!」

「……」

とつとつ、リーゼが意識を失った。

「はやて、代われ」

秀人もイマイチ理由は分からなかったが、とにかく……目の前のリーゼが死にかけている、

ということ、確かなようだった。

「治癒魔法、試したんだけど……うまくいかなくて……」

泣きベソをかき、ぐしぐしと目を擦る。

「どうしよう……リーゼが、死んじゃうよお……!!」

秀人はリーゼを抱え、傷を確認する。

(背中に裂傷……それに、肋骨、内臓がいくつかやられてる)

背中が秀人の斬撃、内臓は、はやての拳による傷だろう。

出血は派手だが、背中への傷は大して深くない。

むしろ、問題は内臓の方だった。

「……まだ、使えなさそうだな」

圧縮魔力スフィアを使えば、使えなくも無いだろうが……ユーノには遠く及ばない。

「……よし、やるか」

「え……？ でも、おまえだって、魔力殆ど……」

「裏技」

……例の、リンカーコア結合。

あれを使えば……あるいは。

「……一時的に、俺の身体と、こいつの身体を、リンクさせてみる」

「え……でも、そんなこと」

「俺には、出来るんだよ」

いつもは、リンカーコアの結合のみだが、秀人には確証があった。

……先程の、はやての治癒。

あれはどう見ても、秀人のソレとしか思えない。

恐らく、『どこか』で……この世界で出会う前後、関係無しに……

……魔力のラインがリンクしてしまったのだろう。

それが、はやてにも小さいながら、自己修復をもたらした……

それが、秀人の見立てである。

魔力残量、一割以下。

失敗は許されない。

一割の魔力をかき集め、圧縮を開始。

失敗すれば、リーゼを救う手立ては無くなる。

はやては固唾を呑んで見守る。

リーゼの手を、しっかりと握りしめながら。

「……この人が、お前の師匠？」

秀人はもつと、こう……フンドシー丁の、ガチムチな老人を想像していた。

まさか、ネコミミ尻尾が似合う、可憐な女性とは予想と違った。

「うん……」

ぐすつ、と、また鼻を吸いながら、頷いた。

「……可愛いでしょ」

「……ああ、うん」

聞かなかったことにした。

とにかく、よほど大事な存在だということだけはわかった。

「……よし」

魔力残量が少ないことが幸した。

圧縮は滞り無く完了し、次の工程に移る。

キーンッ！

魔法陣を展開。

そのまま、ラインをリーゼに伸ばす。

「接続、成功……！」

同時、秀人の中に、見聞きした覚えの無い術式が流れ込んで来る。それは以前、ヴィータの魔力を解析した時のものと、酷似していた。

古代ベルカの魔法。

中には、ミッド式の魔法もあったが、大部分はベルカのものだった。

（さて……ここからが、正念場か）

ここまでは、いつもと同じ。

いつもなら、魔力のラインに意識を向けるところを、今回は、対

象の肉体に。

だが……

「……う」

リンカーコアと肉体では、勝手が全く違っていた。それ以上の接続は、遅々として進まない。

駄目なのか……秀人が思った、その時だった。

ドクン

……と、心臓の最奥が、脈動した。

「……今のは？」

接続を維持しながら、その音に耳を傾ける。

「……」

ドクン

その脈動の正体は……

「……俺の、リンカーコア？」

秀人の治癒能力を司る、大きな要素。

それが、秀人の意志を離れ、跳ね回っている。

「お、おわっ……何だ!？」

意識した瞬間、さらに激しく……

まるで、自らを使えと……にぶい主に、訴えているかのようだ。

「抑え……らんねえ!!」

一か八か。

「うおおおおおおおおおおおっ!……」

秀人はその衝動を……思うままに解放した。

……ゴオオオオオッ！！

そしてソレは……まるで、殻を破る雛鳥のように……頭元した。

『キュアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！』

蒼炎の不死鳥フェニックス

「……………！！」

それを目にした瞬間、はやての脳裏に、『鉄槌』の最後が想起された。

ジャキッ！

衝動的に切り掛かりそうになる寸前、なんとか意志の力でフルブレーキをかける。

まだ、リーゼに危害が及ぶとは決まっていない。

動向を、固唾を呑んで見守る。

「うおッ……………！？ こ、コイツは……………！！」

秀人は秀人で、驚いていた。

サイズこそ翼長2メートル程度と、鉄槌の騎士を滅した時より小さいが、

内に秘める力の『質』は、全く同一のものだった。

『フシユルルル……………！！』

不死鳥は、秀人の目の前に滞空する。

「ええつと………?」

戸惑い、首を傾げていたら……

『ピギイツ!!』

ゴスツ!

「痛ツたあ!?!」

嘴が、秀人の頭頂部を突つついた。

自分のリンカーコアにドツかれる………という、極めて意味不明の事態が起こっていた。

「何しやがる!」

怒る秀人だったが……

『ピギー!!』

むしろ、怒っているのは不死鳥の方だった。

「ああ………?」

徐々にだが、何を言わんとしているのかが、伝わってきた。

「『とつとと目的を言え、ほけなす』………?」

つて、誰がボケナスだ、この焼き鳥!」

『ピギー!!?』

「ごすつ、がすがすがすつ!!」

啄むような連続攻撃。

「痛ツ、痛ツたあ!?!」

………分かった!分かったから止める!」

『フシユウウ………!!』

………

「あー……そいつの傷を治したいんだ。手伝ってもらえるか？」
『ピイツ！』
ばさつ、と、『任せる』と言わんばかりに両翼を広げ……その鼻先を、リーゼに向けた。

キイイイイ……！

すると、どうしたことだろう。
先程まで行き詰まっていた肉体への接続が、呆気ないほど完了してしまった。

そして、治癒が始まった。

「……」

無言になり手をかざし……

『ピユイイイ……』

不死鳥は、翼をリーゼに被せる。

……流石に、秀人ほどの速度ではないが、あれほどの重傷……いや、致命傷が、
確実に塞がりつつあった。

「……うん、大丈夫……助かるよ」

「……よ」

はやては、べしゃつ、と、膝が砕けたように座り込み……

「よかったあ……！！」

安堵から、泣き笑いのような表情を浮かべた。

（なーんだ、この子……）

接続を続けつつ、心の中で呟く。

（ちゃんと、誰かのために泣けるんだ）

破綻者ではなかった。

その事実が、何故か無性に、嬉しかった。

.....

「あう………？」

程なくして、リーゼが目を覚ました。

「リーゼー！」

はやてが、その傍に駆け寄る。

「……はアー、疲れた」

どっかりと座り込む秀人。

『ピギー………』

全くだぜ………とでも言いそうな調子で、トコトコと秀人の所まで歩いていった。

「……お疲れ」

すっ、と手を出す。

その上に乗った不死鳥は、まるで雀のようなサイズにまで縮んでいた。

『パイ………』

フツ………と、再び秀人の内に還元される。

「うーん………マジで、何なんだろう、コレ」

こんな土壇場でまさか、あの不死鳥を呼び出す術を、身につけられるとは思っていなかった。

「はあ………」

が、秀人はどこか、憂鬱そうだった。

「………」

ふるふる、と頭を振り、思考を切り替える。

「……何故？」

「あいつが、助けてくれたんだよ」

「……」

くるっ、と秀人の方を向く。

「……あなたは？」

「吾妻秀人。通りすがりの、魔導師だ」

「……ああ、そうでした。主の、協力者、ですね」

「手駒よ」

「……さて、それで、なんだが」

秀人のスルー能力も、向上したらしい。

「何よ」

「何でしょうか」

「……どうやって、ここから出る？」

「「あ」」

……この世界を覆っている、AMF結界。

それは、リーゼの展開した『修練の門』によるものだ。

理性を失い竜と化したリーゼを打倒……殺害することで、結界を解除。

元の世界に、強制送還される。

……対象者が術者を越える力を得、術者を殺すか……対象者を、竜が食い殺すか。

そのどちらかしか、解除されない。

だが、今は……中途半端な状態で、『修練の門』が解けかけ、術

者が生存している。

明らかな致命傷から、完全に回復することなど、想定されていなかったのだらう。

秀人というジョーカーがいたからこそ、このような事態が引き起こされた。

「『修練の門』を越えられる程、強力な転移魔法は、持ち合わせていません……」

「……私も、攻撃魔法くらいしか知らない」
「……同じく」

三人が三人、帰る手段を持ち合わせていなかった。

「……救助信号は？」

「転移のような、大きな力ならともかく……信号のような微弱なもの、遮断されてしまいます」

「……収束砲撃で、結界を破壊する……ってのは？」

「我々の全魔力、大気中の魔素、全てを収束しても、破壊には届きません」

更に、魔力が希薄であることが追い撃ちだった。

「……どうするよ」

「……いつそ、この世界で暮らしますか？」

食うに困ることはありませんし……と、しれっ、と言いつつ。

冷静に見えるが、単にテンパツて思考停止しているだけのようだ。

「……秀人」

と、それまで黙っていたはやてが、口を開いた。

「おまえ、洞窟が崩れた時のこと、覚えてる？」

「……ああ」

覚えてるも何も、ほんの数時間前のことだ。

「あの時、どんな状況だった？」

「俺が、圧縮魔法の練習をしてて……」

「私がそこに、石を投げ込んで……」
こく、と秀人が頷く。

「圧縮……そして、爆発？」

リーゼが、何かに気付いたらしい。

「……」

「……」

顔を見合わせ……

「 「核融合」 」

……それが、先刻の大爆発の正体。

「ああ、それだ！」

ぽん、と手を打つ秀人。

「……………つて、核融合!？」

ノリツッコミで、あたふたと慌てていた。

「知らないでやってたのかよ……」

はぁ……とため息。

「まあとにかく、あのエネルギーに指向性を与えて、『砲撃魔法』
に転化させちゃえば……」

「ふむ……破壊は、可能でしょうね」

着々と準備に向けた話し合いを続ける二人の横では、

「核融合か……ははははは」

秀人が、現実逃避していた。

「ていつ!」

ゴンッ！

「ギャッ！」

秀人の頭に、峰打ちをして現実に引き戻す。

「……でもさ、ただ押し潰すだけで、核融合なんて起きる？」

プレス工場なんて、毎日ビックバンが起きてるわ……と、極めてもつともな疑問を口にした。

「勿論、ただ潰せば良い、というわけではありません。」

全面を均等に、一ミリのズレも無く……分子の逃げ場を、無くす必要があります。

……ですが、そんな真似、いかに魔導師であつても不可能です」

魔法とて、『可能』と『不可能』の境界は、しっかりと存在している。

だが、これ（核融合）は……

明らかに、その境界を越え、『不可能』の領域へ踏み込んでしまっている。

「「いやいやいや、でも実際……」」

ピツタリとハモリ、手を振る動作まで同じタイミングだった。

「とにかく！」

秀人に蹴りを入れつつ……

「実際、そいつはそれをやっちゃったのよ！」

「……不可解です」

普通の魔導師には出来ない。

ならば、秀人と、『普通の魔導師』との違いとは……

「……あー、俺の、魔力資質だと思っ」

もう、隠していても仕方ない。

そう考えて、情報を提供することにした。

「プレシアが言うには、『結合』、とか言うらしい」

「……なるほど。それならば、合点がいきます」

普通の圧縮では、分子同士が結合するほどの密度は作り出せない。だが、秀人なら……分子同士を、魔力資質により、無理矢理『結合』させることができる。

だからこそ、可能だったのだ。

「つまり、その破壊力をもって、物理的に結界を破壊してしまおう……ということですね？」

「そ。これなら、魔力は殆どいらないでしょ？」

破壊力に指向性を与えて打ち出すというのが、砲撃魔法。

その破壊力というものが、魔力だろうと、反応プラズマだろうと、変わりはない……かもしれない。

ひとまず一晩休憩し、体力魔力を回復させた後、脱出を決行することにした。

その夜……

「……リーゼ、起きてるよね」

同じ毛皮に包まる、はやてとリーゼ。

秀人が寝落ちした後、はやては切り出した。

「はい、主」

「あのさ……私たちの契約……」

「はい」

契約とは、リーゼが、はやてを鍛えるという内容のことだ。

「アレ、一文だけ追加しとくね。覚えておいて」

そして、リーゼの血色の瞳を見据え……

「『自身の生命を、可能な限り、維持すること』」

……かみ砕いて言えば、『勝手に死ぬな』。

……ということだ。

ぎゅううっ……！

リーゼの身体を、力いっぱい抱きしめる。
身長差から、しがみつくような形だ。

「主……？」

「……おまえまで、私を置いていったら許さない」

「……」

「許さないからね……！」

その肩が、震えていた。リーゼは、はやての背中に腕を回す。
「……了解しました、主」

……秀人は背を向けながら、そのやりとりを聞いていた。

（『おまえまで』……か）

確かに、それらしい雰囲気はあった。

年齢に見合わない、厭世観。

それは、かつての自分……その日暮らして、ただ余生を消費して
いた頃の自分と、似通っていて、

（お父さん、お母さん……俺は……いつになったら……）

そのまま、眠りに落ちて行った。

翌朝。

「そっちの準備はいいか？」

天気は快晴。

「いいよー」

「問題ありません」

三人は、脱出の用意を終えていた。

秀人の目の前には、直径10メートルはあるかという巨大な岩石。

それを、丸ごとエネルギーに換えてしまおうという算段である。

「んじゃ……始めるぞ！」

ギンツッ！！

岩石の表面が、秀人の魔力……空色に発光する。

「ぬぐぐ……！！！」

流石に、今回は的が大きい。

小石のように、すぐ圧縮……とはいかない。

だが、それでも……

ゴリッ……

僅かながら、圧縮が始まった。

「ふんぬつうう……！！」

ゴリッ、ゴギッ……！！

潰れていく。

押し潰されていく。

やがて、巨大だった岩石は、バレーボール大にまで圧縮され……

ゴウン、ゴウン……！！

ただ巨大なエネルギーが、岩石の周りを取り巻いていた。

「ここらが、限界だ……！」

はやて、リゼー!!」

「よっし……やるよ、リゼー!!」

「了解しました、主」

キーンッ!

二人の足元に、古代ベルカ式魔法陣が展開。

濃淡二色の闇色の魔力が、『筒』の形状を成していく。

その『筒』の内部に、エネルギーを移し替えていく。

『筒』を維持するのは、一番器用なリゼーが担当。

「充填率、24%、38%、56、64、72、82、96、97、

98、99…… 100%です、主!!」

「よっし!!」

そして……引き金を引くのは、はやての役だ。

魔剣を引き抜き……

「ロードカートリッジ!!」

……行くよ!!」

破裂寸前のエネルギーに、とどめの一撃!

「紫電……一閃!!」

! ! ! ! !

音をも突破し、破壊の一撃は、天空へ突き進む。

バギイイインツツ!!

その一撃は、『修練の門』を、一撃の下に破壊し……閉塞されていた世界に、風穴を開けた。

「……今だアツ!!」

秀人の号令の下、リーゼは秀人、はやての二人を抱え、転移魔法を発動。

「行きますッ!」

その風穴から三人は、ついにこの世界から、脱出を果たした。

ビーツ、ビーツ!

とある小型戦艇のコンソールが、けたたましく鳴った。

それに気付いた乗組員達は、すぐさまデータを参照する。

「この反応……まさか!」

すぐさま、上官へと通信を繋ぐ。

「クロノ執務官!

漂流中の囑託魔導師を……発見しました!」

第七十三話（後書き）

そろそろ年末、ということでも、話を進めて行きたいと思います。

第七十四話（前書き）

バイクを立ちゴケさせてしまったときの絶望感は異常。

第七十四話

「……………」

それは、年若い少女だった。

外見年齢は、15に届くかどうか。

青色がかった、黒というよりは藍色に近い、不思議な色合いの髪の毛。白い肌。

そして、好奇心に輝く、紫の瞳。

それだけなら、ただの美しい異国の少女、という風貌だが、服装がこれまた異様だった。

明らかに室内用のサンダルをつっかけ、ほつれたジャージを身につけ……………その上に、薄汚れた白衣を

羽織っていた。

「……………ふうん、」

道に行く誰もが、そのちぐはぐな姿に振り返る。

「……………へえ、」

少女に、頓着した様子は無い。

手元に開いた本に視線を落とし、道のド真ん中を闊歩していた。

難解な哲学書のように読み進める、その本の表題は……………

『今日から始める、30days拳法トレーニング』

……………と、あった。

読み捨てる類の、中身の無い本。

「……………ふむふむ」

それを、大まじめに読み込みながら、ぱたぱたとサンダルを鳴らしている。

「……うん。アイは、またひとつ賢くなった」

読み終えた。

「どうやらこの少女は、『アイ』という名前らしい。

それを白衣のポケットに突っ込み、また何かを取り出す。

「やっぱり、おそとは勉強になる」

。今度の本は、『2ストロークエンジン・チューニングマニュアル』

「データだけじゃ得られないものが、ダイレクトに感じられる。

『ひやくぶんはいつけんにしかず』は、真理だった」

そんな動作を繰り返しながら、歩いていく。

「あれは……？」

と、ふらふら歩いているうちに、大通りを外れていた。

目の前には、開けたグラウンドと、サッカーに励む少年達。

「……アイは、かれらが何をしているのか、分からない。だから、

アイはかれらに聞きに行く」

土手を越え、グラウンドの前までやってきた。

そして、そのままフィールドに足を踏み入れようと……

「待った待った！ちょっと待ったー！！」

傍らのベンチに座っていた、活動的な雰囲気少女が慌てて止めた。

「おねーさん、試合してるんだから入っちゃ駄目だよ！」

「……？ アイは、かれらに聞きたいことがあるだけ」

「だーから、試合中なんですってば！」

首を傾げるアイを、ずるずるベンチにまで引っ張っていく。

「阻止された……」

ベンチに座り、平坦な表情で、少女を観察し始めた。

「答えられることだったら、私が答えますから……」
かくん、と首を傾げ、第一の質問。

「あなたはだれ？」

あまりに澄んだ瞳。

その色合いを不思議に思いつつ、自己紹介をする。

「私は、八代望って言います」

「あいしー。のぞみ、覚えた」

拙いなんちゃって英語で、返事をした。

「おねーさん、外国のひと？」

「ガイコクって、なに？」

「え？ えーっと……」

虚を突かれたが、なんとか分かりやすい言葉を捻り出した。

「日本の出身じゃあ無い……ですよね？」

「いぐざくとりー。アイは……」

……と、言いかけたところで、言葉が止まった。

「やめる。はなしたら、姉様におこられる」

「お姉さんがいるんですか？」

望は、出来るならその人物に連絡を取ってみようと考えた。

もしかしたら、迷子になった観光客という可能性も……

「あのいしあたま。いつかたおす」

……無さそうだった。

「おーい、望……って、誰だその人？」

そこへ、試合を終えた少年達がそろそろやってきた。

得点板には、一点差で逃げきったことが印されていた。

「おつかれ。……なんか、外国の人みたい」

「うおっ、ガイジン!？」

にわかに騒がしくなる。

アイは健太の持つサッカーボールを、じいつ、と見つめていた。

「なんか、サッカーに興味があるんだってさ」

「へえ……」

試合は終わり、グラウンドは自由に使える状態になっていた。

「……ねーちゃん、一緒にやる？」

アイは、迷わず頷いた。

……

むくつ、と、なのはは目覚まし時計よりも先に起き出した。

『おはようございます、マスター』

「おはよ……あと二日、か」

カレンダーを見ると、日付は八月二十九日。

夏休みが終わるまで、残り僅かだった。

「くかー……」

タオルケットを蹴飛ばし、パジャマが腹までめくれ上がっている
フェイトに、それを足蹴にして眠る

ヴィータ。

ユーノとアルフは、またしても缶詰だ。

「……ランニング、行こうって」

『お付き合います』

レイジングハートを首にかけ、支度を整えて家を出た。

早朝の土手を、マイペースに走る。

『ですが、驚きました』

胸元で揺れるレイジングハートが、話し出す。

『まさか、マスターが剣術を修めるとは』

「うん、いろいろあってさ……黙っててごめんね？」

『いえ、構いません。戦闘の幅が広がるのは、歓迎すべきことです』

「うん。とりあえずの目標は、ヴィータとフェイトに、剣術オンリーで勝つこと」

元々、砲撃魔導師として力を伸ばしていたなのはと、近接型オールドラウンダーのフェイト、白兵戦の

スペシャリストであるヴィータでは、大きく差がついている。

「レイジングハート、私の魔力はどう？」

『現在、全快時の28%です』

全快時の、約三割。

砲撃も射撃も、一応は使えるまでに回復したが、射程も威力も心許ない。

今までと同じ戦い方は出来ない。

だからといって、俄か仕込みの剣術では、逆に不利になる。

それゆえに、剣の腕だけでも、彼女らと対等にならなくてはならない。

「……まあ、地道に基礎トレーニングだね」

『はい、マスター』

それにしても、と前置きし、深く深く、ため息をついた。

「秀人さん、遅いなあ……」

既に、失踪から一ヶ月が過ぎていた。

『……』

同じような思いで、沈黙するレイジングハート。

「あーあ、夏休みくらい、一緒に過ごしたかったなあ……」

……ピリリリッ

と、ポケットに突っ込んでいた携帯電話が鳴った。

待受画面には……クロノからの着信が告げられていた。

「……なんだろ？」

足を止め、土手に腰掛けつつ、携帯電話を耳に当てた。

「よっ、クロノ。どうかした？」

『高町なのは！』

見つかった！見つかったんだ！』

クロノにしては珍しく、慌てふためいた、ハイテンションな口調でまくし立てる。

「……何が？」

『秀人だよ！』

……ははっ、あの馬鹿、やっぱり無事だったんだ！』

……なのはは、電話を切ることも忘れて、自宅に向かって猛然とダッシュした。

第七十四話（後書き）

短いですが、次回は速めの投稿を、、、、

第七十五話（前書き）

今日から三日間、宿泊訓練という名の72時間ぶっ続け勤務が幕を
明ける、、、

ハルハルの更新は、これからだ！

第七十五話

結界を破壊し、脱出を果たした三人。

「転移した先は、はやての自宅……だったのだが。」

「……おい、リーゼ」

「……何でしょうか、主」

「思い入れの無い我が家があるはずの空間には……」

「私ん家、どこいった？」

「……綺麗さっぱり、何も無かった。」

「いや、正確には……かつて家だった瓦礫の山が、散乱していた。」

「……申し訳ありません。転移の余波を、抑え切れませんでした」
「限界ギリギリの転移魔法。」

「それは、三人を転移させるだけが手一杯だったらしい。」

「……ま、いつか」

「はやては、あつけらかんとした口調で言った。」

「別に、大した思い入れがある家じゃなかったし」

「両親と過ごしたわけでも無い。」

「ロクに家具も無い、ただの寝る場所。」

「それが無くなっただくらい、別に大して困らない。」

「さて、秀人……秀人？」

「と、そこで、連れの一人から反応が無い事に、ようやく気がついた。」

「……」

「振り向いた先、秀人は……倒れていた。」

「ちよ……秀人！？」

「慌てて駆け寄り、がくがくと揺さぶる。」

が、秀人は血の気の失せた顔色で、ぐったりと弛緩していた。

「……恐らく、オーバーヒートでしょう」

柱に背を預けながら、リーゼが言う。

AMF 状況下で、体力、魔力を限界まで擦り減らし……

全力の圧縮魔法で、その限界を越えてしまったのだろう、と。

「……失礼」

リーゼが、その手首を取る。

「……脈拍は、低いですが安定しています。

しばらく眠れば、回復するでしょう」

「そっか、よかった………ん？」

と、そこで、自分の言動に疑問を抱いた。

(………何で私、安心してらんだ?)

なし崩しで、一月半を共に過ごしたとはいえ、秀人は敵だったはず。

サバイバルを終えた今となっては、もう、戦力兼労働力として、生かしておく理由は無い。

強くなるのは、『誰かのため』か、『自分のため』か………そのどちらも、見極められていないが……『鉄槌』の仇討ちが出来るなら、後回しでも構わない。

だが何故か………殺意が沸いて来ない。

「………？」

リーゼ、もし、私がソイツを殺せ………って言ったら、どうする？」

混乱し、リーゼに回答を求めた。

「主がそれを望むなら。………ですが、主。あなたは、それを本当に望んでいますか？」

逆に聞き返され、秀人の顔を見る。

………が、やはり殺意も、敵意も沸いて来ない。

「………わかんない」

本当に、わけがわからなかった。

「わかんない……」

途方に暮れ、家の残骸に座り込んでしまった。

「……！」

と、リーゼが警戒も露に飛び起きる。

「……魔導師、複数です。まっすぐこちらへ向かっています」

「……！」

はやては、魔剣を取り立ち上がる。

「チツ……狙いは、私たちか」

「……？いえ、違うようです」

そして、はやてが魔剣を下ろしたのと同時間……

「秀人……！」

……見覚えのある、小柄な少年が現れた。

「……君達は？」

その目が、はやてと、リーゼを捉える。

「ごまかすことも出来たが……秀人が口を割ってしまえばおしまいだ。」

「こいつと、同じ世界にいた魔導師だけど？」

「次元漂流者……？」

どうせ嘘が見抜かれるなら、最初から、本当の事を話してしまえばいい。

「クロノ執務官。囑託魔導師を、先にアースラへ……」

「了解した」

そして、担架に載せられようとして……

途端、何故か、先ほどまで全く湧かなかった敵意が、燃え盛った。

「勝手に、どこに連れていく気だッ!!」
再び魔剣を振りかぶり、担架を持つ局員に切り掛かった。
飛びのく局員。そして、碎ける担架。
はやては、秀人を背に隠し、叫ぶ。

「近づくんじゃねえ！ ブチ殺すぞッ！」

局員達はデバイスを構え、はやての脇にはリーゼが控える。
一触即発、だった。

クロノは、局員たちを手で制し、デバイスを下ろさせる。

「……誤解しないで貰いたい。僕達は、彼を保護しに来たんだ」

「……」

はやては、無言で敵意を発し続ける。

クロノは、ふっと苦笑いを浮かべる。

「……そいつ、また何か無茶をしたんだろう？」

その声には、偽りではない親しみが込められていた。

「阿呆みたいに頑丈な奴だが、さすがに野ざらしにしておくのは気が引ける。」

だから、連れて戻りたいんだ」

「……」

僅かに、警戒が緩む。

「どうしても信用してもらえないなら、君達も来てくれて構わない」

「……チツ、分かったよ」

渋々と、魔剣を鞘に収めた。

「さて……君達の名前を、教えてもらえないだろうか？」

ふて腐れた様子で、それに答える。

「……八神はやて」

「使い魔の、リーゼです」

クロノが、訝しげにまじまじとリーゼの顔を眺める。

「リーゼ……………」

「何か？」

それに、平然とした様子で答える。

「いや、失礼した。知人の名前と、似ていたもので」

「お気になさらず。それでは、ご案内頂きますでしょうか」

そして、秀人を背負う。

「ああ、近くに、転送ポートを用意してある。そこまで来てくれ」

「主、歩けますか？」

「つたりまえでしょ」

埃を払い、立ち上がり……………クロノの後を、歩いていった。

……………

「うあー……………」

秀人は、アースラの医務室で目を覚ました。

「……………ああ、よく寝た」

隣のベッドに寝そべったはやてが、同じタイミングで起き出してきた。

「「ふああ……………」」

欠伸をするタイミングまで、同じである。

「……………帰ってきたー、って気がするよ」

しよっちゅう医務室に放り込まれてきたのだから、当然といえば当然だ。

「ハッ……………私にとっちゃ、見知らぬ天井だったの……………」

その膝を枕にして、猫の本性に立ち返ったリーゼが、深い眠りに

落ちていた。

いくら傷が治ったとはいえ、やはり消耗が激しかったのだろう。

「…………ご苦労様」

その毛並みを、手櫛で整えてやる。

自覚があるのか無いのかは不明だが、その顔は、秀人が見たことが無い程に優しく…………

慈愛に満ちていた。

「今日、何月何日だ…………？」

「さあ…………でも、空気は生温かったから、まだ夏なんじゃない？」

「…………」

「なに、何か用でもあるの？」

「いや、なのは達、どうしてるかな…………って」

なのは。それは、秀人が度々口にする名前で…………その名前を口に
する際、

秀人は決まって、優しい笑みを浮かべていた。

「…………チツ」

ひゅんっ。

はやてが、ベッドサイドに置かれたコップを、秀人に投げる。

カコンッ！

「いって！…………何すんだよ！？」

当然、抗議する秀人。

「何でもねーよバーカバーカ！」

が、帰ってくるのは理不尽な罵倒のみ。

これには、さすがの秀人も怒った。

「バカとはなんだこの単細胞！」

ひゅんっ！

コップを投げ返す。

「うあっ…………！あぶねーだろバカ！」

ひゅんっ！

投げ返す。

「単細胞！」

投げ返す。

「バーカ！」

投げ返す。 投げ返す。 投げ返す。

……唐突に、アホくさくなった。

「……はぁ」

こんなことで、無駄に体力を消耗するのは、あまりに馬鹿馬鹿し

く……

「……休もうぜ。折角、ベッドで寝られるんだ」

「チツ……」

そして、もそもそと潜り込む。

無言になる二人。

どたどたどた……

と、廊下を走る音が近づいてきて……

「秀人さんっ！」「ひでとー！」「秀人っ！」「秀人！」

なのはが先陣を切り、フェイト、ユーノ、アルフが、

医務室に駆け込んできた。

「心配したんだよ心配したんだよ本当に心配したんだよ！？」「ええもう本当ですよこの馬鹿いつそ鎖でマスターと縛り付けてやりましょうかこの馬鹿この大馬鹿！」「かえってくるのがおそいんだよこのー！」「ああもう何と言うかこのトラブルメーカーめどこほっつき歩いてた！！」「お前がいらないせいでフェイトがぐずって大変だったんだぞ！」

……どうやらこの二人、相性が最悪らしい。

「おい、やめろって……なのは」

「ん？」

はやては、首を傾げた。

(こいつ、今なんつった?)

なのは。

それは、秀人が度々口にしていて……大事にしていることが、明らかにわかる 響きで……それが見た目、自分と大して変わらない年の、女の子……?

「おい」

「あ?何だよ、はやて」

「なのは……、って、こいつ?」

「? ……そうだけど」

どうどう、となのはを抑えながら話す

「秀人さん……なんか、そいつと仲良いんだね……?」

……嫉妬丸出しの、そいつ呼ばわりである。

「そりゃそうよ……だって、」

しかし、はやては、ニィ……と、凄まじく意地の悪い顔で笑い……

「一ヶ月、ずうっ……、と、二人で暮らしてたんだから」

……

……

なのは達が凍結し……秀人が青ざめながら脱走を図り……いち早く我に帰ったレイジングハートに足を払われ……

ずでんっ!

床に、勢いよくダイブした。

……ゆっくりと、時間が動き出す。

「レイジングハート……………」
ずぶずぶと沈み込むような声で、なのはが呟く。
『はい…………マスター』
神妙に答える、その愛機。
ふいつ、と上がるその顔は…………

「……………やっちやえ」

超、笑顔だった。

…………

「いひひひひひっ！！ひゃーっはっはっはっはっ！！」
折檻を受ける秀人を見ながら、はやてが腹を抱えて爆笑していた。

「……………お楽しみのところ、申し訳ないが」
クロノがやってきた。

「秀人、艦長がお呼びだ。歩けるな？」

「ああ。」

……………なんか頭ズキズキすっけど」

『さっさと治しなさい』

「……………はい」

そして、なのは、はやて達を残し、医務室を出た。
二人並んで、アースラの廊下を歩く。

「……………ん？」

肩を並べて歩いていたら、秀人が何かに気付いた。

「クロノお前、背伸びた？」

「…………なに？」
思わず振り返る。

確かに…………以前は秀人の肩の位置にあった頭が、少し上になっていた。

「そうか？」

「お前もまだ14だし…………まだまだ伸びるぞ」

「…………かもな」

ふと、秀人を見て…………

「お前はどうなんだ？」

何気ない会話。

だが、秀人の顔が、僅かに曇った。

「…………さあ、どうだろうな」

「…………」

恐らく、自身の体のことだろう。

ぱんっ。

クロノが、秀人の肩を叩き、言った。

「ふん、いつか追い抜いてやる。

…………だから、そのままにいる」

「…………ああ」

少し、気が軽くなった。

話しているうちに、艦長室までやってきた。

「艦長、連れて来ました」

『入りなさい』

ドアが開き…………およそ一ヶ月ぶりの再会となった。

「…………」

厳しい顔で、秀人を出迎えるリンディ。

「あー……ども、お久しぶりッス、リンディさん」

「……秀人くん、」

すたすたと、秀人の眼前までやって来て……

「申し訳ありませんでしたッ！」

深々と、頭を下げた。

「え、ちょ……」

たじろぐ秀人に構わず、謝罪を続ける。

「こちらの不手際で、極高危険度の世界へ誤転送し、発見まで一月もの時間を要してしまったこと、アースラ艦長として、いち管理局員として……真に、申し訳」

「あー、ストップストップ！」

秀人が、それを遮る。

「リンディさん、気にしすぎだって。そりゃあ、最初は死ぬかと思っただけど……自分の弱点とか、苦手分野をじっくり鍛えられたし……仲間もいたし」

仲間、とは、はやてのことだろう。

「なんつーか、不謹慎かもしれないけど……楽しかったですよ」

「……」

面を上げるリンディ。

「……ですが、過失は過失です。私の力の及ぶ範囲で、謝罪をさせて下さい」

「え……だから、謝罪とか、そういうのいいですから！」

「いえっ！何か、謝罪を……！」

……押し問答とはこのことである。

「ふう……艦長、秀人。いいですか」

クロノが、そこに割って入った。

「秀人には、休暇を取らせるのはいかがでしょうか。期間は、そうですね…… 本日、現地の日付で、八月三十日から、明日までの二日間は」

それは、狙いましたかのように、なのはの夏休みの最終日だった。

「艦長のお力でしたら、本日から休暇を与えるのもたやすい筈です。……いかがでしょうか？」

「……十分可能です。秀人さん、いかがですか？」

「ええと……じゃあ、それで」

問題解決。

次の瞬間……

「「やったあああああ!!」」

扉の向こうから、なのは、フェイトを先頭に、一家の面々が雪崩込んできた。

「秀人さん、早く行こうっ?」

秀人の手を引く。

「……よし!」

秀人は、なのは、フェイトの手を逆に引き……駆け出した。

「そうと決まれば……遊ぶぞー!!」

二日間の、夏休みが始まった。

第七十五話（後書き）

宿から携帯電話で更新できればいいんですが、、

第七十六話（前書き）

ぼんぼり祭り、東京からバイクで行ってきたー！

帰り道、東部湯の丸SAでZZR250がエンジンオイル噴出して
エンジン終了（泣）

第七十六話

秀人が退室して行って、少しして。

「……ふん」

「お邪魔します」

はやてとリーゼの二人が、艦長室に呼び出されていた。

「お二人とも、体調の方はいかががかしら？」

「こやかに話しかけるリンディ。」

それに対して……

「シャワーを浴びる間もなく呼び付けられて、良いも悪いも無いわよクソツタレが……」

不機嫌丸出しで、がさがさの髪の毛をがりがり掻く。

「主、言葉遣いが汚いですよ」

それを嗜めるリーゼだったが、

「ふんっ」

ぷいっ、とそっぽを向かれてしまっていた。

「では、手短に済ませます。八神はやてさん、リーゼさん」

だが、そこはやはり軍人か。動じる事無く、話しを進める。

「まず、貴女達についてです。あなたは、どのような経緯で、魔法の技術を入手したのですか？」

魔法とは言っても、それが現地の文化に基づいた……例えば、神道、密教、仏門、などであれば、特に追及する理由はない。

それはあくまで、現地の文化なのだから。

ならば、『時空管理局』がそうする理由は……

「私たちの世界の魔法を、何故、現地人のあなたたちが保有しているのでしょうか？」

自身らの技術の流出が、認められた場合だ。

「お答え頂けますか？」

「……………」

はやては一瞬だけ、『ロコモるフリ』をして……………事前にリーゼと打ち合わせ済みの事を、話しはじめた。

「……………私の家の前に、変な猫が転がってたんだ」

あくまで、平静に。

「……………」

リンディの放つ、無言の圧力を受け流す。

「んで、手当てしてやったら……………何でかは知らないけど、この姿になつてさあ」

「……………成る程。では、リーゼさん」

「はい」

はやての脇に控えたリーゼに、話が振られる。

「なぜ、彼女に魔法を供与したのですか？ ………………謝礼、ということでしょうか？」

もしくは、何らかの意図が？」

「いえ」

ふるふる、と頭を振る。

「……………覚えていないのです。

何故、私が倒れていたのか……………」

この『リーゼ』という名も、主はやてにより授かったものですから

嘘を嘘と見抜かれないコツは、幾らかの真実を織り交ぜること、らしい。

「ただ、『魔導を伝えよ』と、頭の片隅に残っていたので……………」

はやては、それを特に否定せず欠伸していた。

「……そうですか」

リンディも、少し勘繰りながらも、一応は納得したようだ。が、きゅつと眉を上げ、厳しい顔を作った。

「ですが、いくらなんでもやり過ぎです。こんな小さな子を、あんな危険区域に放置するなど……」

「おい、オバさん」

そこで、はやてが不躰に話を遮った。

「憶測でベチャクチャ喋るんじゃねえよ。」

魔法の修業も、全部私がリーゼに命じたんだ」

きん……と、脅すように魔剣の鯉口を切る。

「死んでしまったら、どうするのですか？」

リンディの案ずるような言葉に、はやては鼻を鳴らした。

「別に？」

死んだなら、私は所詮、その程度つてことですよ」

本気、とリンディは判断した。

「つーわけで、私の魔法の出所は不明。」

……もう戻っていい？眠いんだけど」

「……ええ、ありがとうございます」

まだ、どこか腑に落ちない様子のリンディを残し、艦長室を後にした。

「行くよ、リーゼ」

リーゼの手を握り、すたすたと通路を歩く。

「はい、主……ですが、どこへ……？」

「あー……」

……家が吹き飛んだことを、今頃思い出した。

「どうすっかなあ……適当に、そのへんでアパートでも借りるか」
借りる……の辺りに、まだ人間味が感じられる。

ばたばたと、向こうの通路を走り抜けていく集団があった。

「うおりゃああああ！」

「いやっほー！」

「あわわわわ……！」

疲れなど何のその、二人の少女を肩に乗せ、猛烈な健脚で走る秀人。

そして、その後を追う、中性的な少年と、野性的な女性。
彼等は秀人を中心にするように、楽しげに、笑顔だった。

「チツ……」

面白くない。

……一ヶ月、苦楽を共にしてきて、親近感を抱かない方がおかしい。

だというのに、秀人には待っていてくれる仲間がいた。

……言ってしまうえば、子供じみた独占欲だ。

「……ちえっ」

足を止め、恨めしげな目で、秀人を見送った。

リーゼが、はやての手を引く。

「主、空腹ではありませんか？」

「……うん、お腹すいた」

本人は気づいていないかもしれないが、消沈しているようだ。
さっきまでとは逆に、リーゼに手を引かれ、俯きながら歩く。

「……うどんとか、あっさりしたやつがいい」

「はい、主」

「……甘い油揚げ、入れていい？」

「一枚までなら」

「……健康管理には、厳しいようだ。」

「おい、はやて！」

「……え？」

振り向いた先、秀人が、はやての名を呼びながら駆け寄ってきた。

「え……なんで、」

行った筈では？

混乱するはやてに、秀人が言う。

「いや、あのさ……俺達、今から遊びに行くんだけど……」

「一緒に来ないか？」

「……えっと」

はやては、今度は本気で思い悩んで……

「……リーゼ、どうしよう？」

結局、リーゼに聞いた。

「主が、望まれるままに」

「……」

なのはは、少し警戒気味に。

「へー……あいつボクよりちっこいのに、つよいんだ」

フェイトは、興味深そうにじろじろと見ていた。

ユーノとアルフも、特に拒否しない。

つまりあとは、はやての返事次第なのだが……

「……ううう」

物怖じしていた。

戦闘や修業には積極的だが、人付き合いには消極的だったらしい。そして……

「……リーゼと、一緒にいいなら」

一応の、オーケーを出した。

「もちろん。リーゼもいいよな？」

「それを主が望むなら」

二人増えて、七人の大所帯となった一行は、がやがやと（主にフエイトが）転送ポートから降り立って行った。

……

ところ変わって、地球支部。

その奥まった一角。

『重要参考人留置室』に、クロノは来ていた。

その部屋の中は、ごくオーソドックスな病室だ。

そのベッドの住人に、クロノが話しかける。

「カツラギ・テツヤ。気分はどうだ？」

カツラギと呼ばれた、がっちりした体型の壮年の男は、首を僅かに動かした。

「……悪くは無い。相変わらず、身体は動かないがな」

この男はかつて、秀人の蒼炎に焼かれた……『雑魚騎士』の一人だ。

一度は、『王』の襲撃を受け、闇の書に取り込まれていたが、こ

うして、自我を取り戻していた。

「申し訳ないが、始めさせてもらう」

他にも生存者がいた中、何故、このカツラギだけが幾度も聴取を受けているのかと言うと……

「まずは、その少女の身体的特徴を……」
そう。

『王』の素顔と、変身後の姿、その両方を、目撃していたからだ。

クロノの聴取により、似顔絵が作成されていく。

そして、一枚の人物イラストが出来上がった瞬間……

「これは……！」

クロノは、ボタン！とドアをブチ開け、秀人の元に飛び出して行った。

「ダメだ、秀人……！お前の隣にいる、そいつは！」

今なら、間に合う。

全力で駆けるクロノ。

だが……

「……どこへ行く気だ？」

……その目の前に、一人の男が立ち塞がった。

「なっ……！？」

その男は、いきなり現れた。

この、内部への直接転送が不可能な、管理局内に。

何かの制服のような、無機質な洋服。

そして……

顔を覆う、珍妙なデザインの覆面。

「貴様、何者だ……！？」

デバイスを構えるクロノ。だが……

「遅い」

ガシィッ！

「ぐあっ……！？」

……いくら焦っていたとはいえ、執務官。

それを、一瞬で間合いを詰め、頭部を鷲掴みにしていた。

「この距離なら、殴った方が早い。鉄則だぞ、クロノ」

「なに……！？」

名前を呼ばれ、驚くクロノ。

「……！ 君は！」

ぴん、と、ある人物を思い出す。

近距離戦闘。

通信妨害

変身偽装。

そして

「お前が知るには、まだ早い」

催眠暗示。

「う……ぐあああああつ！？」

頭の中を、直接手で掻き回されるような違和感。

頭の中に組み上がっていったパズルが、ばらばらに分解されていく。

「なぜ、だ……！」

段々と朦朧としていく意識の中、クロノは、仮面の男……『追跡者』の真の名を、呼んだ。

「……何故だ！アリア！ロツテ！」

ぶつん……と、クロノの意識が、闇に沈んだ。

第七十七話(前書き)

ZRX1100が気になって仕方がない、
、
、
9R売っばらって買
おうかな

「……なに？」

「本当に、これで良かったのかな？」

それは、疑問。

「……お父様の、ご命令よ」

対して、ロツテはそう返した。

だが、ロツテもまた俯き、顔を逸らしている。

「……本当に、これで……」

アリアは、ポケットから数枚の紙切れを取り出す。

それは、乱暴に破り取ったかのように、端が荒れている……本の、ページ。

そこには、現地の言語と、一人の少女の顔写真が写っていた。

「こんな、小さな子を……どうして」

「アリア」

ロツテが、その先を窘める。

「……わかってる」

アリアは、それをポケットに仕舞い直す。

「……わかっているでしょう？」

お父様の、御命令よ。きっと何か、お考えがあるのよ

「……うん」

二人は、そこから去って行った。

「……？」

数分後、クロノは目を覚ました。

「……仮眠室？」

おかしいな……さっきまで

クロノの記憶は、つい先程……重要参考人への聴取を終えたところ、ぱったりと途切れていた。

「……そうだ」

参考人からの聴取の後……モニタージュを作成して、そして……

「……結局、まともな成果にはならなかったんだ」
「手がかりにもならない……ただの似顔絵が残って、疲れを取るために、仮眠室に『自分の足で』やっ

てきた。クロノの頭の中では、『そういうこと』になっていた。

「……………」

重い頭を持ち上げ、身体を起こす。

現在の時刻から、今後のスケジュールを確認。

「あと少して、秀人の面談か」

幸いなことに、空き時間の範囲内で眠っていたらしい。

さて、秀人は今、どこで何をしているのか……

……………

からん、とベルを鳴らし、秀人が翠屋に入った。

「……………秀人くん？」

ウエイトレスの格好をした美由紀が、ぼけーっ……とした顔で、それを出迎えた。

「よう美由紀、久しぶり」

それに対する秀人の態度は、実に軽かった。

「おおおおお、お母さん！お母さん！」

なのはは、まだ高町家には連絡していなかったらしい。

あわてふためいて、厨房へ呼び掛ける。

その様子に、周囲の客がぎょっとして振り返った。

「もう、なあと美由紀。お客様の前、です……よ……？」

美由紀と同じく、固まる桃子。

「えっと……なのは、は？」

「家で出かける準備してるよ。待ってようと思ったんだけど、『顔

見せてきたら？』って……」

「ふ……ふうん」

「何だよ、変な顔して」

「え？……いやあ」

二人の視線は、秀人……ではなく。

「……………」
その背後に、付かず離れず、一定の距離をオプションのように寄り添う……はやてに注がれていた。

「……………」その子、誰？」「……………」

当然の疑問を口にしたその瞬間……

「……………」
ギロツ……………」と、殺気立った鋭い目で、睨みつけられた。

「あ、あれ、怒らせちゃった……………」？」「……………」

無言で殺気ビームを照射するはやてに、ドン引きして後ずさる美由紀。

「……………」リーゼ」

ぼそつ……………」と、聞き取りづらく何かを言う。

「はい、主。なんでしようか」

と、今まで、興味深くショーケースを覗き込んでいた帽子の女性が、とことこやってきた。

「……………」帰る」

今度は、リーゼの背後に隠れるはやて。

「主……………」

やれやれ、といった様子で、ため息をつく。

が、やはりそこは、主人の意向を優先するのか、ぺこっと頭を下

げ、店のドアノブに手を掛けた。

「待って」

それを、桃子が制止する。

「……………何だよ」

苛立ちと共に、吐き捨てるはやて。

「折角来たんだから、ケーキの一つでもいかが？」

「そうだな。折角だ」

それに、秀人が乗った。

「どーせお前、コンビニのケーキくらいしか食ったこと無いだろ？」
凶星だった。

両親が健在だった頃は、誕生日にはちゃんとしたケーキを食べていたのだが……………

「……………るっせえ！」

Uターンし、秀人のところまで戻ってきて……………げしっ、と足蹴にした。

「いってえ！」

「三食コンビニ弁当で悪かったな畜生！」

「悪かった悪かった……………ほら、座ろっせ」

ぎゃーぎゃー騒いでいるのも迷惑だと、秀人がはやての手を引き、窓際の席に座った。

「モンブランとサバランとレアチーズケーキ。それと、アイスレモンティーを人数分」

「はい、かしこまりました」

下がっていく美由紀。

「……………チツ」

頬杖を付き、テラス席に視線を流すはやて。

不機嫌……………は、最早デフォルトだ。

「お待たせしました」

そこに、美由紀がケーキを運んできた。

「んー……………おお」

何の気無しに目を向け……………一瞬、輝いた。

(結構……………いや、かなり、)

「美味そうだろ?」

秀人はそれを見透かし、けらけらと笑った。

「主、どれがよろしいですか?」

「全、」「全部、というのは無しですよ」

「うぐっ……………今日くらい、」

「カロリーオーバーです。血糖値が、やや高めでしたからね」

リーゼは、その点で甘やかすことはしないようだ。

「じゃ、モンブラン……………」

「どうぞ」

目の前に出されたモンブランを一口、フォークで切り出し、口に運ぶ。

「!」

見開かれる目。

やはり、ランキング一位は伊達ではない。

「あはは……………美味いか?」

自分はサバランを食べながら聞く、

「ええ。たまになら、甘味も悪くないですね」

上品にレアチーズケーキを食べながら、リーゼが返答する。

今風の服装とのギャップが、非常に激しい。

「……………」

モンブランを食べながらも、秀人とリーゼが食べるケーキが、気になって仕方ないらしい。

「主、どうぞ」

リーゼが、はやての口元に切り分けたレアチーズケーキを持って

いく。

『いいの?』と目で聞くはやてに、頷くリーゼ。

喜色を滲ませ、リーゼのレアチーズケーキを口にした。

「いかがですか、主」

「……………おいしい」

実に楽しそうである。

……………この姿だけを見て、巷を騒がせる連続失踪事件の犯人だとは、誰も思うまい。

「……………」

「……………?」

そこで、リーゼが秀人に、謎の目配せをする。

ケーキを見て……………秀人のフォークを、ちらちらと……………

「……………マジかよ」

意図を察した秀人が、思わず呟いた。

……………ここからは、アイコンタクトの内容である。

無理無理、絶対無理だつて！怒られる！

いえ、問題ありません。主は単純な方ですから、ケーキさえ食べられれば、過程は気にしません。

お前、結構酷いな……………

さあ、主に『あーん』と。さあ。さあ。

いや、無理！恥ずかしいし……………

我が主には、それをする価値が無いと？

愚弄するつもりですかそうですね……………許せませんね。

なんでそうなる!?

結局、リーゼの威圧に負け……

「ああもう、わかったよ……」

サバランを一口、フォークに乗せ……

「はやて」

「あぁん……?」

極めて態度悪く、秀人に振り返るはやてに……

「はい、あーん」

半ばヤケが入った満面の笑みで、差し出した。

シャグツ!!

……明らかにおかしな効果音と共に、フォークにかじりついた。

「……」

秀人は、先端が消失し、持ち手の部分だけになったフォークを引き戻し……半笑いしていた。

「……鉄分たっぷりだな」

はやては、もごもごと口を動かし……

「……ペッ!!」

口元から、フォークの三股の先端が射出した。

スコーン!!

……三股の先端が、秀人の眉間に、クリティカルヒットした。

「……ぎゃあああああああああああああああああああああああ
ああああっっ！！」

もんどりうつって椅子から転げ落ちる秀人。

「おおお、お客様ー！？」

「何じゃこりゃああああー！！」

「抜くから大人しくして！……そいやっ！」

「うおおお抜けたあ！……抜けたけど血がああああ！？俺のト
マトジューズがああああ！？」

騒然となる店内。

一方、はやてはと言うと、秀人のサバランの残りをちゃっかりと
胃に納めて、

「……ご馳走様」

とびっきりの笑顔で、そう締めたのだった。

第七十七話（後書き）

次回こそ、話を進展させます。

第七十八話（前書き）

バイク、まだ直ってないのにフルエキ買った、直さねば！

第七十八話

「全く、お前は……！」

秀人は、額を摩りながら、家路を歩く。

「あつはつは……あー、面白かった！」

対してはやては、ケラケラ笑いながら、その隣を歩いていった。

「んで……どこ行くの？」

なのは達の準備が出来次第、遊びに行くという話だった。

「んー……とりあえず、なのはが行きたい所に行こうかなって」

またか。

はやては内心、辟易としながら、秀人をじつとりと眺める。

「なのは、なのはって……あなた、主体性無さ過ぎじゃね？」

……かくいうはやても、二言目にはリーゼに意見を求めるのだが、
棚に上げていた。

「え……そうか？」

驚き、聞き返す。

はあ……とため息をつく。

「もし、あなたの愛しなのはちゃんが、『秀人さんの行きたい所
に……』」

とか考えてたらどーするワケ？」

「うっ……」

その可能性も、大いに有り得る。

そして秀人は、ぼそぼそと、バツが悪そうに呟いた。

「……どうやって遊んだら良いのか、分からないんだよ」

「……………は？」

今度は、はやてが聞き返す番だった。

「……………」

それ以上は語らず、無言になってしまった。

秀人の休日といえは、なのはと本を読んだり、フェイトと仮面ライダーのDVDを見たり、

グイータの買い出しを手伝ったり、模擬戦で身体を動かしたり……
良く言えばインドア、悪く言えば出無精な過ごし方しか、していなかった。

「……………夏休みだから、どつか遠出すればいいんだろうけど………大人
数でしたことつて無いし」

なのはを温泉に連れていったことはあったが……

「仕事以外で集団行動したこと無いんだよ、俺………」

「寂しい奴………」

はやてが、哀れむような上から目線で、秀人の心をえぐった。

「うっ……………うるさいわ!!」

ムキになって言い返す。

どうにも秀人は、はやてが相手だと子供っぽい部分が垣間見えてしま
う。

「お前だって似たようなもん……………いや、俺よりひどいわ！」

このヒッキー！」

「はあうっ……………!？」

痛いところを突かれた。

はやてははやてで、一日中を家で無目的に過ごし、魔法に覚醒し
た後は、

ひたすら訓練に明け暮れていた。

更に言えば、極度のコミュニケーション障害。

自宅とコンビニ（たまに図書館）の往復が限度……リーゼを従えてからは、

その外出さえ億劫になっていた、根っからのヒッキーである。

「うぐぐ……」

唇を噛み締め、悔しそうに黙り込むはやてに、秀人が勝ち誇って言った。

「ハッ、幼卒ニートめ！」

幼（稚園）卒。

小卒を下回る、凄まじいレッテルである。

「ンだとゴルア！ あんただって年齢的に中卒だろ！」

「高卒資格は持つとるわい！」

目を逸らし、付け加えた。

「……通ったことねーけど」

「駄目じゃなかよ！ 通えよ！」

「いや、それお前が言うなし……」

「わ、私は……！」

そこで、秀人は真顔になった。

「通っておけよ。」

『世の中には、通いたくても通えない子供だっている……みたいな偽善じゃなくてさ。』

無駄に思えるような時間も、後になれば、貴重な思い出になるんだから」

……不利な流れになってきた。このままでは、なし崩しに復学させられてしまう。

やだやだやだ学校とか超やだ面倒臭い……と、拒否感全開だった。

「リーゼ、学校なんか通わなくて良いでしょ？」

やはり、リーゼに助けを求めた。

「そんな時間があるなら、剣か、魔法か、格闘の訓練を……」

「私は、秀人に賛成です」

「……え？」

意外にも、リーゼが裏切った。

「主は以前、美香に言っていましたね？」

『さつさと治して、学校に行つて美穂さんを安心させてやれ』……
と」

「言ったケド……」

「言った本人が不登校では、示しがつかないでしょう」

「……そうかも、しれないけど……」

「師として、姉貴分として、もっと自覚を持って……」

リーゼが、説教モードに入った。

「けど……」

「「けど？」」

秀人とリーゼが、ぴつたりと八モった。

「……………面倒臭い」

……………この期に及んで、この有様である。

「「ふうう~~~~」……………」

二人に、盛大なため息をつかれた。

呆れた目線も、もれなくセットで。

「ああもう！分かったわよ！」

げしっ！

「いてっ！何で俺!？」

秀人を蹴飛ばし……腕を組み踏ん返り返った。

「復学でも何でもしてやるわよ！」

……言い切った。

「あ、来た来た。秀人さーん！」

と、ようやく秀人のアパートに到着した。

なのは、フェイト、アルフ、ユーノ。

いつもの面子が、揃っていた。

……グイータは、マリエルに呼び出されて不在である。

運が良いのか、悪いのか……

「お待ちませ。……んで、どこ行きたい？」

「うん、実は……」

すうっ……

見慣れた黒塗りの車が、相変わらず不気味なまでに静かに、アパートの前に横付けした。

「折角だから、アリサとすずかと望にも、声掛けてみたんだ」

「あーよかった」

「え？」

話の流れが読めず、キョトンとする。

「いや、こつちの話」

がちやっ、とドアを開け、馴染みの四人が降り立った。

「なのは、久しぶりね！」

「秀人さん、こんにちは」

大体いつも一緒の、アリサとすずか。

「いやー、ガイシャって乗り心地良いんだね。驚いちゃった」

なのはにとって……実は、初のクラスメイトの友達、望。

そして……

「こ……こんちわ」

なのはには微妙に気まずい気持ちを抱く……健太だった。

「あ、葉山君も来たんだ」

なのはは知ってか知らずか、普通に挨拶をした。

「うん、部屋でダラダラしてたから引きずってきた」

「……迷惑だったか？」

「んーん、全然」

恐る恐る聞く健太に、軽く笑って否定した。

「……」

フェイトはさりげなく一歩下がり、初対面のアリサ達から距離を置いて……さらにその影で、コソコソとその場から離れようとするはやての姿があった。

「どこへ行くおつもりですか、主？」

「わっ、バカ、しーっ！」

リーゼに呼び止められ、その口を慌てて閉ざす。

が、バツチリと見つかってしまったらしく……

がしっ

「今更、帰るなんて言わないよな？」

笑顔の秀人に、捕獲されてしまった

「ナイスだリーゼ」

ぐっ、とサムズアップする秀人。

「は、はなせええええ！！知らない人には、着いて行ったらダメなんだからー！！」

じたばた往生際悪く暴れるが、素の力が秀人に及ぶ筈も無く、そ

の場に縫い止められていた。

「安心しろ。俺の知り合い、つまり『知り合いの知り合い』だからセーフだ」

「思いつきりアウトじゃんかよ！

はなせえええ！私は帰る！帰ってダラダラのんびり時間を潰すんだからああああ！」

……その自宅が、瓦礫の山になっていることも忘れてしまっているようだ。

「主、正直言つて、あなたは社交性に欠けます。いずれ人の上に立つ者として……」

「いやー！！知らない奴とは、関わらないって決めてるんだからああー！！」

ふう……と、本日二度目のため息をつく。

「押し込んでしまいなさい」

「了解」「ノエル」「どうぞこちらへ。ファリン、お相手して差し上げなさい」「はい、おねーさま」

すずかの指示でメイドがドアを開け、秀人がそこに詰め込み、車内にいたもう一人のメイドが、はやてを引きずり込んだ。

「いやああ

ボタンツ、ガチャツ。

ドアを、しっかりと閉めた。

「……よし、行くわよ」

アリサの指示の元、素早く乗車していった。

「なあ、望……」

「何、健太？」

「……この人たち、なんか変じゃね？」

「……かも」

どこかおかしい……と、頭を捻る二人の肩を、この中では数少ない常識人であるユーノが

ポンポン、と叩いた。

「……君達も、いずれ馴れるさ」

フツ……と、半笑いを浮かべる……さらにその肩を、涙目のアルフがそつと支えていた。

秀人、フェイト、リーゼを残し、全員が車内に収まった。

「あ……そうだ」

アリサが窓を開け、ポン、と秀人に何かを手渡した。

「ちよつとばかり、人数オーバーなのよ。」

乗れるのはあと一人だから秀人、

「ん？」

「どつちか連れて、バイクで着いてきて」

……渡されたのは、ポータブルナビと、その台座だった。

「……オツケー。そんな気してた」

幸いにも、バイクは手元にある。残る問題は、リーゼとフェイト、どちらが乗るか、なのだが……

「はいはい！ボクがのるよ！」

当然、キラキラと目を輝かせて立候補した。

秀人の運転するバイクに乗れて、緊張からも解放される、一石二鳥のチャンスだった。

一方リーゼは、顎に手を当てて考え込む。

「ふむ、妥当でしょう……ですが主には、他者との交流を持って頂きたいところ。」

私が車内においては、主のためになりません」

「……でも、バイクは二人乗りだぞ。どうするつもりだ？」

「ああ、心配無用です」

ざわっ……と、リーゼの身体から、魔力の気配が立ち上る。

「ちょ……！」

……少なくとも、アリサ、すずか、二人のメイド、健太の五人は、魔法には無関係な一般人だ。

もしもバレたら、相当面倒なこと……

具体的には、聖物執務官のお説教タイムが待ち受けていることは、想像に難くない。

「健太、向こうにフォーゼドライバーが……！」

「何イツ!？」

……単純な健太の注意を望が逸らし、なのはが素早くパワーウィンドウを閉じた。

「出してください」

「え、でも、まだ一人……」

「大丈夫だから、早く」

「……わかつたわ」

バレる寸前で、車はするすると発進した。

……同時、リーゼは変身を終えていた。

「……ああ、もしや、彼らは魔法と無関係で？」

「……後になつて考えるなよ」

胃が縮み上がるほど焦った秀人。

「失礼、勘違いしていました」

クールに見えて、意外とボケていた。

「わー……キミ、つかいまだだったんだ？」

二人が見下ろすそこには……艶やかな毛並みの、黒猫が鎮座して

いた。

「はい。主はやての使い魔で、名をリーゼと言います。お見知り置
きを」

「うん、よろしくー！」

……相手が猫だとわかった途端、楽に話しはじめた。

「……お前の人見知りも、なんとかしないとなあ」

「ん、なんかいった？」

「いや、後で話すよ。メットとキー持ってくる」

秀人は家に入り、自分のと、いつもはなのはが使ってるヘルメッ
ト、バイクの鍵。

そして、リュックサックを手に裏手へ回った。

「……」

その合間に、かちかちとメールを打つ。

「……ご検討を願います、っと。これでよし」

「まだー？」

表の方から、フェイトが呼んだ。

「はいはい、今行くよ」

秀人は、携帯電話をポケットに仕舞った。

フェイトのヘルメットを調整してやり、リュックサックを背負わ
せる。

このリュックサックに、リーゼを入れていくようだ。

「八部屋あるというのに、秀人の部屋以外、表札が出ているのは三
部屋だけ、ですね」

リーゼが、アパートを観察しながら言った。

「ああ、それ一つは大家さん。」

家賃収入で遊んで暮らせるはずなのに、何故かこのアパートに住ん
でるんだよ」

「……残り二つは？」

「職業不明の信吉じいさんと、美人なのに貞子ヘアの朧ねーちゃん」

「他は空き部屋、と？」

「らしいよ？」

「……」

リーゼは、猫の姿のまま考えている。

「ほら、行くぞ」

「あ……」

リーゼをリュックサックに入れ、自身もバイクに跨がる。

キュルツ……バオツ！！

セル一発だった。

「……何か調子良いな？」

一月放置してた割には、バッテリーもガソリンも満タんだ。

「あれ？距離が伸びてる……」

「あー、それね……」

フェイトが、思い出して教えてくれた。

「アルフがのりまわしてたよ」

「……そうか」

無免許運転……と、突っ込みたい気持ちをぐっと飲み込み、ナビの示す目的地へ、バイクを発進させた。

第七十八話（後書き）

アクセルワールドをサンライズがアニメ化、、、だと、、、？
リボルテックでシルバー・クロウかクロム・ディザスターを出して
くれ。

第七十九話（前書き）

遅れた上に話が進んで無いo r t

次回で、少しは進展させます。

第七十九話

「……………」
恐ろしく静かな高級車の車内、はやては、緊張でガチガチに固まっていた。

「……………」
固まるだけならまだしも、やたらと険しい……
眉根を寄せ犬歯を覗かせ、ぎりつと足元を睨みつける表情を見せていた。

「……………」
微妙に緊迫する車内。
当の本人は、ただ固まっているだけなのだが。

「ねえ、はやてちゃん」

いきなり唐突に、すずかがはやての名を呼んだ。

「あえっ!？」
教えた覚えも無いのに呼ばれ、動揺して変な声が出してしまった。
「さつき、秀人さんが呼んでたから……………間違ってた?」

「……………違うない」
ぼそつと、とりあえず返事は返ってくる。

すずかを皮切りに、次々に質問される。

「年は?」

「9歳……………」

「学校は?」

「海鳴第一小学校……………だったかな」

何せ、一度も登校したことが無い。クラスもどこだったか……………

やいのやいの賑やかになっていく車内。

「ねえ、ユーノくん、アルフ」

「ん、何？」

「何だい？」

「……あいつのこと、どう思う？」

およそ一月、秀人と共にあった少女。

人がいるはずが無い辺境世界に……しかも、ピンポイントで、秀人の近くに。

……偶然にしては、出来過ぎている。

現在進行中の、闇の書事件。

それとの関連はまだ不明だが、とにかく、疑って掛かった方が賢明だ。

「……なんかむかつくし」

……それに、少なからず嫉妬も混じっているらしい。

なのはは聞き役に徹することに……

「なのはちゃんとはやてちゃんって、何となく似てるよね」

完璧なタイミングで、すずかが爆弾を投下した。

「「はアツ!!?!?」「」

当然、それをスルーできる訳は無く、なのはも強制的に会話に参加するハメになった。

「「似てないっ!」「」

図らずも、ハモった。

ぎろっ、と、およそ小学三年生がするには険悪すぎる目つきで、二人が睨み合う。

「真似するなあっ！」

……そっくりである。

「つたく、秀人の知り合いつてこんなのしかないわけ!？」

「『こんなの』とは何よ！」

「むぐぐぐぐ……」

額を突き合わせ、威嚇し合う。

……確かに、色々と似通った部分もあるかもしれない。

「あれ……?」

と、何かを思い出したように、

「……お前、どつかで会ったこと無かったっけ？」

ぼろっ、と、はやてを見て、そんなことを口走った。

「え？」

車内の視線が、健太に集中する。

「会ったって……いつ？」

怪訝な顔で聞く望。

「三ヶ月くらい前……んー……いや、やっぱり人違い、かな？」

もつと髪長かったし……車椅子、乗ってたし」

……確かに、会っている。

ジュエルシード事件の終わり、海鳴公園で。

はやてからすれば、すれ違う程度。

だが健太からすれば、訳もわからず罵声を浴びせられたという理不尽かつ強烈な経験だった。

「葉山君……よく覚えてたね」

本気で感心して、健太を褒める。

「え？そうかな……へへ」

……裏返せば、『葉山君は物覚えが悪い』ということの裏返しなのだが。

「……知るか」

ぷいつ、と窓の外を見る。

「愛想の無い奴ねー……」

アリサが、やれやれと首を振った。

気にせず、健太ははやてに話し掛けていく。

「じゃあ、足治ったのか。よかったじゃん」

「……」

「俺も前、足首ポキッと逝っちゃってさー……」

「……」

「歩き回れないと退屈なんだよなー」

はやては、視線も寄越さず黙り込んでいるのだが、健太は気にせず話しつづける。

「ゲームしかすること無くてさあ。」

どうせなら、腕が折れれば良かったのに。そしたら、サッカーだけは出来たじゃん……って、駄目だ、今度はゲームが出来なくなる！」

「宿題やれっ！」

スパーン！と、望が平手で健太にツツコミを入れた。

「……ぷっ」

それまで仏頂面だったはやてが……笑った。

「くっくくく……！お前ら……あ、アホだわ……くっくくっ！」

くすくすと、堪えきれず笑いを漏らす。

「あ、やっと笑った」

すずかに指摘され、ハッと真顔に戻った。

「……」

恥じらい、またしてもそっぽを向こうとする。

「……ていや」

なのはが、その両頬を挟み込み阻止。

……凄まじくマヌケな顔になった。

「くくくくぶはっ！」「くくくく」

車内全員が一斉に吹き出し、大爆笑する。

「て、てめえ……！」

恥をかかされ、怒りとも羞恥とも分からない赤面でなのはを睨みつける。

「くくく……」

にやにやと不敵に笑い、それを受け流すのは。

「あははははは！はやて、変な顔ー！」

「可愛い顔が台無し！」

人目がある手前、物理的に反撃することも出来ない。

「うぐぐ……！覚えてるテメエ……！」

憎々しく睨みつけるが、なのははどこ吹く風。

「はやて、」

抵抗感が取り払われたらしく、一気に輪の中に取り込まれて行った。

「……」

あまり話さず、シートに身を預けるなのはに、ユーノが話しかける。

「なのは」

「なに？」

「あれ、狙った？」

あれ……とは、はやてのことか。

さっきまでの仏頂面は鳴りを潜め、ちゃんと返事をし、時に笑い、怒り、突っ込み……

まるで、年相応の少女のようだ。

きつかけは、望と健太かもしれない。だが、それを上手く持って行ったのは、なのはだ。

「……秀人さんも、そうして欲しいって思ってるだろうから」

秀人達が、わざわざこっちの車に押し込んだ意図は、ちゃんと理解しているらしい。

「……そっか」

「えー？じゃあじゃあ、一ヶ月くらい、秀人と二人つきりで！？」

「……まあね。組み手したり、筋トレしたり……」

「食事はどうしてた？」

「……適当に調達して、交代交代で用意」

「寝るときは？」

「……同じ部屋」

「……きゃー！！」「……」

黄色い歓声。

ユーノとアルフは、戦々恐々だった。

「な……なのは、あくまで、非常事態だから……」

「そ、そうだよ……別に、後ろめたいことはしてないんだしさ……」
ぴきぴきと、なのはの額に青筋が浮いた。

「……やめとけばよかったかな」

今度は、なのはがブスツと黙り込んでしまった。

第八十話（前書き）

富士山五合目行ってきました！

125ccだからスバルラインが200円！いえー！

でも帰り道の道志峠でコーナーに刺さりかけた、、、何であんなに街灯が少ないの、、、

第八十話

「それで、向かっている目的地なんだけど……」

和やかな空気を見計らって、すずかが切り出した。

「うちのグループの、テストコースなの」

「「テストコース？」」

そんなところに、小学生が何をしに行くのだろうか。
怪訝な顔をする面々に、意味深に笑いかけた。

「夏休みなんだし、思いっきり運動しようね」

「……??？」

……謎のまま、車は現地へと向かって行った。

「お待ちせ」

移動すること、およそ一時間。

高級車と、秀人のバイクは、『私有地』と書かれた看板がそそり立つ前で止まった。

「ふー、着いた着いた。……ほらフェイト、顔上げて」

「んー……」

バイクを降りた秀人が、フェイトのヘルメットの顎紐を解いてやった。

「……つぶは。あー、たのしかった！」

にぱっ、と明け透けに笑う。

「でもなんか、あたまがきつかったよ」

わしゃわしゃ、と自分の髪の毛を掻き回す。

「……なのは分と合わせて、新調するかなあ」

……ちなみに、ジュニア用ヘルメットはそれなりに高価だったりする。

「リーゼ、」

そそくさと集団から逃げてきたはやてが、秀人の目の前にやってきた。

「……リーゼは？」

『ここです。主』

フェイトのリュックから顔を出す。

オープンチャンネルの……魔力がある者になら聞こえる設定で、はやてを呼んだ。

『大丈夫だった？ 酔ってない？』

『問題ありません』

アリサ、すずか、望、健太……魔力の素養が無い筈の四人には、聞こえない筈。

だというのに。

「……おい今、その猫……喋らなかったか？」

「う、うん……喋った、よね？」

健太と望には、しっかりと聞こえていた。

「……」「……」

半笑いで、顔を見合わせる秀人となのは。

「……何が？」

「何も聞こえなかったけど……」

アリサとすずかには、聞こえていない。

なら、考えるまでも無く、理由はただ一つ。

「……………」

無言で、健太の傍まで歩いていく秀人。

「な……………何ですか？」

「いや……………幻聴が聴こえる程、疲れてるのかなー、って」

少しビビる健太の背後に立ち、両肩を揉むフリをして、魔力の気配を探る。

「ちょ……………なのは？」

「ごめん、大事なことから」

なのはも、望の背中に触れて……………

すると、案の定。

「……………マジであるよ」

「……………こっちも」

最低でもB＋ランク。

望に至っては、Aに届こうかというレベルの、高い魔力を秘めていた。

……………考えてみれば、ジュエルシード暴走体の中で、最も手強かったのは、シリアル10……………望だった。

あれは、ジュエルシードの力に、望の魔力が上乘せされた影響もあつたのだろう。

望は魔法の存在を知ってはいるが……………なのはは可能な限り、非日常とは関わらせないと決めていた。

幸にも、二人のリンカーコアはまだ殆ど眠ったままだ。

……………これが目覚めれば、流石に放置、とは行かないだろうが。

「さ、行きましょう」

「ああ、わかった」

すずかに続き、うやむやの内に、話を終わらせた。

案内されたのは、想像を超えるスケールの『テストコース』、だった。

「……………」

とにかく、広い。

しかも、広いだけではない。

整然と舗装されたサーキットコース。

ホームストレート、ヘアピンカーブ、シケインと……………今すぐGPが開催出来そうなくらい、豪華な設備が整っていた。

その向こうには、サーキットコースとは真逆の、土の地面が剥き出しのダート。

更に急斜面のヒルクライム・ダウンヒルコース。

オフロード走行……………というよりは、重機の試験も行っているのだらう。

オマケとばかりに、船舶のスケールモデルを航行させるであろう、市民プールの何倍でもありそうな人口湖など……………

「す、」

一番最初に我に返ったのは、秀人だった。

「すっげえ！！」

目を輝かせ、きよろきよろと見回している。

「走っていいの？」

「ええ、どうぞ」

喜ぶ秀人だったが……………はた、と気付いた。

「俺以外は……………？」

いくらなんでも、秀人だけが楽しいのでは不公平だ。

「ご心配なさらず」

裏手から、メイドの一人が運転するトラックがやってきた。

荷台には、ジュニアサイズのマウンテンバイク等が満載されている。

「おお……」

「プロテクターもヘルメットもありますから、ちゃんと全員で楽しめますよ」

確かに、自転車ならそれなりに安心だ。だが……

「……じてんしゃ」「」

引き攣った表情で後ずさる、なのは（基本インドア嗜好）とはやて（真正ヒッキー）がいた。

「うわー、サス付きMTBなんて初めてだよ俺！」

「砂利道……走れるの？」

「ふふん、私は走れるわよ？」

「……や、やれるもん！」

「頑張ろうね」

……子供チームは、浮かれ気分ではしゃいでいた。

「……ボクはどうしようか？」

「え？フェイト、自転車は嫌かい？」

「うーん……いやじゃないんだけど、」

「ごによごによ、と口ごもり、意を決したように、すずかに話し掛けた。

「あの、ボク……キミに、あやまらないといけないことがあるんだ」

ジュエルシード事件の最中、フェイトは、暴走体となったずずかの飼い猫を、手酷く痛め付けた。

まずは、ケジメを付けてから。

そういうことらしい。

「……うん、わかった。こっち来て」

フェイトの手を引き、レストルームに向かっていく。

「フェイト、あたしも一緒に……」「アルフはこっち」「あああああ……」

過保護な使い魔を、ユーノが引きずっていく。

「ひどいよユーノ……フェイトが心配じゃないの?」

「フェイトが自分でやるって言ったんだから、任せよう」

「むっ……」

不満そうだった。

「なのは……、はやても、どうしたの?」

「……いや、」

「……なんでも、」

「あ、もしかして……あー……」

望が言い当てようとして、気を使って言うのをやめた。が……

「え?二人とも乗れないのか?」

……無神経な健太が、ズバツと言い当ててしまった。

「健太!」

「じっ……!」

「ぎゃあっ!」

望の鉄拳制裁が、健太の頭を捉えた。

「この馬鹿!あんた、デリカシーってもんが無いの!?」

「知らねえよ!何だよデリバリーって!?」

「ぎゃあぎゃああと夫婦漫才を始める二人はさておき……」

「え……二人とも？」

「……」

「……」

無言の肯定。

「……しゃーないか。えーと……」

多数の自転車を物色し……

「あつたあつた。んじゃ……」

20インチの小径ホイールを履いた、他より一回り小さな自転車

……BMXバイクを三台、取り出した。

「練習するか！」

……レストルーム内。

ソファに向かい合うように座った二人。

「それで……話って？」

「あの、ね……？ キミ、ね、かってるでしょ？」

「うん、それなりに」

微笑を崩さず、続きを促す。

「はいいろのこねこ……いるでしょ」

「うん、いるよ」

「ふー、と、フェイトが一息つき……」

「……おおけが、したよね」

切り出した。

「それやったの……ボク、なんだ」

「……」

ぎゅっと、両手を膝の上で固く握り……それでも、一番苦手であ

るはずの視線だけは真っ直ぐに、
すずかを見つめて。

「ごめんなさい……！」

深々と、頭を下げた。

「……」
家庭環境のせいにも出来た。母のせいにすることもできた。
けれども、やったことは事実で、それは間違いなく、フェイトの
意思で行った行為だ。

「……」
頭を下げたまま、じっと返事を待つ。

「……」
かたん、と、すずかが立ち上がり、ソファの脚が鳴る音が、やけ
に大きく響いた。

そのまま、足音と共に、レストルームから出て行ってしまった。

「あう……だめだったよ……バルディツシュ……」
がつくりとしよげる。

『……もう一度です』

「……え？」

『許しを得られるまで……謝罪を続けましょう』

「……うん、わかった！」

すずかの後を追い、ドアノブに手を掛け……

どぼんっ！

「ぶへえっ……！」

いきなり開いたドアに、顔面を強打された。

「え？……え！？」

開いたドアの向こうに、出て行った筈のすずかが啞然と立っていた。

「ご、ごめんなさい！大丈夫！？」

うずくまるフェイトを助け起こす。

「いだい……ちょーいだい……！」

涙目で顔を上げた。

「ひいつ！」

おののくのも仕方ない。

「……？」

何やら鉄錆臭い液体……鼻血が、鼻から伝っていた。

「きゃー！ティッシュティッシュ！」

まとめたティッシュを、フェイトの顔面に押し付けるように止血。

「むがー！！！」

「暴れないで！」

フェイトを押さえ込み、ティッシュを押し付け続けた。

「ふう、ふう……」

「はぁ、はぁ……」

止血するだけだというのに、なぜこつも消耗しなければならぬのだろうか。

「……うあー」

フェイトの鼻には……美少女にはあるまじきことに、丸めたティッシュが詰め込まれていた。

「……」

「……」

何とも言えない空気が流れ……

「ニャー」

すずかの持ち込んできたケージから、そんな鳴き声が聞こえてきた。

「……おいで、マルス」

手招きされ、一匹の猫がケージから出てきた。

その猫は、見覚えのある灰色で……

「あ……」

びくりと怖じけづく。

「……この子だよ」

「……」

そつと猫を持ち上げ、フェイトの方を向かせた。

「……ニャー」

てくてこ……と、フェイトの足元まで歩いてきた。

「……」

ゆっくりと、鼻先に手を伸ばす。

……敵と見なされれば、噛まれるか、引っ搔かれるか。

ぺろっ

「あ、」

が、猫は、フェイトの指先を舐め、じゃれついてきた。

「……ふふ、『許す』って言ってるよ」

「……いいの？こんなんで」

「いいの。マルスがいいって言ってるんだから」

……釈然としないが、飼い主が言うのだから、許されたというこ
とでいいのだろう。

「……ごめんね、まるす。それに、キミも……」

「す・ず・か」

「え？」

「私の名前。『キミ』、じゃなくて、さすが、って呼んでほしいな」
「……なして？」

首を傾げるフェイトに、さすがはにっこりと笑う。

「それはね……」

「おい、さすが、まだー？」

痺れを切らしたアリサが、様子を見に来た。

「彼女は、アリサって言うの」

「……あ、あの……ありさ？」

呼ばれて振り返り……

「あん？何……って、ぶはーっ！！」

思いっきり、吹き出した。

「……（がーん）」

コミュニケーションの出鼻をくじかれた。

「フェイト、あんた……なにその鼻！

あっははははは！！」

いきなり笑われ、ぶるぶると震える。

「……わらうなー！！」

「ごめ、むり……あははははっ……！！」

「くすくすくす……か、可愛いよ……？」

フォローにもならないフォローを入れるすずかだったが、無責任
にこちらをも、

目尻に涙を浮かべて笑っていた。

「うううう……！！」

取りたいが、取ったらまた鼻血が流れ出てしまう。

歯噛みし、地団駄を踏み……吠えた。

「ありさ、すずか！ わらうなっていつてるだろー！」

ごく自然に名前を呼べたのだが……そのことに本人が気付くのは、しばらく後になってからだ。

第八十話（後書き）

そしてバイク壊れた！
ガソリン漏れort

第八十一話（前書き）

そろそろ進展します。

第八十一話

「あ、あわわわわ……！」

がしゃーん。

「おっ、おおおお……！？」

がしゃーん。

「「ぎゃー！」

がっしゃーん。

青空の下に、悲鳴と、衝突音が響いた。

言わずもがな、なのはとはやての、自転車の練習風景である。

「ほーら、前見る前ー。足元見るなー」

なのはの場合、バランス感覚は良いんだけど……立て直そうとしてパニックになってる。

「そ、そんなこと言っただって……きゃあっ！」

はやては単純に、バランス感覚が鈍い。

「「きゃー！」

がしゃーん。

まあ……こんだけ練習すれば、上手な転び方も身につくだろう。

「よし、んじゃあそろそろ、本番行くか」

「「はいいい！？」

なに驚いてんだ……って、そうだ説明してなかった。

「今のは、『上手に転ぶ練習』で、今から始めるのが、『上手に乗る練習』……」

「死ねエツ!!」

ぶんっ!

「うおわっ!!」

はやての奴……自転車を俺の顔面目掛けて投げつけて来やがった!

「あつぶねーだろ馬鹿!」

「るさいっ!もう知るか私は帰るッ!」

あーもう、癩癩起こしやがって……

「逃げるのか?」

その背中に、挑発を投げ掛けてみた。

「……ッ!」

すると、案の定……単細胞なはやては振り返り、ギリッと俺を睨みつけた。

「根性の無い奴め……」

「ンだと!」

「やーい運動音痴の根性無し!」

「んががが……!言わせておけば……!」

魔法でもぶっ放したいところなんだろうけど、一般人や管理局関係者の前では使えない。

「悔しかつたら乗ってみろーヘツポコ単細胞!」

こうして、思う存分、からかえるって訳だ。

「……どけっ!」

ぐいっと俺を押しつけ、自分で放り投げた自転車のもとに、ずんずん歩いていく。

「この私が……こんな原始的な道具、使いこなせないワケ無いだろうがっ!」

勇ましく跨がった。

「さあ、次は何だ！」

「秀人さん、次は？」

二人がほぼ同時に詰め寄って来る。

「むっ……」

「むぐ……」

睨み合い、火花を散らす。

競うこともまた、上達への近道だ。

「工具工具……」

トラックの荷台を漁り、スパナを一本取り出す。

二人の自転車から、ペダルを取り払った。

「よし」

これで、準備完了だ。

なのはの背中に手を添えて……

「そりゃあっ！」

思いっきり押し出す。

「ひ、秀人さん、ペダルが無いー！」

「まずバランスを取ることにだけに集中してみい。ほら、前見て前」
二輪車は、視線を向けた先に自然に曲がるように出来ている。

初心者はずい、怖くて足元ばかりを見てしまって、余計にバランスが取りづらくなる悪循環に

ハマるから……足にぶつかるペダルを取り払って、姿勢制御にだけ集中してもらおう。

「よし、次ははやてだ」

「来いやおらー！」

「おらー！」

同じく、はやてを渾身の力で押し出す。

おいおい、はやての奴、なのはが通ったラインをトレースしてねえか？

「おいはやて！前見る……………あ」

がしゃーん。

……………ぶつかつた。

「……………どこ見てんのよへタクソ！」

「るっせえノロマ！ チンタラお散歩してんじゃねえ！」

「「うがー！！」「」

……………あいつら、奇跡的なまでに相性悪いな。

「んじゃ、いいな？ペダル付けるぞ」

あれから転んだり、無駄に器用にハイサイドしたりすること数10分。

いよいよ、ペダルを漕ぐ段階まで来た。

下手したら、今日一日は掛かるかと思っただけ……………妙にサクサクとカリキュラムが進められた。

二人の運動神経……………というよりは。

「もうぶつからないでよね」

「おまえがトロトロしてなかったらな」

「「ふんっ！！」「」

「……………喧嘩すんなよ」

……………負けず嫌い同士の、対抗心の為せる技だろうな。

二人が自転車に跨がる。

準備完了だ。

「んじゃ……………頑張れ！」

「「……………！！」「」

とんっ、とんっ……………と、自転車に跨がったまま、シーソーのように地面を蹴り、進み出す。

……そして、十分にスピードが乗ったところで……
「……よし！今だ！」
合図。

教えた通り、前を見たまま……ペダルに足を乗せた。

「！」
スムーズに漕ぎ出し……やがて、ペダルを漕ぐ力のみで、自転車が進み出す！

「……いよつしやあああああああ！！！」

成功だ！

「よし、よくやったぞ二人とも！」

二人を、自転車ごと持ち上げる！

「やったー！乗れたー！」

なのはは無邪気に喜び、

「お、下ろせ！下ろせ、ばかー！」

はやては、顔を引き攣らせて喚いている。

「あーっ！」

素っ頓狂な声に振り向くと、フェイトがこっちに走ってきていた。

「なのははっかかりずるい！ボクも、ボクもー！」

びよこびよこ飛び跳ねている。

「それじゃあ、次はフェイトの番だな」

さて、もう一台BMWを……

「ふーん、コレ？」

あ。フェイトの奴、俺が使ってたMTBを……

いくら何でも、足が届かないだろうに。

まあ、好きにさせてやるか。

……だけど。

「よっ……はっ……！」

いくらなんでも、その才能は反則だろう。

「よいしょー！」

……あっははは何コレたのしー！！！」

……ヘッドチューブとダウンチューブの間に足を入れる

……所謂、三角乗りで、スタンディングを維持している。

「ひゃっほー！」

シヤカシヤカと漕ぎ、フロントをロックさせてのジャックナイフ。

「……よーやるわ」「ホントにね……」「チツ……」

妬むより先に、感心してしまう。

「あんな金髪アホドリなんぞに……！」

「負けてたまるか……！」

はやてとなのはが、ムキになってBMXに跨がった。

……まあ、楽しそうで何よりだ。

「秀人さん」

「おう、すずか。話はもういいのか？」

フェイトの奴、バイクに乗ってる時から言ってたしな。

「ええ。三人は私が見ておきますから、秀人さんも楽しんでやって

下さい」

「とーぜん、私もいるから心配無用よ！」

アリサも、長い髪をアップに纏めて準備完了か。

それじゃあ、任せようかな。

「……」

実を言うと、ちゃんとしたサーキットを走るのは生まれて初めて

だ。

……戦場ばかり走り回ってるからなあ。

オフ車ばりに悪路を乗り越えたり、200キロの速度域でスラロームしたり、敵に体当たりしたり、空飛んだり……

「……………」
スレイプニルモードの自己修復機能が無ければ、とうの昔に廃車になっている。

「さて……………」
レンタルのレーシングスーツ一式を身につけ、準備完了。

キュルルツ……………ボウンツ！

各部、異常無し。

「……………行くか！」

ギアを入れ……………発進！

バオオオオツ！！

流石に、スレイプニルモードは使えないけど……………純粹に、単車の限界性能を引き出せるのは楽しい。

「とりゃあっ！」
カーブに差し掛かり、シフトダウン。エンジンブレーキで減速した所から、思いっきりバンクさせカーブを滑り抜けていく。

「ほっ、はっ！」
連続するシケインを抜けた先は……………約3キロのストレート！！フ

ルスロツトル!!

バゴオオオオオオオオオオオオオツツツ!!

「最ッ高おおおおおおお!!」

超・爽快!

一日中でも走っていたいくらいだ!

今だけは……闇の書だとかを忘れてもいいな!

「……ふうん、」

ばたばたと、風が吹きすさぶ。

「アレが、アイの……」

白衣とワンピースが、風をはらんでバタバタと揺れる。

だが、それを纏う黒髪紫眼の少女に、ふらつく様子は見られない。

……テストコースの管制塔、その頂上のアンテナに立っていると
いうのに、その様子は異常だった。

「……原始的な道具。アイには、あれが何故面白いのかが分からな
い」

値踏みするように、サーキットを快走する秀人を見下ろす。

「……そして、そんな原始的な道具に熱を上げているあのひと」

ぺたん、と、サンダル履きの足を鳴らし、一步踏み出す。

「あのひとが、アイの『運命のひと』……」

ぺたん、ともう一步。

「……なんかむかつく。でも、アイは何故むかっているのか、わからない。だから……」

ぼんつ……と、アンテナから飛び降りる。

「アイは、あのひとに聞きに行く」

……躊躇いも無く、疾走するバイクの鼻先へ。

とん。

「……は？」

思わず、そんな間抜けな声を出してしまった。だって、仕方ないだろう。

サーキットの直線コース。そこを、メーター読み210キロで走っているバイクのスクリーンに……

人間の足が二本、いきなり唐突に脈絡無しに、出現したんだから。

「……」

「近くで見た結果、あなたはアイが会うべき人であると確信した」

「……」

「……いきなり、何を言っている？」

「わからないけど、わかったの」

「得心したように鷹揚に頷き……」

「やっぱりおまえは、むかつくの」

「……！」

「ビュオンッ！！」

「単車の向きを切り替えて、回避するより早く。」

「ガシャアンッ！！」

「足場を物ともしない痛烈な蹴りが、バイクごと俺を蹴飛ばした！」

「ギャリギャリギャリッ……！！！！」

「あつ、ぐ……！！」

「視界が二転、三転する、と、同時に！」

「っただあー！」

「地面を両足で掴んで、立つー！！」

「ツツ……！！いきなり、何だー！」

「まさか、守護騎士の一人か！？」

「それにしても、妙に軽装だが……」

「「いわゆる……『おまえに名乗る名は無い』……なの」

「……」

「守護……騎士？」

「……」

「……………」

「……………」何故かどちらともなく、睨み合うというより、見つめ合ってしまう。

「秀人さん、大丈夫!?」「コケてんじやないわよバーカ……………まさか、怪我なんてしてないわよね?」

「ひでと、けがはない!?」「秀人!無茶はするなよ……………」「あたしのバイクは無事かい!?!」

「いやお前のじゃねーから!俺のだから!……………とりあえず、大事無いけど……………」

「……………」

全員の視線が……………黒髪紫眼の少女に、集中する。

『……………何を、しているのですか』

レイジングハートが……………明らかに努力を宿した声で、口火を切った。

「レイジングハート……………知り合いか?」

『何を、しているのか……………聞いているのです!! アイ!!』

アイ……………?

それが、この子の名前か?

『逃げ出したと思ったら、こんな所で……………しかも、秀人に危害を加えるなど!』

敵というか、年下を怒る年長者みたいな口調だ。

どういう関係……………?

と、誰もが思ったその時、沈黙していた少女……アイが、口を開いた。

「だまるがいいの……クソ姉貴」

……え？

「え？」

クソ、姉貴……？

レイジングハートを。そう呼んだのか？

「……こやつの名はアイ。秀人。」

認めたくありませんが、あなたの愛機となる予定だった……インテリジェントデバイス、です」

「え？」

流石に、冗談だよな？

「……」

「……マジで？」

『マジです』

「……」

『大マジです』

二回言われちゃったよ。

「……嘘お。人間にしか見えない……」

「ではいすが、にんげん、？ ではいす……え？え？」

第八十一話（後書き）

ちなみにハルハル、バイク教習で、クランク走行中に入った、
縁石とバイクの間に足を挟まれた経験があります。

その箇所の感覚は今でもありません、、（泣）

第八十二話（前書き）

来年の夏は北海道にでも行くのかな。

第八十二話

いきなり現れて、いきなり攻撃してきて、いきなり三行半を突き付けられた。

何だこの状況……

「大丈夫ですかー!?」

音を聞き付け、スタッフがやってきた。

やっべえ……何て説明すれば……

「チツ……世話の焼ける奴」

はやて……? 何を……

「『何でもないから、仕事に戻れ』」

……なんだ、今の声?

ハウリングでも起こしたように、妙に頭に反響した。

「あ……はい……」「了解、しました……」

責任者でも何でもない、はやての言葉を聞いたスタッフ達は……
ふらふらと、

どこか覚束ない歩みで戻って行った。

今、何をやったんだ……?

魔法……だとは思うけど。

『暗示です』

悩む俺に、レイジングハートが言った。

暗示……魔法って、色々出来るんだな。今更だけど。

向こうから、すずか達もやってきた。

「秀人さん、ご無事ですか!?!」「あちゃー……タンクベっこり凹

んでるわね。高くつくわよコレ」

「大丈夫大丈夫、予備パーツ持ってるし」
実際には、スレイプニルの自己修復なわけだが。

遅れて、健太と望も……

「……」

「……」

あれ……なんか、びっくりした顔のまま固まってるんだが……
そんなにひどい転び方したか、俺。
だが、違った。

「はろー。望、健太」

アイが、しゅたつと手を挙げ、気安く二人に挨拶をした。

「「アイさん!?!」」

「……知り合いか?」

……一応、聞いておくけど。

「な……何で、望たちに……?」

なのはも、この急展開に頭が追いつかないようだった。

「先々週、くらいかな。健太たちの練習に、ちよくちよく顔出して

……」

……見た目、15くらいの子が、小学生に混じってサッカーを
している姿を思い浮かべた。

……ちよつと待て。

「服はどうした」

「着てる」

「そついう意味じゃない」

こんな……雑誌を突き刺した白衣に、ヨレヨレのワンピース、スリッパ履きで、

あちこち歩き回ってたのかよ……

頭を抱える俺に、望が話してくれた。

「ええと……基本、あの格好でしたよ？」

練習が終わると早々に、どこか行っちゃいましたけど」

「どこ行ってた」

「……（っーん）」

そっぽを向いて、答えようとしなない。

『何をしているのですかこの阿呆！』

教育プログラムが終了せるまで、民間人との接触は厳禁と……！』

レイジングハートが、念話をビシバシとアイにたたき付ける。

「ほんととにうるさいのこの石頭……」

アイは、聞こえていないフリをして聞き流した。

あー……なんか、グダグダになってきた。

「んで……何しに来たんだ？」

まさか、わざわざ俺に三行半を突き付けるためだけに来たわけじ

や……無い、よな？ 多分。

「それもあるの」

あるのかよ。

「でも、残りもう半分は、別のこと」

半分……？

「……あれ？でもここ、私有地よね……フェンスもあつたのに、どうやって……」

望がいち早く、不自然さに気付いた。

やっべ……！

「『アイとは街で会って、同じ車に乗ってきただろ』」

「はやてが、再び暗示を掛けた。」

「……ああ、そういえば」

「ほっ……」

「なんとか、ごまかせた。」

「それじゃ、アイさん。また後で」

「四人が向こうに戻ったのを見計らって……アイに向き合った。」

「マスターとして認めないって……何でだ？」

「俺、アイに何かしたどころか、初対面だったんだけど。」

「アイは、学習の過程で、おまえの戦闘の映像記録を見ていたの」
「まあ、俺の専用機、って扱いだからな。」

「お前の戦い方は、見ていらなかった」

「……」

「……不利になると、ただがむしやらに相手の懐に飛び込んで、ゼロ距離から砲撃魔法を」

「炸裂させたり……自分の体を省みない、自滅行為に躊躇無く走る」

「……」

「例え、その身体のパフォーマンスがあつたとしても……いずれ、破綻をきたす」

「……ヴィータとの初戦という実例もある。」

「他者から改めて指摘されると、言い返せない。」

「アイは、デバイス」

「胸に手を添え、告げる。」

「契約者の半身となり支える杖であり、契約者を守る盾」

「……………」

「けれど、」

目を開き……………とん、と俺の心臓あたりを人差し指で突き、言った。

「自ら死地に身投げをするような……………自殺志願者など、支える意味も、

守る価値も無いの」

「……………」

それは、前々から誰其に言われ続けてきた。
我が身を省みないって。

でも、それは……………

「俺は、」

「『そういつぶつに出来てるから』?」

「……………」

こいつめ……………いらんことまで学習しおって。

「……………ま、そーゆーことなの。アイと契約をしたいのなら、」

「やーめた」

「まず……………え?」

キョトン、と首を傾げるアイ。

「つーか、よく考えたら俺、デバイスがあっても無くても、そんな
に変わらないし」

レイジングハート不在でも、特に戦い方に変化は無かった。

スターライトと、三連コンボが使いづらくなる……………くらいの制約
か。

それなら、その二つを自力で使えるようになった方が良さそうだ。
「さーで、バイクも壊れちゃったし、チャリで遊ばっかなー」

「待つ」

がしつ、とジャケットの裾を掴まれた。

「訂正するの。」

このアイを……最新最高スペックの私を……『いてもいなくても変わらない』……？

訂正するの」

……プライドは高いらしい。

「だってお前、俺の力にはなってくれないんだろ？」

「そのつもりは無いの」

「なら、俺の戦力には変化無し。いてもいなくても同じじゃん」

「だから、お前がその性根を入れ替えれば……」

「やーだよ」

はいそーですか……なんて変わるなら、苦労は無い。

「……気が変わったの」

ぐいつ、と、俺の胸倉……より少し下を握り締め、精一杯の意思を込めた目で、俺を睨み上げる。

「おまえに、アイのマスターに『なってもらおう』なんて、甘々の大甘だったの」

「ほう……で、どっしする？」

「おまえを、アイのマスターに相応しくなるように……教育してやるの」

「やってみるよ……小娘が」

上等だ。

誰が、お前のマスターに相応しい人間になんてなるものか。

「俺は俺のまま、お前を従えてやるよ……アイ」

言うことは言い終わった。俺は、さっさとなのは達に合流して……

「待つ」

「……今度は何だ」

びしっ、と、皆が乗っている自転車を指差した。

「それは、なに？」

「……自転車。それは知ってる。」

けれど、自転車は市街地を走る乗り物のはず。なぜ、不整地を走る
「？」

「……えーと、つまり、『残り半分』って……まさか。」

「わからないから、聞きに来たの」

えへん……と、胸を張った。

結局その後、何でか分からんが、アイにメンテナンスバイクについて講義を行い、

乗り方を教え、ダウンヒルを走った。

……すっかり楽しんでやがった。

その、帰り道。

バイクは適当に修復し、後ろに猫モードのリリース、犬モードのアルフ、

フレットモードのユーノを、すずかに借りたケージに纏めて突っ込んでおいた。

なのは、フェイト達は、とっくに体力を使い果たして夢の中。人数的に、こうなった。

その三人（匹？）も、ケージの中で休んでいた。

今日は三十日。

なのはの夏休みは、明日で終わりか……

「明日、どうすつかなあ」

また遠出……は、ちよつとなのはが疲れるかもしれないな。

「……あ、そうだ」

さつきリンディさんに送ったメール、確認してもらえただろうか。念話のチャンネルを開いて、と。

「リンディさん、今いいですか？」

「ええ、問題ありませんよ」

答えは、すぐに返ってきた。

「例の件、なんですけど……」

簡単に通るとは思わないけど、可能な限り、力を借りたい。

「……その件んだけど、ええっと……」

途端、口ごもる。

「……難しいですか？」

「いいえ。手続きさえ踏めば、実現できるんだけど……」

ハッキリしないなあ。

「問題って何ですか？」

「……レジラス少将との、面談」

……つへえ。

うーん……

『それって、フェイト一人でなくちゃ駄目ですかね？』

『縁者の同席は可能よ。……秀人くん、あなた、まさか』

『俺が同席します』

流石に、あのオッサンと身一つで対面させるにはまだ早い。

『わかりました。少将には、私の方からアポイントメントを取って
みます』

出来れば明日の午後……と要望を付け加え、念話を終了させた。

午後の予定は埋まったし……よし、午前中は、なのは連れて、街
まで買い物にでも行くか。

そんなことを考えながら、高速道路を降り、街に戻ってきた。
アパートの前にバイクを止める。

高級車のドアを、ゆっくりと開けると……

「くう……くう……」

遊び疲れたなのは達が、安らかな寝息を立てていた。

「では、秀人さん。またいつか」

挨拶をするすずかも、流石に疲れて眠そうだ。

アリサはとつくに、シートにゴロンと横になっている。

「ああ、それじゃあな」

高級車を見送り……俺がなのは、アルフがフェイト、ユーノが……
…何故かアイを抱えて、
アパートに戻る。

さーて、俺も、明日の準備でもするかなあ。

「あ」

大事なこと、忘れてた。

「……ただいま、みんな」

一月ぶりの、我が家だった。

さて、一方その頃。

「……どこで寝るかなあ」

寝床に困る、闇統べる王がいた。

第八十三話（前書き）

せっかく定時で上がったのに上司の飲み会に付き合わされて帰ったの九時過ぎ、、、Fuck!!
更新が遅れたのも上司って奴のせいなんだ。

第八十三話

帰宅してすぐ、疲れもあって熟睡してしまった。

夏休みだから、目覚まし時計も止めていて……起きたのは、9時になる少し前だった。

「んー……！」

背伸びをすると、ぱきぱき、と背が鳴る。

「……今日で終わりかあ」

カレンダーを見るまでもなく、今日は八月三十一日。夏休み最終日だ。

宿題は……まあ、ぼちぼち。富山先生が怒らない程度に仕上げている。心配皆無。

両隣の布団には、一緒に朝を迎えるのは久しぶりになる秀人さんと……

まーたタオルケットを蹴飛ばし、寝巻がお腹までめくれ上がっているフェイトがいた。

「はあ……」

タオルケットをかけ直す。

まあ、朝ごはんまで寝かしておいてやるか。

できるだけ足音を立てないように、抜き足差し足……ん？
何コレ。食卓の上に、紙ペラが……

『暇だから遊んでくるの。気が向いたら戻るの』

……ワープロ打ちしたような綺麗な字で、そんなふざけた内容が書かれていた。

『戻る』って、完全に居座る気だコレ。

……頭が痛い。

それにしても……

『全く、アイは……秀人の専用機だというのに、何を考えているのやら』

傍らで、レイジングハートがふよふよ浮かびながら、ぶつくさ愚痴っている。

あはは……確かに、教育係としては、育てがいの無い子だったよね。

「まあまあ……アイの言っていることも、あながち間違いじゃないし」

秀人さんの無茶が、あれだけ真正面から切り捨てられるのは初めてだ。

「アイはアイで、自分なりの考えを持つてるんだし、さ。尊重してあげようよ」

……そういえば。

「ねえ、レイジングハート」

『ぶつぶつ……え？、ああ、何でしょうか？』

「アイの正式名称は、そのまま『アイ』でいいの？」

もしそうなら、少し素っ気ない気がする。

『いいえ、あれは愛称です』

愛称……

「じゃあ、本当の名前は？」

実は、かなりカッコ良かったりするんだらうか。

密かにワクワクしていたんだけど……

『……思い出せないのです』

「……はい？」

ふう……と、最近すっかりサマになるようになっただけのため息をつき、ぼやいた。

『アイは脱走の寸前……私とバルディッシュがスリープモードに入った隙を見計らって、
メモリーにプロテクトを仕掛けやがったのです』

……なんて奴だ。

『なので、アイの正式名称は、奴にしか……』

重ね重ね、何て奴だ。

『マリエルにも伝える前の出来事だったので、機体番号『AI-00XXX』の頭文字から、

『アイ』と呼ぶことにしたのです』

「……大変だったんだねえ」

と、話している間に、鍋が沸騰した。

削り節を入れて、一煮立ち火を弱めて……具はどうしようかなあ。

「ワカメと豆腐でいいんじゃないか？」

「うん、わかった……っていつか、おはよう秀人さん」

気付いたら、いつの間にやら背後に秀人さんが立っていた。

「手伝うよ」

「ありがとう」

台所に並んで、五人分の朝食を支度する。

ヴィータは、今日の夜に帰る予定だ。

「秀人さんが迎えに行くんだよね？」

午後からはフェイトと一緒に管理局だし、そのついでに拾ってくるらしい。

「ああ、全部午後からの予定」

フェイトは説明を受けにアースラに、アルフはその付き添い、ユ
ーノくんは無限書庫で調べ物……

つまるところ、一日まるまる暇な私と、半日だけ時間のある秀人さん。

「と、いうわけで、なのは」

秀人さんの手が、まだ寝癖がついている私の頭を、わしわしと撫でた。

「朝飯食ったら、街まで遊びに行くぞ」

「うんっ！」

夏休み最終日は……秀人さんとお買い物だー！

「支度できたか？」

「おっけーだよ！」

うきうき気分で、ショルダーバッグを提げる。

財布、携帯、ハンカチティッシュ、回天桜花……忘れ物、無し！

「なのは、いいな……」

フェイトが、物欲しそうな口調で玄関先まで見送りに来た。

「いいなーって……午後はフェイトと一緒にじゃん」

「ううー……それは、そうだけど」

あー……もしかして、遊びに行きたいのかな？

「フェイト」

秀人さんが、フェイトの前に腰を下ろし、目線の高さを合わせた。

「今日はお仕事だけど……今度は、二人で遊びに行こう」

「……ほんと？」

「ああ。約束だ」

小指を差し出し、指切り。

「指切りげんまん、嘘ついたら、なのはの砲撃喰ーらう！指切った！」

……結果。

「ボーイッシュというか、まんま男児だよな」

「動きやすそうではあるけど……」

まあ、まずは普段着をワンセット。

次。

「ぶはっ……なのは、コレコレ！」

秀人さんが、寝巻のコーナーから一着を選ぶ。

「どれどれ……ぷっ！」

それは……俗に言う、『着ぐるみパジャマ』だった。

しかも、よりもよってカビゴ○の。

「秀人さん、真剣に選ぼうよ……ぷくくっ！ こっちはイ○ーク……」

……！

「寝袋じゃん！」

「ビリ○ダマだ！」

「……どうやって着るんだろうな」

「ソーナ○ス……」

「まあ普通……おい待て。右手と頭が縫い付けられてるぞ！」

「寝られないよ！」

……まあ、おふざけは程々に。

「……お？」

秀人さんが、一着のワンピース……というか、ドレスのようなものを見つけた。

深い紅色で、所々にブラウンの装飾。

子供サイズにしては、妙にシックな感じの服だ。

ぶかつとした帽子とセットで……

「これ……似合っんじゃないか？」

「うん……」

イメージ図だけで、ベストマッチだ。

お値段は、他と比べて桁が一つ多いけど……管理局からの報酬が
らすれば、微々たる額。

でも、贅沢すぎるような気も……うーん。

「いいんじゃないね？ 特別に、プレゼントってことで」

「……うん、そうだね！」

……色々と見て回り、服は揃った。

次は雑貨かな……

「へい、そこなお二人サン！」

「ひっ！？」

びっくりした……

振り向くとそこには……なんというか、派手な女性が。

「なんですか……？」

「何だお前……」

秀人さんも微妙に迷惑そうだった。

「あつれ、忘れてる？ 忘れられてる的な感じ？」

身につけた多数のアクセサリーが、じゃらじゃらと鳴った。

「その飾り紐、あたしが作ったんだけどなア」

あ！

「あのお店の……」

今年の春、レイジングハートの飾り紐を買った店の店員さんだ！

「ああ、あのケバいいーちゃんか」

思い出した。

……けど、何で露店にいるんだろう？

「漬れたのか？」

秀人さんが、そのままズバツと尋ねる。

「漬れてねーヨ！ 営・業・活・動！」

ああ……なるほど。

「頑張つて下さいね。それじゃ」

サクッと挨拶を済ませ、その場を後にする。

「待ってー!!」

ズザザザツ……と、お姉さんが目の前に回り込んできた。

「……何ですか?」

……なんで私、こついつた類の変人とばかり縁が出来てしまうんだらうか。

「その飾り紐、使い心地はどう?」

「?……まあ、悪くは無いですよ」

「でも、そろそろ交換時期!

あら大変、紐の繊維がほつれてきてるわっ!」

……言われてみれば、確かに。

買って半年くらいだけど、表面が僅かにざらざらしてきている。毎日使っているから……だらうか。

「……計算尽くで作つたら、お前」

「なんのことカナ?」

すつとぼけてはいるが、確信犯だ。

「飾り紐が切れかけて困っている、そのアナタ!

こちらの、気品有るシルバーチェーンはいかが!??」

つまり、最初に売り付ける商品は、短い期間でダメになるように仕掛けてあるってこと?

「現在、当店で販売したお客様に限り、下取りキャンペーン実施中!」

「……商売上手だなあ。」

「お前、商売上手いな」

秀人さんも、半ば呆れて言った。

まあ、見てみれば、そのチェーンもいい出来だ。

アタッチメントの流用も可能らしい。

「……で、いくら？」

……満面の笑みを浮かべるお姉さんに代金を渡し、チエーンと紐を交換した。

「今度は千切れないだろうな」

秀人さんが念を押す。

「だいじょーぶだいじょーぶ！今度はイケるって！」
何が。

ケラケラと笑いながら、サムズアップした。

「これでも、西から東へアクセ売りながら渡り歩いてたんだから！」
腕は確かかってこと？

「関西にいたころは大変だったよー。ヤクザ屋さんから逃げて逃げて、警察から逃げて逃げて

……気づいたら、東京にいました」
「……凄いいんだか、凄くないんだか……」

「もし壊れた銀細工とかあったら、店に持ってきて。サービスで直してあげる！」

そんな話を最後に、露店を後にした。

時間は……十一時を回っていた。

秀人さんはいつもとは違う道を通って、ある店の前で足を止めた。

「バイク屋？」

駐車スペースには、色々なバイクが止められていた。

売り物じゃないみたいだけど……

「ちよつと違うけど、似たような店だ」
手を引かれて、店内に入った。

ジャケット、ヘルメット、グローブ……

「あ、バイク用品のお店だ」

「ご名答……と、いうわけで」

ずぼっ、と、頭に何かを被せられる。

「あっ……」

両肩を持たれ……鏡の方を向かされた。

「新しいヘルメットをプレゼントだ」

「え……でも、」

「あれはもうキツいだろ？」

ちらっ、と値段を見て……

「高っ!？」

……駄目だよ、こんな高いの!」

今まで使ってたやつで十分だよ!

「あ、店員さん。コレと同じサイズのやつ、三つ!」

「こらああああ!むぐっ」

口を塞ぐなあ!

「ああ気にしないで。それと、もう一回り小さいやつを一つ
ヴィータの分まで!？」

「……かしこまりました」

店員は、爽やかな笑みでバックヤードに走っていった。

「ぶはっ! ……秀人さん、いくらなんでも使いすぎ!」

今日だけで、六桁の金額を使った。

「贅癖が付いちやうでしょ!」

「必要経費だよ必要経費。それとも……いらなかった?」

「ぐ……そ、そりゃ、いるかいらなしかで聞かれたら、いるけど……」

……」

「だろ？ ……それに、これは会社からの手当で買ってるから、貯金には問題無し」

管理局からの報酬は、使っていないらしい。

けど、

「それなら、自分が欲しいものでも買えばよかったのに……」

「だから、なのは達の新しいヘルメット買っただろ」

「うー……」

秀人さんは、お金の使い方が豪快すぎるんだよ。

ラッピングまで施されたヘルメットの箱の配送手配を済ませ、店を出る。

「秀人さん」

「んー？」

「……ありがとう。プレゼント、嬉しいよ」

秀人さんは笑顔で、私の頭を撫でた。

時間は、12時半。

名残惜しいけど……

「秀人さん、そろそろ帰ろう」

一緒に過ごせたのは、僅か二日……いや、実質、一日半。けど……

「夏休み、楽しかったよ」

「またどっか行こうな」

私の夏休みは、幕を閉じた。

第八十三話（後書き）

250のエンジン焼きついたー
、
、
、
（泣）

第八十四話

なのはを家に残し、フェイトを伴い、また家を出た。
裏庭に開いた転送ポートから、地球支部へ。

「ううう……」

やはり、あのオッサンに会うのは緊張するのか、強張っていた。
(根はいい人なんだけどなあ)

アレは間違いなく、態度と口調で損をするタイプだ。

「ううー……こわいよう……」

お気に入りのリボンで二つに纏めた髪が、頼りなく垂れていた。

「……ボク、なにかやらかしちゃった？」

話の中身は、サプライズということで秘密にしてあるけど……
多少は話しておけばよかったか？

「そういう話じゃないから大丈夫だって」

「……ほんとう？ うそだったら、フォーゼドライバーかってね？」

「おう、ビリーザロッドとヒーハックガンも付けてやるとも」

……帰りに買ってやるかな？

そして、オッサンが待ち受ける小会議室のドアをノックする。

『入れ』

低い声で指示が出る。

「入ります」

フェイトの手を引き、会議室に入った。

「ふん……生きていたか小僧」

どっかりと腰を下ろしたオッサン……レジアス少将が、腕を組んだままじろりと俺を睨んだ。

「悪いかよオッサン。生憎、ピンピンしてるよ」

……クロノあたりが聞いたら、また青ざめて怒りそうな口調だが、俺はあくまで囑託。

階級も権力も無いけど、必要以上に媚びてやる義務も無い。

「そのしぶとさは評価してやろう。」

それで……話とは何だ？」

言い淀んでいても仕方が無い。

俺は、その話を切り出した。

「フェイトをなのはと同じ学校に通わせる。許可をくれ」

それを聞いたオッサンは、ムスツとした顔のまま黙り込んだ。

「え……え？」

寝耳に水状態のフェイトの目が、俺と、オッサンの間を行き来する。

「……その必要性は」

「情操教育。社会勉強。何だったら、友達作りでもいい。」

……子供が学校に通うのに、それ以上の理由があるか」

荒療治かもしれないけど、フェイトの人見知りは非常にまずい。

三つ子の魂百まで……というわけでは無いが、幼少期の人格形成はその後の人生に大きく影響する。

もしこのまま人見知りをひきずってしまったら、損をすることはあっても、得をすることは無い。

「……」

「……」

何も語らず、無言で視線をぶつけ合う。

「……」

「……」

オッサンは俺の真意を凶ろうとしているようだ。

俺は、探られて痛いような腹は無いが……ここで目を逸らしたら、

オッサンは

退室してしまうだろう。

じりじりと、プレッシャーがのしかかってくる。

「……フェイト・テストロッサ」

と、オッサンがフェイトに話を振った。

「は、はいッ!？」

びくつ、と背筋を正す。

「この話について、事前に説明はあったか？」

「ううん」

「……」

じろつ、と見られる。

「い、いいえっ!なかった、テストッ!」

……おお、フェイトが敬語使つてるところ、初めて見た。

「何故、本人に事前に話をしなかった」

「……先に言ったら、逃げると思って」

フェイトの逃げ足は、馬鹿に出来ないのだ。

「馬鹿者が」

心底見下した目と口調だった。

「うぐ……」

このクソオヤジ……!」

「……すみません」

けど確かに、話しておかなかった俺に非がある。

「では、フェイト・テストロッサ。今、この場で聞こう」

最初に言っておく、と前置きする。

「貴様には、この世界の教育機関に通う義務は無い。

貴様はまだ事件の重要参考人で、被害者であり……被保護者なのだからな。

自分の意思で、自分の意見を答えるがいい」

「……」

フェイトが、揃えた膝の上で、きゅっと拳を握った。

「貴様は……その小僧が言うように、教育機関に通いたいか？」

……フェイトの言葉を待つ。

フェイトは、自分の握りこぶしに目を落しながら……言った。

「ボクは……しょうじき、こわい」

「……」

「知らないひとばかりいるのもこわい。そのなかですぐすのもこわい」

……口を出したい衝動をぐっと抑え、見守る。

「でも、」

フェイトが顔を上げ、オッサンの厳つい顔面を見る。

平静を装っているが、本当は怖くてたまらないんだろう。

かち、かち、と、歯が震えてぶつかる音が、わずかに聞こえる。

「それを、ひでとがやってみろ、っていうなら……ちゃんと、いみがあるとおもう、から」

つつかえつつかえながら……

「ボクは、がつこうに、かよいたい……です」

ちゃんと自分の意見を、言いきった。

「いいだろう」

「……はい？」

まさかの、ノータイム即決だった。

おいおいおい……マジかよオッサン。

いや……もしかして、最初からオッサンも準備していたんじゃない……って、それは考えすぎか。

「あ……ありがとうっ！」

ぱあっ、と顔を輝かせて喜ぶ。

じろっ。

「……ゴザイマス」

睨まれ、敬語に修正するオチがついた。

「明日、青二才に正式に許可を出してやるっ」

「……俺、てつきり断られると思ってただけだ」

「貴様が勝手に決め、フェイト・テストロツサの本意でなかったのなら、な」

すっくと立ち上がり、俺の目の前を通過。

……やっぱ、思った通りの人だ。

「ああそうだ、レジアスのオッサン」

退室間際のオッサンを呼び止める。

「何だ、小僧」

何度もオッサン呼ばわりしたにも関わらず、キレず返事をするあたり、

意外と大人物なのかもな。まあ、それはさておき。

「搜索隊のメンバー……大部分が、あんた直轄の部隊から出してくれたんだってな」

それこそが、俺がこのオッサンを信用している根拠だ。

「感謝してる」

「……知らん。ゲンヤが勝手にやったことだ」

……大概素直じゃねーよな。

そのゲンヤさんとやらがどんだけ偉いかは知らんけど……上官であるオッサンの許可無しに、管轄外で隊員を動かせるわけ無いだろ。

「ありがとよ。いつか、借りは返すから」

オッサンは、フン、と鼻を鳴らした。

「精々、こき使わせて貰うとしよう」

捻くれた言葉だけど要は、オーケーだ。

……意外と俺は、このオッサンが好きだったりするのだった。

さてさて……

所変わって、マリーのラボ。

……ところで、ヴィータはいつもここで何をしてるんだろうな。ドアを潜り更に、小型のポータルを通る。

「おい、無事かヴィータ」

うわ…… 前来た時より、更に汚くなってる。

「よっす。久しぶりー」

がちやがちやとガラクタの山を掻き分け、部屋の主の元に行く。

「……あれ？」

が、マリーはコンソールから顔を上げない。

「おい、マリー。マリー？」

肩を揺する。

「……」

ゴトンッ、と、頭が卓に落ちた……

「……し、死んでるッ!」

「……勝手に、殺す、な」

あ、生きてた。

「なんだ、寝落ちか？」

「ああ、うん……ついノツちやって……」

ふうん……マリーが寝落ちするなんて、相当なもんだ。

「何の研究だ？」

マリーは、眠そうな目を「しごしご」擦り、面倒臭そうに言った。

「……グラーファイゼンの、機能拡張」

グラーファイゼンの？

「……用語で言っても伝わらないだろうから簡単に説明してやるよ、対象物を魔力で再現する、

エミュレートプログラム……」

……よーわからんな。

「ぶつちやけ、どんなプログラム？」

「……ぐー、ぐー」

ありやりや……まーた寝ちまったよ。

しばらく起きないなこれは。

「あ、ヴィータどこだっけ？」

目的を忘れるところだった。

「あ、ひでと、こっちだ」

くいくい、と袖を引かれる。

研究用具に埋もれつつある簡素なベッドの上で、ヴィータが身体を丸めて眠っていた。

トレードマークの三つ編みは解かれ、シーツの上に広がっている。

「……ったく、だらしねーな」

起こすのは……やっぱり止めておこう。

目の下に、マリーに負けず劣らず濃い隈が浮いている。

軽い身体を抱え上げる。

「回収完了。よーし、帰ろうぜ」

「おー！」

廊下を歩いていると、たまに同員とすれ違うんだが……

「ちわー」

「おおお、お疲れ様ですっ！」

手を挙げて挨拶したというのに、直立不動の敬礼という謎のリアクションが返ってきたり、

「あ、どーも」

談笑している三人組に声を掛けても、

「……お勤めご苦労様です！」

『休め』の姿勢で出迎えられたりする。

「はああ……」

やーな噂が独り歩きしてるな、これは。

憂鬱だ……

ばふっ。

「おっ、と……」

いきなり背中に重量が発生し、バランスを僅かに崩した。バランスの発生源は、言わずもがな。

「フェイト、どうした？」

「んーん、べつに？」

ニコニコ笑うだけ。

気分の問題だろう。

前にヴィータ、背中にフェイトを引っ付けて帰ってきた俺を、なのは、ユーノ、

アルフ……三人の爆笑が出迎えた。

「ふうん……見たものを魔力で再現、ねえ」

夕飯のかに玉を白米と一緒に飲み込み、なのはが興味深そうに呟いた。

「ああ」

メシの匂いに釣られて目を覚ましたヴィータが、得意げに頷く。

「んじゃ、バルディツシユもさいげんできるのかな？……もぐもぐ」

「フェイト、口の中のもの飲み込んでから喋りなさい」

「あうー……」

なのはに注意される。

「あー……できる、とは思っぞ？多分」

多分？

ヴィータは、ついつつ、と目を逸らし、ぼそぼそつと言った。

「……実を言うと、使い切りのプログラムなんだわ」

「……一見万能なのに、使い辛いことこの上ないな。」

「しかも、マリーが徹夜で超アップパー気分な時に書いたプログラムで、

本人も記憶が定かでは無いって」

追加増産も無理かよ。

「じゃあ、何に使うの？」

「ふっふっふ……」

不敵な笑いを浮かべ、言った。

「アタシの、騎士甲冑だ！」

「騎士……」

「甲冑……？」

なんだそれ？

「僕たちが言うところの、バリアジャケットのことだよ」

無限書庫から得た知識で、それに答えるユーノ。

「ベルカのアームドデバイスは、頑健な造りと引き換えに容量が少ないんだ。

だから、バリアジャケットは一つの形状のみ、というのが一般的だったらしい」

へえ……そういう考え方も有りなんだ。

フェイトみたいに、用途ごとに用意はしなかったんだな。

「古代ベルカの王達は、直属の騎士に甲冑を与えるのが通例だったんだって」

ほう……まあ、王はいないんだし、自分の好きにさせていいだろう。

食後……

なのはとアルフが洗い物、俺とフェイトとユーノは雑誌や漫画や古書を広げている傍ら……

「……」

ヴィータが真面目くさった顔で、少年漫画のページをぱらぱらとめくる。

その手には、何故か起動状態のグラーファイゼンが。

例の、『超カッコイイ甲冑』を、選んでいるらしかった。

「獅子座、天秤座……は、安直過ぎるな……」

……聖闘士〇矢か。

確かにアレはカッコいい。

ウキウキと吟味するヴィータを見て……土産の存在を、すっかり忘れていたことに気が付いた。

「ヴィータ」

「んー、何だい？」

「土産あるぞ。こっち来い」

「どれどれ……」

この時、気づくべきだったかもしれない。

ヴィータはグラーファイゼンを起動させていて、かつ、例のプロ
グラムを走らせつつ放しだった、
ということに。

「ほら、これ」

昼間買った、綺麗なドレスを広げて見せる。

「……………アタシに似合うか？」

予想していた通りの反応だった。

「だーいじょぶ！なのはのお墨付きだ！」

「……………へ、へへ。なんか、照れ臭いな……………」

ドレスを受け取り、身体に合わせる。

「でも、サンキューな。大事に着るぜ」

「……………」

ピカッと、グラーファイゼンが輝き…………

『……………形状記憶、完了しました』

……………おい待て。

「あ、アイゼン！！今、何をした！？」

『主の騎士甲冑を形成致しました』

「はぁッ！？」

『？ そちらの衣服が、お気に召したのでは？』

「ちげえよ！」

『まあ良いではありませんか。よく似合うかと』

「良くねえよおおおおお！？」

……………変態マユと関わりすぎた影響で、グラーファイゼンがアホになっ
ていた。

「まさか……………！」

……………バリアジャケット……………じゃなくて、騎士甲冑を展開する。

「う、あ、あ……!!」
ワナワナ震え、姿見に目を移す。
そこに写る自身の姿を見て……

「……ぎゃー……」

……可愛らしいドレス姿で、ムンクの叫びを上げた。

第八十五話

たつたつたつ。

「、はあっ、はあっ………！」

「ふうっ、はあっ………！」

九月一日。その早朝。

たつたつたつ。

「ぜーっ、ぜーっ………！」

「はひー、はひー………！」

今日は、私……高町なのはが通う、海鳴第二小学校の始業式の日だ。

まだ暑さが残る夏の朝。

背中のランドセルには、各種宿題。

教科書の類が入っていない鞆は、いつもよりも軽く、新学期への足どりを軽くしてくれる。

さあ、学校に着いたら、望に会ってお喋りをしよう……等と、気楽に考えていた私は何故か……

……死に物狂いで逃げるフェイトを追って、学校とは逆方向へ走っていた。

「ま……まあてええええ………！フェイ、トおお………！」

「い……や……だ………！」

この半年余りで、私とフェイトの体力差は随分と縮まった。

だから、ここまで泥沼な追いかけっこが出来るわけだ。
ぜえはあ。

「待てっつて、言ってる、でしょ……!!」

昨日、お偉いさんに意思表示したんじゃないの……!!?
だばだばと、スタミナ切れ寸前の不様な走り方で、必死に逃げている。

「べんきょうなんて……まっぴらごめんだ〜!!」

……どうやら、『学校』というものを大幅に勘違いしていたらしい。

フエイトにとっての『学校』とは、クラスメイトとコミュニケーションを取り、
対人コミュニケーション能力を身につける場所……だと思っていたみたい。

……それは幼稚園だろう。

回天桜花を投げれば、とりあえず捕獲できるけど……そのために、
秀人さんが選んであげた服に
穴を空けるのは、心苦しい。

けど、どうにか捕獲して、職員室まで連行しないと!

時刻は、間もなく8時を回る。

始業式が9時から……まあ、これはサボってもいいとして……フ
エイトの顔見せだけは、
遅らせるわけにはいかない。

「待ちなさいい!」

「カンジもサンスウもシャカイもやだー!」

だっ、と最後っ屁のように加速した。

くそっ、往生際の悪い……!!

何か無いか、何か!

住宅、コンビニ、八百屋、金物店……金物！
ざかざかと物色し……

「あつた！」

テントとかを固定する、『J』字型の金具！
何本かを引っつかみ……！

「この、怠け者がああああ……！」

投擲……！

スコーン……！！

うまいこと、金具の曲線部分がフェイトの手首を捉らえた。
ふふふ……兄さんの真似してみたけど、うまくいったぞ。

「うー……！うー……！」
深々と街路樹に突き刺さっている金具を、抜こうと躍起になっている。

「さーて、と……」
時間は、8時20分。ここから学校までだと、歩いて一時間、走っても40分。

「ほら、観念してさっさと行くよー！」
「……はい」
腕を組み、もう一回方向転換……あ。金具、返しておかなきゃ。

学校に着いたのは、9時ちょっと過ぎ。

「おはようございまーす」
職員室の戸を開ける。

あ、いた。

「富山先生、久しぶりー」

「高町さん……何で遅刻するのよー……?」

久々の富山先生は、いつも通り半ベソだった。

「……あれ、そういえば、何で職員室に?」

今はまだ、始業式の真っ最中だったはず。

「聞かないで……」

……まーた何かやらかしたな。

説明して、ずっと後ろで小さくなっていたフェイトを引っ張り出す。

「というわけで、転校生です」

「あなたが、テストロッサ、さん?」

「……」

「……あの?」

「……」

たたたつ、と、また私の背中に隠れ、じいつ……と、先生を観察する。

「……」

「……初めまして、テストロッサさん」

「……」

「……お返事は、してくれないのかな?」

「……」

「て、照れ屋さん、なのかなー、なんちゃって……あはは」

「……」

がんばれ先生。がんばれ担任教師。

「……高町さあん、」

弱ッ!!

「はあ、仕方ないなあ……」

「フェイト」

「……なに」

「秀人さんと約束したでしょ？ 自分から、挨拶しなさい」
手助けはするけどね。

「……わかった」

感情に蓋をしたように、無機質な声で答える。

「ああ……秀人さんの行動も、納得だ。」

「……フェイト・テストロツサ」

「ぼそつ、とそれだけ言い、黙り込んでしまっ。」

「……これは、非常にまずい。」

下手をしたら、相手によっては反感を買ってしまう。

「ああ……そういうことね」

先生も、得心いったように頷いた。

「テストロツサさん、今日からよろしくね」

「……ん」

「じゃあフェイト、教室で待ってるからね」

「え……でも……？」

「教室で、待ってるからね」

「……うん」

心細いかもしれないけど……ここは、厳しくしておかなくちゃ。

後ろ髪を引かれる思いもあるけど、フェイトを職員室に残し、教室にやって来た。

ガラスと扉を開けると、クラスメイト達が一斉に私に視線を向けた。

「あ、なのは！」

その中から、望がぶんぶんと手を振ってきた。

「おはよ、望」

席に座る。

「あんた、始業式からサボるとか……」

「あ……遅れた理由は多分、後で先生から説明があると思つよ？」

「ふうん……あ、そうだ！」

ぱん、と手を打ち、話題を替える。

「今日、転校生が来るんだって！」

うん、まあ……知ってる。

「へえ、どんな子だろうね」

だから、ざわついているのか。

「ほんと、二人も転校してくるなんて珍しいよね！」

「……え？」

二人？

何それ聞いてない……

困惑しているうちに、先生が廊下の向こうからやってきてしまった。

……まあいいか。別に、私には関係ない人なんだろうし。

「はい、座つてー！ホームルーム始めまーす！」

クラスメイト達は、各々の席に座っていった。

「ふふ……もう皆、知っているみたいね」

にっこりと笑う先生に、クラスメイトの一人が突っ込んだ。

「だって今朝、さっちゃんがバラしちゃったじゃん」

「うっ……」

思い出したかのように、口々にいらん情報をバラしていく。

「普通バラさないよね」「いくら初めての転校生だからってはし

「やぎすぎ」

「俺達よりテンション高かったよね」

「う、ううう……そうよ！」

口を滑らせて、長谷川先生に怒られて、職員室でお留守番だったわよー！」

だから職員室にいたんだ……

「それじゃあ、入ってきて下さい」

扉を開ける。

「……」

まず、最初に入ってきたのはフェイトだ。

神妙な表情で、教卓の横にトコトコ歩いてくる。

「うわあ……！」

初見のクラスメイト達が、思わずため息をついていた。

まあ……中身を知らなければ、見目麗しい美少女だからね。

続いて入ってきたのは……

「チツ……マジ面倒臭い」

上履きの踵を潰し、ポケットに手を突っ込んだ、

八神はやて、だった。

あまりの落差に、クラスメイトもドン引きしている。

「うわあ……」

……同じ言葉で、こつも響きが違う。

「あぁん……？」

ぎろっ、と睨まれ、顔を伏せるクラスメイト達。

「テストロッサさん、八神さん、自己紹介をお願いします」

「……はいっ」

「チツ……………」

裏返りそんな声で返事をするフェイトと、本気で嫌そうに舌打ちをする八神。

「……………フェイト・テストロッサです。よろしく、おねがいシマス」

おお……………裏返ったけど、ちゃんと言えたじゃないの！

「……………八神はやて。別に、ヨロシクしてくれなくていいから」

……………これはひどい。

重ね重ね、うわぁ、だ。

静まり返る教室を尻目に……………八神は、空いている椅子にドカッと腰を下ろした。

「……………」

何で、よりによってコイツが……………

「……………」

じーっと眺めていると、視線に気づいたのか、頬杖をついたまま、私の方を振り向いた。

そして……………

「……………はん」

嫌みつたらしく、鼻で笑いやがった！ むっかつく……………！

「はぁ……………」

よりにもよって、こんな奴とクラスメイトだなんて……………
先行き、激しく不安だよぉ……………

(あー、かつたりー……)

首を回すと、コキコキと関節が鳴った。

あーあ……何で私が、いまさら小学校なんか……

「……い……ね」「……う」「……か、じゃ……」

途切れ途切れに、私を噂する声がある。

目を向けると、丁度私を不躰に眺めている連中と目が合った。

「」「」

チツ……なら、最初から喋るんじゃねえよ……

「はあ~~~~~」

昨日、リーゼがあんなこと言い出さなければ……

昨日の朝方、剣の鍛練を終え、仮住まいの廃ビルに戻った私達。

「主」

「んー、何？」

味気ないコンビニのサンドイッチをかじりながら休憩していた私に、リーゼが話し掛けてきた。

「以前、高町なのはの個人情報入手したこと、覚えていますか？」

ああ……あの、病院のデータを盗み見た時か。

「うん、覚えてるけど……」

住所とか、いろいろ。

「私の調査の結果、彼女は一日の大半を、『学校』と呼ばれる教育機関で過ごしているようです」

まあ……小学校だから、当然といえば当然だ。

「それで？」

続きを促す。

「潜入し、彼女らの隙を探ります」

ふうん……小学校に、ねえ。

リーゼは変身魔法が使えるから、問題無いつちゃ問題無いな。

「頑張つてね」

と、言つてあげたのに。

何でそんな、不可解そうな顔を……

「主が行くのですよ？」

……え？

「……ごめん、イマイチ聞き取れなかつただけ……」

「主が、小学校へ行き、高町なのはの隙を、探るのです」

一言一言、くつきりと言った。

私が、学校に……？

「ヤだ」

そんな、面倒臭いこと。

「……主、」

「ヤだ。そんな面倒臭いこと……」

そんな時間あつたら、身体でも鍛えているほうが余程有意義だ。

「これは、あなたの計画を成就させる上で、欠かせない作戦なので
すよ」

説得にかかる。

「それを面倒臭いなど言つて切り捨てるなど……」

「……」
どうにも、何かをたくらんでいるようにしか感じられない。

けど、リーゼの企みは、いつも何らかの成果を出しているのも、

また事実だ。

「……………わかったよ」

たまには、リーゼの言うことも聞いてやるか。

「こちらが、学用品一式となります」

とんつ、と、どこからともなくランドセルを取り出し、目の前に置く。

……………転校手続きはまだだから、しばらくは無理だけどね。

「ご心配なく。昨日済ませてきました」

「はあっ!?!?」

昨日!?!?

「リーゼあなた……………最初から……………」

……………」
無言の肯定だった。

なんか、行動が読まれていたっぽい。

……………そんなこんなで、ここにいます。

釈だけど……………高町の阿呆面が見られただけでも、来た意味はあつたかもしれない。

「ちよつと、八神」

ん……………?

今の、念話……………?

それに多分、声の感じからして……………

「八神、聞こえてるんでしょ?」

「……………チツ。何の用だよ」

高町だ。

『……話があるの。ホームルームが終わったら、屋上に来て』
『……これは、いきなり訪れた好機か？』
『……いいぜ。お前こそ、逃げるんじゃないやねえぞ』

ちあて……ちよっくら、学生ゴッコでも始めてみますか。

第八十六話

「はい、それでは、今日はこれで終了です」

先公のクソツタレなホームルームを聞き流していたら、今日の終了時刻になった。

帰る……前に、アレだ。

「……」

「……」

同じく席を立った高町と目配せし、教室を後にする。

高町は、同じクラスだった八代望にぺこぺここと謝っていた。

一緒に帰る約束、云々……

「チツ……」

そんなもん、後でいいだろ。

私との用件より優先すべき事柄なんて無いんだから。

「よつす、八神！」

……ぼん、と気安く肩を叩かれた。

ああ……そういえば、あんたも同じクラスだったっけ。

「葉山。何か用か」

今は、お前と遊んでやる時間は無いんだけど。

「用って……用が無いと駄目か？」

「駄目に決まってるだろバーカ……おら、さっさと帰って球遊びしてろ」

「ちえっ……また明日なー」

しっしっ、と追い払って、ようやく教室を出られた。

……つたく、面倒臭い。気まぐれで人間関係広げるもんじゃないな。

「八神、行くよ」

……チツ。結局、高町に追い越されたよ。

「チツ……」

はいはい……

そして、屋上に続く踊り場で、足を止めた。

当然ながら、アニメみたいに屋上が開放されているわけも無い。

「ちよつと待ってて」

……高町は、ヘアピンをポケットから取り出した。

「うちのユーノくん、遺跡探索とかが好きで……」

かちやかちやかちや……

「ピッキングとか、いろいろ教わって……」

かちやかちやかちや……

「お、教わって……あれ？」

かちやガチツ！

「あ

変な音がして……高町の手には、ヘアピンの一部だけが空しく残っていた。

「……バカじゃないの」

「う……うるさいな！いつもは、ちゃんと開けられてるよ！」

あーどうしよー……等と、頭を抱えた。

「……………」
身体強化魔法を発動し、ドアノブを握る。

「ゴキンッー!!」

そのまま、ドアノブを引っこ抜いた。

「開いたぞ」

最初からこうすれば良かったんだよ。

「何してんのよアンタはアアアア!!?」

うるさいなあ……

「行くぞ」

それを無視し、屋上へ足を踏み入れた。

「あっつ……………」

よく考えれば、今はまだ夏と言って差し支えない気温だ。
いくら風があつたとしても、暑いことに変わりはない。
貯水タンクの陰にある、僅かな日影に入る。

「……………で、話って何?」

「どういつつもり」

「なんのことやら」「真面目に答えて!!」

チツ……………うるさいなあ……

「お前に言う必要は無い」

言ったところで、私には何のメリットも無いし。

「何だつたら、力づくで聞き出してみな」

それはそれで、楽しそうだ。

「……そうしたくないから、こうやって聞いてるんじゃない」

「なあんだ……無理矢理聞きたいから、こんな所に呼び出したのかと思った」

「違う。何で、そんな考え方しかないの」

殺すとリーゼが五月蠅そうだな。

「まったく……」

半殺し……いや、三分の二殺しくらいに……

「親の顔を

瞬間。冷えきった殺気が全身を駆け抜けた。

怒りをも置き去りにして、機械的なまでに正確に、その動作を行った。

「……」

壁に、いや、貯水タンクの影に……闇に、手を突き入れる。ズブツ……と沈んだ手が、ゴツツと硬い物に触れる。掴み出す。

「死ねよ……お前」

引き金を、引いた。

パァンッ！！！！

乾いた破裂音。

発射された弾丸は、真っ直ぐに……高町の額目掛けて、突き進んだ。

まったく、なんて奴なんだろう。

私に意地悪をするためだけに、わざわざ転校までしてくるなんて。

「お前に言う必要は無い」

何か理由でもあるのかと思ったのに、何も言いやしない。

「何だったら、力づくで聞き出してみな」

やらないってば。

まったく……

「親の顔を

見てみたい。

そう言い切るより先に、八神が奇妙なアクションを起こした。

影に手を突っ込んで……拳銃を、その手に握った。

「!?!」

極限の緊張は、また私を『あの世界』……倍速の世界へ、引きずり込んだ。

……

銃声が間延びする。

発射された弾丸はおろか、雷管が着火した際の火花も、硝煙も、全てが視認できた。

が。

「ぐ……!!」

身体が、軋みをあげる。

通常の時間の流れに留まろうとする身体を、無理矢理動かしているのだから

当然だ。

音速に近い弾丸は、もう目の前に迫っていた。

「……あああ!!」

左の小太刀、桜花の鞘を、弾丸の進路上に構える。

その時点で、私の意識は、『あの世界』から帰還した。

パギンツ!!

弾丸は鞘の上を滑り、進路を変更。

バチツ、と、私の髪を僅かに掠め、見当違いに飛んでいった。

一瞬の停滞の後……はらり、と、白いものが、落ちた。

「あ、」

それは、帯状の物だった。

「あ、」

白地に、同色の糸で丁寧に刺繍されている。

ばさり、と、地面に落ちた。

弾丸が掠めた跡だろう。焦げたように茶色くなり、千切れてしまっている。

お気に入りのリボン。

母さん達からの、贈り物。

それが……壊された。

「許さない……」

ぼつりと口をついた言葉。

それを認識した途端……怒りが、燃え上がった。

「絶対に、許さないッ！」

八神は、殺意に満ちた目で、私を見ている。

……どこかで、みたことがある気がする。

けど、今はそんなことどうでもいい！

「お前を殺す」

「やれるもんなら……やってみなよ！」

再び照準を合わせ、第二射！

パァンッ！！

今度は、最初から予測できた。

来ると分かっていたいれば、銃口の向きから射線を割り出せる。

「……」

パァンッ！

無感動に、第三射。

「何度も同じ手を……！！」

……喰らうわけがない。そう、浅はかに考えすぎていた。

ぐいっ

「えっ！？」

右足が、何かに掴まれた。

「バインド！？」

……いや、違う。

足元の影が、三次元的に形を成し、私の足を捕縛していた。

パァンッ！

「くっ！」

「ガイーンッ！」

「また、鞘で防ぐ。」

「放せ、このっ！」

「ザンッ！」

回天に魔力を纏わせ、立体の影を切り捨てる。

拘束が消えた一瞬で、影から飛びのく。

切り捨てた筈の影は、何事も無かったように再生した。

夏の太陽は、真上。

自分の影は、足元に小さく存在している。

「レイジングハート、足元の警戒、お願い」

『All right』

久しぶりの実戦だ。

「シュート！」

試しに、アクセルシューターを打ち込んでみる。

「バシユッ！」

魔力弾は、影に侵入するやいなや、立体の影に喰われた。

「……………」

八神のテリトリーは、あの影の中か。

「パァンッ！」

「、当たらないってのー！」

目測で弾を避ける。

「……………」

八神は、手にした拳銃をじいっと見つめ……………ぼいっと放り出した。

そして再び、影に手を突っ込み……………新たな得物を掴み出す。

今度は、二回りほど大振りな……………ええと、なんだっけ！？

『サブマシンガンです』

「そう、ソレ！」

バラバラバラバララッラッラッ！！

「きゃああああっ！！」

拳銃とは段違いの威力！

屋上のコンクリートが、ガリガリ削られていく！

砲撃が封じられている状態じゃ、ラチがあかないよ！

「レイジングハート、突っ込むよ！！」

『All light』

こうなったら、無茶を承知で接近戦だ！

バラバララッ！！

八神も、そこまでのサブマシンガンを使いこなせていないみたいだ。

本当なら、撃ちながら薙き払うように使っただろうけど、同じ方向にしか撃っていない。

バラバララッラッ！！

「フッ！！」

回避！

掃射を止め、再び私に照準を合わせる。

僅かに……けど、決定的に出来た隙。

(今ッ！！)

踏み込みと同時に、小規模インパクトで加速！

ガシャンッ！！

フェンスを蹴って、三角跳びで切り込む！

「はああああっ！！」

立体の影が動くより速く、八神の目の前に！
もらった！

「それを、」

この距離なら、引き金を引くより、剣の方が早い！

「……………待っていた」

ガキイインッ！！

え……………？

「……………近距離なら、勝てるつもりだった？」

振り下ろした回天桜花は、サブマシンガンを捨てた八神の右手が握る、少し大振りな剣に阻まれ、届いていなかった。

八神のテリトリーに踏み込んでしまった。

「浅はかにも、」

や、ば……………！

「……………程があるッ！」

八神の左手、闇色の魔力刃が振り抜かれる！

「くっ！？」

咄嗟に桜花を右手にパスし、防御魔法を展開！

パキイインッ！

破られたけど、なんとか無傷で回避に成功！

『マスター』

「……………うん、ごめん」
正直、嘗めていた。

戦力分析も済んでいないのに、格下と戦っているつもりになって
いた。

「……………」
「……………」
もう、油断はしない。

八神も、両手で剣を握り、正眼に構える。

あの余裕から察するに、まだ何か隠し玉があると見た。
でも、私がすべきことは変わらない。

(斬れる距離まで近付いて、斬り伏せる！)

「……………」
「……………」
睨み合う。

夏の日差しが容赦無く照り付ける。

「……………」
「……………」
汗が一滴、額から顎を伝い……………

ポタツ……………
地面に落ちる。

「……………」
「……………」

お互い同時に、飛び出す！

「はぁあぁっ！…！」
「はぁあぁっ！…！」
「おおおおっ！…！」

八神の剣と、私の刀がぶつかる……………直前。

『Photon Lancer』

雷撃が、私たちの間に割って入った。

バシユンツッ！！

直撃を避けるため、跳びのく。

再び、間合いが開く。

「……誰だッ！ブチ殺されてえのかッ!?」

八神の、本気の恫喝。

「……なにしてるの」

横槍を入れた人物から、静かに、冷たい声が発せられる。

「……フェイト、これは、」

「……なにをしてるの、二人とも」

「チッ……!!」

八神が、再び取り出したサブマシンガンの照準をフェイトに合わせる。

「フェイト!!」

ぎちっ、と、引き金のスプリングが軋む……より速く。

ガキンツッ!!

バルディッシュの魔力刃が、サブマシンガンを両断した。

ギチッ……

「うぐっ……!!」

そのまま、バルディッシュを八神の喉元に突き付ける。

「……キミがどんな動きをしても、ボクが喉笛をかつ切る方が速いよ。」

……わかるよね。

大人しくして「」

「……チッ」

八神は渋々、剣を下ろした。

「なのは」

……いつもと違う、爛々と光る紅い瞳で、私を見据える。

「武装を解除して」

「……」

いくら、フェイトの言うことでも……聞けない。

「こいつは、許さない……!!」

つまらない挑発で、私の大事なものを壊した。

「……」

フェイトは、片手で八神を牽制しながら、もう片方の手で、髪を結わえていたリボンを解いた。

「はい」

「え……」

「千切れたりボンが直るまで、貸してあげる」

……

「……で、ヤガミ」

「……」

「ヤガミは、何が気に入らなかったの」

「……ふん」

答える義理はない、とばかりに、鼻を鳴らす。

「どうせ、つまらない挑発……」「なのは」

ぴしゃりと遮られた。

「今は、ヤガミが話す番だよ」

うぐ……

バルディッシュを下ろすフェイト。

「チッ……つまらない邪魔が入った」

だんっ、と跳び、フェンスの上に着地する。

「……」

フェンスの上に器用に立ったはやては、ポケットに手を突っ込ん

で……高みから私たちを見下ろしている。

「……まあ、今日のはほんの挨拶だよ」
皮肉な笑みを作り……

「それじゃあ、高町さん、テスタロツサさん……また明日」

ぽんつ……と、身を投げた。

「……！」
フェンスに駆け寄って……見えたのは、漆黒の翼。

『……飛行魔法、及び、隠蔽魔法の発動を確認しました』

「……」
屋上に残されたのは、私とフェイトだけ。

「帰ろうか」

やがて、どちらからともなく、そう口にした。

「なのは」

その、帰り道。

私にリボンを貸したお陰で、ストレートロングな髪型になったフェイトが、振り返らず口にした。

「……あんまり、心配かけないで」

アルフから聞いた話だけ……

一月前に初めて守護騎士が来襲した際、手続きの問題で、フェイトは初動が遅れた。

それは、フェイトでは無関係な所で、非はない。

けど、フェイトは相当悔やんだらしい。

「……ごめん」

フェイトには、心配ばかり掛けている。

でも……あいつとは、いずれ決着を付けてやる。

内心のみでそう誓い、家路に着いた。

第八十六話（後書き）

乗せ換え用のエンジンが届いたのに作業ができん、ゝゝ、生殺しとは
まさにこのこと。

第八十七話（前書き）

クリスマスまで一月切った。急げ急げ。

第八十七話

「……よし、」

無限書庫の空間に浮かびながら、ユーノは確かな手応えを感じていた。

この、まさに無限としか言いようの無いデータベースの検索プログラム、その試作第一号が、ようやく完成したのだ。

これが稼動すれば、手作業で一冊一冊、確認する手間が省け、大幅な効率アップが図れる。

遅れに遅れていた、闇の書に関する詳細データを揃えることができるのだ。

「……長かった」

万感の思いを込め、実行キーを押し込む。

ヴアアアアアア………！！

ディスクドライブが高速回転するような音を立て、プログラムが無限書庫全体を走る。

ヒュヒュヒュ………！！

そして、ユーノの目の前に、何冊もの……年代も文体もまちまちな本が飛んで来る。

これらは間違いない、闇の書の打開策に繋がる筈だ。

「…………お、」

と、流石にユーノもふらついた。

「うう…………四徹はキツいか…………」

四徹。

四日間、徹夜。

このプログラムの基本を作る時間を含めたら、それを遙かに上回るだろう。

…………自分はこの先、戦闘の役には立たなくなる。

ユーノの冷静な部分は、そう予測していた。

「…………」

男児としても、平均を下回る体格。

結界魔法は、そこそこの力があると自負してはいるものの…………言ってしまうえば、代わりはいくらでもいるのだ。

戦闘は…………言わずもがな。

なら、自分が戦闘以外で出来る…………いや、自分にしか出来ないことは何か？

…………それは、データの蓄積・分析。

チームの頭脳として、力を尽くす…………そう、決めていた。

「…………続きは、一眠りしてからだな」

プログラムは、何とか完成にこぎつけた。

順調だ。

手早くコンソールに入力し、報告する。

「うあ…………」

顔色は最悪で、今にも死にそうだ。

「…………」

ゆらゆらと、無重力に揺られるままに…………眠りに落ちてしまった。

……
音も無く、無限書庫に入り込む、人影。

「……」
スーツのような装束に……仮面。
『追跡者』である。

違和感を感じさせないレベルで、『追跡者』はユーノの眠気を増幅し、無限書庫に堂々と入り込んだ。

そして、何冊かの本を手にし、ざっと流し読み。

「……」
暗記術でも駆使したのか、一切のコピーを取ることも無く、中身を盗む。

「……うあ、」
「、」
……ユーノの意識の覚醒を察知し、音も無く、無限書庫から消えた。

「あ……いけない、帰らなきゃ」

目を覚ましたユーノは、本をリストに登録し、施錠。
ふらつく足取りで、窓口まで鍵を返却しに行く。

ほぼ顔パス、鍵を持ち帰っても問題が無い程度の権限は与えられているのだが、

律儀な性分か、その都度、貸出・返却の手順を踏んでいた。

「……ユーノ・スクライア司書です。鍵の、返却を」
窓口にはいた女性局員は、ユーノの顔色を見てギョツとした。

「ゆ、ユーノさん、大丈夫ですかあ!？」
少し舌足らずな声。

気弱にオドオドした、どこかウサギかハムスターを思わせる物腰。

……何故か繕われた制服。

「……ええ、大丈夫。意識がハッキリしすぎて空でも飛びそうですよ……フィアットさん」

「あんま大丈夫じゃない気がします……ええと、無限書庫の鍵の返却ですね……はい、確かに預かりましたよ」

「ども……あ、そうだ、フィアットさん、」

「はい？」

「なのはが、制服に穴開けちゃったお詫びに、食事でもしないか……と言っていましたよ」

ずてんつ、と、椅子からコケた。

「かかか、閣下が!？」

「……閣下？」

聞き慣れない言葉に、ユーノは首を傾げた。

「おー、二曹。閣下からのお誘いかー?」「有給休暇、申請しといてあげよっか?」

窓口にした他の局員らから、からかいの言葉が飛ぶ。

「大きなお世話です!」

ぷりぷりと怒るフィアット。

「……まあ、考えておいて下さい」

眠気が洒落にならなくなってきたユーノは、秀人たちが待つ家に帰って行った。

「……ふむ、ご苦労」

閉め切られた執務室にて、追跡者……いや、今はアリア・ロツテの二体に戻った使い魔が、先程の本に記されていた内容を、主……

グレアム提督に伝えた。

「あの、お父様……」

アリアが、主を呼ぶ。

「何だね？」

資料から顔を上げず、グレアムが答える。

「……どうしても、やらなければ……ならないのでしょうか」

「アリアッ……！」

ロッテから、短く叱責が飛ぶ。

が、一度口にした言葉は、その後の言葉も、引きずり出してしまった。

「今代の主は、素養こそあっても、管理外世界の民間人で……子供ではないですか！」

「だか主だ」

「……！」

アリアは、言葉に詰まった。

「既に、相当な数の人間を手に掛けている。

……同情の余地は無い」

「……でも、「アリア！」

これ以上は……と、ロッテが鋭く呼び止める。

「下がれ」

短く命令され、ロッテは、アリアを引きずるように、執務室から退室していった。

「……」

グレアムは、デスクに肘を突き、深くため息をついた。

ビーッ！

と、何かのコール音が鳴る。

「……………」
無言でコンソールを叩き、それに応じる。

『……………進行状況はどうか』

挨拶も無しに、しわがれた老人の声が漏れだす。

「これはこれは……………カスパール議員」

『……………進行状況はどうか』

しわがれた声で、それだけを繰り返す。

余計なやりとりは不要、ということか。

「闇の書は、徐々に活性化を始めております。もう間もなく、かと」
『……………デュランダルは』

「外壳はほぼ八割、内部は六割前後」

『急げ。そして、今度こそ……………完成されし闇の書を、我等に捧げよ』

「ええ……………全ては、最高評議会の意思のままに」

進行状況を聞き終えたカスパールは、ただ無言で通信を終えた。

恭しく頭を垂れていたグレアムは、くつと面を上げるその顔には。

「ふん……………老害が」

隠しようも無い、侮蔑が浮かんでいた。

「闇の書を……………完全なる魔導を手にするのは、貴様ではない」

コンソールを操作し、ある設計図のような図面を3Dで表示する。

……デバイス、だろうか。
杖のような、長剣のような、奇妙な造形の武装。

「この、ギル・グレアムだ……！」

『DURANDAL』

その、伝説の聖剣と同名の武装を前にして……グレアムは、笑った。

……高町たちがいる小学校に通い初めて、一月あまりが経過した。
十月十日。

予想外だったもう一人……フェイトとかいう名前の金髪バカは、
なんとかクラスに溶け込もうとしているらしい。

……最近ようやく、高町とか八代とか葉山を介さずに、クラスの
ガキどもが話し掛けているのを横目で見かけた。

「苦労なこった……上っ面だけの付き合いなんて、するだけ徒労
に終わるのに。」

「……」

さ、かーえろつと。

今日は、ちよつと野暮用だ。

「八神、まだ三時間目よ」

「あア……？」

八代か。

「ほつとけ。私は忙しいんだよ」

「ちよつと、八神……！」

ドアを閉め、シャットアウト。
さーて、帰るか。

……私の家が吹っ飛んで、しばらくはホテルだの空き家だの、転々としてたけど……正直飽きた。

そろそろ、根を張って寝泊まりしたい。

……というわけで、賃貸アパートを探すことにした。

金を幻覚で水増しして、家の一件でも買ってほしいんだけど……
リーゼが怒るし。

狡っ辛い真似をするな、って。

……物件は既に見つけていて、今日は大家に顔見せ、って段取り。
まあ、渋ったら暗示で了解取るけどね。

それに関しては、リーゼからオーケーを取ってある。

日当たり良好な、八畳一間。バス・トイレは別と、しっかりした作りだ。

リーゼと落ち合い、不動産屋へ。

奥のソファにかけてしばらく待つと、店員に続いて……杖をついた作務衣のジジイが入ってきた。

「可愛らしいお客さんだの。よっこらせ」

好々爺、という表現で、間違っていない。

今の私の姿は、幻覚を掛けて、二十歳前後に見せ掛けている。

リーゼに似せたから、『可愛らしい』という表現も、まあわかる。

「ほう。親子にしては、歳が近いのう？ かといって、姉妹にしては歳が離れておる」

……おい。今なんつったこのジジイ。

「……！」

リーゼも、一瞬だけ強張った。

幻覚が、効いていない……？

「……！」

目に魔力を通し、暗示を……！

「ほっほ……やめとけ、若いの」

これも、効果無し！？

「妖しの術は知らんが……慣れておる。効かんよ、ワシには」

……意味わかんない。

ジジイはすつとぼけた様子で、ヒゲを弄っている。

「どうやら、堅気ではなさそうだのう……参った参った」

暗示も、幻覚も効かない。

このままじゃ、話が無かったことになってしまっ。

（なら……！）

ダンッ！

ソファを蹴り、ジジイに肉薄する！

（力づくで、従わせてやる！）

固めた拳を、ジジイの顔面に……！

「おぬし……鍛えがいがありそうだのう」

「そういえば、さ」

夕飯の支度をしながら、傍らの秀人さんに聞く。

家賃がどのくらいのもの、という話から、気になった。

「この大家さんって、どういう人なの？」

家賃は口座引き落としらしいから、見たことが無い。

前に聞いた話だと、家賃収入で暮らしている御隠居さん、らしいけど。

「変な爺さんだよ」

具体的に。

「え？うーん……このアパートに住んでるけど、あんまり帰ってこないで、あちこち放浪してたり……」

旅好きな人……別に、変じゃない気がするけどなあ……

「基本、ここには自分が気に入った人しか住ませない」

信吉さんって男の人と、隼さんって女の人、だったっけ。

「秀人さんは、何で気に入られたの？」

「俺はカントクの紹介で……あと、そうだ」

ぼん、と手を打つ。

「『鍛えがいがありそう』……って言われたんだ」

「き、鍛え……？」

それって、まんまの意味で？

秀人さんは、あっけらかんと言った。

「俺の格闘とか、殆ど爺さん仕込みだぞ」

ふえー……

「……強いの？」

正直、秀人さんより喧嘩が強い人なんて思い浮かばないけど。

秀人さんは眉間に手を置き、少し考え、

「魔法抜きなら、負けるだろうな」

あっさりど、そう言った。

「……会ってみたいなあ」

少し、どういう人なのか気になるところだ。

ピリリリッ！

と、秀人さんの携帯が鳴った。

片手で開き、確認し……

「何々……今、こっちに帰ってる最中。土産があるから、楽しみに……？」

なんのこつちや」

それじゃ、すぐにでも会えるの？

急な話だなあ。

まあいいや。

そして、夕飯の支度が出来て、玄関先で待っていた。
道の向こうから、作務衣を着たお爺さんが手を振って……

「ほっほっほ。帰ったぞーい」

「……爺さん、ソレ、何」

秀人さんが、私の気持ちを代弁した。

「何って……」

くいつと、細い手に吊り下げられていたのは……

「土産だがのう？」

顔面に青タンを作って白目を剥いた……八神だった。

「……」

「……」

「……」

反対側の手で持たれていた黒猫が、弱く鳴いた。

第八十七話（後書き）

どうせクリスマスとか出歩かないからいいもんねー！（泣）

第八十八話

ぼやーっ……とした意識。

まどろみの中をフラフラする、何とも言えない心地良さ。

……それを妨げる、右眼窩の痛み。

触るまでも無く、見事な青タンが出来ていることだろう。

「……はっ!？」

思い出したッ!

がばつと身体を起こす。

唐突な行為のせいで、右目の青タンがズキンッ!と鋭く痛む。

「いってて……!!」

「あ。主、目が覚めましたか」

寝起きでぼやける視界の中、艶のある漆黒の毛並みが揺れていた。

「リーゼか……」

「はい。お加減は、如何ですか?」

「最悪だクソツタレ!」

くそ、あのジジイ……!!」

よくも私を、タコ殴りにしてくれやがったな!

ジャキッ!

魔剣を現出させ、握る。

「切り刻んでやる!」

辺りを見回して、状況を確認。

和室の一間に、寝かされていたらしい。

襖の向こうから、話し声と人の気配!

ドバンッ!

襖を蹴破る！

案の定、そこにはさっきのジジイがいた！

「死ねええええッ！！」

「甘いわ」

ぱしんっ！

魔剣の鋭い刃は……ジジイの親指と人差し指で、白刃取りされていた。

「このっ……！！」

万力みたいに、魔剣をがちり挟みこんで解けない！

……そして、また。

「少し血を抜け、若いの」

ドボオッ！！

「あっ、」

突如、腹部に生まれる灼熱。

それが、殴られた衝撃だと理解した瞬間、灼熱は零度に変わり、体中の活力を根こそぎ奪い去ってしまった。

「ぎ、うっ……！！」

畜生……！！

「おい、爺さん！やりすぎだ！」

……今更気付いたんだけど、こっちの部屋にはジジイ以外の人間

が複数いた。

それも、よりにもよって……

「なあに、死ぬほど強くはやっくらん。ちいっと撫でてやっただけじゃよ……」

ま、死ぬほど痛かろうかの」

「だから、それがやりすぎなんだっつーの！女の子だぞ！」

ジジイに気安い口調で抗議する、秀人。

「……八神、殺す気マンマンだったでしょ」

高町。

「だ、だいじょーぶ？ ヤガミ……」

金髪バカ。

「……おい、大丈夫かはやて」

秀人が私を助け起こす。

「なん、で、あんた達が……？」

振りほどく気力も湧かず、されるがままになってしまつ。

「……だつてここ、俺ノ私ノボク ン家だし」「」

……嫌な偶然もあつたな。

リーゼは何で、猫モードになつているんだ？

「……申し訳ありません、私も、意識を保っているのが精一杯で、」
念話を通じて、リーゼもまた、このジジイにボッコボコにされた
という事実を知つた。

……妖怪かっつうの。

「まあ、食事でもするかのう」

……ジジイはマイペースに、台所へ引つ込んで行つた。

「偶然つてあるんだなあ……」

食卓の向かいで、秀人が頬杖をついて感心していた。

「まさか、俺達と同じアパートに引越してくるなんて……」
学校に関してはわざとだけど、これは本当に偶然だ。

「……」

高町は、依然として私を警戒しているようだ。

まあ実際、軽く殺し合っただし当然といえば当然か。

テストロッサの邪魔さえ入らなければ、間違いなく私が勝つて
いた。

全く……カンに障る。

「ほんつとに……腐れ縁つてヤツ？」

用がすんだら、こっちから干切つてやる。

「……痛むか？」

「なめんな」

こちらら、伊達にリーゼの鬼特訓受けてねえんだよ。

「……つていうか、何なのあのジジイ。幻覚も暗示も効かないし……」

それが、不可解だった。

魔法の訓練を積んでいるようには見えなかったし、魔力も殆ど感
じない。

なのに、完全にシャットアウトされていた。

「……うーん、」

秀人は、言うかどうか悩んでいる。

「準備ができたぞい」

と、ジジイが皿を両手に、高町とテストロッサの使い魔を連れて、
戻ってきた。

テキパキと料理を食卓に並べていく。

いつも食事はリーゼ任せにしてる私だけど、それが美味しく調理されている、

ということとは分かった。

「なのはが作ったんだ」

「え……？」

この美味しそうな料理を、高町が？

「……そうだよ」

うわぁ……人は見かけによらないというか、何と云うか。ポン刀振り回してる野蠻人、ってイメージしか無かった。

「ほう……」

ジジイも、割と感心していた。

「うむうむ、料理上手なおなごは、良き母になるぞ」

「母、ですか……」

高町は、微妙そうに相槌を打つ。

「……なる気は、無いですよ」

そう、苦笑した。

「ふむ……そうか、残念じゃ」

独り身だと面倒で、買って食べる方が楽で、全くやらなかったなあ。

「ボク、たまごやきならつくれる！」

テスタロツサが、阿呆っぽく元気に手を挙げた。

……え。もしかして、料理できないの私だけ？

「卵焼きっていうか、オムレツだよね、アレは」

「いいじゃんべつにー……もつとじょうずになって、おかーさんにたべてもらうんだ」

……母親。

あんまり耳にしたくない単語を、今日はよく耳にする。すうつ、と、いつもの癖で胸元に手が伸びてしまっ。

「……」

……そこにはもう、十字架のネックレスは無いというのに。

食事の最中。

「あの、大家さん」

「何かね？」

高町が、ジジイに話し掛けた。

「やっぱり、何か武道を修めているんですか？」

……だと思っけど。

なにせ、リーゼをボッコボコに出来る程だし。

「いんや。なーんもしたらん」

「嘘こけジジイ！！」

どう考えても達人レベルの動きだろ！

「今風に言えば、マジじゃよ。空手も柔術も合気道も、なーんも知らん」

……目を見た感じ、嘘はついていないらしい。

「ワシも、若い頃は血気盛んでのう……」

気に喰わなんだ者に片っ端から喧嘩を吹っかけておったんじゃ」

しみじみと、昔を懐かしみながら髭を撫でる。

「街のチンピラに始まって、やれ極道だ、やれカルト宗教だ……片っ端からぶっ潰してやったわい」

……微妙にデジャブを感じる話だ。

「その中に、たまに、妙な術を使う輩もおってのう……羽ばたいた

り、掌から閃光を放ったり、姿形を自在に変えたり……びっくり人間じゃよ」

……ビックリなのはお前だジジイ。

「ビックリなのは爺さんだろうが……」

秀人は、はあ、とため息をついた。

三流とはいえ、魔導師とステゴロしてんじゃねえよ。

「最初は悩んだわい。」

何せ、見てもさっぱりわからなんだ」

そりゃ、そうだ。

ジジイは、だから、と前置きする。

「見ないでぶん殴ることにしたんじゃ」

その発想は色々間違ってるだろ……

「初めのうちは目を閉じとったんじゃが……後ろから、パーンと派手にハジかれての」

親指と人差し指で、鉄砲の形を作った。

「目は開けておくもんだ……と知ったんじゃ」

「「当たり前だ」」

馬鹿がいる……

「じゃが、『見』れば騙される。『見』なければ、後ろからハジかれる」

思い付いたんじゃ、と、本気で知ったように言う。

「相手の姿形に囚われず、『中身』を『視』れるようになれば、ぶん殴れる」

脳みそが筋肉で出来ていそような発想だった。

「練習したら、意外と簡単に出来てのう」
しかも、実現してた。

「『視』てからぶん殴ったら、うまくいったんじゃ」

……もう、言葉も出ない。

つまりアレか。

バトル系漫画によくある、『心眼』か。

そんな理由で、私の魔法は見破られたのか

「で、おぬし……はやてよ」

「えあ……何？」

いきなり話題が変わって、びっくりした。

「おぬしは実に遊び……いや、鍛えがいがありそうじゃ。この長屋に住まうことを許そう」

え……いいの？

「ペットもおつけーじゃ。ヒデ坊も飼っておるし、臍に至っては部屋が猫の集会所じゃ」

話が逸れた。

向こうの部屋に、契約書その他諸々があるらしい。

「行こ、リーゼ」

「申し訳ありません、主」

リーゼを胸に抱き、移動する。

「すまんの、お嬢さんがた。……少し外させとくれ」

「あ、はい……」

「わかった！」

「ヒデ坊、洗い物やっつけ」

「へーい……」

……蹴破った襖を元に戻し、ジジイと二人になった。

契約書一式が、卓に広げられている。

「おぬし、親族はおるか？」

「……！」

噴出しそうになる怒気を、ギリギリで押さえ込んだ。

高町みたいに、パパとママを侮辱された訳じゃない。

「いや、すまなんだ……許せ」

ジジイは、本心から申し訳なさそうに謝罪した。

「では、法的な後見人は、どうかの？」

「……いるよ」

後見人。

「……一応、いる。」

名前と連絡先くらいしか知らないけど……パパとママの財産を、キツチリ守っているらしいから、これまでノータッチだっただけ。

外国人の男性らしいけど……

「では、その後見人に保証人になってもらおうかの。連絡先を」

「……」

渡されたメモ帳に、ボールペンで書き写す。

「汚い字じゃのう……」

「ほっとけ！」

ジジイのくせにやたら近代的なスマートフォンを取り出し、連絡先に電話をかけた。

「うむ……突然の連絡、失礼する」

電話中、リーゼを撫でて遊んでいたら……

「はやて。相手が、おぬしに代われと言っとる」

「ええー……」

面倒臭いなあ……ま、しゃーないか。

「……八神だけど」

『挨拶くらい、しっかりしたらどうだ』

渋い中年男性の声が、電話口から聞こえてきた。
知ったことか。

「つーわけで、家ぶっ壊れちゃったから賃貸に引っ越す。

口座から、毎月の引き落としになるからよろしく」

……電話口の向こうで、ふるふると怒りに震える気配がする。そして……

『馬鹿者オツ!!』

「ぎゃあっ!!」

鼓膜があ!!

取り落とした電話から、ハンズフリーで怒鳴り声が聞こえる。

『何故、家が壊れた時点で連絡しなかった!』

今の今まで、どこで、どうやって寝泊まりしていたっ!?!』

「うるっさいな!関係ないだろ!」

なんで、後见人ごときに怒鳴られなきゃいけないんだ!

『それでも、伊吹の娘か!』

父親に顔向けできなくなるようなことはするな!』

伊吹。

「軽、々、しく……」

逆鱗に……触れた。

「パパの名前を出すなあああああアッ!」

『はや、』

バゴオンッ!!

「はアー、はアー……！！！」
……めらめらと、怒りに呼応するように、漆黒の魔力が揺れている。

癩癧と共に振り下ろした手は、電話機を砕き、畳を貫通し、床材を貫いていた。

「うううう……！！」

……それでも、止まらない。

「主、お気を確かに！ 怒りに、憎しみに捕われてはなりません！ 必死に私を抑えるリーゼの姿も、どこか遠い。」

憎しみに身体を乗っ取られて、『私』は、遠い所からそれを眺めていた。

めらめらと、どろどろと、憎しみが汲み出され、溢れてしまう。

「爺さんッ！」

秀人達が、緊迫した面持ちで飛んでくる。

「……うガアああアアアアアアッ！！！」

魔剣の現出も、鍛練の成果も忘れ……野獣のように、秀人の首筋に食らい付いた。

「うああっ……！！」

「ぐルアアアあッ！」

ぶしゅっ、と、血が噴き出し、私の顔を紅く染める。

「秀人さんっ！」

「だい、じよぶ……！！」

「ひでと、ごめんっ！」

テスタロツサが、私の背中に手を沿え……

バチイイインッ！！

……強力な電撃で、秀人ごと私の意識のブレーカーを落とした。

突然の修羅場をなんとかくぐり抜けた。

秀人とはやては、共にフェイトの電撃で意識を失っている。

……が、どういうわけか、はやては秀人の首筋にしがみつき……
まるで、抱き着いているような姿勢で気絶してしまっていた。

「……まあ、このまま寝かせてやるう」

……この老人、どうやら、秀人の身体について知っているようだ。
「こ、こんな危ないヤツ、秀人さんの近くに置いておくなんて出来ない！」

なのはの意見も、最もである。

「……どうやら、お嬢さん方。

あなたたちも、大なり少なり、世界の裏側に関わっておるようじやな……」

しばし、話すべきかを思案した。

「ワシの見立てじゃが、このはやて……既に一線を越えておる」

一線の意味に気付いたなのは、フェイト、ユーノ、アルフは、戦慄した。

先程の狂乱、尋常な様子ではなかった。頸動脈を噛み千切られ、

秀人でなければ間違いなく

致命傷だ。

「……答えかねます」

リーゼは顔を伏せるが、その態度が、事実を裏付けているようなものだ。

「！……秀人さんから、離れなさい！」

なのはが慌てて、はやてを引き離そうとするが……ガツチリと首をホールドされ、それは叶わない。

戦慄をもって、はやてを見る面々。

「ふむ……」

が、大家は、別の角度から見ている。

(……何故、ワシに喰らい付かなんだ?)

憎しみをぶつけるのなら、大家でも良かったはずだ。

だがはやては、一直線に秀人に突進した。

……見ようによっては、秀人に縋るように。

現に今も……秀人にへばり付いて寝るその顔は……狂乱が嘘のように、平素なものだった。

「はやての部屋割、決めたぞい」

面々は、こんな状況下で何を……と、訝しげな顔を大家に向ける。そして、大家が口走ったのは……またしても、意味不明なことだった。

「……105号室。秀人の、隣じゃ」

第八十九話

……また、あの少年の夢を見ていた。

前は確か……施設の初日だった。

今回は、個室だ。

あれから、何日経っているのかは分からない。そんなに長く経過した感じは無さそうだけど……

縦長に三畳くらい。それに反して、天井がやたら高く、小さな窓が一つしかない。

粗末な簡易ベッドの上に、少年は布団に包まって横になっていた。

「……」

目は、開いている。

消沈でも悲嘆でも憤怒でも無く……ただ、無表情だ。

廊下から、複数の足音が聞こえてきた。

その足音は、部屋の前で立ち止まる。

「……」

少年は首だけを動かし、ドアの覗き窓に視線を合わせる。

「よおう……クソガキ」

醜く歪んだ顔で吐き捨てるのは、この養護施設の所長の男だ。

「どついう理屈かは知らねえが……よくも、俺の城を傷つけてくれやがったな、あア!？」

ガッツ!!

金属の扉を革靴で蹴り飛ばし、威圧的な音を立てる。

「……!」

びくりと、身体を縮こまらせ……ようと試みる。

……不自然だ。

少年の身体は、さっきから動いていない。

ただ、布団に包まっているだけなのに……

「チツ……おい」

煙草に火を点け、部下に扉を開錠させる。

「……ひっ」

怯えてるのに、少年は微動だにしない。

ぶかぶかと煙草をふかしながら、少年の横たわるベッドに近付いていく。

煙草の灰が、少年の枕元にぼろぼろと零れ……（……おい、まさか！）

「ははは……流石に動けないよ、なっ！」

ジュッ！！

「……ああああっ！！」

煙草の火を、頬に押し付けやがった！

ギシギシと、ベッドから変に軋む音がする。

ここまでされて、動かないってことは……

「おー、怖い怖い。けど、この拘束衣、高だけあっていい性能だわ……あっはっは！」

……布団に包まっていたんじゃないなくて、犯罪者用の拘束具で、ベッドに縛り付けられていたんだ！

「あつ、や、やだ……！！」

ギシ、ギシと軋むが……それだけだ。

コンクリートの壁を破壊するだけの力があっても、伸縮するゴムは力を逃がし分散するため、破壊できないらしい。

「おい、お前達……ここを喫煙所にするぞ」

それを聞いた部下達も、主人と同質の、賤しい笑みを浮かべ……

煙草に火を点けた。

ジュウツ！

「ああああ……！」
肉を焼く音。か細い悲鳴。賤しい笑い声が……劣悪不快な三重奏を奏でる。

（ 殺すッ！ ）

この男だけは、生かしておくものか！

夢の中ということも忘れ、ばたばた暴れる。

……唐突に、画面が切り替わった。

あれから、しばらく経過した頃だろう。

少し、身長が伸びている。

少年は、拘束されるわけでも無く……独房に持ち込まれたテーブルセットの椅子に座り、何やらペンを握っていた。

めくっているのは、本ではなく、算数ドリルのようだ。

「……」

黙々と……ただ黙々と、時に考え込んだり、教科書を見たりしながら、問題を解き進めていく。

その横顔には、段々と精悍さが見え隠れし始めている。

独房には、拘束具の類は見当たらない。

……千切れたゴム紐のようなものがその残骸だと気付くのに、そ

れ程時間は必要無かった。

とうとう、拘束具を克服したのだ。

……けど、この少年は、まだこの独房にいる。

しばらく観察してたけど、食事もこの部屋で食べている。

隣室には真新しいユニットバスも併設されていて……

ここが独房から、少年を隔離しておくべく与えられた個室に変化したことが分かった。

さつき、食事を届けに来た職員、酷く怯えた目をしていた。

あれだけ少年を黽つていた所長も、姿を表さない。それに、部屋の、環境の変化を鑑みるに……

きつと、腕力を行使したんだ。

拘束も不可能となれば、黽るところか返り討ち。

……いや、もしかして、とつくにそうだったのかもしれない。

(あはははっ、やるじゃん！)

感覚に乏しい手で、少年……とはいっても、私より少し上、十歳くらいの男の子の頭を撫でてやる。

少年は、ふっと顔を上げた。

「……………」

時計は、午後6時を指していた。

ドリルを仕舞い……部屋の片隅に設置されたテレビの前に座り、電源を入れる。

流れ出すのは、ヒーロー番組のオープニングテーマ。

まあ……子供だし、普通か。

というか、まだこういうものに興味が向くだけ、マトモな神経をしている証拠だ。

「……………」
30分の放送が終わり、少年は、ベッドに寝転んだ。
そして今度は、本棚から少年漫画のコミックスを取り出し、読み進めていく。

クスリとも笑わず、真剣に……………まるで、物語を、そこにある『架空の何か』を頭に刻み込むかのように、真剣に読み耽っている。

……………その光景が、急に遠ざかっていった。

ああ……………目が覚める。

全く、いつまで続くんだろうな、この夢は。

……………起きたら、目の前に秀人がいた。

寝転がっているとかいうレベルじゃない。

もう、視界一杯に秀人が……………

「うおっ、」

落ち着いた驚き……………という、実にわけのわからん感情と共に、秀人を遠ざける。

「ん、む……………」

どうやら、秀人は寝ているようだ。

……………さっきの和室だ。

床に空いた粗雑な穴が、それを示していた。

……………私、どうしたんだっけ。

ジジイにボコられて、食事して、電話して……………今起きた。
中間の記憶がぶっ飛んでいる。

「うー……思い出せないぞ。」

時計を見ると、午前10時。

「あー……」

「寝坊だ。まあいいや。」

「起きたか」

台所からジジイが顔を覗かせた。

「なのはちゃん達は、学校へ行ったぞい。」

「……」

「担任教師には、体調不良と伝えておいた。今日は休むがええ」

「ふん……余計な真似を」

「そんなもん、わざわざ伝えなくていいっての。」

「少し遅い朝食としようかの。ヒデ坊を起こしておいておくれ」

「なんで私が……」「起きてなかったら飯抜きじゃ」

「……リーゼは、どこかに外出中らしい。」

となると、食事は買うか、ジジイが出したのを食べるしか無いわけだ。

買いに行く手間と、秀人を起こす手間を天秤にかけ……後者に傾いた。

「おいコラ起きろー」

頬をぐいーと引っ張る。

「……う、」

「あれ、起きない。」

「んじゃ、もつとこつう……ぐいっどぐいっどにょん、と。」

「うー……むー……?」

「ケケケケケ……超楽しい！」

「あ?」

「あ」

「起きた。」

「……何してんの?」

「え？遊んでるんだけど？」

「……やめい」

ま、やめないけどねー。

「うりうりうり」

「やーめーろー……」

くりっ、と首を横に向ける。その先にある時計を見た途端……

「……ぎゃー！寝過ぎしたあああー！！」

がばつと一気に飛び起きた。

「し、仕事！現場が！持ち場が！」

珍しいことに涙目になりつつ、携帯電話を取り出した。

「鉄郎には連絡しといたぞ」

ジジイがまた顔を出し、言った。

「……」

ぱっ、と、動きが止まった。

「よ、よかったあ〜……！迷惑かけるところだった……」

（ふん……馬鹿じゃないの）

たかが仕事場だろうが。

なーに必死になってんだか。

「ジジイ、朝飯」

「うむ」

焼き魚と白米を咀嚼する。

「おいはやて、ネギも食え」

秀人が口づるさく言う。

まったく、リーゼといい秀人といい……

「野菜は嫌いな。だから食べない」

「お子ちゃま」

……なんつった？

「ガキ味覚」

「ぶつ殺すぞ!?!」

「二人とも」

ぎくつ、と身体が強張る。

「行儀の悪い子には、ゲンコツかのう?」

「」

……怖いわけじゃないからな!

「では、行くとするかの」

「リーゼなら、ヒデ坊んとこの末っ子と遊びに行ったぞい」

……末っ子?

「ああ、ヴィータと一緒に……」

お前、どれだけ扶養してるんだよ……

「ふむ……では、出かけるとしようかの」

「そうだな」

二人の間だけで納得するな。

まあ、行ってらっしゃーい。

「……おぬしも来るんじゃない」

……何で。

「だって、お前の家具だぞ?」

「知らねえよ!」

何で本人おいてけぼりで決定してんだよ!

「なあに、心配いらん。引越し祝いに奢ってやるわい」

「爺さん爺さん、俺ん家のちゃぶ台、もちつと大きいのを……」
「学生限定じゃ馬鹿者！」

「ごんっ！」

……まあ、タダなら、貰ってやらなくも無いけど。

「ほれ、準備せい」

「「できてるけど」」

秀人も私も、普段着のまま寝てたから……髪さえ整えればすぐ出られる。

「んじゃ、ヒデ坊はメット持って来い」

チャリツ、と何かの鍵を

「げ、まさか……！」

ぼんっ、と投げ渡されたボールのようなものを、受け取る。

……俗に言う、ヘルメットだった。

「爺さん、やっぱ電車にしようぜ！な！？」

なぜか食い下がる秀人。

いまいちわからないけど、とにかく外に出よう。

……甘く見ていたよ、ジジイのこと。

どーせ、秀人があの黒バイク、ジジイはスクーターにでも乗るんだらう。

そう、勘違いしていた。

トルツトルツトルツ……！！

図太い排気音を響かせるのは、黒いバイク。

秀人のものとは違う……というか、ある意味二輪ですらない。

確か……『サイドカー』とか、『側車付き二輪車』とかいう部類

だ。

ハンドルを握るのは、当然この乗り物の所有者……ジジイだ。

「うむ、いい音じゃ。……では、行くとするかの。はやては側車に乗るがええ」

言われるがまま、側車に身体を潜り込ませる。

「あー……マジかよ……」

何でそんなに嫌なんだろう……と思ったけど、納得だ。

ハンドルを握るのはジジイ。側車には私。

となると、秀人は……ジジイの後ろ。

「うあー……超恥ずかしい」

「ぶつくさ言うてないわ。行くぞい」

がしゃっ、という衝撃の後、ドルルルルッ……と重低音を吐きだしながら、サイドカーが発進した。

「そうそう、はやての部屋はヒデ坊の隣じゃ」

……勝手に決めるなっつってんだろおおおおお！？

その、前の晩。

海鳴市の、とある居酒屋。

二人の女性が、晩酌を交わしていた。

一人はショートカットに私服。もう一人は、ポニーテールによれ

たスーツ姿だ。

「いつちゃん、きいてる!?!」

スーツ姿の女性が、ジヨッキをダンツ!とたたき付けるように置いた。

酒が回っているらしい。

「はいはい、聞いてますよ咲ちゃん」

なのは、フエイト、はやての担任、咲だった。

「あのね、私、けっこう頑張ってると思うのよ!」

「そうだね、頑張ってるね」

シヨートカットの女性こといつちゃんは、聞き役に徹していた。

「初めての担任クラスでえ、」

「うんうん」

「初めての転校生があ、」

「うんうん」

「始業式サボったんだよ!クラスの子と一緒に!信じられる、ねえ!?!」

「……咲ちゃんだって、サボってたじゃないの」

「何か言ったあ……?!」「うん、何も」

酔っ払いの絡みを、するっとかわした。

「せんせーに、またおこられるしい……」

怒られたのではなく、遅れて来るであろう生徒の案内を任されたのだが……

「せんせーに褒められたいよう!」

びええ……と、テーブルに突っ伏して号泣する。

「褒められたこと、あった?」

「あるよー」

泣き顔から一変。にへー……と、締まりの無い笑顔を浮かべた。

「こーこーだいがくにうかったときでしょー？」

「うんうん、咲ちゃん、頑張ってたもんね……………元ヤンが同じ大学のキャンパスにいてびっくりしたけど」

ちらつと、本音が覗いた。

「だいがくで、きょーいんめんきよとれたときー！」

「夢が叶ったんだもんねえ」

「うん！」

……………というか、逐一報告していたことの方が驚きだ。

「それだけだああああ……！」

びええ、と、また泣き出す。

「その生徒さんの名前は？」

「たかまちなのはさんー」

「……………高町？」

いっちゃんは、眉を寄せた。

「ふえいとさんー」

外国人の名前。これはスルー。

「その二人？」

「もうひとりー、もうひとりはー、」

フラフラ定まらない視線で、言った。

「やがみはやてさん」

ガシャンッ！

「……………あ？」

咲が、少しだけ我に帰った。

「いっちゃんが、タンブラーを取り落としたのだ。」

店内は、その音に一瞬だけ静まり、また喧騒を取り戻す。

「いっちゃん、どーした」

の、と言いつつ終わるより早く、いっちゃんが咲の肩を掴んで引き寄せた。

「八神さんが、学校に来ているの!?!」

あまりの迫真の様子に、咲はぱちくりと目をしばたかせた。

「うん、来てるけど……いっちゃん、知り合いなの?」

「こっしちゃんいられないわ、咲ちゃん! 詳しく聞かせて!」

「い、いっちゃん、石田ちゃん、どーしたの!……?」

ほけーっとした咲を引きずり……ショートカットの女性こといっちゃんこと石田は、足早に咲のマンションを指した。

第九十話

時間は、少し遡る。

はやてが失神した後、大家によってはやての部屋割が決定された。

……秀人の隣室。

静まり返る。

なのはは目を見開き、反抗した。

「嫌です!!」

……当然だろう。

子供じみた嫉妬ではなく……事実、はやてが秀人に危害を加えている場面を目撃してしまったのだ。

しかも、先程の大家の発言である。

家族を危険に晒すなど、そんな危険な選択をするわけにはいかなかった。

「んっ……」

リーゼが、魔力を使って人間に変身した。

注目が集まる中、リーゼは進み出て、膝を折り……

「……どうか、この通りです」

土下座した。

わざわざ人間の姿になってまで……敢えてそうするのだから、相
当なものだ。

「主を、嫌わないでやって下さい」

平身低頭、いや、それ以上の懇願だった。

「……」

はやての罪について、弁明しようと思えばいくらでも出来た。
だが、それでは疑念が残る。

故にリーゼは、懇願したのだ。

今はまだ、聞かないでくれ……疑念を、飲み込んで欲しい、と。

「リーゼ、さん……」

なのはは、困惑していた。

「……ふむ、顔をあげてみい」

大家の一言で、また状況が動き出した。

「そんな真似せんでも、無下にはせんよ」

「……はい」

よっこいせ、と、大家は正座するリーゼの前に胡座をかいた。

「さて……おぬしの願いも聞いてやらなくはないが、なのはちゃん
の不安も最もじゃ」

皆も、何となく正座する。

「まあ何も、洗いざらい話せとは言わん。ワシの質問に、一つだけ
答えてくれんかのう」

「……はい」

穏やかな声に、リーゼは蚊の鳴くような声で返事をした。

「はやては……好き好んで、他人を傷付ける子かのう？」

……あくまで、婉曲に聞いた。

「……」

リーゼは、答えかねていた。

好き好んで……の範囲が曖昧だ。

街のクズを『練習』という名目で虐殺した……あれは間違いなく、

『好き好んで』の部類に入る。

だが……

「私と契約してからは、無為な暴力は一度も振るっていないと断言
できます」

リーゼを配下に加えてからは、たとえクズが相手であろうとも、
一定の制裁を加えるに留めていた。

理由無き者に、手を下したことなく一度も無い。

美香を始めとした親しい者は、言わずもがな。

「……らしいぞ、なのはちゃん」

なのはは、フェイト、ユーノ、アルフと順々にアイコンタクトを
取り……

「……わかりました」

渋々だが、頷いた。

「嫌うな、っていうのは、正直、無理ですけど……偏見は、捨てま
す」

「……ありがとうございます。高町さま」

リーゼはなのはの手を取り、深々と頭を下げる。

「え、あの、いや……『様』とかいいです……呼び捨てで」

「では、なのは。ありがとうございます」

「あはは……極端な人だなー……」

こうまで素直に礼を言われると、さすがに気恥ずかしいらしい。

秀人とはやてが眠る横で、大家と茶を飲む。

生真面目な同士だからか、話は弾んでいた。

「へえ……じゃあ、八神の剣はリーゼさん仕込みだったんですね」

「主の剣の腕は、それは素晴らしいものです。……なのは、貴方は？」

「兄から、指導を受けています。まだまだですよ」

「……今度、我が主と手合わせを願えませんか？ 私人が相手だと、どうしても慣れが出てしまうようですよ」

「……」

もうガチでやりかけてしまいました……とは、言えないに違いない。

「あ、あー……そういえば、格闘もリーゼさんが？」

話を逸らした。

「格闘は、秀人との鍛練で磨いた、とおっしゃっていました」

「……へえ」

ぴきつ……と、微妙に固まる。

異世界で。

二人っきりのマンツーマンで。

さぞ、上達したに違いない。

……いらいらいら。

「ヒデ坊はワシが育てた」

どっかで聞いたたわ言を口に出す大家。

「……ヒデ坊は免許皆伝で、暇になっとなったのう」

……暇だからといって、数ヶ月に及ぶ旅行に出るものだろうか。

「うむ。はやてには、ワシから稽古でもつけてやるかの。ラジオ体

操よか効果的じゃて」

「…………お手柔らかに」

その拳の威力を、身を以て味わっているリーゼは青ざめた。

談笑は、その後も続き……

「ふぁ…………」

ぱたん、と電池が切れたようにフェイトがアルフの膝に倒れ込んだことで、お開きとなった。

翌朝。

まだ、太陽も昇り切っていない早朝。

「…………今日も、ハードだった…………」

ふらふらになったヴィータが、帰宅した。

「畜生、マリーの奴。なあにが『ちょうどいいところに』だ…………！」

戦闘装束たる騎士の鎧を、あんなフリフリのドレスに固定され……

…解除方法をマリーに尋ねに行ったのが二日前。

そうさたら何故か、何かの怪しげな実験に付き合わされ…………また徹夜である。

「あー、ねみー…………さっさと寝ようそうしよう…………」

と、部屋の鍵をポケットから取り出した時、隣室のドアががちゃつと開いた。

(隣…………？ 誰か住んでたのか)

そして、出てきた人物の顔を見て…………完全に、思考をフリーズさせた。

隣室の住人…………リーゼは、ヴィータを一瞥し、社交辞令的に一礼した。

「…………秀人のご家族の方ですね。」

「ご挨拶が遅れました。

わたくし、隣に越して参りました、リーゼと申します」

「……………」

「……………」

反応が返ってこないことを不思議に思いながら、リーゼは大家の部屋へ。

「待て待て待て！」

その手を掴み、リーゼを引き止めるヴィータ。

「？ なにか？」

首を傾げるリーゼ。

ヴィータは、そんなリーゼの顔をしばらく凝視して…………ふっと力を抜いた。

「わりい…………人違いだった」

そのまま家に入った。

(馬鹿馬鹿しい…………人違いに決まってる)

ベッドに横になり、目を閉じる。

焼け落ちる都

あえて思い浮かべる、呪わしい情景。

だが…………『彼女』を想起するには、それしかなかった。

『彼女』の姿は、その場面にしか無かったのだから。

一体、どれだけ過去なのかは分からない。

何度目かも分からない。

だが…………焼け落ちる街と、瓦礫の中、その手に、本を手に立ちすくむ『彼女』の姿だけは、変わらずだった。

「……すう」

眠りに落ちていく意識の中、ヴィータは、『彼女』の名を思い出そうとしていた。

「……」

ゆさゆさ、という感覚。

ヴィータは、重い瞼を持ち上げる。

「おはようございます、ヴィータ」

……隣室のリーゼが、何故かいた。

「ぎゃっ！」

飛び起きる。

「な、な、な……なにしてやがるっ人ん家で！」

「失礼しました……なのはから、入室の許可を頂いていたので」

「なのはがぁ……？」

うるんな目つきになるヴィータに、リーゼは頷いた。

「実は、困っているのです。なのは達は学校、我が主は休息中と…

…手を貸していただけませんか？」

ぴこぴこ、と動くネコミミと尻尾。

「……内容は？」

はぁ……と荒い息をつく。

「主の、日用品を揃えたいのです」

「……」

勝手に行け、と言いたるところだったが……

「……わかった。少し待ってろ」

ヴィータはシャワーを浴びて着替え、リーゼと共に街へ歩きだした。

(……やっぱり、似てる)

隣のリーゼは、ネコミミをぶかっとした帽子に隠し、凜とした表情で歩いている。

「アンタ、誰かの使い魔か」

隠しているということは、リーゼのネコミミが偽物ではないという証だ。

「……使い魔、というか、契約者、です」

ぴよこん、と尻尾が飛び出す。

「無目的に放浪していたところを、今の主に拾われたのです」

「ヴィータは立ち止まり、リーゼもつられて立ち止まる。」

「どうかされましたか?」「お前、さ」

ヴィータは、核心に踏み込んだ。

「アタシの顔に、見覚えはねーか?」

その問いに、リーゼは……

新学期の短縮授業が終わり、下校の時間になった。

「なのは、かえろー」

「うん、そうだね」

フェイトを伴い、ランドセルを背負う。

望は、葉山君の付き添い。

これから、サッカーの練習があるらしい。

「じゃあね、フェイトちゃん」「まったねー」

クラスメイト達が、口々にフェイトに挨拶し、教室を出ていく。
「アサミヤ、カトウ、またね……」

人見知りながら、しっかりと挨拶を返すフェイト。地道に、クラスに溶け込みつつあるようで嬉しい。

誤算だったのは……

「高町さんも、またね」

「ばいばい」

『フェイトへの仲介役』というポジションに収まった私にも、こうしたコミュニケーションが生まれたことだった。

さーて、帰るか。

「あ、なのはさん、ちょっといい？」

と、先生に呼び止められた。

「どうかしました？」

先生は、申しわけ無さそうにしている。

どうしたんだろう？

「あの……八神さん、なんだけど」

「……」

……まあ、リーゼさんとの約束の手前、聞いておかないわけにもいかないだろう。

「私の友達」「先生、友達いたんだ」「い、いるわよう！」

おっと、話の腰を折ってしまった。

「で、何ですか？」

「……はあ。その人が、どうしても、八神さんに会ってみたいって

……」

？ なんだそりゃ。

「その人……石田って言うんだけど、お医者さんでね。八神さんの

主治医、だったの」

……過去形？

「治療に来なくなっちゃって、いっちゃん、すごく心配したみたいなの」

へえ。

「で、昨日の夜、登録されてる住所に行ってみただけど……瓦礫の山になってて、会えなくて。」

なのはさん、八神さんがどこにいるのか、知ってると思って」

「ああ、知ってますよ」

なにせ、今朝まで一緒だったんだ。

先生に伝えたとこ、件の石田さんとやらに電話し、すぐに来るそつだ。

校門前で、三人で待つ。

十五分はした頃だろう。

校門に、白いセダンタイプの自動車が横付けした。

「ごめん咲ちゃん、お待たせ。……あなたたちも、ごめんなさいね降りてきたのは、ショートカットの女性。」

「はじめまして、石田です」

「高町なのはです」

「……フェイト」

「高町さん……？あの、失礼だけど、お父様のお名前は、土郎さんって言わない？」

「おや……父さんの知り合いだろうか。」

「ええ、間違いないです」

「まあ……そつだったの」

？

「私、海鳴病院で、神経内科の担当医なの」

だから、父さんを知っていたんだ。

車に乗れば、アパートまではすぐだ。

あつという間に到着。

部屋のドアノブには、鍵が掛かっている。

秀人さん、外出してるのかな……？

携帯電話を確認すると……授業中に、メールの着信が入っていた。マナーモードにしていたおかげで、気づかなかった。

文面を確認し……

「すみません……今、外出中みたいで」

仕方ないから、私たちの家に戻ってもらう。

「粗茶ですが」

お茶を出した。

「……なに、この出来た子供。咲ちゃんよりしっかりしてるじゃない」

「ほつといてよ、もう！いつちゃんの意地悪！」

どうやら、仲が良い二人みたいだ。

ドルルルツ、と、バイクの重低音を鳴らしながら、見慣れないバイクが敷地に止まった。

運転していたのは、大家さん。

側車には、はやて。大家さんの後ろ、タンデムシートには、秀人さんが座っている。

「帰ってきたみたいですね」

さて……お出迎えだ。

「おーっす、ただいまー……って、客が来てるのか」

秀人さんが帰ってきた。

はやては、大家さんの部屋に行っちゃったか。

「秀人さん、お帰りなさい」

「おかえり、ひでと！」

「ただいま。なのは、フエイト」

その目線が、先生と石田さんに向いた。

「あれ、先生。それに……」

ふいつ、と。

秀人さんと、石田さんの目が合う。

「秀、人……？」

石田さんは、秀人さんの顔をしげしげと見つめ……

「あなた、吾妻秀人くん！？」

驚いたように、教えたはずの無い、秀人さんのフルネームを叫んだ。

秀人さんは、最初は怪訝に……そして。

「……………ッ!？」

苦虫を噛み潰したような顔とともに、石田を睨み付けた。

第九十話（後書き）

次は明日投稿します

第九十一話

「秀人さん……?」

どうも、様子がおかしい。

固い表情で、石田さんを睨むようにしている。

「あ、あの……違った、かしら?」

「………違います」

……冷たく、凝り固まった声。

あまり聞いたことのない声色に、畏縮してしまう。

「……なのは、フェイト。はやては、昨日の部屋にいる。先生を案内してやってくれ」

「え、でも」

はやてに会いたがってるのは、石田さんなのに。

「いいからっ……!」

秀人さんは……引き絞るように、言う。

「あ……わ、悪い」

我に帰り、謝る。

「……あ、うん」

つい呆けてしまった。

……これは暗に、石田さんと二人で話があるということだろう。

私たちは二人を残し……大家さんの部屋に向かった。

二人になった部屋。

秀人は、石田と向き合っていた。

「……どういうつもり」

秀人は、石田と目も合わせない。

「八神さんの、主治医だったことがあるから……」

石田もまた、少し接し方をはかり兼ねている。

「……身体は、どうなの？」

「……」

黙秘。

「秀人くんが小さかった頃、病院で会ったの、覚えてる……？」

秀人の幼少期。病院。

それはつまり……

「ええ、お久しぶりです……石田先生」

超人病。

秀人の根幹にある、あの病の関係者。

当時は研修という形で、その対症療法に携わっていた。

秀人が、九歳になったばかりの頃だった。

「……大きく、なったわね」

「……」

感慨深く、思いを吐き出す。

「研修が終わって引き上げる時も、気掛かりで……あの後、尋ねただけ。退院して、施設に入ったって聞いて……でも、元気なようで、安心したわ」

どこまでも残酷な、優しさを。

その手が、秀人の、少し硬い髪に触れ……

「……やめてくれッ！」

その手を、振り払う。

石田は、びくっ、と手を引つ込めた。

「今更、何で俺の前に現れた！」

罪悪感を覆い隠すように、畳み掛ける。

「偶然、なのよ。本当に……私だって、驚いているわ」

「ふざけるなッ!!」

それが、白々しい態度にでも見えたのか、秀人は激昂した。

「俺を施設に売り渡しやがったこと……忘れたとは言わせねえぞ！」

「違う……！あれは、上が勝手に決めて……！」

「どれだけ言葉を重ねようと……病院側が、秀人を施設に放逐したという事実は変わらない。」

秀人にとって石田は、病院側の人間であり……敵だった。

「うるさいっ！」

ぐいっ、と、怪力で石田の腕を掴み、立ち上がらせる。

「痛ッ……!!」

その力に石田は、秀人が未だ、病と共にあることを理解した。

「かえ、れ……!!」

「秀人くん、お願い、話をさせて！」

がしゃん、と、家具にしがみついた石田を秀人が引っぺがす度、何か壊れる音がする。

「帰ってくれえッ！！」

石田を叩き出し……秀人は、滅多に使わないチェーンまでを施錠し、閉じこもった。

「はあ、はあっ……！！」

心臓が激しく収縮する。

額には、じつとりとした脂汗が浮かび上がる。

……凄まじいストレスが、秀人を蝕んでいた。

柱を背に座り込み、膝を抱える。

からっ……と、施錠を忘れていた窓が開いた。

「……！！」

ぎろっ、と睨みつける。

だが、覗いてきたのは石田ではない。

「ひでと、ボクだよボク。こわいかおしないでよー」

にへ、と、締まりの無い笑顔を浮かべる、フェイトだった。

驚くべき柔軟性で、窓枠から身体をすりと滑り込ませる。

「どうかしたの？」

ピリピリした雰囲気を漂わせる秀人の隣に、ぴったりと座る。

「……何でもない」

「そんなかおして、なんでもない、なんてわけないじゃん」

そんな雰囲気など、どこ吹く風とばかりだ。

「……」

黙る秀人の横に、ただ座る。

秀人が話し出すまで、根気よく。

「……………あの人、な」

ぼそつと小さく、話し出す。

「俺の主治医……………の、教え子みたいな人だったんだ。

漫画とか見せてくれたり、菓子くれたりして……………慕ってた」

けど……………と、続く。

「……………俺の病気には、何の学的価値が無いって分かって、医療費の補助がなくなって……………それっきり、会ってなかった」

「……………」

「分かっているんだよ。俺だって、そこまで馬鹿じゃない。

優しくしてくれたのは、ただの同情で……………構ってくれたのは、あの人の仕事だからだ。施設行きだって、案を出したのはもっと上層部で、最終的に決定したのは……………俺の、母親だ」

「……………」

フェイトは、黙って……………秀人に寄り添う。

「でも……………納得できなくて……………」

顔を曇らせた。

幼く、まして、母親から見放されるという恐怖に苛まれていた秀人にとって、仕事でも、義理でも、同情でも……………その交流は、暖かいものだった。

それを、一方的に断ち切られた秀人は一体、どのような気持ちだったのか……………筆舌にしがたい。

「わかってるんだよ！」

突然、声を荒げる。

「石田先生は悪くないって！」

怒るのなんて筋違いだって！

でも！」

ぐしゃっ、と髪を掻きむしり……搾り出すように、言った。

「俺は、あの人を許せない！」

手放すのなら……何故、手を差し延べた。

「畜生、何で……もう、十年近く経ったのに……！」
忌まわしい過去が、鎌首を擡げてきた。

「ひでと」

フェイトが、秀人の手に手を添える。

「ボクは、ひでとじゃないから……ひでとの気持ちも、石田って人のことも、完全には理解できない」

「……」
いつもの軽さが嘘のような、凜とした声。

「だから……話してみよう？ 許せなくても、話をしよう？」

「でも……また、怒るかも、」
不安になる秀人に……フェイトが、明るく笑いかけた。

「大丈夫。ひでとには、ボクが……」

かちゃん、と、部屋の鍵が開き……なのはが、ユーノが、アルフが……ヴィータが。

秀人の家族達が、心配したように、顔を覗かせる。

「ボク達が、ついてるんだから！」

……そして、再び大家の部屋。

そこには、はやてと、リーゼと、咲と、大家と、石田と……

「子供みたいに怒って、子供に慰められる、情けない男の姿を見たの。」

なっさけないやつなの！ ぷっぷくぷー！」

……アイが、いた。

「……」

びくびく、と秀人のこめかみが痙攣する。

「ほんっと、精神的にも力量的にも未熟な奴なの。やっぱりおまえには、アイの力が絶対に必要なの。」

ぱたぱたと素足を揺らし、小馬鹿にした口調で秀人をつつく。

「さ、わかったら、『ボクが間違っていました。改心してアイさまの言う通りにします』と懺悔するの。」

例の、秀人をマスターにふさわしく、なんたらかんたらの話だ。

「そうしたら、まあ……おまえを正しく導いてやることも吝かでは無いの、ぼけなす。」

「……決めたわ。ぜってー言わねえこのポンコツ。」

「……ポンコツ？」

ぴきつ……と、アイもまた頬を引き攣らせた。

「いま、ポンコツと言ったの？ このアイを……最新最高スペック、デバイス完成型の一つである、アイを？」

「ふん、過ぎたるは及ばざるが如し……用途に合わない過剰性能なんざ無駄なんだよ。」

わかつたら、俺のフォーマットに合わせやがれ、駄目デバイスめ！」

「使いこなす技量も無い分際で、フォーマットなんて口にするものじゃないの……ま、今のままのお前には、1バイトだって使わせてやらないの！」

「いらねえつつつてんだろ、ポンコツ！」

「アイの言う通りにするの！」

アイが床を蹴り、秀人につかみ掛かった！

「おまえが悔い改めれば、使わせてやると言ってるの！」

こんな破格の条件を蹴るなんて、おまえは馬鹿か大馬鹿、超馬鹿のどれかなの、この馬鹿！

分からず屋！」

「ンだところのポンコツ！在庫処分品！バルク娘！」

「もう我慢の限界なの！」

「こつちの台詞じゃほけー！」

最早、石田などおいてけぼりで、アイと大喧嘩する秀人。

その喧騒の中……石田は呆然と、だが確かに、口元を綻ばせていた。

第九十二話

担任の先公が、いきなりやってきた。

サボるな、とか、そんな話かと思っていたけど、違つみみたいだ。先公を連れて来た高町とテストロツサは、どこか落ち着かない。話も始まらないまま、時間だけが過ぎていった。

「ジジイ、腹減つた」

「夕飯まで待たんか……それと、先生の話をしっかり聞いておけい
えー……やだ面倒臭い。」

「あの、八神さん……」

「何だよ」

「……学校、そんなにつまらない？」

「……つたりめーだろ」

そもそも、転校したのだからって諜報が目的だ。

情報を集めて、油断させて……ぶっ倒すためだ。

誰が、好き好んであんな所に行くものか。

「あのね、八神さん」

「あア……？」

尚もしつこく話し掛けてくる先公を睨む。

「……そろそろ、運動会があるの」

……忘れがちになるけど、一応私は、年齢一桁代だ。

「ふうん……だから？」

「それをきっかけに、クラスの皆と、もう少し、お話してくれたら
なあ、つて……」

「余計なお世話だ」

人のスタンスに口出しするんじゃないやねえよ。

「でも、せつかくの行事だし……きつと、楽しい思い出になるわよ」
「……チッ」

あーあ、押し付けの善意って嫌だね。

それが、いかに迷惑なことなのか、全く自覚の無いところが。

「主、ただいま戻りました」

お……リーゼだ。

「あのなあ……出かけるなら、伝言くらい残せつての」

「申し訳ありません、とても良く眠っておられましたので」

はあ……なら、メモ書きでもいいだろ。

「あ、ヴィータはどうしてる？」

高町が聞く。

ヴィータ、つて、秀人んとこの末っ子か。

「眠そうにしていたのですが、秀人の部屋に入れなかったので……
勝手ながら、我々の部屋で休んでもらっています」

「そう」

少しした後。

がちゃんがちゃん……と、何か物々しい音がした。

『お願い、話をさせて！』

……？

どっかで聞いた声だな。

『帰ってくれえッ！！』

……今の、秀人か？

随分と切羽詰まった……あまり聞いたことが無い類の声だ。

「……！」

高町が、いてもたってもいられなくなって立ち上がる。

「なのは」

それを、テストロッサが止める。

「ちょっといつてくるね」

……止める間も無く、出て行った。

「……お願いね、フェイト」

……あいつでも、あんなこと言うんだな。

ドアが開いて……何やら、人数がドカツと増えてきた。

「お邪魔します……なのは、ただいま」

「お邪魔するよー」

……高町と、テストロッサの使い魔。

それから……

「ただいまなの」

……漆黒の髪に紫紺の瞳。

秀人のデバイス（仮）、アイだ。

そして……最後尾に。

「……はやてちゃん」

……実に懐かしい人がいた。

一年ぶり……くらい。

「……石田先生」

気まずい……

「あ、あー……ちょっと、用事が出来たんで……さいならっ！」
ドアに向かって、最短距離をダッシュ！

がしっ

「待たんか」

「……回り込まれた。」

「は、離せジジイ!! 離せえええ!!」

首根つこを鷲掴みに……って、私は猫じゃない!!

「嫌なことから逃げるのは、お前の悪い癖じゃよ」

ほっとけ!

「はやてちゃん……?」

石田先生は、呆然としている。

「……あ、やべ。」

石田先生は……私の主治医で、半身不随の診断をした当人だ。

その私が、こうして歩き回っていたら……そりゃ、驚きもするし、不審にも思う。

今の私の足……というか半身は、魔力を擬似神経として動かしている。

通常の医学ではない、裏技だ。

まずったなあ……

「ていうか、先生。なんでこんな所にいるの」

私は、話を逸らすことにした。

「咲ちゃんが……はやてちゃんを知ってるって言うから」

「咲……?」

誰だ、それ。

「私!私の名前!富山咲ですって、紹介したじゃない!」

「まあどうでもいいけど」

「……」

石になった。

「先生、どんまい……」

そして、高町に慰められていた。

「あんだ、秀人と何の話してたの？」

石田先生が口を開くより先に、質問をぶつけた。

「っーか、秀人とどんな関係よ」

「……っ」

話せないか。

まあ、そんな気もしてた。

あの極楽蜻蛉な秀人が、あんなに声を荒げるんだ。

「アイが推測するに……あのぼけなすの、身体のこと？」

だろうなあ、と思う。

「……昔、秀人くんを診たことがあって」

ふっ、と、力無く苦笑した。

「怨まれて当然なのに……今更、『話をさせて』というのも、勝手な話よね……」

「いつちゃん……」

その肩を、先公が支えた。

「……ごめんなさい、今日は帰ります」

諦めたように、立ち上がった。

「んー……ちょっと待つの」

それをアイが引き止める。

「……」

じつと虚空を見つめて……何かを、聞いている……？

「あなたまさか、下の会話に聞き耳立ててるわけ？」

人間では無いのだし、それくらいは可能だろう。

「ぶっ……なっさけなーい、なの」

無表情のまま、そんなことを言った。

「え、何、何!？」

高町が、気になって仕方がないらしい。

「んー……もう、行っても大丈夫そうなの」
解決したんだろうか。

テストロツサのやつ、アホそうに見えて、案外気が利くのかも。
もしくは……秀人も、さっきの大声は本意ではなかった、とか？
テストロツサは、そんな話を聞いてやったのかもしれない。

……おやさしいことで。
私だったら、有無を言わず殴り倒してたな。

「行くよ！」

高町の号令一下、秀人の扶養家族がそろそろと立ち上がり、階下に降りていった。

「ただいまー！」

「……お邪魔します」

……秀人は気まずそうに、視線を逸らしながら、そいつらに連行されてきた。

「なっさけない奴なの！ぶっぶくぶー！」

アイが早速秀人を突っつき回し、喧嘩を始めてしまった。

「……うう、痛いの」

「……何で俺まで」

二人は、ジジイの鉄拳制裁を受けた。

「……秀人くん」

「……なんすか」

むっつりと、不機嫌丸出しの口調で返事をする。

「……ごめんなさい」

ストレートに、謝った。

「……！」

びつくりして固まる秀人に、謝り続ける。

「中途半端に優しくして、ごめんなさい。」

会いに行かなくなって、ごめんなさい」

秀人は、まるで拗ねた子供みたいにそっぽを向いている。

「こら、ヒデ坊……」

「ひでと、」

「秀人さん……」

「秀人」

「秀人！」

「ぼけなす」

「秀人！」

皆、口々に秀人を諷める。

「ごめ……な、さ……！！」

うわ泣いちゃったよ！

「……あー！！わかったよわかりましたよ！！」

根負けした。

ようやく、石田先生の顔を見た。

「一つ、聞いていいですか」

「……ええ」

「俺に優しくしてくれたのは、同情ですか？」

「……」

石田先生は、たっぷり悩み……

「そうじゃない……と言ったら、嘘になるわ」と、答えた。

ふうん……そういえば私も、あれこれ世話焼いてもらったっけ。

「……」

けど……同情だつて、優しさの内だよな？

それを非難することなんて、出来ない。

「……秀人くん」

「……なんすか」

「今日は、帰るわね」

「……はい」

と、ポケットから小さなケースを取り出し、カードみたいな名刺を、秀人に手渡した。

「また今度……秀人くんの気が向いたら、連絡してくれたら嬉しいな」

「………はい」

秀人はそれを、大事に仕舞った。

「はやてちゃん」

「んあ……？」

先生は、二枚目の名刺を取り出して、私にも手渡した。
なにになに……？

海鳴総合病院・神経内科勤務医……？

つて、美香の入院してる病院じゃないか。

しかも、神経内科ってことは。

「先生、美香を知ってるの？」

「……？はやてちゃんこそ」

「うん、まあ……トモダチだし？」

「え、お前友達とかいたの？」

「ぶつ殺すぞてめえ!？」

話の腰をブチ折りやがって!

ジジイがいなかったら、魔剣の餌だ!

「……そっか。はやてちゃんのことだったんだ」

「……うん？」

「……あんまり、いじめちゃ駄目よ」

「……一体、何を話した美香。今度……いや、今夜、聞き出してやる。」

「それじゃ、またね」

そうして、石田先生は帰って行った。

「さて……そろそろ、夕食にするかのう」

「お、やっただ。」

「今夜は何？」

「昨日は魚か……んじゃ、ハンバーグでも作るかの。リーゼ、手伝っておくれ」

「はい」

「先生、よろしければ、御一緒にしませんかな？」

「へっ?いえ、お構いなく……」

「っていつか先生、どうやって帰るつもり？」

「……あー! いっちゃん先に帰っちゃったよー!？」

「……石田先生の車に乗ってきたらしい。」

「道、覚えてないの？」

「車でも、そのくらいは覚えてるだろうけど。」

「あぁ、無理無理」

それを、高町が否定した。

「先生、寝てたし」

「よだれ、たらしてたよね」

……子供かよ。

石田先生に慌ててメールをする。

ぶいーん

……直後、階下から震動音。

「……まさか、な」

秀人が出て行って、すぐ戻ってきた。

「……これ、もしかするけど、」

手には、メタリックレッドの携帯電話。

「いつちゃんのだ……」

がっくりと崩れ落ちた。

「預かるよ」

秀人からそれを受け取る。

どうせ今晚、美香に会いに行くつもりだし。

そのついでに、預けてしまおう。

「夕飯が終わったら、ヒデ坊に送ってもらえばええ。」

女性の夜歩きは、危ないからのう。最近、なにかと物騒じゃし」

……もしかして、私のことか？

大量失踪事件……とか、世間を騒がせているらしいけど。

「悪い、爺さん。ついでなんだけど、俺達もここで食べていい？」

「あー、そっか。ヴィーター……」

「あいつ、一度寝たら起きない夕チだし……」

部屋が、物理的に使えないのか。

「ま、仕方無かるう。手伝うんじゃぞ」

「分かってるって」

その晩も……私は、大勢の人間と一緒に食卓を囲んだ。
「げっぷ……」

つい、食べすぎてしまった。

夜風が、満腹の身体に心地好い。

「主、集中を乱さずに」

「うん」

隣を飛行するリーゼが、指示を飛ばす。

「ですが上出来です、主。『スレイプニル』も無しに、そこまで安定するとは」

「まあ、あっちの方が楽っちゃ楽なんだけどねえ……」
嫌いな思い出が、脳裏をよぎる。

「アレ、弱点を晒しているようなものなんだよ」

飛行をアレに頼り切っていた結果、切り落とされ、撃墜された。

「補助輪は、もう卒業だよ」

そして、美香の病室に着いた。

コンコン、と窓をノックする。

「姐さん、いらっしやい！」

朗らかな笑顔で、私を出迎える。

「よっ。元気そうで何より」

リーゼと共に、着地。

「リーゼも、いらっしやい！」

最初はリーゼを警戒していた美香だけど、何度か顔を合わせていたら打ち解けた。

聞き出してやるうかと思っただけど……楽しそうにお喋りする美香を見ていたら、その気は無くなっていた。

「それでね、お兄ちゃん、警備員さん呼ばれちゃって大変だったんだよ」

美香は、あまり兄とは似ていないらしい。

「だから、お姉ちゃんも『金髪は止めなさい』って言ってたのに」
「けらけらと笑う。」

お喋りを終えたら……魔法の練習だ。

どうやら美香は、中・遠距離型らしい。

身体にハンデがあるのだから、当然と言えば当然だ。

防御が鬼のように固い高町とは違うから、ちょこまか飛び回って、チクチクと削っていくのが性に合っている。

……私に内緒で、リーゼから何かを教わっているのは知ってるけどね。

訓練は、実戦方式。

リーゼが審判を勤め、私と美香が戦う……というもの。

「そりゃー！」

ズバアアアッ！

間の抜けた声とは裏腹に、結構な威力の砲撃が、私の服を掠めた。

この模擬戦のパターンは……

私は、いかに近付いて美香を切り伏せるか。

美香は、いかに遠くから私を撃ち落とすか。

「まだまだ行くよー！」

ヒュガガガガッ！

ブラッディダガーを、雨のように射出して牽制してくる。
「……………だあっ！」

その中心部を、強引に突破する！
これを抜ければ、美香は射程内！
防御をガリガリ削られるけど、大したダメージは無い！

……………抜けたッ！

「もらった！」

が、美香は不敵に笑い……………

「……………それは、読んでた！」

私の手足の周辺に、魔力光が集まって……………！

「檻よ、閉ませ！」

「バインド……………！」

こんな絡め手、覚えていたのか！

「もらった！」

勝ち誇る美香。

けど……………まだ甘い。

（読んでたよ）

弾幕の強行突破を、きつと美香は予測している……………つて。

「……………アクセル！」

両足に螺旋状の魔力を纏わせ、一気に方向転換＋加速！

美香の真正面に肉薄し……………！

「はあっ！」

バチィンッ！！

リーゼが装備させた、安全装置を破壊した！

「勝負あり！」

リーゼが、高らかに宣言する。

これで、八戦八勝！

「うっう〜……また負けたあ」

「けっけっけ……そう簡単には、勝たせないよ」

ベッドの上で、悔しそうにしている美香。

練習が終われば、美香が眠くなるまで、またお喋りの時間だ。

美香は、色々と聞いてくる。

それに釣られて、あれこれ話してしまうあたり……案外、聞き上手なのかもしれない。

「姐さん、そろそろ秋だね」

「寒いのが好きじゃないんだけどなあ……」

「でも、食べ物は美味しいよ？」

「食欲の秋、読書の秋……それから、スポーツの秋」

「……」
美香は、そう言って黙り込んだ。

……美香は本来なら、身体を動かすのが好きなんだ。

魔力による擬似神経……これは、肉体改造の部類だ。

幼い美香には、まだ早い。

「……退院したら、好きなだけ走り回れるさ」

「……うんっ！」

美香に、石田先生の携帯電話を渡し、その日は帰ってきた。

翌日、俺は欠勤のことをカントク達に詫び……早速、現場作業にあたっていた。

今は昼休み。

作業員たちは、思い思いの場所に腰掛け、弁当やサンドイッチを食べていた。

「んでよ、左の車輪から妙にカラカラ音がすつから、見てみたんだよ」

秀人と膝を並べるカントクが、秀人が不在であった時のことを話す。

「したら……ロザリオつつうの？」

「なんか、欠けた十字架みたいなモンが引っ掛かって……警察に届けたんだわ」

「ふうん……」

「夏前のことだから……そろそろ半年だな」
半年。

遺失物は、届けられて半年経てば、所有権が拾った者に委譲される。

「確か、来週の頭だったなあ……」

律儀にも、受け取りに行くようだ。

「一応、ヒデにも見せてやるよ。気に入ったら、そのまま持って行ってもいい」

「わかりました。来週ですね」

スケジュール帳に書き込み、ポケットに仕舞う。

「ヒデさん、カントク、何の話ッスか？」

金髪の若者が、輪に加わった。

「あ？……人件費削減案だったら、どうする？」

「ひいッ！勘弁ッス！」

「もしくは、副業禁止の話し相いだったり？」

「ヒデさんも止めてくださいよ、もー！」

お調子者を輪に加え、休憩時間は和やかに過ぎて行った。

その日の仕事を終え、帰宅する秀人。

段々、陽が落ちるのが早くなってきたと感じながら、足早に家を目指す。

「……」

と、正面から、帽子を目深に被った女性が走ってきた。

秀人自身、ぼうつとしていたこともあり……

どんっ

すれ違い様に、ぶつかってしまった。

「あ、済みません」

謝罪し、手を伸ばす。

「……いえ、こちらこそ」

女性は、その手を取り立ち上がると、ズレた帽子を再び被り直し、走り去って行った。

女性の腰から、ベルトの端か……何か、長いものが伸び、ぱたぱた揺れていた。

かさっ

と、懐に違和感。

まさぐってみると……

「……紙？」

いやに古臭い……厚ぼったい紙だった。

表面には、手書きらしき文字と……一つの、装飾品らしい、十字架のイラストが載っていた。

「何だ、これ……？」

不審に思いつつ……秀人はそれを、ジーンズのポケットに仕舞い直した。

新たな住居の中。

はやての帰りを待つリーゼは家事を終え、瞑目していた。

「……急がねば」

ぼそつ、と、無意識の言葉が口をつく。

「闇の書の、闇……今はまだ、不活性だが……綻びが、出始めている」

その言葉は、緊迫に満ちていた。

「『霞の騎士団』ではない、真の、守護騎士プログラムを……主に、託さねば」

リーゼは、その思惑を口にする。

「真の守護騎士を、我が主に……！」

第九十三話

朝の鍛練の後……よくスケジュールを確認してみたら、先公が言っていた運動会は、再来週だった。

「……ま、いいや」

どうせ、参加しないし。

「主、お食事の準備が整いました」
お、待ってました。

「主、間もなく登校のお時間です」

食後、歯磨きを終えて寝転んでいたら、8時を回っていた。

「あー……いいよ今日は」

眠いし……

「……主、」

洗い物をする手を止め、リーゼが振り向く。

「主、ですが……」

「うーるーさーいー……」

朝練の疲れも溜まってるんだ。

今日は、自主休日にしようっと。

リーゼが、何かを言いたそうにしている。

ピンポーン。

……あ？ 呼び鈴？

「誰だ……？」

リーゼは……洗い物か。無視してもいいけど……

ピンポーン。……ドンドン、

ノックまでおまけでついて来た。

「八神、起きてるんでしょ？ 八神！！」

「……高町？」

「……この時、迂闊にドアを開けてしまったことを……一週間後悔し続けることになるとは、思いもしなかった。

「何よ、朝っぱらから、うるさいわね……」

「学校行くよ」

「……は？」

「何だよ。今日は行く気は無い……」

「行くよ！」

がしっ。

「！？」

掴まれた。

「ほら、もう時間無いんだから！」

「行かないっつーの！ 離せテメエ！」

「リーゼさん、八神の鞆投げて！」「どうぞ」

ぱしっ……と、リーゼが高町に投げて寄越したのは……私のリュックサック。

「リーゼでめえ！」

「……行ってらっしゃいませ、主」

「お、覚えてるよおお！」

「……三流悪役みたいな言葉しか、出てこなかった。

「離せよ気持ち悪いな！」

何が悲しくて、敵の女と手を繋がないといけないんだ。

「だって、離れたら逃げるでしょ！」

「つたりめーだろ！」

「私が学校に行こうと行くまいと、おまえには関係無いだろ！」

「関係あるわよ！」

「ぐいつ、と、顔を寄せてきた。」

「八神あなた、クラスの実行委員なんだよ!？」

「聞いてねエ!？」

「そりゃそうよ。だって、あなたが寝てる間に決まったんだから」

「ふざけんな！」

「欠席投票なんて認めないぞ!？」

「ついでに、私もだからね！」

「サボりは、許さないんだから！」

「運動会実行委員……?」

「つまり、運動会が終わるまで二週間ずっと、高町の相方……?」

「ぞわー……つと、鳥肌が立った。」

「嫌だ！私は帰る！帰って寝る！」

「我が儘ばかり言うなあ！」

高町は、羞恥で赤く染まった顔で怒鳴る。

「なんで私まで……」

『高町さんと八神さんって仲良いよね!』

「……なんて理由で、実行委員に他薦されなくちゃならないのよ！」

「断れよそんなぐらいよお！お前、新聞を三紙も四紙も取る田舎者が」

「先生に頼まれて、秀人さんにまで頼まれて……断るわけにもいかないでしょうが！」

……おいちよつと待て。秀人に、何て頼まれた。

「『あいつ、クラスに溶け込めて無いだろ？

更生も兼ねて、クラスの輪に放り込んで、集団行動を身につけさせてやってくれ』」

……だって」

よし決めた殺そうあの馬鹿。

「……というわけで、お仕事だよ！ほら、シャキシャキ歩く！」

変に覚悟を決めたのか、据わった目つきの高町に引きずられながら、行きたくも無い学校に連行された。

うふう……何で私が、こんな目にイイイイイイ！？

その日の、午後の授業……を潰しての、会議という名の話し合いという名のグダグダ。

「あの……静かに、して下さい……あの……話し合いを……」

高町は、普段の不遜な態度はどこへやら。

やれゲームだプリクラだサッカーだの、好き勝手に雑談をするクラスメイト達に困り果てていた。

「……チッ」

このまま放置してやっても面白いんだけど。

この話が纏まらないことには、会議が終わらない。ついでに帰れない。

嫌々仕方なく、進行させてやる。

ガゴンッ！！

教卓を蹴り倒し、雑談をシャットアウト。

「ちょ、ちよつと八神……！」

「黙ってるへボ」

「へ、へぼ……？」

全く……たかがガキの20や30、御せなくてどうする。

「参加種目は、400メートル走と800メートルリレーだ。はい決定」

「「ええええええっ！？」「」

……不服の声が上がった。

自分では意見を出さない癖に、他人の意見には積極的に反対を飛ばすのかよ……クズ共が。

まあ、わかりやすく説明してやるか。

「このクラスには、中距離走向けの奴が揃ってる。なら、勝てる競技に戦力を割くのは当然だろ」

「勝手すぎるだろ！」「俺、そんなに走るのやだ」「幅跳び……すぐ終わるし」「……転校生がデカイ顔しやがって」

まだまだ出てくる、反対というか、私への野次。

「おい、富樫。斎藤。意見があるなら立って言え」

「「！？」」

なんだ、お前ら……もしかして、私がクラスの情報を集めてないとも思ってたのかよ。

「一組、四組には、陸上部を始めとした運動部の男子が多く所属し

てる。

「……が、そいつらの殆どは、他の種目にエントリーした」
このクラスの、会議の遅れが幸いした。

「当然、そいつらが出る100メートル走、200メートル走、走り幅跳び、走り高跳び……それら種目での勝率は低い」

「……馬鹿にもわかりやすく説明するのは、骨が折れる。」

「所詮は子供の体力だ……長丁場になればなっただけ、差は縮まる」と、女子の一人が拳手した。

小綺麗な服を着た、いかにも小金持ちの子供……そんな奴。

「あの……そんなにガツガツしなくてもいいんじゃないかな？」

運動会だし……みんなで楽しくやろうよ」

「そーだそーだ、いいこと言った、さすが橋本……馬鹿共がそれを後押しする。」

ふう……いい子ちゃんには、脅しかけておくかなあ。

「確か……最下位のクラスは、運動会の後片付けと……体育館の床掃除だったよな？」

高町に確認を取る……フリをする。

「うん、そう聞いている……」

教室がどよめいた。

にや、と意地の悪い笑みを意識して浮かべ、言う。

「やるか？汗にまみれて後片付け。埃まみれになって床掃除。」

「……まあ、『みんなで楽しく』やれるなら、掃除でもいいか？」

「……いえ」

橋本がすっこみ……クラスに、敗北と、それによってもたらされる恐怖が、浸透していく。

しばらく、無言で待ち……

(頃合いだ)

鞭の後は……飴をちらつかせる。

「優勝クラスには一週間の特別給食と、昼休みの体育館の使用権利が与えられる！」

おおっ……と、男子女子双方から、どよめきがあがった。

「私の指揮に従うなら……優勝と、それに付随する権利はお前達のものになると約束しよう」

ざわざわと、期待に騒ぐクラスメイト達。

ばんっ！

机を叩き、再び注目を集める。
全員の顔を見回し……告げる。

「 勝つぞ」

短く、強く。

「「「おおおおおおお！！」「」「」

私が率いる以上……負けは許さない。絶対確実に、クラス優勝してもらおうからな。

「尚、選手は決定次第、高町を通じて担任に伝えるように。
その他諸々の雑事は、高町が担当する」

「ちょ……！？」

面倒ごとはお前がやれ。

「以上、解散！」

よし、これで帰れるぞ。

「ちよつと八神！やが、」「ねえ高町さん、私は400メートルが」

「あ、ええと……種目ごとに集計取るから……八神、八神！？」

がんばれよーっと。

私は高町を残し、悠々と教室を後にした。

第九十四話

カントクと並んで、警察署のロビーを進む。

あの日から一週間。

例の、カントクが拾った十字架の現物を確認しに来たのだ。

「あー、すみません。半年前に落とし物を届けた、向井という者ですが。」

所有権の譲渡の手続きに参りました」

窓口の、ちょっと色っぽい婦警さんに名前を告げて免許証を見せるカントク。

婦警さんは、手元のパソコンで何かを照会して、顔を上げた。

「……はい、承っております」

廊下を歩き……また別の窓口へ。

そこでようやく、勿体振って渡された十字架を受けとった。

「おう、ヒゲ」

ぼん、と渡された十字架を確認してみる。

……十字架というから、立方体を重ねたようなシンプル極まりないものを想像していた。

けど、それは……

「おお……なんか、凝ってますねコレ」

十字架とはいっても、勇ましい剣十字だ。

しかも、四本の剣それぞれに、更に十字架が彫り込まれているという、製作者の情熱が伝わって来る程の出来栄だ。

しかも、バリが無いってことは、削り出しのワンオフ品。

「だろ？」

カントクが気に入る理由も、少し分かった気がしたけど……

「これ、壊れてますよ？」

……剣十字の一角は砕けて、チェーンは繋ぎ目が壊れて千切れてしまっていた。

砂埃を掃つても、汚れは酷いし傷だらけ。

元が大層な工艺品だったために、余計に物悲しい雰囲気醸し出している。

警察に届けはしても、わざわざ半年待つて貰いに來る程の物ではない。

「……だよなあ」

カントクは、何故か首を傾げた。

「だよなあ、つて……カントクが拾ったんでしょ？」

「ああ、まあ、そうなんだよ……ぶっちゃけ俺も忘れてたし」

……忘れてた？

「久々にお前の顔見た時にな……ピン、と思い出したんだよ。あ

あ、お前に見せなきゃ、つて」

「あの……意味わかんないっすけど」

何で、俺の顔を見て思い出したんだ？

「だから、俺にもわかんねーつて。とにかく、それはお前が持つて
る」

「あ、はい」

チャリチャリと手の平の上で遊ばせつつ、トラックの助手席に乗り込んだ。

「待っていたの、ぼけなす」

……見慣れた職場の、見慣れたデスク。

そこに……何故かアイがいた。

行儀良く背筋を伸ばして椅子に座り、まるでこの場の主であるかのように、俺達を横柄に出迎えた。

「あの……お帰りなさいッス、カントク、ヒデさん」

美夫が、へこへこ和金髪頭を揺らしながら、擦り寄ってきた。

「休憩中だったんすけど、このねーちゃんがいきなり押しかけてきて……」

時計では、既に休憩時間をとくに過ぎていた。

「客人一人を残していくわけにもいかないんで、オレが残ってました、ハイ」

「わかった……ヨシ、ご苦労だったな。持ち場に戻れ」

「うっす！行ってきます！！」

美夫を褒めたカントクは、次にアイに目をやる。

「申し訳ありません。少々の間、あちらの応接間でお待ち頂けますでしょうか？」

「んー……わかったの」

カントクに丁寧に案内され、アイがオフィスから移動していった。

……そして、カントクは俺に厳しい目を向けた。

「ヒデ、知り合いか」

「はい」

「馬鹿野郎ッ！」

「ごんっ」

拳が、俺の頭を叩いた。

「仕事場に、ダチ連れ込んでんじゃねえッ！ 遊びじゃねえんだぞっ！」

「……すみませんでした！」

俺は、頭を下げるしか無い。

俺はアイに、『職場に来るな』としつかり言い含めていなかった。そのせいで……

「お前が連れ込んだダチの対応に、ウチの工員を一人割いた。 ……」

…わかるな」

「はいっ…………！」

………… 仕事の納期は、絶対だ。

納期を遵守するためには、無駄を極力省かなくてはならない。

………… プライベートの客人の対応のために、工員を持ち場から外すなんて、言語道断だ。

きつと、美夫の持ち場は、他の工員達がカバーしているか………… 最悪、後回しになっている。

「分かったら、客人には、お引き取り願え」

「はいっ！！！」

駆け足で応接間に向かい、アイに帰れと伝えた。

…………が。

「よくわからない。アイは、おまえと『お話』をしにきただけなのに」

………… 『お話』とは、例のアレだ。

「お前のマスター云々の話だろ？ 今は仕事なんだ。帰ったら、聞いてやるから…………」

「いや。アイは帰らないの。おまえが『お話』を聞いてくれるまで、帰らないの」

ぷいっ、と俺に背を向けて、ソファにしがみついてしまった。

困った………… 早いとこ、仕事に戻らないといけないんだが…………

「アイ。場所を変えるぞ。ついて来い」

「………… アイのお話、聞く気になったの？」

「聞かないとは言ってないだろ？」

「……わかつたの」

アイは、渋々といった様子で、ソファから立ち上がった。

カントクは、先に現場に向かったようだ。

今回の現場は、この事務所のごく近所。

歩いて行ける場所にあることが、唯一の救いだ。

事務所の戸締まりをして、現場に走る。

ぱたぱたぱた……と、サンダル履きの足で俺に追いつくアイ。

……今度、ちゃんとした靴を買ってやろう。

「逃げられるなんて、思わない方が身のためなの。ぜったいぜったい、逃がさないの」

「逃げないつつの」

……現場に程近い一画の、漫画喫茶で立ち止まる。

「何時間か、ここで時間を潰しておけ。仕事が終わったら迎えに来る」

「……そう言つて、逃げる気なの」

「ほら、担保」

小遣いを、財布と丸ごとアイに手渡す。

「……わかつたの。待つてやるの」

アイは、ようやく納得してくれた。

その日の仕事をなんとか終えた頃には、既に6時を回っていた。

アイの待つ漫画喫茶に急ごうと、作業着を着替える。

かさつ、という乾いた感触が、ロッカーの奥から帰ってきた。

「？」

取り出してみると、それは数枚の紙切れ。

(あ、これ確か、先週の……)

翌日、ポケットに入れたまま仕事場に持ってきちゃって、ロッカーに突っ込んだままだった。

ゴミを置いていくわけにもいかないし、持って帰らなきゃ。

急いで支度を終えて、アイの待つ漫画喫茶に走る。

「……悪い、待たせた！」

「……遅いの、ぼけなす」

アイは、漫画喫茶のドアの前にいた。

多分、時間一杯まで過ごしたんだろう。

「んじゃ、帰るか」

「ちよつと待つ」

ぐいつ、と俺の手を引き、少し離れた所にあった大型古書店へずんずん進んで……

「これを買うの」

アイが指差したのは……

「シャーマンキング愛蔵版全巻セットお……？」

「単行本は、未完で終わっていたの」

値段は……四桁後半。

「これ下さい、なの」

ちよつと待てコラ。

つて、そうだ。財布預けっ放しだった。

目の前でサクサクと進む会計。

「はぁ……まぁ、いいけどさ」

俺も読むし。

でも、給料日近くでこんな買い物したら、なのはにござさねちまうなぁ……

「今日は、とてもいい日なの」

上機嫌なアイは、新品のスニーカーを鳴らして歩く。

……ついでに、靴も買ってやった。

「ただいまー」「ただいまなの」
家のドアを開ける。

「おう、帰ったか」「おかえりー！」
グイータとフェイトが、俺達を出迎えた。
二人とも、エプロンを着けている。

「おお、今日は二人が当番か」

「そろそろできるよー！」

ちらっ、と台所を見てみると、大皿一杯の肉野菜炒めと、定番の
卵焼きモドキ。

「アイ、お前も食べるだろ？」

「うん」

……たまに、こいつは人間なんじゃないだろうかと思う。メシ食
うし、寝るし。マリーの奴は、何を考えてるやら……

「ただいま……秀人も帰ったところ？」

ユーノとアルフも、夕飯に合わせて帰ってきたらしい。
いつまでも玄関先にいないで、入るとするか。

……それにしても、妙になのはが静かだな。

「……」

理由は、すぐに分かった。

なのはちやぶ台に向かって、ノートに何かを書いたり、消した
りしていた。

「うー……八神のやつ……」

時折唸って頭を抱えて、ぐりぐり黒く塗り潰す。

「なのは、ただいま」

頃合いを見計らって、声をかけた。

「うわっ！秀人さん！？」

びっくりしていた。

「お、おかえりなさいっ！」

「何書いてるんだ？」

「ん……」

差し出されたノートを見てみる。

浅野、上安、川田……苗字の羅列の下に、何かのタイムと覚しき数値が書き込まれている。

「運動会の、リレーの順番」

そうか……もうそんな時期か。

「八神と私が、クラスの実行委員だから」

……よくやる気になったな。

目立つの嫌いなのに。

「八神のやつ、手伝いもしないで、

『駒を動かすのが私の仕事。

駒を揃えるのはお前の仕事』

……って言うんだよ！」

はは、あいつらしい。

「くそぅ……あんにやるぅ……」

悪態をつきながらも、どこか楽しそうだ。

「フェイトは？」

「個別種目の100メートルと200メートル。男子からは葉山君。短距離はその二人だけ」

なるほど……勝てる力量がある奴だけをぶつけるつもりか。

「後は、リレーに殆どのメンバーを割いてる」

……ガチじゃないか。

少しして、フェイトとウィータが料理の皿を運んできた。

「ごめんね、任せちゃって」

「きにしなideいいよ。れんしゅうになるし」
そして、夕食が始まった。

「ところで」

……きた。

「秀人さん。アイが持つてるのは、何？」

なのはが箸を置き、部屋の片隅に置かれたブツを指差した。

「……漫画」

「いくら？」

「……8980円」

「秀人さん」

「……すまん」

うう…… やっぱり怒られたじゃんかよ。

「はあ…… ま、買ったものはしょうがないか。

でも…… 今度からは、買う前に教えてね」

なんとか、許してもらえたらしい。

食後、くつろいでいたら…… ユーノが妙なことを言い出した。

「秀人。最近、無限書庫に来た？」

「無限書庫？ …… いや、行ってないけど」

「でも、これ……」

そう言って、俺が持って帰ってきた紙切れを持ち上げる。

「無限書庫の、本の一部だよ」

「なに？」

「……くんくん」

アルフが顔を近づけ、鼻を鳴らす。

「あ、間違いないよ」

犬…… もとい、狼の嗅覚なら確実だろう。

「じゃあ、あいつか……？」

俺にぶつかってきた女。

何を企んだかは知らないが、警戒しておこう。
かさつ、と紙を開く。

日本語で表記された文章の下に、凝った意匠の十字架のアクセサリ。

白黒で画質が悪く、見えづらかったが……よく見てみたら、今日、カントクから貰ったアレにそっくりじゃないか。

「なあ、これ……」

ちやぶ台の上、紙切れの隣に、壊れたアクセサリを置き、みんなに見せる。

「……同じもの、だよね」

なのはを始めたとした全員が、俺と同じ意見だった。

ユーノが、その文章を読み上げる。

「『……〇〇（破かれていて解読不能。多分、人名）への祝いの品として、銀細工職人・田上奈々に制作を依頼される』……下に書いてある比率は、合金の割合だと思う」

さすが無限書庫。

こと細かなデータが揃ってるぜ。

（無限書庫……破られた本………あ！）

忘れかけていた記憶が、蘇る。

確か、一昨年あたりに起きた、魔力の暴発による旅客機墜落事故。

あの本が、中途半端に破られていた筈だ。

もしかして……昨日の女は、何かを俺に伝えようとしていたのか？

「ユーノ、」

……あの本を隠した座標をユーノに伝えた。

「で、どうするの？」

どうするかな……まあ、とりあえず。

「直せるものなら、直してみたいよなあ」

よくわからんが、何かの手がかりになり得るかもしれない。

「……ねえ、秀人さん」

なのはが、首に下げたレイジングハートを……というか、それを繋ぐチェーンを持ち上げた。

「これ売ってくれたお姉さん、確か……」

「……あ」

『もし壊れた銀細工とかあったら、店に持ってきて』

脳裏に、ジャラジャラとアクセサリーを鳴らす、ケバいねーちゃんの姿が浮かんだ。

「あの人に、頼んでみよう」

時計は、午後7時。

商店街の店は、そろそろ閉まる。

あのねーちゃんの店が何時に閉まるのかは聞いていなかったが、行ってみるのも悪くない。

「ちよつと行ってくる」

メットとキーを手に、家を出た。

「確か……このあたりだったな」

バイクを止め、下りる。

居酒屋やクラブ等、夜間がメインの店を除いて、ほぼシャッターが閉まっていた。

その一角に……未だ、照明が点る店があった。

「お邪魔しまーっす」

無駄足にならずに済んだみたいだ。

「あり……？」

「キミは確か……」

ジャラツ、と、金属のネックレスが揺れた。

「よう。今、時間いいか？」

「むふふ……でえとのお誘いですかな？」

「実は、アクセサリーの修理を頼みたくて」

「……スルーされたー」

ちよつと悲しそうな顔をした。

ポケットから壊れた十字架を取り出し、カウンターに置く。

「……！！」

店主が、驚きに目を見開いた。

「これ……！！」

やっぱり、同業者から見ても、いい品物なんだろう。

狭い業界だろうし、駄目元で聞いてみた。

「田上奈々、つて人の作品らしいんだ。もし直せなくても、その人に連絡が取れるなら……」

「うん、知ってる知ってる、超知ってる！ 今、呼んできてあげる

よー」

「マジで！？」

言ってみるものだ。

店主は、店のバックヤードに入っていく。

「お待たせっ」

5分も掛からず、出てきた。

振り返り……

「……あの、田上奈々さんは？」

そこにいたのは、店主ただひとり。

店主は、俺の訝しい表情をスルーした。

「ある時は露店商……またある時は、アクセサリーショップ店長……」

…しかし、その実態は！」

ばっ、ばっ！

と、恐らくは常々練習していたであろうポーズを決める。

「流しの銀細工職人・田上奈々ちゃんなのですっ！！」

……本人だった。

「ええ〜……」

なんかイメージと違う。

「いやー、懐かしいねえ、コレ。二年くらい前、関西の街で売ったんだよ」

店長改め田上は、壊れた十字架を慈しむように指でなぞった。

「よく覚えてるな」

「全部、私の子供みたいなモンだからね。いつ作ったか、いつ売ったか。ちゃんとして覚えてるの！」

これを買ったのは確か……妙に身なりの良いジェントルメンだったね。クリスマスプレゼントだったのかなあ？」

そいつが、生存者の少女の父親で間違いない。

「……直るか？」

「うん」

あっさりと断言するのだから……信用して良いはずだ。

「銀っていうのはね、『心』が宿る媒体なの」

……いつものチャライ雰囲気が消えた。

「製作者である私は勿論……数多の作品郡から一つを見定めた者の『心』」。

それを、誰かに贈ろうとした者の『心』。

受けとった者の、喜びの『心』。

手放してしまった者の、悲しみの『心』。「

千切れたチェーンをつまみ、振り子のよつに揺らす。

「貴方は、この傷付いた剣十字に……どのような『心』を込めるの？」

……十字架が、揺れる。

田上の碧眼と、俺の瞳の中心で。

ゆらゆらと。

ゆらゆらと。

「……………『再会』、だ」

自然と、そのワードが口に出た。

「たとえ、離れ離れになっても……また、いつか必ず、出会えるよ
うに……………」

頭の中では考えていないのに、まるで、心の底を吐露してしまっ
たようで……………

パンッ！

「うわっ！？」

「……はい、商談成立！」

田上が手を打ち合わせる音に、現実に戻された。

「仕上がったら連絡するよん」

田上は、先程までの超常的な空気を消し去り、いつものチャラクで軽い雰囲気を纏っていた。

「さ、店じまいだよ」

「あ、ああ……それじゃ、頼んだ」

まだ少しぼんやりする頭を振って、店を出る。

夜風に当たると、ようやく現実感が戻り……

(俺……何を言ったんだっけ?)

……田上と何を話していたのかを、思い出せなくなっていた。

第九十五話

選手の選別、ごねる生徒の説得、競技の説明……バタバタしているうちに、運動会の前日になってしまった。

「八神、選手表は確認したよね？」

放課後、八神の部屋で最終ミーティングを行う。

「まあ……十段階評価で、七つてトコだったな」

「むっ……今更、ケチ付けるの？」

今の今まで、私に押し付けてた癖に。

「ま、上出来じゃねーの？ ……お前にしては」

「あんたは一言多いのよ！」

「主、なのは……夕食の支度が整いましたよ」

え、もうそんな時間！？

「せっかくですから、なのはも食べていって下さい」

「……」

八神は、『勝手にしろ』と言わんばかりに、頬杖をついている。

うーん……今日は、秀人さんが当番の日だけど……だからといって、一人だけ別つても淋しい。

「あ、そうだ。八神とリーゼ、私ん家で一緒に」「却下」「……な、何だよ！」

折角の名案を！

「……大勢で集まるの、好きじゃないから」

う……確かに、私ん家に来たら、アウエーになるかも。

「……わかった」

……たまになら、いいか。

階下までそのことを伝えに行つて、戻つて来ると、真新しいテールの上にはリーゼの手料理が並んでいた。

低カロリーで、それでいてポリウーム的にはかなり多い。

「すごいね、リーゼ」

「主の健康管理も、私の使命ですから」

……リーゼと契約する前は、どんな食生活だったのか、想像するだけで恐ろしい。

白身魚のムニエルを口にしながら、八神にそれとなく会話を振つてみる。

「八神つて……転校してくる前は、どこの学校通つてたの？」

「……確か、第一小学校」

「何よ、妙に曖昧じゃない」

「一度も行かなかったから」

「……」

さらっと、とんでもない事を言った。

「ええ……何で？」

「……」

だんまり。

「……明日」

「え？」

明日つて……運動会だけだ。

「勝つよ」

「……うん」

やる気、十分。

私達のミーティングは、日付が変わるまで続いた。

そして……

『これより、海鳴第二小学校・運動会を開催します!』

いよいよ、本番だ!

クラスメイト達も、どこかそわそわ落ち着かない。

「あー……うー……」

中でも、最も落ち着きが無いのはフェイトだ。

朝一のクラス会でリレーのアンカーという大役を命じられ……逃げ出し……クラス総出で取り押さえられ……説得されること数10分。

「フェイト」

見兼ねて声を掛けた。

フェイトは、動きやすいようにシニヨンにアップされていた。

ここぞとばかりに、望達から髪をいじくられ、それが更に心労を増したらしい。

「うう……なのはあ……ボク、かえりたい……」

「100メートルで一位だったら、秀人さんが何でも買ってあげると言ってたよ」

「……なんでも?」

びくつ、とフェイトが反応した。

「うん。何でも」

「……がんばろう、かな」

……けしかけておいて何だけど、即物的な子だなあ。

「午後一番の100メートル、秀人さん達も応援に来てくれるから、秀人さんも、ユーノくんも、アルフも……そして何故か、高町の家からも、応援に駆け付けてくれるらしい。」

「高町、テスタロッサ、ポケットとすんな！すぐに最初の種目だぞ！」

司令官から激が飛んだ。

「すぐ行く！」

フェイトの手を引いて、競技待ちの列に整列する。

まずは、学年種目の100メートル。

個人種目と違い、競技人数が多いため、例え一位になろうとも、獲得できる点数はずっと少ない。

かといって、見過ごせるほど少ないわけじゃないから、みんな一生懸命走る。

結果として……フェイトや葉山君、ある程度脚力がある子を除いて、平均四位。

かくいう私は、三位だった。

「……」

八神は、冷静にスコアボードに記入している。

「ねえ、八神さん……」

クラスメイトの一人が、流石に疑問を感じて意見を述べた。

「このメンバーで……本当に、優勝できるの？」

……疑問も、最もだ。

今の競技で、我が三年二組の鈍足っぷりは暴かれてしまった。

八神は、スコアボードをぱたん、と閉じ……

「……問題無い」

短く返した。

「このクラスの、瞬発力の無さは想定内」

「……」

「後は、私の指揮と……お前達一人一人の、やる気と根性に掛かっている」

「……わ、わかった、頑張る！」

その女子は、自分が参加する種目の待機列に走っていった。

消化試合のような午前の部を終えて……点数は、四クラス中、三位。

正直、芳しくない。

けど……八神の目はまだ、勝負を投げてはいなかった。

「……これより、午後の部だ」

休憩時間を利用し、クラス全員が教室に集結した。

「我がクラスの現状はどうだ、速水？」

教卓に腰掛け、そう問う八神。

「……最下位との点差、たった15……ほぼ、最下位です」

クラスに、重い沈黙が下りる。

やはり、根性論で覆せるほど、現実には甘くなかったのか……

「ここからだ」

「！」

八神の一言に、ハツと顔を上げる。

「午後の部の個人種目、クラス種目……それらは全て、『勝てる』メンバーで構成している」

「……でも俺、そんなに足速くない」

小太りのクラスメイトが、弱気を口にした。

「臼井。お前の種目は何だ」

「中距離……800メートル、だけど」

「お前は、授業でも練習でも……一度も歩かずに走り切ったじゃないか」

「！」

白井君が、顔を上げる。

「いつもと同じだ。走り切ることを考える。……結果は、自然とついて来る」

「……はいっ！」

彼に続いて、一人、また一人……的確に評価を下し、鼓舞していく。

……私が見ていなかった彼らの側面を、八神はちゃんと見定めていたんだ。

「神尾。高橋。増田。葉山……テストロッサ」

最後に……目玉種目、1000メートルリレーの選手を呼ぶ。

出場チーム唯一の、男女混成チーム

「二週間前……お前たちはゼロだった。

リードもせず、バラバラに走り、バトンを落とす……とても、出せるレベルでは無かった」

「……」

間を取り……

「だけど、お前達は努力した。

走って、走って……でも、バトンを落とすことは無くなった」
すつ、と、全員の顔を見渡す。

「お前達全員が、この日のためにどれだけのものを積み重ねてきたのか……私は知っている。

どれだけ転び。

どれだけ泣き。

どれだけ立ち上がったのか。

お前たちは、間違はなく……『勝てる』メンバーだ。

そして、この本番を迎えて……私が言えることは、ただ一言」

すうっ、と、一呼吸を置き……

「勝つぞ、三年二組！！」

！！

32人の咆哮が、校舎を揺るがした。

第九十六話

「……………」

「かつち、こつち……………」

秒針が時を刻む音が、いやに大きく聞こえる。

「……………」

目の前には、愛用の携帯電話と…………一枚の名刺。それが、何かの寓意のように、机に並んでいた。というか、俺が並べた。

「……………」秀人…………まだ悩んでるの？」

ユーノが、呆れた様子で言った。

「なあ、早く行こう？」

フェイトの定番、終わっちゃうよ」

アルフが、ぱたぱたと足踏みする。

「ふわーあ…………おまえというやつは、決断力が足りていなさすぎなの」

アイが、眠そうに欠伸をした。

「秀人、せっかく半日休みを貰ったんだろ？」「なのはとはやてだつて、秀人が来るのを楽しみにしてるんだよ」

「うう…………でもなあ……………」

石田先生を呼ぶなんて……………」

だって俺、あんな醜態曝して……………」

でも、爺さんが言ってくれたんだし……………」

「あ、もしもしなの。ウチのぼけなすが、話があると言っているの」

光速で奪い返した！

「何しとんじやポケエエエー!!」

「もう繋がってるの」

え、うっそ!?

「……」

『もしもし、アイさん? ほけなすって、誰のこと? ……もしもし?』

切る……って手もあるけど……流石にもう、覚悟を決めるしかないか。

「……どうも、ほけなすです」

精一杯のおふざけと共に、挨拶をした。

『……秀人くん?』

石田先生が、息を呑んだ気配が伝わってきた。

『……どうしたの?』

かつてと変わらない、優しい声だ。それが少し嬉しく……苛立たしい。

「富山先生から聞いているかもしれないけど……今日は、小学校の運動会なんです。はやても出ます。だから……あの……お時間があれば、なんですけど……」

緊張と、照れ臭さで言葉が出づらい。

電話機から顔を離し、深呼吸する。

「すー……はー……」

……よし、言っぞ。

「一緒に、観に行きませんか」

よし、言えた。

『……まあ、』

電話口の向こうで、石田先生が困ったような声を出していた。

……だよな。いくら何でも……

伝え忘れてた。

運動会は、車での来場が禁止されているんだった。

「爺さん悪い、アイ頼むわ!」

「何を……………ぐえー、なの!」

信号で止まり、アイの首根っこをふん掴まえて、ツェンダップの側車に投げる。

「ぎゃふっ……………!」

「ぎゃー!秀人でめー!」

突然、アイを膝の上に投げ込まれたアルフが非難の声を上げた。
アルフ許せ!緊急事態だ!

「ストラグルバインドッ!」

バチィッ!!

「ひぎゃあああッ!」

……………無理矢理変身を解除させられ、アルフが狼の姿で側車に転がった。

「ウおiiiiiiiiiiiiッ!?!」

ユーノの渾身のツッコミを耳に、アルフが着けていたメットを回収。

「先生拾っててから、先行っててくれ!」

ギャリリッ!

アクセルターンで方向転換。

石田先生の職場……………市立病院の方角を目指し、アクセルを開け放った。

病院に着いたのと、石田先生が白いセダンにキーを差し込もうとするのは、ほぼ同時だった。

ギキイツ！

慌ててブレーキをかけたせいで、少しジャックナイフ気味になってしまった。

「秀人くん！？」

妙に驚いているけど……あ、そういえば、俺がバイク持ってるの知らないんだった。

「ちツス。迎えに来ました」

「え、でも、」

「小学校、車は入れないんです。近くのコインパーキングも、保護者の車で満員ですから……どうぞ」

アルフから借りた、シールド着きジェットヘルメットを先生に渡す。

先生は、渡されたメットを被ろうとして……

「あ、あら……髪が、」

被るのが初めてなのか、苦戦していた。

頬当ての部分を広げながら、斜め上から被るのがコツだ。

「ちよつと失礼……」

先生の手からメットを受け取り、一息で被せた。

タンデムステップを出し、先に跨がると……先生も、見よう見真似で跨がった。

「腰に手を回して下さい」

「……どう？」

……自分の腰に手を当ててどうする。

「……アンタ阿呆ですか」「ご、ごめんなさい……！」

正しい位置に、エスコートした。

むぎゅっ、と、背中にそこはかとなく未体験な柔らかさを感じた。

「行きますよ」

その気恥ずかしさを意地でコーティングして、ギアを入れて走り出した。

……加減速する度、腰に回された手が緊張で強張る。

安全運転（法定速度の上限一杯）で、小学校に向かった。

「はは……すごいね、バイクって……」

シールドを開けた先生は、緊張して少しハイになっていた。

「メット取りますよ」

顎紐に手を掛ける。

「……身長、抜かれちゃったね」

手が、止まった。

「大きくなったね、秀人くん」

無視して、紐を解きにかかると。

「……」

けど……『何故か』手が震え、難航する。

「もう、見上げないと顔が見られないよ」

「……るさいです。やりづらいで、大人しくして下さい」

「仮面ライダーが好きだったよね。バイクは、その影響？」

「……紐、解けたんで」

自分のメットを脱いで、先生のと合わせて、ホルダーに引っ掛ける。

くしゃっ、と、先生の手が、俺の髪を撫でた。

「硬さも、変わってない……」

「、やめてください。ガキじゃないんだから……」
振りほどく。

背を向けたまま、グラウンドに歩き出す。

……背中にも、先生の言葉が投げ掛けられる。

「……変わったね、秀人くん」

「十年近く経つんだから、当たり前だ」

「けど、変わってないね」

「……トンチがしたいわけじゃない」

「いよいよ無視して……」

「時間が経っても変わらないものって、先生は絶対にあると思うよ」

「……アンタが言うなよ」

「……先生が、どんな顔で言ったのか……俺は、最後まで見られなかった。」

第九十七話

「おい、なのは」
手を振りながら、待ち合わせの場所に向かう。

鉄棒のあたりに、爺さん達が先に到着していた。

「秀人さん、こっち！」「おそいぞーっ！」

なのは、フェイトが、お揃いの（当たり前だが）体操服でビニールシートの上に座っている。

「……」

あ、はやてとリーゼも一緒か。

「よっ」

はやては、ジロリと不機嫌な目を向ける。

「……なんで、先生まで呼ぶのよ」

あー………そういや、はやてにだけは伝えそになっていた。

「お前の主治医だろ？ 俺だって、駄目元で声掛けたんだぞ」

「お邪魔だったかしら？」

石田先生が、はやての前に腰を下ろした。

「……」

ぷいっ、と愛想悪く無視する。

「主、いけません」

「………わかったよ」

リーゼが咎め………渋々、目を合わせた。

「………どーも」

「八神さん、頑張ってる？」

「………ぼちぼち」

点数表は………あー、最下位とほぼ同着か。

何か考えがあるんだろっけど………

「食事にするかの」
爺さんとリーゼが、重箱を広げた。

……昨夜、俺・リーゼ・爺さんの三人掛かりで仕上げた合作だ。
一段目は俵型に小分けされた白米。
二段目は揚げ物や肉類などの主菜。
三段目はポテトサラダなどの副菜。
水筒の中身はポタージュと、我ながら豪華な仕上がりだ。
だいぶ余計に作ったから……多少人数が増えても問題はない。
「それじゃ、」

いただきます！

……さすが、子供はよく食べる。
しかも、運動後となれば尚更だ。
「これ、秀くんが作ったの？」
先生が、俺が作ったおかずを食べて、驚いたように言った。

「……爺さんとリーゼ」
「いえ、揚げ物の大部分は、秀人が」
……リーゼ、余計な事言っなよ。
「秀くん、料理上手なのね」
「……」
黙々と食べ進める。

「ごん！」

「いつてえ！」
「返事をせんか馬鹿者！」

「……」
「済まんの、石田さん。どうにも意固地な奴で……」

「いえ、お気になさらず……自業自得ですから
そう言って、悲しそうに笑った。

「……爺さんから」

「……気まぐれだ。本当の本当に、ただの気まぐれだ。

「え？」

「……爺さんから、料理習った」

「……そうだったの。とても美味しいわ
他意は無い。」

絶対に、無いからな！

「リーゼ、アジフライ取って」

「主……野菜も食べませんと、栄養が偏りますよ」

「野菜嫌い」

「……美香のことを言えません」

嘆息するリーゼ。

リーゼの苦労を知ってか知らずか、はやては揚げ物ばかりを口に
運んでいた。

「ああ、そうだ」

と、石田先生がポロツと漏らした。

「美香ちゃんにも、声掛けてきたのよ」

「……ポロツと、はやての箸から、唐揚げが落ちた。

「もーらいつ！」「フェイト、行儀悪い！」

「……それを空中キャッチしたフェイトを、なのはが叱った。

「な……何で！？ 何で呼んだ!？」

明らかに狼狽している。

「だって、八神さんと美香ちゃん、仲良しじゃない」

「理由になつてねーよ！……私は帰る！！」
「がばつと立ち上がるはやて。」

「まあまあ」

素早く背後を取り、肩を抑える俺。

「まあまあ」

両膝を膝カックンするリーゼ。

「まあまあ」

両腕を搦め捕る、ユーノとアルフ。

「……まあまあ」

「は、放せッ！」

……拘束完了。

「くうくうくう……！てめえら全員、絶対に半殺しにしてやる……」

物騒なことを口にするはやて。

「リーゼ、やれ」

「了解しました」

リーゼは、副菜の中からカボチャを箸で摘み……

「はい、主。あ〜ん、してください」

「……！」

これが最後の抵抗とばかりに、がっちりと歯を食いしばる。

「フエイト」「はいー！」

「こちよこちよこちよ……」

腋の下をくすぐられ……

「ぶあはッ！」

反射的に口を開く。

そこに……

「主、どうぞ」

「もふあっ!!」

……カボチャを、容赦無く突っ込んだ。

「もがもが……!!ごくっ!!」

お、食った食った。

「リーゼ! やめろ、マジやめろ!」

「トマトとか、どうじゃ?」

「ジジイてめえ!」

爺さんがにやけながら言い、それにリーゼが頷いた。

「さあ、次はトマトです」

「いやーッ!!」

……割とマジに嫌がっている感じがするが、自発的に野菜を食べなかつた自業自得もある。

見ているのも楽しいし……放置しておこう。

「主。あ〜ん、です」

……しばらくそうしながら、野菜をはやてに詰め込んでいた時のことだった。

「あああああー……ッッッ!」

素っ頓狂な声が、校庭に響き渡った。

「ズルい、ズルい! リーゼばかり、姐さんと遊んで……!!」

「遊んでねえよ!」

……それは、車椅子に乗った少女だった。
陽射しを知らなさそうな白い肌。
肩にかかる程のセミロングヘア。
僅かな不機嫌に膨らんだ頬。

「……あの子か？」
石田先生に確認を取ると、こくん、と頷いた。

「済みません、お待たせしました」

……車椅子を押しているのは、見覚えのある女性だった。

「……美穂さん？」

「あ、あら……？」
なのはが、その名を呼んだ。

そう、その女性は……なのは行きつけの、市立図書館の司書だった。

「……すごい偶然ねえ」

ほう、と、感心したように息をつく。

その美香はといえば、車椅子からビニールシートに移動していた。

「……誰？」

俺達を見て、リーゼの袖を引く。

「前に話した、秀人ですよ」

「ああ。あの……」

……はやて、お前は一体、どんな話をした。

「初めまして。柳瀬美香つています」

ぺこっ、と礼儀正しくお辞儀をする。

「……美香、外出しても良かったの？」

はやてが、心配したように聞く。

「うんっ。石田先生が、たまにならいいって」

朗らかな笑顔だ。

……さつき、礼儀正しいと感じた、引き締まった表情は、単に緊張して強張っていただけか。

「腹減らない？ 食事に制限とか無ければ、一緒に食おう」

「うーん……」

美香は、美穂さんと、石田先生を順に見回した。

「食べすぎなければ、食べてもいいよ」

「良かったわね、美香」

石田先生の許可が下りた。

「もぐもぐ、」

俺達程ではないが、子供らしくそれなりに食べている。

「美味しい？」

「すつごく美味しい！」

満面の笑みに吊られ、美穂さんも笑顔。

やがて、重箱が空になった。

さて、そろそろか。

「なのはー」

校門から、桃子が手を振りながらやってきた。

傍らには、クーラーボックスを肩にかけた恭也と美由紀。

「おーっす、みゆき！」「おーっす、フェイト！」

ぱんっ、とハイタッチする。

「よう。中身は何だ？」

「ああ……これだ」

恭也が開けたクーラーボックスの中には……

「お、シュークリーム」

「デザートいるかなーって思って、朝から準備してたの」

なかなか気が利く。

なのはが、何の気無しに言った。

「そういえば、母さん達が小学校の運動会来るのって初めてだよね」
「……………」

親子揃って俯く高町家。

「……………あれ？」

なのはが、首を傾げた。

……………まあ、仕方ないよな。

柔らかめのシュー生地に、カスタードクリームというシンプルな作り。

それだけに、出来の良さがわかる。

「……………美味しい」

あのはやてを以てして、素直に認める程だ。

「うん、美味しい……………けど」

が、美香は少し不満そうだ。

「お兄ちゃん、来られなかった」

「今日は、仕事が抜けられないって言うから……………」

「平日ですからね」

俺だつて、かなり無理を言つて休みを貰えたんだ。

「つていつか、弟いるんですか」

「ええ……………なかなか、ヤンチャな子なんだけどね」

三姉弟かあ……………

「羨ましいですよ」

「え……………？」

「俺、一人っ子だったんで……………兄貴とか、姉ちゃんとか、憧れだったんです」

「あら、それじゃ、恭也と美由紀はどう？」

桃子が、にこにこしながら入ってきた。

「なんか、親子揃って頼りないから、パス」

「……」

ひくつ、と、桃子と恭也の頬が引き攣った。

「なのは……わたし、頼りない？」

美由紀が、なのはに会話を振る。

「……うんっ！ そのままの姉さん

でいて！」

「うわああああん！」

あ、泣いた。

「ボク、ねーさんがいたんだよ！」

フエイトがそれに続く。

美香はその都度、「へー」とか、「ふーん」とか、好奇心に目を輝かせていた。

そしてその好奇心は、はやてにも向かった。

「姐さんは？」

「え、私？」

ぎくつ……と、なのはが強張った。

「私も、一人っ子だったなあ」

しみじみと言い……なのはは、ほっと胸を撫で下ろしていた。

「……なんか、そろそろ弟だか妹を、とか言ってた気がする」

「……」

実に気まずい沈黙が、場を支配した。

そろそろ、って……アレだよな。アレ。

「……そ、そうだ！」

パンツ！ と、空気を入れ換えるように手を叩く。

「美香さん、お兄さんの名前、何て言う、」

「おおい、八神、高町！実行委員、運営テント前に集合だつてよー！
あと、テストロッサ！俺達の競技、午後一だぞ！」

……と、向こうの方から、健太が呼んだ。

「あ……いつけない！じゃ、また後で！」

「いつてきまーす！ひでと、やくそくまもつてよね！」

「……さて、行くか」

三人は、靴を履いて走っていった。

『間もなく、午後の部を始めます。生徒は、クラスごとに集合してください』

アナウンスが流れた。

入場門に、フェイトと健太が並ぶ。

回りは、体育会系のクラブに所属する同級生達。

全体競技ではなく、クラス選抜戦だ。

「テストロッサ」「なに、はやま？」

「うちのクラスからの参加者は、俺達だ。」

勝てば、一人20点。逆転の足掛かりになる」

「……うん」

「それだけ、はやては俺達に期待してる。……絶対に、一等取る

ぞ

「うんっ」

握りこぶしを作り、気合いを示す。

「がんばろーね！」（かつたらロストドライバーとスカルマグナム！）

「おっつー！」（一等取って、高町にいいところ見せてやる！）

……モチベーションの保ち方は、人それぞれ。

いよいよ、スタートラインに健太が立つ。

「……」

じっとゴールだけを見る目に、迷いは無い。

クラスメイト達も、その集中を邪魔しないよう、固唾を飲んで見守る。

『位置について』

マイクを通じた教師の号令がかかる。

『用意』

……選手達が、クラウチングスタートに構える。そして。

パァンツ！！

一斉に、飛び出した！

「健太ー！！いけー！！」「ぶっちぎれー！！」「葉山ー！！」「葉山君ー！！」

望が一番に声を張り上げ、クラスメイトも大声を上げる。

「はっ、はっ！！！」

独走……とはいかなかったが、一步はリードしている。

「この、！」

二位の少年が、それを巻き返す。

足を限界まで回転させ……最後には、目さえつむって。

「……………！」

全力で駆け抜けた健太を……ゴールテープの感触が出迎えた。

歓声に沸く応援席。

「……………うう、」

フェイトは、ここにきて初めて、プレッシャーを意識した。

「……………女？」

他の選手達が、訝しそうな……半分は、侮ったような顔をする。

それが更に、プレッシャーを増す。

（ボクも、かたなきや………！）

……………それは、リラックスとは程遠い。

『位置について』

教師の号令に、慌ててスタートラインに立つ。

『用意』

パアンツ！

（しまつ、た………！）

明らかに、出遅れた。

……………ああ。と、応援席から、諦めが混じった声がある。

保護者席からも、残念だとか、女子には無謀だとか……………

「まあ、最下位なんだから……今更、一つ二つで変わらないよな」
ぞわあっ！ ……と、全身の毛が逆立った。

(ふ……)

自分のミスよりも……健太の戦果を、はやての努力を、クラスの
応援を陥める言葉に……

(……つぎけるなあああああああああああっ！)

プレッシャーを、彼方に忘れ去った。
倒れ込みそうな前傾で、地面を蹴る。

蹴る。

蹴る……！

「フエイター……！」

美由紀が、ロープを跨ぎそうなほど身を乗り出す。

最下位から、一気に巻き返し……一躍、三位に踊り出た。

「、あっ……！？」

不意に、ずるっ……と、足元が滑る。

『ああっ……』

いよいよ、絶望的かと思われた。

だが……

「……んのヤロおおおおっ……！」

滑った姿勢から……まるで、というかそのまま……ヘッドスライディングの ように、残りの数メートルを駆け抜ける！

ずぞぞぞぞぞ！！

土埃が上がり、教師が駆け寄る。

「おい、平気か!？」

フェイトは、肘や膝に擦り傷を作って……

「……へへ」

身体に巻き付いた、ゴールテープと共に、立ち上がった。

ゴールテープを、御首のように掲げ……クラスメイトの応援席を、満面の笑みで振り返った。

「……とったぞーーーーー!!!!!!」

……少しの間。そして。

わあああああああああああ！

大歓声が、上がった。

第九十八話（前書き）

コミケ行く途中でバイク壊れてトランポに乗っけて帰ってきたらP
Cが壊れて仕事場で大喧嘩して散々な年始でした、、

第九十八話

「いたたたた……なのは、いたいいたい！」

「我慢しなさい」

「応援席に戻るや否や、なのはに有無を言わず治療されていた。擦り傷をよく洗浄し、消毒液を染み込ませたガーゼを当てる。

最後にテーピングをして、治療完了。

「なのは、いちばんだよ、いちばん！」

遅れながら、満面の笑みで報告する。

「……よく頑張ったね」

「くっふふふ……もっとほめてー」

頭を撫でられ、満更でもないようだ。

「凄かったよ、テストロッサ！」「ほんと、感動しちゃった！」

クラスメイトも、賞賛を口にする。

「あはははは！いえーい！」

勝利の興奮か、いつもの人見知りはどこかへ引っ込み、陽気に笑顔を振り撒いていた。

「よおし、アタシも障害物競走、一位取るぞっ！！」「俺だっ！」

「ぼ、僕も……！」

次の競技……もしくは、ウォーミングアップに向かう、クラスメイト。

「良い出だしだ」

人がいなくなつたのを見計らつて、はやてがやって来た。

「ただ一位を取るより、効果的な演出だった」

「演出つて……！」「なのは、いいよ」

憤るなのはを、フェイトが諫める。

「ヤガミ。ボクはつき、なにをすればいい?」

「この後、リレーに連続で出てもらう。今は休め」

「うん、わかった。……ヤガミ」

「なんだ」

「ちゃんと、ボクたちをかたせてよ?」

「はやては、少し黙り……」

「当たり前だ」

……と、それだけを答えた。

……二人の活躍のおかげか、午後の戦果には目覚ましいものがあり、点差はぐんぐん縮まりつつあった。

破竹の勢い……と言って、差し支え無い。

障害物競走、一位。

男子800メートル、二位。

女子1000メートル、一位。

女子400メートル、三位。

男子1500メートル、一位。

はやての狙いは的中し、中距離走では上位を独占。

……午前の短距離走では、体育会系の生徒たちが上位を奪い合ったため、点数が各クラスにバラけてしまっていた。

が、二組は、午後の中距離走に戦力をフル投入したため、他のク

ラスより一位・二位など、高得点を得られた。

……とはいえ、午前がほぼドベだったのだから、余裕の点差とは言い難い。

そして残すは……クラス対抗リレー。

これで一位を取れば、優勝確定。

たとえ二位以下でも、最下位になる危険は無いのだが……最早、誰もそんなことは頭に無かった。

入場門に、最終競技らしく、大勢の生徒たちが並んでいた。

『次は、最終種目……三年生クラス対抗、全員リレーです』
教師の誘導に従い、ゾロゾロと歩いていく。

もう、ここまで来たら、戦略も何も無い。

はやては、三つをクラスメイトに約束させた。

コケるな。

落とすな。

諦めるな。

……それを胸に、スタートラインに最初の選手が並ぶ。

はやては、前後を健太とフェイトに挟まれる。

決して速くは無い己の足を、カバーするべく設定した順番だ。

なのはは、最後から二番目。

アンカーにバトンを渡す重要な役に、まさかの大抜擢だった。

毎朝のジョギングと、剣の鍛練により、平均を上回る足腰を持つに至ったこと……アンカー（フェイト）へのバトンパスの確実性を優先した結果だ。

単純なタイムだけでなく、人間関係までも計算に入れたシフトに、
なのは呆れ半分、感心半分のため息をついていた。

喧嘩もした。口論もした。

というか、そればかりだった。

……互いに真剣や銃器を持ち出しかけたのも、一度や二度ではない。

その結果が、今日、この運動会だ。

ここまでやったんだから、負けても悔いは無い……など、考えて
はいない。

やるからには、勝つ。

注いできた労力を、情熱を、優勝という形で飾ってみせる。

『位置について』

『用意……』

パンツッ!!

だっ! と、第一走者が駆け出す。

一人、100メートル。

それだけなら短距離走だが、これはリレーだ。

「……馬場!」「おうっ!」

第二走者に、三番手でバトンを渡す。

他のクラスの選手も、バトンプラスを行うが……

「あっ、!?!」

早速、二番手の選手がバトンを取り落とした。

「く、くそっ……!」

その横を、第二走者が駆け抜ける。

また、100メートル。

「田口!」「はい!」

バトンは、第三走者へ。

……付け加えるなら、このリレーは、男女混合だ。

男子から女子へのバトンパスは、目一杯リードを利用し……次の走者へ繋ぐ。

100メートル。

「くそつ、」

また、他のクラスがバトンパスをミスする。

100メートル。

バトンが繋がる。

100メートル。

他の選手が、バトンを取り落とし……それを踏んだ更に他の選手がスツ転ぶ。

100メートル。

100メートル。バトンが渡る。

100メートル。100メートル。100メートル。

……ここまで、ノーミスでバトンパスが成功しているのは、二組だけ。

それは、確実に順位に反映されている。

「八代!」「任せなさい!」

……八代が、驚く程の健脚で、順位を上げる。

「健太っ!」「おっしや来い、望!」

ミス無く、バトンが繋がる。

さすが、サッカーで鍛えた脚。はじめ並走していた選手を、一馬身も引き離す。

……そして。

「八神っ!!」「ご苦労ッ!」

偉そうな口ぶりと共に、はやてにバトンが渡る。

途端、待機中の選手から、爆発的な声援が上がった。

「八神ー!!走れー!」「八神さーん!」「後ろ来てるぞ!逃げ切れー!」「頑張れー!」

それを受けて、はやては……

(だーうるせえな畜生!集中させる!)

……にやけ笑いで、毒づいていた。

やはり、魔法抜きを生身で走ることには慣れていない様子で、差を縮められつつあった。

100メートルが、いやに遠く感じる。

懸命に足を回転させるが、差はどんどん縮められ……

(……!……!)

……一人に、抜かれてしまった。

いくら、想定内とはいえ……忌まわしそくに、歯を食いしばってしまっ。

そして、100メートル。

「挽回してこい!!」「まかせて!」

フェイトに、バトンが渡る。

この時点で、はやての役割は終了した。

スタートダッシュの勢いのまま、前傾姿勢で走り抜けるフェイト。前を走る選手をぐいぐい追い抜き、順位をさらに入れ替える。

「フジタ!」「お、おうっ!」

バトンを渡し……他の待機中の選手とは違う場所に誘導されていく。

そこには、他のクラスのアンカーも集まりつつあった。

……アンカーが走る距離は、200メートル。

差が縮まる、差が開く……どちらも十分にありえる距離だ。何より、アンカーには……その先、挽回できる機会が無い。そのプレッシャーを感じながら、クラスメイトを応援する。

順番も折り返し地点を過ぎ、残りも少なくなってきた。

「笠井!」「よしっ!」

……なのはの直前まで、順番が迫っていた。

「……」
「……」
妙に脈打つ心臓。

今更ながら、大役の重圧に足が震える。

「なのはー！」

不意に呼ばれ、ビクツと我に返った。

声は、保護者席から。

吾妻家、高町家の双方から、全力の応援があった。

「なのは、頑張ってる！」「バトン、頼んだよ！」「なのはー！」
「なのはちゃん！」

……走り始める前に声援が送られ、何事かと注目が集まる。

なのはは、真っ赤になっぺる震え……

「あああ、もうっ！ まだ早いんだって！ 恥ずかしいことしないでー！！！」

ぶんぶんと両手を振り、威嚇した。

走り終えた選手の間から、クスクスと笑い声が聞こえた。

「うー……！！ 秀人さんのほか……兄さんの朴念仁……！！」
涙目で、スタートラインに立つ。

「高町さん、頑張ってるー！」「高町ー！」「コケるなよー！」

それに便乗して、クラスメイトからも声援が飛ぶ。

「だから、早いつてばー！？」
プレッシャーもどこへやら。

「高町ー！」

前の走者が、バトンが、近づいて来る。

なのはは一息はいて……

「……任せてー！」

バトンを、受けとった。

他の選手は、皆、男子。

フェイトほど足の早くない人には、若干、不利な状況だ。

だが、順位だけは落とすまいと、懸命に走る。

……走りに集中するあまり、自分が順位を一つ上げたことにも気が付かぬまま、コースを走る。

現在、二位。

アンカーまでの距離、30メートル。

ラストスパートをかける。

一位に踊り出ることは無理でも……差を縮めて、アンカーに繋ぐことはできる。

先行する男子に追い縋り……数十センチ、？メートルと、距離を縮める。

……そして。

「フェイトッ!」「……うん!」

最後のバトンパスが……渡った。

わああああああっ!!

歓声が、声援がごちゃまぜになり、フェイトの背を打つ。

そして、一位に躍進しようとした、その時。

「くそっ……女なんかにつ!!」

横に並んだ走者が、そんなことを言い……足を、観客席とは逆。見えづらい位置に、突き出した。

「……………！」
卑劣な足払い。

……………普通であれば、転ぶしか無いだろう。
急ブレーキを掛けようにも、進路にあれば、そのまま突っ込んで
しまう。

(転んじまえっ！)

底意地の悪い笑みを浮かべる。

彼の脳裏には、不様に地面にダイブするフェイトが見えたことだ
ろう。

……………だが。

「……………そんなかちかた、うれしいの？」

フェイトは……………『普通』を軽々と飛び越える。

ブレーキを掛けるどころか、より加速を増し……………

「……………フッ！」

ハードル競技のように、大ジャンプ。

悪意の足払いを、余裕で突破した。

止まったハードルではない。

ほぼ同じ速度で進む障害物を、後方へ置き去りにしたのだ。

「なあっ……………!?!」

足を横に出すという、不自然な体勢。更に、驚きが変わり……………

「、うわっ!!」

ずるっ、と、スリップダウンしてしまった。

勢いで、バトンも落としてしまう。

「くっそー！」

慌ててバトンを拾おうとした。
だが、

かんつ。

プラスチックが跳ねる、軽い音。

「……………」

続いた他の選手が、バトンを蹴り飛ばしてしまったのだ。

だがこちらは、明らかに事故。蹴った選手は、全く気付いた様子も無く、フェイトを追う。

彼がアンカーである以上……………最早、挽回は不可能だ。

クラスメイトの冷たい視線（何人かは、足払いに気付いていたらしい）に晒されながら、ノロノロと自失した足取りでバトンを追う。その彼の耳に、最後尾にいた選手が走り抜ける音が、空しく届いた。

……………最後まで、真つ当に競技をしていれば、あるいは勝てたかもしれない。

下らない妨害が、彼の……………ひいては、彼のクラスメイトの努力を、無に却したのだ。

「フェイトー！」「フェイト、こっちだー！」「テストロッサ！最後だぞー！」「頑張ってー！！！」

……………ゴールテープの向こうに、自然とクラスメイト達が集まっていた。

「……………！」

一瞬だけ驚き……………笑顔で、最後の20メートルを走破した。

第九十九話

……薄暗い執務室。

唯一の光源は、デスクトップのモニター。

「……おやおや、これは」

その光が、一人の人物の顔を、暗闇に浮かび上がらせる。

「……いかなあ」

……ギル・グレアム提督。

彼は、モニターに写る映像を見て……困ったように、眉根を寄せた。

ピーッ。

入室許可を求めるコールが鳴る。

「……」

無言で、解錠する。

開いた二重のドアから、かつかつ、とヒールを鳴らす音が近づいて来る。

女性だ。

「グレアム提督」

「うむ……君か」

「はっ」

規律正しく、礼をする気配。

照明を落とされた部屋では、顔は見えない。

「中間報告です」

レポートを提出する。

その際、モニターが目に入った。
グレアムは、特に隠すそぶりは見えない。

「これは……」

映像の中では……件の調査・監視対象が、大勢の子供達に囲まれていた。

「彼らは、何を……?」

怪訝な顔をする彼女に、グレアムが苦笑する。

「どうやら……スポーツ大会のようだよ?」

「スポーツ、大会……?」

理解不能、といった風に、首を傾げた。

「今回の主は、何をトチ狂ったのか、教育機関などに堂々と籍を置いていてねえ……」

パキツ……と、乾いた音がする。

「殺人鬼の……分際で……!!」

冷静に見えた彼女が、手にしたレポートのケースを、握り潰そうとしていた。

「排除……排除するべきです。もし、行動を起こしたら……犠牲になるのは、子供達です。

即刻の排除を……!」

「まあ、落ち着きなさい」

それを、穏便を装って諫めるグレアム。

「今はまだ、その時ではない」

「では、いつ……!」

力を欠いた今こそ、排除する絶好の機会ではありませんか!」

「……厄介なことに、彼女は私的に、管理局員とのパイプを持ってしまった。部隊を動かそうものなら、その局員に阻止される恐れがある」

「一局員ごとき、提督ならばいくらでも……!」

「吾妻秀人、なのだよ」

「……………！」
思まわしそつに、言葉に詰まる。

吾妻秀人。

その名は、その力は……………本人が思っている以上に、重要視されている。
それに……………

「囑託魔導師である彼には、管理局はさほど拘束力を持ち得ていない」
たとえ、グレアムが管理局上層部にいようとも……………異世界の民間人を、権力を用いて拘束することは出来ない。

管理局の権力構造から外れている秀人には……………権力が及ばないのだ。
「ですが……………ですがっ！」
納得がいかない、と憤る。

「……………愛する母親を奪われた君の気持ちは、よく分かる」
ぼん……………と、彼女の肩に手を置いた。

「私とて……………息子同然に思っていた部下を、十年前に奪われたのだ」
……………」
「だが、だからこそ……………慎重に慎重を、幾重にも重ねなくてはならない。……………一時の怒りでどうこうなるほど、闇の書は安易な代物ではないのだ」

「……………了解、しました」
彼女は、ぎゅっ、と、ややくたびれた、サイズが合っていない制服の袖を握りしめる。

「……………当然、指をくわえているつもりは全く無いがね」

キーンッ！

と、グレアムの掌に、かなり高密度の魔法陣が展開する。
眩しい魔力光が、目を焼く。
光が収まり……グレアムの手には、薄い灰色の……一冊の『本』が、
握られていた。

「……それはッ!？」

「ああ、つい先日完成した……」

闇の書の、鏡像だよ。

パラパラと、ひとりでにページがめくれて……

……表彰台の上に、はやてと、なのはが立っていた。
クラス優勝の、表彰だ。

「ほんと、よく頑張ったわ、なのは……ぐすっ」

俺の隣で、桃子が涙ぐんでいた。

愛娘の晴れ舞台。

母親として、嬉しくない筈が無いだろう。

アルフなんかは、フェイトがゴールテープを切ったあたりから号泣
していて、少し笑ってしまう程だった。

……俺だって、胸に來ない筈が無い。

この優勝はある意味必然で……だが、その必然を手繰り寄せるために、二人がどれだけ努力を重ねてきたのかを知っている。

『クラス優勝、三年二組』

校長が、賞状を読み上げる。

「……八神さん、もう大丈夫なのね」

石田先生が、嬉しそうに、寂しそうに呟く。

はやてが懸命に、自分の足で走っていた。

それはきつと、石田先生が最も見たかった光景に違いない。

『クラス優勝、おめでとう』

なのはとはやては、目を配り合い……結局、二人で一緒に受け取ることにしたようだ。

夕日が逆光になり、よく見えないが……きつと、なのはは笑顔で、はやては仏頂面をしていることだろう。

ザザッ。

……マイクの、スピーカーのノイズか？

二人も、勝利の栄冠を手にする前に、気が付いた。

ザザザッ。

……まただ。

ノイズだが……辺りには、気付いている奴と、全く気付いていない

両極端な反応。

気付いているのは、俺の家の面子と、石田先生と、美香と、健太、望……ごく一部。

……表彰台の上の二人も、きよろきよろと辺りを見回している。

……嫌な予感が。

今まで、必ず的中してきた、嫌な予感がする……！

ザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザツツ！

！！！！

「まさか………これは!？」

リーゼが、驚愕の声を上げた。

ビキイイインツ！！

……闇の帳が、辺り一面を閉ざした。

瞬時に思考を切り替え、戦闘体勢に移行する。

『ユーノ、この結界の性質と効果を探査しろ。アルフは、可能なら破壊を』

クローズドチャンネルの念話で、指示を飛ばす。

周囲には、状況もわからず取り残された民間人がちらほら。

「……魔力資質持ち、か」
健太、望がいる時点で、大体想像がついた。
魔力持ちだけを隔離する結果。
俺は、これに覚えがあった。

「……闇の書！！」

もう、見境無しか。

質より量で、欠けた力を取り戻そうってハラだろう。

「秀人くん、これは一体……」

……さて、困った。

俺達だけなら良かったが……ここは、魔法のマの字も知らない民間人だらけだ。

……派手に戦ったら、巻き込む危険がある。

「先生、何も聞かずに、俺の言う通りにしてください」

不幸中の幸いか、まだ守護騎士や雑魚騎士は現れていない。

「生徒達を連れて、体育館に避難を」

「え、ええ。それはいいんだけど、秀人くんは……？」

「校庭以外に、人がいないか見てきます」

敵が出るなんて知らないだろうから、これでいいはずだ。

途中、はやてとも合流した。

先生が、子供達を引率して体育館に向かうのを見届けて……

「なのは、レイジングハートから、クロノに連絡を」

「うん。もう完了してるよ。すぐ出撃するって」

……似たような結果に閉じ込められた時の教訓を基に、通信機能も強化してある。

ドババババババババババババババババババツ！！

「…………来たぞ！」

校庭一杯に、暗黒のベルカ式魔法陣が多数出現した！！

「…………嘘」

私は、その術式の結界を見て…………そうとしか言えなかった。だって、これは…………この結界は…………

「リーゼ、どういうことだ！！！」

闇の書の、独自術式だ。

「不明、です！！ ですが主の御身には、確かに闇の書が存在しています！！」

「遠隔操作の形跡は！？？」

「ありません！」

……………つてことは、信じられないけど。

「…………複製？」

「…………恐らくは」

ページ単位か……………最悪、そのものか。

石田先生が、魔力持ちの民間人を誘導していく。が、そんなものは意図的に視界から排除する。

「許さねえ……………！！」

秀人達の手前、おおっぴらには出せない怒りを、静かに、激しく燃やす。

王たる私の所有物に勝手に触れ、浅ましく記述を漁り、複製する盗
つ人。

必ず尻尾掴んで、引きずり出して……ブチ殺してやる！

「チツ……！ おい、美香！」

「はいっ、姐さん！」

カラカラと車椅子に乗りながら、美香がやってくる。

戦闘に狩り出すのは、まだ早い。

「体育館にいった連中を、防御の陣で囲い込め。それで、不審な奴
が出てきたら、ソッコで知らせろ！ いざとなれば、防戦も許可
する！」

「はいっ！」

闇の書の性質を知っている奴だとしたら、間違いなく民間人を襲う。
リンカーコアの質としては、そりゃ魔導師の方が高い。が、その分、
抵抗が厄介だ。魔力持ちの民間人なら、質こそ落ちるが、楽に奪え
る。

「それと……リーゼ！」

「はい、主」

「私達……秀人達も含めて全員に、認識阻害をかける。

終わったら、美香に付いて行け」

「了解しました、主」

「……何だ、認識阻害って？」

秀人が、アホ面で聞いてきた。

めんどいから、リーゼに説明させる。

「そのままの意味ですよ。魔力で身体を覆い、人相・発声など、パ
ーソナリティを隠蔽する魔法です。……ある程度、付き合いが長

い者には通じませんが、民間人には十分な効果を発揮します」

「つまり、バせることは無いからやっちなまえ、ってことだ」

「その通りです」

私の魔力は……封印前の、約八割。
闇の書のブーストは、使用できないと見ていいだろう。
管理局も出て来るだろうし、単純に、外付けハードディスクとしての
使用が望ましい。

「……来るぞっ！」

秀人が声を張り上げ……校庭に、わらわらと魔法陣が浮かび上がる。
せり上がってきたのは……見慣れた、雑魚騎士だ。

ただ、違うのは……手にしているのが、同じ意匠の西洋剣である
ということ。

……複製の所有者によるものだろう。

恐らくは、『剣』の劣化コピー。焔の魔剣から、カートリッジシ
ステムを廃したような片刃剣だ。

「……グレードアップしてやがる」

秀人が、呆れ半分に呟いた。

……まあ私は、そのまま生前持っていた得物……ナイフとか、拳
銃とか、釘バットとかをそのまま使わせていたからな。

使い捨ての戦力に、手間隙を掛けてカスタマイズしても高が知れ
ているし。

ジャキンッ！

魔剣を現出させ、握る。

……体育着のままじゃ、格好つかないな。

『甲冑』は……オートガードと、流動魔法をカットすれば、戦闘服
として使えそうだ。

「……」

リーゼが、目で許可を出した。
なるべく、バレないように。

「セットアップ」

起動音声も、あいつら流にしてみた。

ゴオオオオオツ！！

魔力の旋風が巻き起こり、私の身体に装備されていく。

ほんの数秒ほどで、武装は完了した。

ノースリーブの上着に、ミニスカート。オープンフィンガーグローブ。魔剣のホルスターを備えた、太い皮ベルト。

うん、実に動きやすそうだ。

『オ、オオオオオ………』 『アアアアア………』 『グウウウウ………』

ノロノロした幽鬼のような歩みで、こちらへ進軍する雑魚騎士ども。

……馬鹿な奴隷どもに、教えてやらなければ。

誰が真の王なのか。

今一度、闇の底に沈ませてやる　！

「……許さない」

自然と、口に出ていた。

何の関係も無い一般人を……しかも、子供を狙うなんて。

私と、八神……それに、沢山の生徒達が楽しみにしていた運動会を、ぶち壊しにするような真似をして。

「……八神。これが、闇の書の主のやり方だよ」

「……」

八神は、神妙に聞き入っていた。

「最悪のタイミングを狙ったとしか思えない空気の読めない卑劣な奴で、自分が高みから雑魚騎士を動かして滅多に出てこない臆病者で、ダツサダサな服で格好付けてる勘違い女……」

「お前ちよつと黙れ」

げしっ。

「いったあ!?!」

蹴られた。何で!?!

「何するのよ!?!」

「戦闘前にぎゃあぎゃあうるせえよ。集中できないだろ」

……何故か、青筋が浮いていた。

「……レイジングハート、行けるよね」

『最大魔力値、78%。収束砲撃、使用不能。誘導弾、最大追尾数、

6。砲撃最大放出値、65%』

……今まで通りの戦い方は、期待できそうに無いけど。私だって、無為に三ヶ月を過ごしてきたわけじゃない!

『Standby lady』

「……セットアップ!」

ゴウツ……!!

舞い上がる、桜色。私の魔力光。

……久々に纏ったバリアジアケットは、よく見れば、かなり意匠を変えていた。

肩や袖口の膨らみはオミットされ、防御力を多少犠牲に、より運動性能を高めている。

そして腰には、鞘に収まった回天桜花。

『close combat mode』

白兵戦特化。

両手で回天桜花を握るため、レイジングハートは胸元に据え付けられている。

ヒュンツ!!

試しに、回天桜花を一振り。

……うん、いい感じ。

「おー、かつこいーじゃん！」

フェイトは、まだ武装していなかった。

「フェイト、早いところ武装しておかなきゃ……」

「ふっふっふ……ボクのバルディッシュだって、マリーにたのんで、ちよーかつこよくしてもらったんだもんね!!」「ねえ、聞いてる?」

すちゃっ、と懐からバルディッシュを取り出す。確かに、形状がいくらか変化している。

「……なんか手裏剣みたいね」

「それじゃ……いくよ、バルディッシュ!」

『Get set』

「セットアップ!!」

フェイトは、期待いつぱいに、武装する。

バチバチバチバチバチツ……………!!

稲妻の魔力が吹き荒れる。

「熱っ、あつっー!?」「ぎゃー!!」

……………それに吞まれ、地味にHPを消耗するアルフとユーノくん。

「場所を考えなさい!」

……………いっそ、敵陣ど真ん中で武装させればよかった。

「あ、あれ? あれ!? あつれええええええええええええええええ!?!」

ばちばちと、稲妻の中から現れたフェイトに言う。が、フェイトは自分のバリアジャケットを見下ろして、愕然としていたせいで聞いていなかった。

「はむっ」『……………Sir.』「もごもご……………(ちよつとまって……………)」

バルディッシュを口にくわえて、マントを広げたり、ボディスーツを引っ張ったり、スカートをはっさはさ扇いだり……………ああ、みつともない。これで女の子と言えるのだろうか。

(……………プレシアさん、ごめんなさい……………私が、責任を持ってなんとかします……………)

「……………かわってない……………!!」

……………叫んだ拍子に、啞えていたバルディッシュが落下した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8371o/>

魔法少女リリカルなのは ties

2012年1月9日00時29分発行